京都美術工芸大学
卒業制作
梗概集

第２号

芸術学部建築学科

2023

The Summaries of Graduation Works

Department of Architecture of

Faculty of Arts and crafts

KYOTO ARTS AND CRAFTS

UNIVERSITY

vol.2

梗概集の刊行に寄せて

京都美術工芸大学
学長
竹脇　出

京都美術工芸大学では、2012 年の開学から 11 年が経過し、2022 年度に建築学部、2023 年度に芸術学部が開設され、２学部体制が確立されました。「卒業制作梗概集」と「大学院修士研究梗概集」は昨年度に第1号が刊行され、今年度第2号を発刊することになりました。

本梗概集に収録している卒業制作と修士研究は、多岐にわたる内容について、教員の指導に基づく学生の日々の学習の集大成を纏めたものであり、学生が精力を傾注した成果の概要を垣間見ることができるものと期待します。

最後になりましたが、梗概集編集部会をはじめ刊行に際してご尽力された皆様に心よりお礼申し上げるとともに、今後本学を志望する高校生や大学生にとって貴重なものとなることを祈念します。



目次

芸術学部 建築学科

K18209	花山 拓夢	根付く～太陽光発電所跡地における環境再生～	8
K18222	藤本 秀真	歴史とともに住む	10
K19274	新塘 大樹	スペースポートシティ構築プロセスの構想　スペースポートシティおおいた※1※6	12
K19303	中角 友哉	複合型運動施設 ～心と身体を癒す場～	14
K19341	本城 武司	道のアトリエ	16
K20201	青木 大河	没頭とつながり	18
K20202	赤坂 倫太郎	木の心を知る~持続可能な社会を考える~※2	20
K20203	朝川 真哉	商店街で広がるコミュニティ	22
K20205	阿近 結衣	畑と共に暮らす　～農業でつながる～	24
K20207	天田 麟太朗	価値の共創	26
K20208	荒木 汐羽	祇園祭 山鉾の構造に関する研究	28
K20209	有川 芽似	天引村倶楽部における改修履歴に関する研究	30
K20210	安藤 友唯	日常的避難所	32
K20211	飯塚 大翔	富士の麓で生きる	34
K20212	石垣 歌織	白内障患者の居住空間に関する研究 - 照明の組み合わせ・配色に関する提案 -	36
K20213	市川 勇斗	森の文化交流拠点 - 観光施設集客促進のための広場 -	38
K20214	稲佐 恵子	下鴨地域における大型町家に付随する建物の設計	40
K20215	稲澤 圭祐	既存資源活用による地域活性化	42
K20217	井上 雄斗	沖縄北部の集落の屋敷構えに関する調査報告～屋我地島の内海沿い集落を対象として～	44
K20218	岩井 春斗	日本建築界における機能主義受容に関する研究	46
K20220	岩渕 桃葉	新・ひみつ基地　- こどもが町の中で安心して遊ぶ -※2	48
K20221	上田 紗矢香	私のライフプラン	50
K20222	上田 龍弥	都市に空緑を	52
K20223	上田 怜奈	はじまりの場～自分らしく生きていくために～	54
K20224	臼井 拓海	ゆず（use）　サイバーヒーリングスペース	56
K20226	枝川 樹央	山本読書室旧蹟の調査研究	58
K20228	大石 佳世	亀岡商工会館再生計画	60
K20229	大久保 開斗	鳥羽水族館リノベーション計画	62
K20230	大田 杏奈	「まち」で暮らす - 住み続けられる老後の都市内生活拠点 -	64
K20231	太田 陽那	田舎で過ごす時間～自然のなかのレストラン～	66
K20232	大槻 晟惟	曾祖父の家のリノベーションと過疎地域の問題解決※1	68
K20233	大橋 未果	社会への扉～曲線から生まれる居場所～	70
K20234	大道 彩音	近世門跡寺院における書院群の室構成と儀式空間に関する復元的研究−山科毘沙門堂を対象として−※3	72
K20235	大村 英人	音楽ホールにおける副次的空間の展開 ―まちの拠点としての文化施設―	74
K20236	岡 あゆみ	自然で育む	76
K20237	小笠原 日向	旧今熊野小学校のリノベーション	78
K20238	奥田 憲生	戦後大阪の谷町筋道路拡幅の影響を受けた寺院境内の建て替え過程とコンクリート造本堂に関する考察	80
K20239	奥野 美桜	天引村に寄り添う ～住民とともに進める村おこし～	82
K20244	金田 拳汰	京都における密教本堂の近世化に関する調査研究　～外陣・礼拝空間の意匠を中心に～	84
K20245	鎌崎 壮馬	外観構成要素による連続性から見たまちなかの通り景観に関する研究	86

K20246　神谷 亮佑　待たない時代の「待つ」を考える - 愛知県刈谷駅周辺施設を例として - 88
K20247　亀本 夏稀　京都市における高経年マンションの管理実態が流通市場に与える影響に関する研究 90
K20248　川井 健希　幣軸の研究〜幣軸の寸法決定法と形状の分析〜 92
K20250　川瀬 基子　日常と非日常の間で 94
K20251　河内 洸樹　circulation ~総合鑑賞空間とエンターテイメント形成の場~ 96
K20252　川原 陽介　〜 IGA ryu 〜 98
K20254　北村 昌也　めんそーれ　〜収益不動産で繋がる屋我地島〜 100
K20255　木下 芹奈　地域色を映し出す 102
K20256　木村 栞　寺社建築における内法寸法の決定法について 104
K20258　久保田 智尋　山と川と空と 106
K20259　栗原 太郎　正保城絵図を用いた本丸における櫓建築の配置形式に関する資料化的考察 108
K20260　桑原 弥里　農業移住のための新たな学びの提案　〜三田市を例として〜 110
K20261　桑原 唯　伝統的町並みの変容の研究 ー福井県三国町における 1983 年から 2023 年まで 40 年間を通してー 112
K20262　小出 大聖　京都花街の課題　ー祇園甲部についてー 114
K20264　小林 宥見佳　よき生を学ぶ　- ワークショップを用いた脱施設化提案 - ※3 116
K20265　古家 凌雅　京都の新たなたまり場 118
K20266　紺藤 領太　沖島に行こう　ー近江八幡市・離島の存続ー 120
K20267　後藤 祐那　ジェンダーを取り巻く日本社会の変化と台所の研究 ―女性の社会進出にみる台所の使われ方の変化―※4 122
K20268　齊藤 晴　自然を繋ぐ 124
K20271　笹川 泰平　高齢者が心身共に健康に暮らせる集合住宅の設計 126
K20272　佐藤 圭佑　ほしのこども　―星と子どもをつなぐ建築― 128
K20274　佐藤 未亜　日本における美術館建築の始まり　ー東京府美術館の展示作品を通してー 130
K20275　佐藤 光姫　路地空間でつながる住宅 132
K20277　真田 和奏　数百年後を考える建築　〜自然の入る余白をつくる〜 134
K20278　清水 祥太　感性を育むこども園 136
K20279　下田 樹凜　〜 Second Laputa 〜　Kayashima Station 138
K20281　新田 琉晟　東山アルケ　〜 Park PFI を利用した今熊野宝蔵公園の参道中継化計画〜 140
K20282　末永 大翔　竹のこパビリオン 142
K20283　杉森 拳心　地域で守る砦　〜土砂災害に対してのダムと広場建築〜 144
K20284　鈴木 来夢　蛸薬師柳馬場の京町家に関する研究 146
K20285　瀬島 哲也　町と川による交流の場　〜伝統ある町並みで人と人が繋がる交流施設〜 148
K20286　染谷 朋花　近代における上七軒花街の組織とその建築群（北野倶楽部の創設と変遷） 150
K20287　髙嵜 温　街を舞台に 日常に劇場を 152
K20289　田島 春菜　縁を紡ぐ〜黒岡川のにぎわい再生〜 154
K20290　辰己 翔真　未来に渡すターミナル　- 木造船の復興と伝承 - 156
K20291　立壁 百葉　勝山左義長まつりの継承と地域交流 158
K20292　田中 日奈子　キッチンから始まる物語 160
K20293　谷口 依里　奈良今井町における町人の屋敷空間に関する研究 ~江戸時代の集まって住まう仕組みの解明~※3※6 162
K20294　田野 菜月　諏訪大社上社の五重塔研究　〜諏訪市立博物館所蔵絵図を基に〜 164
K20295　田丸 智暉　「スポーツランド宮崎」実現を図る体育施設 ~シーガイア再建と共に目指すみやざき体育促進~※1 166
K20296　田丸優羽　新京町家 1 人親 3 世帯 168
K20297　丹野 優花　伝統建築の耐震性能に関する研究 ~限界耐力計算と三次元振動解析の比較・検討~ 170
K20298　堤伶 央　アグリ・パレット　〜農業による人の循環〜 172

K20299 寺本 蓮 現廃校青桃中学校校舎のリノベーション 174
K20300 友寄 安理沙 戦後那覇の復興した町並と建築に関する調査報告 ～平和通り沿いの二階建て木造建築の遺構を基に～ 176
K20301 鳥井 洸希 滋賀県に IR なんてできる訳ない 178
K20302 内藤 由華 技芸に携わっていた女性の職能と貸座敷の分布との関連性 180
K20304 中上 歩美 GREEN PLAZA ～“とかいなか”で緑あふれる駅前空間～ 182
K20305 中嶋 莉菜 史実に基づく層塔の耐震性に関する検証 184
K20306 中野 玲 饒平名コミュニティスクール 186
K20307 中村 鈴音 まほろば - 高齢者と子どもを結ぶ - 188
K20308 中本 珠李 楽器を直し、演奏する 190
K20310 仁尾 遥香 まわるこども園 ～だいひが こども園計画～ 192
K20311 西澤 直 近世京都の町規則における業態・身分の規制よりみた都市空間の分布図的考察 194
K20312 西村 楓 近世の西国城下町人地の住居形態に関する一考察 ～九州佐賀の唐人寺町を対象に～ 196
K20313 西村 瑠己亜 ENERGY PARK ～ NIMBY から YIMBY へ～ 198
K20314 貫井 美柚 寺院建築の設計技法 ～仏教寺院の設計及び寺院本堂と門の規模の関係性に関する試案～ 200
K20315 野口 拓馬 re start ～淡海で癒される桃源郷～ 202
K20316 萩原 弥和 100 年集合住宅 204
K20317 濵口 峻佑 まちなか小学校 - 子どもの学びと地域を活性化する新しい学校の形 - 206
K20318 濱田 哲平 Co-Lab Street　人・緑・知で溢れるまちづくり 208
K20319 林田 悠我 道でもなく庭でもなく建築でもない ～信楽の新たな産業を目指して～※5 210
K20320 檜山 立樹 泡沫の泊地 212
K20321 平尾 彩香 どうぶつのもり 214
K20322 平田 陸人 湖の子夢の図書館 216
K20323 平生 寛太 PLANT ～緑のチカラ～ 218
K20324 福留 慶晃 鷹峯 瑞芳寺方丈の研究 220
K20325 福中 青空 協働住宅群 ～京都東九条地域において新たな住空間の提案～※1 222
K20326 福永 彩乃 琵琶湖にまなぶ - なぎさ公園における広場・教育施設の提案 - 224
K20327 藤井 幸正 青の記憶～神秘の海に浮かぶ海洋博物館～ 226
K20328 藤井 遥夢 北野社多宝塔に関する研究 228
K20329 藤尾 哉汰 波紋を広げる 230
K20330 藤田 聖矢 日常の一コマに運動 232
K20331 藤田 蒼士 近代尾道の旧陣屋街区における土地所有と町屋に関する調査報告～西国街道沿い旧井上吉兵衛邸を対象に～ 234
K20332 古谷 貴一 再開発ビルのリノベーション 236
K20333 別府 佳昌 guest- 九州の景観を活かした住める宿 - 238
K20334 星塚 将也 コミュニティを生み出す空間 240
K20335 前田 大登 始まりの残丘 - 経験を与える美術館の提案 -※3※6 242
K20336 増田 愛 組物と垂木の関係性に関する基礎的研究　～非六枝掛組物に関する既往研究批判～ 244
K20337 水上 碧純 戦前期の災害復興事業による地方の町場の近代化と住まいに関する調査研究 ～富山井波にみる近代の町並みの再評価を目指して～※2 246
K20338 三井 愛理 選択出来るコミュニティ 248
K20339 宮嶋 大和 水彩の拠点 ～サインによる観光資源の発信～※2 250
K20340 宮田 凌誠 僕がいた街　-22 年前からの置き手紙 -※3 252
K20341 村木 駿太 まちに寄りそう産業の館 254
K20342 森下 武海 枚方パノラマ BBQ ~それぞれの楽しみ方~ 256
K20343 森下 菜々香 竹をあじわうー西山の竹林保全と活用ー 258

K20344	山浦 拓真	「夢への一歩」～アーティストの卵を支援、自邸兼アトリエ兼ギャラリーの設計～	260
K20345	山口 誠太郎	アートを中心とした空間の創出とアトリエ併設住戸の計画	262
K20346	山下 雄大	山の抱擁、未来への約束 ～傾斜地農村に息づく文化と農業の縦結び～	264
K20349	山本 逸貴	老いと向き合う ～自分らしく生きるために～	266
K20350	山本 ちひろ	京町家を継承していこう ～京都の伝統文化と共に～	268
K20351	山本 茉奈美	Matinee & Soiree	270
K20352	山本 夕有花	さんぽ道でつながる	272
K20354	湯浅 晶喬	変態するよすが ～長浜市で取り組む景観まちづくり～	274
K20355	湯本 深月	WORK+VACATION ～大自然に囲まれて～	276
K20356	横井 亜衣	小さなまちの大きな絆 ～負の連鎖から子育て世帯を救う～	278
K20357	横山 波南	居場所をつなぐ中間領域	280
K20358	吉岡 駿祐	自然と親和する河川空間	282
K20359	吉岡 諒	昭和初期における天理外国語学校（現・天理大学）のキャンパス形成と建築物に関する考察 ～現・一号棟、旧寄宿舎を中心に～	284
K20361	吉田 優稀奈	play と display- 関西におけるアイスホッケーの普及のために -	286
K20362	芳永 匠海	五感をめぐらす思考空間 ～通りの活性化と折口から学ぶ人生観～	288
K20364	渡辺 実玖	近代の王朝文化の再興 ～大正大礼「大饗の儀」における二条離宮の建築について～※3 ※6	290
K20365	渡邊 桃子	居場所を紡ぐ ～ off time connect ～	292
K20366	渡辺 優斗	静謐な湖畔	294
T22001	上田 望来有	祭りを通じて ～祭りを継ぐ為の居場所を提案～	296
T22002	太田 千波	again ～京都愛宕山再生計画～	298
T22003	大原 鈴	1930 年ストックホルム博覧会に至る北欧への人工光に関する歴史研究	300
T22006	辻本 早弥花	こどもの楽園	302
T22008	古堅 利宗	十二指腸アパートメント※1	304
T22009	古川 桜羽	豊かな街並みを ～自然と共存・リノベーション提案～	306

※1　入選

※2　佳作

※3　優秀賞

※4　最優秀賞（学長賞）

※5　最優秀賞（理事長賞）

※6　特別賞（外部審査員）

芸術学部 建築学科

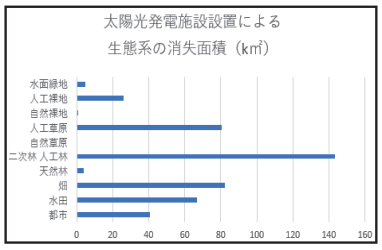
根付く

～太陽光発電所跡地における環境再生～

学籍番号　K18209
名　　前　花山拓夢
指導教員　新海俊一

Ⅰ 研究背景

日本における再生可能エネルギーへの取り組みが始まったのはオイルショックが起きた 1970 年代であった。その後再生可能エネルギーは脱炭素社会の推進のために温室効果ガスの排出抑制し、気候変動の抑制のために重要となった。太陽光発電は再生可能エネルギーの１種であり、1980 年に「ソーラーシステム普及促進融資制度」、1992 年に電力会社による自主的な取り組みの「太陽光発電による余剰電力の販売価格での買い取り制度」によって、太陽光発電が需要を上回って発電した場合に余った電力を電力販売価格と同じ値段で電力会社が買い取る仕組みが確率され、太陽光パネルの技術開発によって大幅なコストダウンと高性能を実現され 1990 年台には太陽光発電は拡大的に普及した。
太陽光パネルは建物の屋根に設置されるだけでなく、平地において大規模発電所(メガソーラー) として設置されることも多い。しかし、太陽光パネルは性質上、太陽光からの直接日光で太陽光エネルギーを電気エネルギーに変化することで発電する仕組みとなっている。多くのビルディングが立ち並ぶ都市部での太陽光発電は仕組み上難しい。そのため、地方や郊外のような直接日光を遮るものがない場所に建設される。また、太陽光パネル同士で直射日光を遮らないように斜面に建設することで高効率で電力化できるため二次林や植林地といった里山の一部を切り開き造成され建設されている。太陽光パネルの寿命 20 年というサイクル中で太陽光発電所のその後のことを考えなければならない。



Ⅱ 対象敷地

計画敷地は兵庫県の県境付近の大阪府豊能群能勢町にある野間稲地太陽光発電所がある場所である。この場所は 2000 年中頃に太陽光発電所の施設として建設された。太陽光発電所が建設される以前は農作地と二次林が混合していた場所であった。建設同時に二次林は伐採され、切り開かれ現在の敷地の形となった。

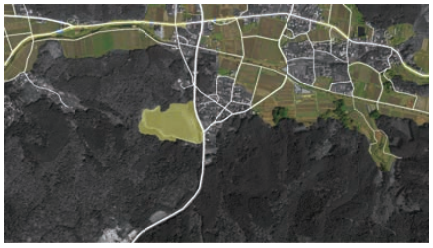


ROOT

～Environmental restoration at the site of a former solar power plant～

Student Number　K18209
Name　HANAYAMA Takumu
Supervisor　SHINKAI Syunichi

Ⅲ 敷地分析



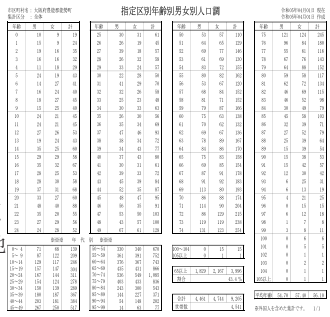
上図　敷地周辺詳細図（農作地）



上図　敷地周辺詳細図（森林）

上図２つはそれぞれ敷地周辺の農作地、森林の分布を表したものです。これからわかるように敷地周辺の平地部分は農作地が大部分占めており、敷地を取り囲むように森林があることから以前は農作地と二次林であったことが映し出されている。

Ⅳ 研究目的・手法



上記背景のような大規模太陽光発電所建設において破壊された二次林、植林地、農作地といった里山の一部を数十年単位での環境再生を目指す。そのためには多くの人の力が必要となる。敷地周辺の能勢町は少子高齢化が顕著である。右図は令和５年の能勢町の年齢別人口のグラフである。20 代～ 40 代の人口が少なく、逆に、50 代以上の人口が多く、65 歳以上の町の人口割合が 43.4%と大きい。このことから能勢町住民だけでは太陽光発電所跡地での環境再生は難しく外部から人を入れていかないと環境再生できないと思う。だから、観光で外部から人を敷地に入れていくことを考える。この太陽光発電所跡地の敷地から観光資源がなにかと考えるとまわりの自然あふれる景色や周辺で収穫される農作物などがあるので、グリーンツーリズム型リゾート施設という形で考えたい。

所在地：大阪府豊能群能勢町野間稲地
主な用途：ホテル
敷地面積：30,000㎡
建築面積：3,188.1 ㎡
延床面積：3,901.6㎡
キーワード：環境再生　観光　農業

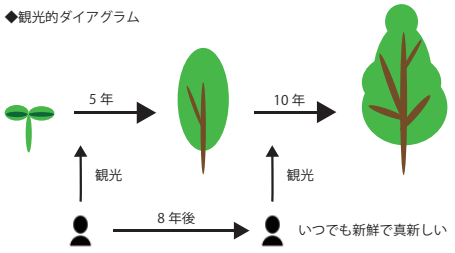
Location ： Nomainaji Nose-cho Toyono-gun,Osaka
Main Use ： Hotel
Site Area ： 30,000㎡
Building Floor Area ： 3,188.1㎡
Total Floor Area ： 3,901.6㎡
Keywords ： environmental regeneration　sightseeing　Agriculture

Ⅴ グリーンツーリズムについて

グリーンツーリズムとは、農村地域で余暇を楽しむことである。グリーンツーリズムの余暇の過ごし方は森や川などといった静かな環境での休養、野生動植物の観察、散策、カントリースポーツ（乗馬・ゴルフ・釣り・テニス等）、ストレス解消のための農作業手伝いとそれぞれの好み、ニーズに応じた多種多様な余暇を楽しむものになっている。日本にも既存のグリーンツーリズムはあるが農業が主体となった体験型ツーリズムとなっており本場欧州の上記のようなグリーンツーリズムと似て非なるものとなっている。

Ⅵ 観光コンセプトについて

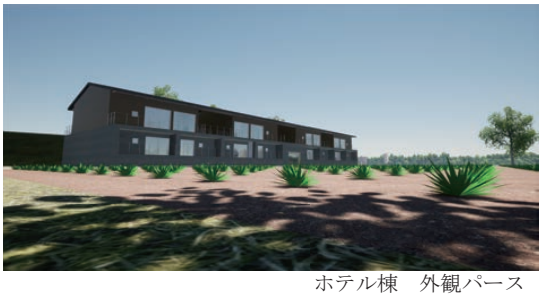
本計画は 30 年ぐらいの期間をかけ環境を再生していく長期間的に考えた計画である。禿地である今から樹木を植林して成長するのに 30 年以上必要だからである。途方に暮れる程の長い期間であるが、そのプロセスの中でも自然は成長し、観光客はいつも真新しい光景を目にすることができる。逆に言えば、二度と同じ光景は見られないということである



植林してから 15～50 年は木々はその土地に根付き成長する。
観光客はいつ観光しても同じ光景は見られない。



レセプション棟　外観パース



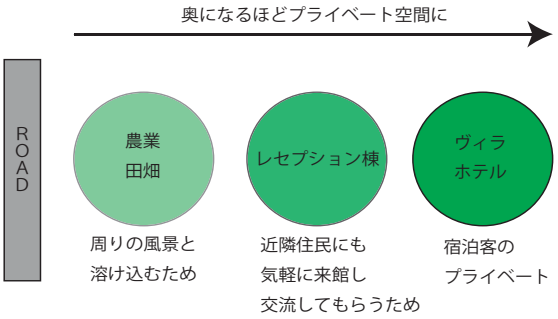
ホテル棟　外観パース

Ⅶ　配置コンセプト

本計画の施設は大きく 4 点である。

1. レセプション棟－チェックインや食事、ラウンジ空間
　　道の駅、地域住民の交流の場としても
2. ホテル棟 -1 棟多室型の建物。2 つのルームタイプを作成し低予算でも宿泊できる施設
3. ヴィラ棟 -1 棟 1 室型の宿泊施設。完全なるプライベート空間として宿泊可能。
4. 田畑　　－宿泊客が農作業ができる施設。

配置は田畑を道路側に設置し、周辺との風景を調和させ、その奥にレセプション棟を配置することで近隣住民にも気軽に来館しやすくし交流を図ってもらう。そして、敷地の奥側に宿泊するヴィラ棟やホテルを設置し、宿泊客のプライベート空間を確保するような形に配置した。





ヴィラ棟　外観パース

出典
環境省
農林水産省
大阪府豊能群能勢町
青木辰司「転換するグリーンツーリズム
　　広域連携と自立を目指して」 学芸出版社
東京農業大学地域環境科学部「新版　地球環境科学概論」
　　理工図書

歴史とともに住む

学籍番号　K18222
名　　前　藤本秀真
指導教員 森重幸子

LIVE WITH HISTORY

Student Number　K18222
Name　　HUJIMOTO SHUMA
Supervisor　　MORISIGE SATIKO

1. 背景と目的

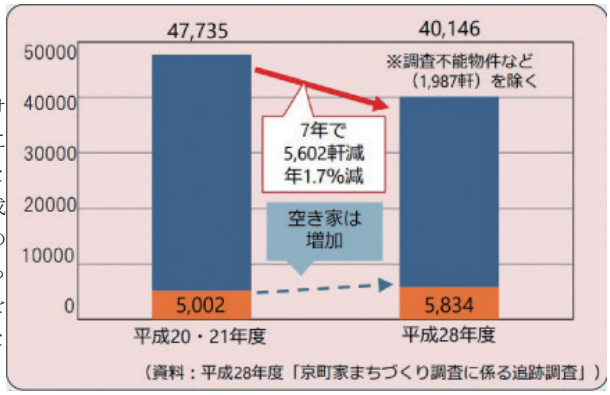
今回の調査対象は、京町屋である。京町屋とは、一般的に敷地形状は、うなぎの寝床といわれるように奥行が長く、その構造は伝統的な軸組木造であり、間取りには通り庭、続き間、坪庭、奥庭を保っているか、それらを過去に有していた建物を京町家と呼ばれている。　外観の特徴として、瓦屋根、大戸・格子戸、出格子、虫籠窓、土壁などが見られ、都市住民が都市の中で高密度に住み、往来の人との交流やふれあいを前提として商い、生産する建物であるという性格上、その外壁は通りに面し、隣の建物とは近接し、軒を連ねているといった特徴をもっている。しかし、京都市中心部に数多く残る京町家が次々と取り壊され別のものに作り変えられている。そこで、実際の京町家について調査することによって、京町家の利点と問題点について洗い出し、新たな利用方法について考えていく。



対象の京町家

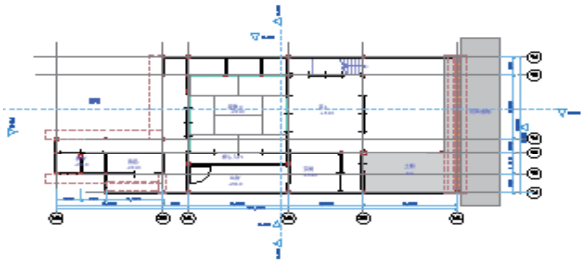
２．京町屋の現状

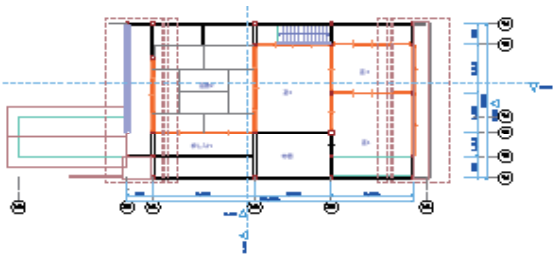
近年では、伝統文化やライフスタイルの再評価、不動産における京町屋の需要の高まり等活用に向けた環境が整っているのにもかかわらず、多くの京町屋が空き家のまま放置され、必要としてる人に供給されないまま取り壊されている。実際に、平成20・21年に実施された京町家まちづくり調査の結果と28年の調査を比べた結果、7年間で11.7%も減少していることが分かった。さらに、空家率についても、4.5%増加と、減少の一途をたどっている。その要因として大まかに三つの要因があることが分かった。



３．三つの要因

一つ目は、意識に関してである。京町屋所有者は、京町屋を残すことが相続人の負担になると思っていたり、相続人に、価値が伝わっていない点等がある。二つ目は、維持、修繕に関する点である。修繕の費用の負担が大きかったり、日常の掃除であったり、建具替えについても、大きな負担となっている。さらに、京町家に関する技術者も減少している部分も問題になっている。三つ目は、継承や、流通に関する問題である。相続税で経済的な負担がかかるだけでなく、相続時の財産分与が問題になったり、新たな担い手が見つからない、安心して任せられる不動産事業者を知らない等の問題があることが分かった。





４．調査対象について

今回調査する対象の京町屋は、ガラス卸売業者の店舗兼住宅として利用されてきていて、本二階建ての真壁造り瓦葺であり、出格子は見られないが、軒裏は、出桁を組んだ造りになっています。間口全面はガラス戸になっており、入口の土間部分が、店の間として利用されていた。また、大きな特徴として、店の

歴史とともに住む

学籍番号　K18222
名　　前　藤本秀真
指導教員　森重幸子

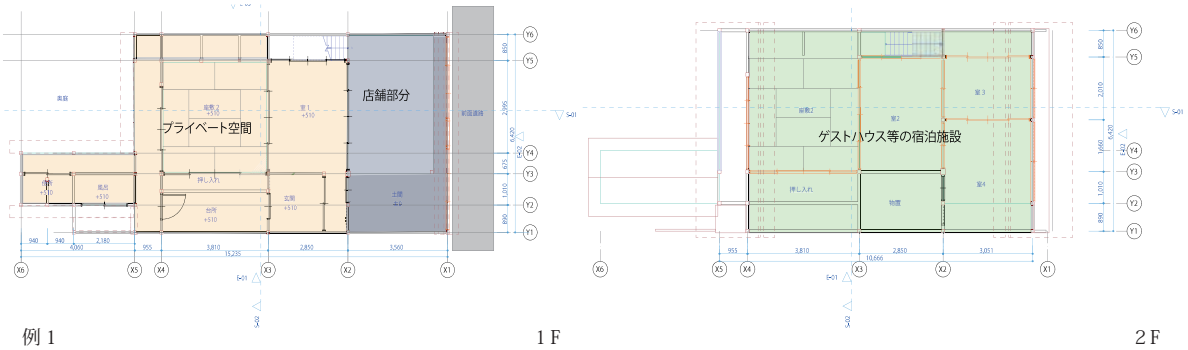
LIVE WITH HISTORY

Student Number　K18222
Name　HUJIMOTO SHUMA
Supervisor　MORISIGE SATIKO

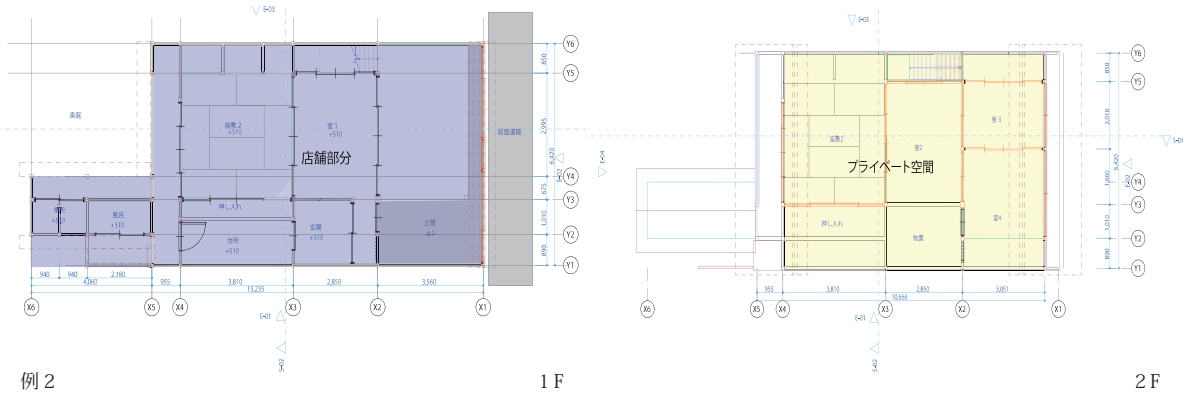
間にある大きな人見柱とそれにかかる結木はねぎと呼ばれる大きな腕木が見られる。

５．計画概要

一つの決まった使い方をするのではなく、様々な用途で利用できるような計画を考えていく。
例１　建物前面の店の間部分を店舗にして、奥の部屋部分をプライベート空間にし、二階部分を下宿や、ゲストハウス等の宿泊施設とする。
例２　一階部分を完全に店舗として利用する。店の間部分を、伝統工芸品の販売所にしたり、部屋１、座敷を大部屋として利用し、集会場や宴会場として利用できるようにする。二階部分は、完全なプライベート空間として利用する。



例１　１Ｆ　２Ｆ



例２　１Ｆ　２Ｆ



最寄り駅は嵐電西院駅、近くには、銭湯やカフェなどがあり、西院春日神社や、元離宮二条城等の観光地も周辺には、点在している。

周辺の地図

スペースポートシティ構築プロセスの構想

スペースポートシティおおいた

学籍番号 K19274
名　　前 新塘　大樹
指導教員 生川教授

Design Of Spaceport City Construction Process

Spaceport City Oita

Student ID No.　K19274
Name　　Daiki Shindomo
Supervisor　Professor Narukawa

1 研究の背景

スペースポートとは、射場または滑走路を利用して宇宙に行くための港であり、つまり宇宙旅行の他に、宇宙を介して地球上の様々な土地に高速で輸送できる二地点間輸送が可能な施設としての役割を持つ。近年世界中で宇宙産業が活発になってきており、民間人が宇宙旅行をする時代を迎えていることからスペースポートが必要である。現時点の実在する施設はアメリカ・ニューメキシコにあるスペースポートアメリカの一つだけである。アジアの拠点としては表 1 の内容と米宇宙ベンジャー企業ヴァージン・オービットのもと日本の大分空港が選定され、未来のスペースポートに向けて現在は法整備が実際に進められている。スペースポートが建設されることで世界中の都市間の移動時間が 2 時間以内となり、日本における全世界、更には宇宙との玄関口となることからこれまでの想定を超えた人の交流、そして物流の拠点として新たな都市構想が必要と考えられる。

2 研究の目的

大分空港にスペースポートが建設されたと仮定し、これから未来にかけて形成されるスペースポートを核とした未来都市を提案する。また最終的な都市の完成像を想定せず、その時点に必要な用途を生み出しやすいシステムの考案を目的としている。

3 敷地の選定

大分空港は表 1 の条件と機能を満たしており、すでに大分の宇宙企業おおいたスペースフォーチャーセンターと国土交通省、経済産業省の三社で法整備を進められている。今後の国際都市に向けて、すでに在日外国人や立命館アジア太平洋大学があることから国際的な関りもすでに構築されている。

災害に関しては大分の東側にある四国から伸びる佐田岬が防波堤の役割を果たし津波の影響は軽微であると考えられる。

4 計画内容

4-1 大地

自然保護を大前提とし開発行為は原則行わない。ただし耕種農業や畜産農業、林業を営むための最小限の集落を構成するものとし木造、石造などその土地で採れるもので建築する。

4-2 スペースポート

騒音対策とターミナルと海上都市を接続させるために滑走路を現在のエプロン、タクシー付近に再配置し、新しいターミナルを東側に建築する。また現在のターミナルは月、火星に向けた宇宙飛行士の訓練施設として再利用する。

4-3 海洋

スペースポート東側の海上に六角形のモジュールを多数接続し街を構成。物流拠点、移民難民受け入れ拠点、研究開発施設、宇宙医療施設、打ち上げ施設、娯楽や住居を必要ごとに配置し、必要に応じて増減築が可能なモジュールの切断で再利用できるシステムである。また 1 つのモジュールで水とエネルギーを生産する生存に最低限必要な機能を有することができ、有事にも対応できるものとする。

5 海上都市コンセプト

5-1 変幻自在

ひとつの浮体モジュール(以下ピースと呼ぶ)で様々な用途に利用することが可能である。これらの上に建築、緑化、生簀、電力等の用途に生まれ変わることができ、これらを計画的に配置することでまちが構成されていく。

5-2 増縮可能都市

海上の浮体建築であることからピースの自由な移動が可能になることから、これらを接続し増築又はこれらを切断し減築することが可能である。これは将来の人口減少に大きく関わり、結果的に空き家問題を解決できる方法でもある。

5-3 クリーンエネルギー

建築には大分産の木材を使用した木造建築とすることで減築した際に再利用可能であり、木を貯蓄でき、浮体のための軽量化に繋がる。またピースごとに水資源を生産、エネルギー生産を可能にすることで有事にも対応できる。水資源は大量にある海水から生産、および尿も水再生システム WRS で水に変換する。エネルギーは糞からバイオエネルギーに、人工光合成でポルフィリンから水素と酸素を生成し水素エネルギーを生産する。

5 検討プロセス

ピースの形が六角形に至るまで円から八角形で実験し検討したがそれぞれの接続で面にならない事や、面になっても互いに固定できないが、六角形のみ面になるかつ最小三つの接続で互いに固定され安定されることから採用した。

このピースの中に三角形を 6 つ配置できる。建築の際はこの三角形を使用し規則的な建物を配置でき建物になりうる配置の種類は６４通りあり、シンプルなシステムではあるが多様性を持ちうることも確認した。

表 1 スペースポートに必要な条件と機能

・条件	・施設の東側及び赤道側が海か砂漠であること。 ・3000m級の滑走路を有していること。
・機能	・宇宙ビジネスの情報、通信の拠点の機能 ・宇宙関連機器の生産機能 ・研究開発のための機能 ・教育研修のための機能

表 2 ピースに対する規則的な建物の種類と配置

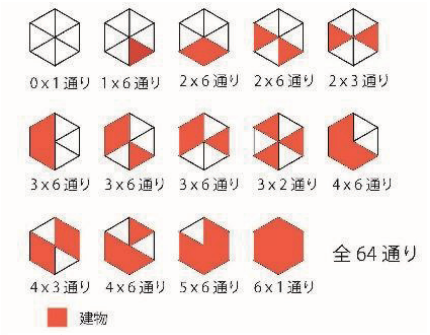




図 1　隣保区 1 階平面図

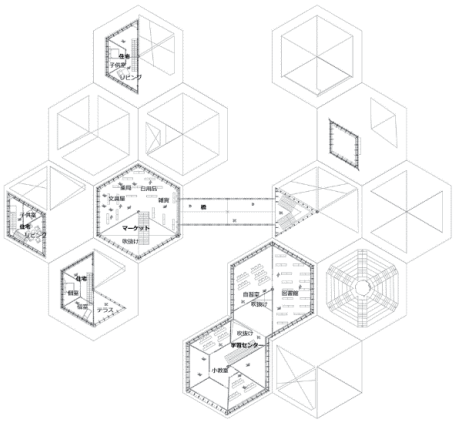


図 1　隣保区 2 階平面図

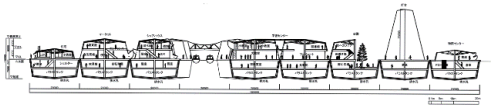


図 2　隣保区の断面立面図

六角形の接合プロセスには近隣住区論を参考に隣保区、分区、住区の単位を設けた。隣保区はピースを 19 個六角形になるように接続する。六角形になるには 7 個の接続でも可能だが一辺につきピースが二個になってしまうのでは運河のために空白のピースを作ると敷地が小さく分断され機能しなくなる。しかしピース 19 個の六角形では一辺につき 3 個のピースが生まれ運河を取り込むことが可能となる。分区には隣保区をまた 19 個の接続で六角形にする。そして住区には分区を 7 個接続し六角形を形成する。この組み合わせの連続で近隣住区論に類する規模の半径 500m となり隣保区を 7 個で分区、分区を 19 個で住区になる。

7 提案例

7-1 ピース

一辺 10m の六角形をピースと呼び、これを敷き詰めることで面となりまちの構成に繋がる。六角形を最小 3 つ繋げることで固定されることから採用した。浮体建築とするため地下(船底)を設けると同時に余った空間を地下室として利用し、低荷水槽にてアクティブ制御を設け波、上階の加重バランスを均一に保つ。

ピースに建築することも可能だが、緑化や電力の施設にすることも可能で建築の場合表 2 のように規則的に配置することで用途の転用も容易にしている。建築スタイルは二階建て以下と地下一階とすることで無駄な運動効率を低減し、重荷重、風による浮体バランスを軽減するためである。また地上海中ともに揺れを考慮したスレッドを設けることでこのデザインになる。

主に木造建築とし、海上に木材を貯蓄していき改修改築でリサイクルできる。

7-2 隣保区

近隣住区論を参考にした図 1 の隣保区はピースを 19 個で六角形になるように敷き詰めて構成する。これにより水路を構築することができ水路シーバスを利用した安易な移動が可能になる。人の移動は、図 2 のような水路両端の二階建ての建築物により設置できる橋を主に利用する。

7-3 分区

近隣住区論を参考にした分区は隣保区を 19 個で六角形になるように敷き詰めて構成する。海中での光合成を妨げぬよう少なくとも隣保区 3 つ分のホールを設ける、または図 3 のように運河を構築することで運河シーバスを利用した安易な移動が可能になり、水路シーバスと連絡することでスムースな人流が認められる。

7-4 住区

近隣住区論を参考にした住区は分区を 7 個で六角形になるように敷き詰めて構成する。図 4 のように真ん中の分区にマーケットや市場の物流拠点にし、運河と隣接させることでシーバスからの物流と人流を確保する。またドローンの拠点を設けスペースポートや他の住区からの高速な人流や物流も可能となる。

7-5 都市

住区を必要に応じ接続することで規則的にすることも、図 8 のようにランダムに配置することも可能である。また配置するだけでなく各ピースの切断も可能なため縮小させることも可能である。その分のピースは違う用途に転用される。

8 災害時の対策

地震、波の影響は見られないが、台風、火災、落雷、津波の対策は必要である。台風による風はピースのアクティブ制御と連結部分で揺れを軽減する。火災は海水で常時消火可能。落雷は各ピースに雷保護システムを設け海に誘導する。津波は沖に敷地ごと移動することで影響を低減。

9 交通システム

ラドバーンを設け、基本的にシーバス、自転車、ドローン、垂直離陸機を使用し移動する。ドローンの航路は運河水路の真上を飛行または各高度の航路を飛行する。

10 まとめ

宇宙開発が進んでいる今、大分空港にスペースポートの設置が予定されていることから、その周辺に今までとは異なる都市機能が必要だと考えシステムを考案した。ピースとするモジュールを規則的に敷き詰め近隣住区論に基づきながら住区の収容人数、半径は徒歩圏内という大きさを考え都市を海上に構築していく。

陸地は自然保護を大前提とし自然に返すため海上都市を構想している。これにより時代に合わせた増縮可能な都市を目指している。

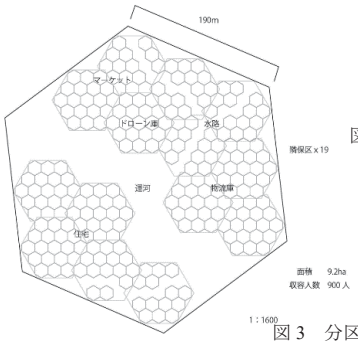


図 3　分区

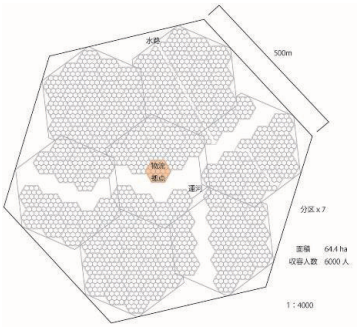


図 4　住区

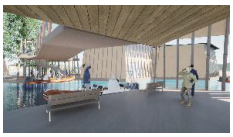


図 5 学習センター内観パース

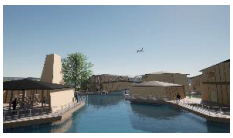


図 6 隣保区外観パース 1



図 7 隣保区外観パース 2

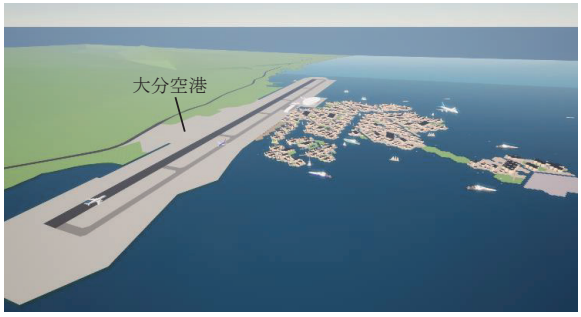


図 8 都市全体の鳥瞰図

参考文献

・JAXA 有人宇宙技術部門国際宇宙探査の取り組み 2023.4 https://humans-in-space.jaxa.jp/future/
・NASA Artemis Mission Why The Moon 2023.4 https://www.nasa.gov/specials/artemis/
・ANA Global Channel Aim for space special talk 2023.4 https://www.youtube.com/watch?v=G3jXayloex4
・Space port Japan スペースポートシティ構想図 2023.4
https://www.spaceport-japan.org/_files/ugd/a8dd90_822dbf0411fe44a7c86651c5b5850757b.pdf
・※1Foster+Partners Projects Spaceport America Project Story 2023.4
https://www.fosterandpartners.com/projects/spaceport-america
・DEZEEN Space port America Plans 2023.4 https://www.dezeen.com/2011/10/19/spaceport-america-by-foster-partners/
・※2 Spaceport America 2023.6
https://www.spaceportamerica.com/wp-content/uploads/2022/05/2022.05.20_Press_Kit.pdf
・宇宙建築居住を可能にする技術　彰国社出版　清水建設宇宙開発室著　1991.5.10 発行
・新建築データ Avatar X Lab @ Oita 2023.6 https://data.shinkenchiku.online/articles/SK_2019_01_146-0
・大分空港チャート　2023.7 https://yinlei.org/x-plane10/doc/AIP-J/RJFO_Oita.pdf
・おおいたスペースフューチャーセンター専務理事高山久信様へのヒアリング 2023.6
・藤森照信の住宅の原点　講談社出版　ハースト婦人画報社著　2017.8.7 発行
・超高速でわかる！宇宙ビジネス　すばる舎出版　片山俊大著　2021.11.18 発行
・都市計画とまちづくりがわかる本　彰国社　後藤武著行　2011.11.10 発行
・集落の教え 100　彰国社　原広司著　1998.3.30 発行
・集落の知恵　美しく住むかたち　技報堂出版　日本建築学会著　2005.7.30 発行
・Urban Housing Sciences　都市住宅学　2019 autumn　都市住宅学会出版　都市住宅学会編集　2019.10.31 発行
・Urban Housing Sciences　都市住宅学　2020 summer 都市住宅学会出版　都市住宅学会編集　2020.7.31 発行
・ジブリの立体建造物展　内野緑樹発行　スタジオジブリ編集　2021.11.30 発行
・Oceanix Busan https://oceanix.com/busan/ 2024.1.10
・Land on water https://mast.dk/land-on-water 2024.1.10

複合型運動施設

～心と身体を癒す場～

学籍番号　k19303
名　　前　中角友哉
指導教員　井上晋一

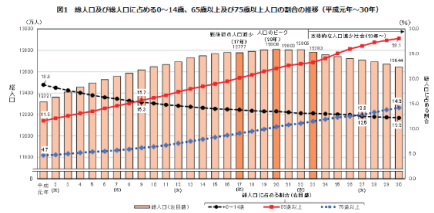
Complex type exercise facility

~ A place to heal the mind and body ~

Student Number k19303
Name tomoya nakasumi
Supervisor shinnichi inoue

1.　はじめに

私たちの国は現在、かつて経験したことのない人口減少、
高齢化社会を迎えつつある。また居住地域の郊外化に伴い
地域内の人口が分散し、地域におけるコミュニティや
アイデンティティが急速に失われつつある。今後さらに人口減少や
高齢化が進展することを鑑みれば、分散している人口を集積させ、
住民サービス施設等を造形することが必要である。
ただし、世代を超えて多くの地域住民が交流できる空間を創出
するためには、多くの人々が価値観や感動を共有できる
コンテンツが必要となる。



2.　スポーツがもたらす影響

スポーツはオリンピックなどに代表されるように見るものを
惹きつけ、同じ感動を味わえることより一体感を創出できる
だけでなく、クラブチームの設立等により地域の活性化を
可能にし、高齢化社会においてはその予備医療としての機能
からも重要とされている。

3.　敷地選定理由

金岡体育館は竣工 1989 年と老朽化が進んでおり、堺市の区の
中で最も人口が多く、かつ高齢化が進んでいるため。また周囲
に移民や高齢化が進んでいる金岡団地があり南側には労災病院
があるため高齢の利用者が増えることが期待される。

3.　施設概要

大阪堺市北区に所在し、市民の体育、スポーツ、レクリエ
ーションの振興を図り、体力を増進する施設である。
大体育館は 1707 平方メートルあり、バレーボール、
バスケットボールなどの球技を行うために使用され、
行うために使用される。他にもトレーニング施設や
健康運動相談室などが配置されている。収容人数は 2000
人程度であるがスポーツの大会も開催されている。
施設外には陸上競技場、野球場、テニスコートなども併設
されており、屋外でも楽しめる公園になっている。

4.問題点

金岡体育館は運動、スポーツをメインとする施設であり、
娯楽、休憩スペースがなく、スポーツ以外の目的にも利用
できる施設が必要だと考えた。また屋外にも多目的として
利用できる空間が少ないため、気軽に立ち寄りづらい環境
にあるのではないかと感じた。
スポーツを観戦する場が固定化され、視線が同じため
様々な視点から観戦を楽しめるようにする必要がある。
選手が利用できる設備や施設の増設。

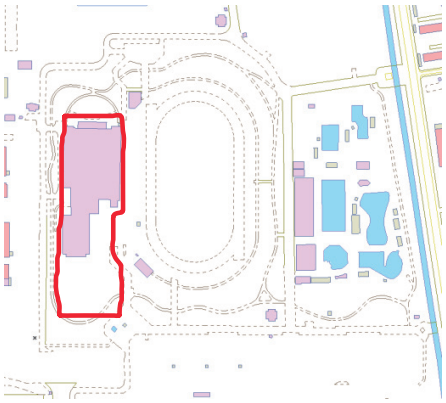


図 1　敷地

所在地：大阪府堺市北区長曾根町 1179-18
主な用途：体育館、スポーツ施設
敷地面積：22500 ㎡
建築面積：
延床面積：8770 ㎡
キーワード：複合施設、高齢者施設 、休憩スペース

Location : 1179-18chou-nagasone,ku-kita,shi-sakai,hu-oosaka
Main Use : gym, Sports facility
Site Area : 22500 m^2
Building Floor Area : m^2
Total Floor Area : 8770m^2
Keywords : complex, Elderly facility

6.目的

これらの問題を含め、まず健康増進に必要な「憩い」と「食」の場を計画する必要がある。屋内では談話できる空間をつくり、館内を利用する人同士のコミュニティを活性化させる。屋外にも、くつろげる空間や様々な視点からスポーツを嗜める空間を計画することで、地域活性化にも繋がり、またレベル差をつけることで、高齢者にとっても健康増進に繋がる場になると考えた。

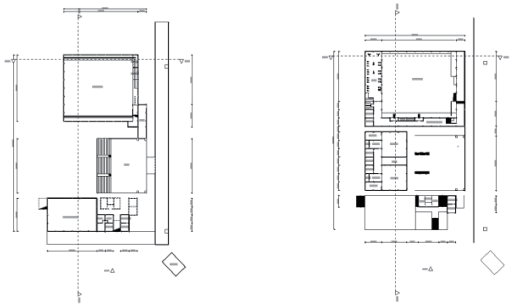
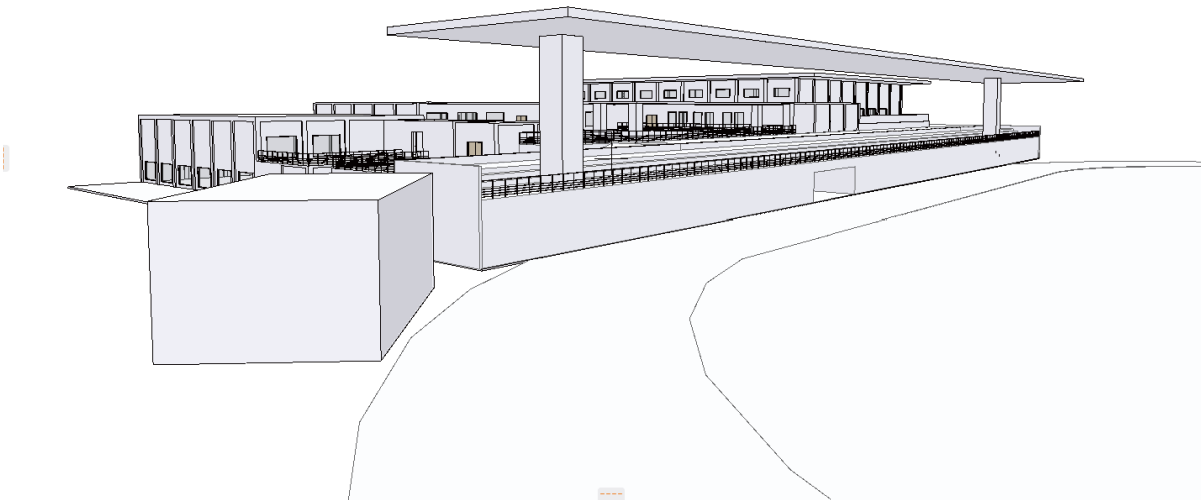


図２　外観パース



参考文献

https://www.stat.go.jp/data/topics/topi1191.html

https://www.dbj.jp/topics/investigate/2013/html/20130801_200521.html#:~:text=%E8%A1%97%E3%81%A5%E3%81%8F%E3%82%8A%E3%81%AE%E4%B8%AD%E6%A0%B8%E3%82%92,%E3%81%A8%E5%AE%9A%E7%BE%A9%E4%BB%98%E3%81%91%E3%81%BE%E3%81%97%E3%81%9F%E3%80%82

道のアトリエ

学籍番号K19341
名前　本城武司
指導教員　井上晋一

Atelier on the Road

Student Number K19341
Name Takeshi Honjo
Supervisor Shinichi Inoue

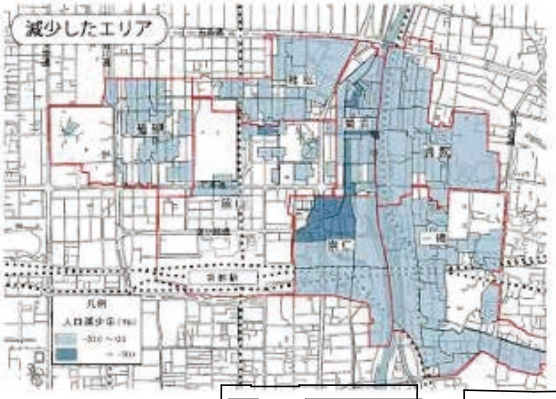
1.背景と目的

1-1　問題と現状

　現在崇仁地区は人口減少、高齢化が問題となっている。
戦後は6000人から10000人まであった人口が1400人程まで減少しており、
地域の防災訓練などでも杖を突いた高齢者が指揮しているほどだ。
京都駅が玄関口として発展しているのにも関わらず崇仁地区は
あまりにも空白の土地である。
しかし、京都市はこの場所のまちづくりの方針として
「創造、交流、賑いのまち」とし、文化・芸術を通して
京都駅に集散する様々な人々との交流をつくり、
この地区を変えようとしており、京都市立芸術大学が崇仁地区に移転し、
京都美術工芸大学との間にある空白の土地を芸術で賑わう場所に
生まれ変わろうとしている。

■ 京都駅東部エリアの人口増減率（平成１２年から平成２７年の推移）





出典：国勢調査

2. 計画の概要

2-1　計画敷地

敷地設定：〒600-8141 京都府京都市下京区新日吉町
敷地面積：1030.93㎡

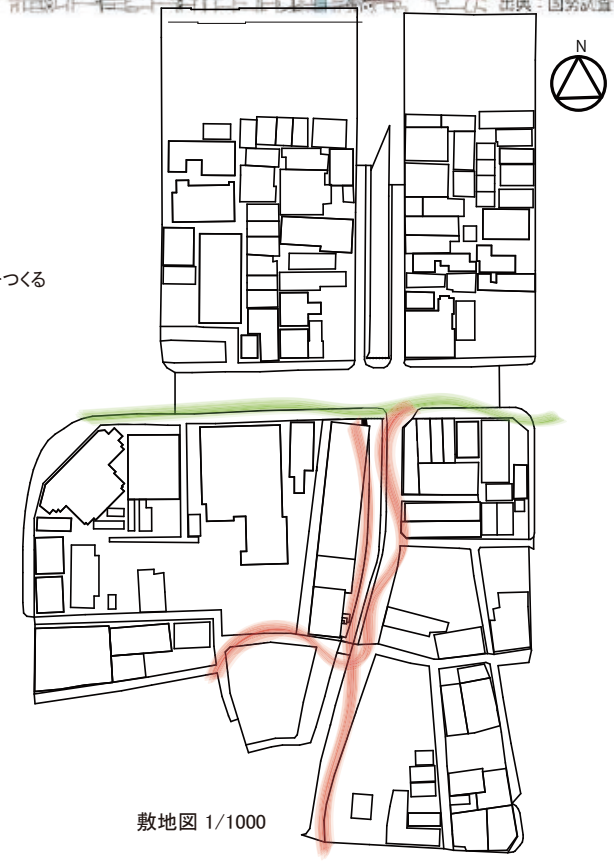
2-2 敷地周辺

　七条通りに面しており、木屋町通り、高瀬川の綺麗な散歩道として四条から七条までは利用
されていることも多いが七条より南は人の気配がほとんどなく閑散としている。
七条通りは日常的に人通りが多い。

3. 建築的提案

　これから発展していくであろう崇仁地区に対して七条からの入り口として通ってみたくなる道をつくる
ために七条通りから見ると一見フリーで見れるギャラリーのようになっている。
川床の道を通ると近くで作品を見ることができ、ギャラリーの上にはアトリエがあるため、
どういう人がどういう人たちが作品を作っているのかがわかり、今まで芸術に興味がなかった
人でも誰が作ったのかどのようにして作っているのかがわかり少しずつ芸術に対して興味
が湧いてくるのではないかと考えている。

まずは崇仁地区に足を踏み入れてもらうことが目標なので毎日の通学や通勤で
新しい作品ができるたびに見てみようかな、通ってみようかなという気持ちを作らせ、
未だに残っている忌避意識を少しでも無くすことによって、おのずと人通りも多くなり、
これからの発展次第で崇仁地区は大きく生まれ変わるのではと考えている。



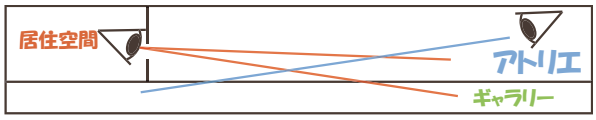
敷地図 1/1000

所在地：京都府京都市下京区新日吉町
主な用途：住居　ギャラリー　アトリエ
敷地面積：1030.93m²
建築面積547.52m²
延べ床面積:646.04m²
キーワード：崇仁地区・芸術・高瀬川

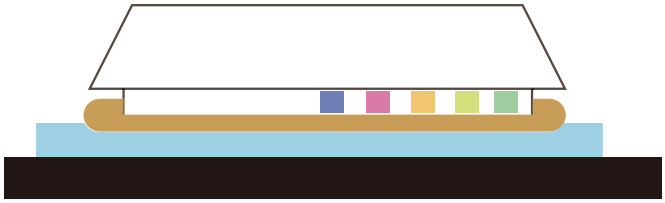
Location:
Main Use:House,Gallery,Atelier
Site Area:1030.93m²
Buildeing Floor Area:547.52m²
Total Floor Area:646.04m²
Keywords:Suujin Area,art,takase river

３：ダイアグラム

ギャラリーを見に人が訪れた際人が来たことがわかるように居住空間からも
アトリエからも視線が通るようにした。



対岸から見るとただのギャラリーのように見え、手前の川床の道を歩けば
中の様子も見えるようになっている。





東側立面図1/400　　図１

参考事例

１：軽井沢の居場所（※図１）
東側近景の濡れ縁から広縁、寝室、家を挟んで向かい側まで見通す
ことができる濡れ縁を作り、地形による段差を利用して飽きない、
そして日々の細かい運動にもなっている。



２：松ヶ崎のギャラリー（※図２）
設計事務所、ゲストハウス、住宅を約60m川に沿って建てられており、
借家を分解し移設、再度組み立てられたもの

図２



参考文献・引用図

崇仁地域 - 京都市
https://www.city.kyoto.lg.jp/tokei/cmsfiles/contents/0000151/151614/masterplan2-mainpart_05shujin.pdf
京都駅東部エリア活性化将来構想
https://www.city.kyoto.lg.jp/sogo/cmsfiles/contents/0000250/250877/kousou.pdf
崇仁地区全体の事業計画
https://www.city.kyoto.lg.jp/kensetu/cmsfiles/contents/0000275/275809/3_thuikasiryou1_(suujin).pdf
新建築データ　松ヶ崎のギャラリー（借屋生活４）
https://data.shinkenchiku.online/articles/JT_2016_09_076-0
崇仁まちづくり推進委員会
https://sujin.jp/

没頭とつながり

学籍番号　K20201
名　　前　青木大河
指導教員　安田光男

immersion and connection

Student Number　K20201
Name　　AOKI Taiga
Supervisor　　YASUDA Teruo

・初めに

何かを創り上げたり没頭する人には一人の時間が必要だ。しかし一人で何かを生み出していくよりも他の人が創るものを見て感性を磨いたり、自分にはないものを知るということも素晴らしいものを創り出すのに必要な過程である。
ここでは居住者はもちろん学生でも身分関係なくアーティストや人が集まり互いに高めあい何かヒントを得る事ができ、そこでの出会いは無意識に次の出会いやアイデアに繋がっていく。建築により充実した生活と豊かな心を育む事ができて互いに助け合うことができると考えている。

・設計の背景

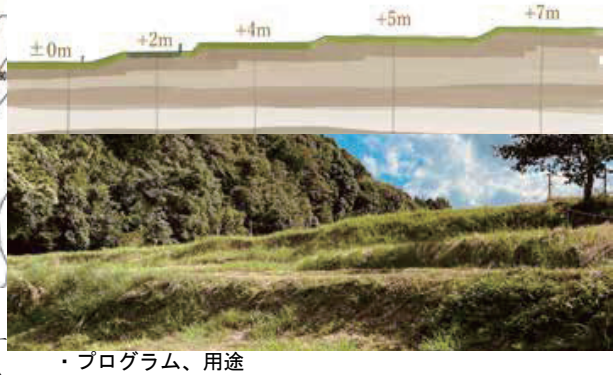
本目的はアーティストが作品を通して自身の感情を表現し、人と関わり合う事で生まれるアイデアと、そこでのコモンズの形成と同時に地域を活性化することである。
人それぞれ己の追い求めるものや価値観が違い、育った環境や見てきたもの、物事の関心の度合いも違い、また何をもって制作する時快適であるかの基準も違う。そのような多様性の価値観と個人主義な世の中に集まる意味を考えていく。

⑴ アトリエ型集合住宅（アートインレジデンス）
⑵ 温泉を核とした地域の再構築
⑶ 棚田の再利用

・敷地概要

選定敷地は京都府の宇治市白川地区にある。北側に琵琶湖から流れる宇治川や源氏物語や水面に映る姿が有名な平等院鳳凰堂があり、西側に国の重要文化財に指定されている白山神社本殿がある。
この白川地区自体は歴史が深く平等院鳳凰堂の奥の院である白川金色堂が建てられていた地域であり、現在は敷地へ入る道に白川金色院の総門のみが残っている。また宇治白川地区は宇治茶などの茶葉の生産や稲作が盛んであると共に、京都府の重点地区に指定されており、街全体で茶畑や歴史的景観が残り続ける地域でもある地域である。　敷地は過去に棚田として使われていて現在は放置され里山と一体になっている。周りには大きな建物がないが住宅の数は多く静かであり、使われない棚田があったのでこの敷地を選定した。





・アーティストの設定

アーティスト（芸術家）は芸術作品を創作・創造し、表現する人を指し（英語と日本語では若干の含みの違いがある）人の心情や関心を動かす作品を造り、例では絵画や彫刻などの美術家や画家、音楽家や詩人などがある。今回の計画でアーティストとするとあまりに定義が広いので、自分の中の定義としてアーティストの中でも美術家の現代アート、画家、彫刻家に限定している。絵画など、一般の方でも想像しやすい美術家を対象とする事で建築用途や活動のイメージが比較的整理しやすく、自分のよく知っている領域と経験から考えていく事ができるのでそのように決めた。

人それぞれこだわりや価値観が違い、育った環境や見てきたもので物事の関心の度合いも違い、また何をもって制作する時快適であるかの基準も違う。今回は想定できる人やシナリオを考え、過ごし方をイラストとして描いた。

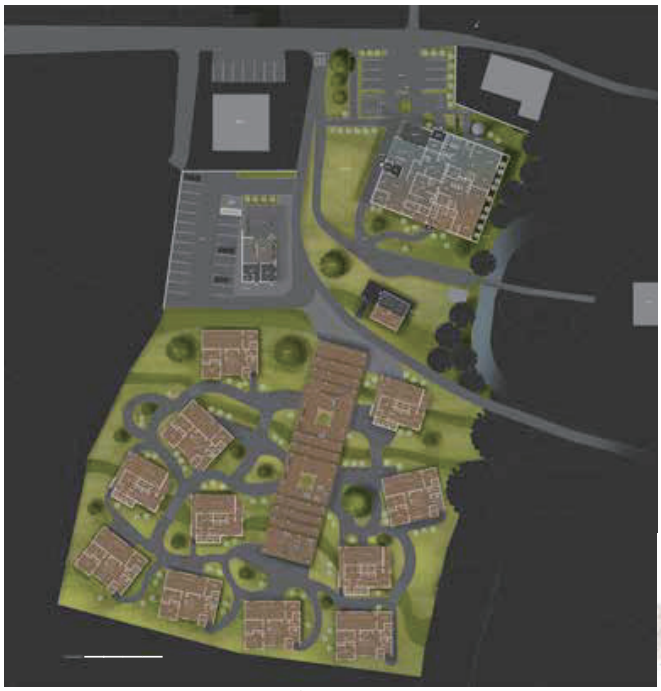
・プログラム、用途

・A 棟　管理案内棟：展示スペース、職員の事務所
・B 棟　大浴場：日帰り入浴施設、ギャラリー空間
・C 棟　交流棟：会議室
・D 棟　大屋根広場：広場、野外イベントスペース
・集合住宅群（一部アートインレジデンス）：11 棟
（タイプ１が７棟、タイプ２が４棟）

・構造　木造　一部、鉄骨造（大浴場、D 棟大屋根広場
・規模　敷地面積：8,549㎡

所在地：京都府宇治市宇治白川地区
主な用途：集合住宅・複合施設
敷地面積：8,549㎡
建築面積：3,753㎡
延床面積：3,753㎡
キーワード：集合住宅・アーティスト・地域との共生

Location : Ujishirakawa, Uji City, Kyoto Prefecture
Main Use : Apartment complex/complex facility
Site Area : 8,549㎡
Building Floor Area :3,753 ㎡
Total Floor Area :3,753 ㎡
Keywords : Coexistence with housing complexes, artists, and the local community



配置図兼一階平面図



住宅部分平面図



北側立面図





東西断面図





南北断面図

・参考文献

1) 宇治市ホームページ
https://www.city.uji.kyoto.jp/uploaded/attachment/23615.pdf
2) 宇治白川における文化的景観の構造 著：日本建築学会
3) 地域の風景を素材としたアートインレジデンスの実態分析
http://library.jsce.or.jp/jsce/open/00039/201105_no43/pdf/96.pdf
4) 住民関与の実態とまちづくり活動への展開からみるアーティスト・イン・レジデンスの潜在的意義
https://www.jstage.jst.go.jp/article/journalcpij/57/3/57_682/_article/-char/ja
5) 日本におけるアートプロジェクトの実態と主催者の意識構造 https://www.jstage.jst.go.jp/article/journalcpij/48/3/48_237/_article/-char/ja/
6) ヨコハマアパートメント
http://www.ondesign.co.jp/city/housing/1/
7) https://ja.m.wikipedia.org/wiki/%E8%8A%B8%E8%A1%93%E5%AE%B6



木の心を知る~持続可能な社会を考える~

学籍番号　K20202
名　　前　赤坂倫太郎
指導教員　安田光男

Know the heart of a tree ~ Thinking abaout a sustainable society ~

Student Number　K20202
Name　　Akasaka Rintaro
Supervisor　　Yasuda Teruo

■設計趣旨

日本の森林は日本の国土面積の約 70% をしめており、いわゆる森林大国とされている。森林が多いと良いことだと思うが実は多すぎるとかえって様々な問題が発生することがわかっている。それは、「地球温暖化」「台風地震、大雨による土砂災害の発生のしやすさ」「新しい気が育たなくなる」など様々な地球環境への影響が発生する。

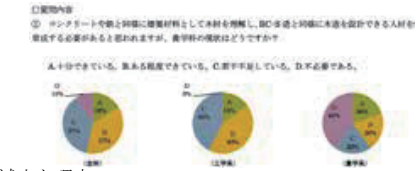
この事から森林問題を解決する為にも適度に間伐し、使っていく必要がある。

しかし、この問題に直面し、木造建築需要があるにも関わらず、未だ森林問題が解消されていない。原因の一つとして、建築に携わる技術者の中には木造建築を建てたくても知識が無く建築できない者が一定数存在していた。

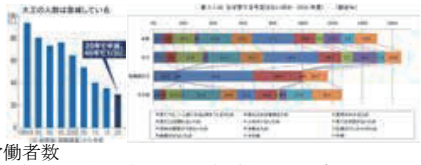
そこで本卒業制作では木造の知識のない技術者の育成をはじめ、日本の林業、木材産業の活性化へ貢献する人材育成を行う木造技術者学校を計画し、少しでも森林環境の改善に働きかけていきたい。

■現状

1. 教育者を対象とした木材の理解度と木造教育の必要性
全体の半数は木造を設計できる人材育成ができていると答えたが、約 4 割は若干不足していると答えた。このことから学生の段階で木造の知識が身についている者は多くはなく、大学等における木材の利活用や木造建築物による教育は必ずしも十分とは言えない。



2. 大工の減少と理由
国勢調査によると、大工の人数は 20 年時点で 29 万 7900 人。40 年前の 1980 年と比べると約 3 分の 1 の水準だ。建設業の労働環境に詳しい芝浦工業大学の蟹沢宏剛教授は「建設・土木作業員全体でも人数は減っているが、減り方はピーク期の 300 万人超から 200 万人弱へとおよそ 3 分の 2 の減少だ。大工の人数の落ち込みは著しい。また、現職で育てる予定がない大工で「将来の保障ができないため」が最も多く、次いで「人材がいないため」が多かった。



3. 林業労働者数
林業の高齢化率（65 歳以上の割合）は、令和 2 年（2020 年）は 25%で、全産業平均の 15%に比べ高い水準にある。一方で、若年者率（35 歳未満の割合）をみると、全産業が減少傾向にあるのに対し、林業では平成 2 年（1990 年）以降増加傾向で推移し、令和 2 年（2020 年）には 17%となっている。



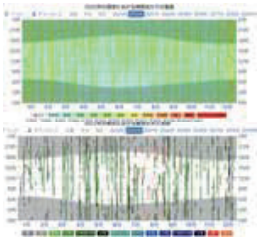
■選定敷地
奈良県吉野町は，日本有数の木材産地として発展してきた。林業の歴史は室町時代に始まり、江戸時代には酒樽の生産や昭和以降は建築材として発展し、長い間、日本の木の暮らしを支えてきたが、昭和 50 年代をピークに建築様式の多様化，代替品の増加により、木材需要は低迷が始まる。林業・木材業が基幹産業である吉野町では、産業の衰退、高齢化、過疎化が進み、空き家は 600 件を超えている。しかし、吉野の山々には高品質な木材が蓄積され、木材加工の技術が多数残っている。　本卒業制作では吉野の資産のもとで学習することにより、他にはない高品質な木の性質から職人の高い技術力を養え、木造に精通する高い技術者を育てることを期待する。

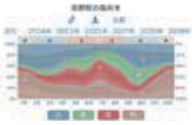






1. 吉野の気候風土
紀伊山地を中心とする南部は、山岳性気候で降水量が多く、年間降水量は 2000㎜ を超える。局地的な豪雨が起こることもあり、過去に何度も水害に襲われました。大台ヶ原周辺の山系は、種子島と並ぶ日本で有数の多雨地帯であることでも有名。また、年間を通して西側から風が吹く。





■自然環境の教育効果
1. 森林資源 ①資源利用 ②森林管理：
森林から得られる生物資源の利用を目的とした資源の育成、活用に関すること。
2. 自然環境 ③森林環境 ④生態系：
動植物などの生物、大気や水、土などの環境要素を含む森林生態系、および森林が存在することによって果たす環境機能に関すること。
3. ふれあい ⑤保健休養 ⑥野外活動：
森林の自然環境を活かして、五感を通じて森林に親しむ自然体験活動に関すること。 4. 地域文化 ⑦地域環境 ⑧暮らし：
森林や樹木を含む地域、山村および森林に関わる人の暮らしに関すること。

→森林での直接的な体験を通じて、循環型資源を育む地域の自然環境である森林について知り、 森林と関わる技能や態度、感性、社会性、課題 解決力などを養い、これからの社会の形成者として、持続的な社会の文化を担う人材育成を目指した教育

■コンセプト
・豊かな自然を感じさせる森林。その森林を守るためにはどうしたらいいだろうか。単に森林問題を考え、改善していくだけで本当に今ある森林やこれからの森林を綺麗に保全できるのかと疑問に思う。私は本当に必要なものはその本質である「木を大切に思う心」を持ち続けることではないだろうか。だからこそ、木の成長を間近で感じられる森林が必要であり、古くから木を大切に思い続けてきた場のもとで学ぶ必要性がある。そのような場所で学ぶことで、木とのつながりや持続可能な森林管理の大切さを感じることができ、それが将来の環境保護に寄与し、身近な森林で木の成長を見守り、その恩恵を実感することが、持続可能な未来を築くための第一歩となるのではないかと考えた。

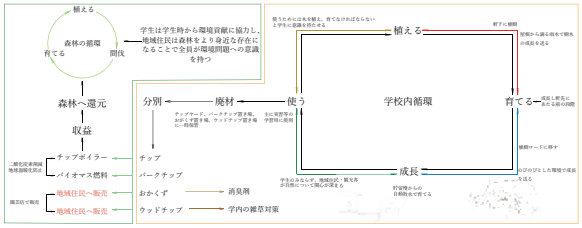




所在地：〒639-3111 奈良県吉野郡吉野町
主な用途：専修学校
敷地面積：19987.57㎡
建築面積：5035.62㎡
延床面積：5685.67㎡
キーワード：専修学校，環境保全、木造、寮、人の交流

Location ： 639-3111, yosinogun, yosinotyo, Nara
Main Use ： professional training college
Site Area ： 19987.57㎡
Building Floor Area ： 5035.62㎡
Total Floor Area ： 5685.67㎡
Keywords ： professional training college, Environmental Protectin wooden, dormitory・Alternating current

■木のプログラム



■カリキュラム

［基礎課程］
・年齢：18歳以上
・研修期間：一年
・定員：25人

◉研修内容
林業に必要な知識・技術を基礎から習得する。林業分野に就業する上で必要な特別教育及び技能講習修了証を研修する。
林業技術や林業機械の操作、森林路網な開設など、フィールドワークが約7割を占め、即戦力となる人材を養成する。

［短期課程］
・年齢：制限なし
・研修期間：1日～1ヶ月程度
・定員：講習内容により決定

◉研修内容
・木造建築の技術可能性、木材規格と木造建築設計の基本、構造計画・架構計画、木造の遮音と課題、建築学生向け集中講座。技術指導講習。
学び直し。資格取得講習。

［専攻課程］
・年齢：18歳以上
・研修期間：一年
・定員：40人

◉コース
森林管理コース
林業技術コース
木造設計コース
大工技能コース

◉共通研修内容
3コース全ての研修生が共通して学ぶ必要がある科目で、森林・林業経営や森林の持つ多面の機能など幅広い知識を習得できる。

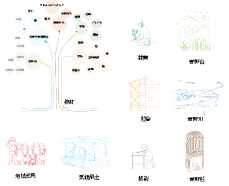
森林管理コース）
国や県の行っている森林、林業、木材産業に関する公共政策や補助制度等について学ぶ。森林資源を効率的に調査、管理するため、森林GISの活用を学ぶ。目標とする森林の姿をイメージし、森林の評価、施業プラン書の作成技術を学ぶ。

林業技術コース）
各種林業機械の構造を理解し、メンテナンス技術の習得や現場に応じた作業システムについて学ぶ。架線に関する技術を論理的かつ実践的に学ぶ。作業道を測量、計画し、自ら重機を操縦し開設する技術を学ぶ。

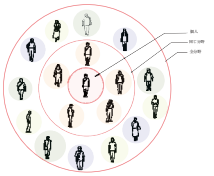
木造設計コース）
木造住宅から中大規模木造までの設計手法や省エネ対策、遮音・吸音・シロアリ対策、さらには建築物を作り上げていくプロセスを学ぶ。建物の構造設計や耐火設計、さらには建築基準法や消防法などを理解し、利用者の安全と建物を保護するための設計手法を学ぶ。木造住宅から中大規模木造までの施工方法や木材の流通の仕組み、さらには耐力壁の引力試験・耐力試験を行い、木材の物理性質を学ぶ。森林文化や森林の重要性、さらには植栽から伐倒などの造林作業を学び、実践することにより、建築材料として木材を使う意義、木を活かすことの重要性を学ぶことができる。

大工技能コース）
伝統的な木造建築の技能を習得。ノコギリ、カンナ、ノミといった主道具の扱い方を学ぶ。基本技術となる継手、仕口、刻み（加工）も練習し、大工の基礎力を培う。住宅一棟の組み立てに挑戦し、図面や構造の理解、チームワークを経験する。現役の親方からの講習により、本物の技術と仕事力を感じる。

≪計画概要≫
■地域、自然、学校自体が教材となる。
・地域の高い技術力や他にはない高品質な木材を生産している環境下や校舎の構造、機能、建築計画など学生にとって学びの多い学校を目指す。学生生活で吉野の良さを存分に学ぶことで将来的に吉野の元で職に就き、吉野の林業の継承や地域活性化に貢献することも視野にしている。



■領域問わず交流できる場を生む
・個から中くらいの個、さらに大きな個へ輪を広げる。
・本来、各分野の交流が起き、情報共有を行うが他分野の学生がいることでお互いに視野が広がりいい刺激になる。
・将来的にお互いが協力し合える関係性を築き、全員が森林問題に貢献しやすい体制を学生時に形成しておく。



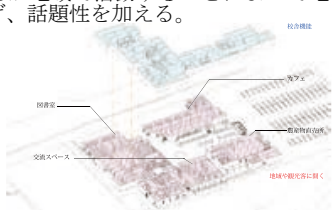


断面図 A-A’

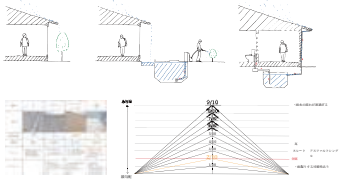


断面図 B-B’

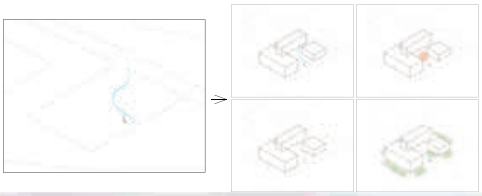
■地域住民や観光客に向けて開く
・学校自体が地域に開くことにより、親しみやすさを感じ、地域と協力しやすい関係性にする。
・連携する地域にとっては地域問題を学問的知見に基づいてアドバイスを受けることによって社会問題の解決へのアプローチを得られる。それに加えて、調査や実習を受けて、実査の学生などが地域で活動することによって地域の賑わいの創出につなげ、話題性を加える。



■吉野町である気候風土である降水量の多さに配慮した計画
本計画地は降水量が非常に多く、過去に水害に襲われた経験もある。そこで雨水を活用し、樹木の自動散水やトイレの中水に利用することを計画した。計画する際に屋根から滴る雨水が激しいと施設利用者への悪影響に繋がることから屋根勾配を緩くした。また、雨水による雨漏りや錆に配慮して、防水性の高い屋根材料を考えた。



■中庭の計画
北西から吹く気持ちのいい風をアプローチをする際に感じやれるように風を誘導するような配置計画を考えた。また、同時に中庭の中心性や防犯面に配慮した視線計画、安らぎの場を計画した。





一階平面図



俯瞰で見る　　中庭で見る　　ゼミの様子

商店街で広がるコミュニティ

学籍番号　K20203
名　　前　朝川真哉
指導教員　森重教授

A community spreading in the shopping street

Student Number　K20203
Name　ASAKAWA SHINYA
Supervisor MORISHIGE Sachiko



図１　各メインパース

1. はじめに

現在、全国の商店街は中小企業庁の調査によると、わずかではあるが平均の店舗数は増加傾向にある。一方で、コロナウイルス等による影響で来街者数の減少や売上高の減少、空き店舗の影響が出ている。

今回選定した花園商店街では平成 26 年から令和元年にかけて、空き店舗数が 59 から 67、空き家数は 3 から変化なし、空き地数が 4 から 9 へと変化している。

2. 敷地の調査

大阪府東大阪市にある花園商店街は周囲が整形になっているのに対して北東方向へ流れるような道になっている。また、坂が所々に点在している。このような地形になったのは、昔この地に川が流れていた名残りであり、現在の河内花園駅にあたる場所が、玉串川・吉田川・菱江川の三つが合流する地点になっていた。

この地点を中心に発展していき、昭和 59 年にピークを迎え、店舗数は 327 店あった。しかし、平成 21 年の駅前再開発による商店街の解体、再編の影響で令和元年には店舗数が 135 店まで減少した。また、昭和 59 年時点では最寄り品の業種比率が高かったが、令和元年ではその比率が 10%程まで低下している。
それに対して、サービス業は昭和 59 年から比べて急増している。

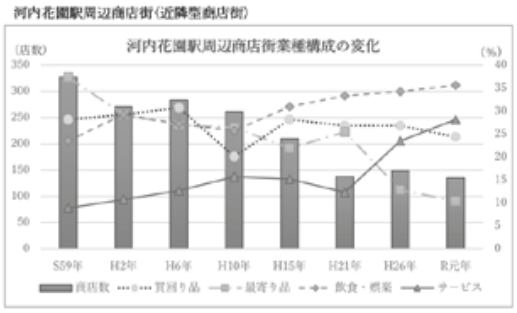


図２　河内花園駅周辺商店街業種構成の変化

昭和 36 年には花園商店街にアーケードが設置され栄えていたが、平成 30 年に台風の影響でアーケード撤去、平成 31 年にリニューアルされて現在の花園商店街となる。

3. 計画概要

まず、現在の花園商店街は高齢者が世間話をしていたり、家族連れや学生たちが少し北東に進んだところにある花園中央公園への通り道として利用している人が多く感じる。また、花園商店街は河内花園駅の北出口正面にあるパザパ花園（ショッピングモール）を通り抜けた先にあり、電車通学・通勤者の行き帰りの道として利用されていることもある。

花園商店街の北東にある花園中央公園にはラグビー場が備わっていることもあり、遠方から訪れる人もいるが、そのほとんどの人が河内花園駅の隣駅であり花園中央公園の最寄り駅にあたる東花園駅から向かう人が多く、花園商店街を通り道として使う人のほとんどが駅周辺に住む人と推測される。わざわざ花園商店街を通って行くメリットが、車通りが

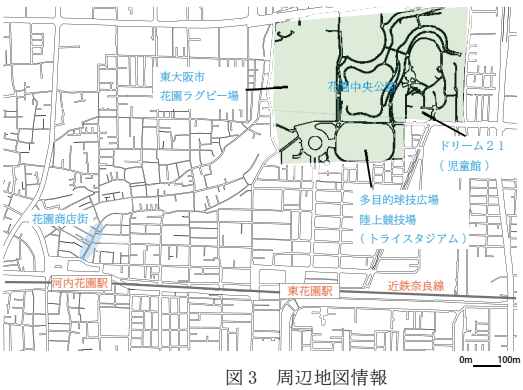


図３　周辺地図情報

所在地：大阪府東大阪市吉田 1-7
主な用途：商店街
敷地面積：279.5㎡,338.4㎡,160.5㎡
建築面積：180 ㎡,195.75 ㎡,56 ㎡
延床面積：220 ㎡,317 ㎡,103.3 ㎡

Location ： 1-7,Yoshida,Higashiosaka City,Osaka
Main Use ： Shopping street
Site Area ： 279.5㎡,338.4㎡,160.5㎡
Building Floor Area ：180 ㎡,195.75 ㎡,56 ㎡
Total Floor Area ： 220 ㎡,317 ㎡,103.3 ㎡
Keywords ： Shopping street,community

キーワード：商店街、コミュニティ

少ないというだけのため、何か利点を増やせないかと考えた。

そこで遠方から来る人や普段あまり花園商店街を利用しない人を呼び込むために商店街として様々な店を展開するのではなく、周辺住民がコミュニティを形成できるように計画地 1,2,3 で連携して経営する計画を考えた。

計画地 1 では事務所・ギャラリー・カフェの経営を計画し、計画地 2 では共用キッチン・コミュニティスペース・広場を計画し、計画地 3 では子どもライブラリや遊び場の運営を計画した。

それぞれは計画地 1 の事務所が運営するように考えており、計画地 2 では事務所に申し込むことでイベントを開催することも可能で、周辺住民のコミュニティ形成に役立つと考えている。また、ギャラリーも事務所に申し込むことで個人の作品も自由に展示できるようになっている。子どもライブラリも事務所が鍵を管理し、主に朝から夕方まで開放されている。

計画地 2 はイベント開催がなくても利用できる空間とし、普段から商店街を利用している人が休憩場所として利用したり人を集めて談笑する場所として利用することを想定している。

計画地 3 は子どもの利用をメインとし、ライブラリでは本を読んだり勉強するスペースになっている。屋内と屋外の広場があるため、屋内で友達とゲームをしたり屋外で遊んだりできる。これによって子どもたちでのコミュニティ形成を狙いとしている。

出典

東大阪市商業実態調査結果（令和２年３月）

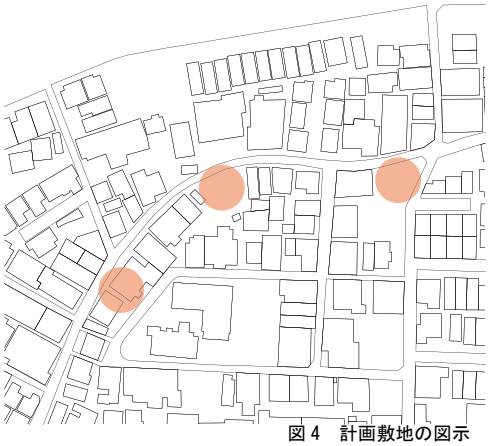


図４　計画敷地の図示

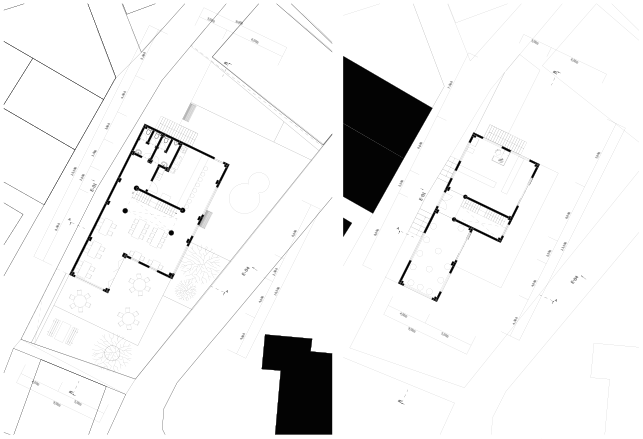
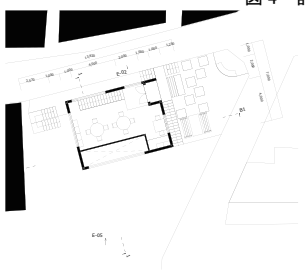
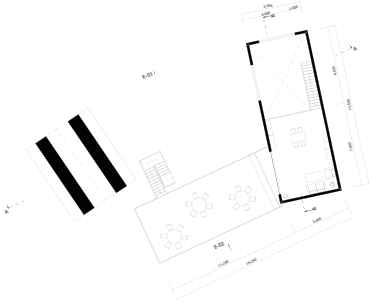


図４ 計画地１　1,2 階平面図





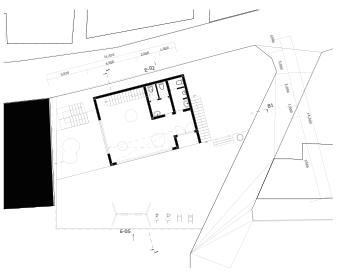


図４ 計画地３　1,2 階平面図

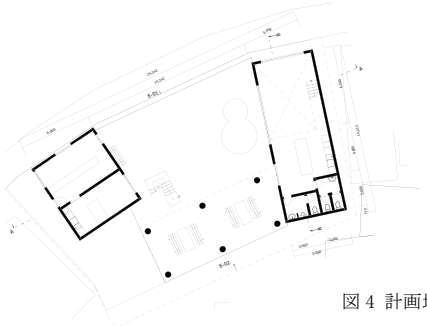


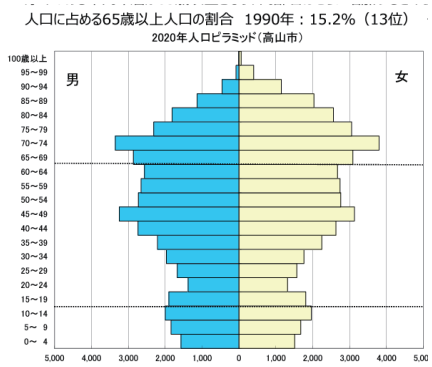
図４ 計画地２　1,2 階平面図

畑と共に暮らす　～農業でつながる～

学籍番号　K20205
名　　前　阿近結衣
指導教員　根來宏典

1. 背景と目的

私の地元である岐阜県高山市は、観光地として人気がある。毎年多くの観光客が訪れており、2022 年の観光客数は 300 万人を超えている。しかし一方で、若者の流出によって人口が減少し、高齢化が進行してしまっている。図 1 の人口ピラミッドを見ると、20 ～ 24 歳の人口が急激に減っていること、高齢者の割合が高いことが分かる。国勢調査によると、高山市の 65 歳以上の割合は 33.4%という。2020 年の日本全体の高齢化率は 28.8%であるため、かなり高いと言える。これらの問題を解決し、高山市をより活性化させるための方法の一つとして、移住者を増やすべきなのではないかと考えた。

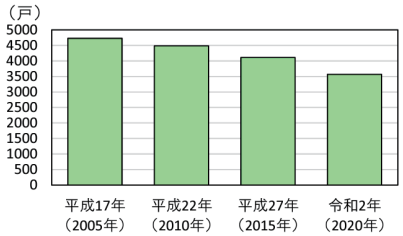


chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.pref.gifu.lg.jp/uploaded/attachment/353493.pdf
図 1　総務省「2020 年国勢調査（不詳補完値）」

そこで、私は卒業製作として、「移住者のための集合住宅」を設計する。しかし、私は移住は気軽に出来るものではないと思っている。移住する際の最も大きな問題は、移住先での仕事だ。移住をしたいと思っても、移住先で新しく仕事を探すのは困難であり、それが理由で移住を諦めてしまう人もいるかもしれない。そこで、高山市に興味を持った人が気軽に移住ができるように、仕事場を兼ねた住宅を計画する。

高山市は、農業が盛んである。しかし近年、農家の高齢化や後継者不足により、農家の数が減少している。そこで、本設計では、「農業」を取り上げる。

平成17年（2005年）	平成22年（2010年）	平成27年（2015年）	令和2年（2020年）
4730 戸	4486 戸	4112 戸	3569 戸



chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.pref.gifu.lg.jp/uploaded/attachment/257040.pdf
図 2　総農家数のうつり変わり

Live with the fields　～Connected to agriculture～

Student Number　K20205
Name　AJIKA Yui
Supervisor　NEGORO Hironori

住宅とカフェを設計し、敷地内の畑でとれた野菜を使った料理を、併設されたカフェで提供する。高山市でとれた農産物はブランド化されており、「飛騨ブランド」と呼ばれている。地産地消に貢献し、そんな「飛騨ブランド」の良さをこのカフェを通して、多くの人に知ってもらえたらと思う。

移住者は農家として働くことができるため、移住者の住む場所と働く場所が同時に提供されることになり、移住先での仕事の問題は解消される。また、移住者の対象は家族連れとし、若者に農業を引き継いでもらうことを目的とする。

2. 敷地

敷地を選定するうえで、農業がしやすい場所であること、自然が豊かな場所であることを重視した。

今回選定した敷地は、上野町という場所である。敷地は高山駅から車で 10 分ほどの場所に位置しており、周辺には住宅や田畑が広がっている。車で 5 分ほど走れば、スーパーやコンビニに行くことができるため、生活するには便利な場所である。

敷地の西側には公民館があり、公民館の前にはバス停がある。移住者と地域住民のコミュニケーションの取りやすい環境にするために、公民館とカフェのつながりについても考えた。



図 3　敷地周辺の地図

3. 計画概要

3.-1 プログラム

入居者は 18 歳以下の子供を持つ家族連れ 6 世帯を対象とする。移住者は敷地内の畑で農業をし、カフェで提供する分と自分たちが普段食べる分を栽培する。また、それぞれの住宅にある趣味スペースで仕事をすることができる。カフェは地主が経営し、移住者は兼業農家として働く。本設計では、移住者の職業として、塾講師、ケーキ屋、フリーライター、ネイリスト、ハンドメイド作家、Web デザイナーと設定した。

所在地：岐阜県高山市上野町
主な用途：集合住宅、カフェ
敷地面積：2479.35㎡
建築面積：880.26㎡
延床面積：1273.69㎡
キーワード：農業、移住

Location ： Uwano-cho,Takayama-shi,Gifu
Main Use ： apartment,cafe
Site Area ： 2479.35㎡
Building Floor Area ： 880.26㎡
Total Floor Area ： 1273.69㎡
Keywords ： Agriculture,emigration

敷地周辺には田畑が多くあるため、このあたりに住んでいる農家も多い。移住者は農業についての知識があまりないと思う。そこで、近隣の農家に農業について教えてもらいながらコミュニケーションを取ることで、地域とのつながりが生まれる。市外から引っ越してきた移住者は、地域住民とのつながりがあることで、安心して暮らすことが出来る。農業を通して、地域とのつながりを深めていけたらと思う。

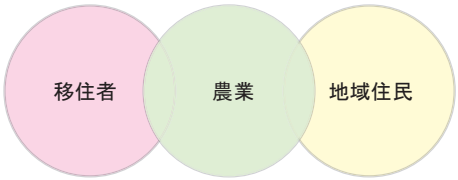


図４　ダイアグラム１

3.-2　配置計画

敷地の西側にある公民館とカフェにつながりをもたらすために、カフェは西側に配置する。西側にパブリックな空間、東側にプライベートな空間を配置することで、カフェと住宅を緩やかに区切ることができる。カフェは、仕事の打合せで利用したり、移住者同士、移住者と近隣住民のコミュニケーションの場となったり、というように移住者にも利用してもらいたいと考えている。公民館でイベントを行う時など、人が多く集まる機会があったら、カフェと行き来ができることで、移住者と地域住民の関係をより深くすることができると思う。

3.-3　平面計画

住宅を設計するうえで、高山市の伝統的な町家を参考にした。高山市の町家にはさまざまな形があるが、今回は京町家のような細長い住宅を選んだ。特徴も通じるところがある。

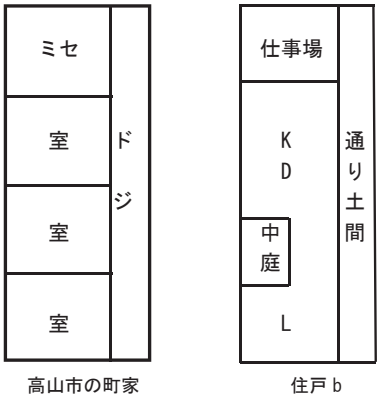


図５　ダイアグラム２

道路に面した室は「ミセ」と呼ばれており、当時は商品を陳列していた。そして玄関から反対側まで「ドジ」と呼ばれる京町家の通り土間のようなものが続いており、土足のまま裏まで行くことができる。「ドジ」に面して室や中庭が配置されており、奥には土蔵と呼ばれる道具を収納する場所がある。屋根は切妻で、京町家と同じ平入りである。

本計画にある住宅では、「ミセ」をそれぞれの仕事場とし、南北に「ドジ」（＝通り土間）を配置した。

本設計のコンセプトは「畑で暮らす」である。親たちは仕事として農業をするが、子供たちも畑仕事を手伝うことで、農業に興味を持ってもらいたいと考えている。そのため、畑をそれぞれの住戸で振り分け、住宅の南側に配置し、畑と住宅を一体化させた。

また、住宅に通り土間を設け、玄関から反対側の畑を土足のまま行き来できるようにした。通り土間はリビングにも隣接しているため、畑と住宅をすぐ行き来できる。この状況を作ることで、農業をより身近に感じることができる。

私は、前期に「家族のコミュニケーションを促す空間構成」について研究した。その中から吹き抜け、スキップフロア、中庭などを設けることが効果的であると学んだ。そこで、それらを設計に取り入れ、家族とコミュニケーションを取りやすく、快適に暮らせる住宅にしたいと思った。

4. まとめ



図６　外観パース

兼業農家のための集合住宅を設計し、若者に農業を引き継いでもらう。また、農業やカフェを通して人と人とのつながりをもたらす。そして、この建築が高山市の活性化につながればと思っている。

≪参考≫

https://www.hidatakayama.or.jp/watch/furuimachinami/

価値の共創

学籍番号　K20207
名　　前　天田麟太朗
指導教員　山内貴博

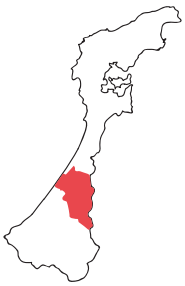
Co-creation of value

Student Number　K20207
Name　AMADA Rintaro
Supervisor　YAMAUTI Takahiro

はじめに

石川県金沢市には、全国最多となる４か所の国の重要伝統的建造物群保存地区がある。その内 3 つは「茶屋街」と呼ばれ、当時の建造物を残したまま、和菓子、伝統工芸品、雑貨などを扱うお店やカフェが充実しており、美しい出格子と石畳が続く風情のある街並みの中でショッピングや食事を楽しむことができる観光地として賑わっている。

金沢市の茶屋街はかつて文政 3 年（1820）に遊郭として栄えた建造物群であり、遊郭であったために歴史上幾度もの弾圧や取り締まりを受けてきた。茶屋街に見られる迷路性のある路地空間や塀、垣、町屋の格子である虫籠、簾虫籠などは、隠れて移動する際に都合が良かったり、屋内から屋外を観察する際に都合がよい物であり、かつて遊郭であった時の生活の様子を感じとることができる。



研究目的・背景

観光客や観光客を受け入れるための開発などが、地域や住民にもたらす弊害を観光公害（ オーバーツーリズム ）という。観光公害は主に、住む人と訪れる人の価値観の違いにより起こるものであると考察する。

価値観のずれを無くすために観光地に求められることは、観光客の観光地に対するイメージや期待を統一することである。これをするにあたって、重要となるのが独自性である。独自性は様々な要素で構成され、高ければ高いほど他観光地との差別化、イメージや期待の統一に繋がる。

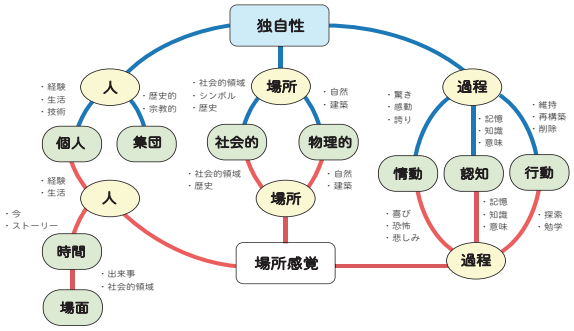
一方で、価値観のずれを無くすために観光客に求められるものは、場所感覚である。場所感覚は、場所の意味を識別する能力で、そこで何が起こり、どんな行動が求められるかが、頭でわかる、気持ちで感じる、それに応じて行動するといった「この場所にどんな意味があるのかが分かる」という感覚である。

独自性、場所感覚を構成する要素は共通する部分が多いため、独自性を高めることは場所感覚を明確にさせる要素になり、訪れる人の場所感覚は観光地の独自性を高める要素になるといった価値の共創関係を持つ。

住む人と訪れる人が価値を共創するまちとして、金沢の自然・文化や市民生活を尊重し、 旅先での意識や行動に責任を持つ旅行者と、 足元にある地域資源を見直し、 旅行者に親近感を持つ市民が新たな関係性を築き、 金沢が大切にしてきた文化や暮らしの価値を、住む人と訪れる人がともに高め合うことができる場所を計画する。



主計町茶屋街



独自性・場所感覚の３　部モデル

敷地選定

敷地は石川県金沢市　主計町茶屋街。

主計町茶屋街の大きな特徴は、町全体が小さく纏まり、細い路地に沿って密集して茶屋建築が建てられている事で、さらに地形により一段低い土地にある事から「あかり坂」と「暗がり坂」と呼ばれる石段をかいして町中に入る様子は日常と非日常を隔てる演出効果となり、一掃茶屋街の雰囲気を醸し出している。
住む人との距離が近く、市内の茶屋街の中で最も歴史を感じることができる事からここを敷地に選定した。



暗がり坂



あかり坂



選定周辺及びその周辺

敷地
主計町茶屋街

所在地： 石川県金沢市主計町
主な用途：複合型宿泊施設
敷地面積：707m^2
建築面積：224m^2
延床面積：670.6m^2
キーワード：観光・路地・歴史・町屋

Location ： Ishikawaken Kanazawashi Kazuemachi
Main Use ： Complex accommodation facility
Site Area ： 707m^2
Building Floor Area ： 224m^2
Total Floor Area ： 670.6m^2
Keywords ： Sightseeing, Alley, History,Machiya,

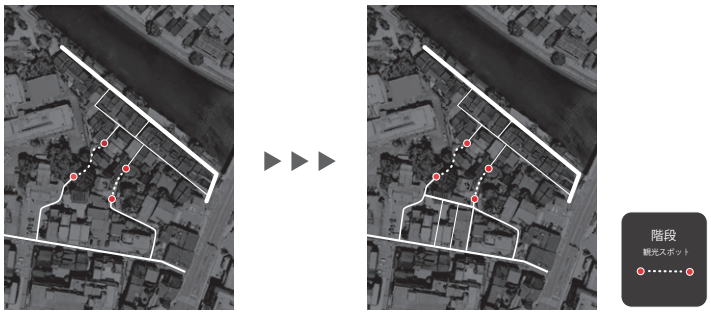
計画内容

・路地の追加

主計町茶屋街にある観光スポット「あかり坂」「暗がり坂」は階段となっており、登った先でそれぞれを繋ぐ道がないため同じ道を降りて戻る必要がある。さらに、路地が非常に狭くいため観光ルートとしての回遊性が良くない。そこで主計町茶屋街の観光ルートに回遊性を持たせるために路地を追加する。



路地を追加するにあたって、路地に隣接するように書店を配置することで訪れる人が観光地についての知識を得られる機会を近場に設ける。書店は訪れる人に静的な印象を与え、場所感覚を誘発させる効果がある。
路地をも町屋の一部に見立て、路地の中に書店との共有中庭を配置することで町屋の屋内からみる景観を再現する。通行の際に町屋の雰囲気を感じることができる。





・宿泊施設　ゲストハウス　三棟

徒歩圏内に金沢市の観光地が多く存在するため、宿泊施設は活動拠点にもなり需要が高く、周辺の飲食店やショップとの連携がとれる。茶屋街は町屋の建物群であるため、一棟を貸し出す形式の宿泊施設が連続する景観が自然であり、纏まっていることで管理がしやすい。
ゲストハウスの特徴として、１人から大人数まで様々な形で活用することが可能である。そこで、一定の層だけでなく様々な層の訪れる人が利用することで観光で感じ取った金沢の良さを広く伝えることを目的とし、隠れ家のような宿に暮らしながら、人々の暮らしを肌で感じ、様々な体験を通して伝統文化を知る旅を提案する。
町屋タイプのゲストハウスでは実際の建物の造りでの暮らしを体験することができ、こうした経験は物理的な体験のほかに思い出や学習にもなり、観光地に対する場所感覚を明確にさせる要素となる。

・書店

書店は、主計町茶屋街を始めとした金沢市の歴史を書いた本などを展示し、訪れる人に対して観光地への理解を深める機会を与える物理的な場所となるほか、静的な雰囲気や歴史的な雰囲気を持つため、訪れる人の場所感覚を誘発することができる社会的な場所にもなる。
観光スポットを繋ぐ路地に面しており、路地と共有する中庭がある。中庭は各階から虫籠、簾虫籠を通して覗くことができる。虫籠、簾虫籠は明かりを取り入れつつ、外からの視界を遮る機能があるため、落ち着いた空間を生み出す。





参考文献

統計からみた石川県の観光　令和 4 年観光入り込み状況について　金沢景観　５０年の歩み
https://digilib.city.kanazawa.ishikawa.jp/preview/pdf/Cga04QAAA

金沢市持続可能な観光振興推進計画 2021
https://www4.city.kanazawa.lg.jp/material/files/group /32/gaiyou_93163944.pdf

祇園祭　山鉾の構造に関する研究

学籍番号　K20208
名　　前　荒木汐羽
指導教員　井上年和

網隠し　かむろ柱　四本柱
真木　縄がらみ　おおでこ

1 章　研究概要

1 節　研究背景

京都祇園祭りは、日本三大祭や京都三大祭の一つで、八坂神社の祭礼として有名だ。特に山鉾行事は、国の有形と無形の文化遺産に指定され、ユネスコ無形文化遺産にも登録されている。山鉾には大まかに山と鉾の 2 つの種類がある。

2 節　研究目的

山鉾の中でさらに分別化されており、それは構造の違いなのではないか。鉾建ては数日かけて完成する一方で、山建てはわずか 1 日で組み上げられるとされている。これらの時間差には構造の違いが影響している可能性があると考える。

3 節　研究方法

南観音山に対する実測調査や山建ての見学、1968 年と 2020 年に出版された書籍から得た情報を基に、祇園祭りの山鉾に関する情報をまとめる。

4 節　先行研究

先行の研究では、鉾の構造が伝統軸組工法に基づく建築の一環であり、京町家などと同様の特徴を共有していることが明らかにされている。これにより、鉾の建築が日本の伝統的な建築と深く結びついていることが示唆されている。鉾は柔構造で曲げ耐力を活かすようにデザインされ、木造軸組を補強する縄がらみが京町家の土壁と共通している。

しかし、これまでの研究では山と鉾の構造の微細な違いに焦点が当てられておらず、山と鉾それぞれがどのような工夫や特異性を持っているかについての詳細な研究が不足している。そこで、本研究では実測調査を通じて山と鉾の構造の違いを明らかにし、それぞれの役割や意義がどのように変容しているかを解明する。

2 章　祇園祭

1 節　発祥

869 年に疫病が蔓延し、当時の国民は平癒退散の術もなく、窮状は極めて悲壮だった。そのため、国民たちは神に頼ることしかできず、その結果、長さ 2 丈ほどの鉾（矛）を、日本 66 か国の数に因んで、六十六本が京の町角に建てた。これが祇園御霊会・祇園会の始まりとされている。当時はみこしを担ぐことも一般的ではなかったため、この六十六本の鉾が祇園祭りのもととなり、神輿動産のはじまりとも言われている。これらが、祇園祭りの源流となり、1500 年にわたり、山鉾風流と呼ばれる様々な行事が展開され、継承されてきた。その後も、520 年以上にわたり、時代とともに変化し発展してき、歴史と伝統を大切に継承されている。

2 節　時代

1376 年、高大鉾が倒れ、老尼が圧死した。この出来事は当時の鉾の規模が人の生命に影響を与えるほどであったことがわかる。

1467 年～1477 年まで応仁の乱により中止。

1500 年に 33 年ぶりに祇園会が復興。山鉾 36 基が出る際にくじを取りこれがくじ取り式の始まり。

1582 年本能寺の変により祇園会は 11 月に延期される。

1708 年京中の大火により橋弁慶山など多くの山鉾が罹災。

1788 年大火により函谷鉾、菊水鉾、大船鉾など多くの山鉾が罹災。前祭は太子山、占出山、蟷螂山、四条傘鉾（子供囃子なし）、山伏山、木賊山、綾傘鉾のみ。

後祭は橋弁慶山、八幡山、役行者山、鯉山、鈴鹿山、鷹山（車などが焼失、舁山として）のみ。

1789 年は前祭では長刀鉾、太子山、綾傘鉾、四条傘鉾、霰天神山、月鉾、山伏山、蟷螂山、木賊山、占出山、鶏鉾の順で巡行。後祭は橋弁慶山、八幡山、鈴鹿山、役行者山、黒主山、鯉山、北観音山、鷹山の順で巡行。（北観音山は車方より車を借用）

1792 年船鉾が復興。北観音山は非番だったが出山。

1794 年保昌山、白楽天山、岩戸山が復興。北観音山は非番だったが出山。岩戸山の大屋根が完成。

1805 年孟宗山が復興。寺町綾小路下るで長刀鉾が小破損。

1808 年事故のため月鉾不参加。

1826 年鷹山が大雨に遭い装飾品等が濡れた為この年限り巡行不参加。

1830 年大地震。長刀鉾の土蔵が破損。

江戸時代には 3 度の大火災にみまわれたがその都度再興しより華麗な山鉾としてよみがえり、現在に至る。

祇園祭の山鉾行事は国の有形文化財、無形文化財の指定を受け、2009 年にはユネスコの無形文化遺産にも登録された。

3 節　山鉾の概要

1 項　鉾

6 基の鉾が前祭で巡行する。6 基の鉾には全て稚児が乗っている。

2 項　曳山

曳山は 4 基存在し、岩戸山は前祭で、他の曳山は後祭に巡行する。岩戸山は古い起源を持ち、応仁の乱以前から祇園祭りの巡行に参加していた。江戸時代には大屋根を持つ形に進化し、祭りの変遷を物語っている。北観音山と南観音山は 1 年ごとに交代で巡行し、江戸時代中頃にはそれぞれの変遷を経て現在の姿になった。

3 項　舁山

20 基の舁山が存在し、そのうち 13 基が前祭で巡行し、残りの 7 基が後祭に巡行する。

4 項　船鉾

2 基の船鉾が存在する。船鉾が前祭、大船鉾が後祭で巡行。
5 項　傘鉾
2 基、存在している。
綾傘鉾の形状は、祇園祭に登場する山鉾の原初形態とされる。
4 節　山鉾の分布
現在の巡行ルートは前祭が反時計回りに後祭が時計回りに巡行する。



図 1　前祭の山鉾の分布図

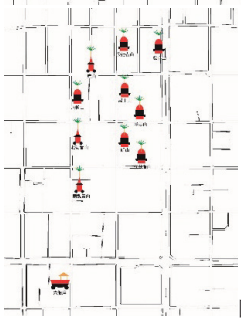


図 2　後祭の山鉾の分布図

3 章　各山鉾の構造
1 節　構造形式と意匠
1 項　鉾
鉾は大まかに 5 つの部分に分類される。主な構成要素は、櫓（胴組）本体、屋根、真木、懸装品に分けられる。
櫓本体は鉾の中心であり、基本的な骨組みを形成する。これは鉾の安定性や構造の中核を担い、バランスを維持。真木は鉾の高さを決定し、横揺れを制御する要素だ。特にかむろ柱が真木を支え、激しい横揺れを抑える工夫が施されている。
2 項　曳山
曳山は、やぐらの上に配置された舞台が特徴的だ。この舞台は四本の柱に支えられている。舞台の四本柱が屋根を支える構造により、曳山が安定する。
鉾と異なり、曳山ではかむろ柱が存在せず、屋根から伸びる柱が重厚な構造を支えている。
3 項　舁山
舁山はそれぞれ異なる特徴を持ちつつも、舞台の構造においては多くの共通点がある。舞台には真木の有無や屋根の形状が異なる場合もあるが、舁き棒の配置には一貫性があり、前後に 6 本、左右に 2 本取り付けられている。この配置は、山を持ち上げる際のバランスを取り、祭りの安定性とパフォーマンスの成功に寄与している。
4 項　船鉾
船鉾は独特の構造を有し、前後のハネ木が船体を支え、バランスを取っている。安全性を確保するために組合せ柱で補強され、しっかりとした基盤を提供している。後方には艫屋形が配置され、この特有の構造が船鉾の風格あるデザインを完成させている。
5 項　傘鉾
鉾は、大きな傘を中心に据えている。綾傘鉾は祇園祭りにおける山鉾の原初形態とされ、舞台部分は、舁山と共通の構造になっている。

2 節　南観音山の組み方
組み立ては、宮大工の緻密な技術が伝統的なやぐら構築に活かされ、ほぞさしや縄がらみなどの技法が使われている。四本柱の配置や角度も町ごとに異なり、独自性が感じられる。真木は真木台から伸び、先端には松の継ぎ足しが施されている。この特異な構造は縄がらみ技法により支えられ、真木の揺れを制御する。結びの部分ではきしみを吸収し、部材を傷めにくい特長がある。結び方は山鉾ごとに異なり、手伝い方が縄を締め込む作業を木づちで進める。真木の差し込みにはおおでこが使われ、人力でやぐら部分を横に傾ける作業も行われる。真木の先端に調節された松の枝が取り付けられる。それが終わると、再びおおでこが使われてやぐら部分が起こされる。石持を最下段の貫に取り付け、その下に車軸を組み立てる。この工程で、鉾の安定性を高め重心を下げ、タイヤを取り付ける。これにより、曳山が巡行中でも安定したバランスを維持できる。その後、タイヤが取り付けられ、基本的な鉾の構造が完成する。その後屋根の取り付けが行われ、最終的な仕上げとして美しい装飾が施される。

4 章　結論
1 節　結論
山鉾の進化において、山と鉾の形態が主に舁山と鉾に分別され、それぞれが時代の変遷に伴って形を変えてきた。舁山では初めは比較的シンプルな形状から始まり、時が経つにつれて屋根の取り付けや鉾に近い要素の導入などにより、その外観や構造が大きく変化した。そのため、外観上では、舁山が鉾に近づくにつれ、特に屋根の形態や飾りの複雑さが顕著になり、その規模も急速に大きくなった。曳山においても、舁山の進化が重要な要素となり、鉾の特徴を受け継ぎつつも独自の進化を遂げた。
構造の違いでも、鉾は大きく高いため、真木の長さや柱の配置が複雑化し、揺れに対する安定性が向上している。組み立てる時間についても、見学に行った際、舁山は 1 日で組み上がるが、曳山は 2 日で組み上がるという差異があった。これは舁山が発展し、鉾に近い形状を持つ一方で、その複雑な構造が組み立てに一層の手間と時間を必要とすることを示している。

参考文献
『京都祇園祭～町衆の情熱・山鉾の風流』京都文化博物館　2020 年
『祇園祭　山鉾実測』1968 年
『祇園祭-河原町通巡行記念』昭和 36 年

天引村倶楽部における改修履歴に関する研究

学籍番号　K20209
名　　前　有川芽似
指導教員　井上年和

古民家　天引村　改修
復原　町おこし　民家類型

1-1. 研究目的

近年では都市化が進む地域も多く、先人の創意工夫が見られる歴史がある民家を維持することは難しくなりつつある。また、現在残っている民家の全てにおいて十分な調査が行われているわけではない。 本研究では、古民家の歴史や改修履歴を調査し、建物の文化的価値を明らかにすることで、 古民家を残すことに貢献することが目的である。 調査対象は、古民家を残し地域住民の交流の場として活用するため DIY で改修を進めている天引村倶楽部の主屋とする。

1-2. 研究方法

天引村についての史料をまとめた後、現地で平面構成、構造、外観、建物の特徴を調査する。その後、京都府南丹市園部町近辺の民家の類型や分布をまとめ、痕跡から復原考証を行い、改修履歴を確認する。それを基に建立当初の模型製作を行う。

1-3. 天引村について

天引村は京都府南丹市園部町に位置し、篠山、園部、亀岡の分岐点である。京都府亀岡市から兵庫県丹波篠山市を経由し兵庫県姫路市まで続く国道 372 号沿い位置しており、平安時代には山陰道と呼ばれた篠山街道沿いに民家が建ち並ぶ。現在約 150 名が生活している。

景観の特徴として、山を背に旧街道の北側に民家が建ち並び、南側には田畑が広がっており、石垣が積まれていることから、南側の田畑が氾濫原であった可能性がある。

次に、天引村の記載がある史料を下表にまとめた。

表 1. 天引村についての史料

名称	所蔵	作成年
『元禄国絵図丹波国』	国立公文書館	元禄15年
『丹波国絵図』	西尾市岩瀬文庫	1704年
『丹波国大絵図』	西尾市岩瀬文庫	1799年
『天保国絵図丹波国』	国立公文書館	天保9年
『園部町史』	国立国会図書館	1981年
『改正京都府管轄便覧-丹波三群国-』	国立国会図書館	不明
『明治十九年　京都府令　三』	国立国会図書館	1886年
『園部』	国際日本文化研究センター	大正9年

これらの史料から、古くから天引村が上天引と下天引に分かれていることや、交通の要所であったことが分かった。

壇ノ浦の戦いで、源義経(1159-1189)が天引村を通ったと言われており、源義経がいた群馬県の天引村からついた名前という説もある。

Research on the restoration history of AMABIKIMURA CLUB
Mei Arikawa

町おこしの活動として、特産品が購入できる屋台が出店する『むくむく市』が月に 2 回開催される。また、6 月は蛍が見ごろであり、この時期に『ほたるコンサート』が開催される。

さらに、葺きおろしの屋根が特徴的で、古くから薬師如来像が祀られている『薬師堂』が村のランドマークになっており、イベント時にはライトアップも行っている。

1-4. 天引村倶楽部について



図 1. 天引村倶楽部外観

天引村倶楽部は京都府南丹市園部町天引下北 3-1 に位置する。天引村倶楽部は上天引にある。

2022 年 11 月 01 日に設立し、2023 年 04 月 30 日に古民家をオープンした。

天引村倶楽部はこの古民家を人が集まれる村の拠点とすべく、所有者を中心に DIY による改修を進めている。

2. 天引村倶楽部の建築

現在の平面構成は下図のような三間取りである。

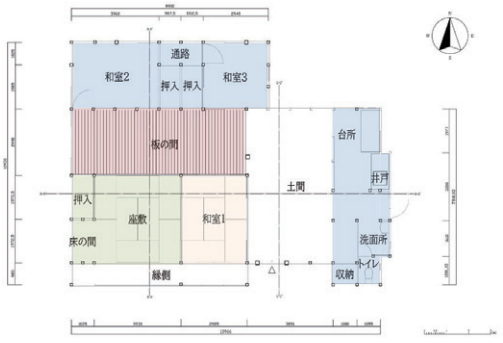


図 2. 天引村倶楽部-現状平面図

土間はワークショップ形式で改修が行われた。(図 3)

増築部の和室は、雨水による腐食が進んでおり、著しい劣化が確認された。(図 5、図 6)

小屋裏では茅葺の屋根の構造を確認できる。(図 7)

現在は屋根表面に鉄板が設置されている。(図 8)


図 3. 天引村倶楽部-土間


図 4. 天引村倶楽部-座敷


図 5. 天引村倶楽部-和室 1


図 6. 天引村倶楽部-和室 2


図 7. 天引村倶楽部-小屋裏


図 8. 天引村倶楽部-西側外観

3-1. 復原考証

痕跡調査の結果、下図のような痕跡が確認できた。(図 9)

これによって、主屋東側と北側居室は増築であり、建立当初はヨコ喰違い四間取りであったことが分かった。(図 10)

また、当初は葺きおろしの構造である。(図 11)

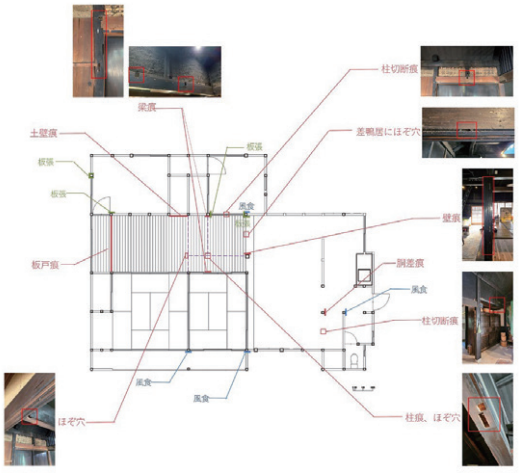


図 9. 痕跡調査結果

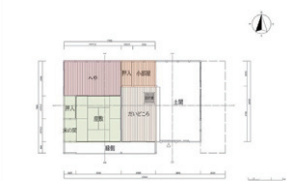


図 10. 天引村倶楽部-復原平面図

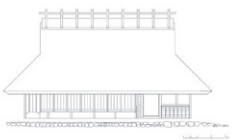


図 11. 天引村倶楽部-復原南側立面図

3-2. 丹波地方の民家類型と比較分析



図 12. 丹波地方の民家の分布


図 13. 天引村の民家

丹波地方の民家は、摂丹型、北船井型、北山型、平入が左図※1のように分布しており、それぞれ下表のような特徴がある。天引村は摂丹型と平入が入り混じった場所にあり、天引村倶楽部は平入である。(図 13)

表 1. 丹波地方に分布する民家の特徴

類型	特徴
摂丹型	・縦に長細く、表から裏まで土間とし、三部屋を一列に並べる。 ・大戸を外側に引く。 ・古い遺構は妻入り。
北船井型	・整形四間取り ・妻入りは和知町、平入は丹波町、瑞穂町、日吉町に分布。
北山型	・棟通りを境に「おもて」と「だいどころ」を二分する「たて割り」とする。 ・「おもて」と「だいどころ」を喰違いに配置し双方から直接行き来できる。 ・古い遺構は妻入り。
平入	・広間型三間取り ・整形四間取り ・ヨコ喰違い四間取り ・タテ喰違い四間取り

4. 復原模型制作


図 14. 復原模型外観

復原考証の結果から、復原模型の制作を行った。復原模型では、内観や小屋組みが確認しやすいように裏面を開ける工夫をした。模型制作により、建立当初の姿を可視化することができた。

5. 結論

復原考証の結果、天引村倶楽部の建立当初の姿と、改修と増築がそれぞれ二度行われたことが分かり、変遷が明らかになった。

増築部の一部は著しく劣化しているものの、大部分は機能しているため、今後は環境に考慮した改修が必要である。建物が時代に合った形でどのように変化し、活用されるか今後も 注視したい。

※1 京都府教育委員会(昭和 50 年)『京都府の民家　調査報告　第 7 冊 昭和 48 年度　京都府民家緊急調査報告』を基に Google マップで作成

京都美術工芸大学　芸術学部　建築学科　井上年和ゼミ
Kyo o Arts and Crafts University, Faculty 6 Arts, Architectural course, Toshikazu Inoue Seminar

日常的避難所

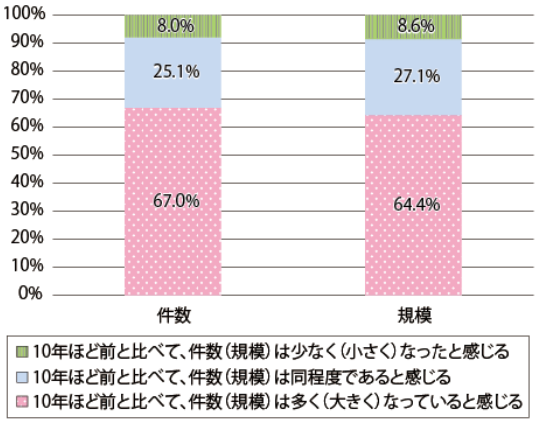
daily shelter

学籍番号　k20210
名前　　安藤友唯
指導教員　河村大輔

Studrnt Numer　K20210
Name　ANdo Yui
Supervisor　Kwamura Daiki

1.計画背景

右の図は10年ほど前（東日本大震災前）との比較において、自然災害の発生件数及び自然災害の規模の感じ方に関するもので発生件数は増加、規模についても大きくなってきていると感じる人の割合が最も多くなっている。これにより近年の大規模地震、豪雨災害など災害の頻発化や切迫を背景に災害に対する警戒感は高まっていると考えられる。



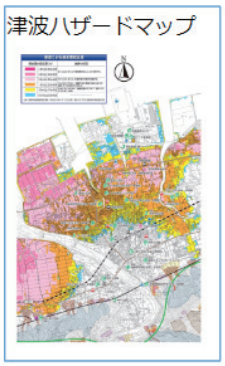
義務教育においても防災学習の導入は増加し、現在小中学校の99.7％が防災学習を行っている。
私は愛媛県西条市で育ち、南海トラフ巨大地震に向けての防災学習を小学生のころから受けていた。その中で自分の住む地域の過去の災害やこれから起こりうる災害を知りそれに対してより安心できる場所を作りたい、また普段から利用できる避難所を作ることで避難経路の把握もでき災害時によりスムーズに避難ができるのではないかと考えた。

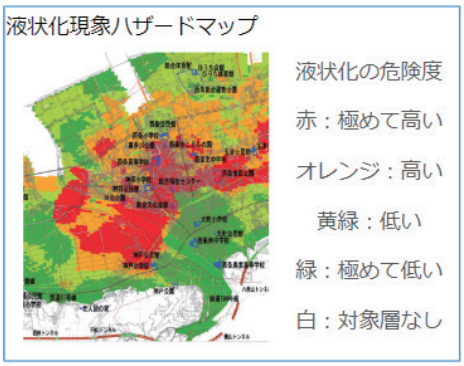
2. 現状

愛媛県西条市(旧西条地区)において38箇所が避難所に指定されている。しかしその中では11か所が津波時に浸水、18か所が津波みよって孤立することが予想されている。敷地近隣には20箇所の避難所があり、その中で津波が起こったときに利用できる施設は10か所であり、南海トラフ巨大地震が起きた時、半分の避難所が利用できなくなることがわかる。

3-1.選定敷地

愛媛県西条市福武乙27
敷地は八堂山の中腹(196m)地点に位置し、西条市が公開しているハザードマップより津波・液状化現象の影響を受けることがない、また避難訓練で学生が訪れていることから選定した。







所在地：愛媛県西条市福武乙27
主な用途：長期避難所
敷地面積：
建築面積：
延べ床面積：

3-2.敷地周辺

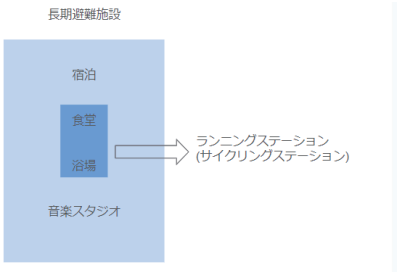
・西条市は人口約10万人。
・多くの西条市を拠点としている音楽活動家が多数おり、年間を通して様々な音楽イベントが開催されている。市内最大のイベントとして、ハンマーロックフェスという音楽イベントが開催される。
・選定敷地は市民の森という公園の一部で、ウォーキング・ランニング・サイクリングのスポットになっている。
・幼稚園児から高校生も遠足や避難訓練で訪れている。
・敷地内のベンチは高齢者の談話の場として使われている。

4.コンセプト

「日常になじむ避難所」

地震が起きた時、早く、安全な場所に避難できるよう日常的に利用できる避難施設を計画する。日ごろから施設を利用することで避難経路や施設に親しみ、災害時にも安心して過ごせるような長期避難施設とする。

5．ダイアグラム



全体を長期避難施設とし、その中に音楽スタジオ、食堂、浴場を設置し日常的に地域の人が利用できるようにする。

6．設計概要

・避難施設
長期避難者を対象とした宿泊施設とする。普段は一般利用も可能とする。
・音楽スタジオ
市内で活動する音楽活動家、近隣の学校のクラブ活動や部活動、個人での利用ができる。
・食堂・浴場
宿泊利用する人、しない人どちらもが利用できる場所。

参考文献
国土交通省「国民の意識調査」
文部科学省「文部科学省における防災学習の現状について」
愛媛県西条市HP「防災ハザードマップ」「指定緊急避難所」

富士の麓で生きる

学籍番号　K20211
名　　前　飯塚大翔
指導教員　新海俊一

Living at the foot of Mt. Fuji

Student Number　K20211
Name　IIDUKA Hiroto
Supervisor　SHINKAI Shunichi

１　背景と目的

日本にはさまざまな商店街がある。それぞれの地域の特色や歴史が反映され、それぞれが異なった空間になり、その地域の雰囲気を表す街の顔のような存在であった。
また商店街は、商売だけではなく地域コミュニティの中心的な場であり、地域の繋がりを生む場所でもあった。
しかし近年商店街のシャッター街化や地域コミュニティの希薄化、東京への一極集中による地方過疎化が社会問題になっている。
東京と比べた時に見えてくる地方の良さの１つに地域コミュニティの場の多さが挙げられる。自治会・町内会の加入率を比べてみると、富士宮市は平成 30 年時点で 82％であるのに対して東京では全体で推定 53.75％であり、加入率が高い区は 72.3％、低い区は 35.8％となっている。東京では同じ地域に住んでいる住民たちが集まる場所が少なく、隣に住んでいる人が誰かもわからないといった人のつながりの薄さが顕著である。
地方の良さである、人のつながりを生む地域コミュニティの場の１つでもある商店街の賑やかさを取り戻し、地方の良さに気付く人が多くなっていけば地方にとどまる人が増えていくのではないかと考え、そのために商店街をどのように変えていくべきなのかを考えていきたいと思う。



富士山世界遺産センター



富士山本宮浅間大社



通常時



流鏑馬祭　練行時

２　計画敷地

計画敷地は、静岡県富士宮市にある宮町商店街とする。
この商店街は、世界遺産である富士山の構成資産の１つとして世界文化遺産に登録されている富士山本宮浅間大社の門前町として発展してきた１００年以上続く歴史ある商店街である。
オーミケンシ工場跡地にイオンモールができてから商店街に人が訪れなくなっていき、シャッターが閉まったままの店が多くなり、活気が無くなってきた。
普段はあまり人は通らないが、祭りの神輿などが通る際は人が多く集まる場所となっている。また、近くには坂茂氏設計の富士山世界遺産センターがあることや、富士山の登山口の１つがあることなど観光資源は豊富である。

３　現状

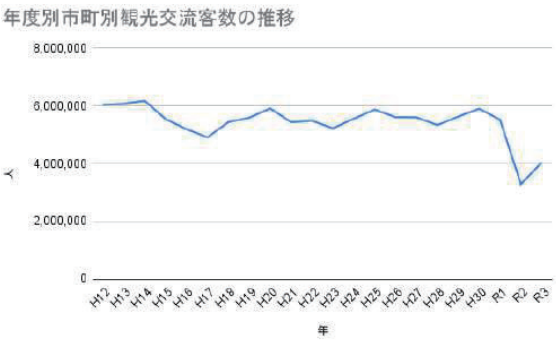
富士宮市はＢ級グルメの「富士宮焼きそば」による地域活性化の成功事例として取り上げられることがある。実際に「富士宮焼きそば」のまちおこし活動によってもたらされた経済波及効果を平成１３～２１年度の９年間について推計した結果は４３９億円とされている。
しかし、中心市街地の空洞化への歯止めには繋がらず、平成２８年度富士宮市商店街訪問調査報告書によると空き店舗率は３１．４％とされている。前年度は２７．５％であり増加傾向にある上に、中小企業庁による商店街実態調査での全国の商店街の空き店舗率は、平成２７年度で１３．１７％、平成３０年度では１３．７７％であることから全国平均よりも高い空き店舗率であることが分かる。
富士宮市の現状は「令和３年度　静岡県観光交流の動向」によると市の年度別観光交流客数（県内の各地域を訪れた人の延べ人数とし、宿泊客数及び観光レクリエーション客数を合計したもの。）の推移から年間５００万人前後と安定した入込客数を得られていることが分かる。

【平成 28 年度　商店街立地の状況の調査】※平成 29 年２月、商工振興課にて調査

No.	商店街	物件数	状況	集計	割合	空き店舗更地率
1	西町	71(73)	営業店舗	42(36)	59%	—
			空き店舗	21(25)	30%	
			住宅	5(7)	7%	33.8%
			更地	3(5)	4%	(41.1%)
2	宮町	70(69)	営業店舗	46(48)	66%	—
			空き店舗	16(14)	23%	
			住宅	2(2)	3%	31.4%
			更地	6(5)	8%	(27.5%)
3	神田	74(75)	営業店舗	61(61)	82%	—
			空き店舗	11(12)	15%	14.9%
			住宅	2(2)	3%	(16.0%)
4	本町	81(81)	営業店舗	52(54)	64%	—
			空き店舗	16(14)	20%	
			住宅	11(11)	14%	22.2%
			更地	2(2)	2%	(19.8%)
5	中央	52(52)	営業店舗	37(42)	71%	—
			空き店舗	11(7)	21%	23.1%
			住宅	3(3)	6%	(13.5%)
			更地	1(0)	2%	
6	駅前	61(62)	営業店舗	32(36)	52%	—
			空き店舗	22(19)	36%	36.1%
			住宅	7(7)	12%	(30.6%)
	合計	409(412)	営業店舗	270(277)	66%	—
			空き店舗	97(91)	24%	
			住宅	30(32)	7%	28.7%
			更地	12(12)	3%	(25.0%)

※（ ）内は前年度数値
※商店街振興組合等に加盟していない店舗も含まれています。

平成 28 年商店街立地の状況の調査



年度別市町別観光交流客数の推移

４　プログラム

１　交流館

・学童保育

地域の子どもがあつまる用途であり、地域の住民が求めているものとして学童保育の拡充や子育て支援ネットワークを発足、活用が市の意見交換会で挙げられていたこともあり学童保育のスペースを設けた。

・　まちなかキャンパス

所在地：静岡県富士宮市宮町3-1
主な用途：学童保育、まちなかキャンパス、チャレンジショップ
敷地面積：1060 ㎡,1955㎡
建築面積：807 ㎡,511㎡
延床面積：1180 ㎡,504.5㎡
キーワード：集会場、カフェ

Location ： 3-1,Miyatyou,Hujinomiyashi,Shizuoka
Main Use ： After-school childcare、Machinaka Campus、challenge shop
Site Area ： 1060 ㎡、1955㎡
Building Floor Area ： 807 ㎡、511㎡
Total Floor Area ： 1180 ㎡、504.5㎡
Keywords ： Meeting hall,Café

商店街の店舗経営者やチャレンジショップの出店者が経営課題について大学生や地域住民、大学教授と話し合ったり、商店街内にある銀行から金融についての講座開いてもらったり、地域住民や店舗経営者などの様々な学びと交流の場となることを考えて、会議室や自習室をまちなかキャンパスとして利用できるようにした。

・　コミュニティカフェ

子育ての悩みを同じ子育てをしている方と話し合う場や高齢者の集まりなど集まるコミュニティは限定せずに、様々な交流の場として利用できるカフェになるようにした。

・　自習室 コワーキングスペース

私が実際に住んでいた時に勉強をする場所が非常に少ないと感じていました。イオンモールは商業施設であるため、気軽に長居できる場所ではなく、気兼ねなく滞在できる場所が必要と感じていた。
また、コワーキングスペースも周りにあまりないため同じく滞在できる場所になるようにした。

・　区民館

現在、商店街のなかの店舗を高嶺区民館として使っているが、区民館を利用してない時にはシャッターがしまっている状況のため、交流館の室を区民館として利用して、使っていない時に自習室や会議室に活用するという計画とした。

2　よりみち横丁

・　チャレンジショップ 屋台

商店街だからいいところで挙げた地域ならではのものに出会える場として、地域の特産品を使った料理やご当地グルメを使った出店を積極的に募集して、観光客が訪れる場所となることや交流館で自習していた学生がお昼や帰りに少し寄り道していく場所となるように計画した。
また、チャレンジショップは一定の期間のサイクルで変えていくことで、地元の住民も何度も寄り道したくなるようにして、お祭りの際は屋内屋台として貸出を行えるようにした。

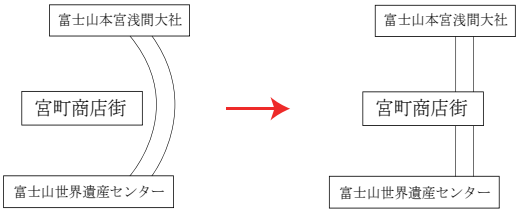
・　ステージ 広場

建物の間に空白を生み、富士山が眺められるようにするだけでなく、お祭りなどのステージとして利用することやイベント会場として使えるスペースとして計画した。

5　ダイアグラム

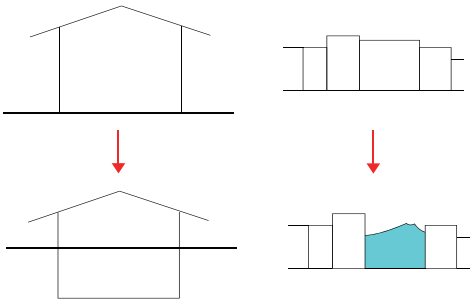
繋ぐ商店街

富士山本宮浅間大社と富士山世界遺産センター、イオンモール富士宮など観光客や地元の住民が集まる地点の近くに宮町商店街はあるが、人通りは少ないのが現状。
その理由の１つとして、人が集まる地点は商店街の南北方向にあるが、商店街は東西方向に伸びていて南北方向の道は少なくあっても商店はなく、小道であったりすることから観光客や地元の住民が通るのは商店街の横の大通りになってしまっているところが挙げられる。
そのため寄り道をしてみたくなるような商店街になるように設計した。



富士山を隠さない

現在の商店街は２階建てが多く、また建物が連続して続いているので富士山が商店街の中にいると見えない状況になっている。そのため、今回の設計では地下に掘り下げて高さを抑えたり、広場や新しい小道を作ることによって建物の間に空白を作ることで富士山を商店街のなかで眺められるようにした。商店街は密集しているイメージが多いが、シャッターが密集している外観よりもあえて空白を作り出し、ふと気づくことができるポイントを生み出したいと考えた。



6　パース写真



よりみち横丁



交流館

参考文献

静岡県「観光交流の動向」（令和元年度）
富士宮市「第４次　富士宮市観光基本計画　２０２２年～２０２５年」

白内障患者の居住空間に関する研究

-照明の組み合わせ・配色に関する提案-

学籍番号：K20212
名　　前：石垣歌織
指導教員：人見将敏

建築計画　　白内障　　視覚障害者
住宅　　住居・住環境　　バリアフリー

1. 序章

1.1 研究背景

近年、我が国においては人口の高齢化が急激に進み、近い将来人口の年齢別構成比に大きな変化が生じることが予測されている。令和5年版高齢者社会白書によると、我が国の総人口は令和4年10月1日現在1億2,495万人となっており、中でも65歳以上人口は3,624万人となり、総人口に占める割合（高齢化率）は29.0%に達し、人口の約3割が65歳以上の高齢者であることが示されている。

医療技術の進歩により高齢化はどんどん進んでいくと考えられる。そのため、我が国において医療・介護・安全など様々な社会システムの見直しが必要となり、高齢者に配慮した環境の改善も急務となっている。加齢に伴う体力や身体機能の低下や環境への適応能力が低下することは避けられない問題である。

1.2 研究の目的

これまでの研究では実際に緑内障患者を家族に持つ家庭の居住空間に関するものがあり、緑内障を患う者がいる家庭の新築の家づくりを対象に、障害に配慮した平面計画の変化に着目し考察が行われている。その研究でt緑内障患者から特に要望が多かったのがキッチンのような細かな作業を要する場所でや照明についてであった。そこで、本研究では緑内障に類似する症状として白内障に着目し、リビングルームとキッチンルームにおいて白内障患者に考慮した照明の組み合わせと配色について明らかにする。白内障を患う人の暮らしが豊かになることを目的とする。

1.3 研究方法

①既往研究の整理と関連する文献の調査。専門家である医療従事者１名へのヒアリング（緑内障と白内障の具体的な症状や現在の治療方法、白内障の進行度分類、苦労する点などの調査）

②視覚障害ゴーグルや簡易的な視覚障害体験眼鏡を用いて実験を行う。今回は普段使われるリビングルーム（または自部屋）と細かな作業が行われるキッチンルームを対象に調査をする。

初期段階（中期白内障）、中期段階（成熟白内障）の2段階に分けて調査を行った。15名：1日2パターン（矯正なし3名、コンタクト使用者11名、眼鏡使用者1名）

③実験の整理。リビングルームとキッチンルームで使われている照明の問題点から白内障患者に考慮した照明の選定と考察を行う。

④またこれらの結果から他の居室で用いる照明器具の選定と考察を行う。

2.1 白内障緑内障などの視覚障害について

2.1.1 白内障について

白内障の中で最も多いのは加齢白内障である。50代では約60%の人が、また80歳以上ではほぼ100%の人が白内障を発症する。先進国では外科的手術によって白内障による視力障害を改善できるものの、発展途上国をはじめとする多くの国々では、いまだに容易に手術を受けることができないのが現状である。これからの超高齢社会に向けて白内障患者は今後も増加していくことが予測され、白内障に対する生活空間の改善が急務である。

2.1.2 白内障の進行度分類

白内障は水晶体の濁りの程度によって、初期白内障、中期白内障、成熟白内障、過熟白内障の大きく4つに区分される。

2.1.3 緑内障について

緑内障は40歳以上で5%(20人に1人)、60歳以上では1割以上の患者がいる。日本の失明原因1位に緑内障がある。患者は多いが、緑内障の失明率はかなり低く、早期に発見して適切に治療を受けることで生涯視野と視力を保つことのできる病気である。緑内障は眼と脳をつなぐ視神経が障害され、徐々に視野障害が広がってくる病気である。

2.1.4 緑内障と白内障の違い

緑内障は光を感じる細胞が死んでいくため光が入りづらく暗く見える(人によって差異はある)が、白内障は光の通り道がぼやけ、乱反射するため光が通常よりも入ってきやすくまぶしく見える。緑内障は進行するにつれて視界が狭くなっていく。白内障も同様に進行具合によって見え方は異なってくる。

2.1.5　視覚障害について

平成18年に厚生労働省が行った身体障害児・者の実態調査によると全国の身体障害児・者数は約3,483,000人と推計されている。その中でも視覚障害児・者の割合は約31万人となっている。日本眼科医会の試算によると、2007年における視覚障害者の割合は約164万人であり、そのうちロービジョン者は約144万人である。視覚障害者と聞くと全盲のイメージが強いが、ロービジョン者に配慮した環境整備や居住空間が必要である

3.　実験調査

3.1　調査の対象と方法

①調査対象者：20～30代の健常者15名（男性：4名、女性：11名）（矯正なし：3名、コンタクト使用者：11名、眼鏡使用者：1名）

②調査場所：対象者の自宅のリビングルームとキッチンルームで行った。

③調査方法：視覚障害ゴーグルや簡易的な視覚障害体験眼鏡を用いて普段通りの生活を行う。対象者には自宅で使われている照明器具の写真を撮ってもらった。白内障の進行度は中期白内障-成熟白内障いくつかの質問に回答をしてもらい、結果をまとめ考察と照明器具の選定を行う。

3.2　調査結果

3.2-1.　リビングルームにおける問題点

・視界が白くなって見づらい（6人）

・照明の近くにある物が見づらい（3人）

・テレビの文字が見づらい（3人）

コントラスト感度が低くなるため色の判別が難しい（3人）

・30センチ以上離れているとブルーライトを放つものが見づらい（5人）等

3.2-2.　キッチンルームにおける問題点

・もやがかかって見え、視界がぼやけるため包丁を使うのが危ない（2人）

・下を向いて作業するときは眩しさを感じない（2人）

・細かな作業や片付けをする際に不便さを感じる（8人）

・下の収納の奥の方に入っている物が見づらい（照明がない）（2人）等

4.　調査内容の考察

4.1　調査結果の整理

リビングルームで考えられる問題点については、スマートフォンやパソコン、テレビなどブルーライトを放つ機器が眼鏡を付ける前と付けた後で変化することが分かった。近くで見れば文字を読むことはできるけれど30センチほど距離が離れると見づらいと感じる。照明の近くにあるものが見づらくなると感じる。キッチンルームでは包丁を使ったり洗い物をする際は、もやがかかって見え、視界がぼやけるため包丁を使うのは危ないと分かった。下を向いて作業するときにはそこまで照明の眩しさを感じない。リビングルーム同様、高いところにあるものが見づらい。多くの人が細かな作業や片付けをする際に不便を感じると答えた。収納に入っているものは暗くて何があるのかわからない。フィルターが1枚の時（中期白内障）と2枚（成熟白内障）の時では2枚のほうが視界がぼやけるという回答は想定できたが、意外にも違いが感じられないという回答も多かった。照明の明暗による変化については、明るいときの方は暗いときに比べて疲労感が大きいことが分かった。また、暗いときは通常なら見えるようなカレンダーなどが見えづらくなる。テレビは暗い方がむしろ見やすいと感じる人もいた。逆に小さな文字をみたり、細かい作業をするときには明るい方が見やすいことが分かった。また、照明は温白色や電球色のほうが物を見やすく、疲労感を感じないことが分かった。

4.2　調査結果の考察とシーンごとの照明器具の選定

リビングルームもキッチンルームも全般照明と間接照明の組み合わせ方で見え方が異なることが分かった。ここでは、どの照明器具を用いるのが良いのかを考察し提案する。

5.　結論

5.1　研究結果のまとめ

本研究ではくつろぎ空間と作業空間のふたつの部屋で実験を行った。白内障患者は視界が白く濁って見え、コントラスト感度は低くなり物がはっきりとは見えないが、照明の照度や色温度によっては物が少し見やすくなったりすることがわかった。また、行為によって照明を使い分ける必要があることが今回の実験からわかった。

5.2　今後の展望

本調査では実際の白内障患者のような視覚障害者を対象として実験を行ったわけではないので、実際に白内障患者がどのように見えているのかは詳しくわからないなど問題点が多かったように思う。白内障や緑内障だけではなく、全盲でも光のみを感じるものから完全に光を失った人までもが、居住空間に暖かみを感じられるような建築計画を模索していくことをこれからの課題としたい。これから技術が進歩していく中で障害をもつ者たちが健常者と同様の生活を送れるような未来になることを望む。

6.　参考文献・謝辞

内海由利、本間敏行、本間貴史,日本建築学会東北支部研究報告会,視覚障害者の住空間に関する事例的研究,2006年6月17日,第69巻p221-224

福田佳子,暮らしのシーン別照明設計の教科書,学芸出版社,2021年9月25日,p215

森の文化交流拠点

-観光施設集客促進のための広場-

学籍番号 K20213
名 前 市川勇斗
指導教員 白鳥洋子 Forest Cultural Exchange Hub

Forest Cultural Exchange Hub

- Plaza for Boosting Tourism Facility Attendance -

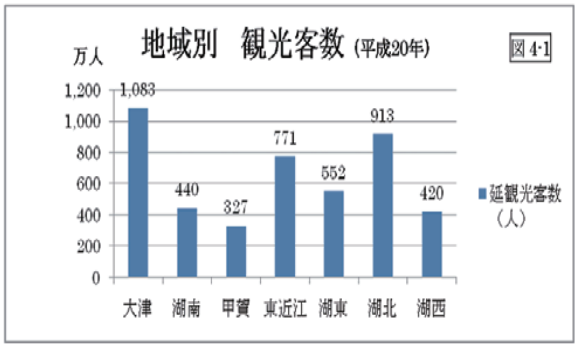
Student Number K20213
Name　Ichikawa Yuto
Supervisor　Shiratori Yoko

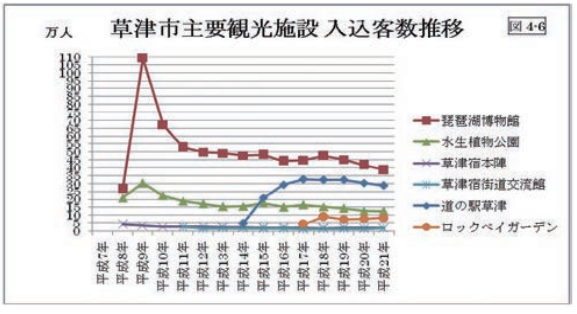
1. はじめに

現代において、旅行者の多様化とそのニーズの急激な変化が観光業界に新たな課題を投げかけている。これまで主流であった「観光施設」に焦点をたてた集客手法はますます時代にそぐわなくなっている。旅行者たちが求める体験やニーズが多岐にわたる中で、従来のアプローチでは充分な対応が難しい状況が生まれている。このような背景から、これからの時代においては、観光施設や集客方法を再検討し、ニーズに合わせた効果的な集客戦略が求められている。そこで私自身の地元である滋賀県草津市の観光客入込客数が、右肩下がりの傾向にあることなどについての問題点や課題を建築によって解決できないかを考えた。

2. 草津市の現状と問題点

敷地の湖南（草津市を含む）は観光客数において大津や湖北と比べ、著しい差があり、低い水準にとどまってしまっている。滋賀県全体での入込客数を基にした観光地の順位において、長浜市の黒壁ガラス館が一位を獲得し、近江八幡市の八幡堀が９位に位置している点が特筆される。長浜市の黒壁ガラス館は、市民参加型の地域復興策としてガラスを新たなまちおこしのテーマとし、これが成功を収めている。その成功事例は観光地のあり方における新たな展望を提供しているといえる。一方で、草津市においては、琵琶湖博物館・水生植物公園水の森・道の駅草津などが主要観光施設として存在し、これらが市内の観光スポットの半数を占めている。しかし、滋賀県全体を見れば、草津市の入込客数は低く観光での集客力は極めて限定的であるという現実が浮かび上がっている。図 4-6 を見ると、草津市が抱える観光施設は数多く存在しているのの、それだけでは観光客の十分な誘致が困難であることが示唆される。この点で、長浜市の黒壁ガラス館のように新しい形態の観光地が多くの観光客を引き寄せる成功は、観光客のニーズの変化を反映したものと言える。今後、草津市が地域資源を活かし、新しいアプローチを模索することが、観光振興において重要である。





3, 研究課題

草津市が抱える課題は多く、まずその最たるものは「全国的な観光地でないことはもとより、滋賀県内の他地域と比較しても十分に集客できておらず、観光のできるまち」としての認知度の極めて低いことである。この事実が、市の観光振興における大きな障害となっている。他の地域が成功しているまちづくり型の観光地に比べ、草津市では現在の入込客の多くが特定の観光施設に依存している。しかし、厳しい現実として、これらの施設においても集客数が減少傾向にあるという事実が明らかになっている。これは、単なる施設の提供だけではなく、地域全体の魅力や資源を活かした戦略的なアプローチが不足していることを示している。

4, 提案

・滋賀県は美しい自然環境や伝統文化が息づく地域で、その魅力をより多くの人々に知ってもらうために、特有の工芸品やアート、公共施設を活用。
・滋賀県特有の工芸品を体験できるイベントを開催。地元の職人やアーティストと協力して、滋賀県ならではの伝統的な工芸品の制作体験を提供。訪れる人々が手作りの品々を通じて地域の歴史や文化に触れ、滋賀ならではのアートに触れることで、地域への興味を深める。
・ストリートアートの展示やパフォーマンスを行うイベントも企画。公共の空間を活かしてアートを楽しむ。
・「琵琶湖博物館」と「水生植物公園水の森」に興味をもってもらうために公園内には、博物館の展示物や水生植物公園の植物を紹介する展示エリアを配置する。共通の入場券を導入し、博物館と水生植物公園、そして公園をセットで訪れることができるようにする。
・地元のアーティストによるワークショップや、地域の歴史や文化に焦点を当てたイベントを開催。情報交換の場としても機能する。地域のニュースやイベント情報が共有され、住民たちが地元での活動や参加の機会を見つけやすくなる。これにより、地域全体のコミュニケーションが円滑に行われ、住民たちがより主体的に地域社会に参加できる環境が整う。
・様々な世代の方が立ち寄れるように「子供向けエリア」「リラックスエリア」「文化イベントエリア」「健康促進エリア」を設ける。

滋賀県草津市の烏丸半島。烏丸半島の中央部にある長年有効に活用できていない約 9ha の　土地の北側のみ利用。自然が豊かで、湖畔に広がる美しい風景　が特徴。湖岸には公園や遊歩道が整備はれ、地元の人々や観光　客がリラックスや散策を楽しむ場所となっている。「琵琶湖博　物館」、「水生植物公園みずの森」がある。イベント開催が多　々ある敷地。



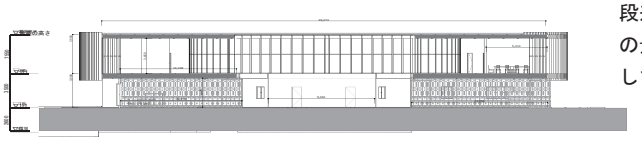
ARCHICAD 教育版

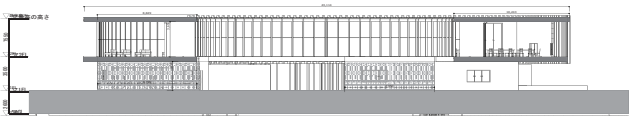
所在地 ： 滋賀県草津市下物町
主な用途 ： 広場、複合施設
敷地面積 :33441.01㎡
建築面積 :1946.16㎡
延床面積 : 1782.46㎡
キーワード ： 着地型観光、地域資源、ビオトープ

Location ： Shimomono-cho, Kusatsu City, Shiga Prefecture Main Use ： Square、Mixed-use Facility
Site Area ： 33344.01m2
Building Floor Area ： 4171.15m2
Total Floor Area ： 4171.15m2
Keywords ： Community-based Tourism、Local Resources、Biotope

5. 選定敷地

滋賀県草津市の烏丸半島。烏丸半島の中央部にある長年有効に活用できていない約 9ha の 土地の北側のみ利用。自然が豊かで、湖畔に広がる美しい風景 が特徴。湖岸には公園や遊歩道が整備はれ、地元の人々や観光 客がリラックスや散策を楽しむ場所となっている。「琵琶湖博 物館」、「水生植物公園みずの森」がある。イベント開催が多々ある敷地。





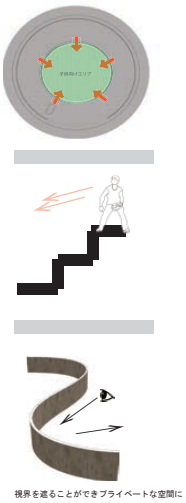


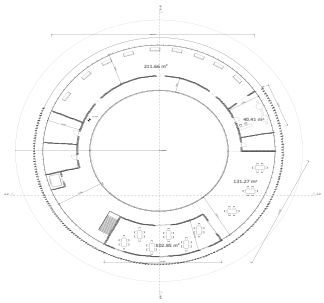


6. 設計概要

段差を設計に取り入れ、広場に立体感をもたらし、平坦な地形よりも興味深い空間を作り出した。高低差があることで、人々は異なる視点から広場を楽しむことができる。
段差は、人々が座ってリラックスしたり、周囲の景色を楽しんだりでき、席や休憩スペースとして活用できる。

ダイアグラム







参考文献

平成20年滋賀県観光入込客統計調査書chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.pref.shiga.lg.jp/file/attachment/74617.pdf
草津市商業観光課 提供資料 https://www.city.kusatsu.shiga.jp/shisei/soshiki/kankyokeizaibu/shokokanko/
「住宅・不動産」のプレスリリース > 滋賀県草津市にある烏丸半島約9haの土地利用を図るため 遊休地活用に向けて民間事... https://www.atpress.ne.jp/news/364267

下鴨地域における大型町家に付随する建物の設計

学籍番号　K20214
名　　前　稲佐恵子
指導教員　生川慶一郎

Desing of defitting small house at Shimogamo accompanied large town house

Student Number　K20214
Name　　INASA Keiko
Supervisor　　NARUKAWA Keiichiro

1. 背景と目的

京都市左京区の下鴨地域は邸宅街というイメージが残る地域である。実際にげんちにあしを運ぶと、閑静な住宅街で近くを流れる白川疏水を囲む木々は春になると桜が咲く。しかし現在では建て替えや増改築が進み、かつての景観が失われつつある。敷地(図4)に選んだ下鴨半木町にあるS邸(図1）は大正から続く大型町家であり、それに付随する建物（図2）の建て替えが検討されていることから、本制作において下鴨地域の景観相応しいアトリエ付き小住宅を設計・提案する。


（図1） 南から見た大型町家


（図2）北から見た既存付随建物

2. 研究方法

敷地調査及び既存建物に現状確認と住まわれているＳさん、Ｓさん娘（以下、娘）にヒアリング調査を行い、本制作で建て替える大型町家に付随する建物に求められる設計与条件（家族構成、・アトリエとしての用途など）の整理を行う。また、周辺住宅の調査を行い、下鴨地域の良好な景観を形成している要素を抽出し、さらに本敷地の形状に類似する狭小住宅の文献調査を通じて、本制作のデザインの参考にする。

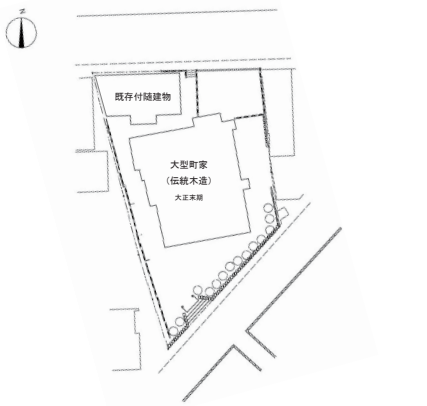
3. 既存付随建物の現状確認

既存付随建物は、木造２階建でおよそ 30 坪ほどの規模の狭小住宅である。敷地は全面道路よりも少し高い位置にあり、北側道路に面して東西に伸びた形状で、東側に駐車場があり、南側は大型町家に隣接している。敷地への出入りは北側（直接）と南側（大型町家を通り抜けて）の２ヶ所にある。本制作ではその既存付随建物を除却し新築する。２回目の敷地調査で既存付随建物の外周の現状確認をしたところ、大型町家と既存付随建物の間は狭く、敷地境界線にかなり接近して建てられていた。また、建物同士の頭上は後付けの波板屋根で覆われていた。


（図3）付近見取り図

4. 周辺住宅の調査

敷地のある下鴨地域の古地図からＳ邸と同時期に建てられた建物が比較的多く残っていると推察される範囲を設定し、その範囲内の全ての住宅を一軒ずつ、そのファサードを写真で記録した。写真には番号を付けてそれぞれの特徴ごとに分類分けを行った。(図5)。建物の構造により、「伝統木造」「在来木造」「プレハブ」「その他」の４つに分けられ、更に「伝統木造」は当時のまま残っているもの、一部改修されているもの、看板建築の３つ、「在来木造」については更に屋根の種類と色、駐車場が見えない工夫がされているかによって分けた。「プレハブ」は勾配屋根、陸屋根の２つ、「その他」には住宅以外のビル系を分類した。その結果、屋根の形状や色、外壁の素材、駐車場の見えない工夫が下鴨地域に相応しい景観を形成している要素であることが分かった。

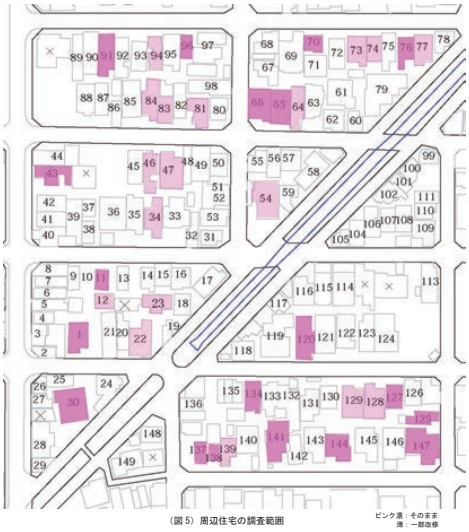


（図3）配置図

5. 設計条件

ヒアリング調査から、設計与条件を整理した。

家族構成：夫婦、子ども２人
構造　　：木造２階建
用途　　：専用住宅
要求室　：夫婦寝室、子供部屋２室
　　アトリエ…漆作業ができる空間、１階に固定
　　洗面所、浴室、キッチン等の水回り設備
　　収納…1,2 階にそれぞれ設ける
　　バルコニー
外構計画：道路に面するところへの配慮
　　駐車スペースの確保
　　北側からの母屋（大型町家）への出入りに配慮する


（図5）周辺住宅の調査範囲
ピンク濃：そのまま
薄：一部改修

6. 計画コンセプト

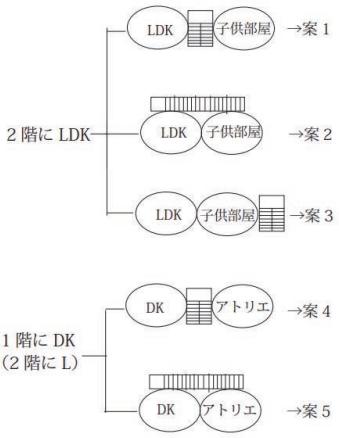
以下の５点とする。
①比叡山が眺められる
②明るい空間で家族団欒を過ごす
③ライフスタイルの変化に対応できる
④アトリエは外部からも出入りができ、作業に集中できる場所
⑤外観は周辺住宅の調査を踏まえて、下鴨地域に相応しいデザイン

所在地：京都市左京区下鴨半木町
主な用途：専用住宅
敷地面積：97.23㎡
建築面積：46.48㎡
延床面積：84.69㎡
キーワード：住宅・町家・狭小

Location ： simogamo hangi-cho skyo-ku kyoto
Main Use ： Exclusive housing
Site Area ： 97.23㎡
Building Floor Area ： 46.48㎡
Total Floor Area ： 84.69㎡
Keywords ： house, town house, small

7. プランの検討プロセス

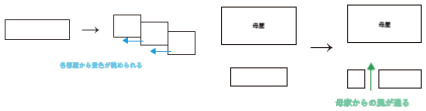
狭小住宅であるため、敷地に限りがあることから、室の配置パターンが決まってくると考えられる。その取っ掛かりとしてLDKが１階にあるパターンと２階にあるパターンに大きく分けられる。更に階段の配置によって、配置のパターンが決まることも分かった。階段が端にある場合は中央にある場合に比べ、廊下が長くなるというデメリットから、階段は中央に固定し、階段の種類の以外でパターンを書き出した。書き出したプランから良い要素が多くあるものを採用する。プランを進めるにあたりLDKが１階にあるパターンにいて、LDKを一体的に配置することが難しく、１階にDK、２階にLを配置する分離型とした。結果、２階にLDKがある場合では、明るく快適な東側にLDKがあるかつ、中央に折り返し階段でLDKと居室を分断する案（案1）、中央に直行階段でLDKと居室を一体化する案（案2）、階段が端で、LDKと居室は独立する案（案3）がみられた。次に、１階にDK、２階にLがある場合は、中央に折り返し階段でDKとアトリエを分断する案（案4）、中央に直行階段でDKとアトリエが独立する案（案5）がみられた。これらのあんから良い要素が多い（案2）の内容でさらに設計を進めた。

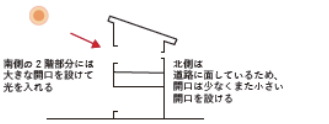


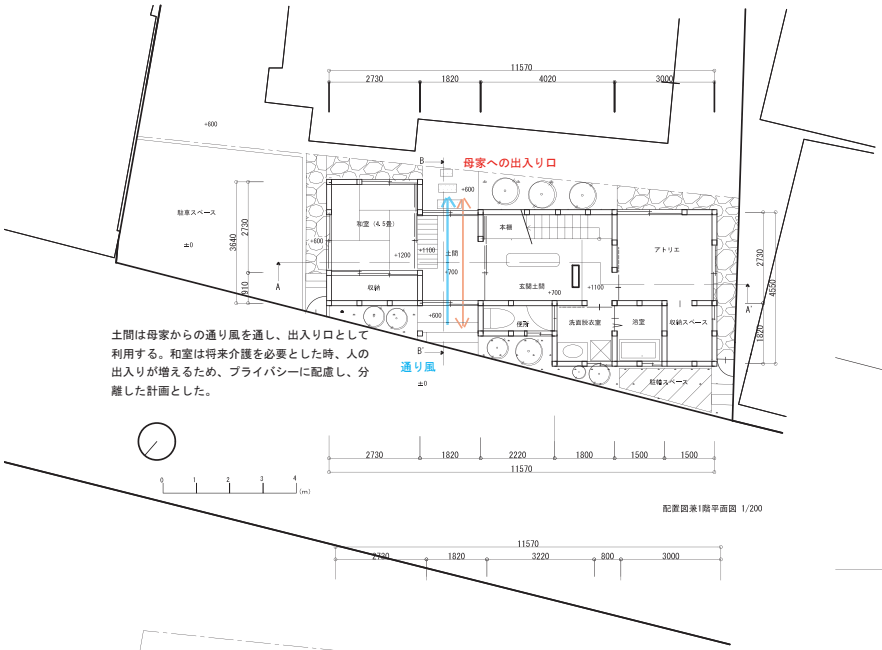
（図６）パターン図

8. 参考文献

・歴彩館データベース
京都市京都学・歴彩館所蔵資料発信
都市計画地図（3000分の１　都市計画基本図）
・「町家再生の創意と工夫　実例にみる改修の作法手順」
2005年６月20日　発行
・大場修　著　「京町家カルテが解く　京都人しか知らない京町家の世界」
淡交社　2019年10月19日　発行

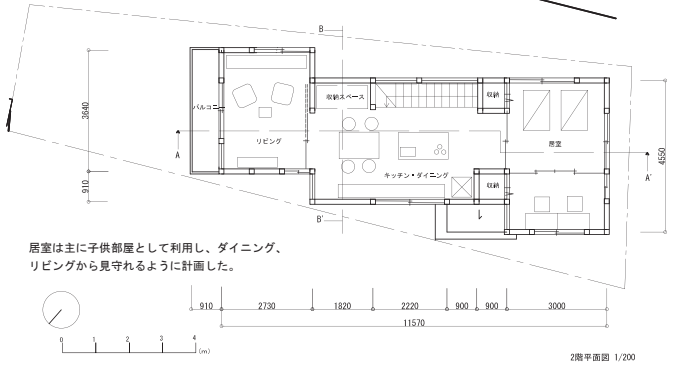






土間は母家からの通り風を通し、出入り口として利用する。和室は将来介護を必要とした時、人の出入りが増えるため、プライバシーに配慮し、分離した計画とした。

配置図兼1階平面図 1/200



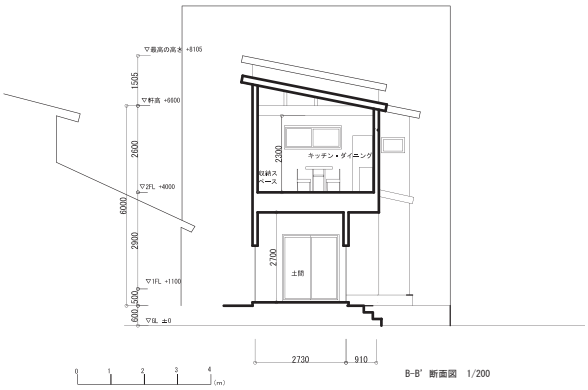
居室は主に子供部屋として利用し、ダイニング、リビングから見守れるように計画した。

2階平面図 1/200

ダイアグラム



B-B' 立面図 1/200



B-B' 断面図 1/200

既存資源活用による地域活性化

学籍番号　K20215
名　　前　稲澤圭祐
指導教員　人見将敏

Title

Student Number　K20215
Name　　INAZAWA Keisuke
Supervisor　　HITOMI Masatoshi

1, はじめに（計画の背景）

・制作目的（MS 明朝 9P）
私の住んでいる近江八幡市では、住民が「死に甲斐のあるまち」をコンセプトとして歴史的な街並みの保全・復元を行っている。それによって次第に観光客が増えた。また国の重要文化的景観に認定されるなど社会的評価の高いまちである。しかし、伝統的な産業および文化の継承者が不足するなどの問題が起こっている。そこで、地元の人だけでなく観光客の人たちにも伝統的な文化にふれられる場を提案する。

・敷地について

滋賀県近江八幡市

近江八幡市は琵琶湖の東岸、琵琶湖の中央に位置し、人口約 82000 人を抱える旧城下町である。また、西の湖を中心とする水辺や近江八幡を拠点に全国へ行商した近江商人の歴史文化が有名である。近江八幡市は従来から文化保全に積極的であり、八幡掘周辺が重要伝統的建造物群保存地区として認定されていることに加えて、国の重要文化的景観に日本で最初に選定された「近江八幡の水郷」を有している。近江八幡市は従来まで景観や文化の保全に重点を置いていたが、近年は保全に加えて 観光にも重点を置いたまちづくりを目指している。



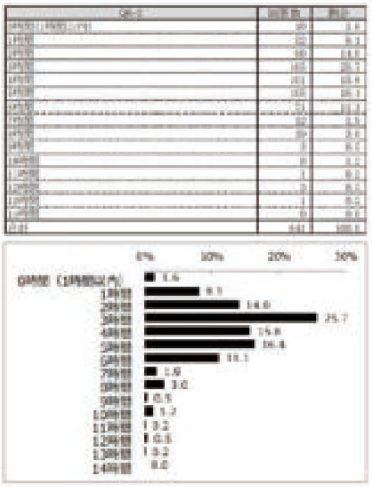
・近江八幡の水郷

近江八幡市は、水とともに暮らしてきた町である。「近江八幡の水郷」の中心である西にある湖周辺ではヨシ原が広がっており、特徴的な景観から琵琶湖八景の一つ「春色・安土八幡の水郷」に数えられている。
江戸時代近江商人が取引していた商品は「近江表」や「近江上布」など湿性植物を原料とするものが数多く含まれ、ヨシの産地として広く知られるようになった。円山の集落では現在でも、簾（すだれ）や葭簀（よしず）といった高級夏用建具の製造がおこなわれており、製造者の数は減ったものの「ヨシ地焼き」などの種々の作業は従来の手法で行われている。
「近江八幡の水郷」は、西の湖やその周辺に展開するヨシ原などの自然環境が、ヨシ産業の生業や内湖と共生している地域の人々の生活と深く結びついて発展してきた文化的景観である。



・住民のまちづくり

昭和後半になり運河としての機能が失われると堀には下水が流出し水面は水草で覆われ川底はヘドロが蓄積し、悪臭を放つようになった。
その後、堀を埋め立てて公園や駐車場を作ろうと計画されたが、これに対して近江八幡青年会議所が「埋め立てた瞬間から後悔がはじまる」として「よみがえる近江八幡会」を設立した。
市民全体の運動として住民が再生・保全に取り組んでいる。



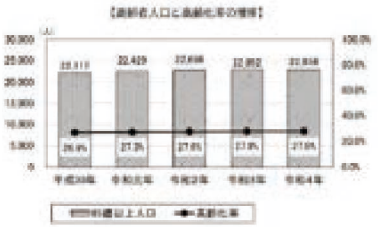
・計画敷地の問題点

～短期滞在からの転換～

近江八幡市には、年間約 321 万人の観光客が来るラコリーナや日牟禮八幡宮、八幡堀や織田信長の居城であった安土城跡がある。
近江八幡に訪れる観光客の特徴としては観光スポットに行ってすぐ帰る短期滞在が多い。

～高齢者の増加～

近江八幡市では、65 歳以上の高齢者の人口が全人口の約 27.9%を占めている。その中でも単身世帯の高齢者が年々増加しており活動能力の低下や孤独死といった問題が増えてしまうのではないかと考えられる。



所在地：滋賀県近江八幡市宮内町209
主な用途：学校、商業施設、宿泊施設
敷地面積：21200㎡
建築面積：13843㎡
延床面積：13843㎡
キーワード：

Location ：
Main Use ：
Site Area ：㎡
Building Floor Area ：㎡
Total Floor Area ：㎡
Keywords ：

～文化の継承者不足～

近江八幡は豊かな水の文化を有する町であったが、現在では住民が水に触れる機会が減少してしまっている。例えば、かつての琵琶湖へと通ずる積出港として栄えていた常浜は、現在公園として整備されているが、住民の日常的な利用頻度は低い。これらは、すなわち水の文化の関心の低下を引き起こしてしまう。



～地域資源の活用～

地域資源を活用する場として主に高齢者などを対象とした学びの場をつくる。近江八幡の文化である自然や食、建築物など幅広く学び高齢者と社会との交流をつくる。
また、近江八幡の文化を学ぶことで地域に必要とされる人材として生きがいを持ち次世代を考慮したまちづくりに参画できる。



2. 計画内容

上記の問題点から私は、高齢者が社会との交流ができ、地域に必要となる人材として生きがいをもつことができるような学校と近江八幡の文化や自然に触れて体験できる宿泊施設と祭りの際に取り入れる近江八幡の資源を使った空間を計画する。

2-1. コンセプト　「近江八幡市の既存資源を活かした学び、体験」

1. 水　：船運　ヨシの収穫、加工　釣り
2. 歴史：街並み　城跡
3. 食　：湖魚料理　近江牛　赤こんにゃく
4. 建築：商人屋敷　ヴォーリズ建築　安土城跡

2-2. 計画施設

学校　近江八幡の産業や文化を学ぶ場

高齢者にとっては学校で社会との交流ができる。また学ぶことによって地域に必要とされる人材になり生きがいになる。観光客の人も参加できるようにして交流しより深い観光ができるようにした。近江八幡の歴史から湖魚料理、建築などについて学べるようにした。



湖魚料理・ヨシ製品販売・ヨシ制作体験
学校を卒業した人や在校している人が実際に料理を提供したり観光客の人に教えたりする。実際にヨシ狩りを体験

宿泊施設　近江屋敷で宿泊体験
当時の暮らしが体験できるような宿泊施設を計画した。近江商人の生活文化に触れられるようにした。



店舗
工場で作った繊維製品やヨシを使った製品を販売する

沖縄北部の集落の屋敷構えに関する調査報告～屋我地島の内海沿い集落を対象として～

学籍番号　k 20217
名　前　井上雄斗
指導教員　砂川晴彦

沖縄　集落　近代和風住宅
微地形　フクギ　ブロック塀

序章

１　研究目的

本研究の目的は、沖縄における集落の屋敷構えから集落の特徴を明らかにすることである。研究対象には沖縄本島北部の名護市に所在する集落のうち集落の規模が大きく、民家の現存が良好な饒平名集落に注目している。内海に面した穏やかな環境にあり、中世のグスクも近く、島内で最も古い集落の一つと見立てられる。そうした沖縄集落の着眼点として、家屋単体だけではなく、付属屋や屋敷林を含めた環境をとらえる指標として屋敷構え[1]に注目する。調査は８月３～８日にかけて行った。

２　饒平名集落について

饒平名は沖縄本島北部に位置する屋我地島という離島に位置しており、字名で呼ばれる５つの集落のうちの一つが饒平名である。元々は屋我地という一つの村（島）から独立して構成された集落で、18 世紀初頭に現在の場所へと移動されたまたは移動されていないなど、諸説がある１)。1936 年頃には郵便局や診療所などの施設が建造されていき、島の中心地となった。また内海に面していることから台風などの被害が比較的少ないとされ穏やかな気候に恵まれた環境下にある。

第１章　現在の屋敷数と構造物

１　現状の集落の屋敷数

饒平名集落には約 50 件以上の屋敷がある。現在の主屋は明治以降のものと評断される最古のもので本研究では戦前からの環境を維持している屋敷を取り上げることとする。戦前の遺構の検討は国土地理院の航空写真を使用した（**図１**）。

集落図の作成には住宅地図（ゼンリン）をベースとして屋根伏図には航空写真（国土地理院）を使用した。また現地調査において修正を施している。

集落は屋敷の形状から青いグループの A、緑グループの B、赤いグループの C に分けられる（**図１**）。調査の結果、戦前にさかのぼると考えられる。主屋とその他の屋敷構えを残す屋敷は約 15 件ほどであった。一番多いのは A グループで、B グループはそのほとんどがコンクリート造にかえられており、他のグループと比べても比較的に新しい。当集落形成は環線道沿いに A と B の屋敷が構成されて山の後方へと拡大されたのではないかと考えられる。

２　現状の構造物とその年代

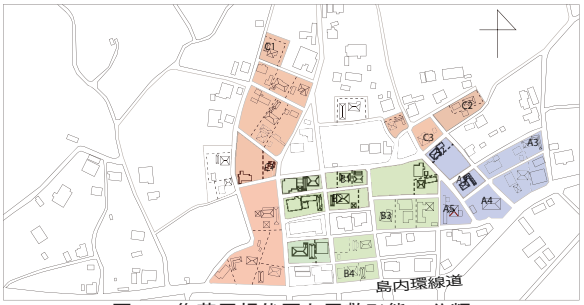


図１　集落屋根伏図と屋敷形態の分類
（上：国土地理院航空写真トレース）

当集落内の構造物は主屋と物置倉庫で構成されており、特に主屋は年代の経過を実感させられる建物や屋根瓦が取り換えられ新たに塗装されている建物。また建物自体をコンクリート造りに建て替え屋敷が大きく変わっている住居も見受けられた。

物置倉庫は本来は家畜小屋（フール）として活用するのが伝統的な住居形式としての役割だが、現状では家畜小屋はなく、年代の経過とともに放置されているものや劣化部分をブルーシートなどで覆いかぶせてたり、そのまま物置として使用しているものあるがこちらも劣化部分が見受けられた。

３　集落内の共同施設

現在の集落には２つの共同施設がある。１つは、集落の中心部分に当たる公民館である。２つ目は、集落の端に位置する共同売店である。公民館はきれいに維持されている。一方で共同売店は、経過を感じさせられる。店主の方によると、現在は客がほとんど来ないため商品を入荷していない状態らしく、店が出来た当初は集落唯一の売店ということもあり、利用者が多かったそうだが今となっては過疎化の影響で客足が減少しているという。

第２章　屋敷宅地割から見た集落の構成

１　屋敷の規模

それぞれの屋敷の大きさや配置は若干異なるものの、主屋と倉庫はどの屋敷も配置されていることからこれを基準として考えることができる。まず一般的な規模で言うと、主屋と左右どちらかに倉庫が配置されているが、規模が大きくなると、屋敷の出入口に当たる庭の広さが異なる。敷地内に車を駐車したり、元からある倉庫にさらに倉庫が建てられているという屋敷利用がわかった。また屋敷規模の大きさによってはフクギの数、高さにも変化があり、四方合わせて約２０本以上植えられ、高さは約５m 以上とする屋敷が多い。

２　宅地割の形成

当集落の宅地割に関して饒平名の歴史に通じる上原氏にインタビューしたところ特別な共通点や基準などがあ



図２　集落侵入路６本構成と高低差概念断面図
（上図：国土地理院航空写真トレース）

るわけではなく、元々は個人が所有する土地であり、その者がブラジルへ移住した際に所有者がいなくなった屋敷から各個人に土地を分け与えた屋敷があると分かる。宅地割の形成は家柄などで決められたの背景が窺われる。

第３章　地形から見た集落の構成

１　集落縦方向路の数と位置

集落には６つの縦方向路があり、それぞれ道幅、勾配が異なる。右から順に１番出入口と振り分けていくと１番目と６番目の出入口はほぼ平坦で、道幅も広く、開けた道筋となっている。また４番出入口は他の道とは異なり、勾配がきつくなることや左右の横方向路が下りになっている辺から高低差が大きいことがわかる（**図２**）。

２　集落横方向路の特色

横方向路に関しては、１、２、６番出入口は平坦となっているが３番から４番、６番または５番から４番へ、どの道も４番へ向かって上り坂となっており先程も説明したように４番が当集落の中で高低差が大きいのは明らかである（**図２**）。

第４章　屋敷囲いから見る特質

１　屋敷内構造物の構成要素

沖縄の伝統住居は、主屋、家畜小屋、井戸といった要素で構成されているが、饒平名集落では、主屋とかつて家畜小屋であったであろう倉庫と主にこの２つの要素で構成されている。また中には井戸が設置されている屋敷もあるが、使用はされていない様子であった。またどの屋敷も主屋と倉庫の構成要素のため饒平名の伝統住居はこの２つの要素で成り立っているのではないかと考えられる。

２　敷地囲いの分類

囲いはフクギ囲い、ブロック塀、ブロック塀＋柵に分けられる。

フクギ囲いは高さが異なったり、均一になっているものが見られた。また間隔が離れて屋敷の出入口となっている。

ブロック塀はそのほとんどが一部損傷している部分が多く見られた。また高さは２ｍもなく、防犯上の心配が窺えた。

ブロック塀＋柵は高さがない分、塀の上に柵を設けて高さを補っているが、塀や柵に損傷部分が多く見られた。

３　屋敷構えの特色

各屋敷を調査した結果、グループごとにそれぞれ特徴があることが分かった（**図４**）。

Ａグループでは敷地内の建物配置から伝統的な建物形式が多く見られた。またフクギで四方に囲まれている割合が高い。

Ｂグループは玄関部分に扉や囲いに門などの建て替えや増築個所が多く見られたグループとなっている。

ＣグループはＡとＢグループの特徴を兼ね備えたグループとなっていた。

結章

以上より調査の結果は次のとおりである。各グループは集合の形と屋敷構えの形状が一致している。Ａグループの地形は平坦で敷地形状は長方形となっており、囲いがフクギで囲まれている屋敷が多い。Ｃグループも同様の囲いとするがその地形はＡグループとは対照的に斜面となっている。このことから地形によって囲いの種類が分けられていない。フクギは防風対策として植えられているが、饒平名集落は内海に面していることから台風などの影響が受けにくい利点があり、集落の正面に位置するＢグループのフクギが少ないのはそういった利点からフクギの必要性がないことを表している。

【参考文献】

1 宮澤智士「沖縄県の民家概説」(『沖縄県の民家』)『九州地方の民家（２）熊本・宮崎・鹿児島・沖縄』東林書院、1990 年に収録
2 国土地理院
3 屋部　憲右　「重要文化財上江洲家住宅の建築と風水」　沖縄県立博物館 編『久米島総合調査報告書・論文編・資料編』1995 年

分類	特徴
	・方角によって、高さが異なる ・各住居によって、フクギ同士の間隔が異なる。 ・高いところでは、約 4m近くあり、建物の劣化が少なく． 防風林としての重要性が見受けられる。
	・フクギは高いところで約 2m弱で高さに関してほとんどばらつきがない ・ブロック単体で見ると、それほど高さはなく補うかのようにフクギが植えられている
	・ブロックだけで見ると、高さは約 1.6mで柵を合わせても約 2m弱である。 ・ほとんどの柵やブロックはどこかしら損傷があり、防犯上、不安になる点が多く見られた。

図３　敷地囲い要素の３分類

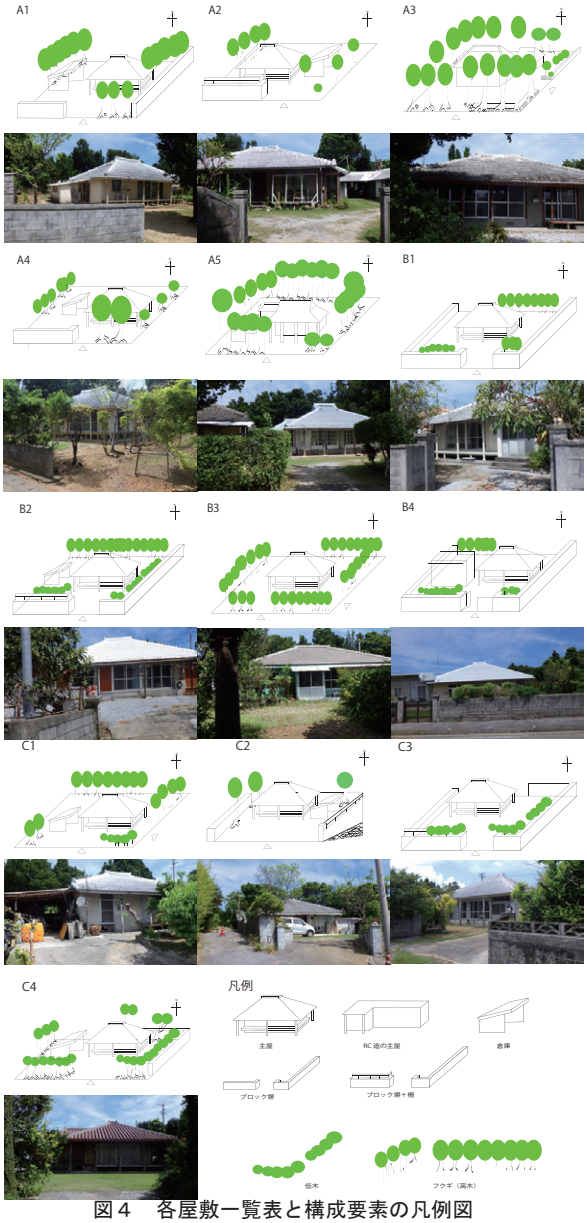


図４　各屋敷一覧表と構成要素の凡例図

日本建築界における機能主義受容に関する研究

学籍番号　K20218
名　　前　岩井春斗
指導教員　江本弘

日本建築界　表現主義　機能主義
近代建築　丹下健三　機能主義批判

はじめに

人々が生きていく上で必要な三要素（衣・食・住）は、変わりゆく社会情勢や産業革命、国際問題などにより求められる理想像へと変化を遂げてきた。また国が違えばその要素は様々である。

建築界においても、時代が経つにつれ、用いる材料や構造などが変化してきた。また、建築にはそれぞれが持つ特徴があり、それを表現するための建築様式がある。建築様式の種類は様々で、時代が変わると共に変化を遂げている。例えば、生田勉『機能主義の発達』(1948) では、19 世紀の末から今世紀までの建築思想の大きな流れは、「実用主義」「構成主義」「機能主義」「合理主義である」としている 。

また、国によっても建築様式は異なることが特徴であり、昔から欧米諸国を中心とした様式の流行が存在した。その中で近代建築史においては、「機能主義」という思想が一世を風靡した。

1 本論文の目的

本論では、近代建築の象徴となる「機能主義」という言葉が、日本で語られるようになった受容経緯の過程を明らかにする。
本論Ⅰでは、欧米をはじめとした諸外国での近代建築運動について調査し、それらによる日本建築界に与えた影響とそれらの関係性についても明らかにする。また、1920 年代から 1950 年代における 30 年間で日本建築界における機能主義が、批判の対象となった理由や「行き詰まり」と言われるようになった経緯を明らかにすることを目的とする。

本論Ⅱでは、本論Ⅰの調査を基に、日本の建築界で目新しいものとして認知されていた機能主義が、時代によって変化する傾向を一次資料を用いて分析する。

1－1 調査と方法

国立国会図書館デジタルコレクションにおける用語検索機能を用いて、1900 年代から 1950 年代における 50 年間で発行された日本語文献資料の中で、「機能主義」という言葉について調査を行った。すると、1909 年には日本語文献資料の中で「機能主義」という言葉が使われていることが確認出来た。
だが、そこで用いられた「機能主義」は心理学における機能主義を意味していた。また、教育学の教科書にも「機能主義」は頻繁に用いられていたが、本研究とは関係がないとみなし、建築と結びつけられた意味での「機能主義」を対象に調査した。

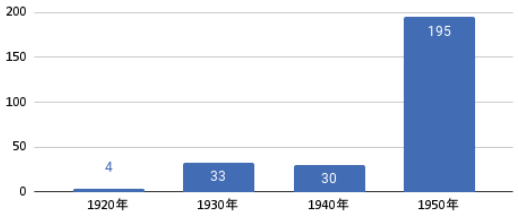
続けて、研究対象期における当時の一次史料として、より多くの文献を収集する為に、刊行書籍と同じ方式で、国立国会図書館デジタルコレクションの用語検索機能を用いて、戦前から創刊されていた建築系雑誌（『建築と社会』『新建築』『国際建築』『工芸ニュース』）を対象に、「機能主義」という言葉が使われている号数の回数について調査した。

『建築と社会』
1917 年に創設された関西建築協会（現：日本建築協会）により創刊。機能主義が最初に使われたのは 1940 年からであった。建築と社会を軸に国内外を問わず、機能主義に関する記事が記述されている。

『新建築』
1925 年に新建築社によって創刊され、現在も連載され続けている。機能主義が最初に使われたのは 1942 年からであった。1940 年代には欧州の建築における機能主義と日本建築について多く記され、第二次世界　大戦中も連載を続けた。戦後は、丹下健三と機能主義に関する情報が多い。

『国際建築』
1928 年に宮内嘉久編集事務所により創刊
機能主義が最初に使われたのは 1928 年からであった。欧州・ロシアにおける機能主義を中心に取り扱っている。

『工芸ニュース』
1932 年に商工省工芸指導書（後の工業所）により創刊。
機能主義が最初に使われたのは 1935 年からであった。
工芸をメインにした目線から建築との関連や影響なども含めて機能主義について書かれている。

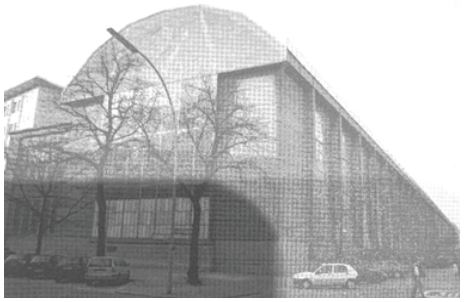


グラフからは、日本において機能主義が言われるようになった背景には大きくズレがあることが分かる。年代が経つにつれ、機能主義についての記事は増え、1950 年代にはこれまでより多く機能主義についての記事が増えた。1930 年代と 1940 年代の数字が逆転した理由としては、第二次世界大戦の影響による休載等が考えられる。

本論Ⅰ　2 ドイツ建築界と機能主義

近代建築の中でも 20 世紀に入るとこれまでより建築活動は活発になった。その一つとして、1907 年に結成したドイツ工作連盟の存在が挙げられる。建築家であるヘルマン・ムテジウス（1861 ー 1927）により集められた建築家や芸術家、職人等の、合計 24 人によって構成された連盟である。当時、ドイツはまだ工業技術が発展しておらず、それらの現状を打破するための活動が行われた。ドイツ工作連盟のメンバーの中には、ベルギーの建築家であるアンリ・ヴァン・デ・ヴェルデ（1863 ー 1957）、ドイツ建築家のペーター・ベーレンス（1868 ー 1940）、ブルーノ・タウト、ドイツ工作連盟の中心人物とされたヴァルター・グロピウス（1883 ー 1969）が在籍していた。

その中の 1 人であるベーレンスは 1907 年、電気会社 AEG の顧問に抜擢され、AEG タービン工場を設計した。他にも、グロピウスは工芸・美術・建築のための学校として 1919 年に「バウハウス」を創設。



AEG タービン工場（1907）

これらの活動を通して、日本においても「日本らしさ」を求めた動きが加速することとなる。その他にも、アメリカで起こったサンフランシスコ地震（1906）による被害が、日本人建築家に大きな影響を与えた。そうして日本では、鉄筋コンクリート造の建築として、三井支店横浜支店倉庫が誕生した。そこから日本の建築が鉄筋コンクリート主体の建築様式に進むと思われたが、大きく変化した訳でもなく一つの例に過ぎないのである。それには昔から木造建築が主体であるがために受け入れられにくかった。

Research on the acceptance of functionalism in the japanese architectural world.

Iwai Haruto

るわけではなく、元々は個人が所有する土地であり、その者がブラジルへ移住した際に所有者がいなくなった屋敷から各個人に土地を分け与えた屋敷があると分かる。宅地割の形成は家柄などで決められたの背景が窺われる。

第３章　地形から見た集落の構成

１　集落縦方向路の数と位置

集落には６つの縦方向路があり、それぞれ道幅、勾配が異なる。右から順に１番出入口と振り分けていくと１番目と６番目の出入口はほぼ平坦で、道幅も広く、開けた道筋となっている。また４番出入口は他の道とは異なり、勾配がきつくなることや左右の横方向路が下りになっている辺から高低差が大きいことがわかる（**図２**）。

２　集落横方向路の特色

横方向路に関しては、１、２、６番出入口は平坦となっているが３番から４番、６番または５番から４番へ、どの道も４番へ向かって上り坂となっており先程も説明したように４番が当集落の中で高低差が大きいのは明らかである（**図２**）。

第４章　屋敷囲いから見る特質

１　屋敷内構造物の構成要素

沖縄の伝統住居は、主屋、家畜小屋、井戸といった要素で構成されているが、饒平名集落では、主屋とかつて家畜小屋であったであろう倉庫と主にこの２つの要素で構成されている。また中には井戸が設置されている屋敷もあるが、使用はされていない様子であった。またどの屋敷も主屋と倉庫の構成要素のため饒平名の伝統住居はこの２つの要素で成り立っているのではないかと考えられる。

２　敷地囲いの分類

囲いはフクギ囲い、ブロック塀、ブロック塀＋柵に分けられる。

フクギ囲いは高さが異なったり、均一になっているものが見られた。また間隔が離れて屋敷の出入口となっている。

ブロック塀はそのほとんどが一部損傷している部分が多く見られた。また高さは２ｍもなく、防犯上の心配が窺えた。

ブロック塀＋柵は高さがない分、塀の上に柵を設けて高さを補っているが、塀や柵に損傷部分が多く見られた。

３　屋敷構えの特色

各屋敷を調査した結果、グループごとにそれぞれ特徴があることが分かった（**図４**）。

Ａグループでは敷地内の建物配置から伝統的な建物形式が多く見られた。またフクギで四方に囲まれている割合が高い。

Ｂグループは玄関部分に扉や囲いに門などの建て替えや増築個所が多く見られたグループとなっている。

ＣグループはＡとＢグループの特徴を兼ね備えたグループとなっていた。

結章

以上より調査の結果は次のとおりである。各グループは集合の形と屋敷構えの形状が一致している。Ａグループの地形は平坦で敷地形状は長方形となっており、囲いがフクギで囲まれている屋敷が多い。Ｃグループも同様の囲いとするがその地形はＡグループとは対照的に斜面となっている。このことから地形によって囲いの種類が分けられていない。フクギは防風対策として植えられているが、饒平名集落は内海に面していることから台風などの影響が受けにくい利点があり、集落の正面に位置するＢグループのフクギが少ないのはそういった利点からフクギの必要性がないことを表している。

【参考文献】

1 宮澤智士「沖縄県の民家概説」(『沖縄県の民家』)『九州地方の民家（２）熊本・宮崎・鹿児島・沖縄』東林書院、1990 年に収録
2 国土地理院
3 屋部　憲右　「重要文化財上江洲家住宅の建築と風水」　沖縄県立博物館 編『久米島総合調査報告書・論文編・資料編』1995 年

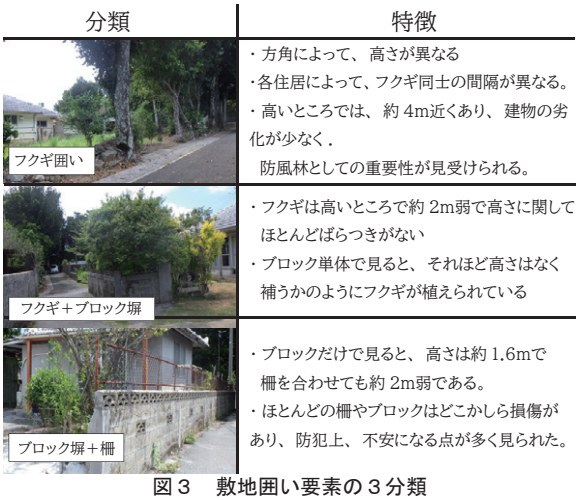


図３　敷地囲い要素の３分類

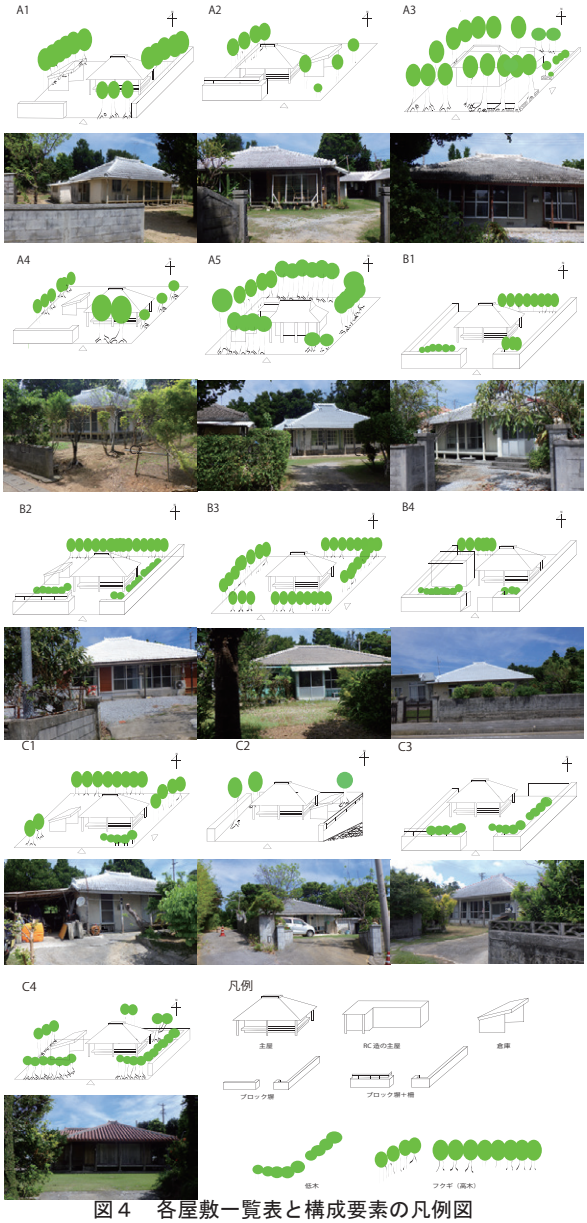


図４　各屋敷一覧表と構成要素の凡例図

新・ひみつ基地　－こどもが町の中で安心して遊ぶ－

学籍番号　K20220
名　　前　岩渕桃葉
指導教員　小梶吉隆

Seacret base　-Children can play safely in the town-

Student Number　K20220
Name　IWABUCHI Momoha
Supervisor　KOKAJI Yositaka

1. はじめに

少子高齢化が進んでいるなかで、本来力を注ぐべき子どもに関する対策が遅れている。児童虐待や不登校の相談対応件数は過去最多となり、約 800 人もの 19 歳以下のこどもが自殺するなど、こどもを取り巻く環境は深刻な状況である。子どもが追い詰められてしまう要因には家と学校という限られた居場所しか見つけられないことが関係しているのではないかと考えた。大人の都合で子どもの遊び場が減っている。そこで都会における子どもの居場所の在り方を検討する。

2. 研究背景

2.1 子どもの遊び場の現状

公園や空き地など子どもが遊ぶ場所が減少している。安全性が重視され公園のルールは厳しく変化し、自動車の普及や都市化により、空地や道路などでの手軽な外遊びが減少している。公園のルールの厳しさが増した要因は親子と地域の関係の希薄化だと考えた。公園は子どもや親にとってのコミュニケーションの場である。ただ単に公園を設置するのではなく、地域の子育てに対する支援の仕方や考え方の改善が課題となる。

また、社会教育を専門とする人の中には、放課後の時間まで子どもたちを学校内にとどめることに違和感を感じる人が存在する。「子どもの生活する場所全てに大人の目が届く必要はなく、子どもたちが自由に選べる状況が望ましい。放課後の取り組みは学校だけに持ち込まず、地域で実践する方がよい。」このように学校の先生や親だけが抱え込むのではなく、地域で子どもの成長を見守ることができると、学校や家が窮屈だと感じる子どもたちの居場所づくりにもつながる。親が外で遊びなさいというルールをつくるのではなく、こどもたちが自由に外で遊ぶという選択ができる環境をつくることが大切である。

2.2 大阪市の子供の現状

大阪市では保育園などの施設が見直され、2017 年からの 2 年間で待機児童が 325 人から 28 人へと減少している。一方で小学生や、中学生のための対策は遅れている。全国学力・学習調査において。大阪市の子どもは学力や自己肯定感などが全国平均よりも低い結果となっている。また、小学生、中学生ともにいじめ認知件数、不登校数が全国、大阪府と比較して多く、増加傾向にある。

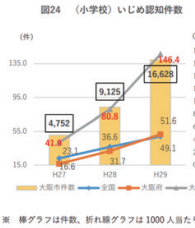


図１　小学四いじめ認知件数

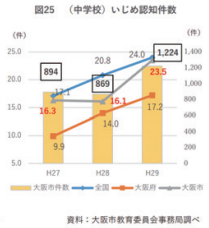


図２　中学生いじめ認知件数

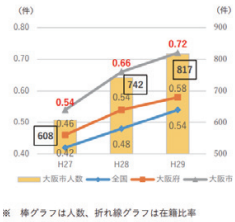


図３　小学生不登校数

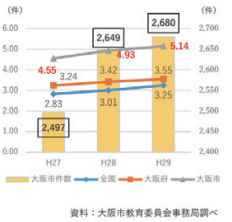


図４　中学生不登校数

2.4 子どものために必要な環境とは

こどもに関する様々な取り組みが行われているなかで、こども政策の在り方について改めて検討された。今後取り組むべき政策として「全てのこどもに、健やかで安全・安心に成長できる環境を提供する」と挙げており、その具体的な対策として、「多様な体験活動の機会づくり」「居場所づくり 」「こどもの可能性を狭める固定的性別役割分担意識の解消、 固定観念の打破 」などが挙げられている。ここに示されている対策を手助けできる施設を目指す。

3. 都市におけるオープンスペースの役割

アメリカや、ドイツでは、自動車の混雑などの課題解決や、住みやすい街にするための計画に、緑とオープンスペースが重要な役割を担う動きが進んでいる。緑やオープンスペースは子どもが自然と触れ合える大切な存在である。

本計画では、大人のゾーン、子供のゾーン、地域のゾーンそれぞれにオープンスペースを設けた。 3 つの広場は道に沿ってゆるやかに繋がり、施設と阿倍野の土地の架け橋となっている。 北東に位置する敷地の角は信号待ちで多くの人で溢れているのを見かけるため、道を広めるようにオープンスペースを設け、ベンチを設置した。

4. 計画概要

4.1 対象敷地



図５　俯瞰図

大阪府大阪市阿倍野区丸山通１丁目５−６を選定した。これからの子どものための施設のプロトタイプとなる計画にしたいため、駅までのアクセスが良く、人通りの多い敷地を選定

所在地：大阪府大阪市阿倍野区丸山通１丁目５−６
主な用途：児童館
敷地面積：2909.11m^2
建築面積：1612.96m^2
延床面積：3138.84m^2
キーワード：児童館・五感・居場所

Location ： 1-5-6,Maruyamadori,Abenoku,Osakasi,Osaka
Main Use ： Children’s Center
Site Area ： 2907m^2
Building Floor Area ： 1599m^2
Total Floor Area ： 3149m^2
Keywords ： Children’s Center,Five senses,Place

した。校区については学校の数が多く、公園の数が少ない校区を選んだ。

阿倍野区は都心から少し離れており、閑静な住宅地である。交通事情や勉強環境からみて、学区適地とされている。曽於のため、大正時代に大阪市の学校が次々と移転してき、教育施設が充実している教育区となった。しかし子どもの人口に対して子どもの居場所、公園が少ない。図書館は大人が占領しており、入りたいと思える空間ではない。

4.2 設計趣旨

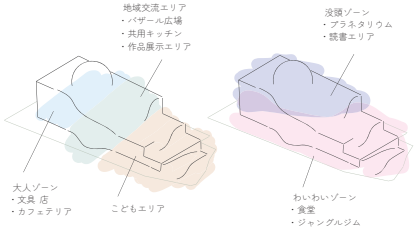
遊び場であり、居場所でもある「こどもたちのひみつ基地」を計画する。
ここで言う遊び場は
・学校になじめない、学校からすぐに家に帰りたくないといったこどもたちの居場所になる。
・地域とこども、地域と親の関係をつくり、こどもも親も孤立させない。
・地域や親の価値観をより良い方向に変える
・こどもの好きと嫌いを見つけ、好きを伸ばす。
・こどもの好奇心を刺激するような様々な体験ができる場所を提供する。
・決まった遊び方のない施設とすることで、自分で考える力をつける。
・こどもの自己決定権を大切にすることで、自己肯定感を育む。など様々な機能をもつ。

5. 提案

5.1 配置計画

子どもと大人の空間をグラデーションになるように配置する。大通りに面する方は大人も楽しめるゾーンである。子育て相談ストリート、みんなの食堂では子供を迎えに来た両親たちが子育ての知恵の共有をする。大通と反対側にはこどもゾーンを計画した。 小学校から出てきたこどもたちを招き入れるようにスロープを配置した。 こどもゾーンと大人ゾーンの中間地点には共用で使えるみんなのキッチンや食堂、作品展示エリア、地域のバザール広場を配置し、食やアートを通して地域と良い関係を築くきっかけがつくりやすい計画とした。

また、地域の子どもに対する見方を良い方向に向けるために、オープンスペースを活用する。オープンスペースを通るだけのものではなくとどまることができるように誘導することで、自動車の町から人の町へ変化させる。この計画では、子どもをきっかけとした世代を超えた交流が生まれる事が期待できる。



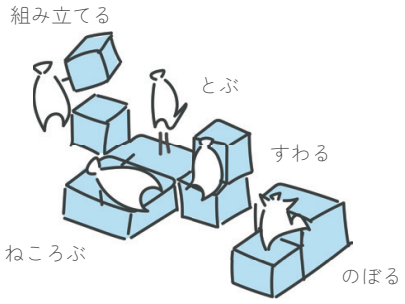
5.2 プログラム

5.2.1 五感を使う遊び

決まった遊び方のないゆらぎのある遊びができる場とした。学校では学べない、遊びから得る創造力を学ぶことができる場所であるために、子どものための空間では五感を活用した遊びができる空間を計画した。１階のがらくた博物館では異なる素材どうしでの工作の体験ができる。２回の屋外では、大きさの違う立方体の箱の中で、楽器の音の響き方がどのように変わるか、またその音が音の道を通り、新しい遊び相手との交流につながる。 ２階の屋内では視覚を使った学びがある計画とした。 ３色の赤、青、黄色の筒は重なることで違う色へと変化する。筒越しに見える友達の服の色など視覚で遊ぶことを誘導している。外観は子供ゾーンに行くにつれて、でこぼことさせることで、遊びに来た時間、帰る時間で見え方が変わるようにした。好奇心をそそる外観は影による知的な遊びを誘導する。

5.2.2 年代、人数を問わない遊び

この建物にある遊び道具は様々な使い方を想定して計画した。そのため、小学生はブロックとして遊び、高校生は机椅子として使用できる。年齢の違うこども同士が混ざって仲良く使える施設を目指した。 机の形は工夫することで１人から大人数まで一緒に使用することができる。 １人でもみんなでも受け入れる 新しい遊び仲間との交流も促しつつ、１人でも過ごしやすい小さな空間も配置した。ひとりが好きなこどもにも、友達と大勢で遊びたいこどにも対応できる計画とした。



参考文献

・内閣府，少子高齢化対策白書，2022
・男女共同参画白書，基本データ，生活時間の国際比較
・内閣府，選択する未来，委員会報告，解説・資料集，2014
・ウスビ・サコ，サコ学長日本を語る，朝日新聞出版社，2020
・総務省行政評価局，子どもの居場所に関する調査報告書，2021
・大阪市，大阪市の人口等及びこども・青少年、子育てに関する状況
・国土交通省，新たなステージに向けた緑とオープンスペース政策の展開について，2016

私のライフプラン

学籍番号　K20221
名　　前　上田 紗矢香
指導教員　根來 宏典

1. 背景と目的

現代社会は超高齢社会である。令和元年時点での 65 歳以上の人口は 3,589 万人であり、総人口に占める割合は 28.4%である。高齢化率は年々上昇しており、昭和 25 年には総人口の 5%にも満たなかったため、数値でみても高齢化社会が進んでいる事が分かる。

更には平成 30 年時点での平均寿命は男性 81.25 年、女性 87.32 年となっており、医療の進歩していない時代と比較すると約２倍の寿命であると考えられる。今後も平均寿命は延びていくことが予想され、高齢化も益々進んでいくだろう。

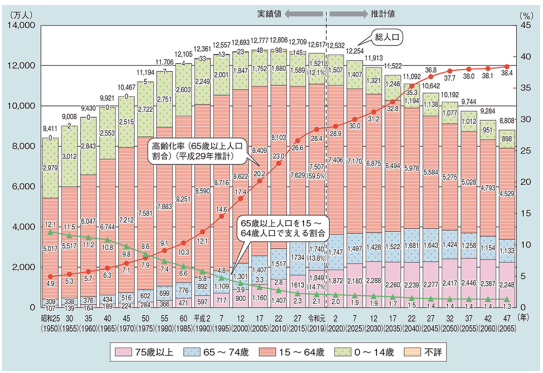


図１：高齢化の推移と将来推計
内閣府「令和４年版高齢社会白書」より

そういった超高齢社会の中、高齢者の一人暮らしや高齢者夫婦の世帯も増えていくのではないかと考えた。実際に近年は一人世帯、二人世帯が大幅に増加しており、一人暮らしの高齢者（高齢単独世帯）も増加傾向にある。内閣府が発表している 65 歳以上の一人暮らしの割合が、昭和 55 年には男性 4.3%（約 19 万人）、女性 11.2%（約 69 万人）であったが、平成 27 年には男性 13.3%（約 192 万人）、女性 21.1%（約 400 万人）と、大幅に増加していることが分かる。更に今後も増え続けるということが予想されている。

高齢者の一人暮らしの中には好んで一人暮らしをしている人もいるが、周りに頼れる家族が住んでおらず、一人暮らしせざるを得ない人や、孤独死を恐れる人も居るという。老化が進んでいくと足腰が弱くなり、一人での生活が困難になったり、気づかないうちに認知症になってしまったり、日常生活を送る上で危険があり、一人暮らし高齢者を狙った強盗、詐欺などの犯罪に巻き込まれる危険性や防犯性といった面でも、高齢者の一人暮らしは危険であると判断できる。そういった高齢者の一人暮らし、高齢者のみでの暮らしで伴う危険の対策として多世帯住居を提案しようと考えた。一緒に住むことにより高齢者のみで暮らすよりも犯罪に巻き込まれる危険性も少なくなり、一緒に住むことにより孤独死や家族に気づかれずに亡くなる方も居なくなるだろう。他者が介入するという対策もとれるが、家族が皆集まって住むことが出来れば、孫の面倒を一緒にみたり、家族団らんの家庭を築けることが出来ると考えると理想の形ではないだろうか。

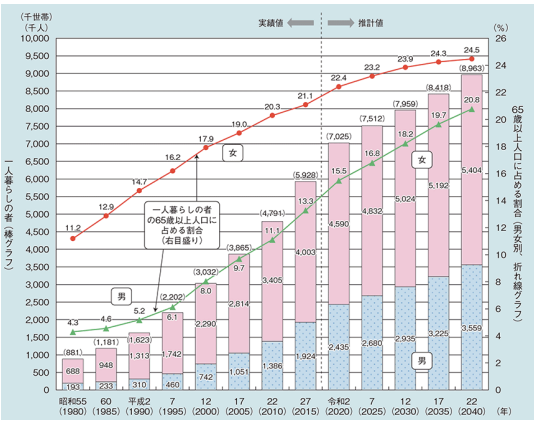


図２：65 歳以上の一人暮らしの者の動向
内閣府「令和４年版高齢社会白書」より

私自身つい最近までは祖母と一緒に住んでおり、祖母が体調を崩しても即座に対応したり出来る点や、祖母の元気な姿を間近で見守っていられる点、反対に私たちの成長を間近で見守っていてもらえる点など、メリットをたくさん感じられた。

そこで現在少し離れて暮らしている祖父母と一緒に住みたいと思い、今回の制作に踏み切った。しかし、時間が流れるについて家族が増えたり、はたまた減ってしまったり、広いスペースが必要になったり、必要なくなったりと変化が生じるものである。従来は一度建てると大きな間取りの変更や増築、減築を行う事なく生涯同じ家で終えるという家が多い。しかし、今回私が提案する多世帯住宅はその時に必要な室や空間を必要に応じて設け、間取りの変更なども積極的に行っていくようなリノベーションを繰り返し、住宅が住む人に合わせていくような家があっても良いのではないかと考えた。これに従って、5 年や 10 年で変わるライフスタイルに合わせて住宅スタイルを変えていく事により、高齢者にとっても高齢者が去った後に家を引き継ぐ人にとっても快適な暮らしが出来るだろう。

2. 敷地概要

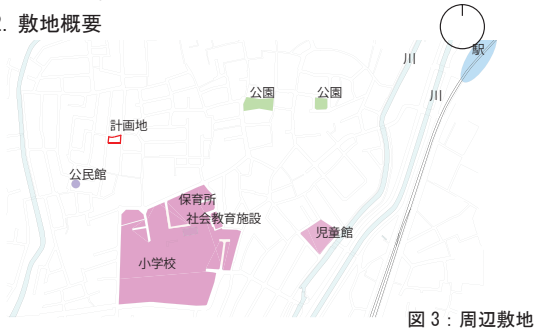


図３：周辺敷地

My Life Plan

Student Number　K20221
Name　UEDA Sayaka
Supervisor　NEGORO Hironori

所在地：大阪府寝屋川市成美町
主な用途：住宅
敷地面積：171.73 ㎡
建築面積：77.40 ㎡
延床面積：201.14 ㎡
キーワード：木造、多世帯住宅、リノベーション

Location ： Seibi,Neyagawashi,Osaka
Main Use ： Home
Site Area ： 171. 73 ㎡
Building Floor Area ：77.40 ㎡
Total Floor Area ： 201.14 ㎡
Keywords ： Wooden, Multifamily housing, Renovation

敷地は現在私が住んでいる寝屋川市であり、現在住んでいる住宅の敷地と隣地を該当敷地として計画をする。私は生まれてから現在までこの土地に暮らしており、父、母、姉２人の５人で住んでいる。

3. 計画概要

今回、私は自分の家庭を例に挙げ時間が経過する度に移り変わるライフスタイルの中でリノベーションを繰り返し、住宅が住んでいる人に合わせていくような多世帯住宅を提案する。現在５人で暮らしている家に離れて暮らしている祖父母が移り住む家を計画し、その家を０年目とする。そしてそこから５年後や10年後ずつに生活スタイルが変化していく事に様々な住宅プランを提案していく。

今回は生活スタイルに合った住宅をただ単に提案していくだけでなく、リノベーションを行っていく事で住宅の歴史を作っていくことができ、少しの変化で大きな役割を持たすといった住宅における工夫を見いだしていき、人も住宅も長く愛されるような計画をする。

０年目以降の家系図は私が想像して設定し、想定したパターン以外にも家系図は出来るが都合上10年目､20年目、40年目に二つのパターンを用意する。

各プランの繋がり図

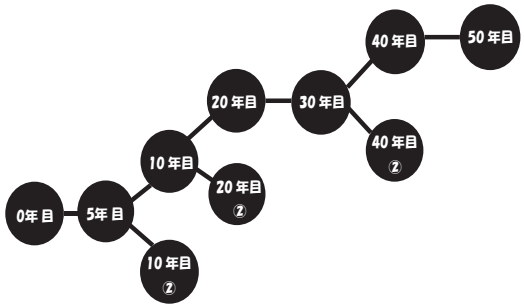


図４：プランの繋がり図

計10個のプランができ、それぞれのプランの繋がりは上部のようになる。



図５：周辺詳細図

０年目を例に挙げる。

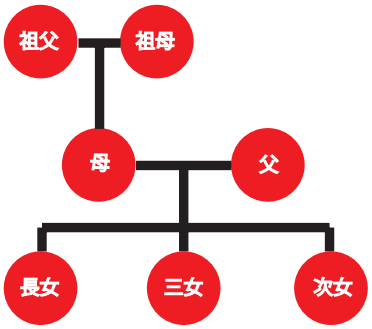


図６：０年目家系図

０年目の家系図は上部のようである。０年目は５人家族と祖父母が一緒に住む２世帯住宅を計画する。既存住宅には手を付けずに空き地である隣地に祖父母の家を増築する。既存建築の玄関とは別に祖父母の居住スペースにも玄関を計画し、１階部分２階部分共に既存建築と行き来できるように開口を設けた。10年後にリノベーションを行う事を想定し、増築した祖父母の玄関は増築部分と繋がれるよう計画をした。

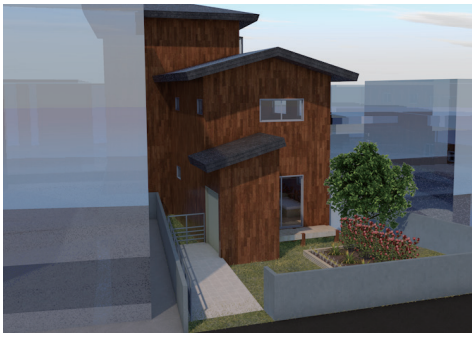


図７：０年目外観パース

4. まとめ

今回同じ敷地に10の住宅を計画したことにより人の変化により住宅が変化していくことの面白さを研究することができた。たった一つ壁を挿入するだけで空間が一気に変わり、使用する用途や人も変わってゆく。また、仕切る物も壁だけに限らずカーテンやパーテーションなどの簡易的なものを用いる事によりリノベーションにより手を加えなくとも空間を変動することができると学んだ。

今回の卒業制作でリノベーションしやすい工夫は壁を挿入したり減築したりしやすいように柱を残してしたり、後に増築することを考えて配置の計画を考慮することにより空間の有効活用を図ることができた。

家庭により祖父母と一緒に住むことに抵抗がある方でも空間の仕切り方、部屋の配置使用する室の動線を考慮する事により関わりを減らすことも増やすことも可能であるため長く多くの人に住宅を利用してもらえる良い提案になったのではないだろうか。

都市に空緑を

K20222　　上田龍弥＊
指導教員　井上晋一＊＊

＊　京都美術工芸大学　建築学科
＊＊　京都美術工芸大学 教授・工博（設計指導）

Green space in the city

RYUYA Ueda*
INOUE Shinichi**

*　Department of Architecture, Faculty of Arts, Kyoto Arts and Crafts Univ.
**　Prof. Graduate School of Applied Art., Kyoto Arts and Crafts Univ., Dr.Eng.(※ Adviser)

1. はじめに

太平洋戦争後から日本の経済は急成長してきた。その結果都市部には高層ビルが立ち並び、街路樹などはあるが自然と触れ合う機会が限られるようになっている。体を動かしつつも休憩、交流、体験のできる広場を設けることは、社会につかれる現代人のリラックスの場としての役割を担うことができと考える。このことから都市に人が集まりつつ、自由に使用ができる広場を計画する。

2-1. 現状

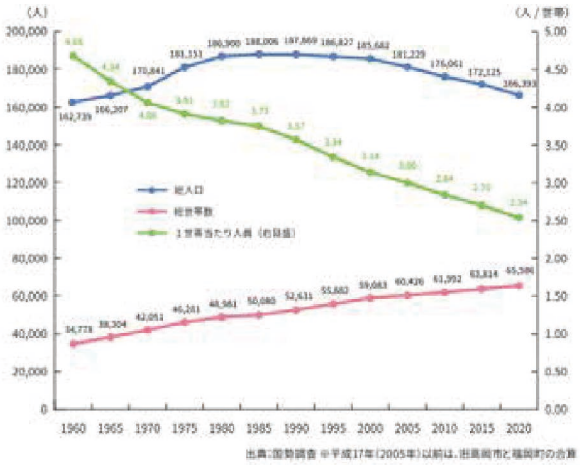
私の地元である富山市ではコンパクトシティを目指した都市開発に力を入れており、近年では公共交通の活性化に成功したことにより駅を中心とした街の発展を順調に進めている。しかし富山市に次ぐ富山県第二の都市と呼ばれる高岡市では他の地域のの抱える問題と同じように人口減少や少子高齢化に悩まされている。この問題に対し高岡市の魅力をより伝えることができる場を計画することにする。

一時期は北陸新幹線新幹線が開通したことにより観光客も増加し賑わいを見せていた高岡市だが、コロナ過による観光客の減少から高岡駅の利用者数も減少してきている。

右の図は令和４年度までの高岡市の人口と世帯数、今後予想される変動の数値を表したグラフである。世帯数が増加しているのに対し人口が減少することで一世帯当たりの人員が減少していることが分かる。高岡市でも人口を増加しようとする活動は行われているが、若者離れは増加する傾向にある。

また現代の日本では公園の面積が年々増加傾向にあるにもかかわらず、国土交通省の行ったアンケートでは自然を求める声が多いという結果が出ている。特に都市部ではまちづくりの拠点となる場所や安心して休憩できる場所である公園を望む声が多いことから、都市部に安心して日頃の疲れを癒すことのできる公園を計画する必要があると考える。

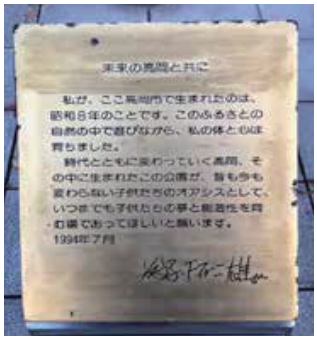
【高岡市の総人口と総世帯数】



出典：国勢調査 ※平成17年（2005年）以前は、旧高岡市と福岡町の合算

2－２．敷地の選定

計画の敷地は高岡駅前にある商店街の一角と立体駐車場のある場所とする。高岡駅周辺でも都市開発が行われているがこの敷地は駅前の目立つ場所であるにかかわらず手が付けられていない状態であるためシャッターの降りている店もある商店街と周辺にも多くある立体駐車場を敷地として選択した。また周囲には高層のビルが多く建っており高岡駅から降りてきた人たちが訪れたいと思える場所が近場に少ないため市駅に関わらず観光客の少ない地域となっている。



ドラえもんの散歩道に飾られている
藤子・F・不二雄のメッセージボード

3．計画内容

高岡市独自の魅力を伝えるために私は「ドラえもん」や「お化けのQ太郎」などの国民的漫画の生みの親である藤子・ｆ・不二雄に注目した。高岡市は藤子・ｆ・不二雄の出身地ではあるがそれに関する大きな施設もなく魅力を十分に伝えられていない。さらに「ドラえもんの散歩道」という広場には藤子・ｆ・不二雄が高岡市に向けて送ったメッセージボード

所在地：富山県高岡市下関町６－１
主な用途：広場
敷地面積：8783.84 ㎡
建築面積：1616.07 ㎡
延床面積：2166.59 ㎡
キーワード：広場・駅前

Location :6-1 Shimonoseki-cho, Takaoka City, Toyama Prefecture
Main Use plaza
Site Area : 8783.84 ㎡
Building Floor Area :1616.07 ㎡
Total Floor Area : 2166.59 ㎡
Keywords: plaza, station square

が置かれている。そこには高岡の未来への思いと当時の思い出などが書かれている。そこから私は高岡駅前に子供たちが遊ぶことのできる施設と自然のある広場を計画することによって地元の子供たちの集まる場であり観光客の集まる場所を計画することにした。

広場にはより多くの人を集めるために道路だけでなく高岡駅の地下街からも訪れることができるように地下に設けることにした。広場が地下にあることで普段は人通りや車の行き来が多い駅前であっても安心して利用できる世になっている。道路から広場に下りる階段には人が座ようになっているため通りを歩く人たちの休憩の場としても利用できるようになっている。地下街とつながっている通路から出た際に正面に広場、その奥にある施設とを直線状にすることで初めて訪れる方でも左右の視界が悪い地下にいながらもどのような敷地であるか理解しやすい配置とした。

また敷地内に数か所の店舗を配置することで計画敷地内に現在建っている飲食店や新しく入ってくる店舗などが活動できるようにした。店舗には様々な種類の店が開けれるよう間仕切り壁を減らし自由に店舗の模様替えができるようになっている。その他にも店外にはテラスを設け敷地の奥に休憩スペースを配置することで地下の広場とともに店で買った商品を敷地のどこででも食べることができるようになっている。




高岡駅方面からの図


上空からの図

5. 参考資料

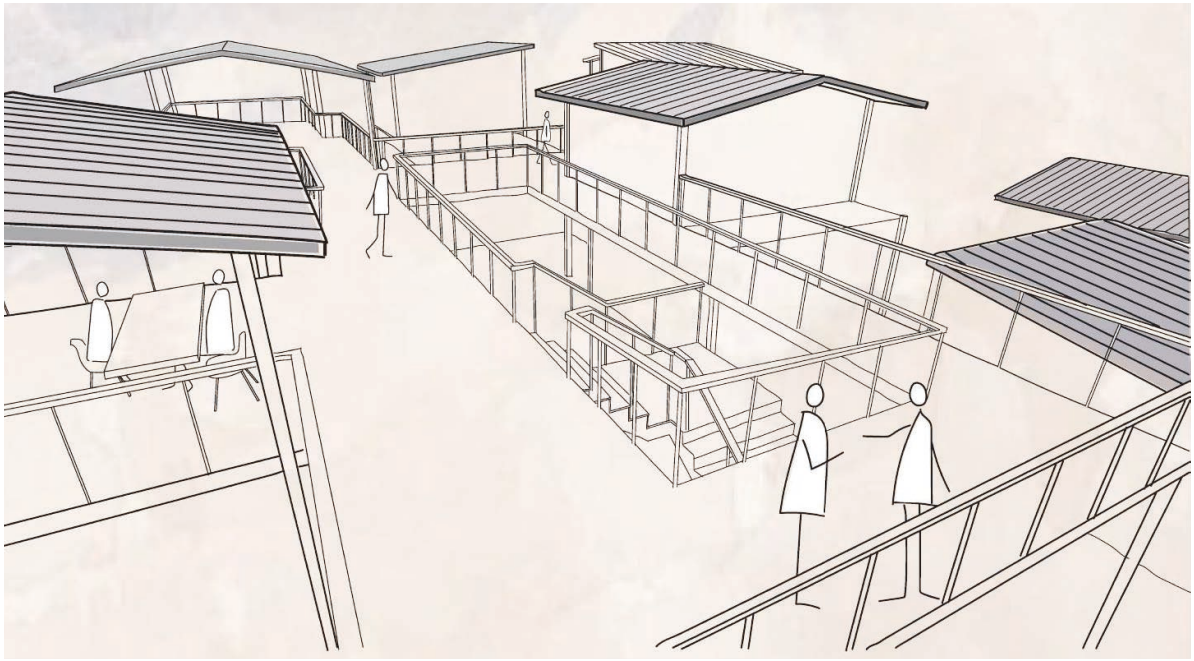
・高岡市の人口　https://www.city.takaoka.toyama.jp/shimin/shise/gaiyo/jinko.html
・高岡市総合計画第 4 次基本計画　https://www.city.takaoka.toyama.jp/keiei/shise/sesakukeikaku/4th_basic_plan_decision.html
・駅前東地区について　http://www.higashi-kaihatsu.co.jp/east-area-station
・令和３年度　都市公園利用実態調査 報告書（抄）　https://www.mlit.go.jp/toshi/park/content/001519624.pdf
・令和３年版地方財政白書（令和元年度決算）
https://www.soumu.go.jp/menu_seisaku/hakusyo/chihou/r03data/2021data/r03czb01-11.html

はじまりの場～自分らしく生きていくために～

学籍番号　K20223
名　　前　上田 怜奈
指導教員　山内 貴博

The Place of Beginning ～ To live as oneself ～

Student Number　K20223
Name　　UEDA Reina
Supervisor　　YAMAUCHI Takahiro



1 計画目的・背景

現代の公園や広場空間には排除アートが広く使われるようになった。排除アートの普及に伴いもともと地域の公園を居場所としていたホームレスは居場所を失いつつある。排除アートだけでなく社会には様々な理由があり社会からはじき出されてしまった人がいる。そこで私は、公園の美化や治安の維持のために排除されたホームレス、社会の中で生きにくさを感じ受け入れてもらえなかった人、インバウンドによってはじき出された外国人観光客を対象として社会にはじき出された人たちが最後に流れ着く「釜ヶ崎」に居場所を提案する。

2 釜ヶ崎について

2-1. 釜ヶ歴の歴史

釜ヶ崎は、元々のどかな農村地帯であったが、日本が中国・朝鮮半島に植民地を求めだしたことをきっかけに新たな植民地として開拓されることとなった。その後空襲の影響を受け一度丸焼けになるも朝鮮戦争を境に日雇労働者を対象とした簡易宿泊所、通称「ドヤ」が建設され始めそこからまたスラム化が始まる。その後、万国博覧会の開催地が大阪であったことから建築関係の仕事が多数あり、全国から日雇労働者が釜ヶ崎に集まった。しかし、オイルショックの影響を受け求人数が大幅に減少し、大暴動が発生する。その後バブル景気が到来し再び日雇労働者の需要が高まったがバブルの崩壊とともに求人数が急激に減少し、労働者の生活はまた苦しいものとなる。現在、90 年代頃まで多くあった小学校は、少子高齢化の影響を受け数が減少している。また、日雇労働者の居場所であったドヤも徐々に福祉マンションに建て替えられ始め、釜ヶ崎は「労働者の街」から「福祉の街」へと変化しつつある。現在でも多くの、ホームレスが釜ヶ崎で生活している。

2-2. 釜ヶ崎の範囲

釜ヶ崎は西成区の北端部に位置し、大阪環状線より南、南海本線高野線の新今宮駅よりも東の部分のことをいう。面積は約 0.62 ㎢で西成区の総面積の 8.4% 程である。

1 万㎢あたりの人口密度が西成区約 19,301 人であるのに対し、釜ヶ崎は約 38,280 人であり人口密度が非常に高い地域であることが分かる。



釜ヶ崎の範囲

3. 選定敷地

釜ヶ崎内の大阪府大阪市西成区萩之茶屋にあるあいりん総合センター跡地を選定敷地とする。あいりん総合センター跡地は、もともと労働福祉施設として建てられたが現在では建物の老朽化により耐震性に問題があるとされ閉鎖されている。

敷地の周辺には、JR 新今宮駅、動物園前駅があり非常に交通の利便性が高い場所である。

4. 釜ヶ崎の現状課題

・単身世帯の割合が高く、子育て世代が少ない。
・住民たちの高齢化
・あいりん総合センター跡地周辺に物が集積されている。
・個人の自己実現、釜ヶ崎の自立
・公園の管理強化による野宿者の排除
・土地が抱えるネガティブなイメージ
・西成特区構想により土地の地価上昇が引き起こされる。

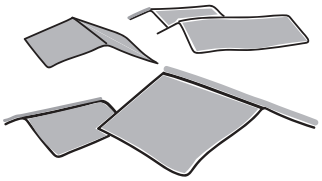
所在地：大阪府大阪市西成区萩之茶屋１丁目１１−１５
主な用途：地域交流拠点
敷地面積：9833.72㎡
建築面積：2944.84㎡
延床面積：3903.57㎡
キーワード：広場・サードプレイス

Location ： 1-11-15,Haginochaya,Nishinari-ku,Osaka-shi,Osaka
Main Use ： Open space-architecture
Site Area ： 9833.72㎡
Building Floor Area ：2944.84 ㎡
Total Floor Area ： 3903.57㎡
Keywords ： Open space,Third place

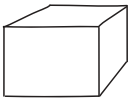
5. 計画概要

構成要素

日雇労働者が宿泊する簡易宿泊所を「ドヤ」という。
ドヤ街を象徴する要素で建物を構成する。



不規則にかかる屋根



ドヤをイメージしたユニット



ドヤ街に多く見られていた木組みのフレーム

プログラム

インバウンドによりはじき出された外国人観光客

虐待やDVなど様々な過去を持つ人また、子育てに対する不安を持ちながらも相談する社会システムが見つけられず孤独を抱える親

街の美化や治安維持のため排除されたホームレス

を対象に主に３つのエリアをつくる

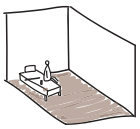
○観光客宿泊エリア
必要最低限の機能を持たせた１ユニットの簡易宿泊所。必要最低限の機能しか持たないので部屋から出て街歩きをし観光や食事を楽しんでもらうことによりエリアの価値向上を目指す。

○地域支援・子育て育みエリア
現代では共働き世代の割合が増え子育てに対する不安や悩みを持つ親も多い。一時保育施設や子ども食堂を設けることにより、子育てをする親や子どもたち自身が安心して成長していける場を目指す。

○ホームレス支援エリア
ホームレスからの脱却には「住まい」「仕事」「貯金」の３つの要素が揃うことが必要である。簡易宿泊所により一時的に住まいを提供し、敷地内に働く場をつくるなど就労のサポートを行うことで貯金をしながら段階的に社会復帰を目指す。

多様な居場所

敷地内には「拠りどころ」となる居場所が点在している。



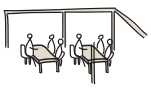
１人でリラックスするところ



集中するところ



外でのびのび



みんなでごはん



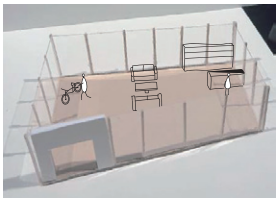
ぼーっとする



はたらくところ

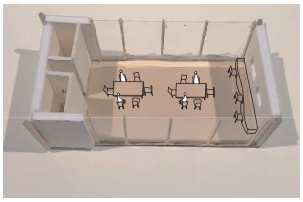
6. 施設概要

サイクルハブ受付・自転車修理所



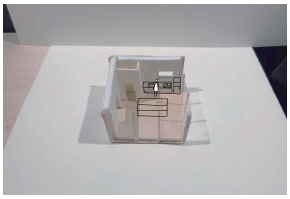
自転車に精通した人が多いホームレスが得意とする自転車修理を活かし自転車修理所を運営する。

子ども食堂



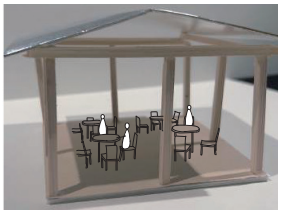
夜は子ども食堂として、昼は宿題をする場として活用できる。家に居づらい理由がある子どもに対しての居場所にもなる。

キッチン



敷地内にある畑で育てた野菜などを用いて料理する。

食事スペース



食事をしたりコミュニケーションをとる場



7. 参考文献

国土地理院　https://www.gsi.go.jp/
釜ヶ崎資料センター　http://www.kamamat.org/
今昔マップ　https://ktgis.net/kjmapw/
ホームレスの実態に関する全国調査（概数調査）結果について　https://www.mhlw.go.jp
重点的に取り組む主な経営課題（大阪市）
特定非営利活動法人釜ヶ崎支援機構

ゆず（use）　サイバーヒーリングスペース

Cyber Healing Space

学籍番号　K20224
名　　前　臼井拓海
指導教員　大上直樹

Student Number　K20224(MS 明朝 9P)
Name　Usui Takumi
Supervisor　Ooue Naoki

今回設計するものは、ネットカフェから着想を得て主にひとり空間を求める人を対象とした施設を設計した。利用者が訪れやすく温もり溢れる空間にしたいと考え「ゆず（use)」と名付けた。全体に六角形をモチーフに設計を行い、プライバシーを守りながらも重々しくならないような空間とした。

1. 選定理由

京都最大の繁華街であり、バス、地下鉄ともにアクセス良好である四条通。全面をガラス張りとすることによって Apple 京都のようなオープンさを表現したいと考えた。Apple 京都は商品を売る場ではなく、紹介する場となっている。今回はそのように紹介するような場になるのではないかと考えた。世間になかなか受け入れられてはいない個室空間。その良さについて、絶え間なく人が流れる四条通の中で１人になれる空間を提供することで、より多くの人を引き寄せられるのではないかと考えた。(図 1)



図 1

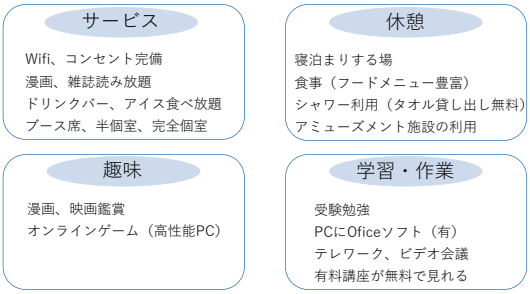


図 2

2. 個室空間を提案するに至った背景

ネットカフェを利用したことがきっかけで個室の良さに気づき、このような空間を提供したいと考えた。右図（図 2）のようにネットカフェは時間制で様々なサービスを受けられる施設となっており、店舗数は日本全国で 1100 店舗ほど分布している。「実家暮らしでなかなか１人の時間を確保できない」「人とのつながりが多くストレスを抱えている」など、そのような人にとってリラックスできる極小空間、誰にも干渉されない空間を提供し、やりたいことをできる空間を提供したいと考え、設計に取り組んだ。

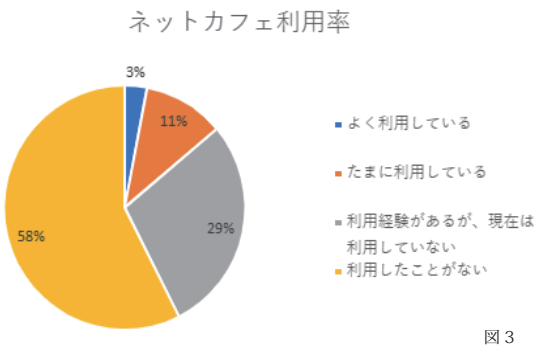


図 3

3. ネットカフェの問題点

ネットカフェは陰湿なイメージを持たれがちである。(図 3)様々なサービスを提供しているネットカフェですが、インターネットでアンケートをとられたデータを見てみると、ネットカフェを利用したことがない人が半数を上回っている。そんなネットカフェのイメージを見てみると、「ネットカフェ難民」「オタクっぽい」「セキュリティが不安」「清潔ではない」「暗い、入りにくい」「部屋がせまい」など、好評な意見もある中、どうしても陰湿さが拭えないでいる。しかし反対に、ネットカフェ難民が生まれる程のサービスの充実さ、快適さがつまっていると捉えることもできる。今回の計画では、その陰湿さを払拭し、個室空間の良さを味わってもらえる計画を目指す。

4. 設計趣旨

陰湿さを払拭した個室空間を目指す。ネットカフェを利用して個室の良さに気づけた。なのでオープンでガラス張りにし、見られるが干渉されない空間を提供する。(図 4) そうすることで陰湿さを払拭し、より多くの利用者を見込むことができる。しかしオープンにすることでネットカフェと比べると匿名性が低くなってしまう。そこで個室や、個室へつながる階段をランダムに配置することでその居場所に匿名性を出し、よりひとりと感じられる空間を提供する。またヒーリング要素として３色の色ガラスを使用している。赤では強いエネルギーを促し、黄では明るく賑やかな雰囲気を連想させ、緑ではリラックス効果を与える。

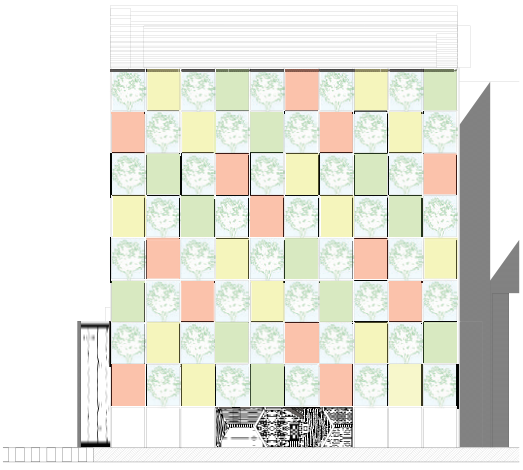
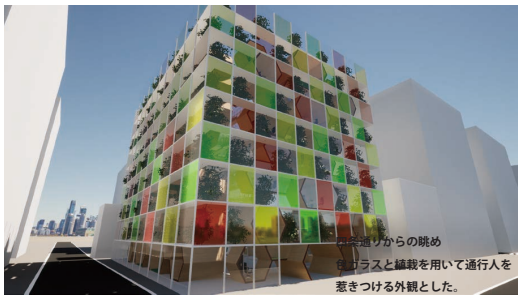


図 4

所在地：京都府京都市下京区四条通高倉東入立売中之町 83 － 1
主な用途：作業、リラックススペース
敷地面積：781 ㎡
建築面積：702 ㎡
延床面積：1858 ㎡
キーワード：個室、作業、休憩スペース

Location ： 83 － 1 Shijo-dori Takakura Higashiiri tachiuri Nakano-cho, Shimogyo-ku, Kyoto City, Kyoto Perfecture
Main Use ： work, relaxing space
Site Area ： 781㎡
Building Floor Area ： 702㎡
Total Floor Area ： 1858㎡
Keywords ： Private room, work, rest space

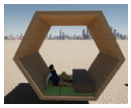






個室タイプ

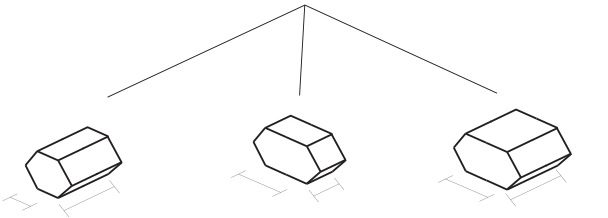



和室 30 室


チェアルーム3 2室
(1 人用)


マットルーム1 8室
(1 人用)

2000㎜×2000㎜ の個室タイプ。和室は畳に座布団があり、マットルームには床にマット、座椅子と机。和室とマットルームはゆったりくつろげる空間となっている。和室とマットルームの室数が半数を超えているのはネットカフェを参考にしたからである。ネットカフェを利用する方の半数以上はマットルームを利用されていたため、足を延ばしてくつろげる空間が求められているのだと考えこの配置数とした。チェアルームでは椅子と机を配置し、作業、勉強、テレワークなどに適した空間となっている。

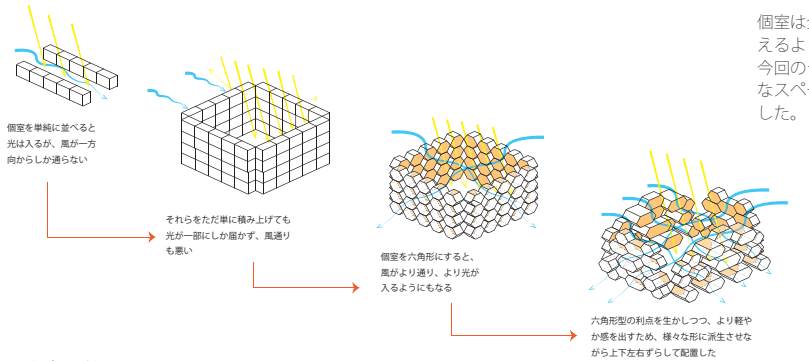



チェアルーム2 4室
(2 人用)
2000㎜×4000㎜ の個室タイプとなっており、奥に伸びた形となっている横並び席。視界が遮られているため、1 人で作業に取り掛かりたい場合に相手の目を気にせず行うことができる。


チェアルーム1 0室
(2 人用)
4000㎜×2000㎜ の個室タイプとなっており、横に伸びた形となっている向かい合わせ。真正面に相手がいるため、コミュニケーションを取る必要がある際に円滑にすすめることができる。


マットルーム2 0室
(4 人用)
4000㎜×4000㎜ の個室タイプとなっており、縦横に伸びた形となっている。作業などではなく、グループでボードゲームなど、時間つぶしやグループだけの空間を必要とした際に活用することができる。

建物の組立



個室タイプ

個室は全部で６タイプ作り、用途に応じて適した空間を使えるようにした。
今回のテーマは個室空間であるが、少人数でも使えるようなスペースも用意し、様々な人を対象に利用できるようにした。

８．参考文献

・インターネットカフェ ｜ 市場調査データ ｜ J-Net21[中小企業ビジネス支援サイト] (smrj.go.jp)
・ネットカフェのイメージ、トップは「難民」～マイボイスコム調査 (impress.co.jp)
・コロナ禍をきっかけに見えてきた「ひとり空間」の新たなかたち ｜ Meiji.net (メイジネット) 明治大学 - Part 2
・52 Surreal Photo Manipulations That I Created ｜ Conceptual architecture, 3d architectural visualization, Architecture (pinterest.jp)
・Pin on Arquitetura (pinterest.jp)
・ネットカフェの社会学 ― 日本の個別性をアジアから開く　平田知久 著

山本読書室旧蹟の調査研究

学籍番号　K20226
名　　前　枝川 樹央
指導教員　井上年和

読書室　町屋敷　歴史的建造物
土蔵　江戸時代　保存・活用

1.研究概要

1-1.研究目的

京都は歴史的建造物が多く残っている街であり、その一方でビルなど多く建ち、年々、歴史的景観が損なわれつつある。そのため、景観資源、文化資源としての町家の保存や再生が課題である。

山本亡羊読書室は歴史ある建造物であり、歴史的・文化的に価値がある。しかし、現状のままであると消滅してしまう可能性がある。そのため、将来的には改修し公開できれば山本読書室の歴史や価値を公に示すことで多くの人に認知されるきっかけになると考える。そのうえでまず、山本読書室の歴史的・文化的価値を高めていく。

これらの方針を実現するために、文化財建造物の現状を把握し、保存と活用を図るために必要な事項を明らかにすることを目的として実測、破損調査などの計画を実施する。

1-2.研究対象

京都の儒医・本草学の史跡として知られた「読書室」は、江戸時代後期から明治にかけて儒医山本家が主催した薬草園を備えた家塾である。

もと西本願寺の宗主十八世文如上人光暉の学問所にして、亡羊の父山本家八代封山号有香が儒医を以て上人の侍読を務め、天明 6 年丙午（1786）辞任させるに当たり文如上人より一堂を下賜され下京区油小路五条北入る上金仏町の自邸内に移されて 250 年を迎え、山本家代々の講学の舎として「読書室」の堂号を襲名した。

1-3.先行研究

松田 清は『山本読書室の世界』（京都新聞出版センター、2020 年）で山本読書室の現在も残っている貴重な史料についてまとめてあるが、建築については研究がされていない。

江戸時代、都に数多く多く存在した家塾の中で、唯一まとまって資料が残っている。希少性が高い資料について、山本亡羊読書室を後世に残していくための、歴史的・文化的価値づけにしていく。

2.山本亡羊読書室の概要

2-1.所在地

山本読書室は京都市下京区油小路五条上ル上金仏町に位置している。

南は五条通（国道 1 号線）に面する。いまの五条通は通りに面した土地は高層ビル（オフィス、マンション、ホテル等)が立ち並んでいる都会的な街並みとなっており、道幅が広く華やかであるが、戦争中の建物疎開という歴史を持った通りである。五条油小路通りを北へ進むと、開を免れた昔ながらの町家が改修を受けながら所々残っている。

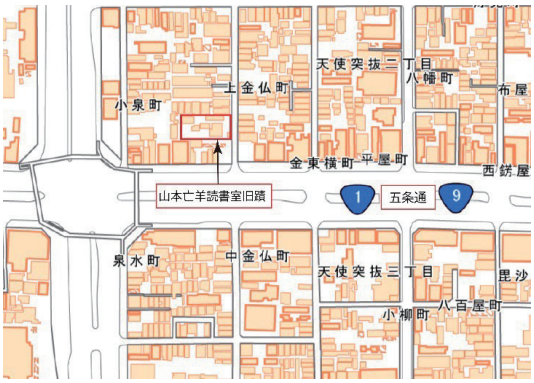


図.1 所在地地図

2-2.山本家について



図.2 封山



図.3 亡羊

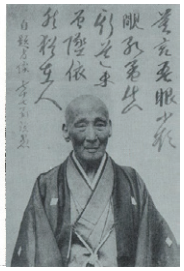


図.4 章夫

2-2-1.封山

七代目の山本封山(1742～1813 年）がそれまで侍読として勤仕した西本願寺を天明 6 年(1786）に退任にあたり、浪人帯刀の身分を以って油小路五条上ル上金仏町の現旧跡の地、儒者藤井懶斎宅跡 (と伝わる)に、文如上人から下賜された学問所「読書室」を、医療を本業としていた自宅の敷地内に移築して、講堂として経害の講義を行ったことに始まる。

2-2-2.亡羊

封山の息子、亡羊(1778 ～1859 年)は本草の研究に重きを置き、5 人の息子達(錫夫、秀夫、章夫、正夫、善夫)とそれぞれの分野(儒学・医学・薬学・本草学等)を分かち協力して、邸内に薬草園を備え、物産会や採薬を行い、寛政 10 年(1798)9 月、邸中に薬草園を開く。

2-2-3.章夫

明治 9 年(1876)章夫が読書室の跡を継ぎ私塾開業し、本草会を再開し、以降毎月 15 日開会する。読書室物産会は蛤御門の変の兵火までは読書室で行われていたが、その後は相国寺や御池校、醒泉校の場所を借りて物産会等が行われていた。

2-3.建築物の形式・特徴

2-3-1.屋敷地の特徴

山本家住宅は油小路通に面して西側に木造平屋があり、敷地奥に江戸後期に建てられた蔵が残る。通りに面して一部レンガ積の築地塀があり切妻屋根の架かる薬医門がある。敷地

の東北角に「山本亡羊讀書室旧蹟」の碑が建つ。敷地は 797 ㎡あり街の中にありながら桜の巨木をはじめ大小多くの樹木がある。他に簡易な鉄骨造のガレージと鉄骨 2 階建ての建物 2 棟がある。

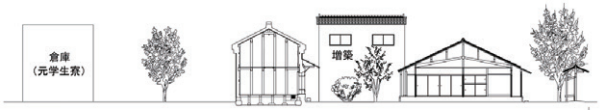


図 6.　断面図

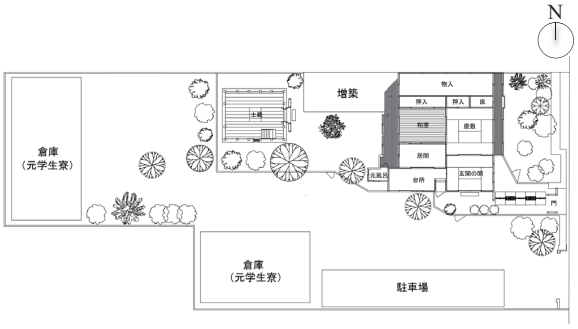


図.6 配置図兼平面図

2-3-2.建築物の構造形式

主屋は木造平屋建て/4 間取り型である。

蔵は木造二階建て/小梁で棟木を支える「鏡梁」が特徴的で、床高を上げる為か礎石の上に延べ石を配し、その上に柱を建てている。

現在の建物は南北の棟を持つ妻入り瓦葺きの平屋である。棟木や屋根梁は全てモルタルで巻かれていて確認できない。平面はほぼ田の字型の間取りで西面と東面に縁が付く。一部の和室や台所は板間に改修、西縁は軒の出の範囲内で増築されている。

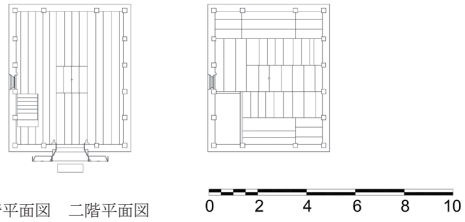


図.7 土蔵　一階平面図　二階平面図

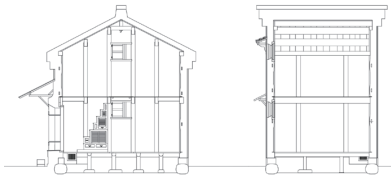


図.8 主屋　断面図



図.9 南側立面図

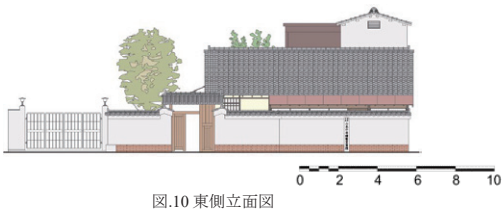


図.10 東側立面図

3.山本読書室の変遷

3-1.敷地

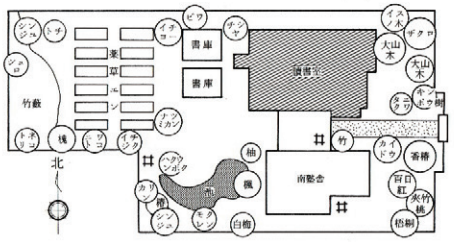


図.11 明治 8 年（1875 年）当時の読書室及び衆芳園

天明 6 年（1786）に学問所「読書室」を油小路の自宅に移築し、講堂として経書講義を行う。寛政 3 年（1791）に南隣宅地を買い取り、敷地を拡張し、寛政 10 年（1798）に薬園を開く。文化 5 年（1808）に更に南隣宅地を買い取り、薬園を拡張する。


図.12 南側立面図　復原

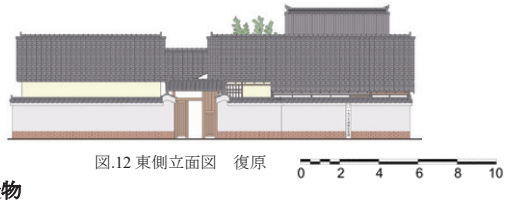


図.12 東側立面図　復原

3-2.建造物

天明 8 年（1788）に京都大火により自宅が類焼する。天保 6 年（1835）に蔵が上棟する。この蔵が現存の建物である。元治元年（1864）に蛤御門の変の兵火により読書室まで延焼する。明治 7 年（1874）松原不明門失火で油小路の本宅まで延焼する。1 年後の明治 8 年（1875）に読書室を再建する。この読書室が現存の建物である。明治 18 年（1885）に東門が新築される。現薬医門の建設時期は不明なため同一の門かは不明である。明治 43 年（1910）に南蔵が蟻害のために自然崩壊する。昭和 41 年（1966）、昭和 43 年（1968）に元学生寮棟を新築し、現存する建物である。平成 22 年（2010）頃に主屋を介護のため部分改修を行う。

3-3.歴史的・文化的価値

主屋は明治 8 年（1875）建築で、築 148 年である。

蔵は江戸時代の天保 6 年（1835）上棟で、約築 190 年である。元治元年（1864）の蛤御門の変により大火があったため、京都市内に江戸時代の蔵は希少である。

五条通り側に高層建築が建ち並ぶなど、周辺地域にはかつての京都らしい町並みが失われる中で、貴重な外観となっている。また、「京都を彩る建物や庭園」「歴史的風致形成建造物」の選定を受けている。

「山本読書室」跡の蔵から、山本家歴代が蓄積した数万点の貴重史料群が発見され、現在、京都府立京都学・歴彩館に寄託されている

4.結論

山本読書室は町屋敷として、歴史的・文化的価値があるものと考える。その上まず多くの人に知ってもらう必要がある。

山本家には相互扶助、質素倹約を旨とする家訓が残され、その精神は今の時代にも人々の胸をうつものであり、この精神性を残すことが歴史的にも価値があるものと考える。

亀岡商工会館再生計画

学籍番号　K20228
名　　前　大石佳世
指導教員　生川教授

Kameoka Chamber of Commerce and Industry Revitalization Plan

Student Number　K20228
Name　Oishi Kayo
Supervisor　Professoe Narukawa

1. はじめに

私の生まれ育った亀岡市は市域の約７割が山林であり、桂川の源流である保津川流域にあるなど多くの自然に囲まれている。亀岡の自然と融合した建築を設計することによって、一人でも多くの人に亀岡の自然の魅力を知ってほしい。

2. 研究の背景と目的

サンガスタジアムの開設により、以前に比べ亀岡市外からも多くの人が訪れるようになった。更に、サンガスタジアム周辺では新しいまちづくりの計画が進んでおり、中でも新築住宅街のソダチマチは特に子育て世帯から注目されている。しかし、サンガスタジアムで試合やイベントが開催されていない日はサンガスタジアム及びサンがスタジアム周辺は閑散としている。新しいまちづくりに合わせ亀岡の特徴である自然を生かした建築を設計することにより、スタジアム周辺及び亀岡市全体の活性化を目指す。

3. 亀岡市の計画

3-1. 第５次亀岡市総合計画

亀岡市のあらゆる施策や取り組みの基盤となる最上位計画（2021 ～ 2030）であり、亀岡市を取り巻く社会、経済の大きな流れやポストコロナ時代を展望しながら、市民や各種団体、NPO、事業者などあらゆる主体が共有するまちの将来像を示し、その実現に向けた指針として策定されている（表 1)。

3-2. 亀岡駅北周辺地区都市再生整備計画

地域の歴史・文化・自然などの特性を活かした個性あふれるまちづくりを実施し、全国の都市の再生を効率的に促進することにより、地域住民の生活の質の向上と地域経済・社会の活性化を図るため、平成 25 年度から平成 29 年度までを計画期間とし策定された（表 2)。

4. 調査内容

サンガスタジアムでサッカーの試合が行われている日と行われていない日のスタジアム周辺の人の分布状況を調査し、サンがスタジアム周辺で人が多く集まる場所と集まらない場所の特徴を分析する。

5. 選定敷地

サッカーの試合が行われているる日のサンがスタジアム周辺で特に人の集まりが多かった場所は、駅前のかめきたサンガ広場とサンガスタジアムの入り口付近であった。反対に、保津川付近には全く人の集まりがなく、人の流れが亀岡駅からサンガスタジアムまでで途絶えてしまっている。そこで本制作の敷地として保津川に面して立地している亀岡商工会館を選定した（図 2)。（サンガスタジアムから徒歩１分）敷地の目の前には保津川が流れ、広大な山々が広がり（図 3)、かつては商工会議所として利用されていたが、現在は利用されていない。

6. 亀岡商工会館

6-1. 歴史（表 3)

1958 年に保津川下りの乗船施設として保津川観光会館が建設され、一階は保津川下りの乗船券売り場と待合室、二階と三階はエントランスやホテル、四階は宴会場として利用されていた。開業にあたり盛大なセレモニーが行われれ、当時の亀岡市の観光の拠点とされていた。亀岡商工会館が所有権を買い取り、1973 年に亀岡商工会館として改修され、その後 1999 年に亀岡商工会議所が移転し現在に至る。

6-2. 現状

桂川の改修事業への協力要請を受け、敷地の一部が買収されることから解体されることが決まっている。それに伴い、解体工事に係る一般競争入札が実施され、亀岡商工会議所の活動拠点整備を目的とした「新・商工会館」公募型プロポーザルが実施された。



（図 1) 敷地周辺

（表 1) 第５次亀岡市総合計画

目指す都市像
人と時代に選ばれる　リーディングシティ亀岡
重要テーマ
子育てしたい、住み続けたいまちへ
スポーツ、歴史、文化、観光の魅力で産業が輝くまちへ
世界に誇れる環境先進都市へ
だれもが安心して暮らせる防災・減災、セーフコミュニティ、多文化共存のまちへ
次代をリードする新産業を創出するまちへ

（表 2) 亀岡駅北周辺地区都市再生整備計画

大目標	水と緑が調和する賑わいともてなしの新たな亀岡の顔づくり
目標1	亀岡の魅力を実感できる「行ってみたい」まちづくり
目標2	自然・景観の素晴らしさと駅前の利便性の高さを活かした「住みたい」まちづくり
目標3	賑わいやもてなしを支える「ふれあい・助け合い」のあるまちづくり



（図 2) 亀岡商工会館



（図 3) 保津川

（表 3) 亀岡商工会館の歴史

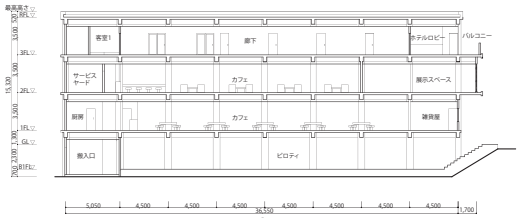
年号	主な出来事
1907年	保津川遊船株式会社が設立
1948年	京阪自動車株式会社が川下りの権利を買い取る
	保津川遊船株式会社を新たに設立
1949年	京都観光株式会社が保津川下り乗船場(亀岡市追分町下島40-1)
	の所有権を買い取る
	京都観光株式会社は保津川遊船株式会社へ商号変更
1957年	保津川遊船株式会社が本社を亀岡市追分町下島40-1に移行
1958年	**保津川遊船株式会社は乗船場に替わり保津川観光会館を社屋として新築**
1964年	保津川遊船株式会社の経営権が親会社によって阪急電鉄に売却
1969年	保津川遊船株式会社は阪急興産株式会社に商号を変更
1970年	保津川遊船企業組合が発足
	阪急興産株式会社は本社を大阪に移転
1972年	亀岡商工会が保津川観光会館の所有権を阪急興産株式会社から買い取る
1973年	**改装工事が行われ亀岡商工会館として完成**
	亀岡商工会議所設立
1999年	亀岡商工会議所がガレリアかめおかへ事務所を移転
2023年	**解体予定**

所在地：京都府亀岡市追分町下島 40-1
主な用途：商工会館
敷地面積：2,231m^2
建築面積：442m^2
延床面積：1,590m^2
キーワード：リノベーション　川

Location ： 40-1,Shimojima,Oimake-cho,Kameoka-si,Kyoto
Main Use ： Chamber of Commerce and Industry
Site Area ： 2,231m^2
Building Floor Area ： 442m^2
Total Floor Area ： 1,590m^2
Keywords ： renovation　river

7. 計画内容

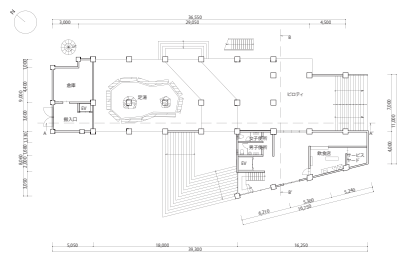
リノベーションにより亀岡商工会館を再生させる。敷地の買収される部分は取り壊された後に公園施設備のために利用されることになっているが、今回の計画では建物全体の躯体を残し、リノベーションにより亀岡商工会館を再生させる。誰もが気軽に足を運べるような場所にし、かつての保津川観光会館のようなにぎわいのある建物となることを目指す。



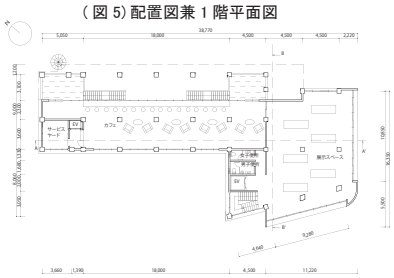
（図 4)A–A’ 断面図



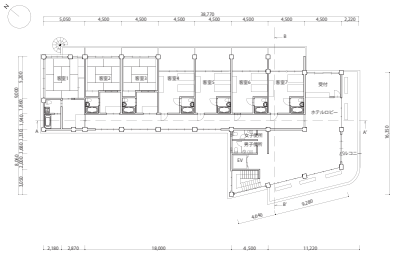
（図 5) 配置図兼 1 階平面図



（図 6) 地階平面図



（図 7)2 階平面図



（図 8)3 階平面図

8. 参考文献

・第 5 次亀岡市総合計画
・亀岡駅北周辺地区都市再生整備計画
・亀岡市都市計画マスタープラン
・亀岡商工会議所　新・商工会館（仮称）整備事業に係る公募型プロポーザル実施について　https://www.kameokacci.or.jp/proposal220801
・亀岡商工会議所　亀岡商工会館解体工事に係る一般競争入札の実施について（公告）　https://www.kameokacci.or.jp/%e4%ba%80%e5%b2%a1%e5%95%86%e5%b7%a5%e4%bc%9a%e9%a4%a8%e8%a7%a3%e4%bd%93%e5%b7%a5%e4%ba%8b%e3%81%ab%e4%bf%82%e3%82%8b%e4%b8%80%e8%88%ac%e7%ab%b6%e4%ba%89%e5%85%a5%e6%9c%ad%e3%81%ae%e5%ae%9f%e6%96%bd/
・一般社会法人リファイニング建築・都市再生協会　https://refining.or.jp/
・リファイン建築へ 建たない時代の建築再利用術 青木茂の全仕事　2001 年 1 月 13 日発行
・〜こんな会社の物語〜　保津川観光ホテル　https://www.hozugawakudari.jp/blog/%ef%bd%9e%e3%81%93%e3%82%93%e3%81%aa%e4%bc%9a%e7%a4%be%e3%81%ae%e7%89%a9%e8%aa%9e%ef%bd%9e%e3%80%80%e4%bf%9d%e6%b4%a5%e5%b7%9d%e8%a6%b3%e5%85%89%e3%83%9b%e3%83%86%e3%83%ab

鳥羽水族館リノベーション計画

学籍番号　K20229
名　　前　大久保 開斗
指導教員　生川教授

Toba Aquarium renovation plan

Student Number　K20229
Name　Okubo Kaito
Supervisor　Professor Narukawa

1. はじめに

私は小さい頃に魚など水生生物を観察するのが好きで、三重県鳥羽市にある鳥羽水族館へ、よく足を運んでいた。館内に入ると、自分が海の中を探検しているような感覚で、魚の写真をたくさん撮って遊んだ思い出がある。海の中には美しい世界が広がっていて、魚にも色々な種類があり個々に多様な特徴を持っているという発見をした経験がある。私が幼少期に多く学びを与えてくれた特別な場所、そんな鳥羽水族館を新たに進化させたい。



（図 1）鳥羽水族館外観パース

2. 研究目的

水族館は時代とともに「水族館のあり方」が変化している。古くから歴史を持つ鳥羽水族館と、近年に開館する新しい水族館では違いがあると感じる。そこで、従来型の水族館に受け継がれている条件と新しい水族館で提案されている条件を整理し、それらを融合させることで、鳥羽水族館を新たに進化させたい。

また、現在も鳥羽水族館は多くの観光客や多くの学生が修学旅行や遠足などで訪れることから、鳥羽市のランドマークとなるような建築を目指し、鳥羽市の活性化に資する計画とする。

3. 現状分析

3-1. 水族館の意義・定義

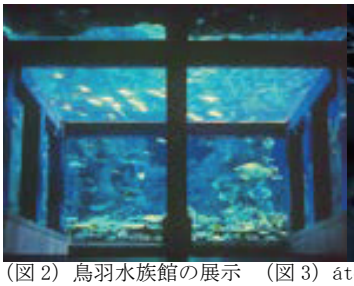
『水族館』は博物館法（第一章第二条）により『博物館』の一つとされている。博物館法による『博物館』とは、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教育、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関のことをいう。そして、『博物館』と『水族館』の違いは過去の遺産や美術品を取り扱うか、現在生きている生物を取り扱うかというところにある。『博物館』のテーマは『過去』であり、『水族館』のテーマは『現在と未来』であると考える。

3-2. 水族館に求められる条件

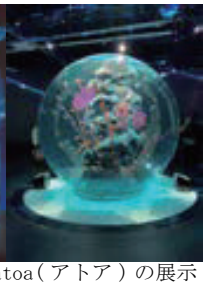
従来型の水族館を「鳥羽水族館」、新型の水族館を「átoa（アトア）」と定義したときに、水族館に求められているものに変化がある。従来型の水族館では生物の飼育に力を入れられており、飼育環境が良い。反対に、飼育環境を優先することによって、デザイン性や観察する側の優先度が低いのが特徴的である。新型の水族館では、生物の魅せ方に力を入れられており、デザイン性が良い。反対に、デザイン性を優先することによって、飼育動物が豊かに暮らすことの優先度が低いのが特徴的である。（表 1）（図 2.3）

（表 1）鳥羽水族館と átoa（アトア）の比較

	鳥羽水族館	átoa（アトア）
開館年	1955年	2021年
規模（延べ床面積）	大（25,281㎡）	小（5,780㎡）
場所（所在地）	海岸沿い（三重県鳥羽市）	海岸沿い（兵庫県神戸市）
設計	大成設計	大成設計
設計主旨	飼育環境を優先しデザイン性が疎か	デザイン性を優先し飼育環境が疎か
飼育種	1,200種	100種
飼育数	30,000点	3,000点
展示方式	順路なし	順路あり
運営	民間	民間



（図 2）鳥羽水族館の展示



（図 3）átoa（アトア）の展示

3-3. 鳥羽水族館について

3-3-1. コンセプト・特徴

「順路がなく自由に観覧できる水族館」「飼育種類数日本一の水族館」「日本で唯一ジュゴンに会える水族館」「感動を与え続ける水族館」

3-3-2. 歴史

1955 年にミキモトを訪れる観光客を楽しませるという目的で鳥羽水族館が創設され、1990 年に場所を移転し 1994 年には新鳥羽水族館と生まれ変わりました。（表 2）

（表 2）鳥羽水族館の歴史

年号	主な出来事
1955年	ミキモト真珠島を訪れる観光客を楽しませようと、初代館長の中村幸昭が創設。
	『魚類プール』『オープン水槽』『天然水族館』を持つもの。
	熊野灘の多様な魚種と、ガイド嬢の活躍が施設の見どころ。
1957年	『回遊水槽』を持つ本格的な水族館施設に変化する。
1965年	『天然水族館』を拡張しイルカ類の飼育を開始する。
	10周年を記念とした研究室『魚の病院』が完成する。
1969年	400トンプールを持つ海獣施設『マリンスタジアム』が完成する。
1975年	昭和天皇・皇后両陛下をお迎えする。
1976年	世界で初めてスナメリが誕生。
1977年	ジュゴンの飼育が開始される。
1980年	ジュゴン繁殖のための『マーメイドホール』が開館。
1983年	アラスカからラッコが到着。『オーシャンホール』で飼育される。
1984年	日本初の赤ちゃん『チャチャ』の誕生。
	日本中に『ラッコブーム』を起こす。
1990年	第一期部分が移転される。
1994年	大成建設が設計・監理し、全館完成。（現在の形）
	生態展示と観光やリゾートなどレクリエーションの概念を共存させた施設づくり。
	本館時代の約4倍にスケールアップした。
1996年	アフリカマナティ2頭が入館。
	海牛類であるジュゴンとアフリカマナティの2種を飼育展示する世界で唯一の水族館となる。
2002年	『水の回廊ゾーン』が完成。
2004年	累計入館者数5000万人突破。
2005年	開館50周年を迎える。

3-3-3. 施設の概要

鳥羽水族館の年間入館者数を分析すると、夏に多くの人が鳥羽水族館へ訪れることが多いことが分かる。（表 3）

3-3-4. 敷地と敷地周辺

敷地：三重県鳥羽市鳥羽 3-3-6
鳥羽市は真珠養殖発祥の地であり、鳥羽水族館などの観光スポットや宿泊施設が多い観光都市である。そして、「日本で一番海女の多いまち」として有名である。

3-3-5. 鳥羽水族館基本図面

鳥羽水族館基本図面（各階平面図、配置図、断面図、立面図）は一般公開されておらず、令和５年８月８日に三重県志摩建設事務所総務・管理・建築室・建築開発課を訪れ、三重県情報公開条例第６条第１項の規定に基づき、鳥羽水族館建築計画概要書、配置図の写しを入手した。

4. 計画内容

今回の鳥羽水族館リノベーション計画では、「新駅の開発」と「既存の海側メインストリート部分の改修」を行う。

4-1.「新駅の開発」（図 4）

「新駅の開発」では、元鳥羽水族館の地に新駅『鳥羽の入口』を建築し、その一角に船着き場を設け、海路を活用した動線計画を新たに行う。そうすることで、鳥羽駅から鳥羽の観光名所まで距離が離れている問題、鳥羽の観光名所が個々に分断されている問題を解消する。また、鳥羽水族館へのアプローチが陸側からでなく、海側からのアプローチができることによって「既存の海側メインストリート部分の改修」につながる。

4-2.「既存の海側メインストリート部分の改修」

「既存の海側メインストリート部分の改修」では、鳥羽水族館基本図面をもとに、計画コンセプト『海に潜る感覚』を目指し設計を行う。具体的に鳥羽水族館の飼育環境の良さと、展示をより良く魅せる建築の融合を目指し、鳥羽水族館を新たにバージョンアップさせる。改修範囲は、現在ある展示空間、メインストリートの躯体を残し、海側の改修を行う。

5. 計画イメージ

5-1. 展示計画のスタディ（図 5）

水族館の展示スタイルは人の空間、魚の空間を相互に工夫することで無数に考えられる。計画コンセプトである『海に潜る感覚』を感じられる空間を目指す。

5-2. 提案（イラスト、断面）（図 6）

鳥羽水族館北東海岸線を掘り下げ、実際の海を水槽と見立てた展示方式を提案する。水槽のアクリルは観客の頭上に水が覆い被さるようなアーチ形状を使用する。魚を呼び込む仕掛けとしてフィッシュゲートを海中に設計し、ゲートをくぐると生物が快適に過ごせる空間が広がり、その中では実際の海で生物が生活するすがたを魅せる。

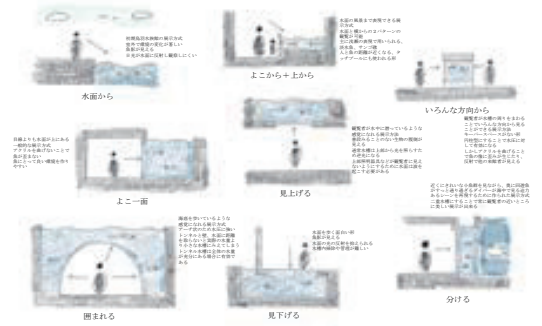


（表 3）月ごとの入館者数 2015 ～ 2022

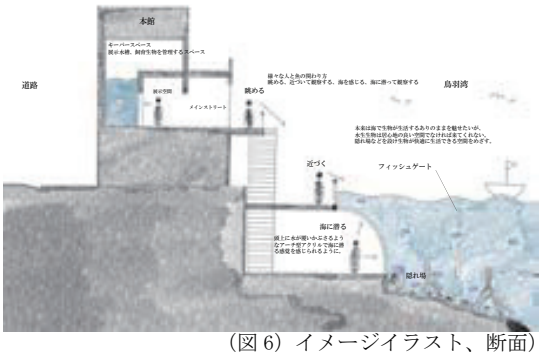
	2022	2021	2020	2019	2018	2017	2016	2015
1 月	46,493	24,134	59,448	51,860	53,097	53,833	52,978	51,260
2 月	29,845	21,526	46,250	47,120	47,465	47,744	49,439	47,107
3 月	73,688	49,205	21,008	70,383	67,150	73,037	69,002	75,856
4 月	58,872	36,873	7,633	65,941	54,893	54,368	52,036	56,947
5 月	96,331	35,874	7,812	83,666	75,124	75,483	58,495	91,009
6 月	60,057	29,741	23,164	59,045	52,224	53,256	59,475	58,587
7 月	84,310	59,699	51,292	70,815	68,305	73,301	70,592	75,408
8 月	146,865	94,916	61,377	131,311	127,639	135,516	132,263	142,866
9 月	82,380	38,154	67,265	83,828	82,779	81,405	88,326	98,288
10 月	87,624	65,514	79,430	74,796	72,104	78,325	82,150	82,567
11 月	90,571	88,021	83,664	64,968	61,753	64,849	62,937	69,181
12 月	76,963	73,859	54,959	56,477	52,286	51,040	52,295	54,777
合計	933,999	617,516	563,302	860,210	814,819	842,157	829,988	903,853



（図 4）鳥羽の入り口イメージ



（図 5）人と魚の関係スタディ



（図 6）イメージイラスト、断面）

6. 参考文献

〔建築設計資料〕110 水族館　建築思潮研究所・編　建築資料研究所　発行
水族館の設計法―水生生物の展示水槽を核とする空間のつくり方　安田幸一（東京工業大学大学院教授）　協力 / 東京工業大学安田研究室
鳥羽水族館年報 ANNUAL REPORT OF TOBA AQUARIUM （1989 ～ 2002、2017 ～ 2023 年発行）
鳥羽水族館ホームページ https://aquarium.co.jp/
鳥羽水族館基本図面
博物館法
Google Map Earth
国土地理院　基盤地図情報
日本の美しい水族館 銀鏡つかさ 著
イラストで読む 建築日本の水族館 五十三次 宮沢洋 編

「まち」で暮らす

－住み続けられる老後の都市内生活拠点－

学籍番号　K20230
名　　前　大田杏奈
指導教員　新海俊一

はじめに

要介護者のために、風光明媚な場所に介護施設を建築する。果たしてそれは、介護に携わる人々にとって充実を得られるのであろうか。

近年、「介護虐待」という言葉を耳にすることが増えた。厚生労働省の調べによると、コロナ禍により、高齢者が介護施設の職員やホームヘルパーなどから受けた虐待は、2022 年に過去最多となった。

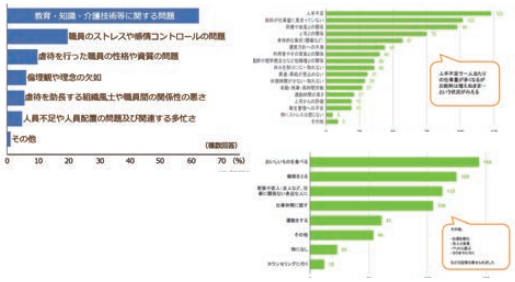
また、少子高齢化は年々進んでおり、都市部に隣接した衛星都市では、高齢化が顕著に現れている。

この二つの視点から、今介護施設に求められていることは何なのか、建築を考える上で何ができるのかということについて考える。

1 現状と目標

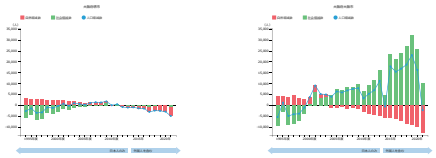
1-1 介護職の現状

厚生労働省の調べによると、虐待が起きた要因は複数あるが、「職員のストレスや感情コントロールの問題」が23%と多くを占めている。（図 1）ストレスの原因は、人間関係や勤務条件に対する不満が多く、非常に働きにくいと感じた。（図 2）また、ストレスの解消法をみると、特別なことをしているわけではなく、普段の生活を充実させており、息抜きを必要としていることがわかる。（図 3）



1-2 高齢者人口の割合と介護環境

高齢者の増加は今後、都心部で爆発的に増えると予想されている。現状では、大都市部においては社会的人口の増加によって高齢者の増加がそこまで現れてはいないが、衛星都市では社会的人口の減少がみられるため、高齢者の割合が増加しており、全体の人口は大幅に減少していることがわかる。（図 4）



高齢者が増え、老人ホームが増えていくのかと思いきや、政府は脱施設化を目指している。グループホームよりも、デイサービスや介護老人保健施設の利用を推奨しており、高齢者の在宅復帰を目指している。在宅復帰ができるようになるためには、基本的な生活を一人、または夫婦で行い、地域との交流も活発であった方がよい。しかし、高齢者には自分の足で買い物に出かけたり、交流の場を求めて外出したりすることはそうかんたんにできるわけではない。ましてや人里離れた山奥の老人ホームに入居していた高齢者が在宅復帰を目指すのは、困難であると思う。

この二つの点から、都市部に介護施設を計画する需要は高まっているといえる。

1-3 必然的な交流の場

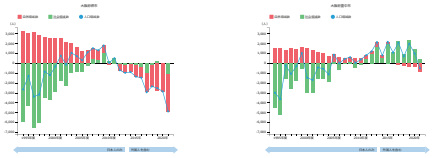
この問題について、建築で解決できることとしては、「地域とのコミュニケーションの促進」、「都心部での計画、周辺施設の充実」が考えられる。介護者のストレスケア（負担の軽減）、高齢者の基本的な社会生活への復帰、これらを考慮して介護施設を都市部に計画し、両者の充実をもたらすことを目標とする。また、介護施設周辺に設ける交流の場として、食料品店や生活用品店を主とした複合施設を敷地内に併設する。隣接して設けることにより、都市生活の延長として、老後生活拠点をつくることができる。必然的に多世代交流ができ、無理のない生活を送ることができる。

また、施設の中にいる介護関係者だけでなく、まち活性化を促し、まち全体で介護する意識を地域住民に定着させ、施設の中にいる高齢者も地域の一員としての自覚を持つことができると考える。

2 建築の概要

2-1 敷地の選定

敷地は、大阪府堺市堺区大仙町 2、大阪女子大学跡地にする。堺市は大阪市に次いで人口・面積が二番目の都市であり、南に隣接する。大阪市内へのアクセスが良く、交通量も多い。大阪府内の他の都市に比べて社会的人口が減少傾向にあり、市内の高齢化が爆発的に増加している。（図 5）



敷地の東側には 2019 年に世界文化遺産に登録された「仁徳天皇陵古墳」があり、敷地の南側には大仙公園がある。古墳のおかげで、まちが緑地化されており、周濠には野生の鴨や魚が生息している。都市部でありながら、自然豊かな場所である。

2-2 敷地周辺

2-2-1 仁徳天皇陵古墳

3 世紀から 7 世紀の約 400 年間、大王や王（豪族）が亡くなると、土と石を使って高く盛った大きな墓を造った。この墓を古墳とよび、造っていた時代が古墳時代である。全国に 16 万基以上はあるといわれる古墳のなかで、日本

Liveing in the “city”

-An urban living base for retirement where you can continue to live-

Student Number　K20230
Name　　OTA Anna
Supervisor　SHINKAI Shunichi

所在地：大阪府堺市堺区大仙町２
主な用途：老人ホーム
敷地面積：43754m^2（7582m^2）
建築面積：3800m^2
延床面積：5620m^2
キーワード：高齢者福祉・住居・デイサービス

Location ： 2 Daisencho,Sakai-ku,Sakai-shi,Osaka
Main Use ： Nursing Home
Site Area ： 43754m^2（7582m^2）
Building Floor Area ：3800m^2
Total Floor Area ： 5620m^2
Keywords ： Welfare for the Aged, Dwelling, Day care

最大の古墳が堺市にある仁徳天皇陵古墳である。古墳の陵域は濠を含めて約 47 万平方メートルと、甲子園球場が 12 個も入る広さで、世界三大墳墓の一つに数えられる世界に誇る文化遺産である。古墳を造るには、1 日最大 2,000 人の人々が働いても 15 年以上かかったといわれている。



2-2-2 大阪女子大学跡地

大仙キャンパスの閉鎖時点では一括して学校法人に売却するという案が有力だったが、取得を名乗り出る学校法人はなく、2010 年までに西側は売却されて住宅街となった。

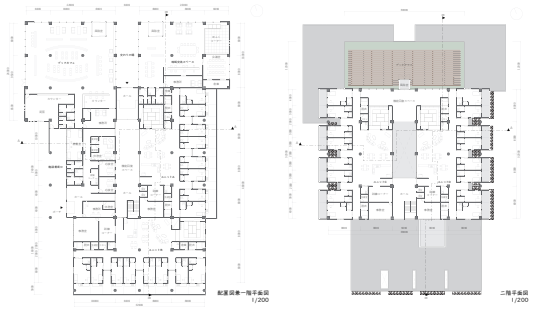
残りの仁徳天皇陵に面した一帯は、2012 年に堺市が百舌鳥古墳群のガイダンス施設用地として購入した。建物の解体工事は2015年1月に始まり､同年末までに完了したが、2018 年 1 月現在も更地にはなっておらず、各門やキャンパス内の階段などの土木施設およびテニスコート等は放置状態である。ガイダンス施設は 2018 年に着工・2019 年度末に完成予定であるが、利用されるのは敷地のうちもっとも仁徳天皇陵に近いテニスコート跡地が中心で、キャンパス跡のメイン部分の利用計画は 2018 年 1 月現在決定していない。散歩している人が多く､広場として使われている。





2 建築計画

ユニットをA - Dの４単位に分け、８人で１つのユニットとした。各ユニットには畳の空間を設置し、施設でありながらも落ち着けるような工夫をした。１階居室にはテラスを設けて、採光を十分に確保し、家庭菜園などができるようにした。２階の居室にはベランダを設けている。１階にはブックカフェと地域交流スペースを併設させて、ガラス張りにすることによって介護施設部分と一体感を持たせられるようにした。これらに囲まれた介護施設への入り口を「交わりの場」とし、介護施設の疎外感を感じさせないようにした。１階の機能回復コーナーは吹き抜けにし、２階の機能回復コーナーと馴染むようにした。この部分の天井ハイサイドライトになっており、施設の中心に十分な採光を確保することができる。屋外テラスを設けて、施設の敷地内にいても「まち」に溶け込めるようにした。



参考文献

1）厚生労働省　介護・高齢者福祉
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/index.html

2）堺市博物館仁徳天皇陵百科
https://www.city.sakai.lg.jp/kanko/hakubutsukan/collection/mozukofungun/kofun.html

田舎で過ごす時間
～自然のなかのレストラン～

学籍番号　K20231
名　　前　太田陽那
指導教員　杉本直子

Spending time in the Countryside
-Nature Restaurant

Student Number　K20231
Name　OTA Haruna
Supervisor　SUGIMOTO Naoko

計画背景

近年、少子高齢化や人口減少、過疎化が日本全国で進んでいる。この影響により、公立小中学校の統廃合は進行し続け、毎年約 450 校ほどの学校が廃校となっている。

一方で、現在日本全国にある廃校施設の約 8 割は様々な用途で活用されている。廃校を有効的に活用することで、維持管理費の縮減、地域コミュニティの維持・活性化や産業振興など、様々な効果が期待される。

計画敷地のある島田市においても、1990 年から 2020 年の 30 年間でも約 5,000 人ほど児童生徒数は減少している（図 1）。「1 学年 1 学級」、「2 学年 1 学級」というような、学校の小規模化を避けるために、島田市内の小中学校の再編が計画されており、今後も 5 つの小学校が統合される計画があったりと、学校の統廃合は積極的に行われていくと考えられる（表 1）。

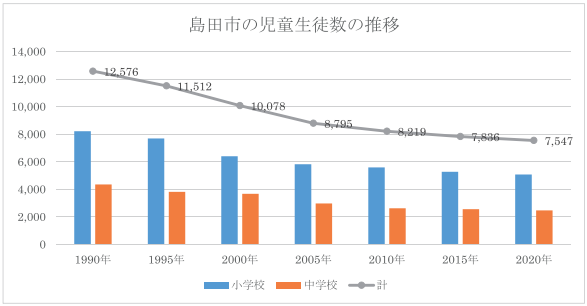


図 1　島田市の児童生徒数の推移

（1）北部地区及び島田第一小・島田第一中学校

北中学校と島田第一中学校の統合	伊太小学校、相賀小学校、 神座小学校、伊久美小学校と 島田第一小学校の統合
令和３年４月	令和６年４月

（2）初倉地区小学校

湯日小学校と 初倉小学校の統合	初倉南小学校と 初倉小学校の統合
令和３年４月	再編について検討を継続する

表 1　島田市の学校再編計画

計画目的

長い間、地域の拠点のひとつとして地域住民に親しまれてきた場所であるこの小学校を、今後も長く残るものにしたい。そのためには、話題性があるだけではなく、何度も来たいと思ってもらえるような魅力的なリノベーションを行う。

「田舎だからこそできること」に重点を置いた計画をし、この地域の魅力を惹きだす。また、地域の人やそれ以外の人にとって気軽に集まれる施設にして、人と人との交流を促し、高齢者が外出するきっかけとなるようにしたい。

さらに施設周辺の、夜には人も車も通らなくなり街灯がほとんどない「こわい」といったイメージを改善し、夜でも安心感のある街にするために、ストリートデザインを提案する（図 2）。



図 2　施設周辺の昼（左）と夜（右）の比較画像

計画敷地

計画敷地は、静岡県島田市にある。島田市は人口減少や少子化が進んでいる。（図 3）。市内の小さな田舎まちにある初倉南小学校の敷地・校舎、その周囲の道路・農地を活用する計画を行った。高速道路や空港の建設によって以前ほど自然豊かな土地とは言い難くなったようだが、まだまだ自然が残っており、静かでのんびりとした雰囲気があり「田舎らしさ」の感じられる地域である。

東名高速道路のインターや富士山静岡空港からは車で数分の場所にあるため車でのアクセスは良い（図 4）。観光客にとっては手軽に「田舎」を体験できる場所として良いと考え、この敷地を選んだ。しかし駅からは遠く、近くのバス停はバスの本数が少ないため公共交通機関を利用してのアクセスは良くない。

すぐ近くには内科のクリニックがあるため、そこを利用する人が施設に立ち寄ることが期待できる。ただし、若い年代の人が集まったり遊んだりできるような場所が周囲にほとんどないため、施設を訪れるための目的が必要である。

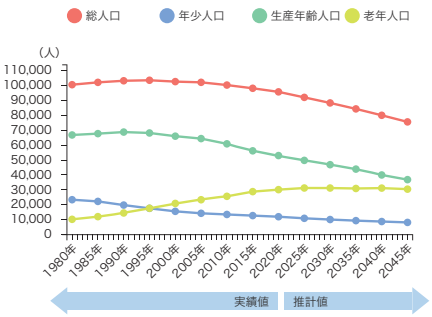


図 3　静岡県島田市の人口の推移

計画提案

地元住民にとって思い入れのある場所であり、さらに、ワークスペースや吹き抜け、中庭、屋外広場など、特徴的で魅力的な部分が多い建物なのでできるだけ現状に変更を加えず、校舎を活用する。

「自然」と「食」をテーマにした施設を計画する。地域の農家と連携。捨てられるはずの規格外の食材を提供してもらい、レストランやカフェのメニューに使う。施設に来た人が稲や野菜などを育てる体験ができる。

年齢関係なく、のんびり過ごしたい人も、体を動かしたい人も満足できる、まちの公園となるような存在にする。グラウンドを芝生にして、ウォーキングコースをつくる。ウォーキングコースは小学校の敷地を囲む道路からグラウンド内まで一体にして、回遊性のあるコースにする（図 5）。また、夜にはウォーキングコースに明るさを足す（図 6）。



図 4　計画敷地周辺図

所在地：静岡県島田市南原 10
主な用途：公共施設
敷地面積：35,870㎡
建築面積：2,757㎡
延床面積：3,999㎡
キーワード：小学校　コンバージョン　自然　食　人とのつながり　こども　お年寄り　開放的

Location ： 10,Minamihara,Shimada,Shizuoka
Main Use ： Public facility
Site Area ： 35,870㎡
Building Floor Area ： 2,757㎡
Total Floor Area ： 3,999㎡
Keywords ： School, Conversion, Nature, Food, Connect, Child, Elderly, Open



図５　ウォーキングコース　　図６　川沿いの様子（夜）

ダイアグラム

地元住民と観光客、こどもとお年寄りなど、出身も年齢も異なる人たちが「自然」と「食」をとおして交流できる施設（図 7）。①広場とのつながり、解放感。②眺望を楽しむ（図 8）。③畑で農作物を植える・育てる・収穫する体験ができる。④こどもたちがテラスに出て土遊び、野菜や花を植える。⑤カフェから飲食スペース・テラスまでのスムーズな動線。⑥壁の多い閉じた空間を学生のための学習スペースにする（図 9・10）。



図８　２階レストランからみる田園風景

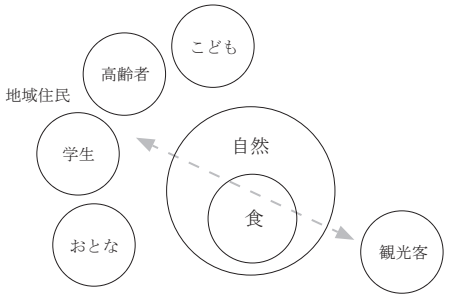


図７　ダイアグラム１

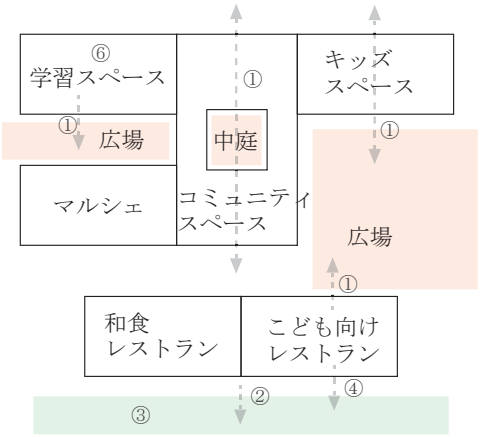


図９　ダイアグラム２

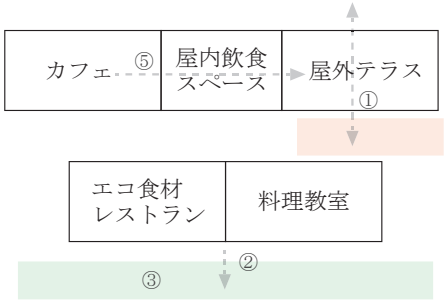


図 10　ダイアグラム３

この計画を通して

廃校の活用方法は様々である。この計画のように豊かな食体験を通じて、田舎まちの魅力を体験してもらうことで地域コミュニティの活性化、地域の産業の振興、地元住民やその他の人々への地域の魅力発信に繋がると良いと考えている。今後さらに、地域の特徴や魅力を活かした廃校の有効活用が促進されることを期待する。

参考文献

・浅井秀子（2022）『鳥取県の公立小学校におけるコンバージョンによる廃校活用実態』
・林田大作（2022）『奈良県における廃校小学校の現状と廃校校舎の利活用に関する研究－奈良県下の自治体へのアンケート調査を通して－』
・山崎亮（2012）『ソーシャルデザイン・アトラス』鹿島出版会
・日本建築学会（2014）『まち建築　まちを生かす 36 のモノづくりコトづくり』彰国社
・一般財団法人建築保全センター（2018）『公共建築のリノベーションコンバージョン 個別解を導くためのガイドブック』
・小谷和也（2022）『リノベで暮らしを変える間取りのレシピ 100』エクスナレッジ
・『島田市立小中学校再編計画』
https://www.city.shimada.shizuoka.jp/fs/1/9/1/0/4/4/_/8_29saihenkeikaku.pdf
・『廃校舎の利活用と今後の課題』
https://www.jichiro.gr.jp/jichiken_kako/report/rep_miyagi36/06/0602_jre/index.htm
・『初倉南小学校 HP』
http://hatsunan-e.shimada.ed.jp/
・『南池袋公園案内図』
https://www.city.toshima.lg.jp/340/shisetsu/koen/documents/160715_minamiikebukuropark_1.pdf

曾祖父の家のリノベーションと過疎地域の問題解決

学籍番号　K20232
名　　前　大槻晟惟
指導教員　安田光男

Renovation of my grandfather’ s house and solving problems in depopulated areas.

Student Number　K20232
Name　　OTSUKI Sei
Supervisor　　YASUDA Teruo

1. 研究背景

1960 年代、高度経済成長が起こった。
田舎の農村部から三大都市圏へ流出する者が多く、田舎と都会の人口の変化が生じ、これらを皮切りに田舎の人口は増加することなく、減少の一途をたどり始めた。日本の人口は 2000 年代初頭には戦後初めて死亡者数が出生者数を上回り自然に人口が減少し始める事態となった。日本全体で自然減が始まり、もとより減少傾向であった農村部の人口が増加することは無く、働き手の減少による地域活性の衰退、集落の高齢化によるコミュニティの縮小、転出による空き家の増加などの問題が浮き彫りになり、対策が求められ始めた。

2. 研究課題

人口が減少をしている都道府県から課題を見つけるため調査をする必要がある。そこで本研究では 47 都道府県のうち人口減少が 2 年連続ワースト 1 位（2023 年時点）である京都府の地域を対象とした。京都府は全体で人口減少が進んでいるが、主にその減少が著しい京都府以北の
亀岡市、南丹市、綾部市、福知山市、舞鶴市、宮津市、京丹後市のうち、内陸であり人口が少数であり、曾祖父の家がある綾部市西方町を研究対象地に設定し、課題を「京都府綾部市の人口減少抑制と空き家問題の解決」とした。

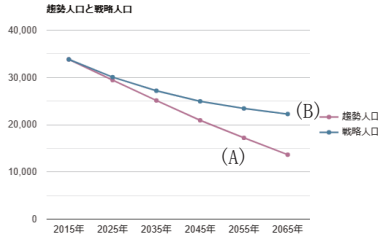
3. 綾部市の現状と問題

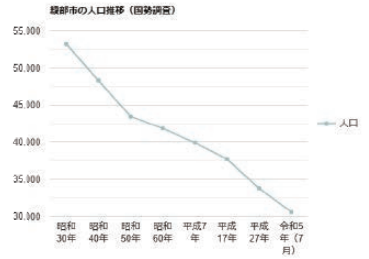
綾部市は京都の北部にあり、亀岡市と福知山市の間に位置する市である。農村の田園風景と緑の山々が広がり、のどかな場所となっている。昭和の画家である有路佐一はこの綾部市に生まれ、海外で執筆活動を行なった後帰国し、綾部市の大自然の美しさ、素晴らしさを表現し後世に残すべく書の制作に没頭したほどである。綾部市は農業の他に「綾」の意味である製糸が盛んであり、「GUNZE」の発祥の地とされており、現在も工場が置かれている。

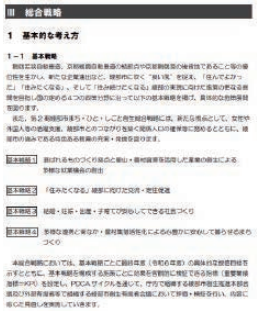
綾部市の推計人口は昭和 30 年の 53,235 人をピークに減少を続け、令和 5 年には 33,821 人とこれまで約 19,500 人もの人口が減少した。人口の減少とともに空き家が増加し、市が管理するほどまでになっている。綾部市は働き手の増加と地域活性を促進するため､「移住立国あやべ」というホームページを立ち上げ､移住のあれこれや問題点などポータルサイトの役割を担っている。しかし、未だ人口は減少傾向であり、人口増加の具体的な案は創出されていない。

4. 綾部市の目標とそれに基づく提案

綾部市は現在の人口の減少の傾向に基づいた趨勢人口（A）の傾斜を緩め、戦略人口（B）へと転換出来るよう主な目標を掲げている。この目標が達成されれば 2065 年には趨勢人口と戦略人口の差が約 7000 人となり、人口の流出を抑えられる。







5. 目標から読み取る事の出来る課題点

・空き家だけでなく、導入しやすい住居の提案をする必要がある。
・類似問題地域の研究内容によると移住者の
職業は自営業かフリーランス（7 事例中 6 事例）であり、移住を導入しやすい職業が限られている。
（移住先で新たな仕事はしない）そこで、移住先で新たな職業が出来るように提案する必要がある。（農業体験など）

6. 問題解決と提案

・今現在ある移住の形は
現住地→移住先　であるが、
現住地→仮の移住先→移住先（空き家）
現住地→仮の移住先→現住地（元の家）
といった短期の移住を体験することが出来る「仮の移住先」をつくる事で、現住地から移住先までのグラデーションとなる場所となり移住を疑似体験でき、移住のハードルを低くすることが出来る。
・農業体験、森林資源を活用できる木材加工場を造ることで新たな職業の雇用を創出させ、地域活性につなげる。

7. 基本計画

・４カ月程度の短期滞在者向けの居住スペースとして四棟が連続している集合住宅を新築設計、長期滞在者兼管理者向けの居住スペースとして曾祖父の家をを改築
・農業体験を目的とした野菜の農地、米の栽培
・職としての森の木の製材所、事務所の設計
・地域住民、当施設の交流スペース、来客時の集会所の設計
・野菜、米などの販売を目的としたマルシェの設計

所在地：京都府綾部市西方町滝ヶ谷
主な用途：集合住宅，集会所，製材所
敷地面積：3112 ㎡，2500 ㎡
建築面積：834.65 ㎡
延床面積：960.11 ㎡
キーワード：古民家再生，SDGs，茅葺屋根，過疎地域問題

Location ： Takigatani,Nisigata-cho,Ayabe-city,Kyoto
Main Use ： apartment complex,meeting place,sawmill
Site Area ： 3112 ㎡,2500 ㎡
Building Floor Area ： 834.65 ㎡
Total Floor Area ： 960.11 ㎡
Keywords ： Old house regeneration,SDGs,Thatched roof,
Depopulated area problem

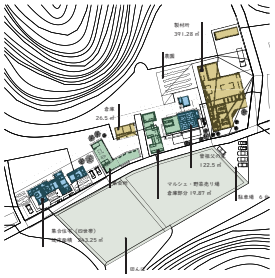
8. 計画敷地

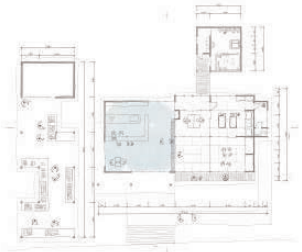
京都府綾部市西方町滝ヶ谷
北側敷地　約 3112 ㎡　南側敷地（田スペース）　約 2500 ㎡
・綾部市の中でも山奥に位置し、車通りが少なく自然豊かな場所である。宮津市、舞鶴市、福知山市に同所要時間で行く事が出来る。
・50 年前まではこの２倍以上の田園の面積があったが、植林され今に至る。
・７軒ほどあった家も４軒が老朽化で朽ち果て、１軒が空き家になっている。２軒は現在も住人がいる。



9. 配置計画

道路を挟んで北側に施設、南側に田園の敷地としている。
曾祖父の家（管理棟）を中心に西側に四世帯の居住棟、東側に製材所を設けることで職と住のエリアを分けるようにしている。




マルシェ・曾祖父の家図面


集合住宅図面

10. まとめ

地域が過疎化してしまう理由は、人口の都市部への流出が主な原因である。農村部はこれまでつながりのあったコミュニティの密度が減少し、点在してしまうことで交通の面や食のスーパーなどライフラインが不便になっていると感じた。曾祖父の家の地域でも現在進行形で起こっている事であり、この問題について取り組んでみようと思った。過疎化や人口減少はなるべくしてなっており、止める必要のない問題であるという意見もあるが、地域の歴史や人の記憶を出来る限り無くしていくべきではないと私は考えている。今後も過疎化の将来について考えて行きたいと思う。

11. 参考文献・参考事例

里山ながや・星野川　アトリエ・ワン
北沢建築工場　三澤文子　稲山正弘
那須の週末住宅　野沢正光建築工房
都路地区公的賃貸住宅・集会所　出口敦（監修）
1906　Barn2　Coussee goris
天川村南日裏定住促進住宅　成瀬・猪熊建築設計事務所
海陽ハウスビレッジ　京智健建築設計事務所
東峰村古民家ヴィラ　あんたげ　納谷建築設計事務所＋ＯＹＡ
ミラノシカ　designbuildFUKUOKA 2nd
福神の森　吉村理建築設計事務所
ＢＷＴあすとぴあ工場　小嶋一浩＋赤松佳珠子
道の駅しょうなん　てんと（直売所棟）　桔川卓也
地方創生大全　著　木下斉
京丹後のまちなみ・建築　京丹後市史編さん委員会
移住立国あやべ　HP
綾部市　HP
過疎集落における生活環境圏デザインに関する研究　香川県男木島における移住者増加の事例研究
過疎地域における持続的居住デザインに寄与する移住に関する研究　香川県男木島における移住者増加の事例研究
4048 農村村の地域再設計を視野に入れた低炭素化対策に関する研究
6020 子育て世帯の過疎地域への移住・定着の実態とそれを支える取り組みに関する研究－ 鳥取県八頭郡智頭町を対象として一
6025 大都市圏過疎地域における移住者コミュニティと地域との関係性に関する研究　その１：金谷地域の概要と歴史
6026 大都市圏過疎地域における移住者コミュニティと地域との関係性に関する研究　その２：移住者コミュニティまるもについて
6027 大都市圏過疎地域における移住者コミュニティと地域との関係性に関する研究　その３：コワーキングスペースまるもと金谷地域との関係性
6043 過疎地域における移住者の住まいの取得方法と交流に関する研究一広島県豊田郡大崎上島町を対象として一

6109 過疎地域の暮らしに関する調査研究　一古殿町を対象にした意識調査　その１


入口パース


マルシェ


曾祖父の屋根を見上げる


製材所パース

社会への扉～曲線から生まれる居場所～

学籍番号　K20233
名　　前　大橋 未果
指導教員　根來 宏典

1. 背景と目的

1-1 現代社会が抱える問題

近年、日本の精神障害の方の数は増加傾向にある。在宅と施設入所を合わせると 392 万人、実に 30 人に１人が精神障害の方である。

特にうつ病など、気分障害の患者数が増え、長引く不況などによる労働環境の悪化や、生活不安などのストレスの増加が原因と考えられる。精神疾患を患うと閉鎖病棟に入院することになるのだが、退院する際に新たな問題が発生する。突然社会へ放り込まれてしまうと、社会での居場所がなく精神を患ってしまった方々には不安が付きまとい、また入退院を繰り返してしまう。

閉鎖病棟の現状においては、このような社会復帰に特化した施設を利用する親病院の多くは、社会復帰への熱意はあっても、敷地が狭く、病院内の作業やレクリエーションは思うままにいかず、外勤作業を試みても、職場訪問など病院外で働く職員の手が足りなく、就労自立させるには困難である。

そこで、必要なのは閉鎖病棟を退院した方々を社会復帰に向けて支援する施設である。

主な概要としては、雇用されること及び住居の確保が困難な者を一定期間入所させて、精神障害者が自活することができるように、低額な料金で、必要な訓練を行ない、及び職業を与えることにより、その者の社会復帰の促進を図る施設である。

このような施設には地域の住民の理解を得ることが重要視される。活気を失うことがないよう、人が興味を持つことができるような建物にする必要がある。そのためには、カフェや利用者がつくるパンを売ることで、話題性を高める。利用者がカフェのホールスタッフとしても働き、コミュニケーション能力や判断力を養う場とする。

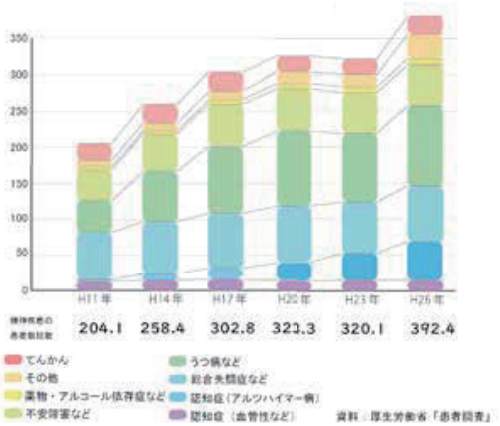


図１　精神疾患の患者数

Door to society ～ A place born from curves ～

Student Number　K20233
Name　　OOHASHI mika
Supervisor　NEGORO hironori

1-2 敷地選定



図２：敷地見取り図

敷地に選んだのは「京都府長岡京市下海印寺上内田」という場所で、阪急「西山天王山駅」から徒歩７分の場所に位置する。第二外環状道路（高速道路）が周辺にあり、この高架下には地域コミュニティを高める公園や、お年寄りのスポーツ交流、ゲートボール場がある。小泉川が流れており、山のほうの川に進むと高速道路がある中でホタルが生息し、毎年多くの地域の人々が見に来る。

高速道路を境目に北東と南西に地域が分かれており、北東は人々の暮らしやすさが求められており、スーパーやコンビニ、病院などが充実する。一方で、南西の地域には住宅地であり、山に近いことから、自然豊かな景観を壊されないようにしている。敷地は南西部分に位置し、敷地の周辺には田んぼがあり、夏の夜にはカエルの鳴き声が鳴り響く。仕事から帰ってきた患者が自然のふるさとに帰ってくるかのように心を落ち着ける場所とする。そして、一歩踏み出すと人々が行き交う社会へと向かえるのではないかという想いでこの敷地を選んだ。

2. 計画概要

2-1 プログラム

『精神障害者入所授産施設』とは、雇用されること及び住居の確保が困難な者を一定期間入所させて、精神障害者が自活することができるように、低額な料金で、必要な訓練を行ない、及び職業を与えることにより、その者の社会復帰の促進を図る施設とされている。本提案では、精神障害福祉施設の概要を参照し、以下に示す定員、職員の数で計画を進める。

定員：20 名以上 30 名以下
職員：6 名以上
　施設長、精神保健福祉士（1 名以上）、
　作業療法士（1 名以上）又は精神障害者社会復帰
　導員 4 名以上、医師

所在地：京都府長岡京市下海印寺上内田８０
主な用途：精神障害者入所授産施設
敷地面積：1,699.83m^2
建築面積：694.78m^2
延床面積：1,389.61m^2
キーワード：精神疾患・社会復帰・地域交流

Location ：Shimokaiinji Temple, Nagaokakyo City, Kyoto Prefecture
Main Use ： Vocational care facility for mentally disabled people
Site Area ： 1,699.83m^2
Building Floor Area ： 694.78m^2
Total Floor Area ： 1,389.61m^2
Keywords ： mental illness, Rehabilitation, Regional exchange

精神障害福祉施設はその周辺で生活をする住民に理解がされにくく、精神障害者は怖いというイメージがついてしまっているのが現状であるが、それはメディアがこれまで作ってきたイメージなだけであり、実際はそこまで深刻ではない。

そこで利用者を施設外で働きに出ることができるかと外に働きに出るにはまだ早いか、という基準で重度と軽度に分け、重度の方には施設でパン屋とカフェを設け、日中はスタッフとして働きに出る。パン屋カフェでは地域の方々と関わる機会を設け、実際は怖い存在ではないと知ってもらい、理解をしてもらう場所を設ける。

また、軽度の利用者には職員による心のメンテナンスを施す。共同生活により、自炊力、協調性、生活力を養う。

2-2 コンセプト

現状として、このような施設を必要とする多くの人が、両親がいないか、いても老齢で頼りにならない、など家族に恵まれない人たちである。そのような人たちの居場所となる建築を建てるべく、目指すべき施設として『患者と呼ばす、利用者と呼ぶ』というテーマとした。

四角の箱をランダムに配置し、それを繋げるように曲線の壁を描く。そこにできるくぼみに地域の人々も集まることのできる川沿いにつくられた庭と一人で川を眺めつつ、黄昏ることができるような庭を設ける。（図 3）

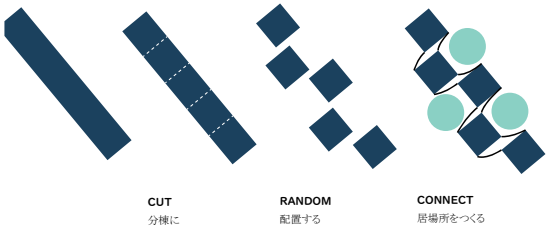


図３　ダイヤグラム

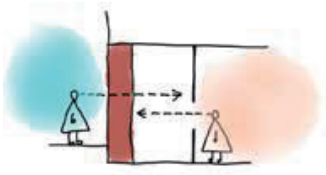


図４　人の目線

寮のように一人ひとり個室があり、共有部分以外はそこで生活をする。一人で没頭したい時間もとれるように、敷地外からの視線を遮るため、個室のある一階においてレベルを下げ、目が合わないようにした。（図 4）

2-3 建築デザイン

この施設は利用者の居場所を作ることを目的に建物を計画する。現代社会での居場所づくりの手助けすることを目指し、配置計画を行う。

また、カフェ、寮、共有スペース、スタッフルームを分棟にすることで建物の行動範囲に流動性を持たせ、自室に籠らない工夫をする。その上でプライベートな空間を配慮し、それぞれの配置は、軽度から重度の利用者に考慮してグラデーションになるよう配置を計画した。共有スペースは重度の人にも静かに使えるようもう一つ設ける。（図 5）

周辺は住宅地なので、最高階高は 3 階までとし、川の流れを連想させるカーブを描いた。（図 6）

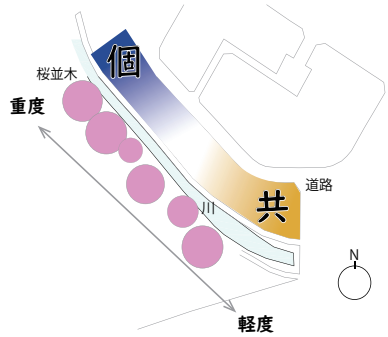


図５　敷地図解



図６　全体スケッチ

近世門跡寺院における書院群の室構成と儀式空間に関する復元的研究
－山科毘沙門堂を対象として－

学籍番号　k20234
名　　前　大道彩音
指導教員　砂川晴彦

門跡寺院　近世書院　上段の間
鋪設（しつらい）　儀式空間

序章　はじめに

１　研究の目的

本研究は山科毘沙門堂の門跡門主の住居施設（書院群）の成立とその構成、また儀式時のしつらいの復原を通じ室の役割や序列を明らかにすることが目的である。

２　先行研究と本研究の関係

本研究では京都府教育委員会『京都府の近代社寺建築』（1983）[1]と永井則男『毘沙門堂諸建物調査報告書』（1984）[2]の二つの文書を先行研究[3]としている。

これらの先行研究を基礎見解を参照しつつ先行研究では扱っていない絵図の利用や文献史料の空間的な考察を進める。特に儀式空間に関する史料群を用いている点に本研究の新しさがある。

３　研究の史料・方法・構成

毘沙門堂所蔵の８点の絵図史料を収集した（表１）。

表１　調査絵図リスト（山科毘沙門堂所蔵）

調査絵図リスト（８点）				
		タイトル	年代	西暦
1	※2	毘沙門堂御門跡寺地山林境内四至図	寛文5年(創建)	1665
2	※1	年代不詳境内図	不詳	
3	※3	御西院様御旧殿之図（中井主水）	貞享３年	1686
4	※3	京都御里坊図		
5	※3	公尊親王御権項三域峠道場之図	元文元年	1736
6	※1	維新前後図	明治初年	1868
7	※1	明治広域配置図	明治	1868
8	※2	毘沙門堂境内見取り図	明治中年～？	1868~
9	※1	毘沙門堂平面図　縮尺百分の一	大正・昭和？	1912~1989
	※1 空間構成に関わる絵図			
	※2 境内図			
	※3 移築建物図			

本論第一部ではこれらの史料に加え、トレースしたものと共に絵図の年代特定を含め書院の成立を検討する。

第二部では文書史料を翻刻し、図化により儀式時の空間の使われ方を考察する。

第１部　絵図に見る毘沙門堂境内の変遷・特徴

第１章　毘沙門堂の住持と建築年表

上記の先行研究や既存の事実を元に年表を作成した（表は未掲載）。３番目の親王が公遵入道親王であることが分かる。

境内形成過程の定説は次のとおりである。現存の宸殿は天和２年に建立され、新書院は貞享３年に建立とされる。元禄10年に寺地の拡張や門廊下の増築が行われ、その後幕末まで境内建物の修築などに関する史料は無く明らかでない。維新前後に寺地の縮小があり、昭和４～６年に諸堂舎の修築や各建物の新築がされた。

以上の変遷を辿った山科毘沙門堂は現在、本堂・霊殿・宸殿（客殿）・玄関周辺のみが存在している。

第２章　絵図の制作時期とその内容の検証

絵図・文書が所蔵されていることがわかった（表１）。

収集した境内図（以降古図とする）（史料１）に年代の記載がない。描かれ方より当図は実測図ではなく計画図と考えられる。


史料１　年代不詳境内図　毘沙門堂所蔵

新書院は貞享３年に建立とされる。一方で二品宣下記の挿入図により、公遵入道親王時代に新書院の移築はされていないことが窺える。

第３章　柱の使い分けから見える室の序列

古図に描かれたすべての建物の中で柱の大きさを見極めたところ、少なくとも柱径には９種類が抽出された（図１）。現存する建物から柱径寸法を確認する。

境内の住宅系建築（書院）に使用される柱径は大きいものから順に把握すると、次の三つのことがわかる。

・宸殿と霊殿は同径で境内中最大径とする（a）。
・古書院、新書院、奥向が同径でとする（b）。
・玄関廻りに使用される柱の方は (a)(b) より大きい。
・庫裡は大黒柱の他、小部屋には小径を用いる。

以上より住宅系建築（書院）柱径は、宸殿＝霊殿＞玄関＞古書院、新書院、奥向＞ほか小部屋、となる。

第４章　古図から読み解く柱間装置による空間構成

本章では柱間装置から室の性格を読み解く。

い．宸殿周りの柱間装置

宸殿裏側の新書院との接続する畳廊下では杉戸を用いる。境内の廊下中、杉戸の表記は唯一ここだけで、新書院の導入部として明確な空間分けがされている。

ろ．古書院の柱間装置

古書院の２の間では南壁廊下との境には張付壁、その対面側を襖とする。障壁画が描かれていたかもしれない。明障子の新書院と比べるとより暗く厳格な印象の導入部といえ、奥向きの室としての性格と考えられる。

は．奥向の柱間装置

御学問所は南北両側を腰障子で囲う。御座間は古書院と同じように張付壁と襖で囲われている。両部屋は性格を変えている。御納戸と御霞所は四方を壁で囲い固く防備されている。

に．鎖間の柱間装置

南側一面を襖と張付壁とする。北東側はすべて腰障子と

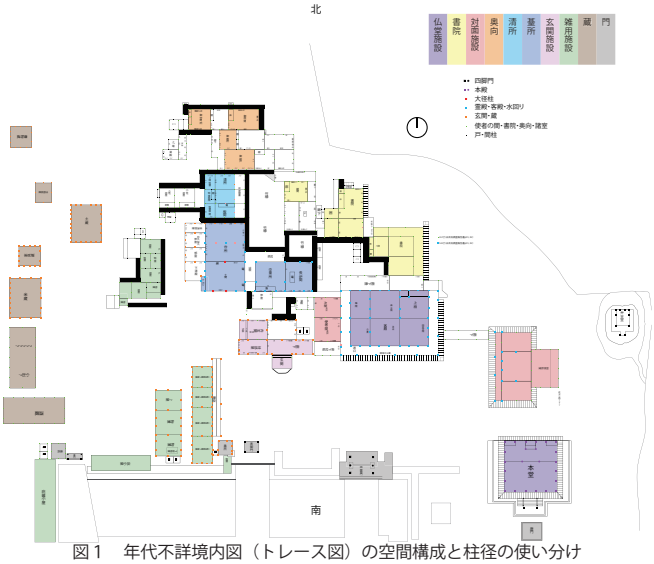


図１　年代不詳境内図（トレース図）の空間構成と柱径の使い分け

し充分な明かりを確保する。古書院と同様の性格といえる。
以上から主室へ繋がる畳廊下や２の間には、主室の導入部として性格分けされていたことが分かった。

第２部　門跡門主の儀式空間

第５章　「御入寺御得度」（門主の入寺の儀）

公遵入道親王の御入寺御得度についての史料（史料２）を翻刻し、史料調査で得た絵図に文章を重ねて儀式における晴れの日のしつらい（舗設）の再現を試みる（図２）。

「御入寺御得度」には、公遵入道親王が毘沙門堂内で御入寺のために御得度される際の儀式の舗設について詳細が書かれている。

宸殿の周囲廊下を①畳を敷き詰める、②御簾を掛けて仕切るこの方法によって通常は板の間であるが、内部に取り込み空間を広げて使っている事が分かった。落ち縁の襖を建てることで、縁全体を内部化したのも同じ室の拡張と考えられる。

宸殿正面は幔幕を垂らし、毛氈を敷き、中央に土橋（高欄付）を架ける。親王の入寺の動線と考えられ、最も晴れの場らしい華やかなしつらいがなされていたこと分かった。

また各御座は、宸殿が新親王の御座の間に定め、京都の所司代、旧親王の御座の位置はそれぞれ新書院、古書院に定める。宸殿、新書院、古書院の３つを同時に使用する。

以上、親王入寺の儀における仮設の仕方、御座の指定より古書院と新書院の使い分けが分かる。

第６章　「御加行始終記」（門主の受戒修行の儀）「二品宣下記」（門主昇位の儀）

新親王の儀の文書において、時系列に入寺→加行→灌頂の儀と続く一連の儀のしつらいが分かる。また無品から二品へ上位に上がる儀がある。こうした各儀式ではそれぞれの場面作りが行われていた（図３）。

加行は大きな規模で阿弥陀堂で行われる。二品宣下では使用されるのは新書院のみとする。少人数で行われている様子から新書院は小規模な対面の場空間として使用されていることが考えられる。

第７章　「灌頂道場図」（門主受戒の儀）

灌頂の儀については２枚存在し、慎重にしつらいが検討されていることが窺われる。

この儀式史料の中では宸殿６間の格式について考察することが可能である。

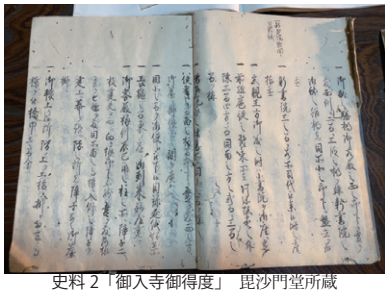
上段の間は門主の座の間である事から１番格式が高く親王の御待合所となり、次に九老間は儀式の場として使用されるほど格式のある間であることが窺える。

曲水間は九老間への入り口として使用される事から、上段の間と九老間をつなぐ部分であると考えられる。

四愛堂間には御聴聞所と書かれている事から白鷺間よりも位が高いと考えられる。

梅間には今儀式の中で大きな役割を持たない事から、それほど位は高く無いと考える。

以上のことから、宸殿６間の格式は、上段＞九老間＞曲水間＞四愛堂間＞白鷺間＞梅間と並ぶと考えられる。


史料２「御入寺御得度」　毘沙門堂所蔵

また、このように儀式において人が呼ばれる場合には塀重門が使用され、その場に仮設の腰掛けられるような場所が構えられる場合があることが確認できた。

結章

以上、本稿では山科毘沙門堂の門跡の近世書院の成立過程と近世門跡書院としての室の性格、格式について検討してきた。

門跡住持の書院としての対面空間は、別格の宸殿と、雁行した新書院 、古書院 、鎖間から構成される。これらは対面空間としてそれぞれ固有な性格を有している。宸殿は別格で大規模な儀で用いる大ホールとして使用され、門主の入寺の儀式では普段屋外の落縁まで障子戸を建て内部に拡張させる。

新書院は上段を備えた少人数で使用される使用頻度の高い宸殿に代わる対面空間として使用する。

古書院は上段がなく厳かさを減じた性質とする。鎖間は最も奥向（門主の私空間）に隣接する。門跡門主は天皇家の出身という身分の生涯にあり、その多様な対面に溢れた生活が多様な書院の性格となって現れていると考えられる。とくに門主の入寺の儀の３つの御座の場に書院の序列が明確に表れている。

〈参考文献〉
１教京都府育委員会『京都府の近代社寺建築』（1983）
２永井則男『毘沙門堂諸建物調査報告書』（1984）
３千木良 礼子「山科毘沙門堂門跡の霊殿について」『京都市文化財保護課研究紀要』第５号　2022 年３月、著者不詳『毘沙門堂の歴史と建物』（毘沙門堂所蔵）

〈謝辞〉
石田潔氏（毘沙門堂）に絵図史料を、千木良礼子氏に（京都府文化財保護課）儀式空間の史料をご提供頂きました。ここに記して、感謝の意を表します。

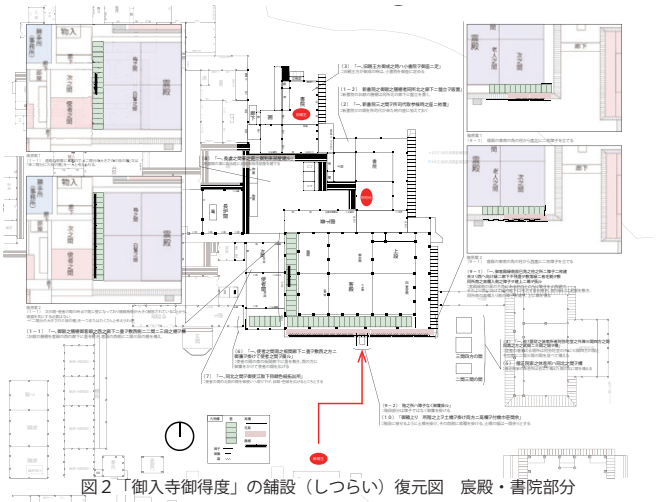


図２「御入寺御得度」の舗設（しつらい）復元図　宸殿・書院部分

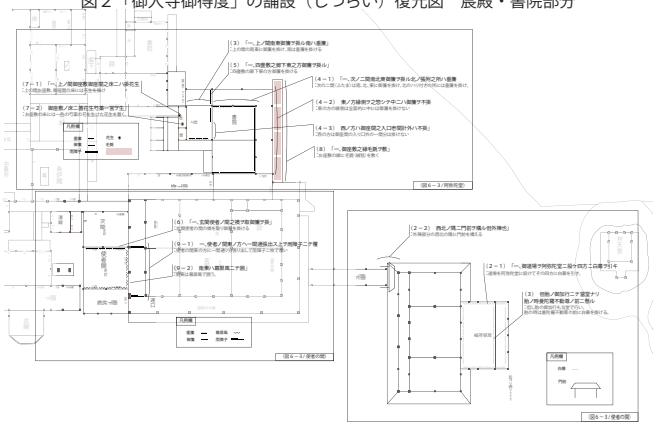


図３「御加行始終記」「二品宣下記」舗設（しつらい）復元図　各部

音楽ホールにおける副次的空間の展開

―まちの拠点としての文化施設―

学籍番号　K20235
名　　前　大村英人
指導教員　安田光男

Development of secondary spaces in music halls

―Cultural facilities as the base of the town―

Student Number　K20235
Name　　OMURA Eito
Supervisor　　YASUDA Teruo

1. 背景と目的

地域社会における文化活動の多様化が進む現代において、劇場やホール等の文化施設は、その中心となる重要な役割を担う。しかしこうした中、公演時以外のそれらの文化施設は、空間が無駄に放置されてしまっている事が多い。この問題への対策の一つとして、劇場・ホールにおけるロビー・ホワイエ空間のような、特定の機能を持たない「副次的空間」を公演時以外に活用する手段が挙げられる。しかし、全国 324 館の劇場・ホールを対象にした「公演時以外のホワイエ・ロビーの利用実態・割合」（表 1）に関する調査結果を見ると、約 50%の施設が副次的空間を活用しておらず、現状この取り組みもあまり進展が見られないことがわかる。そこで劇場・ホールにおける副次的空間の更なる展開を通して、それらの施設が抱える問題の解決を目指す。

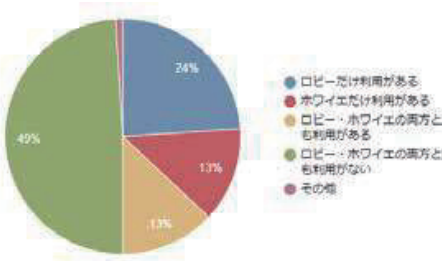


表１　公演時以外のロビー・ホワイエ空間の利用実態・割合

2. コンセプト

＜劇場・ホールとロビー・ホワイエ空間＞を、商業施設とそれに付随する利用者と非利用者が行き交う空間と見なし、これに似た要素を持つ施設として＜商店街＞に着目した。＜商店街における商店とアーケード空間＞はその空間の関係に類似しており、一体に利用することで、副次的空間のさらなる展開になると考えた。地域住民の生活を支えてきた商店街へと、副次的空間を延長させた、地域密着型の小規模な文化施設としてのコンサートホールを計画する。

3. 計画敷地

計画敷地には兵庫県尼崎市杭瀬本町にある杭瀬一番街を選定した。本敷地を含む、杭瀬商店街は戦前より今まで、地域住民のまちの拠点としてあり続けてきた。第二次世界大戦過の空襲による甚大な被害を受けた際には、いち早く街区を整備拡張、杭瀬地区の復興に貢献し、戦前よりさらに大規模な商店街として復興した過去を持つ。しかし、そんな杭瀬地区の現在は高齢化が進み、杭瀬商店街もかつてほどの賑わいのないシャッター街になってしまっている。そんな杭瀬地区は、令和２年に兵庫県から商店街と周辺住宅地において総合的にまちづくりを推進するモデル区域として「まちなか再生区画」に指定されている（図 1）。これには様々な支援メニューが設けられており、今後の杭瀬地区の更なる発展が見込まれる。また、杭瀬一番街では買い物客の減少に対し、毎月一回に店主らによって手作りコンサートが行われている（図 2）。商店街の一角の空きスペースに手作りのステージを置き、市内の音楽サークルや地元出身のアーティスト等が出演している。効果も徐々に現れており、毎回楽しみに訪れる地域住民も増えたという。本敷地である杭瀬一番街は、地域住民によって地域住民のために築かれてきた地域密着型の商店街であり、街おこしに「音楽」という文化芸術を取り入れている、今回の卒業制作の趣旨に沿った場所であるため、計画地として選定した。

図 1



図 2



4. プログラム

北館：コンサートホール・ストリート・カフェ・練習スタジオ
南館：レストラン
アーケード：渡り廊下



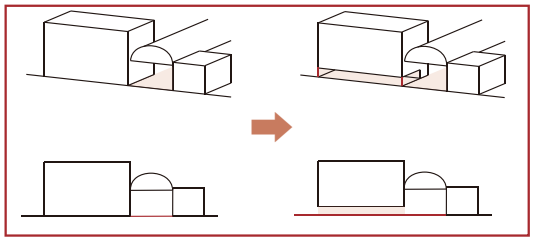
付近見取り図

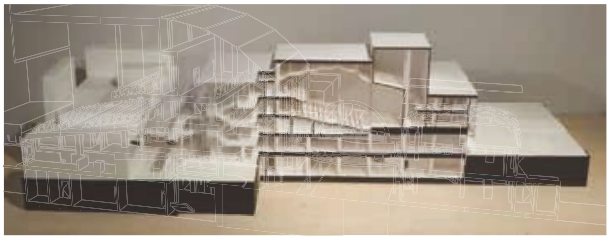
所在地：兵庫県尼崎市杭瀬本町２丁目 16 番杭瀬一番街
主な用途：コンサートホール
敷地面積：1102.56 ㎡, 274.94 ㎡
建築面積：957.00 ㎡, 195.00 ㎡
延床面積：2672.77 ㎡, 324.50 ㎡
キーワード：コンサートホール・ロビー・ホワイエ・商店街

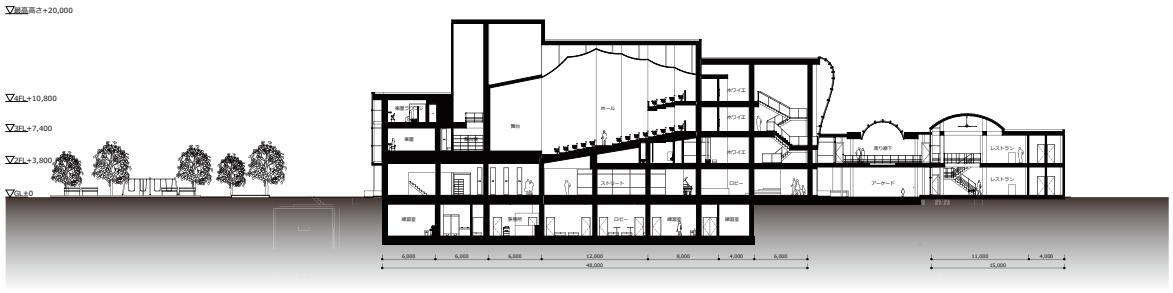
Location ： Kuise first avenue, 2-16, Kuisemotomati, Amagasaki-si, Hyogo
Main Use ： Concert hall
Site Area ： 1102.56 ㎡, 274.94 ㎡
Building Floor Area ： 957.00 ㎡, 195.00 ㎡
Total Floor Area ： 2672.77 ㎡, 324.50 ㎡
Keywords ： Concert hall, Lobby, Foyer, Shopping street

5. 配置・断面計画

商店街に対して挟みこむように２棟の施設を配置。またアーケードを北館１階部分へと貫入させ、ホールのロビー空間との一体的な利用を可能にした。このストリートは南館から北館の反対側の公園まで伸びており、これによりそれぞれの副次的空間を接続、各施設の利用者が行き交う活気のある空間を目指した。北館ホワイエ部分は吹き抜けとし、かつ南館から伸びる渡り廊下を受けることで立体感と奥行きを併せ持つ解放感のある空間を演出。ホール空間、フライタワーは、共に十分な高さを取ることでコンサートホールとしての機能をしっかりと発揮させる空間を目指した。







6. 副次的空間の活用

コンサートホールのロビー空間を含む各空間への動線を兼ねるストリートと、商店街のアーケード空間を一体にすることにって生まれるアクティビティ。

・副次的空間に商店や来訪者が混在する独自の空気感を持った空間が生まれる。
・出演者・観客共に、公演を目的に訪れた人々と商店街に訪れた地域住民の新たな出会いの場となる。
・出演者・観客共に、公演の前後の時間の使い方に様々な選択肢を与える。
・音楽を中心に、商店街を媒体とした街おこしが望める。

参考文献

・劇場・ホールのロビー・ホワイエにおける公演時以外の利用に関する調査研究
・音楽ホールの副次的空間における利用実態とその特性に関する研究　－東京 23 区内の公立音楽ホールの実地調査と分析を通して－
・公共ホールの開放性に関する研究　－ホール空間の室外との一体利用に着目して－
・ホール及び劇場を持つ複合施設の利用特性に関する研究
・日本における新たなる芸術空間の形成　現代におけるホール・劇場のニーズとデザインの変化
・総務省｜尼崎市における戦災の状況（兵庫県）
・統計でみるあまがさき｜尼崎市公式ホームページ
・商店街の活性化とまちの再整備によるにぎわいのまちづくり｜尼崎市公式ホームページ



自然で育む

学籍番号　K20236
名　　前　岡あゆみ
指導教員　安田光男

nurture in nature

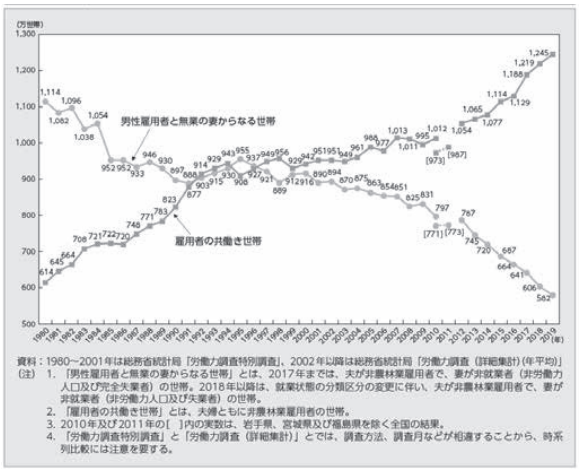
Student Number　K20236
Name　　OKA Ayumi
Supervisor　　YASUDA Teruo

1. はじめに

1-1 背景と目的

少子高齢化が加速する現代では、出生率を増加させ回復させることが重要な課題である。私は、子どもを育てやすい街を作り、少子高齢化が軽減されることを目指して計画を行った。

計画の対象者は、『共働き子育て世帯』である。厚生労働省が公表する厚生労働白書によれば、「男性雇用者と無業の妻からなる世帯（専業主婦世帯）」の数は 1980 ～ 2020 年で 1,114 万世帯から 571 万世帯へと半減された。これに対して、「雇用者の共働き世帯」は同 641 万世帯から 1,240 万世帯へ倍増し、婚姻関係を有する核家族世帯において共働き世帯が多数を占めるようになった。子育て世帯に占める共働き世帯の割合も必然的に増加し、厚生労働省の国民生活基礎調査の集計結果では、児童のいる世帯の共働き世帯割合が 2013 年調査で 50.6%、2019 年調査で 60.3% と 6 年で約 10% 上昇している。このように子育て世帯を念頭に住宅政策を検討する上で、共働き子育て世帯（DEWKs）の居住実態を正確に捕捉することの重要性が増している。



資料：1980～2001年は総務省統計局「労働力調査特別調査」、2002年以降は総務省統計局「労働力調査（詳細集計）(年平均)」
(注) 1.「男性雇用者と無業の妻からなる世帯」とは、2017年までは、夫が非農林業雇用者で、妻が非就業者（非労働力人口及び完全失業者）の世帯。2018年以降は、就業状態の分類区分の変更に伴い、夫が非農林業雇用者で、妻が非就業者（非労働力人口及び失業者）の世帯。
2.「雇用者の共働き世帯」とは、夫婦ともに非農林業雇用者の世帯。
3. 2010年及び2011年の[ ]内の実数は、岩手県、宮城県及び福島県を除く全国の結果。
4.「労働力調査特別調査」と「労働力調査（詳細集計）」とでは、調査方法、調査月などが相違することから、時系列比較には注意を要する。

2. 対象敷地

2-1 敷地概要

対象敷地は京都府向日市にある。現在は､向日台団地が建っており､近々建て替え工事が予定されている。敷地裏側には、元稲荷古墳、勝山公園、向日神社などこどもたちの遊び場となる場所が多くあることから、この敷地を選定した。また、敷地周辺には保育園や小学校があり、子育て世代が住む場所として非常に好立地である。現代のこどもたちは、外遊びの減少から、運動能力が低下しているという課題がある。それの解決策として、敷地全体を公園、こどもたちの遊び場にできる敷地を選定した。



2-2. 敷地の現状課題

本地区は昭和４０年に建設された府営住宅向日台団地が立地しており、隣接地の向日神社や勝山公園は団地内通路・市道を経てアクセス可能であり、団地住民だけではなく地区外からの人の流れもある。住民同士の繋がりが強く、地域活動も活発に行われている。一方、向日市の他地域と比較して高齢化が進み子育て世代が減少している地域でありさらなる高齢化が進むことでコミュニティ、地域活動等の衰退が危惧されている。なお、向日台団地は、京都府総合計画において、建て替えとして位置付けられている。

2-3. まちづくりの目標

「子育て・みんなの暮らし・豊かな緑」
を紡いで繋がる、向日台

安心・安全な住環境の形成を図るとともに従来のコミュニティに新たな世代が加わることで、
子どもが地域で育まれ、全ての人にとって暮らしやすいまちづくりを推進します。

①府営住宅向日台だんにの建て替えにより住環境の向上を図り、だれもが安心して暮らせる地区
を形成します。
②賑わいを生む広場や安全な遊歩道（プロムナード）、自然豊かな緑地を整備し、団地内や地域
住民の交流を促進します。

3. 計画概要

3-1. 主要施設

・集合住宅
・こども園

上記の施設を一体的に計画し、子育てしやすい集合住宅を計画する。

3-2. コンセプト

「コレクティブハウスからコレクティブタウンに領域展開」
多世代が住まい、こどもを軸とした循環型の社会を生み出す

・同じ敷地内に住みながら、子育てサポートできる環境を作る
・程よい距離感を保ちながら子育てしやすい環境を作る

3-3. 集合住宅に住む人々

①自立した生活が行える老年世代
・こども園の運営を手伝う
(リターンとして、労働環境が得られる)
・こどもたちにこれまで生きてきた中で身につけてきたライフハックや自然の遊びなどを教える立場となる
②働き盛りの親世代
・こども園の資金援助
(リターンとして安心してこどもを預けられる、
こどもを１人で家においておく心配がない)
③こども
・家とこども園二つの居場所があるため、家だけでは学べないことを学び、身につけることができる
・１人で留守番することもなくなる

※入居者には年齢制限などを設けて、循環するように仕組み作りを行います

3-4. こども園

・温かいご飯と伸びやかな生活環境を提供し、こどもにとって第二の我が家となる場所
・こどもたちの自由な心や生活や成長を守る
”こどもの世界を守るシェルター”
としてのこども園を提案する

所在地 : 京都府向日市
主な用途 : 集合住宅、こども園
敷地面積 :14,844m^2
建築面積 :9,632m^2
延床面積 :21,056m^2
キーワード : 集合住宅・こども園・ランドスケープ

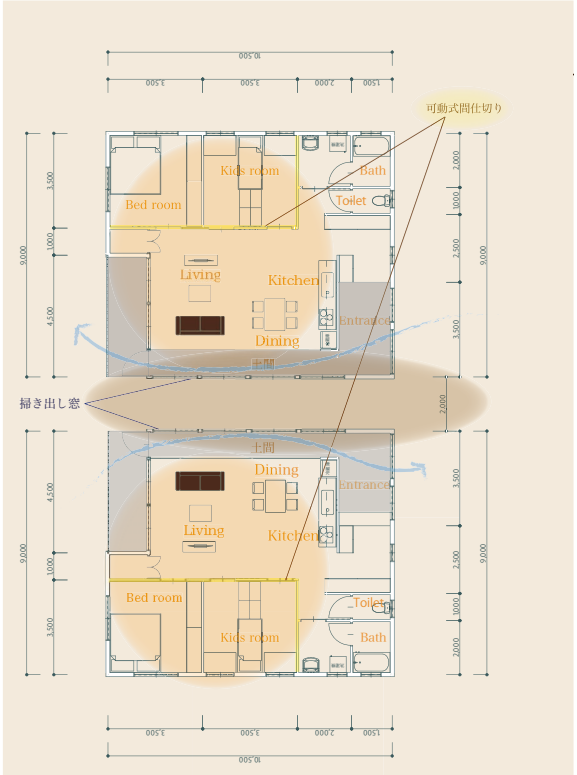
Location : Mukoushi,Kyoto
Main Use : Housing complex
Site Area : 14,844m^2
Building Floor Area : 9,632m^2
Total Floor Area : 21,056m^2
Keywords : Housing complex, Kindergarten,Landscape

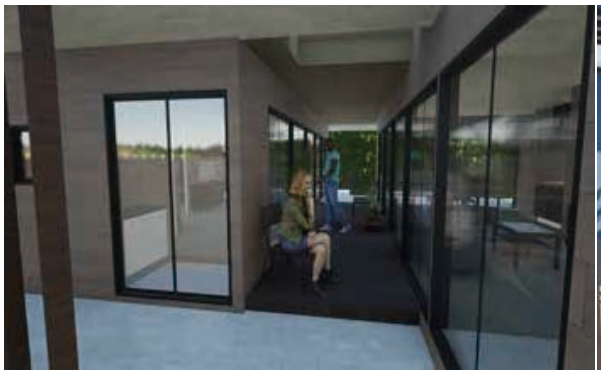
ここでは、畑で食物を育て、キッチンとグロッサリーを地域に対して開くことで、こども達の居場所を作り、地域全体でこどもたちを守る。そして、こどもたちはこども園で生産から消費という食の循環を学んでいく。やがて成長し、小学校や中学校に進学してからも我が家のようにこの場所へ戻ることができ、成長した時に今度はこどもたちを守る側でこども園に関わるような、未来へ繋ぐ地域循環システムを目指す。

4. 住戸計画

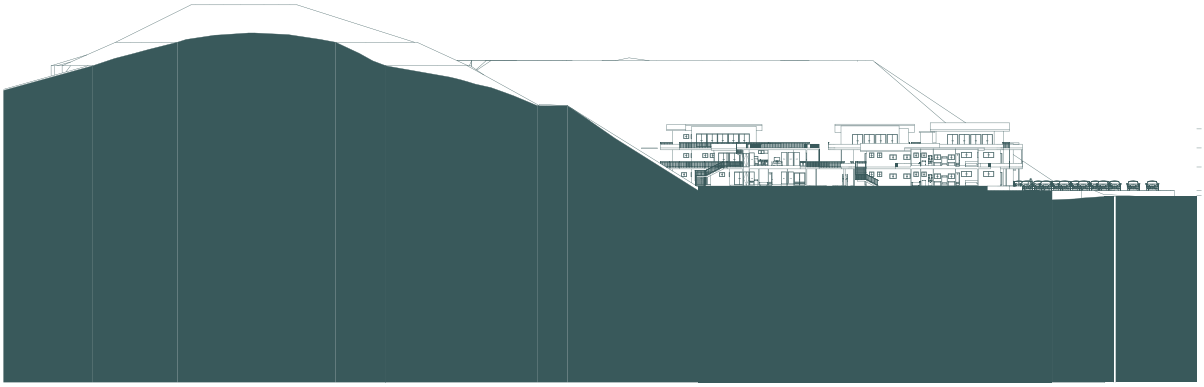
4-1. ファミリータイプ
・土間を通じてコミュニケーションを取れるように計画
・平面だからできる一体感のある空間を実現
・動きやすい家事動線
・可動式間仕切りで空間を自由に変化させることが可能
・リビングを中心とした配置計画で、家のどこにいても家族の存在を感じられる。
→右図参照

4-2. シニアタイプ
・１人～２人に向けた住戸プラン
・土間を介して隣の住人の存在感を感じることができ１人でも寂しくない住宅を計画
・入居者イメージ
単身者
２人世帯
２戸１住宅の活用として身内で隣の家に住む
身寄りの少ない友人同士で住む









旧今熊野小学校のリノベーション

学籍番号　K20237
名　　前　小笠原日向
指導教員　安田光男

Imakumano elementary school reno

Student Number　K20237
Name　　hinata ogasawara
Supervisor　　teruo yasuda



はじめに

京都市内には数多くの歴史の深い小学校が点在している。それらは番組小学校として現在も使われているものや新しく建て替えられたものなど様々な建築の活用が行われている。大きな敷地を有する小学校は、京都市の人口増加とともに増改築が繰り返され、大きくなった。しかし、今では少子化の影響から学童が減少し、廃校となって町にとどまっている。それらの廃校は現代において様々な用途でリノベーションされているが地域に根付いていた小学校という機能は失われつつあり、小学校の副次的に養ってきた機能が失われつつある。副次的な機能に着目しどのようにリノベーションされるべきかを確立し、本設計において今後のリノベーションの指標となるように計画した。また、公共建築としてのあり方として地域の人々にとってどの様に作用するか、またどのような使われ方をするか敷地調査をすることで計画に活用した。

背景

2.1 京都における小学校のリノベーションの現状について

京都は現在 10 校が廃校として点在している。理由として少子高齢化による小学校を必要とする学童の減少や京都市内における人口の地域による偏りから入学生が減少することが挙げられる。廃校となった学校付近に住むこどもは新しくつくられた小学校や廃校にならなかった校舎へと移され、小学校から生まれたコミュニティや地域との交流が失われつつある。
対象とされてきた 16 校の内 6 校はリノベーションとして活用されており、元貞教小学校は京都美術工芸大学の校舎の一部になり、元清水小学校は京都清水（ホテル）へとリノベーションされている。６校の内４校は観光を目的とした宿泊施設に変わっている。やはり、京都市内の有限である土地に対して小学校は敷地面積が大きいことからリノベーションの際の敷地活用の仕方が注目されている。
また、増改築がもともとされている小学校が多いことや耐震性による問題などから取り壊し、新しく建て替える事例も多く存在している。

2.2 現段階のリノベーションについて

現段階のリノベーションは観光を目的とした施設や宿泊施設が多く、教育の場以外にも小学校が担っていた副次的な機能が失われつつある。主とした機能を教育としたときその地域の文化継承こそが副次的な機能である。例えば今回の対象敷地である今熊野小学校では教育とともに陶芸という地域における文化継承の役割を担っている。下参考写真のように建築における意匠の役割や身近な物、また陶芸を行っていた教室があったことから教育の一環となっていた。以上のように文化継承や地域性の継承こそが従来あった小学校の役割であった。また、それらの文化継承を担うものは小学校だけでなく、今熊野では陶芸家のアトリエやランドマークとなっている登り窯などがある。





所在地：京都府京都市東山区今熊野南日吉町 27-3
主な用途：小学校
敷地面積：10023m^2
建築面積：4197m^2
延床面積：9654m^2
キーワード：リノベーション

Location ： 27-3,minaminitiyosimati,imakumano,higasiyamaku,
Main Use ： park
Site Area ： 10023m^2
Building Floor Area ： 4197m^2
Total Floor Area ： 6428m^2
Keywords ： Office, Energy Conservation, Base Isolation

用途及び敷地

3.1 敷地

京都市東山区今熊野小学校
　従来のような小学校のリノベーションに関して疑問を持つことから現在廃校となっている校舎を対象として、リサーチを行っていた中でも今熊野小学校は陶芸と深い関係のある小学校であり、地域の人々からうかがった話からリノベーションを行いたいと考えた。また、避難所として管理人が毎日勤務していることやNPO法人の本部として活動していることからリノベーションの必要性を見出した。

3.2 リノベーション対象

前述のとおり、避難所やNPO法人の本部であること以外にも毎年夏まつりが開催される会場になっていたり、毎週ゲートボールに校庭が使われていることから、大きく変更することや現在使われている部分に関してリノベーションするのではなく現在使われていない部分をリノベーションすることで小学校を最大限利用できるような計画にしたいと考えた。特に利用頻度が少ない北側校舎と南側校舎に着目してリノベーションを行う。

3.3 用途

公共施設、公園
敷地調査を行う中で、「あふれ出る」行為をよく目にした。例えば、道路で子供が遊ぶことや植木鉢や自転車が道路にあふれ出ることなどが多くあった。それらの行為は敷地が少ないこと以外にも地域性を特に表しているだろう。「あふれ出る」行為が行われても問題ない誰からも咎められない地域性である。そういった行為があふれるような公園のようなみんなが自在にあふれる行為が行われる場を計画することが小学校が今まではたしてきた副次的役割を担うのではないかと考え用途は公園とした。また、現在使われている校舎や体育館などルールが必要な部分に関しては現在行われているように管理人を通して利用してもらうことから公共施設のような役割もある。

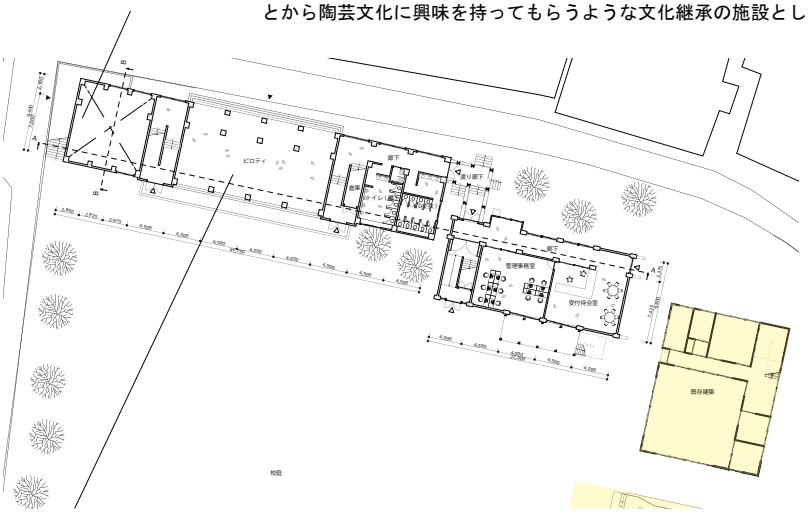
計画

4.1 陶芸と今熊野

今熊野地区は陶芸家を志す人を中心として開発された土地である。清水焼で有名な東山は、全国から集まった弟子を抱えきれず、あふれだした人々が住んでいた町ということもあって陶芸家のアトリエや陶芸を生業としている人々が多い。また、陶芸を中心として骨董市も定期的に開催され賑わいを見せてきた中でも、今熊野小学校はその会場となったりと陶芸と深い関係があった。小学校として利用されていた当初は陶芸室での授業や地域交流で文化継承がなされていたが現在は廃校となり文化継承を行う場が減少している。

4.2 リノベーション計画

陶芸室の吹き抜け
陶芸室は地下にあり暗くじめじめした教室であったが、敷地の高低差を利用して外部と直接アクセスできるようになっていた。日当たりを確保するために利用されていなかった１階の教室を吹き抜けにしておおきな空間とした。北側校舎は陶芸室や多くの陶芸品がもともと飾ってあったことから陶芸文化に興味を持ってもらうような文化継承の施設とした。



北側校舎のピロティ
北側校舎と道路を挟んでこども園が隣接している。こども園は大きな校庭はなく、北側校舎の影響で日当たりが悪かった。このことから敷地に設置されていた柵を撤去し北側校舎を大きく削ることで日当たり及び閉鎖感をなくすように設計した。また、ピロティにすることでこども園の子供たちが校庭に対してすぐにアクセスできるようにするように計画した。

戦後大阪の谷町筋道路拡幅の（図２）影響を受けた寺院境内の建て替え過程とコンクリート造本堂に関する考察

学籍番号　K20238
名　前　奥田憲生
指導教員　砂川晴彦

戦後　コンクリート造寺院　不燃化
道路拡幅　大阪　谷町筋

序章　研究の対象と目的・方法（表１）

戦後の都市計画により大阪の交通網を改善すべく道路拡幅が行われ建て替えを余儀なくされた寺院があった。横山秀哉[1]）や佐々木健[2]）の研究ではコンクリート造寺院の様式や変遷について述べているが都市計画による影響といった都市的観点からの寺院建築の変容については研究されていない。

本研究では戦後大阪の道路拡幅の影響でコンクリート造寺院に建て替えられた７件の寺院に注目する。道路拡幅により縮小した境内の変化や建て替わった建物の構成・意匠について明らかにすることが本研究の目的である。

研究の方法は現地調査（写真撮影、寸法の測定）と登記簿や図面の平面図を用いる。現地調査と資料を基に拡幅前後の構成比較を行いどのような影響を受けたか考察する。

第１章　都市計画について（図１）

戦後に被災した木造の建物は復興と都市計画によりコンクリート造へ建て替わった。大阪では大阪万博に向けての都市開発も合わさり大阪の活性化が促されてた。谷町地区は商店が連なり少し南へ行くと寺院郡になっていた。大阪の交通を良くするために世間では南北の道路貫通が熱望され 1964 年に道路拡幅が行われた。地下鉄も道路と同時期に行われ、1975 年には高層住宅やマンション、不燃化された建物が並び街の景観が変貌した。

第２章　寺院の建て替え過程

谷町筋は都市計画事業において幹線道の一つとして 6m 余りの幅員から 40m へ拡幅された。

拡幅に伴う建て替えでは昭和 34 年の建築基準法第二次改正における防火区画の規定を適用された防火地域に建つ宗教建造物として新築されることになったと分かる。都市計画街路としての谷町筋の沿線は拡幅に伴う建て替えによって不燃化の構造物とした建築帯が創出されることになった。

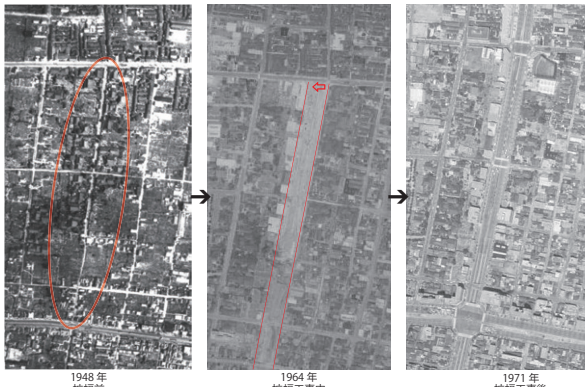


図１　道路拡幅と建て替わり寺院
航空写真：国土地理院

第３章
寺院境内の縮小の実態ー本政寺を例にー（図２・図３・表２）

図２は拡幅前（大正期）の地積図で、ここから拡幅前の境内の大きさのほか墓地の土地利用が判明する。図３は拡幅前後の境内の建物配置の変化を示す。境内の縮小はおよそ７割におよぶ。

境内の変化において特質的なのは墓地の縮小と移動である。大きい敷地を占めた檀家の墓地のほか全ての墓区画を縮小し再整理しなければならなかったからである。檀家への交渉に奔走した住持の苦労が聞き取りにより判明した。

縮小後の本政寺では、本堂と祖師堂から成る２堂であったのが建て替えでは１棟の同じ屋根の下にまとめられている。住まいや客殿、庫裡に相当する部分は３階建てと１つにされた。いずれの寺院も平屋建てとして平坦に広がっていた建物は縦に積み上げる構成へ変化した。

第４章　境内と建物の構成（図４）

建て替え後の敷地は７件どの寺院も差はなく同等の影響を受けていた。限られた敷地による境内利用はどの寺院も同じで建物と墓地の半分ずつに利用していた。しかし建物の構成違い。本堂と庫裡を一体にする１棟タイプと本堂と庫裡を分

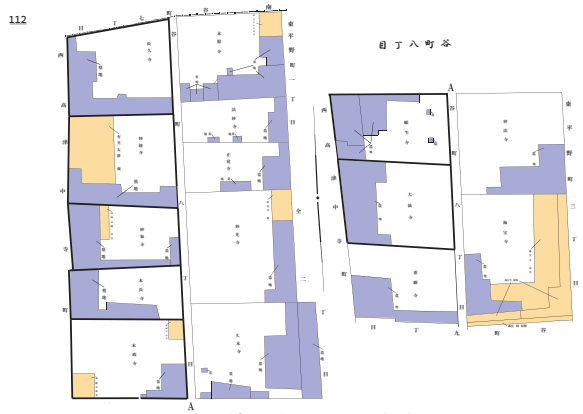
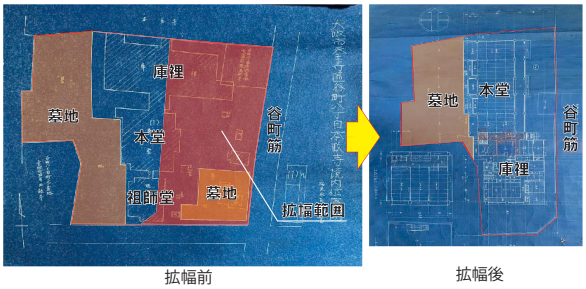


図２　縮小前の７つの寺院
下図：『大阪地籍図』1911 年＿谷町８丁目



拡幅前　　拡幅後

図３　本政寺の道路拡幅前後の図面
図面：本政寺所蔵

断する２棟タイプに別れた。

第５章　本堂平面の構成（図５）

本堂には南面にするものと道路面にするものがある。本堂には１階にするものと２階以上にするものとがある。

本堂平面には脇陣列を設けるものと脇陣の区画を設けないものとがある。脇陣区画を設ける場合、柱を立てて柱を前後に内外陣を分ける。脇陣区画を設けない場合では無柱空間になる。

意匠では、伝統系と伝統要素の簡略系の２系統になる。本政寺では伝統系の意匠の系統でありながら、コンクリート造の大スパンにおいて内外陣境の柱を省略し無柱の広々とした空間にしている。一見すると伝統系でありながらコンクリート造を活かすことで生まれた空間に特質を見出せる。

第６章　外観意匠の特徴（図４）

外観意匠についても各寺院で特徴がある。コンクリート造になり構造は似るものの各寺院のこだわりにより色合いや造形、木造寺院を彷彿とされる雰囲気など様々な手段で寺院らしさを表していた。

結章　まとめ

以上、本稿では道路拡幅によって一斉に建て替えられ高層化した寺院という、戦後特有の寺町の景観形成を明らかにした。

参考文献　横山秀哉『コンクリート造の寺院建築』 彰国社　1977 年　佐々木健『東京都の非木造寺院本堂の様式の変遷』日本建築学会技術報告集 第 28 巻 第 69 号，1026–1031 頁，2022 年　谷町地区と市街地改造事業　1961 年　新修大阪市史第８巻　国土技術政策総合研究所　国土地理院地図　大阪地籍図　1911 年＿谷町８丁目　本政寺所蔵古写真・図面　大仙寺所蔵　図面　登記簿謄本　建物図面・公図

表－１　調査対象の建物概要表

寺院名称	長久寺	妙経寺	妙像寺	本長寺	本政寺	願生寺	大仙寺
宗派	日蓮宗	日蓮宗	日蓮宗	日蓮宗	日蓮宗	浄土宗	臨済宗心寺派
境内敷地面積	約 960 ㎡ [2]	約 1350 ㎡ [2]	約 1280 ㎡ [2]	約 960 ㎡ [2]	約 1495 ㎡ [2]	約 476 ㎡ [2]	約 1325 ㎡ [4]
建築面積	約 322 ㎡ [5]	約 360 ㎡ [2]	店舗含めて 542 ㎡ [5]	約 416 ㎡ [2]	約 432 ㎡ [2]	約 420 ㎡ [2]	539 ㎡ [4]
主要不燃化建物	本堂・庫裏	本堂・庫裏	本堂・庫裏・店舗	本堂・庫裏	本堂・庫裏	本堂・庫裏	本堂・庫裏
着工年月	昭和 38 年 [6]	昭和 38 年 [6]	昭和 38 年 [6]	昭和 38 年 [6]	昭和 38 年 [6]	昭和 38 年・5 月 [1]	昭和 38 年 [6]
竣工年月	昭和 39 年 [6]	昭和 39 年 [6]	昭和 39 年 [6]	昭和 39 年 [6]	昭和 39 年 [6]	昭和 39 年・10 月 [1]	昭和 39 年 [6]
建築年	59 年 [6]	59 年 [6]	59 年 [6]	59 年 [6]	59 年 [6]	59 年 [6]	59 年 [6]
設計者	―	―	―	―	米田工務店一級建築士事務所 [3]	横河設計 [1]	彦谷建築設計事務所 [4]
施工者	―	―	―	―	―	大晴建設 [1]	―

註 [1] 横山秀哉『コンクリート造の寺院建築』280 頁から引用　註 [2] Google マップから概算した数字　註 [3] 本政寺所蔵　図面参照　註 [4] 大仙寺所蔵　図面参照　註 [5] 登記簿参照　註 [6] 聞き取りにより割り出した数字

表－２　床面積割合表

現地調査と登記簿の図をもとに作成

寺院名称	長久寺	寺院名称	妙像寺	寺院名称	本長寺	寺院名称	本政寺	寺院名称	願生寺	寺院名称	大仙寺
庫裏	24.80%	本堂	19.72%	庫裏	25.12%	本堂	30.58%	一階　庫裏	10.83%	平屋庫裏	37.83%
本堂	12.40%	客殿	37.54%	本堂	21%	庫裏	23.65%	二階　客殿	18.41%	一階	27.02%
客殿	10.30%	庫裡	37.54%	客殿	27.40%	二階　客殿（畳）	23.65%	二階　茶室	15.16%	二階　本堂	27.02%
三階　寺部分	16.59%	寺院１階階段室	3.20%	階段・廊下	26.48%	三階　客殿（ホール）	23.65%	三階　本堂	5.83%	渡り廊下	8.13%
四階　寺部分	16.59%	廊下	2.00%			廊下	0.29%	三階　和室	5.83%		
階段・廊下	19.32%							四階・その他	43.94%		

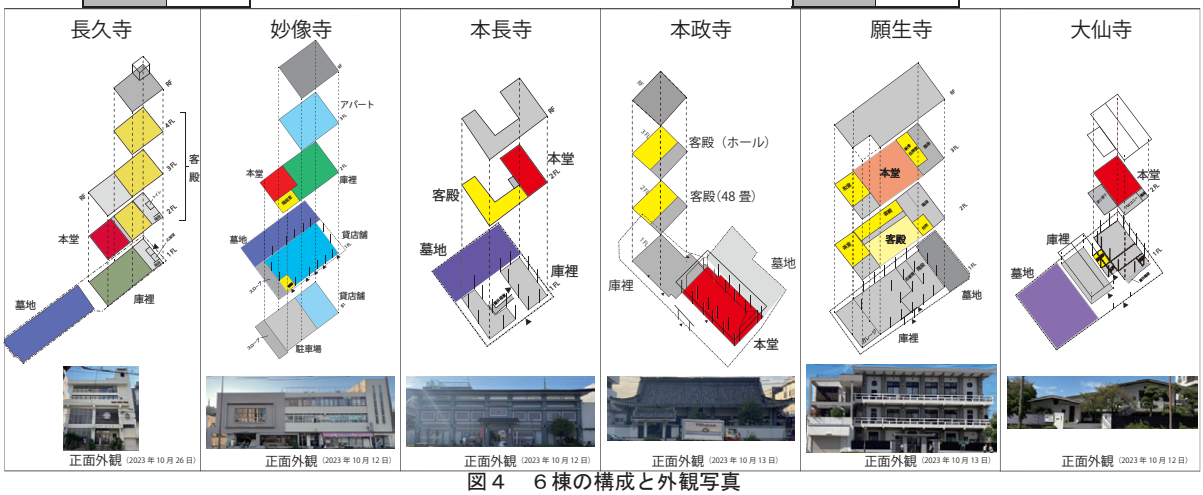


図４　６棟の構成と外観写真

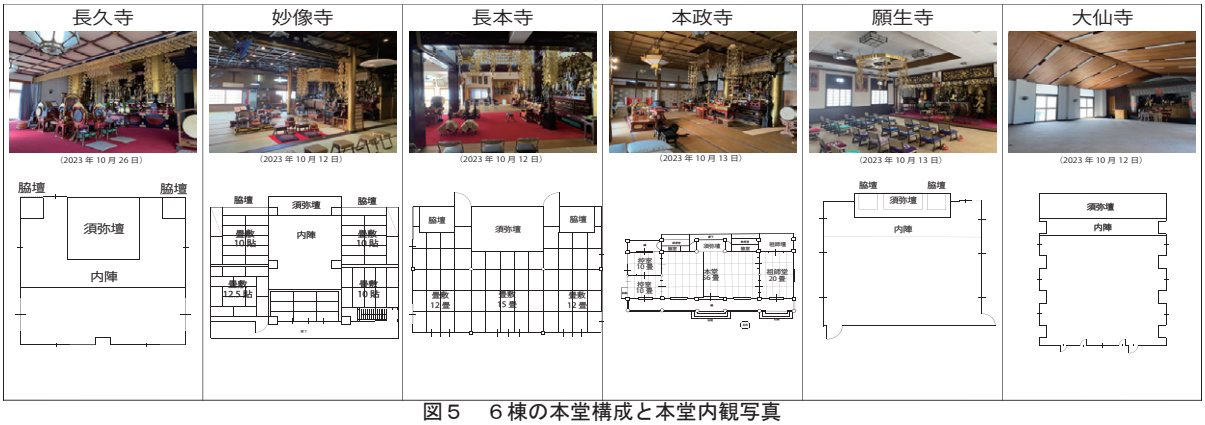


図５　６棟の本堂構成と本堂内観写真

天引村に寄り添う ～住民とともに進める村おこし～

学籍番号　K20239
名　　前　奥野美桜
指導教員　井上年和

改修計画　村おこし　天引村
ワークショップ　保全継承　茅葺民家

1. 研究の概要・目的

準限界集落とは、55 歳以上の人口比が 50%以上であり、現在は社会的共同生活を維持しているが、跡継ぎの確保が難しく、限界集落の予備軍となっている状態の集落のことである。人口減少とともに減っていく子ども達や、壊されていく古民家は、村の継承にとって大きな課題である。

そこで、現代に残る集落を調査し、課題を明確にしながら自ら村おこしに参加することで、村の保全と継承のあり方について言及することに意義があると考えた。本研究では、京都府南丹市園部町天引『天引村倶楽部』を事例に挙げ、村おこし活動や、天引村倶楽部の拠点となっている茅葺民家について分析した。



図 1-1 天引村倶楽部の位置



図 1-2 天引村倶楽部の外観

・2. 研究の方法

まず初めに現場調査を行い、現状図を作成する。次に、この村に住む方々や、村を支えている方々にヒアリングをし、村の状況を把握する。同時に、実際に開催されているイベントや村おこし活動に参加し、村おこしの実態を学ぶ。そして、団体の拠点となっている茅葺民家の模型を作製し、模型を囲みながら、住民とともに村の未来を考案するワークショップを開催する。

・3. 天引村倶楽部について

3-1. これまでの村の活動

活気が少なくなった地域の状況を変えていこうと自由に発言できる場を通じて新しい取り組みを進めようと、住民全体が参加するかたちで、10 年前に「天引区の活性化と未来を考える」という団体が設立される。その団体は 2022 年に、「令和 4 年度　あたしたちの町・くらしづくり活動賞」内閣総理大臣賞、「令和 4 年度　手づくり故郷（ふるさと）賞」審査員特別賞の 2 つを受賞した。

また、イベントについて、月 2 回開催されている「天引村むくむく市」では、住民の方々が地元、南丹市天引産の新鮮野菜やお米、加工品、炭などを販売している。その他にも、年に一度開催される「蛍コンサート」や、民家を改修する土間たたきワークショップなども開かれている。

3-2. 天引村に関わる関係者

天引に関わる関係者として、様々な役職の方にヒアリングを行った。まず、天引を支える代表として、先導して村のイベントなどを開催されている、奥村育子さんという方がおられ、この調査を行うきっかけとなった方である。その他にも、非営利活動法人で働かれている方、南丹市市役所で働かれている方など、様々な方との出会いがあった。

天引村を支える立場の意見として多く共通していたのは、『楽しく』という理念だ。そして、「皆で協議はするけれど、村の活性化のためにやることを決めるのは個人次第」という自由な発想。この村に出会い、ヒアリングを通して、何事も楽しくやることが大切であると強く感じた。



図 3-1 受賞ポスター



図 3-2 ヒアリングの様子

・4. イベントへの参加

天引村について少し深くまで知った頃、年 1 回開催されている『蛍コンサート』への参加にお誘いいただいた。村のシンボルでもある「むくの木」がある場所に、村民が全員集まる。私たち学生は、ボランティアとしてゴミ箱を作ったり、盛り上げる係としてダンスを踊ったりした。私自身、村のお祭りに参加をして、より天引村のことが好きになった。

村民にとっての生活場所であり、人生に寄り添っていくものとして本当に大切な場所であり、守っていきたいという熱い想いが十分に伝わってきた。

現代を生きる私たちにとって、「支え合う」姿を近くで見たことが、とても新鮮で心が温かくなった。人と人が支え合い生活するという昔ながらの風景を見て、天引村倶楽部の民家は、そんな場面が毎日みられるような、あたたかい場所にしたいと感じた。



図 4-1. 2　お祭りに参加している様子

Close to Amabiki Village,
-Village revitalization carried out together with residents

Mio Okuno

・5. 茅葺民家の調査

民家の現状を調査し、模型製作を進めると同時に、民家改修の未来計画案を住民とともに考える。すでに改修を終えているところを除いたうえで考えると、注目すべき点は「増築部分」であることが分かった。実測を行った時、床下の部分が水分を含み柔らかくなっていることが分かった。増築部分の北側はすぐ横に、山につながる崖が聳え立ち、排水溝も設けられていないことで、雨水が直接民家に流れ込むようになっている状態だ。そこで、一つの案として、増築部分の壁・床上を取り除き、床を土間たたきで仕上げることで、共有スペースを広げられると同時に、民家の腐敗を防ぐことができると考えた。共有スペースを広げることで、更に多くの人数とスペースを共有することが出来る。今は一部の人数で集まることが多いが、現在よりも人数を巻き込むことができると、活性化に近づけられのではないかと考えた。


図 5-1 建物北側の様子


図 5-2 増築部分の様子

・6. ワークショップの開催

この村では、様々な取り組みや活動を行っておられるが、非営利活動法人の方との出会いをきっかけに、自らプロジェクト事業を行うことに挑戦することになる。今までしたことのない経験が、急に上から降ってきたような感覚で、とても難しいことだと考えたが、やったことのない挑戦に心が燃え、やってみることを即答した。

私が企画したプロジェクトは、活性化を目的とした模型展示ワークショップである。村の拠点になっている民家の模型を製作し、住民を巻き込み、模型を囲んで建物や村のことについて語り合う、という内容で行う。

すでに第 1 回目を終えており、参加人数は 10 名程度だった。始まってすぐに、模型を観察し話し合う住民の方々、模型と実物を照らし合わせて指摘してくださる方もいた。私たちは、付箋を用いて出てきた意見を書き込む作業を行った。茅葺民家や天引村について、様々なお話を聞くと、この民家は作られた時代に寄り添う形で残していくといいのではないかと感じた。玄関先の踏み台に寄り添う住民の懐かし気な雰囲気や、炭がかった壁の醸し出すあじなど、残すべきところを最大限に残して、この建築の未来を考えていこうと思う。

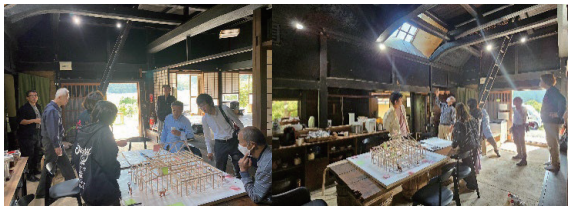


図 6-1. 2　模型展示ワークショップの様子

・7. 結論

様々なイベントや、ワークショップを通して、この村の活性化にはとてもプラスな影響が出たと考える。実際に住民が集まれる機会を提供することで自然に人が集まり、話し合う空間が生まれた。この集落には子どもが少なく、お年寄りが多く在住する為、村を存続させるのが難しいとされているが、若者がこうして継続的に活動をし続けることで、村を含め、人々の活動が止まることを防ぐことが出来るだろう。

調査によって、この村にはたくさんの魅力があることが分かった。それと同時に、この集落に残る住宅は茅葺民家が多く、街並みにもなじむ外観で、それらにも魅力を感じた。建築を含め、多くの魅力が残るこの村を、そのまま消滅させるわけにはいかない。この素敵な村を守りながら活性化させるためには、これからも若者が活動し続けなければいけないと考える。

・8. 図版

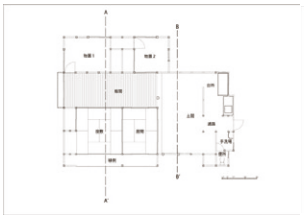


図 8-1 平面図


図 8-2 A-A‘断面図


図 8-3 B-B‘断面図


図 8-4 南側立面図


図 8-5 西側立面図


図 8-6 東側立面図


図 8-7 南側模型写真


図 8-8 北東からみた全体




図 8-9. 10 復元模型と改修後の模型

京都美術工芸大学　芸術学部　建築学科　井上年和ゼミ　　Kyoto Arts and Crafts University Faculty of Crafts Department of Architecture Toshikazu Inoue Seminar

京都における密教本堂の近世化に関する調査研究　～外陣・礼拝空間の意匠を中心に～

学籍番号　K20244
名　前　金田拳汰
指導教員　砂川晴彦

近世社寺　密教本堂　内外陣
柱間装置　立登柱　出組

序章　第１節　研究の目的

近世本堂　研究の問題点

京都には近世の密教本堂が少なからず現存している。京都市内最古の木造建築物で 1227 年に建立された大報恩寺本堂（千本釈迦堂）[1]と 1363 年に建立された六波羅蜜寺本堂の中世密教本堂は国宝・国の重要文化財に指定され、歴史的評価が高い。しかし、近世の密教本堂は十分な建築的評価をされていない現状がある。

着眼点～外陣・礼拝空間に注目して～

そこで本研究の目的は京都の現存する近世密教本堂の建築的評価を試みることである。建築的評価にあたり外陣・礼拝空間の意匠に注目したい。近世では幕府の本山・末寺の建築規制や木材の不足といった緊縮の時代の中で、どのように工夫し意匠を操作し外陣・礼拝空間を豊かにしたのかを中世堂と比較し、本堂建築の近世化の様相を明確にすることで近世密教本堂の建築的評価を高めたい。

第２節　研究の対象

本研究は京都府教育委員会の『京都府の近世社寺建築』[2]を基にする。そこから京都市内の３間堂・５間堂・７間堂をリストアップし、これらを考察対象とする（**表１、２、３、４**）。

第３節　研究の構成

本論文は、序章と結章を除き全７章で構成される。第１章では資料を基に作成した柱の略図を用いて７・５・３間堂の円柱から角柱への移り変わりについて考察を試みる。第２～７章では５間堂の現地調査[3]（写真撮影、野帳にスケッチ、レーザー距離計による高さ方向の測定、聞き取り）と資料を基に略図化を行い、建築的特徴に関する考察を試みる。そして結章では各章で判明した近世化の様相を総括し、京都の密教本堂近世化の様相を明確にする。

表１　７間堂

建物名	宗派	建立年代
真正極楽寺本堂	天台	1717 年
勝林院本堂	天台	1777 年

表２　５間堂

建物名	宗派	建立年代
理性院本堂	真言	17 世紀初
神護寺毘沙門堂	真言	1623 年
大雲寺本堂	天台	1641 年
勝持寺本堂	天台	1665 年
山科毘沙門堂本堂	天台	1666 年
勧修寺本堂	真言	1672 年
善峯寺本堂	天台	1692 年
金蔵寺本堂	天台	1692 年
智積院明王殿（大雲院本堂）	真言	―
報恩院本堂	真言	―

表３　３間堂

建物名	宗派	建立年代
尊勝院本堂	天台	17 世紀初
寂光院本堂	天台	1603 年
神護寺五大堂	真言	寛永年間（1624~1644 年）
新善光寺本堂	真言	寛文年間（1661~1673 年）
大乗院本堂（随心院金堂）	真言	1697 年
覚勝院聖天堂	真言	1711 年
十輪寺本堂	天台	1750 年
一言寺本堂	真言	文化年間（1804~1818 年）
神光院本堂	真言	1829 年
廬山寺元三大師堂	天台	1835 年

第１章　平面における本堂の近世化　～円柱から角柱へ～

建立年代順に並べた結果、総円柱から総角柱へ変容した事例が確認できた。それは大雲寺本堂（５間堂）新善光寺本堂（３間堂）である。一方で総円柱の遺構もある。全ての堂が総角柱に移行したわけではなく、総円柱と総角柱の堂が均衡して存在している。堂の正面（側柱１間）のみを角柱にするという柱の使い分け方がされた事例も確認された。それは勧修寺本堂（５間堂）尊勝院本堂（３間堂）である。総角柱へ変容した一方で、柱の使い分けを指摘できる（**図１**）。

第２章　外陣断面比較の研究その１　天井形式

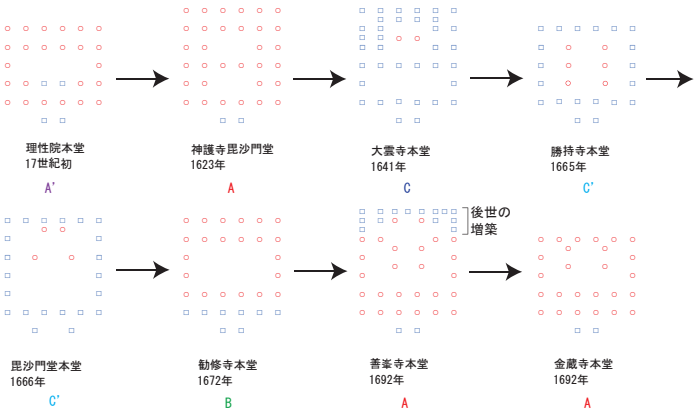
勝持寺本堂、善峯寺本堂、金蔵寺本堂で鏡天井が確認された。鏡天井の堂が多く確認され、現存中世堂には見られない鏡天井の普及が指摘される。一方で、中世堂以来の化粧屋根裏、格天井の堂も確認される（**図２**）。

第３章　外陣断面比較の研究その２　軸部・小屋組の合理化

柱頭に組物がある柱形式が６例中３例、立ち登せ柱が６例中３例ある。また、立ち登せ柱は近世遺構最古の理性院本堂で登場しており 17 世紀には立ち登せ柱が京都の近世堂に普及しているとわかる。一方で、善峯寺本堂が吹き放ち外陣とし、柱頭に組物がある形式を採用したのは西国霊場として参詣者を意識したためであろう（**図２**）。

第４章　外陣断面比較の研究その３　外陣虹梁

外陣虹梁のある堂は７例中４例である。外陣虹梁のない堂は７例中３例である。外陣虹梁は 17 世紀初の理性院本堂にて既に消失している。すなわち、外陣虹梁が消失した堂がある一方で、外陣虹梁を採用した堂もあり、また寺院によって外陣虹梁の見せ方が異なることから外陣虹梁による外陣空間の見せ方の多様化を指摘できる（**図２**）。



パターンA：向拝柱のみ角柱
パターンA'：向拝柱と内外陣境のみ角柱
パターンB：正面のみ角柱
パターンC：全て角柱（四天柱以外）
パターンC'：全て角柱（内外陣境と四天柱以外）

図１　京都近世５間堂の柱形の模式図（年代順）

第５章　外陣断面比較の研究その４　高さスケール

勧修寺本堂から天井高（床板から天井板）が高く、善峯寺本堂と金蔵寺本堂はどの堂よりも高い。参拝者に外陣空間を大きく見せるためと指摘できる。霊場の堂として天井を高く設け、外陣空間を大きく見せるという点で中世堂の空間性に似る。外陣空間の見せ方によって高さが意図的に操作されていると考えられる。

第６章　内外陣境の柱間装置とその透過性

内外陣境全体の透過性の程度について理性院本堂、勝持寺本堂、山科毘沙門堂本堂が中世堂と同様なことから保守的な堂といえる。柱間装置の配置については勧修寺本堂から中央１間に両開戸が確認される。この勧修寺本堂の中央１間の開戸の採用は新傾向と捉えられる。中央１間に開戸を採用したのは、門跡寺院の勧修寺本堂（移築改造）と参詣寺院の善峯寺本堂と金蔵寺本堂がある。門跡寺院と参詣寺院は性格が異なる両者であったが開戸の採用に関しては同じであった。

柱間装置と柱形（角柱にするか）の関係において構法合理性を認められない。信仰的要求からの意匠の選択が行われていると考えられる。近世では中世に見られた組み合わせはなく、組物、梁組、柱間装置、柱形が自由度高く選択されていると考えられる（図３、４）。

第７章　組物・中備

組物について出組は９例中４例である。平三斗は９例中３例である。中世堂との違いは確認されなかった。中世堂ともに二手先以上の堂は確認されない。このことから密教本堂は二手先以上の組物は用いないと考えられ、京都の近世堂は出組・平三斗が一般的といえる。外陣の組物他のと平三斗・出三斗とする控えめさは比例している。すなわち、寺格相応の意匠の組合せがあると考えられる。

中備については蓑束、撥束、本蟇股を用いた堂が登場する。蓑束が９例中５例で、本蟇股が９例中５例とし、京都の近世５間堂では蓑束と本蟇股が一般的といえる。

結章　総括～本堂近世化の様相～

以上、本稿では意匠の観点から京都近世密教本堂の外陣・礼拝空間について考察し、近世化の様相を検討してきた。どの観点でも中世堂とは異なり意匠手法の多様化を指摘でき、近世堂は出組（一手先）までという寺格を厳守しつつ組物、中備、柱形、柱間装置、天井形式が参詣寺院や門跡寺院のなどの寺院の性格を背景に自由度高く意匠が選択されているといえる。

【註釈】
１）京都府教育庁文化財保護課『国宝大報恩寺本堂修理工事報告書』1954 年
２）京都府教育委員会『京都府の近世社寺建築　近世社寺建築緊急報告書』1983 年
３）現地調査日は次の通り。理性院：2023 年 10 月 3 日、神護寺：2023 年 10 月 11 日、勝持寺：2023 年 10 月 6 日、山科毘沙門堂：2023 年 10 月 5 日、勧修寺：2023 年 10 月 19 日、善峯寺：2023 年 9 月 29 日、金蔵寺：2023 年 10 月 23 日、智積院：2023 年 10 月 20 日、報恩院：2023 年 11 月 6 日

【参考文献】
京都府教育委員会『京都府の近世社寺建築　近世社寺建築緊急報告書』1983 年。京都府教育庁文化財保護課『国宝大報恩寺本堂修理工事報告書』1954 年。川上貢「京都の古宗と禅宗寺院の近世社寺」『仏教藝術　170 号』1987 年

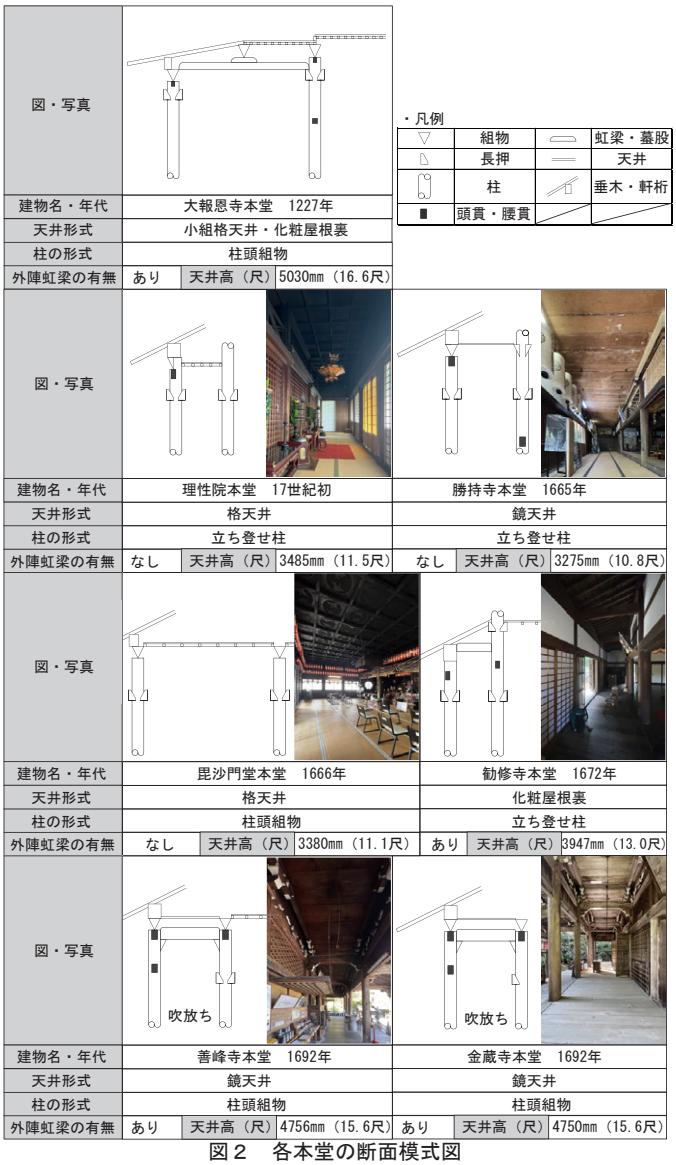


図２　各本堂の断面模式図

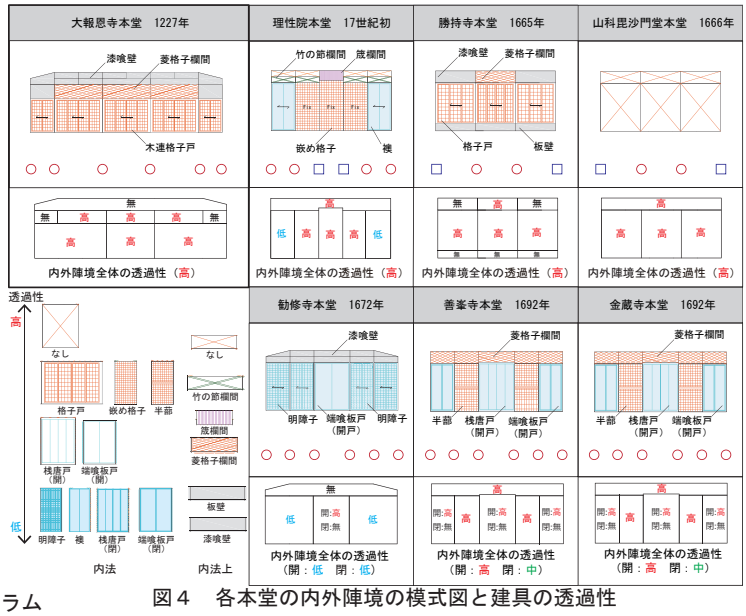


図４　各本堂の内外陣境の模式図と建具の透過性

表４　寺格（５間堂）

建物名	年代	寺院
理性院本堂	17 世紀初	醍醐五門跡
神護寺毘沙門堂	1623 年	真言宗遺跡本山
大雲寺本堂	1641 年	天台宗園城寺総本山の別院・天台聞門宗総本山
勝持寺本堂	1665 年	西国薬師第四十二番霊場
山科毘沙門堂本堂	1666 年	天台宗五箇室門跡
勧修寺本堂	1672 年	門跡寺院
善峰寺本堂	1692 年	西国霊場第二十番札所
金蔵寺本堂	1692 年	—

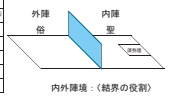


図３　内外陣境ダイアグラム

外観構成要素による連続性から見たまちなかの通り景観に関する研究

学籍番号　K20245
名前　鎌崎壮馬
指導教員　生川慶一郎教授

外観構成要素　通り景観　連続性
宮川町　姉小路　京都市

1. 序論

本研究は祇園南歴史的景観保全修景地区に指定されている宮川町通を通り抜け新宮川町通りに入ると一変する通り景観に違和感を覚えことに始まる。この様な景観の断絶が生じてしまう背景を明らかにし、建物の外観構成要素による連続性に着目し景観改善を行うことで通りとして景観の向上につなげる仕組みを検討する。

研究の目標は、京都の特徴としてまちなかに伝統的な町家が存在している為、そういった景観に良い影響の建物を基準にその建物と相性の良い建物を計画し、連続性を生み出すことで建物の両隣から通り、通りから市全体の景観をよくすることである。

研究方法は、現行の通り景観の保全・修景に関する取り組みを把握し、宮川町通と新宮川町通の通り景観の実態に関する比較、また市民主体で通り景観の形成に実績を有する姉小路界隈の取組を分析することで、宮川町通からの連続性を妨げない新宮川町通の景観改善の在り方について提案を行う。

2. 京都市の景観に関する取り組みの現状

京都の景観を良くするものとして京町家が挙げられ、京都市はそれらを守るために町家の保全及び継承に関する条例や景観計画などで保全を行っている。

景観に関する法制度としては主に景観法があり、この法は国による規制を行うためのものではなく、地域の取り組みを支援するためのものである。

京都市が行っているものとしては、国の景観法を用いて政策をする、市街地景観整備条例や眺望景観創生条例など様々な条例を取り決め、各地区や地域の景観を保全、修景などを行っている。

市民主体な取り組みとしては、地域ごとで景観を守りたいといった人達が協議会や市議会などを使い景観保全を行っている。

3. 宮川町の通り景観に関する実態と特徴

宮川町の景観保全の実態としては、祇園南歴史的景観保全修景地区Ⅱ地区に分類され、おおむね宮川筋３丁目から宮川筋６丁目の範囲で景観保全が市によって行われている。ここでは建てられる建物の様式に制限があり、細かな仕様規定が定められているが、意匠が優れている際はこの限りでないとされている。

ここで行う連続性の調査は、建物の要素一つ一つに注目し要素が多ければ多いほど通り景観に良い影響を与えているとし、すべての建物を対象とする。取り上げる要素は、既往研究の中で得た京町家の要素と宮川町の特徴から得た要素の二つの側面で有無を調査する。宮川町の特徴から得た要素は、祇園南歴史的景観保全修景地区に定められているルールの中から抜粋する。

通りの調査を行った際に、まず要素として格子、大戸、通り庇の要素はどの通りにも多く含まれている。一文字瓦ではないが日本瓦や銅板の建物がいくつか存在していて、それらの通り景観に及ぼす影響は一文字瓦の建物と比べ大した差はないのではないか。設備上必要な外に設置している物が格子、犬矢来、簾で隠されている建物は評価が比較的高く、評価の低い建物は設備など通り景観にそぐわない物がそのまま置かれていることが多い。また、格子などはあっても材質や色によって景観に及ぼす影響が異なる。要素とは異なり、歌舞練場の様な大きな建築物の評価の仕方や、二つの通りと交差する建物の評価の仕方、正面の建物との関係性が今後通り景観の評価をする際に重要になるのではないかとも考察できた。

4. 姉小路の通り景観に関する実態と特徴

姉小路の景観保全の実態としては姉小路を考える会を設立し、灯りや路側帯、町式目などの取り組みを市民主体で行い、姉小路界隈まちづくり協議会が認定され現在では地域景観まちづくり計画書に沿って景観保全が行われている。またこの通りは建築協定が定められている地区とそうでない地区があり、建築協定の内容としては、用途と形態の制限があり用途では、コンビニやワンルームマンションなど現在の風情から離れる様な用途の建物に対する規制、形態では階高などの高さにおける制限や騒音対策のための規制がされている。

ここで行う連続性の調査は、宮川町と同様の調査を行う。この際姉小路の特徴から得た要素は、既往研究の町並み景観整備の作法から抜粋する。

調査の結果は次のようになった（図１）

意見交換会の議事録から修景を行った建物がわかるので、今回の調査をした際に修景を行った建物の評価がどのようになるか、また修景後でも評価が低い建物や修景

A Study On Street Landscape In Kyoto City　　Soma Kamazaki

を行っていない建物で、もう少しでよい評価になる場合など様々なパターンがある為それを踏まえて考察を行う。それと同時に、宮川町の際に上がった交差点の建物の評価の仕方については姉小路の景観対策をする範囲が西や南に拡大しているため姉小路内で事例や考察を行う。

5. 宮川町と姉小路の比較から見た通り景観の連続性に関する考察

以上の調査において判明したこととして、仕様規定によってその区域内では良好な景観が担保されている。しかし区域の境界付近で景観の連続性が断絶しているといえる。それらを踏まえ、区域を決めない景観改善の手段が地域の連続性を担保する為に不可欠であると考える。現状、祇園南歴史的景観保全修景地区内は京都市の網掛の結果比較的要素が多く存在している為、よい景観の地区になっている。しかし、その周辺には特別取り組みがされていない為断絶感を感じさせる結果となっている。また、現在の仕様規定の範囲を拡大することは断絶する箇所が変わるだけになってしまう恐れがある為、連続性の担保という点において一概に良いとは言えない。周辺地域全体の景観向上に繋げるには、宮川町周辺の地域性や宮川町らしい景観構成に必要とされる要素の増加が第一歩であると考える。また、連続性という観点で考えた際取り入れるべき要素は、連続することで意味のある要素を敷地の向こう三軒両隣の建物に合わせて取り入れていく必要があると考える。たとえば両隣の建物に通り庇がある場合は新築、改築の際にデザインとして通り庇を設けることで連続性による景観向上となることや、片側の建物に犬矢来がある場合はその犬矢来と連なるように犬矢来を取り入れるといった様に通りの連続性を考慮したデザインを増やすことは、通りの一体感や地域力をより感じることができ、景観の向上に繋がると考える。

このように向こう三軒両隣の建物と重複するような要素を取り入れ、計画することで特定の区域を持たない景観改善を行い断絶感のない連続性を生み出すことが仕様規定の範囲の周辺に必要であると考える。しかし、要素は地域の特性や地域力が可視化された景観を感じる指標のようなものであると捉えている為、宮川町の特徴やその周囲の特徴から得た要素の有無だけで通りを判断することは、最低限の連続性のある景観を担保することができるかもしれないが、そういった仕様規定だけでは地域の人の生活に合わない使われ方などから結果的に想定している様な景観の連続性が担保されない結果に陥ってしまうのではないかと考える。姉小路では主に景観に関する要素に対した要望ではなく、町の使われ方に対し地域の人の風格を順守する様な要望が出ていて、それらは地域の特性を鑑みた要望である。そういった要望が仕様規定ではなく性能規定として浸透した結果、通り景観が良いものとなっていると考えられる。したがって通り景観の連続性を担保する仕組みとしては、向こう三軒両隣の建物の要素の踏襲による仕様規定と、どのようなまちにしたいのか、どのような使われ方が望ましいのかを考え、性能規定として取り入れる二つの側面から景観改善をおこなう必要があると考える。

参考文献

1. 京都市情報館：祇園町南歴史的景観保全修景地区歴史的景観保全修景計画，https://www.city.kyoto.lg.jp/tokei/page/0000281263.html，2023 年 4 月 13 日参照
2. 姉小路界隈まちづくり協議会：地域景観づくり計画書，http://aneyakouji.jp/welcome/pdf/aneyakouji_plan.pdf
3. 木多彩子 他：「京都市における町家活用型店舗の外観の特徴と京都市内外の住民評価」,日本建築学会計画系論文集,第 76 巻第 659 号,159-168,2011 年 1 月
4. 木多彩子：「京町家転用型施設群を活用した町並み保全の可能性」,平成 20 年度日本建築学会近畿支部研究報告集
5. 木多彩子：「町家活用型商業空間のインテリアデザイン-京都市中京区の事例-」,日本建築学会大会学術講演梗概集,2006 年 9 月
6. 三村浩史：「京町家外観類型別分布特性からみた町並みの保存・継承に関する研究」,日本建築学会計画系論文報告集,第 450 号,1993 年 8 月
7. 大場修：「龍野旧城下町における町家ファサードの構成と改造」,日本建築学会計画系論文報告集,第 424 号,1991 年 6 月

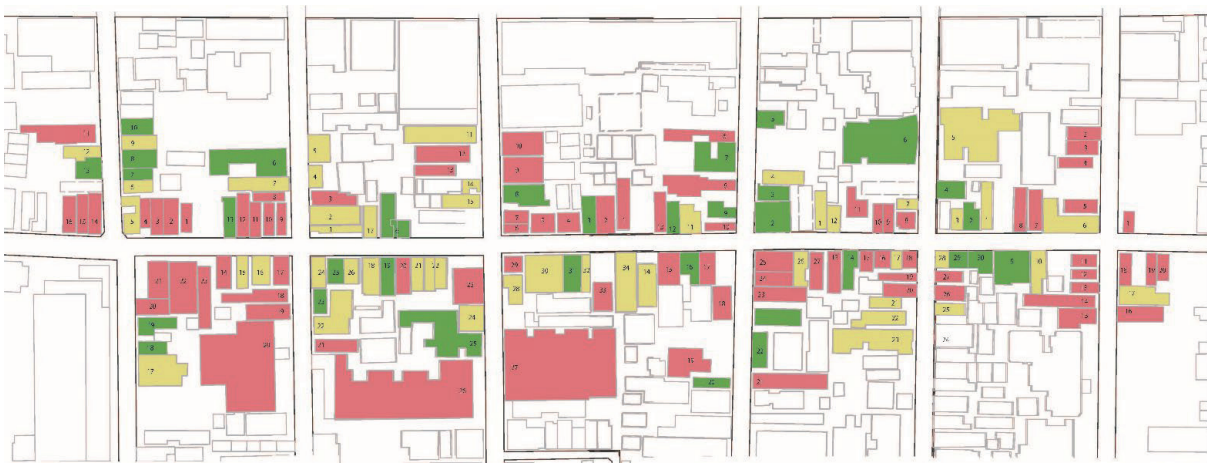


図１ 姉小路の色分け

京都美術工芸大学工芸学部建築学科　　Kyoto University of Arts and CraftsDepartment of Architecture, Faculty of Crafts

待たない時代の「待つ」を考える

愛知県刈谷駅周辺施設を例として

学籍番号　k20246
名　　前　神谷亮佑
指導教員　人見将敏

Thinking about “waiting” time and space in modern society –

plan for some facilities around Kariya station

Student Number　k20246
Name　KAMIYA RYOSUKE
Supervisor　HITOMI MASATOSHI

0. はじめに

現代では、インターネットやスマートフォン、予約アプリの発達等により、これまでと比べ何かを「待つ」時間が大幅に減り、時間とその待ち時間のすごし方も変化している。そのため、「待つ」という行為、時間とその待っている場所や建築、そこから見えるもの・人等との関係をとらえる必要があると考える。本計画は私の故郷である愛知県刈谷市の刈谷駅およびその周辺を対象として、待てない時間の「待つ」行為、時間と空間のあり方を提案する。



図１計画対象敷地の現状

1. 愛知県刈谷市および刈谷駅について

刈谷市は人口 152,972 人の市である。直近６年の間に人口が 15% 増加しているように全国の人口減少を横目に、継続的に増加している珍しい市であり、これは今後も同様になると予測されている。この背景には TOYOTA 関連企業が多く集まる地域であり、子連れの家族が移転してくることが大きい理由である。自動車関連企業が集まり発展しており、刈谷駅が交通拠点として、周辺の開発が進み今後もさらに整備が進められる予定である。
私自身も大学入学までおよそ 16 年住んできた町に将来も住む予定でおりそのために、市民生活にとって重要なインフラである刈谷駅およびその周辺地域の整備を考えた。
また、刈谷駅はバスや電車といった交通手段の中心であり、同市の玄関口として機能している。先に述べたように多くの会社員や学生が利用しており、再開発事業により都市機能の集約化が実現され、中心市街地としてのにぎわいも創出され始めた。しかし問題点もある。刈谷駅北部に企業関連駐車場が集中しているため、交通渋滞の解消に向けた自動車交通の円滑な処理が必要であること。また、中心市街地に複合施設や市民ホールなどの大規模事業所が立地するため、交通混雑により中心市街地へのアクセス利便性が低下していることがあげられる。これらのインフラ整備の課題は刈谷市都市交通戦略として問題に上げられている。



図２< 上下 >



2. 設計の趣旨

刈谷駅上部に設けられている南北に伸びるペデストリアンデッキに着目した。特徴的な歩車分離は北側では商業施設と、南側では複合施設が繋がっており、多くの人々に利用されている。このペデストリアンデッキをさらに四方八方に伸ばし、空中遊歩を作ることによって、人々が安全に、効率よく移動できるようになることを目指す。また刈谷市中心市街地まちづくり基本計画にも上げられているように目標として人を引き寄せる、回遊とにぎわいのあるまちづくりを目指す。今回行う提案は、その発端としての計画である。

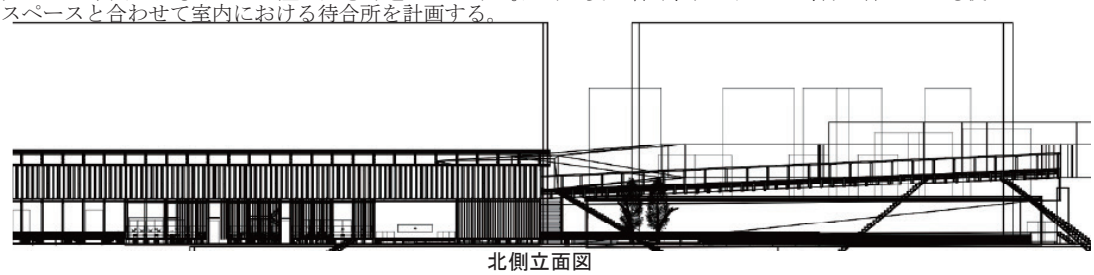
3. 計画概要

3-1 敷地について
隣地には二階建ての屋根付きの自転車置き場があり、そこで十分な自転車数を確保できると判断したため、利用率の高い北口、屋外自転車置き場の一角を選定した。（図１黄色）周辺地には商業ビルや、交番、コンビニエンスストア、飲食店等があり活気のある場所となっている。



図３　配置図

3-2 用途
下記用途並びにそこへのペデストリアンデッキの接続（増築）
１階 ： 料亭、図書館、待合所、駐輪スペース
２階 ： カフェ、待合所、託児所
これらの問題点は、現状の刈谷駅の問題点（利用人数・利用者層から見た休憩場所の少なさまた、学生の居場所屋託児スペースの不足）
本計画の用途は、次の観点から設定した。
①刈谷駅、刈谷駅周辺の利用目的と刈谷駅周辺で充実した方がいいものを市がとった結果によると通勤での利用目的が多い中ペデストリアンデッキによる南北の通過のためであったり、送迎や待ち合わせにには使われていることが分かる。
②実際に学生の頃体験した駅からよれる学生のための居場所が少ない。そこで、図書館と組み合わせた。
③社会問題にも着目し、託児所が少ないことが上げられる。駅直結とすることで出勤退勤の際にそのまま預けられる、引き取れるような場所を計画することによって子育てに対する負担を減らすことを目的とする。
④刈谷駅に待合所がないところに注目した。電車とバスを合わせて１日およそ５万人もの人が使う夏は 40℃近くになるのに対し、冬は0℃を下回る日もあるほど差が大きく過ごしにくい。屋外は夏は暑く、冬は寒いため、待ち合わせにも使えるカフェのオープンスペースと合わせて室内における待合所を計画する。



北側立面図

所在地：愛知県刈谷市桜
主な用途：複合施設、待合所、駐輪所、託児所
敷地面積：983m^2
建築面積：983m^2
延床面積：1,830m^2
キーワード：木造、ペデストリアンデッキ

Location ：sakura,Kariya,Aichi
Main Use ：complex facility,Waiting area, bicycle parking area, daycare center
Site Area ： 983m^2
Building Floor Area ： 983m^2
Total Floor Area ： 1,830m^2
Keywords ：wooden,pedestrian deck

3-2 計画の特徴について

SDGs や、今後の可変に対応できることを踏まえ、構造は木造とした。特徴的な造形となるように屋根はトラス構造とし、露出させることで開放的な空間と外部からの意匠を意識した。外観は木造ならではの和モダンが感じられるようにすることで特徴的の中でも落ち着いた雰囲気を出した。ペデストリアンデッキからのアプローチ（図２）は同じく木造の橋とし、つながりを感じられるようにした。また、向かって左側には植栽をうえ、紅葉などの四季を生かせる。西日を遮り、朝日を程よく取り入れるために北側外壁にはスリットを設けた。２階のカフェ部分オープンスペースはハイサイドライトによって緩やかな採光を取り入れた。



図５　ペデストリアンデッキからのアプローチ



図６　外観パース（北側寄り）

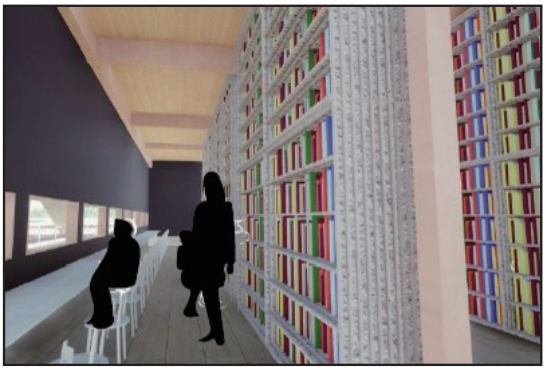


図７　内観パース（スタディースペース）

4. 将来への展望

特徴的なペデストリアンデッキを生かすことが重要でありこれらを延長することによって様々な場所へ安全に人々が移動できるようにしたいと考えている。これは車も同様であり交通渋滞の解消に繋がる。図８はそのイメージ図である。

インターネットなどデジタルの普及によって待つことのできない、忙しい駅利用者に向けた待つことのできる複合施設を計画した。
スマートフォンは便利であるが、スマートフォンを使わずに待つことも、機械に使われている現代人にとって必要であると考えたためである。

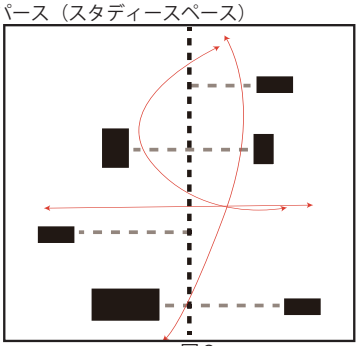
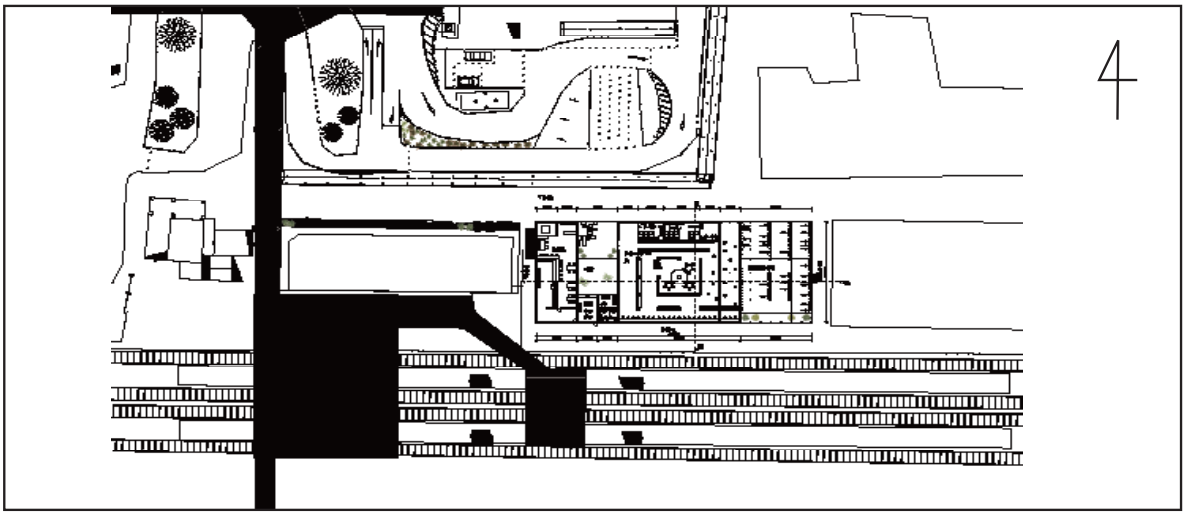


図８

参考、引用文献
刈谷駅市街地総合再生基本計画（本編）
https://www.city.kariya.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/004/636/kariyaeki_sougousaisei_honpen.pdf



京都市における高経年マンションの管理実態が流通市場に与える影響に関する研究

学籍番号　K20247
名　　前　亀本夏稀
指導教員　生川教授

京都市　分譲マンション　高経年
管理実態　流通価格　中古流通

1. 研究の背景と目的

京都市内の分譲マンション数は約 2,000 棟もあり、高経年マンションは年々増加している。10 年後には築 30 年以上となるマンションが全体の半数以上になる見込みがあり、全国的にマンションの高経年化の進行が顕在化している。高経年マンションでは建物や施設の老朽化と区分所有者の高齢化といった 2 つの老いに深く関係する管理不全が社会的に問題となっており、マンションの管理のあり方が重要となってきている。マンションは将来にわたり受け継がれていくものであることから、その管理の状態を可視化する必要がありマンションの管理適正化に関する法制度、「管理計画認定制度」が 2022 年に施行された。

京都市における住まいの現状として、若者や子育て世帯が都心の新築住宅に住むことは予算的に難しいことから、価格的に手の届く郊外の新築住宅を選択する傾向が見られ、京都市外への若年層の人口流出が課題となっている。そこで、京都市としては若年世帯の新たな住まいの選択肢として、新築住宅と比べて比較的廉価である高経年マンションが期待されている。築年数が古くても管理が良好であれば資産価値的にも下がらないとすれば、安心して投資することもでき、高経年マンションの流通市場も活性化すると考えられる。

本研究では、管理が良好な高経年マンションは価格が最終的に安定化するとの仮説のもと、京都市内における高経年マンションの価格推移と管理実態を比較分析することで、管理実態が流通価格に与える影響を考察する。

2.研究方法

不動産検索ネットワーク REON から高経年マンションの過去 30 年分の売出価格に関する情報を提供してもらい、比較的地価の変動の少ない行政区に立地する物件を対象に売出価格の変動を確認する。またその変動の傾向と管理実態の評価と関係性を考察し、良好な管理はマンションの流通価格の安定化に寄与すること明らかにしたい。

3.京都市の高経年分譲マンションの管理の現状

マンションの高経年化が進む今、市民全体でこれらを認識し、マンションをできるだけ長く使えるように適切に管理をしていくことが、特に京都の町の特徴を踏まえると、非常に重要になってくる。京都市内のマンションの昭和 40 年代から本格供給が始まっており、令和 2 年度末時点で、1900 棟、11 万戸に達している。現在 2,000 棟を超えている状況である。このうち築 40 年を超える高経年マンションは約 200 棟であり、全体の約 1 割を占めている。バブル期に市内都心部を中心に多量に供給され、これらのマンションが段階的に経年化し、高経年化が急速に進行すると見込まれている。特に市内に建つ小規模なマンションほど老朽化の進行が見られる割合が高くなっており、築年が古くなるほど劣化割合が高くなり、中には築 20 年を超えた頃から劣化が見られることもあることから注意が必要である。これらの劣化が見られるマンションについては管理不全の可能性があるため、令和 4 年度には管理状況のヒアリング調査を実施し、現在行政による支援の必要性を検討しているところである。

4.高経年マンションから学ぶ長寿命化の技

4/21 に日本マンション学会が主催した市民シンポジウムの発表内容の抜粋を表 1 に示す。

表 1 市民シンポジウム「高経年マンションから学ぶ長寿命化の技（マンション学会主催）」における発表内容（抜粋）

建築・設備の維持管理の技	財務マネージメント
・大規模修繕工事とそれ以外の工事の時期をずらしている	・駐車場代収入を修繕積立金へ
・コンサルタントに丸投げしていない	
管理組合運営の技	コミュニティづくり
・1年目は学ぶ、2年目は運営、3年目は補佐とうい輪番制	・まちづくりマスタープラン

表 2 活動内容

4月19日	マンション管理適正化・再生推進事業　第0回キックオフミーティング
4月21日	マンション学会主催　市民シンポジウム「高経年マンションから学ぶ長寿命化の技」
4月23日	北大路高野住宅の見学会
6月8日	国土交通省とのキックオフミーティング
6月23日	マンション管理適正化・再生推進事業　第1回全体会議
7月28日	マンション管理適正化・再生推進事業　第2回全体会議

5.京都市の高経年マンションの流通市場の特徴

バブル期や新景観政策期を除く、近年約 10 年間の公示価格が上昇していない山科区、伏見区を対象に管理実態

Influence of management status of aging condominiums on distribution prices in Kyoto City

Natsuki Kamemoto

が流通価格に与える影響を調べる。取引価格では 800 万円台と 1200 万円台の 2 つの山に分かれており、2 つの平均が 1000 万円台となっている。800 万円の山は伏見区などの郊外、1200 万円の山は右京区などの都心になっていることが分かった。(図 1)

伏見区を抜粋。築 40 年を境に価格は減少し取引物件は大幅に減少している（図 2，3)。年度の価格を見ていくと 1.5 倍も上がっていく傾向があり、経済状況で値段が変動しているのがわかる（図 4，5)。2007 年に新景観政策が施行され 2008 年に供給量が減少し、中古物件の流通が増え、中古物件に目を向けられるようになった（図 5，6)。中古物件を全体的に見ると 1000 万円前後と中央値は変わらなかった。一部の物件だけが大幅に価格が違った。京都市の伏見区内で 4 つの項目に分けた。その中から醍醐パインクレストと醍醐上ノ山団地を抜粋した。醍醐パインクレストは住戸更新率が高く、平均坪単価も高いと言うことは流通している好物件と考え、醍醐上ノ山団地は住戸更新率が低く、平均坪単価も低いと言うことは将来が不安なマンションになるのではないかと考えている。

6.伏見区の管理が良好な高経年マンションの市場評価

総戸数が 280 戸と大規模であることもあり、取引実績は、2000 年以降途切れることなく継続して 5 件から 10 件程度となっている。2010 年に大規模修繕工事、2017 年に EV 改修工事を実施しており、その直後の取引件数が共に 11 件、14 件と突出して増加している。また、2000 年から 2013 年まで売出価格は伏見区の平均よりも少し高めの 1,200 万円弱、坪単価は伏見区の平均に近い 60 万円弱で安定化しており、2014 年以降は築年数が 40 年を超えているにも拘らず現在まで売出価格、坪単価共に上昇傾向が続いている。

ファミール伏見　1356　633　272　280

築年数	竣工年	平均価格	前後3年平均価格	平均坪単価	前後3年平均坪単価	取引件数	取引件数（積上）	住戸更新率
16	1988	2,273		101.3		3	3	1%
17	1989	2,968	3,803	139.1	174	5	8	3%
18	1990	4,838	3,776	223.1	177	8	16	6%
19	1991	3,293	3,813	159.8	178	30	26	9%
20	1992	2,958	2,998	135.7	142	4	30	11%
21	1993	2,750	2,572	128.9	119	11	41	15%
22	1994	2,315	2,378	109.2	111	38	68	23%
23	1995	1,874	2,082	89.0	97	8	67	24%
24	1996	1,720	1,777	80.2	84	10	77	28%
25	1997	1,738	1,751	81.9	83	5	82	29%
26	1998	1,804	1,627	88.2	78	7	89	32%
27	1999	1,478	1,552	70.7	74	12	101	36%
28	2000	1,405	1,392	64.0	66	6	107	38%
29	2001	1,172	1,245	55.8	57	5	112	40%
30	2002	1,178	1,125	53.7	52	9	121	43%
31	2003	1,028	1,103	50.1	51	13	134	48%
32	2004	1,079	1,102	50.9	51	10	144	51%
33	2005	1,168	1,144	53.4	53	10	154	55%
34	2006	1,226	1,203	56.5	55	5	159	57%
35	2007	1,248	1,231	54.7	57	5	164	59%
36	2008	1,222	1,189	58.5	56	7	171	61%
37	2009	1,113	1,180	51.9	56	7	178	64%
38	2010	1,196	1,157	56.5	54	11	189	68%
39	2011	1,135	1,165	53.5	56	6	195	70%
40	2012	1,148	1,139	55.7	54	9	204	73%
41	2013	1,132	1,137	52.6	54	8	212	76%
42	2014	1,126	1,138	52.0	55	5	217	78%
43	2015	1,403	1,231	64.9	57	3	220	79%
44	2016	1,232	1,345	57.4	62	5	225	80%
45	2017	1,371	1,350	63.4	63	14	239	85%
46	2018	1,490	1,464	73.0	68	2	241	86%
47	2019	1,600	1,594	74.0	74	9	250	89%
48	2020	1,647	1,509	73.4	70	3	253	90%
49	2021	1,398	1,528	66.1	71	11	264	94%
50	2022	1,663		75.8		8	272	97%

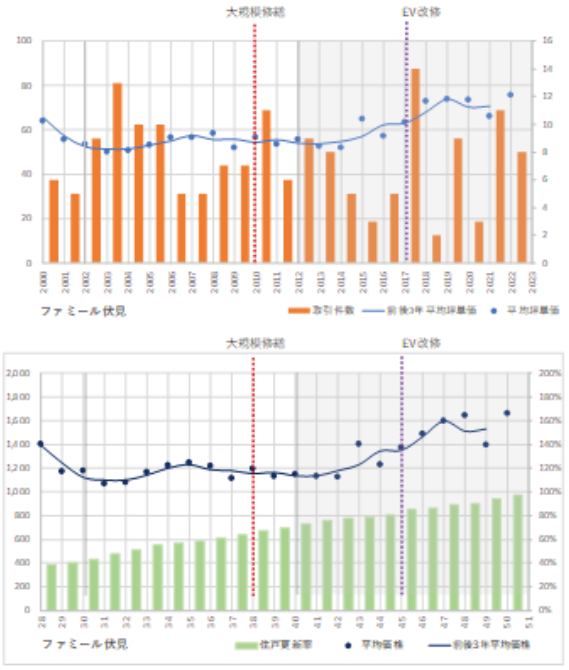
図 1　ファミール伏見の市場評価

6.まとめ

京都市には高経年マンションが約 200 棟あり、中には適切に管理され新しい子育て世帯への住み替えが進んでいるマンションがあることが分かった。今後、「管理計画認定制度」が普及し（2023 年 7 月時点で 4 件）マンションの管理状態が可視化され、若者や子育て世帯の住宅選択の 1 つに高経年マンションがなっていくことを期待する。

今後は、不動産検索ネットワーク REON を使って良好な管理が流通価格に与える影響を考察、管理だけの評価を見ていくが経済要因をどのように排除するか、山科区における高経年マンションの現状をグラフ化、管理実態が流通市場に与える影響を分析する予定である。

【参考文献】
1）100 年マンション編集委員会編：「100 年マンションへの道すじ」，消費経済究所，2020，08
2）谷口浩司編著：「マンション管理評価読本」，学芸出版社，2012，02
3）日本マンション学会編：「マンション学事典」，民事法研究会，2008，04
4）深谷第二住宅建替推進委員会：「私たちはこうしてマンション建替えに成功した！」，創元社，2005，11
5）日本マンション学会主催市民シンポジウム「高経年マンションから学ぶ長寿命化の技」への参加、ヒアリング，2023，04



京都美術工芸大学工芸学部建築学科　Kyoto University of Arts and CraftsDepartment of Architecture, Faculty of Crafts

幣軸の研究～幣軸の寸法決定法と形状の分析～

学籍番号　K20248
名　　前　川井健希
指導教員　大上直樹

寺社建築　幣軸　寸法決定法
形状　材種　木取

1. はじめに

1.1. 幣軸とは

幣軸は、扉の左右上の三方向に回されている部材で、額縁のようなものである（写真１参照）。



写真１　幣軸（宝積寺三重塔）

天沼俊一が著した「史林」日本古建築研究の栞[注1]で、「これは單に装飾のためにあるので、構造上には支輪と同じ様にまるで役に立っていない。」と述べられている通り、幣軸は構造部材ではなく、装飾である。日本建築辞彙「新訂」[注2]には、「幣軸とは、神社などの板唐戸の周囲にある繰形付きの化粧木にして、即ち一種の額縁なり。」と記述されているが、桟唐戸や塔初層の扉の形式として使われている例も多く、また、神社本殿の内陣外陣境や寺院の本堂中央間、側面にもよく使われる。

1.2. 既往研究

幣軸に関する文献はあまり多くない。幣軸に関する論文として、平山育男の「扉口装置の変遷と幣軸の成立」[注3]をあげる。この論文では、辺付から幣軸として完成されるまでの変容過程の考察や、幣軸として完成した後の形状などの変遷について考察がなされている程度で、幣軸の具体的な形状の変化や幣軸の設計法については言及されていない。

1.3. 研究目的

修理工事報告書には、幣軸が配置されている建物でも幣軸についての記載、図面には寸法が省略されていることが多く、解明されていないことが多数存在する。本研究は、古代から近世まで、寺社建築に用いられる幣軸の平面寸法を分析、検討し、幣軸の寸法決定法の提案を行い、幣軸の形状の変化について考察するものである。

1.4. 研究方法

検討に用いる寸法は、修理工事報告書の扉詳細図からとるものとする。幣軸と扉廻りの部材の比率を探り、幣軸の設計法を模索する。また、形状の変化についても扉平面図から推測する。分析対象とするのは、①寺社で、②国宝、重要文化財に指定されているもの、③幣軸の寸法が明記されている図もしくは、把握できる図とする。

2. 設計法の仮説

2.1. 垂木法

近世建築書の近世建築書「堂宮雛形」匠用小割図[注4]には、幣軸と幣軸との間を垂木の小間程空けると記述されている。

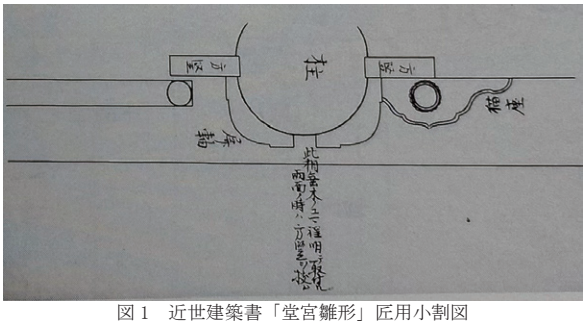


図１　近世建築書「堂宮雛形」匠用小割図

このことから、幣軸と垂木に関係があるのではないかと仮定し、幣軸と垂木寸法との関係を調べた。

その結果、垂木の幅もしくは垂木の明きが、幣軸のアキの数値と近くなるものが現出した。幣軸のアキは図１に示した部分で、幣軸が連続して配置されていない場合においては、柱真から幣軸外法までの部分の二倍とする。

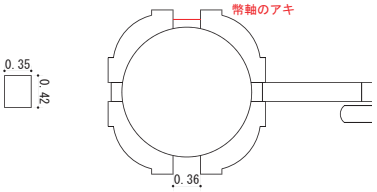


図２　垂木法

図２は、延暦寺転法輪堂の幣軸の詳細図であるが、幣軸のアキと垂木の幅の差が一分と非常に近い値をとる。このように、垂木の幅に幣軸のアキが近くなっているものは他にもあり、例えば、垂木の幅の約二倍になっているものや、垂木の成、明きと一致するものもある。幣軸のアキを垂木の幅、成、明きにするという方法を垂木法とする。しかし、垂木法が使えるものは、柱に幣軸が接しておさめられる場合に限ると考えられる。

2.2. 百分割設計法

検証をすすめていると、柱真と幣軸の外法の比が 100:94 ～ 99 の間となる事例が多く見られたため、柱真々を百分割して、幣軸の外法や内法の寸法を決定し、幣軸を設計したと推測した。

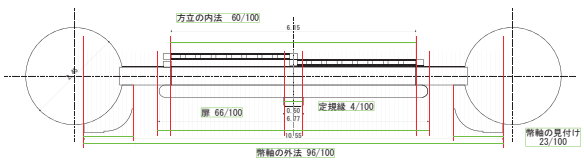


図３　教王護国寺五重塔

図３は教王護国寺五重塔の扉平面図で、柱真々の百分割線を描き込んだものである。幣軸のアキが 4/100、柱真の 96/100 を幣軸の外法、幣軸の見付けを 23/100 にしている。

さらに方立の内法にも分割線がのり、柱真々の 60/100 が方立の内法になっている。

柱真々を百分割した内のいくつ分かをとって幣軸の外法、内法等にし、設計するいう考えを百分割法とする。

3. 柱径と幣軸の見付の関係性

幣軸の見付寸法との柱径の比率関係について検討した。



グラフ　柱径と見付寸法の関係

上のグラフは、柱径に対する幣軸の見付寸法の割合であり、0.49 ～ 0.53 の間が最も多いことがわかる。このことから、幣軸の見付を柱径の半分として計画したのではないかと考えられる。

3.2 幣軸の木取

幣軸は装飾の部材であるので、木の筋が綺麗に見えるよう柾目が出るような木取にしているのではないかと推測した。柾目のパターンは、二通り見られた。一つは平らな部分に柾目がでていて、曲線の部分には板目が出ているもの（図 4）（写真 1）。もう一つは、全ての部分が柾目になっているものである（図 5）（写真 2）。

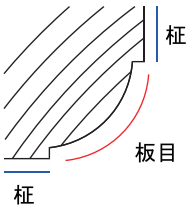


図４　木取 1



写真２　真正極楽寺三重塔

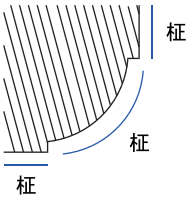


図５　木取 2



写真３　仁和寺五重塔

3.3. 幣軸の曲線

幣軸の曲線について次の方法で分析した。曲線の頂点を直線でつないだ線 S を S から垂直に線を曲線までおろした線 L で割り、その値をたわみ度として比較した。その結果、室町中期以降たわみ度の 0.20 を上回る例が多くなり、たわみ度が徐々に大きく増していった。曲線のふくらみは時代を下がるにつれ増して、直角に近づいていくことが推測できる。

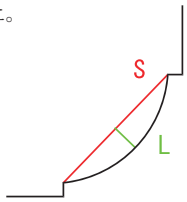


図６　たわみ度

3.4. 材種

材種は、修理工事報告書もしくは、目視により確認した。下表から分かるように、檜、椹、杉、松が使用されていた。32 棟のうち 26 例が檜になっており、幣軸には、檜が使われていたと推測される。

建物名	所在地	時代	西暦	樹種
醍醐寺五重塔	京都	天歴 6	952	檜
興福寺北円堂	奈良	承元 4	1210	檜
大報恩寺本堂	京都	安貞元	1227	檜
浄土寺阿弥陀堂	広島	貞和元	1345	檜
延暦寺転法輪堂	滋賀	貞和 3	1347	檜及び杉
明王院　五重塔	広島	貞和 5	1348	檜
添御縣坐神社　本殿	奈良	永徳 3	1383	檜
慈尊院多宝塔	和歌山	寛永元	1469	松
御霊神社本殿	奈良	文明 4	1472	檜
烏帽子形八幡神社本殿	大阪	文明 12	1480	檜
桂濱神社　本殿	広島	文明 12	1480	檜
白山神社本殿	新潟	永世 12	1515	檜及び松
大威徳寺多宝塔	大坂	永正 12	1515	檜
小槻大社本殿	滋賀	永世 16	1519	檜
名草神社三重塔	兵庫	大永 7	1527	杉
竜山八幡神社本殿	広島	永禄元	1558	檜
土佐神社　本殿	高知	元亀 2	1567	檜
八幡神社本殿	兵庫	天正 13	1585	檜
長命寺　三重塔	滋賀	慶長 2	1597	欅
園城寺唐院大師堂	滋賀	慶長 3	1598	檜
宝積寺三重塔	京都	慶長 9	1604	檜
聖神社末社滝神社本殿	大阪	慶長 9	1604	檜
宝来山神社　本殿	和歌山	慶長 19	1614	檜
飯野八幡宮本殿	福島	元和 2	1616	杉
常寂光寺多宝塔	京都	貞和 6	1620	檜
金戒光明寺三重塔	京都	寛永 10	1633	檜
教王護国寺五重塔	京都	寛永 20	1643	檜
仁和寺五重塔	京都	寛永 21	1644	檜
金剛峯寺不動堂	和歌山	鎌倉後期	1275~1332	檜
藤津比古神社　本殿	石川	室町中期	1393~1466	杉
阿多由太神社本殿	岐阜	室町後期	1467~1572	椹
唐招提寺金堂	奈良	奈良	710~793	檜

注１　私学研究会の会誌「「史林」」第十三巻 研究の栞 日本古建築研究の栞（第二十六回）天沼俊一
注２　中村達太郎 日本建築辞彙「新訂」p378 中央公論美術出版 太田博太郎 稲垣栄三 遍
注３　平山育男「扉口装置の変遷と幣軸の成立（上）」日本建築学会計画系論文集 第 529 号 2000 年 3 月
　　平山育男「扉口装置の変遷と幣軸の成立（下）」日本建築学会計画論系文集 第 536 号 2000 年 10 月
注４　編著 河田克博 近世建築書「堂宮雛形」 匠用小割図 大龍堂書店 1988 年 12 月

日常と非日常の間で

学籍番号　K20250
名　　前　川瀬基子
指導教員　山内貴博

Between the everyday and the extraordinary

Student Number　K20250
Name　Kawase Motoko
Supervisor　Yamauti Takahiro



・背景と目的

日本は災害の多い国である。
日々生活する中で地震や津波、台風が発生するということは非日常であると感じる。
その非日常である災害のために、生活する空間を防災のために強化することは必要ではあるが一概に優先するべきではないと私は考える。いつやって来るのかわからない津波や地震に備えて何十年も何百年も海の見えないような高い堤防に囲まれて暮らしていく生活は本当の生活空間作りなのだろうか。
日常的に利用される場所として公園に焦点を当て、多様な災害へ柔軟に対応ができ、減災防災に役立つなど、新しい時代に求められている機能を備えた公園を提案するために、地域振興、減災・防災、環境保護の３つの分野で効果が期待されるグリーンインフラという取り組みを取り入れ、災害時には人々の交流の場であり避難の中心地点となるような防災公園を設計する。
また、現在の避難施設では性被害や盗難などが多く気の休まる場所が少ない。その現状を解決すべきだと感じる。今回設計した公園が人々の交流の場として癒しと仲間作りの場所になってほしいと考えると同時に国自体が災害に対しての意識を変えるべきだと感じる。

・防災＋グリーンインフラ

現在世界ではコンクリートなどを主としたグレーインフラが先行している。それに対してグリーンインフラとは自然の持つ様々な機能を環境課題の解決手段として取り入れようという考え方である。
グリーンインフラには 14 個の要素が存在していて、その中から公園に取り入れやすく防災の機能を果たす、樹冠遮断、雨花壇、緑の道・路地、公園、芝生広場をピックアップして公園に落とし込みエリアごとに違ったアクティビティを生み出す。

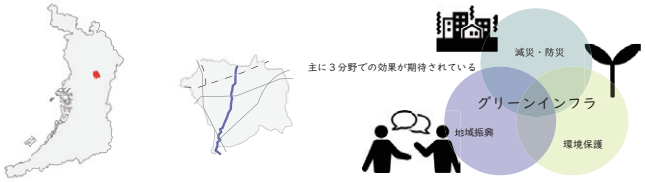
・防災公園（一時避難地としての利用）

防災公園とは、普段は人々の憩いの場として活用されていて災害時に人々の命を守る拠点としての役割を担う公園のことである。
種類として広域的な災害に対応する広域防災拠点、避難するための中継地として一時避難地、移動するための道路または緑道を避難路、工業地域からの災害などを抑えるために整備された緩衝緑地、居住者が 1 番利用する機会があり身近な都市公園がある。

今回の設計では、敷地近くには中学校や市民体育館、運動広場が存在するため寝泊りのためのスペースではなく広域避難地など安全な場所へ避難するための中継地として機能し人々の交流の場となる一時避難地として活用する。
（ 一時避難地とは災害時の危険を回避するために一時的に避難する場所 ）

・選定敷地

大阪府門真市幸福町 11
古川橋駅前　旧第一中学校跡地



所在地：大阪府門真市幸福町11
主な用途：公園
敷地面積：19,675㎡
建築面積：498.65 ㎡
延床面積：498.65 ㎡
キーワード：防災公園、グリーンインフラ

Location ： 11, Kouhukutyou,Kadoma,Osaka
Main Use ： Park
Site Area ： 19,675 ㎡
Building Floor Area ：498.65 ㎡
Total Floor Area ：498.65 ㎡
Keywords ： Disaster prevention park, green infrastructure

・地域の現状
・エリア全体として、高度経済成長期の急激な人口増加に伴い、まちの基盤となる道路等が未整備のまま木造賃貸住宅等が建設され、それらの老朽化により密集市街地を形成している。

・京阪古川橋駅北側は、狭隘な道路に老朽化した木造賃貸住宅等が集積し、またシャッター通り化した商店街や統廃合により廃校となった小中学校跡地、老朽化に課題がある市庁舎などの公共公益施設が立地しており、密集市街地が形成され、賑わいが失われつつある状況。

・京阪古川橋駅南側は、昭和末期に都市計画決定された土地区画整理事業によって、大型ショッピングセンターや業務ビルが建設された一方、時間を経てまちの衰退化が進行しつつある。

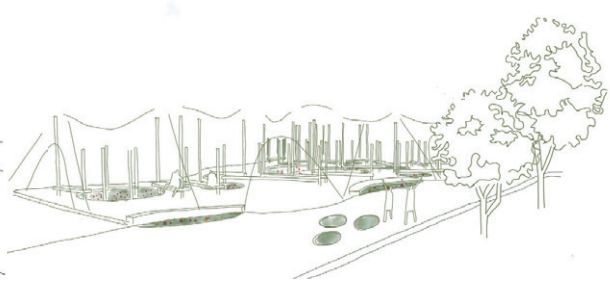
・選定理由
・門真市は高度経済成長期に急激に増加・流入した人口の受け皿として利便性の高い京阪電鉄沿線部を中心に文化住宅などの木造賃貸住宅が短期間にかつ大量に建設された。結果として今なお、狭い道路や老朽化した木造住宅が数多く残っている。
　→地震時に著しく危険な密集地域としてとして門真市が上がっている。
・大阪市内や京都市内へのアクセスが良好で、門真市駅に接続されている大阪モノレールの延伸も決定しており、今後さらに交通利便性が向上することが期待されている。敷地の南側に、大阪府内に２つある運転免許試験場のうちの１つが立地してる。
　→北大阪を中心に多くの人々が来訪する。

・設計趣旨
コンセプトは木の枝分かれとした。
そこから緑のネットワークや防災ネットワークなどの繋がりをイメージするような形として、枝分かれを起こした先でグリーンインフラの要素を配置する。
また、それぞれの空間にある程度の閉鎖性を与え、求心的に空間の秩序を整えるために樹木の配置計画に留意する。

敷地西側の夏は日差しが強く日除けになるものが存在しない。そのために夏は草花が咲き、冬には葉を落とす落葉樹を用いる。
また、西側は道が比較的狭いにもかかわらず車の通行量も多いため歩行者と車を分離するために歩行者専用の道を計画した。
上記で述べたように、中心に核となるフラットな広場を配置して、休日にはマルシェなどを行えるスペースとした。

・それぞれのスペースについて
《芝生広場》
災害時には避難場所にもなり、子どもたちの遊び場となるような芝生広場を配置して座るための傾斜や寝転ぶための傾斜など用途にあった傾斜を設計する。
《雨花壇》
豪雨や洪水が起きたとき浸水被害が少なくなることが期待され、水を循環することによって同時に自然の循環を回復することで街の景色を彩る『修景』の機能を果たす。また市民が自分たちで花壇にてを加えることによって地域の交流空間が生まれる。
《緑の道・路地》
夏場は日よけとして、冬場は風よけとして機能を果たし、人が歩きたいと思えるような景観を作る
《樹冠遮断》
火災時には主に、水分を多く含む常緑広葉樹を選ぶことで火災時に延焼を防止することができ、台風や豪雨でも倒れにくい。
木で敷地を覆うことによって、津波や洪水の勢力を弱め漂流物を食い止める機能を果たし、避難じにも効果が期待される。
メンテナンスは不要で低コストに抑えることができる。


『多目的広場』


『雨花壇』

・参考文献

・ 国土交通省 〈https://www.mlit.go.jp/common/001392074.pdf〉
・ 今昔マップ〈https://ktgis.net/kjmapw/kjmapw〉
・ アメリカ環境保護官庁 (Environmental Protection Agency:EPA)
・ 門真市ホームページ 〈https://www.city.kadoma.osaka.jp/index.html〉
・ minnanouen.jp/kyoto.lg.jp/city.takatsuki.osaka.jp/washin-kaidan.jp
・ 防災公園とは https://www.athome.co.jp/
・庭木図鑑 https://www.uekipedia.jp/?mobile=1

circulation -総合鑑賞空間とエンターテイメント形成の場-

学籍番号　K20251
名　　前　河内洸樹
指導教員　宮内智久

circulation - A comprehensive viewing space and place for entertainment formation -

Student Number　K20251
Name　KAWACHI Koki
Supervisor　MIYAUCHI Tomohisa

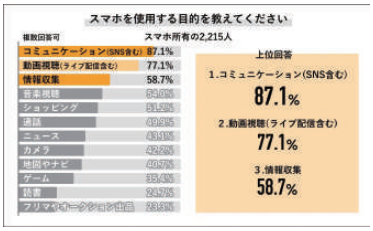
はじめに

音楽とファッションとアートは違うジャンルではあるがそれぞれが内包する莫大なエネルギーにより混じり合い、作用しあい多様なシーンを作り上げ、時代背景や社会情勢、文化によって時代とともに変容していった自由でジャンルにとらわれないものである。
私自身も様々なジャンルの音箱や展示会にその日の気分の格好を纏い足を運び日常生活では味わえない高揚感を味わい、そこで異業種の人達との交流も生まれた。近年新型コロナウィルスやデジタルデバイスの技術の発達により人々は情報を受け取る事やオンライン上でのコミュニケーションが容易にできる時代となった。しかしその利便性は人々の本能や生体機能を抑制して便利な世の中になることは多くの人々に多大なる恩恵を与えるが、その反面で物事の本質を理解する事が困難になっている。この現状から私はオフライン上でのアーティストの表現の場、また様々な鑑賞体験とコミュニティ形成の場が必要であると考える。

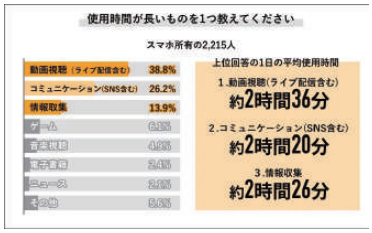
1. 現状の問題

1-1 デジタル使用率が増加による生体機能の低下

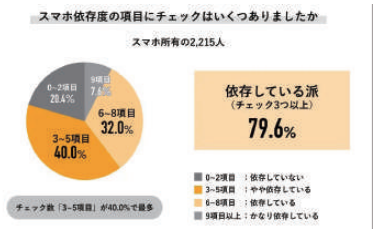
デジタルデバイスの技術の発達により人々は情報を受け取る事や伝達が容易にできる時代となった。しかしその利便性は人々の本能や生体機能を抑制している面も存在している。
便利な世の中になることは多くの人々に多大なる恩恵を与えるが、その反面で物事の本質を理解する事が困難になっている。



スマホ使用の目的



スマホで最も長時間使用するもの



スマホ依存度

job 総研による『2022 年 スマホ依存の実態調査』を実施　8 割がスマホ依存に該当
コロナの孤独に使用時間 1.5 時間増～ デジタルネイティブ世代に顕著 “スマホなしでは生活できない”の声 ～
https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000116.000013597.html

1-2 社会の大衆化

ファッションにおける流行を抑えたものを低価格で販売する大量生産、大量消費問題による労働、環境問題やや音楽におけるポップスなどの大衆音楽など大衆化により本来個性があり創造力がある人が平均的でものごとに無関心な思考と行動におちいる傾向にある。

2. 敷地について

2-1 敷地

敷地は大阪ミナミを代表する歓楽街の一つである宗右衛門町の約 1/3 の躯体がむき出しの既存建築（元宗右衛門町モータープールと約 2/3 の平地駐車場（ダンスホール富士跡地）と既存建築（元宗右衛門町モータープール）の北側にある平地駐車場。



2-2 歴史

1970 年代高度経済成長期のミナミではネオンと看板で多くの人々が集まる場所であった。また宗右衛門町ではバーやキャバレーなどが流行した。
その中でも最大の観客収容数と専属バンド数を誇っていたのが、敷地に選定した宗右衛門町にあった「ダンスホール富士」である。昼は社交ダンスを自由に踊り、夜はロックバンドの音に身を任せ身体を揺らしていた。その巨大なダンスホールが存在していたが閉業後宗右衛門町モータープールとなり現在は約 1/3 の躯体がむき出しのモータープール（閉業）と約 2/3 の平地駐車場へと姿を変えた。

2-3 現状の動向

宗右衛門町は夜になると昼の閑散とした雰囲気とは一変し広告の光が街を照らす。L 字型の 5 階建てビルの全面に設置したサイネージに 3D 広告ビジョンを放映したフルラッピングビル『MONSTER 3D VISION OSAKA』が 2023 年 11 月末からスタートしており宗右衛門町が光を利用し再開発していく動きが推測される。道行く人が思わず足を止めてしまう 3D 広告は３Ｄ映像の真骨頂である奥行きを活かした映像体験ができ、よりリアルな体験を促す。



ライオンの 3D 立体広告



クリスマスマッピング映像

所在地：大阪府大阪市中央区宗右衛門町 6- 4
主な用途：ギャラリー、アトリエ、鑑賞施設
敷地面積：4336.41m^2
建築面積：3577.24m^2
延床面積：1924.7m^2
キーワード：鑑賞空間　多様性 文化

Location ： 5-26-20,Shiba,Minato-ku,Tokyo
Main Use ： gallery、atelier viewing facility
Site Area ： 4336.41m^2
Building Floor Area ： 3577.24m^2
Total Floor Area ： 1924.7m^2
Keywords ： viewing space diversity culuture

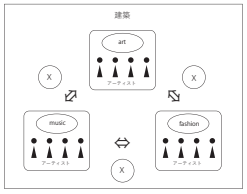
3. 設計概要

今回の建物は音楽とファッションとアートの三要素を軸にそれぞれの鑑賞空間を考える。
既存建築（元宗右衛門町モータープール）は地上 10 階建（内 1 ～ 6 階は屋内、7 ～ 10 階は屋外）の鉄骨鉄筋コンクリート造のラーメン構造である。既存平地駐車場を解体し既存建築の西側に柱、梁を延長し、そこに壁や箱型の空間を配置し特色の異なる鑑賞空間をつくる。

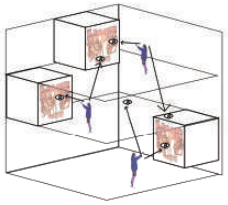
4. ダイアグラム

4-1 ダイアグラム

ファッション、音楽、アートを制作しているアーティストが同じ施設にいることで生まれるコミュニティやお互いにインスピレーションを受け糧となり化学反応によって生み出されるＸを創造することを目的とした施設とする。



コミュニティ形成ダイアグラム


鑑賞空間のダイアグラム

4-2 参考事例

過去に各ジャンルのアーティストたちがコラボした事例


Louis Vuitton ×草間彌生


Kanye West × GAP × BALENCIAGA

5. アクティビティ

既存建築部
1FL-2FL ギャラリー

3FL-6FL 大型規模の鑑賞空間
ファッションショー、DJ ライブ、展示会として使う箱型の空間を配置する。この空間は光を入れず内部に照明やスピーカーの取り付け、作品の補助として使用するアルミトラスを配置しを各用途に応じて演出を変えられスペース

7FL-10FL 躯体鑑賞スペース
屋内とは違い躯体の見え方が変わる。ミナミの独特な街並みの景観をバックに廃墟ならではの躯体の魅力をを楽しむことができる空間とする。

増築部
1FL　屋外イベントスペース
フードイベントやフリマイベントができるスペース。

2FL-6FL ギャラリースペース
高さ、大小異なる箱をちりばめて配置し、そこに様々なジャンルの展示空間を行えるスペース。

7FL-10FL 屋外展示スペース
壁や底が抜けた箱型を配置し見上げたり、垣間見えたりする迷路のように巡回することができる空間とする。

参考文献

・西谷真理子「ファッションは語りはじめた現代日本のファッション批評」（2011）

・ユハに・パッラスマー「建築と触覚 空間を巡る哲学」（2022）

・本郷いづみ「ファッションと建築の間 VAN HONGO の世界」（2022）

・マシュ―コリン「レイヴ・カルチャー――エクスタシー文化とアシッド・ハウスの物語」（2021）

・漆畑銑治「AD　INDEX　アド・インデックス」（1985）

・マット・アルト「新ジャポニズム産業史 1945-2020」（2021）

～ IGA ryu ～

K20252
川原陽介
指導教員　森重幸子

～ IGA ryu ～

K20252
KAWAHARA Yosuke
Supervisor MORISIGE Sachiko

1. テーマ

三重県伊賀市で有名な忍者をテーマとし、さらにこの地にしかない坂倉準三氏によって建てられた近代建築を活かしてこの地でしかできない観光施設を計画する。忍者をメインとした施設を計画し、アスレチックなどを通して体を動かすことでより伊賀市の歴史を感じることができ、また地域の学生と観光客が触れ合う場所を計画することでお互いに伊賀市がどのような場所であるかを認識することができる。

2. 敷地・建物について

2-1. 敷地について



北西には観光客が訪れる伊賀上野城や忍者屋敷、西には小学校、高校がある。

観光施設と学び舎を融合した施設を計画するのに向いている。

2-2. 建物について

1959 年に坂倉準三によって竣工された岐阜県の羽島市役所を見た当時の伊賀市の市長が坂倉準三氏に依頼をして 1964 年に竣工した市役所の「上野市庁舎」である。鉄筋コンクリート造の三階建であり、建物は全体の敷地の中でも西寄りに計画されている。建物の階は三階建てであるが敷地が傾斜になっているため景観に配慮して外見上は二階建てのように見える。三階の床の一部は屋上庭園となっており、ガラス越しの廊下で囲むことで開放感のある空間を作り出している。メインの接客空間は高天井の吹き抜けとなっており、トップライトを設けて自然採光を可能としている。また坂倉準三氏のモダニズム建築はル・コルビュジエに学んだコンクリートとガラスを基本とした建築であり、この建物においても深い陰影を演出しており、「和」を感じることができ、世界的にもモダニズム建築の意義が注目される中でこの建物の文化財としての価値は高い。このことからこの建物は坂倉準三氏の設計による代表的な作品であることや周辺環境と調和した､地域の優れた原風景であること、さらに水平線を強調したデザインであり、市庁舎という地域のシンボルとして中心的な景観を形成していることから歴史的価値があるとされている。しかし耐震性能などの点から 2012 年に保存するか解体するかの議論が始まった。





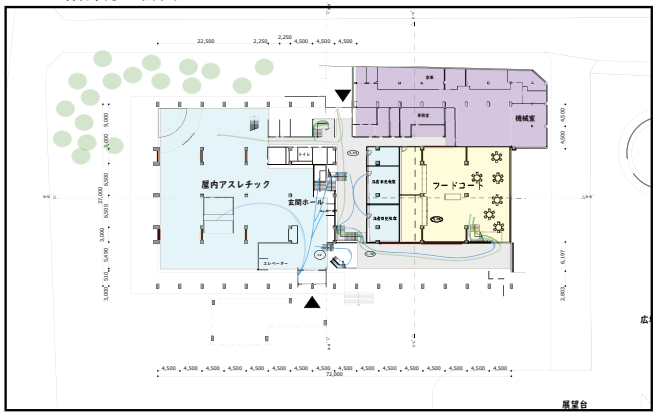



所在地：三重県伊賀市上野丸之内 116 番地
主な用途：観光施設
敷地面積：11,448.66㎡
建築面積：60,038.43㎡
延床面積：60,038.43㎡
キーワード：まちづくり・リノベーション・観光施設

Location ： 116 Ueno Marunochi,Iga-shi, Mie-ken
Main Use ： Tourist Facilities
Site Area ：11,448.66㎡
Building Floor Area ：60,038.43㎡
Total Floor Area ： 60,038.43㎡
Keywords ： urban development, Renovation, Tourist Facilities

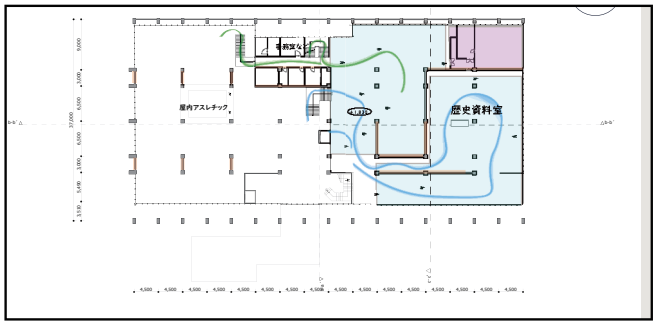
3. 計画内容

3-1. 一階部分の計画



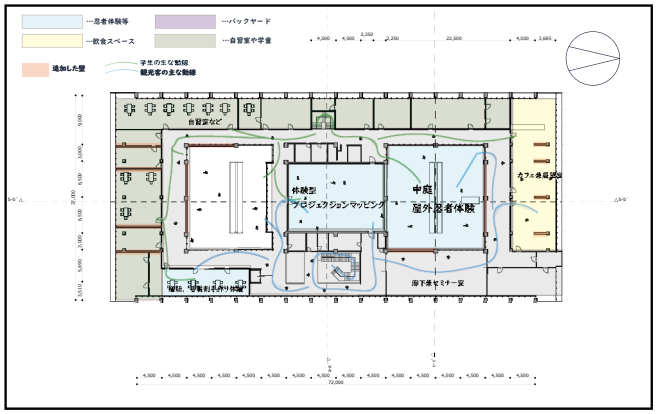
一階部分は事務室として計画された部分は 5 mの天井高を生かしてアスレチックなどを計画し、外から中の様子が見える場所なのでどのような施設かわかるようにする。また建物の入り口部分にある待合所であった部分はロビーとして近代建築の五原則や螺旋階段を見せることで元の建物の価値観を忘れないようにさせる。更衣室であった部分は忍者衣装を着用してより忍者になりきれるように忍者衣装に着替えられる更衣室として活用する。またフードコートでは伊賀市の郷土料理である田楽や堅焼きなどを食べることができる。

3-2. 二階部分の計画



天井にあるトップライトを利用して中庭とつながりを持ち、日光を取り入れることで生まれるつながりを計画する。また北側には歴史資料ミュージアムを設け、体験以外にも見て歴史を知ることができるように計画する。

3-3. 三階部分の計画



三階部分には屋上庭園があり、そこでは忍者のように飛び回ることができ、さらに煙突があるため、安全な高さまでは登れるように計画する。また中心には議場として計画された部屋があり、屋内でのプロジェクターを用いた忍者体験ができる空間として計画する。
ほかの部屋では手裏剣や組紐などの体験ができたり、地元の学生たちも利用可能にするために学童や自習室を計画する

めんそーれ　～収益不動産で繋がる屋我地島～

学籍番号　K20254
名　　前　北村昌也
指導教員　宮内智久

Student Number　K20254
Name　Masaya Kitamura
Supervisor　Tomohisa Miyauchi

1. はじめに（背景と目的）

屋我地島にある旧ひるぎ学園をアート施設化等にするプロジェクトが関西大学の木下研究所と協働であり、興味があったので訪れる事にした。屋我地島は海が綺麗で温かい人ばかりであった。

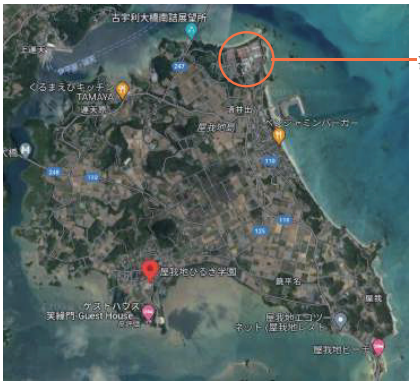
しかし屋我地島は少子高齢化・空き家問題、そしてハンセン病棟（沖縄愛楽園）があり観光業に向いていないイメージであった。

そこで私は収益不動産に就職が決まったので建築と融合したものを作りたいと考えました。新築住宅設計・別荘兼エアビ・空き家リノベーションの設計を考え屋我地島の魅力を引き出したいと考えたのである。

2. 敷地概要

選定敷地は沖縄県名護市饒平名ひるぎ学園周辺である。饒平名は屋我地島（沖縄本土と古宇利島に挟まれた島）の南部に属しており、昔ながらの製法（入浜式）の塩づくりやパインアップル・マンゴーが盛んに収穫できる地域である。１～９年生まで学べる”ひるぎ学園”がある。その中の空き地と空き家を敷地に選定する





3. 屋我地島が抱える現状問題

3-1. ゴミの不法投棄

現在、屋我地島の海岸近くに家電製品や家庭ゴミなどが不法投棄され、景観や環境の悪化が懸念されているのだ。少しでも不法投棄をなくすためにひるぎ学園のコミュニティースクール(アコーズ)が看板を作成し不法投棄をなくす取り組みが行われている。僕も海岸付近を歩いていると沢山の不法投棄物があった。


図)実際に不法投棄されている屋我地島内

3-2. ハンセン病等があるというイメージの払拭

ハンセン病は、結核と同じ抗酸菌の仲間のらい菌によって引き起こされる感染症です。治療法も確立し、一般の医療施設で診察治療できるごく普通の疾患です。現在の日本ではほとんど発症しないと言っても良い物である。

ハンセン病療養所には、過去の偏見差別等から社会に復帰できずに今でも多くの方が生活の場として暮らしています。

当時は隔離されていたが、野球や将棋などの娯楽も存在していたのだ。しかし妊娠をしてしまうと、とても残虐な事をしていた歴史がある。

当時の面会は、室内は壁によって2つの区画に分けられ、面会は壁越しに行われた。職員立ち会いの下、面会が行われることもあり、隔離されていることを実感する場面となった。また、面会後の履き物の消毒など厳重な管理下で行われ、面会者に恐ろしい病気であるかの印象を与えた。


図)現在のハンセン病棟


図)面会室


図)面会室内

所在地：沖縄県名護市饒平名ひるぎ学園周辺
主な用途：新築住宅設計・エアビ・リノベーション
敷地面積：未定
建築面積：52㎡
延床面積：63㎡
キーワード：収益不動産・空き家リノベーション・空き地

Location ： Neighborhood,Hirugigakuenn,Yohena,Nagoshi,Okinawa
Main Use ： New Home Design,Airbi,Renovation
Site Area ： to be decided
Building Floor Area ： 52㎡
Total Floor Area ： 63㎡
Keywords ：Incone Real Estate,Vacant House Renovation,Vacant

3-3. 台風対策と倒木の処理問題

沖縄では、かつては家の周りを取り囲むように、フクギという木を植えました。これは台風の風をふせいだり、火事が広がるのをふせぐためでした。フィリピンが原産のフクギはオトギリソウ科の木で、高さは15メートルにもなります。まっすぐに育つことや、固い幹や分厚い葉をもつことなどから、ぼう風林やぼう火林として植えられたのです。沖縄の着物に欠かせない黄色のせん料が、木の皮から取れることも知られています。那覇(なは)などの都市部ではあまり見られなくなりましたが、沖縄本島北部の今帰仁村や各地の離島に残る、フクギ林と村落の様子を見ていると、静かで落ちついたかつての沖縄のくらしぶりがしのばれます。図2)木の根元と土と石が組み合わさったフクギもあるので活用していきたい。
屋我地島には台風により倒れた木が沢山放置されているのを目の当たりにした。この倒木を集めて、旧ひるぎ学園に集めて物作りに再利用してコミュニティー活用に使いたいと考える。

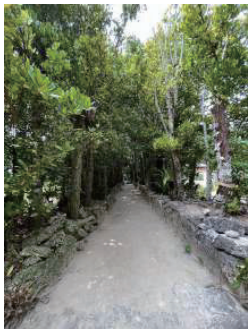


図)今帰仁村のフクギの様子



図2)屋我地島のフクギの根元の様子

3-4. 少子高齢化と空き家と若者離れ

近年日本は少子高齢化が進んでいる。少子高齢化が進むにつれて空き家も必然と増えるのが問題になっている。屋我地島内に高校がないため若者は島外に出て行ってしまう。そして都会に出て島よりも魅力があると感じてしまうものであると考える。僕が屋我地に行った際に魅力ばかりでうらやましいと思った。屋我地島には魅力があることを再認識して戻ってきてもらいたいと市長さんがおっしゃっていた。そして、屋我地島には魅力があることを発信し観光に来てもらう必要があると考える。



令和5年8月31日　現在の人口

	男	女	計	世帯数
饒平名区	134	126	260	149
我部区	87	59	146	75
運天原区	104	108	212	125
済井出区	221	203	424	223
屋我区	70	71	141	82
愛楽区	51	50	101	91
屋我地管内合計	667	617	1,284	745
名護市合計	32,090	32,343	64,433	32,135

図)名護市の人口数



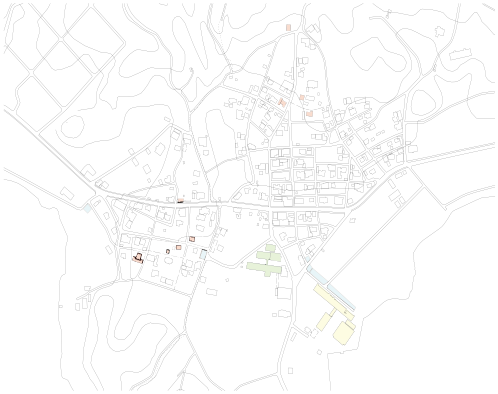
図)手入れされていない空き家



図)手入れされている空き家

4. 計画・設計概要

キーワードは不動産で自分がオーナーという想定をしている。
収益不動産をメインとしており、別荘として利用をしつつも収入が入り観光客には屋我地の魅力に触れてもらい、そのまま定住化を図ることを計画している。旧ひるぎ学園で地域交流を図りマングローブではアクティビティを楽しんでもらい、電動自転車の貸し出しを行い屋我地島の海や愛楽園について知ってもらうのが目的である。



5. 参考文献

中村家住宅のひみつ
著: 木下光、宮崎ひろ志、東坂憲一、青野謙哉

地域色を映し出す

学籍番号　K20255
名　　前　木下芹奈
指導教員　新海俊一

Reflect regional colors

Student Number　K20255
Name　　Kinoshita　Sena
Supervisor　　Shinnkai Shunichi



0. はじめに

今回の計画では、**鉄道高架下の現在未活用空間にコミュニティ施設を提案する。**駅間（近鉄東寺駅－十条駅）の鉄道高架下の現在空き地とされている空白（約700m）を計画敷地とし両端の地域色を映し出す。用途はコミュニティ広場として機能させ、その場を地域住民の**居場所**と位置付けることで、より強い**コミュニティの形成を期待する。**また鉄道高架下ということから地域住民だけではなく観光客や通勤・通学者など、様々な人々が垣根を超え交流できるようなコミュニティ・ツーリズムを実践させる建築とする。

1. 背景と目的

1.1 映し出すということ

世の中には、多くの人が知らない物語がたくさん存在する。近年では、インターネットの発展により世界中の人々と簡単に繋がることが日常的の中、ライフスタイルではプライバシーを確立させた暮らしが当たり前となっている。実際、地域住民や近隣住民でさえお互いをよく知らないまま暮らしていることも多くあるようだ。そこで**人の行動を映し出すこと（中での活動が外から見えること）**によって、人々は興味や関心を持ち自身の**新たな発見や、コミュニティ形成のきっかけづくり**を建築という観点からアプローチしたいと思ったのがきっかけである。

内部空間を映し出す事例：レンタルショーケース

レンタルショーケースとは、リサイクルショップなどの物販店舗の一角でショーケース空間を個人に貸し出しを行うものである。各々の好きなモノをショーケース内にディスプレイし、販売することが可能である。また、販売目的以外で展示として利用されていることも多いようだ。レンタルショーケースはいわば小さなお店であり自身の趣味や個性、つまり色を映し出していると言える。このような**レンタルショーケースを人が内部に入ることのできるスケールに変換し空間を構成していくことに興味を持った。**人々の行動がまる見えになるということ。内部での活動が映し出されることによって、意図せずに外部にいる人の視界に入り、何かしらの興味を持つことで本来、予定調和でない人々や地域・近隣住民の会話や交流が生まれることを目的とする。

1.2 地域色（景観）づくり

本計画での地域色とは地域特有の趣と意味付け、景観を創造する重要な要素である。そしてその場に存在する建築物や伝統文化だけでなく、モノや人からも構成されていると考える。地域色を鮮やかにするべく内部を、モノを、人を、映し地域特有の趣が現れ、そして地域色がやがて景観へとなる。つまり俯瞰してみると地域住民の個性が景観となり、従来の地域色を更に彩っていく。本計画ではインテリア（内部）を考えているようで、エクステリア（外部）を考え、全体的にクローズした建築空間を構成するのではなく、まちにオープンにデザインされた空間を創造する。本計画では地域色（人やモノ）を映し出す建築の表層についても考えている。つまり景観を設計している。人の活動やモノを映し出すことで地域色を鮮明に見える化させ、特有の景観を創造していくことを目的とする。

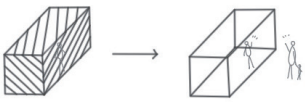
1.3 高架下空間－

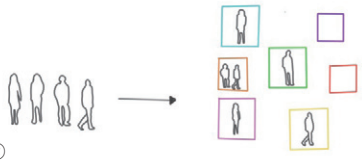
人々が快適な生活が送れるように建物も交通手段も発展し続けている。全国的に道路や鉄道の立体化が進んでいることにより、高架下空間が増えている。近年の都市部では、複合商業施設としての高架下空間を有効活用する事例が多くみられるが、都市郊外部では、多くの高架下空間は駐車場や空き地となっているのが現状である。それらの高架下空間は薄暗く、ネガティブな印象を植え付けている。その他にも高架下空間が未活用の状態では地域に空白が存在し続け、地域色の無色化とともにまちの賑わいが空洞化されるなどといった**高架下未活用空間の欠点を改善することを目的とする。**また、本計画を規格化することで、様々な地域の高架下に対応できるということを期待し都市郊外部の未活用である高架下活用の新しい可能性を考える。

所在地：京都府京都市南近鉄東寺駅－十条駅
主な用途：コミュニティ広場
敷地面積：23，868㎡
建築面積：18，951㎡
延床面積：28，871㎡
キーワード：レンタルボックス・地域色・高架下

Location ： Minamichika, Kyoto City, Kyoto Prefecture,
Tetsutoji Station-Jujo Station
Main Use ： community square
Site Area ： 23，868㎡
Building Floor Area ： 18，951㎡
Total Floor Area ： 28，871㎡
Keywords ：Rental box, regional color, underpass


イメージ図


①


②

3. ダイアグラム

計画の目的を図で表した。
ダイアグラム②... 人々の活動やモノを映し出す（見える化する）ことで､興味を持ち交流が生まれ､やがて広がりコミュニティを形成する。
ダイアグラム③...（上記ダイアグラム②）を俯瞰的に捉えると地域色となり、ダイレクトにまちの景観を彩っていく。
薄暗い印象、まちの賑わいの空洞化や地域色の無色化を改善する。

3-1. 計画敷地

下記図１
近鉄東寺駅－十条駅　約 387m の未活用高架下
計画敷地の周辺状況として、東寺駅周辺には世界文化遺産に登録された東寺などの観光施設や交通結節点である京都駅から近いため観光客も多く、ゲストハウスなどの宿泊施設も多くみられる。また都市郊外部であり丁度いい都会として暮らしやすく、オフィスや教育機関もみられ通勤・通学者も多い。観光客、通勤・通学者、地域住民といった目的が異なる人々がこの地域で生活や活動している。東寺駅から約 200M 先の高架下は現在駐輪場や小さなスーパーがあるため今回は計画しないこととする。

5-1. プログラム－地域住民の居場所－

①地域住民へのレンタルボックス
地域住民の活動を映し出すことによって、興味を持つきっかけとなり新たなコミュニティ形成を促す。レンタルボックス内は、地域住民が自由に空間を構成していく。
・スタジオ・個展・作業部屋・店舗など

②地域住民が集まる場
・地域相談所・カフェ・ワークショップ教室・コワーキングスペース・レンタルスペース・集会所

③子どもの遊び場
近年は公園の利用ルールが厳しくなり、室内遊びの進化などの理由から子どもの遊び場が減っているほか、敷地周辺は教育機関が多く所在しているため、子どもの遊び場や居場所を設けることは需要があると考える。地域の人々が集まる場と同じ空間に子どもの遊び場を設けることで、安全性が確保できる。また様々な年齢層の人と関わりを持つことで、子どもたちの社会性やコミュニケーション能力の育成にも繋がる。
・託児所・自由に遊べる広場・学習広場・遊具・学びの体験ができる場など

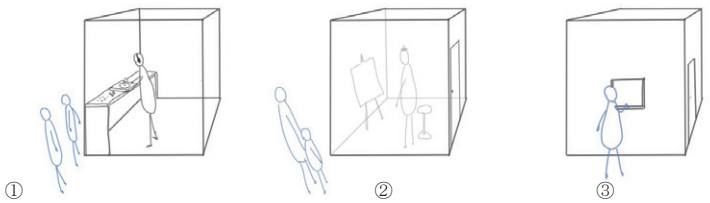
④緑を取り入れた空間
計画敷地内に緑を積極的に設けリラックス効果を期待。パブリックスペース・セミパブリックスペース・など気分や目的によって選択できる異なる空間を計画する。
・広場・休憩所など

5-2 配置計画

上記のプログラムを敷地内に点在させて計画することにより、偶然の新たな発見に遭遇できる。また、室内空間へ繋がる通路も人々が繋がる場である。それらを中間領域と捉え、通路に滞留できるスペースを設けることによって、建物内を少しずつ巡っていくとこが可能。

6. 映し出すショーケースのパタン

①スケルトン
②うっすら見える
③開口から覗く
①．②．③を点在させて空間を構成していく。


① ② ③



寺社建築における内法寸法の決定法について

学籍番号　K20256
名　　前　木村栞
指導教員　大上直樹

本堂　社殿　方丈建築
内法　表の間　長押

1. 研究目的

寺社建築の内法寸法は、五間堂では 8 尺前後であり、一間社では 3 尺前後などヒューマンスケールには乗っていない。

こうした内法寸法の決定法について記述された文献は、管見では認められず、どのように決定されたかについては不明である。

本研究は、内法寸法がどのように決定されたかについて、表の間から決定されるという仮説を提示し、実際の遺構で検証したものである。

2. 研究対象

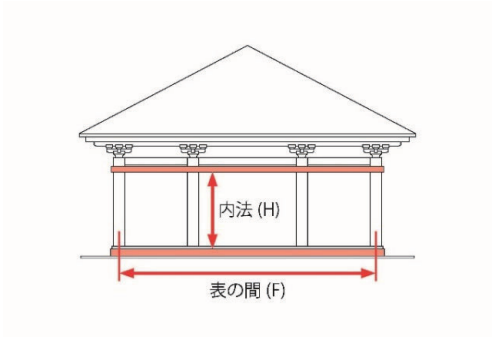
古代から近世にまでの文化財指定された社寺建築のうち、修理工事報告書が刊行されていて、必要な寸法が判明される下記のものとした。

一間堂・三間堂　71 棟(古代 7 棟、中世 47 棟、近世 17 棟)
五間堂・六間堂　49 棟(中世 37 棟、近世 12 棟)
七間堂以上　35 棟(古代 1 棟、中世 17 棟、近世 17 棟)
寺院本堂　155 棟(古代 8 棟、中世 101 棟、近世 46 棟)
一間社　90 棟(中世 57 棟、近世 33 棟)
二間社～四間社　76 棟(中世 44 棟、近世 32 棟)
五間社以上　17 棟（中世 5 棟、近世 12 棟）
神社社殿　183 棟(中世 106 棟、近世 77 棟)
方丈建築　11 棟(中世 1 棟、近世 10 棟)
合計　349 棟(古代 8 棟、中世 208 棟、近世 133 棟)

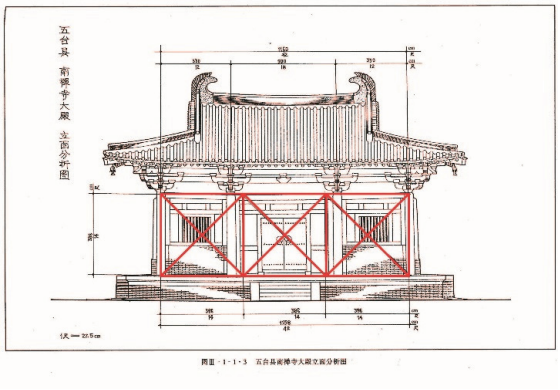
3. 研究方法

これまでの検討から、内法寸法と表の間は整数比の関係が認められることから、上記の遺構について、その比を検討した。

表の間を内法寸法で割ることにより、理論値を求める(図 1)。これは中国建築にも見られる方法であり、中国建築では床を張らない為、表の間と柱の全長に整数比の関係が認められる(図 2)。



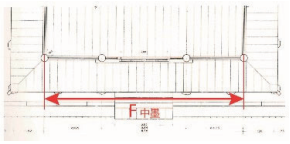
(図 1)表の間と内法寸法の関係



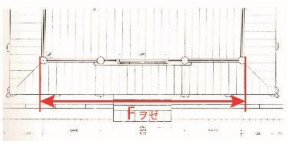
(図 2)五台具南禅寺大殿立面図

表の間(中墨)を内法寸法で割ったものを基本的な形とし、表の間と内法寸法について下記のようにそれぞれ 3 つのパターンに分け、計 9 つのパターンに分類した(図 3～8)。

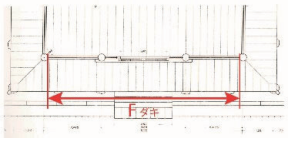
表の間：建物正面間口寸法　Frontage
芯々の場合　F 中墨
外法の場合　F ヲゼ
内法の場合　F ダキ
内法寸法：長押乃至貫内々高さ　Hight
長押(貫)内法の場合　H_1
縁長押(腰貫)下端から内法長押(足固め貫)下端の場合　H_2
縁長押(腰貫)下端から内法長押(足固め貫)上端の場合　H_3



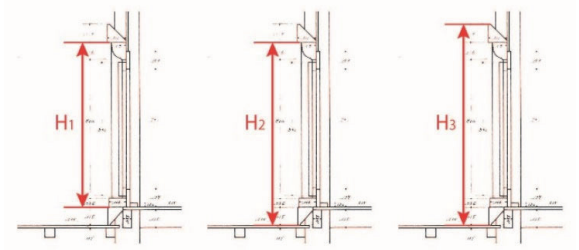
(図 3)F 中墨



(図 4)F ヲゼ



(図 5)F ダキ



(図 6)H_1　(図 7)H_2　(図 8)H_3

4. 表の間と内法寸法の関係の検討事例

4. 1. 三間堂

中尊寺金色堂

所在地　岩手県

国宝

建立年　天治元年（1124 年）

表の間(中墨)　18.09 尺

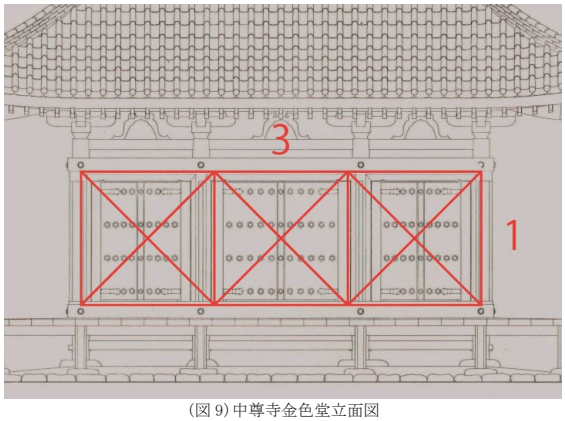
内法寸法　6.03 尺

長押成　0.60 尺

表の間÷内法寸法（$F_{中墨}/H_1$）＝18.09÷6.03

＝3.00

→3.0



(図 9) 中尊寺金色堂立面図

4. 2. 五間堂

青蓮寺阿弥陀堂

所在地　熊本県

重要文化財

建立年　嘉吉 3 年頃（1443 年頃）

表の間(中墨)　32.7 尺

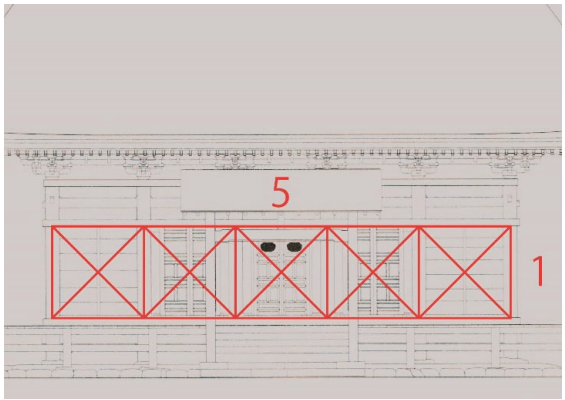
内法寸法　6.50 尺

貫成　0.50 尺

表の間÷内法寸法（$F_{中墨}/H_1$）＝32.7÷6.50

＝5.03

→5.0



(図 10) 青蓮寺阿弥陀堂立面図

4. 3. 一間社

布施神社本殿春日社

所在地　滋賀県

重要文化財

建立年　鎌倉後期（1332）

表の間(中墨)　3.50 尺

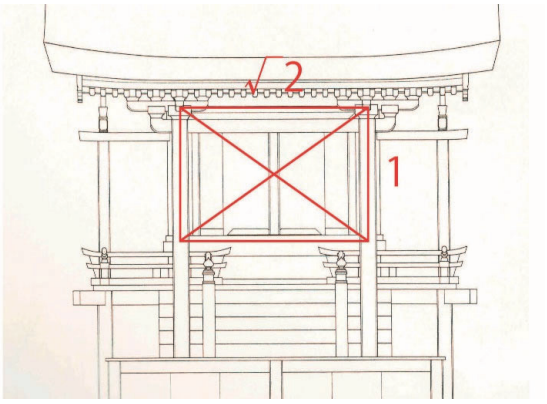
内法寸法　2.48 尺

長押成　0.26 尺

表の間÷内法寸法（$F_{中墨}/H_1$）＝3.50÷2.48

＝1.41

→1.41($\sqrt{2}$)



(図 11) 布施神社本殿春日社

5. 検討結果

建物種別ごとに一覧にしたものが下記のものである。

検討結果より、内法寸法は表の間をその建物の間数もしくはその近似値で割ることで決定されていると言える。

三間堂 (68 棟)	2.0	5 棟
	2.5	10 棟
	3.0	36 棟
	3.5	1 棟
	4.0	13 棟
	5.0	3 棟
五間堂 (48 棟)	4.0	6 棟
	5.0	37 棟
	6.0	5 棟
一間社 (90 棟)	0.5	1 棟
	0.8	1 棟
	1.0	2 棟
	1.2	23 棟
	1.41	28 棟
	1.5	12 棟
	1.6	13 棟
	2.0	8 棟
	2.5	1 棟
	3.0	1 棟

6. 参考文献

1,「古代中国城市規划建筑群布局及建筑設計方法研究」（博熹年）　2000 年 12 月

2,「重要文化財法音寺本堂修理工事報告書」（重要文化財法音寺本堂修理委員会）　昭和 45 年 12 月

3,「重要文化財阿多由太神社本殿修理工事報告書」（重要文化財阿多由太神社本殿修理委員会）　昭和 42 年 6 月

4,「国宝中尊寺金色堂修理工事報告書」（国宝中尊寺金色堂保存修理委員会）　昭和 43 年 7 月

5,「重要文化財青蓮寺阿弥陀堂保存修理工事報告書」（財団法人　文化財建造物保存技術協会）　平成 8 年 3 月

6,「重要文化財　布施神社本殿（三棟）修理工事報告書」（滋賀県教育委員会）　昭和 57 年 3 月 31 日

山と川と空と

学籍番号　K20258
名　　前　久保田智尋
指導教員　白鳥洋子

Mountains,Rivers and Sky...

Student Number　K20258
Name　KUBOTA Chihiro
Supervisor　SHIRATORI Yoko

1. はじめに

1-1 長野県飯田市の概要

私の出身地である長野県飯田市は、長野県最南端にある市である。東には南アルプス、西には中央アルプスに囲まれた場所にあり、中央には天竜川が流れ、河岸段丘を形成している地形に存在し自然が豊かな地である。

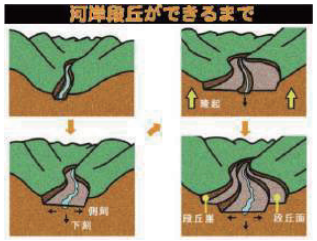


図１



写真１

1-2 飯田市の歴史

この河岸段丘には縄文時代より人々が住まい、土器、ムラ、古墳などが出土している。段丘の上部には人々の住まう住環境があり、段丘の下部には田畑があったと考えられる。

1-3 飯田市街地の歴史

飯田市街地が発展したのは戦国時代の中頃、武田氏に支配された時で、伊勢の国（現・三重県伊勢市）の商人が武具を作るため住み始め、城下町が形成された。飯田城下の完成である。

1-4 戦後の飯田市街地の歴史

戦中においては、空襲を受けることもなく江戸の街並みは保たれていました。（写真２）



写真２



写真３

戦後の昭和 22 年「飯田の大火」により飯田城下を７割り焼失しました。（写真 3･4）自身の祖父によると空は赤くなり、蔵がはぜたそうです。

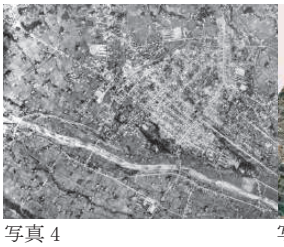


写真４



写真５

写真４は昭和 22 年９月 22 日飯田の大火から５ヵ月後にGHQが撮影した写真。写真５はGHQの写真より約40年後の写真。飯田市街地は戦中の疎開による人口増加、飯田の大火により居住地を失われた人を中心に飯田城下を中心にした都市から河岸段丘を一段降りた場所、かつて田畑だった場所に人々が住み始めました。（写真６・７）

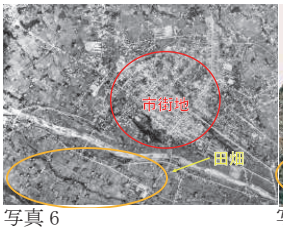


写真６



写真７

1-5 飯田市と天竜川

飯田市は 1-1、1-2 のように天竜川とともに形成された地形、過去には静岡県浜松市に木材運搬が行われており古くから川が使われてきた。現在では「天竜舟下り」が行われており、川下りが体験できる。

1-6 現在の飯田市

飯田市は 1-4（写真７）のように河岸段丘を降りた場所に住み始めたとともに、商業施設の発展、そして飯田市街地を離れた地が発展をみせている。現在行われているリニア中央新幹線の計画も飯田市街地から離れた場所に建設される。
リニアの完成とともに飯田線新駅の設置そして観光地化などの発展を期待したい。

1-7 飯田市の未来

（未来視点）リニア中央新幹線の完成は飯田の発展に寄与し、とても喜ばしいことだった。一方で課題もあった、地方特有の車社会で観光地に行こうとも観光地のひとつひとつが遠いことへの対応など...

2. 敷地選定

2-1 課題解決と敷地

現在行われているリニア中央新幹線の計画も飯田市街地から離れた場所に建設され、飯田市の発展場所は飯田市街地から徐々にと離れていく。なので私は飯田市の山々の関わり（1-1）、天竜川関わり（1-5）を踏まえた市街地に遠く天竜川沿いの場所に建築しようと思った。また、図２のように出来る限り車を使わない観光を提案したい。

・提案する観光の順路
1 リニア駅で下車
　↓バス
2 舟下り新港（敷地）
3 敷地で休憩・絵を描く
　↓舟下り
4 天竜峡温泉港
5 天竜峡温泉で一泊
6 天竜峡駅にて飯田線（電車）で乗車
　↓電車
7 飯田駅で下車
8 市街地めぐり
9 市街地で焼肉を食べる
10 飯田駅で乗車
　↓電車
11 飯田線新駅で下車
　↓徒歩
12 リニア駅で乗車（帰宅など）



図２

所 在 地：長野県飯田市座光寺 6523
主な用途：多目的
敷地面積：9700m²
建築面積：928.85m²
延床面積：821.14m²
キーワード：多目的・山・川・空・自然・風景

Location ： 6523,Zakoji,Iida,Nagano
Main Use ：Multipurpose
Site Area ：9700m²
Building Floor Area ：928.85m²
Total Floor Area ：821.14m²
Keywords ：Multipurpose,Mountain,River,Sky,Nature,Landscape

3. 建築計画

3-1 建築のおおよその考え

敷地は写真８のように堤外地にすることにした。この敷地はマレットゴルフ場とサッカーコートに挟まれたところにあり、地域住民の憩いの場としたいと思った。(写真 9) そこから伸びるように橋をつくり、船着き場（新港）に繋げる計画にした。

建築物からは南アルプスと天竜川や飯田市を象徴する風越山が見える計画をした。

橋からは川や木々などの風景が移り変わる橋。橋を渡ると緊張から抜け出したかのような解放的な新港。



写真８

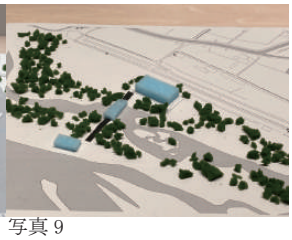


写真９

3-2 建築用途

私は最初、天竜川沿いに飲食店をつくろうと思った。しかし、地方では人口減少やその他の課題からお客さんが入らず店を出したとしても数年でテナント募集中というのはよくあることであり、この建物が将来的に使用されるかと言われるとあまり現実的ではないと思う。なので特に用途を持たせない建築物。地域住民や観光客が使用できる多目的な建築を提案したい。この建物の使用例としては、観光客や旅人が風景などの絵を描く場所、簡易ギャラリー、休憩場所。天竜川における研究をする場所。近所の人が散歩する場所。隣地にはサッカーコートやマレットゴルフ場があることからその憩いの場のシンボルとなる建築。

3-3 風景

建築物から東側には南アルプスそして天竜川が望める。西には飯田市のシンボルである風越山が望める場所。新港では間近で川を感じられる。イメージ１は南アルプスから登る朝日。イメージ２は飯田の夕焼け。イメージ３はイメージ１・２からインスピレーションを受け、この建築物から見える１日の移り変わりを描いた絵。


イメージ１


イメージ２


イメージ３　左・04：55　中央・19：09　右・23：48

3-4 建築物の造形

この建築物は天竜川沿いの堤外地に建築するため、堤防より高い位置に床を設けた。

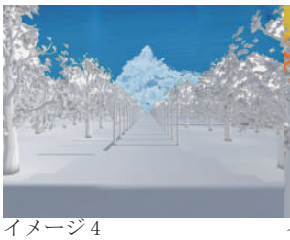
天竜川は古くより川の氾濫を繰り返し「暴れ天竜」という名前までつけられ地域の人々を困らせていた川。その言い伝えから何らかの生き物のような威圧感を与え歴史を風化させないような造形を意識した。（イメージ 5）

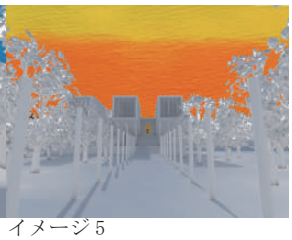
建築物を空へ伸ばすことで、建築物内から天気に移り変わりや南アルプスの季節の移り変わりを見せる。

3-4 回廊の造形

この建築物から船着き場（新港）へは天井のない柱と床だけの回廊（イメージ 4）が続いて、天井がないことで雨は防ぐことが出来ないが、常にスマホを見て下を向いている現代人に常に空という天井を意識させる。イメージ６は空の表情を描いた絵で、空は晴れだけではなく雨や雷、夕焼けなど、ここに来た人々はこの天然のライブアートをどのように見るか考える。

また植栽を配置することで季節により紅葉や枯れて枝だけとなった寂し気な木の表情が変わる。新港に行くまでに天竜川の支流や木々のあるところを通り季節とは違った表情が移り変わる。


イメージ４


イメージ５


イメージ６

4. 本建築の将来

この建築は特に用途を定めない建築としたが、未来を生きる人がどのように扱うかは未来の人に託し、ある種未完成な部分を完成させる。

5. 参考文献

・飯田市の歴史　上・下
　飯田市歴史研究所・編集　飯田市教育委員会　発行
・飯田市 HP
・ちいさな城下町　安西水丸
・中馬で栄えた商工業都市城下町飯田　塩澤仁治
・リニア推進ロードマップ（2015 年度版・2023 年版）
・リニア推進課 - 飯田市ホームページ（iida.lg.jp）
・ＧＨＱ（yu-yake.com）
・国土交通省 中国地方整備局（mlit.go.jp）

正保城絵図を用いた本丸における櫓建築の配置形式に関する資料化的考察

学籍番号　　K20259
名　　前　　栗原太郎
指導教員　　砂川晴彦

城絵図　　櫓　　本丸
近世城郭　　石高　　鬼門

序章　はじめに

本稿では正保城絵図を用いて、城郭建築の最盛期を経た正保年間における本丸の櫓配置の形式を明らかにすることが目的である。

城郭最盛期における類例を同時代かつ広範囲で把握することができる正保城絵図の性質を活かすことで考察を試みる。櫓建築の特徴を抽出するに当たり、要素が豊富な本丸に限定することで基礎的な考察を試みる。

正保城絵図の特徴としては、幕府により一律に作成された経緯から同時期における全国の城郭を一望にできる点が挙げられる。

第１章　絵図史料批判

１　立体画法の特徴　視点の違い

本章では絵図の建物への描かれる法則や性質を検討した。

本節では正保城絵図に描かれる建築物の立体画法に注目して考察を試みる。その結果、絵図には投影される視点の違いがあることが理解される。

２　立体画法の特徴　屋根の違い

本節では絵図に描かれる屋根の違いに注目して観察する。

立体の描き分けとしてほぼ全ての絵図で構造物の奥行き表現がなされており、奥行のない塀と奥行のある長屋状櫓の形式の違いを見極めることができる。

３　本研究に含めない絵図

奥行表現を含め著しく建物の描写は劣るため分析から除くこととする。国立公文書館に所蔵されている正保城絵図 63 鋪のうち、59 鋪を本稿の対象とする。

４　まとめ

正保城絵図に描かれる建築物の立体画法に注目して考察を試みる。その結果、一視点系、二視点系、多視点系、不規則系の４種類の画法で描かれていることが理解される。正保城絵図の約 73%が多視点で描かれ多視点が最も多いということが分かる。

画法を考慮した結果、描き分けの精度が高く奥行の区別から内部空間のある長屋状櫓と内部空間のない塀の形式区別が可能であると判断された。

第２章　櫓の定義と石高・地域別にみる城絵図 (59 鋪)

先行研究によれば櫓建築の形式は平櫓、二重櫓、三重櫓、櫓門、多聞櫓と５つほどの分類があると理解された (**図 1**)。屋根の数が一重のものを平櫓、二重ものを二重櫓、三重のものを三重櫓、階下が門になっており門の上に櫓を設けたものを櫓門、連続した長屋状の櫓のものを多門櫓という。注 1)

城郭の規模を知る指標として石高を参考にした (**表 1**)。石高の規模を大・中・小と３つに分けることで石高別に城郭の考察を試みた。注 2)

正保城絵図についての全国分布図を作成することで地方別の城郭数を確認した。その結果、東北や中部・関東などの東国は内陸部に多く城が点在し、近畿や九州といった西国は海沿いに多く城があることが理解された。特に中国地方と四国地方の城郭では顕著にその傾向が見られた。



図１　先行研究における櫓の分類

表１　石高と櫓建築の一覧表

				重層櫓			合計							
名前	地域	石高：万石	出典	天守(4重以上櫓)	三重櫓	二重櫓		平櫓	櫓門	長屋状櫓		画法の視点	本丸の種類	
安芸国広島城所絵図	中国	42.65	正保城絵図による城下町の面積規模に関する考察 油浅 耕三	1	2	6	9	5	2	6		多視点系		
備前国岡山城絵図	中国	31.52	〃	1	4	5	10		5	3		二視点系		
出羽国米沢城絵図	東北	30	正保城絵図による城下町の面積規模に関する考察 油浅 耕三		2	1	3		3	3		多視点系		
常陸国水戸城絵図	関東	28	〃			3	3		1	2		多視点系		
阿波国徳島城之図	四国	25.7	〃		1	1	2					不規則系		
土佐国城絵図（高知）	四国	22.16	〃		1	1	2			3		一視点系		
出羽国秋田郡久保田城画図	東北	20	近代諸城主次第			2	2	1	2	4		多視点系		
美作国津山城絵図	中国	18.6	〃	1		9	10	4	6	13		多視点系		
出雲国松江城絵図	中国	18.6	〃	1		4	5	3	2	3		多視点系		
出羽国最上山形城絵図	東北	15	〃			3	3		2			多視点系		
越後国村上城之絵図	中部	15	村上市公式ウェブサイト		1	2	3	3		4		多視点系		
豊前国小倉城絵図	九州	15	〃	1		1	2	2	4	7		多視点系		
奥州白河城絵図	東北	12	〃		1	2	3	1	2	1		多視点系		
和州郡山城絵図	近畿	12	〃			4	4		2	5		多視点系		
伊勢桑名城中之絵図	近畿	11	正保城絵図による城下町の面積規模に関する考察 油浅 耕三	1	3	2	6	3	3	1		多視点系		
南部領盛岡平城絵図	東北	10	〃			1	1		1	2		多視点系		
下総国古河城絵図	関東	10	〃		1	3	4		2			二視点系		
美濃国大垣城絵図	中部	10	〃		1	1	2		1	2		多視点系		
備後国福山城図	中国	10	正保城絵図による城下町の面積規模に関する考察 油浅 耕三	1	3	11	15		3	4		一視点系		10 万石
美濃国岩村丹羽式部少輔居城絵図	中部	9.8	近代諸城主次第			2	2	1		1		多視点系		
相模国小田原城絵図	関東	8.5	近代諸城主次第		1		1		1	2		二視点系		
肥前国唐津城廻絵図	九州	8.3	〃			1	1	3	1			多視点系		
越後国古志郡之内長岡城之図	中部	7.4	〃		1	5	6	3	2			多視点系		
近江国膳所城絵図	近畿	7	正保城絵図による城下町の面積規模に関する考察 油浅 耕三	1	1	1	3		2	8		多視点系		
播磨国明石城絵図	近畿	7	〃		4		4					多視点系		
豊後国直入郡岡城絵図	九州	7	近代諸城主次第		1	1	2	1	1			多視点系		
出羽国新城絵図	東北	6.8	〃			3	3					二視点系		
信州上田城絵図	中部	6	近代諸城主次第			7	7		2			一視点系		
伊予国大洲之絵図	四国	6	〃		1	1	2	5	1	4		多視点系		
松阪古城之図	近畿	5.4	近代諸城主次第			2	2					多視点系		
和泉国岸和田城図	近畿	5.3	〃	1		3	4	3	1	5		多視点系		
豊後之内臼杵城絵図	九州	5.06	正保城絵図による城下町の面積規模に関する考察 油浅 耕三		1	6	7	1				多視点系		
奥州棚倉城之図	東北	5	〃			4	4		2	6		一視点系		
常陸国笠間之城絵図	関東	5	近代諸城主次第			3	3		1			多視点系		
下総国世喜宿城絵図	関東	5	野田市ホームページ		1		1	1	1			多視点系		
越後国新発田之城絵図	中部	5	正保城絵図による城下町の面積規模に関する考察 油浅 耕三			3	3	1	2	1		多視点系		
伊勢亀山城絵図	近畿	5	近代諸城主次第		1		1	3	2	3		多視点系		
丹波笹山城之絵図	近畿	5	〃		1	5	6		2	1		多視点系		
備中国松山城絵図	中国	5	近代諸城主次第			1	1	1		1		不規則系		
讃岐国丸亀絵図	四国	4.9	〃		1	4	5	1		4		多視点系		
津軽弘前城之絵図	東北	4.7	正保城絵図による城下町の面積規模に関する考察 油浅 耕三		1		1					不規則系		
丹波国福知山平山城絵図	近畿	4.5	正保城絵図による城下町の面積規模に関する考察 油浅 耕三		1	1	2		2			多視点系		
越前国丸岡城之絵図	中部	4	〃		1		1	1		1		不規則系		
丹波国亀山城絵図	近畿	3.8	〃	1		3	4		1			多視点系		
奥州仙台領白石城絵図	東北	3.2	〃			1	1	2	1			不規則系		
信州高遠城之絵図	中部	3	近代諸城主次第				0	2	3			多視点系		
信濃国飯山城絵図	中部	3	近代諸城主次第			2	2		1			多視点系		
遠州掛川城絵図	中部	3	正保城絵図による城下町の面積規模に関する考察 油浅 耕三			1	1	2	3			多視点系		3 万石
出羽国之内上山絵図	東北	2.5	正保城絵図による城下町の面積規模に関する考察 油浅 耕三			2	2	1	2			多視点系		
上野国沼田城絵図	関東	2.5	〃	1	1	1	3		3			多視点系		
豊後国日出城絵図	九州	2.5	正保城絵図による城下町の面積規模に関する考察 油浅 耕三		1	5	6	3		2		多視点系		
出羽之国油利之郡本城絵図	東北	2	〃			1	1					多視点系		
三河国西尾城絵図	中部	2	〃		1	3	4		2			二視点系		
参州刈谷城絵図	中部	2	正保城絵図による城下町の面積規模に関する考察 油浅 耕三			2	2		2	2		二視点系		
豊後府内城之絵図	九州	2	近代諸城主次第	1		3	4	2	2	4		多視点系(外倒れ)		
最上東根城絵図	東北	1.2	米沢日報デジタル			1	1	2				多視点系		
三河国田原城絵図	中部	1.2	近代諸城主次第			1	1		1			多視点系		
備後国之内三原城所絵図	中国	なし	広島藩の支城			8	8		1	3		多視点系		
肥後国八代城廻絵図	九州	なし	熊本藩の支城	1	1	3	5	3	1	1		多視点系		

第３章　城郭の縄張り形式の分類

本章では絵図に描かれた縄張りの名称に注目して観察した。本丸には縄張りの数が１つの城郭と２つの城郭があると理解された。絵図にある多くの城においては縄張りの数が１つの本丸だが、本丸が上段と下段に分かれているもの多くの絵図では「本丸」、「二之丸」、「三之丸」と描かれている。これらは一般的な縄張りの名称だと理解された。

一般的でない縄張りの名称は「下之丸」「天守丸」「伝守丸」「小丸「出丸」「中之丸」「北丸」「北ノ丸」「東ノ丸」「西方ノ丸」が挙げられる。これらの一般的でない縄張りを観察すると本丸が２段に構成されている場合、本丸に似た役割を持つ縄張りが併設されている場合、本丸でも二の丸でもない名称の縄張りが存在する場合、本丸と二の丸を繋ぐ中間に位置する縄張りが存在する場合、比較的小規模で方位の名称がついた縄張りが存在する場合があることが理解される。

第４章　本丸における櫓建築の分類

本章では城郭建築で最も重要な部分である本丸のみに限定して分類一覧図を作成した（未掲載）。本丸内にある櫓建築を類型ごとに記号を付けた。本丸の範囲や櫓建築の類型について図化したうえで城郭の櫓配置形式の考察を試みた。城郭建築で最も重要な部分である本丸のみに限定して基礎的な考察を試みた。

比較的、中部地方より西側から櫓建築の数が増える傾向があること、東北地方と関東地方の規模が小さく数が少ないこと、四重以上の櫓は西国から増える傾向があることが理解された。

第５章　石高別にみた城郭

効果的な結果を考慮し、3 万石以上から 10 万石未満の範囲にある城郭を中間的な規模とすることにした。その結果、正保城絵図 59 鋪のうち中間的な規模の城郭は 29 鋪、10 万石以上の大規模な城郭は 19 鋪、3 万石未満の小規模な城郭は 11 鋪あることが分かる。

石高別にみた結果、最も重層櫓の数が多いのは備後国福山城図で 15 櫓であることが分かった。また四重以上の櫓は大規模石高の城郭に比例することが分かった。また重層櫓のない城郭は信濃国飯山城絵図のみであることが分かった。

第６章　長屋状櫓の類型

本章では長屋状櫓に注目して考察を試みた。長屋状櫓には直線状の石垣の上に築かれたもの、鈍角に折れ曲がる石垣の上に築かれたものがある。階数では総２階建てのもの、石垣の隅部のみが２階建てで隅部以外の部分は平屋建てのものがあると理解された。

本丸と長屋状櫓の関係について注目して観察すると本丸の周囲を全て囲う形式（**図 2**）、本丸の周囲を長屋状櫓で部分的に囲う形式（**図 3**）と２つの形態があることが理解された。本丸の周囲を全て囲う形式は 5 鋪、本丸の周囲を長屋状櫓で部分的に囲う形式は 14 鋪ある。本丸の周囲を長屋状櫓で囲うことにより、防御を厳重なものにするためだと考えられる。本丸の周囲を長屋状櫓で部分的に囲う形式には長屋状櫓が「L」字に囲う場合、本丸の対角線上に向かい合う対辺の位置に設けられる場合、「コ」の字に囲う場合、南側や西側のみというように本丸のどちらか片側のみに設けられている場合があることが理解される。

第７章　鬼門除けと城郭の関係

本章では城郭と鬼門の関係に注目して考察した。本丸の鬼門に位置する場所には三重櫓や天守など、意図的に重層な櫓が建てられる傾向があると理解された。こうした特徴は 10 城ある（**図 4**）。

本丸の形態に注目して考察した。鬼門を除けるために隅部を切り欠くように縄張りを意図的に作っていることが理解された。こうした特徴は 23 城ある（**図 5**）。

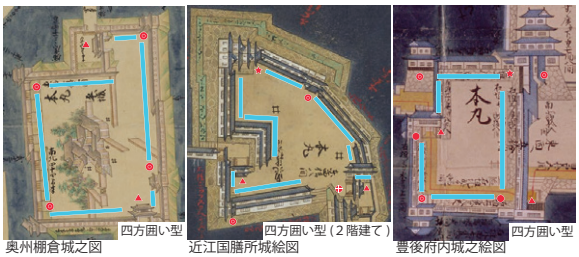
本丸の鬼門部分の削られ形式に注目して観察すると隅切り形式、隅欠き形式、角アール形式と３つの形式があると理解された。

第８章　城下町と櫓配置における関係

本章では城下町と櫓配置に注目して考察した。城下町と長屋状櫓に注目すると城下町がある方向に長屋状櫓が設けられている形態、二の丸や三の丸などの縄張りがある方向に長屋状櫓が設けられている形態、城下町や縄張りの反対側に長屋状櫓が設けられている形態と３つほどの形態があると理解される。また絵図を観察すると城下町の方向に三重櫓が建てられる傾向が確認される（**図 6**）。

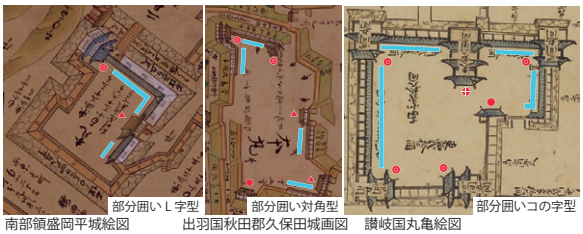
終章　まとめ

正保城絵図 59 鋪の本丸の櫓に関して絵図の画法、縄張りの名称と形態、櫓建築の分類、石高別、長屋状櫓、鬼門、城下町との関係性の観点から資料化し若干の考察を加えた。



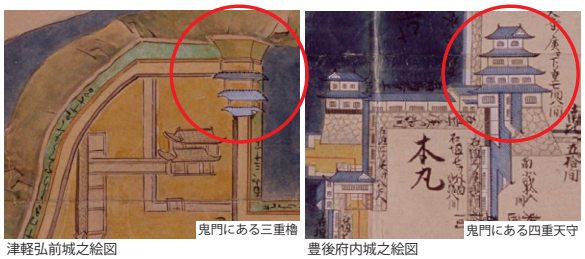
奥州棚倉城之図　近江国膳所城絵図　豊後府内城之絵図

図 2　本丸を囲う長屋状櫓の分類　国立公文書館所蔵　正保城絵図を用いて作成　長屋状櫓の位置を青線で示した



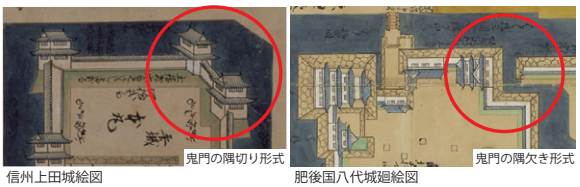
南部領盛岡平城絵図　出羽国秋田郡久保田城画図　讃岐国丸亀絵図

図 3　本丸を囲う長屋状櫓の分類　国立公文書館所蔵　正保城絵図を用いて作成　長屋状櫓の位置を青線で示した



津軽弘前城之絵図　豊後府内城之絵図

図 4　鬼門と重層櫓の関係　国立公文書館所蔵　正保城絵図を用いて作成　鬼門部分の特色を赤丸で示した



信州上田城絵図　肥後国八代城廻絵図

図 5　鬼門と本丸の関係　国立公文書館所蔵　正保城絵図を用いて作成　鬼門部分の特色を赤丸で示した



備前国岡山城絵図　土佐国城絵図（高知）

図 6　城下町と重層櫓の関係　国立公文書館所蔵　正保城絵図を用いて作成　城下町を赤丸で示した、重層櫓を記号で示した

【参考文献】
・内藤昌『城の日本史』1979 年　日本放送出版協会
・油浅耕三　「正保城絵図による城下町の面積規模に関する考察」昭和 60 年度第 20 回日本都市計画学会学術研究論文集　10 頁　表 3-1　城下町面積表　1985 年

【注釈】
1）内藤昌『城の日本史』1979 年 に基づく
2）油浅耕三　「正保城絵図による城下町の面積規模に関する考察」1985 年 に基づく

農業移住のための新たな学びの提案

～三田市を例として～

学籍番号　K20260
名　　前　桑原弥里
指導教員　人見将敏

New Learning Proposal for Agricultural Migration　～Sanda City as an example～

Student Number　K20260
Name　KUWABARA　Miri
Supervisor　HITOMI　Masatoshi

１．制作の目的と背景　ニュータウンとその周辺地域における問題

私の地元である兵庫県三田市ではウッディタウンやフラワータウンといったニュータウンがあり、新しい家がどんどん建っていき、移住者が急増しているのに対して、ニュータウン外の市街化調整区域（右図）においては、厳しい建築制限が行われてきたことによって人口が減少し続けている。しかし、農業をしたいといった理由で都会からニュータウン外の地域への移住を希望する人が増えている。移住希望者が多いのにもかかわらず、農地法により田んぼや畑などの農地は厳しく規制されていることで、原則、農業従事者でなければ買取希望者に土地を売ることができない。そこで、新規就農者でも農業を始めるハードルが低くなるような取り組みを建築的に支援できるような学びの場を提供する計画を提案する。



２．農地法について

農業を行う目的で、他人から農地の所有権を取得する場合や農地を借りて農業を行う場合、農地を効率的に利用する耕作者による権利取得を促進するため､各市町村の農業委員会の許可を得る必要がある｡(農地法第１条、農地法第３条第１項）農地付き空き家も農地を含むため例外ではない。非農家の人が小規模の農地が付いている空き家を購入しようとする場合、許可要件の１つにある「農地取得後における保有農地面積の下限」を満たすことができず、小規模の農地が付いている空き家の購入を断念してしまうことがよくある。「農地取得後における保有農地面積の下限」とは、経営面積があまりに小さいと生産性が低く、農業経営が効率的かつ安定的に継続して行われないことが想定されるため、求められる要件である。この面積は三田市で原則 3,000 ㎡以上も必要とされている。他にも大農具を持っている必要があり、トラクター、コンバイン、田植え機や耕うん機などの権利取得後の農業に必要な物がなければ許可が下りない。他にも審査の過程で指導者の有無などが問われるため、農業について詳しく学ぶ必要がある。

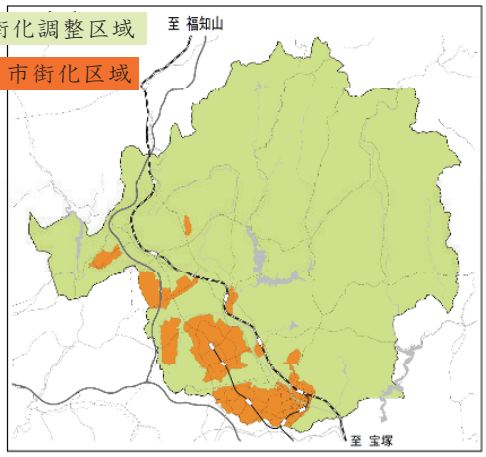


図１.配置図

３．敷地について

3-1. 三田市について

兵庫県三田市は神戸・大阪の大都市近郊に位置しつつ、豊かな自然にも恵まれ、住み、働き、学び、憩い、そして交流することのできる都市として発展している。『「ひと」×「まち」×「さと」が織りなす未来都市三田』をまちづくりの基本目標とし､三田市の魅力である､「ひと」「まち」「さと」を織りなし、新たな価値観や活力を取り入れながら、誰もが住み続けられるまちづくりが進められている。ニュータウン開発により急激に人口が増加し、昭和 62 年から平成 8 年まで 10 年連続で人口増加率日本一を記録したが、11 万人に達した後は増加ペースが緩やかになり、平成 22 年以降は、横ばい状況に転じた。

3-2. 計画敷地について

兵庫県三田市小野を選定した。小野は市街化調整区域内であり、豊かな自然と田園風景が広がっている。選定敷地付近には、小学校や幼稚園があり、地域の子供たちも農業に触れ合うことができるような場所に設定した。



図２．三田市小野の景観



所在地：兵庫県三田市小野９１３
主な用途：農業施設
敷地面積：1,244 ㎡
建築面積：435 ㎡
延床面積：1,071 ㎡
キーワード：農業・コミュニティ・学びの場・カフェ

Location ： 913, Ono, Sanda, Hyogo, Japan
Main Use ： agricultural building
Site Area ： 1,244㎡
Building Floor Area ：435 ㎡
Total Floor Area ： 1,071 ㎡
Keywords ：aguriculture, community, education, cafe

４．計画と内容

◎ study・play・eat・buy・communication の５つの要素をテーマに体験型農業教育施設を計画する。

・１階部分に販売所とカフェを設置し屋外に実習用の畑を計画し、２階部分には教室と談話スペースを設け、３階部分には講義スペースと実習室を設ける。

①新規就農者の学びの場を設ける
新規就農者のために農業のノウハウや実習などを学ぶことができる施設を計画する。農地や農地付き物件を購入する場合、農業委員会の許可を取る必要がある。農業委員会の書類審査や面接を経て合格者のみ農地や農地付き物件を購入することが許可される。許可を得るために農業についてを既存農家や教育期間で学ぶ必要がある。



図３．内観パース

②地域の既存農家と新規就農者との交流の場を設ける
地域の既存農家に講師になってもらい、既存農家と新規就農者との交流の場を設けることによって地域の農業を次世代に受け継いでいき、農業の発展を目的とする。



図４．断面図

③大農機具の貸し出し
新規就農者が農業委員会に申請を行う際、農業法第３条の項目で大農機具を導入しなければならない。
大農機具は高額のものも多く、現状、新規就農者にとって大きなハードルになっている。そのためトラクター、耕うん機、田植え機、コンバインなどのレンタル、シェアを行うことによって３条許可申請のハードルを下げることを目的とする。

④カフェと販売所の設置
実際に施設でとれた農作物を使った料理を提供するカフェと採れた野菜などを販売することができる販売所を設けることによって地産地消に取り組む。

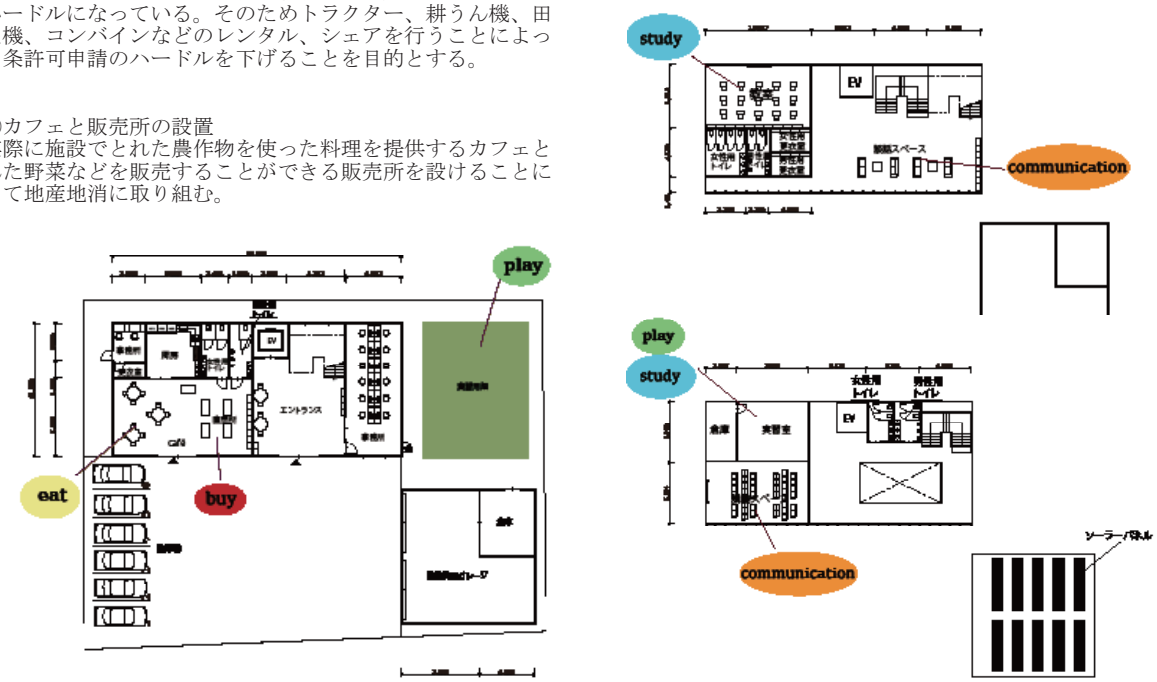


図５．各階平面図

【参考文献】
・三田市ホームページ　農業委員会
https://www.city.sanda.lg.jp/soshiki/73/gyomu/sangyo_shinko/nogyo_ringyo/nogyo/3785.html

・三田市ホームページ　用途地域
https://www.city.sanda.lg.jp/soshiki/34/gyomu/seisaku_keikaku/toshi_keikaku/13268.html

・三田市用途地域 map
https://cityzone.mapexpert.net/ZoneMap?L=28219&N=%E4%B8%89%E7%94%B0%E5%B8%82

伝統的町並みの変容の研究 ―福井県三国町における1983年から2023年まで40年間を通して―

学籍番号　K20261
名　前　桑原　唯
指導教員　大上　直樹

町家　かぐら建て　三国町
屋根形状

１、研究概要

１）研究目的

本研究は福井県坂井市三国町の民家と町並みを調査したものである。先行研究として「三国町の民家と町並 - 三国町民家調査・町並調査報告書」が1983年に三国町教育委員会、三国町郷土資料館によって発行されている。伝統的な町家が残る町並を残しつつも、空き家が発生し、人口減少などの衰退の傾向が見られる。しかしその一方で町家などを活用した地域活性ができているとはいえない印象を福井県が故郷である私は受けている。その印象を踏まえて、1983年から現在2023年までの40年間の変容を現状を調査した分布図を基に棟数、等を基準に40年前と比較し、その客観的に調べる。なぜかつて栄えた三国湊が衰退し、現在までの間にどのような変化が起きたのか、その要因を解明していくことが目的である。

2）先行研究

この報告書は、1983年に三国町教育委員会、三国郷土資料館が発行したものであり、福井県坂井郡三国町の民家、及び町並の調査結果をまとめたものである。この報告書は、三国郷土資料館の名で送り出すにあたり、千葉大学の玉井哲雄先生、千葉大学の学生の協力のもと調査を行ったものだと書かれている。

２、研究方法

研究方法として以下の通りに進めた。

- 研究範囲の選定
- 資料をもとに1983年の分布図を作成
- 研究範囲に該当する建造物を写真撮影、資料の収集などの現地調査。
- 現地での調査をもとに現在（2023年）の分布図作成
- 1983年と2023年の分布図をもとに比較・考察

３、三国町概要

現在の福井県は南半分の若狭、北半分の越前の二国からんるが、三国町は越前国に属し、その北方、加賀国に隣接する坂井郡の西部に位置している。西と北は日本海に面し、南は福井市、東は坂井町、芦原町に接しており、東西約7.5km、南北約11kmがその町域となっている。　三国町は北前船の寄港地として栄えており、鉄道による近代的物資輸送手段の確立する以前の明治前半期に上方（大阪）と蝦夷地（北海道）を結ぶ北前航路が盛んになっていており、明治10年代が三国町の最盛期といわれている。

坂井郡に属する丸岡町・春江町・坂井町と合併して坂井市が発足。同日に三国町廃止。

４、研究結果

研究結果を凡例別に数値でまとめたものが表１－表３である。

構造	木造	非木造
A60棟	47	13
B141棟	121	20
C142棟	131	11
D113棟	95	18
E215棟	177	38
F221棟	198	23
G73棟	57	16
H104棟	96	8

表１研究結果構造

用途	住宅	店舗	倉庫またはガレージ
A60棟	50	5	5
B141棟	107	18	16
C142棟	117	12	13
D113棟	71	26	16
E215棟	145	50	20
F221棟	138	63	20
G73棟	41	22	10
H104棟	71	25	8

表２研究結果用途

屋根類型	平入	妻入	かぐら建て	前下屋	寄棟	陸	片流れ
A60棟	16	20	0	0	15	7	2
B141棟	53	36	1	2	23	21	5
C142棟	59	42	4	0	20	16	1
D113棟	48	23	5	0	15	17	5
E215棟	86	44	5	0	39	29	12
F221棟	76	59	13	0	44	21	8
G73棟	23	18	4	0	9	15	4
H104棟	42	20	5	0	21	15	1

表３　研究結果　屋根型類型

調査結果をもとに分布図におこしたものが図１－４である。



図１　2023年　構造別分布図

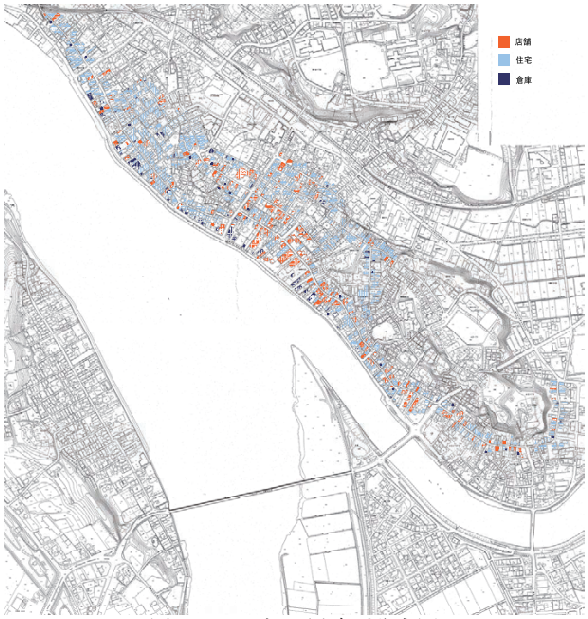


図２　2023 年　用途別分布図



図３　2023 年　屋根型類型別分布図①

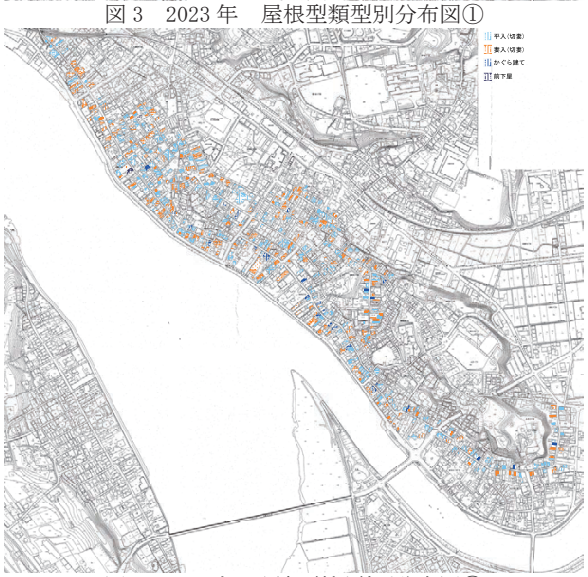


図４　2023 年　屋根型類型別分布図②

5、結論

１）構造の観点

・木造から非木造（鉄骨造または鉄筋コンクリート造）への建て替わりが 1983 年より増加している。

2）用途の観点

・店舗が閉業し、住宅へ変化している。
・九頭竜川沿いに企業の建造物が増加している。
・倉庫やガレージが増加している。

３）屋根形類型の観点

・かぐら建て、前下屋が減少。
・寄棟・片流れ・陸が新しくその数が多い。

４）全体を通して

D・F の地域が新しく建造されたものが多く、また町家が保存され共存している。D・F 以外の地域になると、住宅が多くなり、古い建物が大部分を占めるようになる。全体的に店舗・倉庫を用途としたものは九頭竜川沿いに集中している。

その要因として考えられるのは、福井県道 119 号三国停車場線と福井県道７号三国東尋坊芦原線の２つの道路である。

第１章第３節の三国町の現状でも記したように令和になり、復興の活動が始まっていることも相まって 1983 年の 40 年間で町並が変化してきていると考える。また三国町は鉄道の開通で三国湊が衰退し、交通機関の変化によって町が大きく変化してきた。現代においては福井県では電車の利用率は低く、移動手段は主に自動車になっている。鉄道から自動車に変わり、それに合わして町が変化しつつあるのではと推測する。三国町ではどの時代でも交通機関の動きに町が左右されてきたことが今回の調査でわかった。

６）参考文献

「三国町国町の民家と町並 - 三国町民家調査・町並調査報告書」、三国町教育委員会、1983
「三国町史」、三国町史編纂委員会、1964
「三国町百年史」、三国町、1989
「北陸地方の廻船ルート沿いの町家に関する研究 - 軒先廻りと屋根の形状比較」日本建築学会北陸支部研究報告集第 65 号、川上陸、小林勉、棒田恵、西村伸也、宮田桂、2022
「三国町町家の外観特性に関する研究 - 屋根形状、軒先廻り、下屋に着目して -」、日本建築学会北陸支部研究報告集第 65 号、川上陸、小林勉、棒田恵、西村伸也、宮田桂、2022
「かぐら建て町屋とその特色について (越前三国の町屋その１」、日本建築学会大会学術講演梗概集 (北陸)、福井宇洋、1974
「近世地方都市における町並の形成 - 越前三国湊の町家と都市構造 -」、玉井哲雄、1984
「旧梅谷家住宅と平野家絵図について - 三国の町家の研究 (1)-」、日本建築学会北陸支部研究報告集第 47 号、国京克巳、2004
「旧梅谷家住宅と平野家普請記録について　その 1 - 三国の町家の研究 (2)-」、日本建築学会北陸支部研究報告集第 48 号、国京克巳、2005
「旧梅谷家住宅と平野家普請記録について　その 2- 三国の町家の研究 (3)」、日本建築学会北陸支部研究報告集第 48 号、国京克巳、2005
「旧梅谷家住宅の変遷について - 三国の町家の研究 (4)-」、日本建築学会北陸支部研究報告第 49 号、国京克巳、2006
「旧梅谷家住宅の基礎について - 三国の町家の研究 -」、日本建築学会北陸支部研究報告集第 49 号、国京克巳、2005

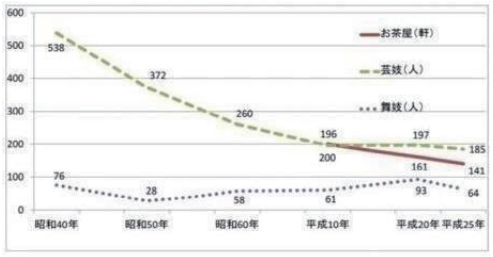
京都花街の課題
–祇園甲部について–

学籍番号　K20262
名　　前　小出大聖

1 章. はじめに

京都、日本の歴史と文化が息づく場所であり、その中でも特に舞妓や芸者の文化が色濃く残る花街と、伝統的な町屋である京町家は、京都のアイデンティティを形成し、観光資源として積極的な活用が図られている。

しかし、京都花街は後継者不足の課題に直面している。最多の昭和 3 年（1928 年）には約 2000 人いた芸妓が、芸妓は約 200 人前後、舞妓は約80 人にまで減少している。京都以外でも、娯楽の多様化や接待の減少など社会環境の変化により、「お座敷」の機会が減少したため、芸妓文化の衰退傾向は現在でも続く課題である。東京や大阪、地方都市でも減少し、日本の芸妓文化が問題となっている。



花街のお茶屋件数・芸舞妓の推移

2 章. 研究方法

京都花街の祇園甲部は、江戸・寛永年間から八坂神社の門前で茶屋街として栄えた。その後、明治　14（1881）年、当時の京都府知事により、祇園町が2つに区分され、新しく祇園甲部としてスタートした。京都市東山区の東は東大路通、西が鴨川、南北は建仁寺から新橋通に囲まれた、重要伝統的建造物群保存地区の祇園白川地区を含む京都で最も大きな花街である。お茶屋、料亭などの伝統建築と石畳みの格調高いたたずまいが特徴である。

本研究では、京都花街の祇園甲部へ訪れ、京町家の空き家を調査し、芸妓の後継者不足に対する提案を行う。

3 章. 京都花街の祇園甲部の状況

京都花街は、歴史ある芸妓や舞妓が所属し、芸舞妓の存在が保たれている。花街特有の舞踊やお座敷遊び、言葉遣いなど日本の伝統的な芸能を継承しつつ、江戸時代初期の頃から姿形を変え、現代の時代に合わせた文化やスタイルを取り入れている。

また、観光客や地域住民にとって魅力的な場所である。都をどりの公演や体験プログラムを提供しており、祇園甲部を訪れる人々に本格的な京都の文化を肌で感じれるような機会を提供している。

具体例、

- 祇園甲部歌舞練場の改修工事
- 親子体験教室
- 海外イベントの参加
- CM　をはじめとするメディアに出演
- 子ども取材体験
- ホームページや Instagram の SNS を利用した発信




花街親子体験

4 章. 選定敷地

所在地　：京都府京都市東山区祇園町南側 524ー7
竣工　：1960 年 1 月
敷地面積：53．2 ㎡
建築構造：木造





２階内観



外観

5 章. 課題解決、提案

後継者不足の解決策としては、花街のイメージを若者に向けてアップデートすることが重要である。京都花街の伝統的な要素を継承しつつも、現代の若者にも魅力的な場所としてアピールし、興味を持ってもらう必要がある。例えば、京都花街でのイベントや新たな取り組みを開催し、若者たちに芸妓や舞妓の魅力を体験してもらう機会を提供することが考えられる。

また、京都花街の経済的な厳しさに対しても対策を講じる必要がある。芸妓や舞妓の後継者の修行期間中に十分な報酬を保証する制度を導入することで、若者たちが花街の修行に取り組みやすくなるだろう。また、花街の経営者側も、後継者の育成に積極的に取り組むための支援策を講じることが重要である。例えば、後継者の教育や研修の費用を一部負担する制度を導入することや現在も取り組まれていることだが、既に行われている例としては、クラウドファンティングなどが考えられる。

芸妓や舞妓の後継者問題や文化を継承するために、現在空き家である、京都府京都市東山区祇園町南側 524―7 にある京町家を、舞妓さんがスタッフとして運営するカフェとして提案する。

お稽古の途中や白塗り前の舞妓さんがスタッフとしていることで、これまで一見さんお断りや敷居の高さが要因で興味があっても行動出来なかった若者や観光で訪れた観光客が「ふらっと」今までよりも入りやすいため、京都花街の文化に触れる機会が設けられる。この提案をする事で、この場所は花街のメイン街より少し離れているため、カフェに訪れたお客さんが祇園甲部へ祇園甲部に訪れたお客さんがカフェへと人の回遊性が生まれることも期待される。また、スタッフが舞妓さんなので質問やカフェの利点を活かし、 SNS 利用を誘発することができる。



平面図

6 章. まとめ

提案された課題への取り組みの実施によって、京都花街の祇園後部の課題解決の助けになる可能性があり、さらには京都の文化と観光業の発展に寄与することが期待される。

提案さまず、SNS マーケティングにより観光客の増加が期待される。これにより、京都経済の活性化や次世代の舞妓や芸者が期待される。また、伝統文化の継承により花街が受け継がれ、それを求める観光客の満足度も向上することが考えられる。さらに、地域住民との協力により信頼関係も向上し、地域に貢献することも考えられる。

7 章. 参考文献

京都花街オフィシャルサイト. https://www.ochiyaichiya.com/plan_cancel/student/

京の一押し https://www.arukumachikyoto.jp/m/static.php?page=ichioshi/kagai/index

産経新聞　https://www.sankei.com

「花街らしさ」の基盤としての土地所有 松田 有紀子

おもてなし産業における若手育成に関する地域比較研究 西尾久美子

日本の古地図 京都幕末維新 講談社 矢守 一彦 大塚 隆

空き家バンク　https://akiya-bank.org

金沢市ひがし茶屋街の「お茶屋文化」と観光客の認識

宇野木麻友 佐藤祐介 田辺星登 林美月 阿部亮吾

よき生を学ぶ

－ワークショップを用いた脱施設化提案－

学籍番号　K20264
名　　前　小林 宥見佳
指導教員　髙田 光雄

Learn Well-being ～ Proposing Deinstitutionalization through workshops ～

Student Number　K20264
Name　KOBAYASHI Yumika
Supervisor　TAKADA Mitsuo

1. 背景

1-1 問題

現在の日本は医学・医療の発展などにより、平均寿命が延びている。これにより、老老介護、高齢者・障がい者に対する介護ニーズの増大、福祉施設の人材不足などの問題が生まれている。また、都市部の高齢者・障がい者の中には、施設に入所したくても受け入れ先が見つからない介護難民も増えている。

一方、総務省「労働力調査」、内閣府「平成 26 年度高齢者の日常生活に関する意識調査」より、年々 65 歳以上の就労者の割合は増えていることから、働けるうちはいつまでも働きたいと考える人が増えていることがわかる。これらより、高齢者は、働くことでこれまでと変わりない生活を維持し、社会に役立つ生きがいを感る人が多いと考えられる。

また、厚生労働省「障がい者雇用のご案内－共に働くを当たり前に－」より、現在民間企業に雇用されている障がい者の数は 59 万人を越えており、障がい者雇用が進んでいることがわかる。その背景として、障がい者とのコミュニケーションを深める企業側の努力が職場全体の環境改善に結びついたり、障がい者が真摯に働く姿が健常者社員の意欲に繋がり、結果として労働生産性が向上していることなどが挙げられる。

1-2 よき生を学ぶ

よき生（Well-Being）とは、幸福で、精神、肉体、社会的すべてが満たされた状態のことを指す。ペンシルベニア大学のマーティン＝セレグマンは、「ポジティブ感情」「エンゲージメント」「関係性」「意味・意義」「達成感」の 5 つの要素を「パーマ（PARMA）の法則」と提唱し、この要素がウェルビーイングに良い影響を与える事を実証している。

本計画では、単に就労支援施設を配置するのではなく、まちの一部に溶け込むように高齢者、障がい者の居住スペース、美容室や食堂、ギャラリー、地域の子どもたちも集まる公園、地域住民の利用する図書館、畑など、各要素を配置する。そのことにより、地域の子どもたちは机上ではできない様々な学びを実現し、家族以外との関わりが薄れがちな高齢者や障がい者は社会との繋がりの場所を見出すことができる。その結果、さまざまな人と出会うことで自分自身の生き方や価値をみつけることができる場所づくりを目指す。

1-3 脱施設化について

脱施設化とは、1970 年代からヨーロッパや北米などで行われている政策で、高齢者や障がい者を「施設から地域へ」と導く方針である。

建築面のコンセプトとして、高齢者や障がい者が「働く」ことで多様な感情、感覚、経験を重ねる「よき生」を実感できる場所づくりを目指す。ノーマライゼーションの先にあるインクルージョンの考えを建築にとりい入れ、誰もが生きがいを感じながら暮らせるまちとしての建築群を計画する。

2-1 敷地選定

計画敷地は京都府京都市左京区高野泉町、高野市営住宅・山端南市営住宅跡地である。選定敷地から徒歩 10 分圏内に修学院駅、京都市立修学院第二小学校、京都工芸繊維大学、京都市障害者スポーツセンター、スーパーや生活雑貨屋などが多数あり、子どもから大人まで多くの人が行き交う場所というポテンシャルを有しつつも、現在は空地となっており、活用されていない土地となっている。

高齢者福祉施設や障がい者福祉施設は、郊外や山間部などの社会と繋がりにくい敷地に設けれることが多い。本計画敷地は、京都市の中でも市街から遠すぎず近すぎない。そのため、より社会と関わるきっかけになりやすい立地であると考えられる。

また、本計画敷地に対して近隣住民から、図書館や公園、地域の子どもや高齢者が集まる場所として活用してほしいと意見が出ており、単なる福祉施設ではなく、まちとして福祉を開放していく本計画は地域ニーズにも適合性が高いと考えられる。

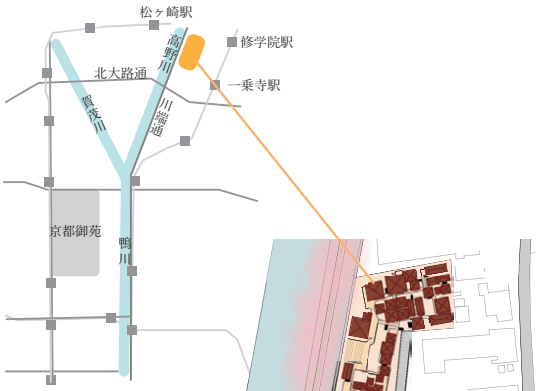


図 1：計画敷地位置



図 2：配置図兼屋根伏図 S=1:2500

所在地　　：京都府京都市左京区高野泉町
主な用途　：住宅　店舗　保育所　等々
敷地面積　：14,330㎡
建築面積　：5,244.89㎡
延床面積　：5,762.27㎡
キーワード：よき生　脱施設　ワークショップ

Location　　:Takanoizumi,Sakyou Ward,Kyoto City,Kyoto Prefecture
Main Use　　: apartment　shop daycare　etc.
Site Area　　: 14,330㎡
Building Floor Area :5,244.89㎡
Total Floor Area : 5,762.27㎡
Keywords　　:well-being deinstitutionalization,workshop

2-2 ワークショップ

計画にあたり、地域住民に参加を求めるワークショップ型で進めていくこととする。(卒業制作では、学生によるロールゲームで実施)

まちの人に使われる施設、まちに愛される居場所として機能していくためには、利用者の声を反映し、みんなでつくりあげた場所であることが大切なのではないかと考える。まず、設計者は住戸パーツや店舗パーツ、その他共用部パーツ、テラスや橋などの、各パーツの設計を行う。その後、施設利用者や、地域住民などが参加するワークショップを開催し、参加者同士、お互いの希望を聞きあい、各々の配置を検討していく。外部空間についても同じように、利用者の声を聞きながら計画していく。

こうしてできあがった配置計画をもとに、設計者は構造計画、細かな内部計画を進めていく。

ワークショップ参加者によって配置された各パーツ、それが集まったユニットの間は、共用部として活用されていく。住戸間は縁側、庭、洗濯物や自転車、植木鉢が溢れ出す私的空間の延長として、椅子や机がいつの間にか置かれた居間的空間、レストランやカフェの間は外部テラスとして、さまざまな居場所や小さなコミュニティがたくさんできていく。

2-3 計画

各住戸パーツ、店舗パーツ、その他共用部のパーツは全てユニット化し、他の敷地でも本計画が行えるようにしている。これらのユニットは人が暮らせる最小寸法で計画することで、どのような計画地でも行うことができる。住戸パーツは単身者用、2 人用、3 人用を計画した。単身者用ユニットにはキッチン、トイレ、バス、シャワーの全てを設置していない。これらの用途が必要になるときには共用ユニットに行く計画となっている。このことにより、単身者の外出を誘発し、他者との出会いが薄れがちな単身者は、自然と会話をする機会が生まれていく。

3 総括

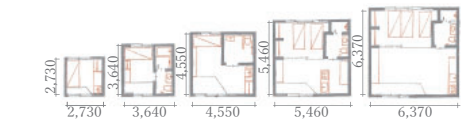
本計画では高齢者・障がい者福祉施設の脱施設化の提案をワークショップを用いて行うことを提案した。社会と福祉施設の間にある厚い境界が本計画により少しでも薄くなること、福祉がまちに、社会に広がることを願っている。

参考文献

1)孫良，イギリスの脱施設化から見られる職員の「脱施設化」プロセス－修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを通して－，神戸学院総合リハビリテーション研究，2007 年
2)大林和子，ゴッフマンの『アサイラム』から見る「今」の施設，鹿児島国際大学大学院学術鶴集，2011 年
3)障がい者雇用のすすめ－障害者雇用に取り組まれる事業主の皆さまへ－，厚生労働省，2021 年



図 3: ワークショップの開催



	1 人用	1 人用	1 人用（車椅子利用者）	2 人用	3 人用
玄関	○	○	○	○	○
ベッド	○	○	○	○	○
収納	○	○	○	○	○
洗面台	○	○	○	○	○
バス		○			
シャワー				○	○
トイレ		○	○	○	○
キッチン				○	○

図 4: 住戸ユニット平面図



図 5: 外観パース

京都の新たなたまり場

学籍番号　K20265
名　　前　古家凌雅
指導教員　杉本直子

New Activities in Kyoto

Student Number　k20265
Name　KOYA Ryoga
Supervisor　SUGIMOTO Naoko

計画背景

「大学のまち」や「学生のまち」といわれている京都であるが若者にとって魅力的な場所が少ない。その為、若者の需要や流行に合わせた場所が必要と考える。そこで若者が集まるような場所を計画する。敷地が下京区にあるため下京区が設定しているスローガンや戦略の2,4,6についても意識して計画する（表1）。このことから京都に新たなたまり場として若者の需要にこえながら京都の魅力も伝えられるというコンセプトで商業施設の計画を行う。

計画目的

京都独自の魅力のある商業施設を計画する。商業施設は多くの人が訪れるため地元の商店など周辺のビジネスにとっても好機になる。また地元の伝統工芸品の販売や体験など、地域の魅力を発信する場としても機能する。そして地元の若者が伝統工芸品に興味を持ってもらう機会を作る。商業施設を計画することで地元の人たちだけではなく観光客の滞在時間や利便性が向上し、地域への経済効果をもたらすことが期待できる。都市の中でも自然を感じることができる場所も必要だと考える。そこでランドスケープ案として広場を緑化し植栽なども配置し京都の風情を感じられるようにする。これらの要素と商業施設を一体化させ、自然との繋がりを感じる環境を計画する。そして京都に新たなたまり場が出来るきっかけになる拠点として機能していくように計画する。

計画敷地

敷地場所は、京都市下京区観喜寺町にある。敷地周辺には、梅小路西駅や梅小路公園、京都水族館などがあり、土日はイベントなども行われており、たくさんの人の様子が伺える。現在の敷地は公園になっており、子供連れの家族が多く見られる。アクセスは梅小路西駅で徒歩約3分、京都駅から徒歩約12分ほどであり、バスも多数利用出来る。駐車場、駐輪場は付近にみられる（図2）。

計画の要点

計画するにあたって、重要な点は以下の通りである

1. 癒しを感じさせるために植栽を配置し緑化し施設の目の前を通るだけで自然を感じることが出来るようにする。敷地周辺に緑が多いためそれに調和させる。
2. 建物と自然を一体化させる。建物をずらして配置させることで建物の表面積を大きくし、建物内外から自然を感じられるようにする。
3. 広場では、水の要素を取り入れリラックス効果や水景の美しさを追加し視覚的な魅力を高める。
4. 周辺の他の施設などの動線を意識して建物の配置、外構を考える。他の施設への動線を考えることによって人を誘導させやすくなり人を取り込むことが出来る。
5. 現在の敷地に路面電車の試乗出来る所があるためそれを活用する。現在土日に運営しており見物人や乗車する人もいるため活用することで商業施設にも人を取り入れることが出来るようにする。

ダイアグラム

〈配置と動線〉

敷地周辺の主な動線から人を引き込むために動線を遮らないように建物を配置する。そこに出入口を設けることで人を取り込見やすくする。人通りが少ない動線からも建物のアプローチを設けることでその道を有効活用できるようにする。路面電車が敷地内にあるのでそれが主な動線から見えるように建物の真ん中をブリッジにして、視線が抜けるようにする（図3）。

〈テナント構成〉

メインターゲットアは大学生及び中高生でサブターゲットはファミリー及び観光客で考えておりメインは、若者だが敷地周辺にはファミリーや観光客もたくさん見られるためそこに向けたテナントも計画する（図4）。

表1.　下京区のスローガンと戦略

スローガン 「住んでよし、働いてよし、訪れてよし、学んでよし」
6つの重点戦略 戦略1　人口減少に立ち向かう地域コミュニティづくり 戦略2　はぐくみ文化の創造・推進 戦略3　誰もがいきいきとくらせるまちづくり 戦略4　環境と調和したくらしが根ずく持続可能なまちづくり 戦略5　危機にしなやかに対し「いのちとくらし」を守るまちづくり 戦略6　京都の元気をけん引するまちづくり



図2.　敷地周辺地図

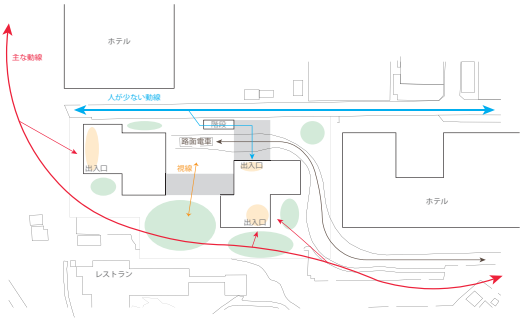


図3.　配置と動線ダイアグラム

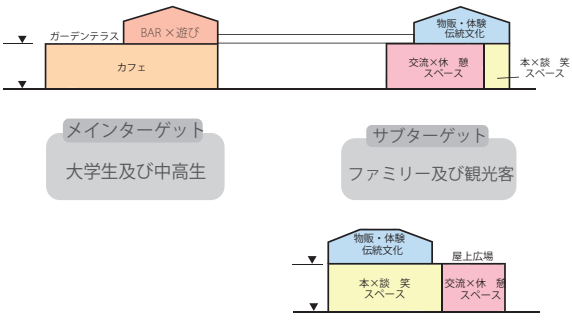


図4.　テナントダイアグラム

所在地：京都市下京区観喜寺町
主な用途：商業施設
敷地面積：8,321.4 ㎡
建築面積：3,032. 7 ㎡
延床面積：4,373.6 ㎡
キーワード：自然、文化体験、地域の特性

Location ：Kankiji-cho,Shimogyo-ku,Kyoto City
Main Use ：Commercial facility
Site Area ：8,321.4 ㎡
Building Floor Area ：3,032.7 ㎡
Total Floor Area ：4,373.6 ㎡
Keywords ：Nature, cultural experience, Regionl characteristics

下京区の伝統文化

下京区の伝統文化として京扇子、京友禅、京漆器を取り入れる。京都は扇子発祥の地とされ、府内を中心に生産される「京扇子」は優雅な美しさと開閉時の滑らかさで知られる。 工程の肝となるのが、本体を形作る竹でできた「骨」の取り扱いである。 のりが乾くまでの２～３分間で、数十本の骨を和紙に手際よく差し込む技術が見栄えの源になっている。京扇子は、実用的でデザインも多様にあり若者にを受け入れられると考える。

京漆器は長い歴史に育まれ､他の産地に見られない｢わび｣｢さび｣といった内面的な深い味わいを備えています。 優雅で洗練されたデザインと、堅牢さに加えて、平面や立体の作りの美しさや、繊細な仕上がりが特徴です。現在では、お皿やお箸など実用的なもので需要はあると考える。

京友禅は、 金糸銀糸などの糸を使った刺繍と金箔や絞りが施され華やかさがあるのが特徴。 絵柄は古典文様を組み合わせたものが多く、内側から外側にかけて薄くする「ぼかし」も京友禅の特徴とされています。現在では、着物などだけではなくTシャツやポーチなどいろいろなアイテムがあり人それぞれの需要に合うと考える。


京扇子


京漆器


京友禅

図５.　下京区の伝統文化

配置図兼１階平面図

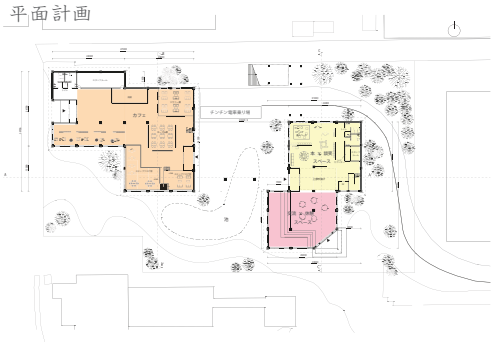






図６.　外観パース

この計画を通して

京都は、日本の歴史と文化が豊かに詰まった都市でありその特徴を尊重しつつ、地域の発展と商業施設の必要性をバランスよく考慮することが重要である。これらを考慮しながら若者の需要や関心を取り入れることでバランスのとれた地域の発展を実現させることが出来ると考えた。このような地域の活性化により観光地としてだけではなく地元の人のたまり場になることが出来ると考える。

建築概要

用途：商業施設
階数：２階　構造：鉄筋コンクリート造
建築面積：3,032.7 ㎡　延べ面積：4,373.6 ㎡

参考文献

青木康　古川順弘 『地形と地理でわかる京都の謎』 宝島社
斎藤源久　斎藤源也 『再開発と街づくり』 株式会社祥平館
山田浩之　赤﨑盛久『京都から考える都市文化政策とまちづくり
伝統と革新の共存』 ミネルヴァ書房
宮脇勝『ランドスケープと都市デザイン風景計画のこれから』朝倉書店
京都市下京区役所ホームページ　2021-08-31(参照 2023-06-21)
https://www.city.kyoto.lg.jp/shimogyo/page/0000288914.html
新建築 2020 5 月号 (参照 2023-06-14)
https://data.shinkenchiku.online/articles/SK_2020_05_086-0

沖島に行こう

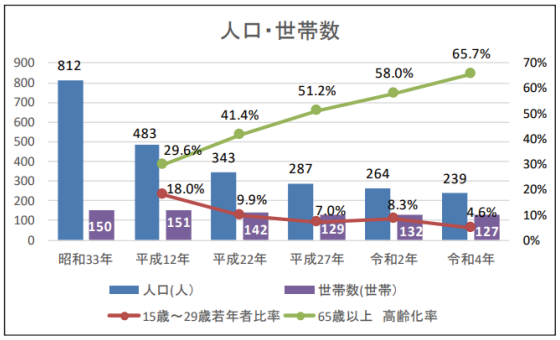
―近江八幡市・離島の存続―

学籍番号　K20266
名　　前　紺藤領太
指導教員　小梶吉隆

Student Number　K20266
Name　KONDO　Ryota
Supervisor　KOKAJI　Yositaka

計画背景（MS ゴシック 9P）

私は近江八幡にある八幡高校出身で沖島は近江八幡にある。地元の人は沖島を猫島だと認知していますが、訪れたことがある人は，けして多くはない。滋賀県は人口減少や少子高齢化の進行により、経済活力の低下問題等が懸念されている。その中には近江八幡市も含まれ、特に沖島は著しく進行が加速している地域と言えるだろう。沖島の島内人口は約230 人で 10 年後には 100 人減ると言われており経済活動は大きく減少する超高齢化社会である。



計画目的

沖島の経済活動は漁業と農業が主軸で、自給自足に近い生活形態だ。島で入手しにくい物は島民皆んなで欲しいものを言い合い、まとめて発注し船で搬送する事が増えてきたことで配送料を抑えているらしい。他に医療関係の問題もある。島内に常駐の医者はおらず病院もない、緊急時の診察を直ぐに行う事ができず、最寄りの病院施設には救急艇を利用する事になり島民の方にお話を聞くと直ぐに診察できる環境が欲しいとのお話を聞きいた。この事から私は島民の経済活動の一助となる場所であり且つ、診療機能を兼ね備えた施設でありさらに、観光客や島民の方との交流の場を増やす事でより沖島の魅力に触れる機会を増やすことで若者を中心とした計画で沖島の活性化に努めたいと考える。



計画敷地

沖島は滋賀県の琵琶湖に浮かぶ唯一の有人島で近江八幡市にある。
島への交通手段は定期便のみで、朝夕の通勤通学時間以外は１～２時間に１本のみで、沖島港～堀切魚港まで所要時間 10 分で移動可能だ。船着場まではバスや車が利用しやすい。計画敷地は沖島小学校前の広場とその前の港とする。

計画要点

計画するにあたて重要な要件は以下の通りである。

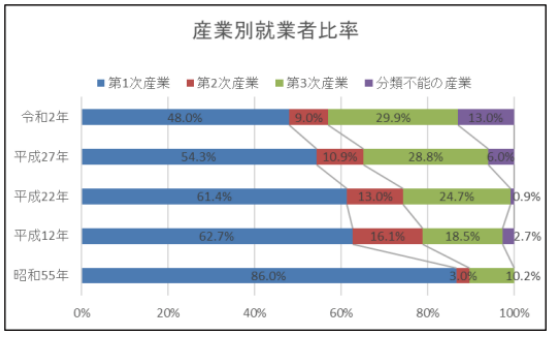
①医療の整備不足
・島内平均年齢 70 歳でありながら病院は無く、急を有する場合は救急艇での搬送ののち救急車に乗り換えるため搬送に多くの時間を要する。

②移動手段の少なさ
・島内には自動車は無く、信号や歩道も無い。主な移動手段はかごのついた三輪車と徒歩だが、三輪車置き場は沖島港に一か所しかなく利便性に欠けている。

③交通手段の悪さ
・定期便での行き来のみで他の交通手段がない。沖島に対して観光業の需要を向上することで定期便の数を増やし供給を確保する。

④経済活動の縮小
・昭和 55 年と令和 2 年の産業分類別就業比率を比べてみると、第 1 次産業が昭和 55 年から令和 2 年で 38 パーセントも減少するなど、沖島の主要産業である漁業従事者の減少が顕著となっている。

⑤観光地としての魅力
・昭和生まれの方には昔懐かしく。平成、令和生まれの方にはちょっと新鮮な気持ちを感じれる。また、「猫島」の愛称もありますが現在は猫は 3 ～ 5 匹程で会えないこともあります。



（国勢調査）

所在地：〒523-0801 滋賀県近江八幡市沖島町３６０
主な用途：商業施設、診察所
敷地面積：8004.56㎡
建築面積：1327.43㎡
延床面積：1327.43㎡
港面積：1887.91 ㎡
キーワード：離島、少子高齢化、若者

Location ： 360 Okishimacho, Omihachiman City, Shiga Prefecture 523-0801
Main Use ： commercial establishment,medical clinic
Site Area ： 8004.56m^2
Building Floor Area ： 1327.43m^2
Total Floor Area ： 1327.43m^2
Keywords ： isolated,Declining brithrate and aging population

主な施設内容

・水上レジャー……カヌー、カヤック、ウェイクサーフィンなどを扱う
・お土産……鮒寿司や、アユの佃煮、紫芋アイス、沖島酒
・受付……沖島の案内や、施設の説明、地域交流の橋渡しを担う
・診療所……島民や、観光客の体調不良やけがなどを診察できる場所
・交流スペース……観光客と島民が交流できる場を新たに設けることで魅力の一つにする
・港……人々の憩いの場や水上レジャーを始める場所として使う
・三輪車レンタル……観光客が島内を移動する際の手段として利用する。
・倉庫……水上レジャーや三輪車レンタルなどで扱う道具を保管する場所

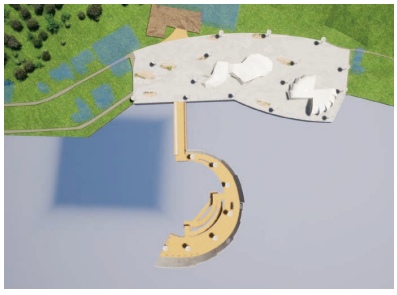
設計趣旨

現在の沖島に訪れる観光客はブラックバス釣りや、登山目的がほとんどで観光客がお金を払うのは船賃や飲食、お土産が主な支出だ。金額でいうと１日で使用する金額は1000～5000円程度で日常生活では味わうことのできない非日常を経験できるお財布に優しい場所となっている。観光客はコロナ過以降回復できておらず、猫の減少から「猫島」としての大きな魅力が失われ、地元の方々の興味が薄れている状況に陥っている。逆に遠方からの観光客は比較的に多く、お話を伺っている際も県外からの観光客が多い印象を受けた。

上記のことから私は、若い人向けと島民の方向けの施設を建てることで島の活気を取り戻すとともに経済活動の面からも支えることができないだろうかと考えた。若者には写真映えする環境と水上レジャーを軸に、島民には健康状態を管理でき且つ新しい交流の場としての魅力で遠方は勿論、地元の方々に興味を持ってもらえる環境を目指す。

敷地写真








敷地３枚・港１枚・パース２枚

参考文献

滋賀県離島振興計画～第２期～
https://www.pref.shiga.lg.jp/file/attachment/5428572.pdf

おきしま倶楽部
https://okishima.org/access/

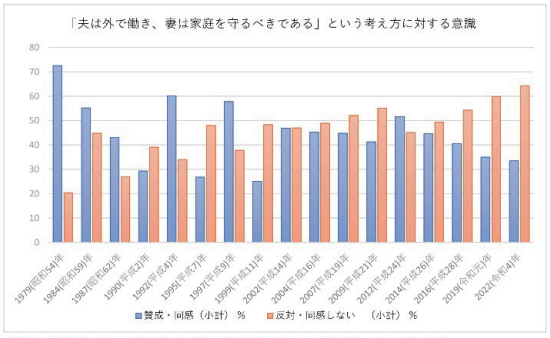
ジェンダーを取り巻く日本社会の変化と台所の研究
―女性の社会進出にみる台所の使われ方の変化―

学籍番号　K20267
名　前　後藤祐那
指導教員　杉本直子

台所　女性史　女性の社会進出
家庭科教科書　須崎文代　内田青藏

1. 背景と目的
1.1 背景
女性の社会進出への注目度が上がる現代日本では、“女性は家にいるもの”というような固定概念が薄まりつつある[1)]（図１）。男女関係なく仕事も家事もすることが浸透してきた今、家事は昔と比べて大きく変化している。家事の中でもとりわけ多くの時間を費やす「台所・キッチン」空間にも変化が起きた。さらに、女性の社会進出や家庭脱出、コロナ禍でステイホームを余儀なくされるなど、暮らしが大きく変わる出来事が起こってきた現代日本では、仕事中心の生活から家庭や日常生活をより充実させたいという考えが広まるなど、生活の在り方そのものを改善させたいという考えが増えてきた。このような中、台所とはどのような意味をもつ空間として存在しているのだろうか。

台所は、家の中で北に追いやられていた時代から変わり、そこを中心として家を設計するぐらいに影響を与える空間へと変化を遂げてきた。女性の立場の変化と台所は大いに関わりがあると考え、本研究での二本柱とし、研究を進める。



平成4年～令和4年について、どちらかといえば賛成、どちらかというと反対を含めて賛成、反対と表記している
調査の年度によって同感するか否か、と質問する場合があるため、同感と賛成、同感しないと反対を同意義とし、グラフを作成している
出典：内閣府　世論調査　男女共同参画社会に関する世論調査/婚人に関する世論調査/女性に関する世論調査
図 1.「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方に対する意識調査

1.2 目的
本研究では、台所がどのような変化を遂げているのか、建築的な要素のハード面と、使い勝手や感情などの要素のソフト面の両方から調査していく。そこに女性という要素を掛け合わせ、現代の台所の現状と家事に対する日本人の考えをひも解いていく。

仕事を持ち、独立している女性が増加するなど、女性には生き方の選択肢が増えている。仕事を持つ分家事に割く時間の比重が変わり、今回の研究対象である台所に求める機能も変化している。①簡略化②安全向上③多様化④台所に対する考えの変化の 4 点を大きく変化が起きたポイントとしてあげ、研究を進めていく。

2. 既往研究
須崎、内田らは日本の住宅の近代化において大きく変化したものの一つに台所を挙げ、その改変について、研究を行っている[2),3)]。高等学校用の文部科学省検定済家庭科教科書に基づき、台所の考え方の変化を明らかにすることで、住まいや住生活の変化に関わる理論の展開の一側面を捉えることができるとしている。台所関連記述を項目ごとに分け、その中でも台所の住まいの中での位置づけや記述内容の動向を細かく分解して追っている。明治期から昭和初期にかけては立働式の導入、衛生と利便の項目を主題とし、戦後では衛生、利便の重要性に加え、項目内の細かい動きを捉えている。

北浦らは女性の社会進出や家族形態の変化が及ぼす家事や食事観の変化を捉え、台所空間に求められる機能とは何かという研究を行っている。[4)]家族の人数や年齢、さらには家庭の女性の就労状況、就労時間の割合によって家事にかける時間の差や、意識の差がみられることにより、台所の使い方に変化がみられることがわかっている。料理にかける時間の縮小もみられ、そこには宅配サービスやファストフードなど気軽に外食を利用できたり、冷凍食品など手軽に食事ができたりする等の日本社会の発展も大きく寄与している。

以上から、台所についてそれ自体の変化、暮らしの面の変化、双方から考えることができる。しかし 2000 年代以降についての研究は行われていない。現代はさらに暮らしの形態に変化が起きていると考えられ、台所という場所にどんな機能を持たせることを重要としているのか、明治期、戦後からどう変化してきているのか、調査する必要があると考える。

3. 研究方法
3.1『家事教科書』及び『家庭科教科書』
須崎、内田らが行った、『家庭科教科書』に記述されている台所に関する内容から、変遷を見るやり方を応用し、暮らし方や台所についての記述の変化を調査する。研究する教科書として、既往研究後に出版、使用された教科書を用いる。公益財団法人教科書研究センター附属教科書図書館の「教科書目録情報データベース」から「学校種類：高等学校」、「使用年度：昭和 58～令和 5 年」、「ワード：家庭、家政、家事」で検索し、調査する。

3.2 新聞
『家庭科教科書』に載っている模範的な暮らし方と比較し、実際の暮らしを知る手掛かりとして、1984 年から 2023 年の新聞に投稿されたコラムを用いる。調査する年代それぞれの当時の人の生の声を聴くことで本当に求められていた暮らしや家事の様子が見えてくると考える。5 つの全国紙の中でも、毎日新聞、読売新聞は読者からの投書や暮らしについてのコラムが多いと考え、調査に使用する。

3.3 キッチンカタログ
人の声、教科書のほかに台所の機能の変化を建築的な面か

Study on Transition of Japanese Society and Kitchen Surrounding Gender　Goto Hirona
-The way of the kitchen as women enters the workforce-

らも調査し、変遷を見る。そこで、キッチンメーカーのカタログを用いて材質や機能の変化、台所の型の変化を調査する。キッチンメーカーの中でも LIXIL（サンウェーブ）・クリナップを取り上げ、台所の変遷を見る。

4. 女性について

4.1 ジェンダー史研究

ジェンダー史研究の先駆けとして登場したのが、女性史研究である。日本の歴史家がジェンダーについて関心を持つのは 1990 年後半のことである。しかし日本史の教科書に女性史が日本の一つの歴史として認識されているかというとそうではない。まだまだ断片的な内容しか歴史として伝えられていないのが現状である[5]。反対に家庭科の教科書では、女性のみが学ぶ教科であるという認識があった時代が長いため、女性史が反映されていると考えられる。

4.2 日本人女性の社会進出について

世界的な女性の差別撤廃への動きに合わせて、日本でも、男女雇用機会均等法が成立した。平成 11 年には男女共同参画社会基本法が施行される。これらの制度を皮切りに女性の社会進出に向けて、より国の重要課題として注目されるものになった。しかし、まだまだ国の取り組みは微力で、苦しい思いをしている人たちは多くいると推測できる。

5. 調査結果

5.1『家事教科書』及び『家庭科教科書』

須崎らの研究と同じように教科書の台所についての内容を「衛生」、「利便」、「新出要素」という項目ごとに表にまとめる。

表 1 . 家庭科教科書一覧



既往研究の結果も本研究で作った表と合わせて記載し、計 86 冊の家庭科教科書の変遷を表に記す。本研究で調べた研究対象は 1981 年から現在までに実数出版から発行された計 42 冊である。1990 年頃から、台所の独立記述が住の章から消え、家事空間というくくりで台所が記載されるようになる。住まいのゾーニングや空間のつながりは 1984 年の時点で確立しつつあるが、1990 年に入り、もう少し明確な空間構成の確立と、空間に必要な機能条件等も確立したためか、1990 年後半からは記載される内容に統一性が現れるようになる。食保存について、1981 年の時点で住の章ではなく食の章に記載されている。それ以前には台所の記述のところに設備で冷蔵庫が書かれていたりした。

5.2 新聞

明治期から現在までの新聞記事を収録する検索サービスを使用する。1984 年 1 月 1 日から 2023 年 12 月 28 日（調査最終日）の期間を選択し、検索キーワードに台所・キッチン・家事・共働きをそれぞれ入力し、調査を行う。毎日新聞からは『女の気持ち』『男の気持ち』、読売新聞からは、台所や家事について投稿されたものをそれぞれ抽出して表に記した。

台所、キッチンなどの呼ばれ方の変化や、台所の役割、使用する人の気持ちが見えてくると同時に、家事や主婦という仕事の価値や意義を考える声が男女問わず多くあった。

5.3 キッチンメーカーカタログ

クリナップについて、カタログのバックナンバーを入手することはできなかったが、最新の機種についてと、今までの歴時からキッチンの変遷を取り上げている。LIXIL について、2011 年からサンウェーブ・INAX の合同のカタログになり、そのあとからは LIXIL の名前でカタログができている。1984 年から 2023 年に至るまでのキッチン設備の変遷を見ることができた。

キッチンを自分らしくデザインできる場所、快適で人の集う場所と定義し、豊富なサイズ展開、カラー展開に加えて調理が楽しく楽になる工夫が開発されていることが分かった。

6. まとめ

女性の社会進出が進むと同時に家庭内の問題が浮上し、社会問題へと発展していることがわかる。21 世紀に入るまでに、家事労働の意義、主婦の意義、働くことの意義など、日本人の固定概念を覆す必要が出てきた。働く女性が増えて初めて家庭内労働の大変さを主婦以外の人が経験し、取り上げられるに至ったと考えられる。労働力の軽減、楽しくしてもらうための社会からのアプローチとして台所では、システムキッチンなどの機器の開発、導入があるのだといえる。規定のものではなく、利用者の使いやすいように全てを組み合わせられる、動作のサポートをしてくれるようなものを使うことで、家庭労働を担う人の助けをしようとしている。

7. 今後の展望

この研究から知見を得た結果、台所事情は奥が深く、調査する内容は多くあると考えている。マンションアパート向けのキッチンについて、家事労働の社会化が進んでいる点から、家事代行サービスについてなど、今の自身の考える台所とは違った意見を導き出せるのではないかと考えている。本研究の後も台所事情を追求していきたいと考えている。

参考資料・参考文献

1)内閣府　世論調査
https://survey.gov-online.go.jp/index.html
2)須崎文代、内田青蔵、安野彰『家事教科書における台所の位置づけと台所関連記述の主題　一明治・大正・昭和初期の検定済高等女学校用家事教科書にみる日本の台所の近代化に関する研究一』生活学論叢 25 巻，23-36p，2014-09-30 日本生活学会
3)須崎文代、　内田青蔵『家事教科書にみる家庭生活の近代化 ： その 2 戦後昭和期の台所変革における機能の多様化について』生活学論叢 14 巻，17-29p，2009
4)北浦かほる、川田菜穂子『女性と家族の変容にみる台所機能の質的変化』日本建築学会近畿支部研究報告集(計画系) 40 巻，33-36p，2000-05-25　日本建築学会
5)『歴史を読み替える　ジェンダーから見た日本史』久留島典子　長野ひろ子　長志珠絵　2015 年　大月書店
・『今　和次郎　その考現学　modernologio』川添　登　2004 年　ちくま学芸文庫
・『現代住宅研究の変遷と展望』財団法人 住宅総合研究財団 2009 年　丸善株式会社

ジェンダーを取り巻く日本社会の変化と台所の研究
―女性の社会進出にみる台所の使われ方の変化―

後藤祐那

自然を繋ぐ

学籍番号　K20268
名　　前　齊藤晴
指導教員　山内貴博

Connected Nature

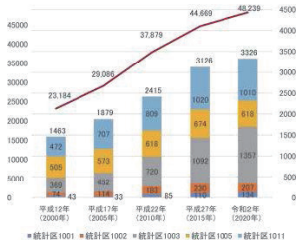
Student Number　K20268
Name　SAITO Haru
Supervisor　YAMAUTHI Takahiro



1. 計画背景と目的

1-1. 計画背景
　本計画の敷地である北海道札幌市では、1982 年より市中心部を緑豊かなものに変えようと、「札幌みどりの基本計画」を掲げ、緑化を推進してきた。さらに現在では、冬季オリンピック開催時に建てられた多くの建物が建て替えの時期を迎えており、街の転換期に差し掛かっている。さらに近年では、札幌市中心部の常在人口、昼間人口ともに増加傾向にあり、コロナウィルスの流行も相まって、オープンスペースの需要が高まっている。これらの問題点を解決していくために本計画を提案する。



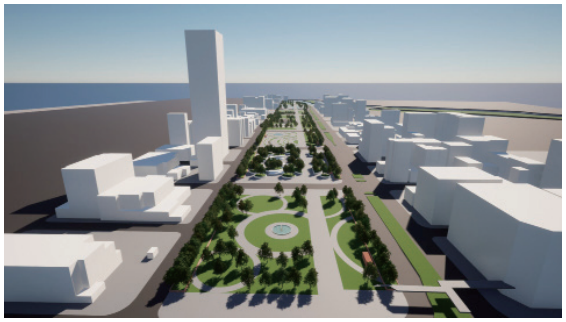




1-2. 札幌市の取り組み
　上記にある通り、札幌市では緑豊かな街作りを行うために多くのことを行っている。現在ある特徴的な樹木や学術的価値の高い樹木を「保存樹」「保存樹木」に指定し保護活動や道端の緑化、また、民有地の緑化を促すために「さっぽろ都心みどりのまちづくり助成制度」を運用し、助成金を出すことで緑化の促進を行うことなど様々な観点から緑化を目指いている。

2. 選定敷地

2-1. 敷地概要
　本計画の敷地は、北海道札幌市の中心部、JR 札幌駅から南東方面に位置する場所であり、「テレビ塔」や「さっぽろ雪まつり」で有名な大通公園と石狩川へと続く豊平川の間に位置する。この地域は住宅区と商業区のどちらにも隣接し、昼夜問わず人の往来のある地域である。また、大通公園では季節ごとにイベントが開催され、多くの観光客が訪れる。





所在地：北海道札幌市中央区大通東１丁目 1-12
主な用途：公園
敷地面積：80,784㎡
建築面積：***㎡
延床面積：***㎡
キーワード：自然、コミュニケーション

Location ： 1-12,Odorihigashi1-tyoume,Tyuo-ku,Sapporo-si,Hokkaido
Main Use ： Park
Site Area ： 80,784㎡
Building Floor Area ： ***㎡
Total Floor Area ： ***㎡
Keywords ： Nature,Communication

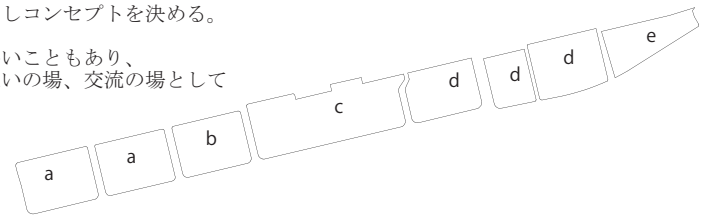
2-2. 歴史
　札幌の成り立ちは、1869 年（明治 2）札幌に開拓使が設置され、北海道開拓の拠点として発展していったことが始まりであった。その中で大通公園は、街の計画を行う中で、公民街と市民街を隔てる防火線の役割を持たせた防火通がもととなった。その後、時代とともに様々な使われ方をしていき、1950 年ころから現在の公園の形を形成していった。大通公園には開拓の歴史を伝える資料館もある。札幌都心部は、京都の街づくりを参考としており、条坊制を用いている。また、元北海道庁舎の赤レンガは今もなお保存されており、その庭や広場は現在も市民が利用することができる。


札幌市史「政治行政編」より

3. 計画概要

3-1. 設計趣旨
　現状の様々な問題の中で、今回の設計を通して解決していくことは、自然（みどり）の追加、自然の連続性の想像、子供・青年の遊び場の確保、新たなオープンスペースによる地域コミュニティの増加である。そのため、長い敷地を生かし、その地域特性に合った空間を生み出すことが本計画の主旨である。

3-2. 計画内容
敷地の周囲の環境や特性に応じて、ブロック分けしコンセプトを決める。



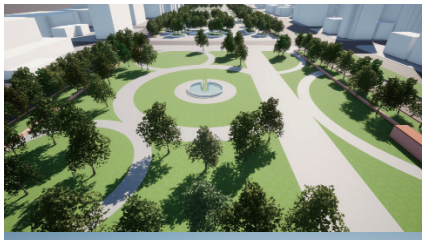
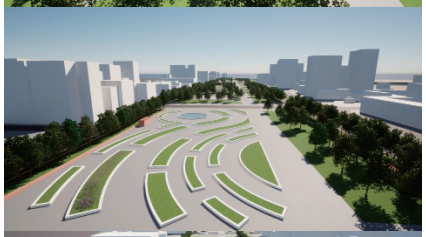
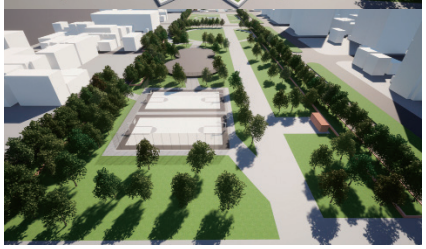
・a ブロックは「憩い」。近隣にオフィスビルが多いこともあり、新たなオープンスペースとし、市民や会社員に憩いの場、交流の場として提供できるよう計画した。

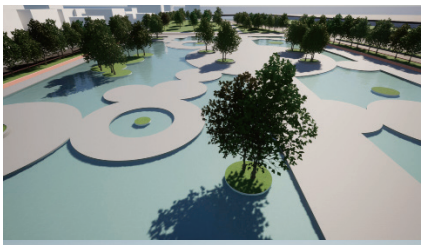
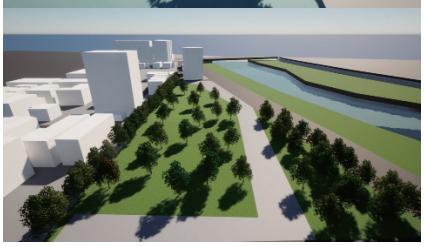
・b ブロックは「癒し」。癒しの場とし札幌の花であるライラックなどを中心とし、様々な花を植え、各季節ごとに花畑を楽しむことができるよう計画した。

・c ブロックは、「活き」の場とし、近隣で問題になっている。子供の遊び場不足やスケートボードの危険を取り除くよう計画した。

・d ブロック「せせらぎ」では、川から近いということもあり水を感じることできるよう水路や水遊びのできる小川を作り、リラックスして活動を行えるような空間を計画した。

・e ブロック「耽り」の場では、丘に登り、自然の中で落ち着くことのできる空間を計画した。

a

b

c


d

e


高齢者が心身共に健康に暮らせる集合住宅の設計

K20271　笹川泰平＊
指導教員　井上晋一＊＊

＊　京都美術工芸大学　建築学科
＊＊　京都美術工芸大学 教授・工博(設計指導)

Elderly people can live in good physical and mental health
Housing design

K20271 Taihei Sasagawa*
Advisor Shinichi Inoue**

* Kyoto College of Art, Department of Architecture
**Professor, Doctor of Engineering (Design Guidance), Kyoto College of Art

1. 孤独死 ・ 引きこもり問題

昨今高齢者が孤独死をしたり引きこもって社会とのつながりを持たず部屋で一人死んでいくという事例が多くなっている。少子高齢化を背景に日本の高齢者人口の割合は増加の一途をたどっており、２０７０年には日本の総人口が９０００万人を割り込み、高齢者の割合は３９％になることが予想されているため看過できない問題である。
引きこもり状態になると運動機会が大きく減るため、筋肉量が低下することでフレイル状態になってしまう。フレイル状態とは加齢に伴って心身の衰えた状態を意味し、フレイルになってしまうと引きこもる確率が高くなると言われている。
特に、高齢者の方のフレイルは生活の質を大きく落としてしまうだけでなく、認知症などの合併症なども招く恐れがあるので非常に危険である。



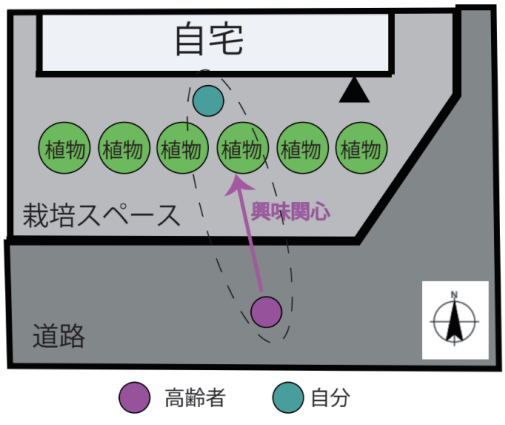
40歳以上の引きこもりの割合
引用：https://www.cocofump.co.jp/articles/kaigo/268/



フレイルチェック項目
引用：https://kaigo.homes.co.jp/manual/healthcare/flail/

2. 高齢者と家庭菜園

今年の 4 月から 10 月まで自宅前でプランターを使ってナスやピーマン、オクラなどの夏野菜を栽培していた。植物を栽培し収穫を得るには毎日の水やりや剪定、誘引、害虫駆除、施肥などを植物の状態を観察しながら継続的に行う必要があり、外に出る機会が増えたのを実感した。野菜の苗や培養土や支柱、土壌改良材などの必要なものを買うために近くのホームセンターや園芸ショップにもよく行くようになった。自宅前の栽培スペース東側から見た自宅前の栽培スペース 西側から見た写真普段は全く接点のない近所の高齢者が家の前を通ったときに自分の育てている植物に関して話しかけてきたり、話しかけずとも通りすがりに植物をまじまじと見ていたりすることがよくあった。高齢者がフレイルや引きこもりを引き起こさな為には一歩でも家の外に出させ、人との関わりを持たせることが重要である。植物の栽培を通して他の居住者と栽培している植物に関することを話すことができれば 近隣住民とつながることができるのではないかと考え、それを最大限発揮できる建築空間を作ることが重要であると考えた。



人と植物の関係

3. 選定敷地

住所 ：大阪府高槻市芥川町 3 丁目 18-1
敷地面積 ： 2561 m2
主な用途 ： 集合住宅
住戸数：30 戸
一住戸当たりの床面積：50 ㎡
建築面積 ： 1548m2
延床面積 ：1500m2
キーワード ： 高齢者・引きこもり・孤独死

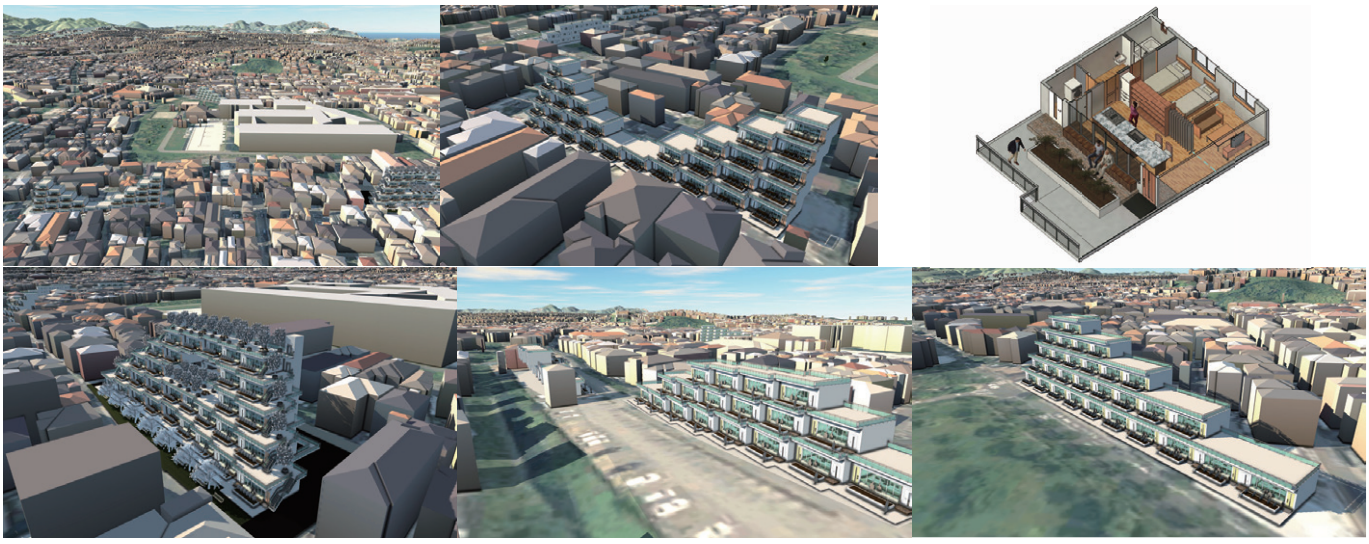
Address: 3-18-1 Akutagawa-cho, Takatsuki City, Osaka Prefecture
Site area: 2561 m2
Main use: Apartment housing
Number of housing units: 30 units
Floor area per dwelling unit: 50 ㎡
Building area: 1548m2
Total floor area: 1500m2
Keywords: elderly, withdrawal, lonely death

4. 選定理由

・前面道路が東西方向に走っているので日当たりがよく植物の生育に適している。
・駅や商業施設が近くにあるので高齢者が買い物に行くときに負担が少ない。



5. 外観パース



6. 参考文献

・平成 12 年版厚生白書
https://www.mhlw.go.jp/www1/wp/wp00_4/chapt-a2.html
・BIG
https://big.dk/projects/kaktus-towers-10789
・公益財団法人長寿科学振興財団高齢者が安心して暮らせる環境の整備について
https://www.tyojyu.or.jp/net/kenkou-tyoju/kenkochoju-torikumi/koreisha-kankyo-seibi.html
・decor.design
https://decor.design/ja/iqon%E3%83%93%E3%83%AB-big-%E3%82%A2%E3%83%BC%E3%83%81%E3%83%87%E3%82%A4%E3%83%AA%E3%83%BC/
・es-inc
https://www.es-inc.jp/graphs/2022/grh_id012279.html

ほしのこども

星と子どもをつなぐ建築

学籍番号　K20272
名　　前　佐藤圭佑
指導教員　生川教授

A child of the stars

Architecture connecting stars and children

Student Number　K20272
Name　Sato Keisuke
Supervisor　Professor Narukwa

１　はじめに

日本には様々な理由から家族と共に暮らすことのできない子ども達がいる。原因は様々あるが、その多くが虐待経験のある子どもたちである。幼少期の辛い経験から社会に馴染むことが難しく、引きこもりの原因にもなっている。また 家庭復帰した子ども達の中に、再入所する子供たちもいる。これらを改善するためには、児童養護施設だけでなく、中間施設である一時保護所のより善い環境作りが大切であると考え、星空が広がる自然の中で、心身のケアを行いのびのびと子育てができる場を作りたいという思いから、本制作では、星と子どもを繋ぐ建築を計画する。



図１：美星天文台の様子

２児童養護施設の現状

２－１　児童虐待と児童養護施設について

近年問題となっている児童虐待だが、表１に示すように右肩上がりと、年々児童虐待の数が増え続けていることが分かる。また、児童養護施設に入所している子供たちの約６割以上が、児童虐待を理由に施設に入所している。よって、虐待の数が増えることに伴い、児童養護施設に入所する子供たちも、年々増え続けていることがわかる。（図２）

児童養護施設は全国で約600箇所あり、大きくわけて３つのグループに分類される。特に大舎制はひとつの施設に20人以上の子供が入所している施設で、全体の約２割に相当しており、小舎制はひとつの施設に12人以下の子供たちが入所していて、全体の４割を占めている。（図３）

また最近では複合施設といった、大舎制と小舎制のどちらも合わせ持った施設や６人程度のグループホームを始める複合型施設というものも増えてきており、子供たちのプライバシーに配慮した児童養護施設に進化している傾向にある

２－２　一時保護所の現状

施設に入所するまでの多くの流れとして、家庭内で問題が起こり、一時保護所に預けられ、施設に入所するという大きくわけて３つの工程がある。

一時保護所とは、非行少年、被虐待児、児童養護施設や里親家庭に入る前の子どもが「一時的」に入る施設である。虐待や貧困など、家庭内の事情でここにやってくる子どもは、今では７割を超える。全国に144カ所あり、子ども達の安全を迅速に確保し適切な保護を行う、又は児童の心身の状況、その置かれている環境その他の状況を把握する。

一時保護所では、短くて３日、長くて２年以上もの期間施設で共同生活を行う。しかし、施設で生活する間、基本的に学校には通えなかったり、大部屋などで生活することからプライベートがなかったりなど、課題を多く抱えている。（図４）

２－２　一時保護所が抱える課題

近年、児童養護施設は小舎制といった、施設の小規模化を行っている。施設を小規模化することによって、子供一人一人に寄り添う時間が出来たり、個室を持ちプライベートな空間を作ったり、様々な場面で改善されつつある。しかし、一時保護所は児童養護施設ほど改善はされておらず、拘束された生活を送っている現状にある。

２－４　本制作で目指す一時保護所について

一時保護所に入る約６割の子供たちは家庭復帰することなく、里親や施設に入所している。また、残りの家庭復帰した約４割の子供たちの中に、問題が完全に解決しておらず再入所する子供も一定数存在している。親と子どもどちらにも目を向け、より良い家庭復帰を目的とする。家庭復帰が困難とされる子どもたちに対しても、学びの場や一般の人たちとの交流を図ることで、社会に馴染む手助けを行う。（図５）

３　敷地選定

３－１　選定理由

本制作で一時保護所の条件として①都市部から一定隔離されていること、②豊かな自然に囲まれていること、③自分自身を見つめ直す時間がつくれること、④社会と段階的な接点を持つことができることを考えた。

岡山県井原市にある美星町は山や川など自然に囲まれた土地であり、標高300~400mある高原地帯である。標高も高く郊外に位置することから、星を観測する最適な場所である。美星天文台付近にある森のような余白空間に自然と調和できるような施設を計画しようと考えている。また、池も近くにあることから、水、木、星など自然に直に触れることができ子供達にとっても良い育ちの場となると考えた。（図６）



図６：敷地

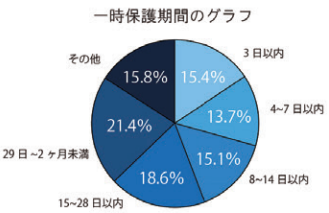


図４：一時保護期間のデータ

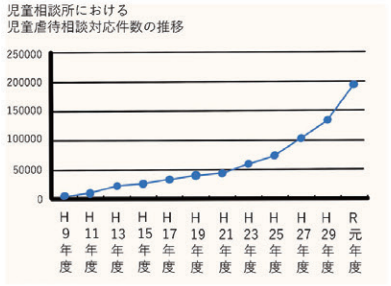


図２：児童虐待件数の推移

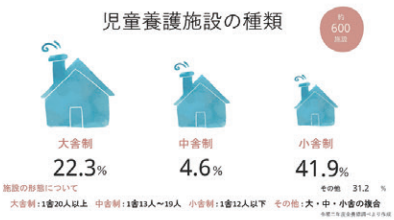


図３：児童養護施設の種類について

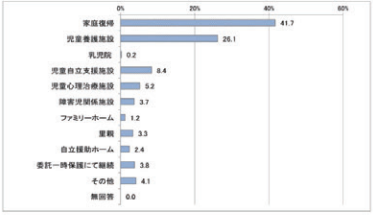


図５：一時保護所退所後の推移

所在地：岡山県井原市美星町大倉
主な用途：一時保護所
敷地面積：未定㎡
建築面積：未定
延床面積：未定
キーワード：こども・児童虐待・星

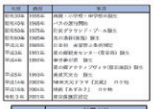
Location ： Okura,Bisei Town,Ibara City,Okayama
Main Use ： Children facility
Site Area ：
Building Floor Area ：
Total Floor Area ：
Keywords ： Child Abusen,Children,Star

３－２　美星町について

岡山県井原市にある美星町は、名前に美しい星とあるように、古くから星にまつわる逸話が多く残された土地であり、星空に対して様々な取り組みをしてきた。名前の由来は、町内に流れる星田川と美山川がともに農地をうるおし素晴らしい景観を作っていること、星にまつわる伝説が多く残されていることなどから「美星」とされた。また、美星町は日本三選星名所に選ばれていて、天文学者が日本で星が綺麗に見える場所１つに選ばれている。そして、1989 年 11 月に国内で初めて光害防止条例を制定し、星空保護の先駆的役割を長年リードしてきた。（表１）

光害防止条例制定から 30 周年を経て、国際ダークスカイ協会が美星町を星空保護区として、日本で３番目の星空保護区に認定した。星空保護区では、町や市といった自治体単位が認定対象となるのはアジア初のとなり、注目を浴びた。しかし、表２では、コロナ禍以降天文台の利用者数は年々減少傾向にあることが分かる。

表１：美星町年表



年次	利用者数		
	星際(人)	常際(人)	合計(人)
平成5年		4076	4076
平成6年		6863	6863
平成7年		6336	6336
平成8年		8313	8313
平成9年		7674	7674
平成10年		9539	9539
平成11年		7604	7604
平成12年		7558	7558
平成13年		10568	10568
平成14年		9390	9390
平成15年		12150	12150
平成16年		7125	7125
平成17年		8068	8068
平成18年		7191	7191
平成19年		9059	9059
平成20年		8185	8185
平成21年		8409	8409
平成22年		9385	9385
平成23年	2688	8409	11097
平成24年	2687	9810	12497
平成25年	2513	12392	13905
平成26年	2560	10532	13092
平成27年	3613	13293	16906
平成28年	3783	13021	16804
平成29年	3019	13616	16635
平成30年	2688	14200	16888
令和元年	2685	14171	16856
令和2年	2480	7957	10437
令和3年	2760	5074	7834



図７：配置図兼屋根伏図

４　図面

表２：美星天文台利用者数



図８：こどもの家　一階平面図

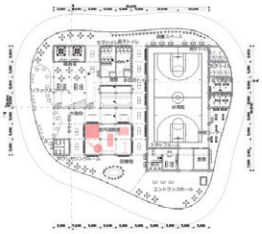


図１１：こどもの学校　一階平面図



図１４：こどものレストラン　一階平面

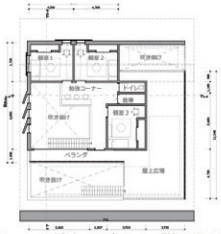


図９：こどもの家　二階平面図

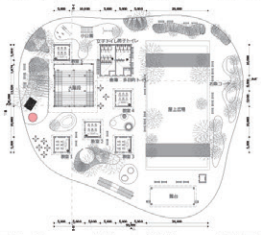


図１２：こどもの学校　二階平面図

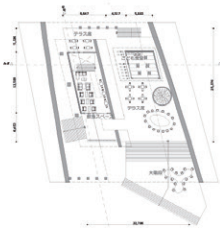


図１５：こどものレストラン　二階平面



図１０：こどもの家　断面図・立面図



図１３：こどもの学校　断面図・立面図

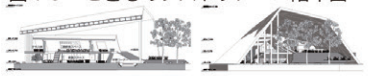


図１６：こどものレストラン　断面図・立面

５　計画概要

コンセプトとして、自然の中に溶け込んだ、ひとつの町のような空間を想定して設計していく。今までの一時保護所では施設の中に子供の生活空間があったり、施設と生活空間は離れつつも町とは切り離された空間にあり、「施設の子ども」という認識が強く残る建築だと感じた。従来の一時保護所とは違う、境界を作らない空間を提案する。計画として、一時保護所の中で学びの場となる「こどもの学校」、子供達の生活する場である「こどもの家」、子供と一般の客が利用する「こどものレストラン」の３つを計画する。加えて、天文台の付近ということもあり、光の漏れを考慮しながら星に影響が出ない建築を設計する。

６　参考文献

櫛原真也 ,『児童養護施設で暮らすということ 子供たちと紡ぐ物 語』, 日本評論社 ,2021 年 ,192P
遠藤久夫 / 野田正人 / 藤間公太 ,『児童相談所の役割と課題』, 東 京大学出版会 ,2020 年 ,216P
岡山県美星町 ,『美星町制施行 50 周年記念誌 星霜』, 美星町役場総務課 ,2005 年 ,172p
三輪律江 / 尾木まり ,『まち保育のススメーおさんぽ・多世代交流・地域交流・防災・まちづくりー』,
萌文社 ,2017 年 ,120p
馬場栄一 ,『104 児童福祉施設』, 株式会社建築資料研究社 ,2006 年 ,208p
馬場栄一 ,『76 児童館・児童文化活動施設』, 株式会社建築資料研究社 ,2000 年 ,208p
全国児童養護施設協議会 , 児童養護施設とは , https://www.zenyokyo.gr.jp/about/,(参照 2023/5/29)
岡山県児童養護施設協議会 , https://www.okayokyo.jp,(参照 2023/5/29)
井原市 , 井原市に関する統計データについて ,
https://www.city.ibara.okayama.jp/docs/2021032600028/,(参照 2023/7/5)
厚生労働省 , https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/000987725.pdf,(参照 2023/6/4)
厚生労働省 , https://www.mhlw.go.jp/content/11907000/000735569.pdf,(参照 2023/11/10)

日本における美術館建築の始まり　ー東京府美術館の展示作品を通してー

学籍番号　K20274
名　　前　佐藤未亜
指導教員　江本弘

美術館建築　東京府美術館　永久的記念
常設美術館　不況打開　産業振興

1. はじめに

近年、美術館建築のあり方に関する議論が盛んである。そこで私は、試行錯誤の原点である日本初の美術館建築に遡り、美術品・市民・建築設計の関係性を研究していく。日本で初めて建てられた総合的な美術館は、東京府美術館である。美術館の原点となる東京府美術館で一番初めに開催された展覧会を調査することで、明らかにする。

この研究の先行研究と言うべき中川三千代の研究(2016)では、東京府美術館開館から2年後の1928年に開催された展覧会を再構成し、展示の状況や鑑賞支援の試みを明らかにしている。そして、米崎清実の研究(2004)では、東京府美術館の設立運動と東京府の関係性について言及し、時代背景を明らかにしている。また、斉藤泰嘉の研究(2003)では、断片的にしか語られてこなかった東京府美術館の全体像を提示し、事実関係の整理を行っている。

本研究では、日本の初めての総合的な美術館での展示と建築の関わりを明らかにするために、図録、目録などの一次資料等を用いて展示されていた作品や作家の特定を行い、開館当時の時代背景、設計図面や展覧会当時の会場写真等から、開館当初の展覧会の全体像を追究する。

2. 東京府美術館開館の経緯

2. 1　東京府美術館開館に至る時代背景と運動

東京府美術館建設事業の発端は、1922・大正11年に上野公園で開催された、東京府主催の「平和記念東京博覧会」である。この博覧会では、「欧州大動乱の和平を永遠に記念する」ことと、「本邦の産業を一層振興させる」ことが目的だった。第一次世界大戦の終結に伴い、日本の戦後不況が深刻だったため、この不況打開が平和博開催にかかる期待だった。

東京府によって平和博会場内に美術館建設は計画されていたものの、それは博覧会のための一時的な施設でしかなかった。そこで、平和博開催を翌年に控えた1921・大正10年、当時府会議員で美術団体林間社の代表でもあった小池素康が、平和博事業の「永久的記念」を目的とし、一時的ではなく恒久的な施設を建てることを主張した、「平和記念博覧会開設二際シ永久的記念トシテ美術陳列館ヲ建設スベシ」という建議案を提出した。

しかし、この建議案は時間・財源・敷地の点で実現不可能という反対意見から、今後の府会で可決される見込みは無かった。特に問題だったのが財源であり、一時的な施設を建てる財源はあっても、恒久的な施設を建てられるほどの財源が無かった。その結果を受け小池は、府会の外に目を向け、美術関係各団体代表者の会である「竹之台茶話会」[1]に応援を求めた。竹之台茶話会は臨時総会において小池に賛同し、「永久的美術陳列館」の建議書を決議した。

平和記念博覧会開催に間に合うように恒久的な美術館を建設するには、一年で完成させられるように相当なスピードで動かなければならなかった。しかし、永久的施設建設のためには財源と敷地の問題が解決できない状況が続いた。そんな状況下で、1921・大正10年3月17日に、「常設美術館」と題する記事が時事新報に掲載された。当時、九州の若松から仕事のため上京していた石炭商の佐藤慶太郎は、宿泊していた旅館でこの記事を偶然見つけ、美術館問題に興味を持った。直ちに府庁に電話を入れ、府知事に対して美術館建設費として100万円（現在の約33億円)の寄付を申し出た。この寄付は大きく新聞報道され、平和博の一時的な美術館建設とは別に、新たな美術館の建設運動が始まった。

2. 2　東京府美術館構想

九州の石炭商である佐藤慶太郎の寄付により美術館建設運動は大きく発展することになるが、小池素康ら美術関係者たちと佐藤慶太郎それぞれが描いていた美術館構想は異なるものだった。

佐藤が寄付をするきっかけとなった「常設美術館」と題する記事では、「美術系博物館＝博物館としての美術館」（ミュージアム）の建設を訴えていた。そのため、佐藤の寄付の対象となったのも「美術系博物館＝博物館としての美術館」（ミュージアム）である。だが、佐藤の予想とは異なり、小池ら美術関係者たちが訴えているのは、「美術陳列館」あるいは「美術展覧会場」（ギャラリー）の必要性である。これは、西洋諸国に存在する本来の意味での美術館（美術系博物館）とは別機能の存在である。

日本では、1877・明治10年の第1回内国勧業博覧会に設けられた日本初の「美術館」という名の陳列館（ギャラリー）以来、美術展覧会用の一時的施設を「美術館」と呼んできた経緯がある。よって、美術館建設運動においても、美術館と美術展覧会場の区別が必ずしも明確ではない。

こうした日本固有の歴史を背景とし、佐藤慶太郎の寄付以後は「美術陳列館」と呼ばれていた施設が、「美術館」へと次第に統一されていった。そして、東京府美術館は「東京府美術陳列館」あるいは「東京府美術展覧会場」と呼ばれず、「東京府美術館」という名になった。

2. 3　東京府美術館完成まで

東京府美術館の設計者は、当時早稲田大学教授で東京美術学校講師だった岡田信一郎である。設計については、佐藤慶太郎による100万円寄付の3年前、1918・大正7年に国立美術館建設運動が起こったが、この運動が頓挫し、実現しなかった案を基礎としている。

こうした情勢から、東京府美術館の建物設計は、かつての国立美術館用の設計案から、平面図が長方形の回廊中庭方式を基本案として進んだ。ただし、中庭はあくまでも陳列室なので、屋根のある空間である。その後、上野公園内に美術館敷地を得ることができ、東京府美術館は、1926・大正15年、「上野公園内二本杉原」という場所に開館した。

1　上野公園にあった展覧会場施設である竹之台陳列館の借館団体によって作られた世話人会のことで、1909・明治42年に設立されている。

3. 第一回聖徳太子奉讃美術展覧会

3. 1　展覧会の概要

第１回聖徳太子奉讃美術展覧会は、東京府美術館開館と同時に開催された展覧会で、東京と大阪の２ヶ所で開催されている。東京府美術館では、1926・大正 15 年５月１日から同年６月 10 日まで開催された。大阪での開催場所は、大阪府立商品陳列所で、同年６月 25 日から７月 21 日まで開催された。この展覧会は、日本画、洋画、彫刻、工芸の４部門から構成されており、このうち、洋画のみが公募をせず、出品作品は全て無鑑査作品だった。その他の３部門は､無鑑査作品と公募作品から成っている。また、工芸部門の作品の点数のみ、記録資料によって多少の差異がある。

展覧会出品目録	出品総出品数		1,056 点
	内訳	日本画	248 点
		西洋画	396 点
		彫刻	157 点
		工芸（差異あり）	255 点

東京都公文書館編集「東京都職制沿革」によると、美術館の開館日より少し前の 1926・大正 15 年２月 20 日の時点で、「臨時美術館建築係」という係が東京府内務部営繕課の中に作られていることがわかった。つまり、当時の府庁にも美術館建設担当者は存在していたが、開館記念展などの作品収集・展覧会企画等の仕事を担当する係は見られなかった。これは、東京府美術館の根本方針が、美術団体等への会場提供を行う美術陳列館として建設されたということからすれば当然の事かもしれないが、現代の一般的な建設準備体制とかなり異なっている。従って、東京府美術館の開館記念展が聖徳太子奉讃美術展となった経緯を知るためには、主催者である財団法人聖徳太子奉讃会側から企画の背景を調査すると、開館記念展の主催者である財団法人聖徳太子奉讃会側から見ると、第一回聖徳太子奉讃美術展覧会が東京府美術館の開館記念展となった発端は、1305 という数字にあることがわかる。聖徳太子没後 1305 年にあたる 1926（大正 15）年が、東京府美術館の開館の年でもあるという一致から、この開館記念展は東京府美術館を会場とすることになった。「太子奉讃」を目的としている財団法人聖徳太子奉賛会にとっては、東京府美術館という新しい美術展覧会用の施設を利用できる機会となり、東京府美術館にとっては、美術界の振興を目指しているため、「綜合的美術展覧会」を開館記念展として開催できることは双方にとって都合が良かったことなのだと感じられる。

3. 2　陳列作品の概要と特色

開館したばかりの東京府美術館全体を使って開催されたこの展覧会は、主催者の宣伝文によれば、「日本美術界空前の綜合大展覧会」だった。当時の美術界は対立意識が存在しており、普段は分かれて制作と発表を行っている美術団体が一堂に会する点でも「綜合大展覧会」と言える。

作家は、明治の長老作家から大正の前衛作家までを含む約 1000 人が出品しており、既成の団体の枠にとらわれない総合美術展覧会を開催し、当時の美術界の融和を試みることで日本美術の振興を図ることが、この展覧会の狙いだった。

主階である２階から入って列柱の間を抜けると左右に入場券売り場がある。購入した後に広間へと進む。そこから左へ向かうと日本画室（全 20 室）､右へ向かうと西洋画室（全 12 室）である。階下中央は１階彫刻室（全１室）、同じく１階には工芸室（全７室）、そして売店がある。（図 1）

3. 3　内見会

東京府美術館開館の前日である 1926・大正 15 年４月 30 日に、内見会が開催された。その内見会で、久邇宮邦彦王が館内を巡覧したという記録がある。この記録から、開館記念展である第一回聖徳太子奉讃美術展覧会の展示の様子が、各部門ごとに細かく知ることができた。

4. まとめ

日本における初めての総合的な美術館である東京府美術館に関して、展示と建築の関わりを明らかにするために、図録、目録などの一次資料等を用いて展示されていた作品や作家の特定を行い、開館当時の時代背景の調査、設計図面や展覧会当時の会場案内図等を入手して、開館当初の展覧会の調査を目的として研究を進めた。広い空間を持つ彫刻陳列室について、洋画家の石井柏亭は、「集会や講演会」にも利用できるのではないかと提案している。この提案は、人の活動に新たな価値を創出することを目的としている現代の美術館建築のあり方につながる考え方だと感じた。しかし、この提案は、広すぎる空間で今後展示を行うなかで、課題があったからようにも感じ取れる。

展示空間と市民の関係については、採光の点で大きなつながりを感じた。展示空間に作品を並べ、その作品が際立つような照明方法を採用し、さらにそこで鑑賞する人が心地よく鑑賞できるように、あらゆる方向で検討し、それぞれの要素が充実するように作り上げていた。東京府美術館は日本で一番初めの公設美術館で、様々な課題も生じていたが、設計者だけでなく芸術家、東京府知事など、多くの人の考えによって建設が実現し、日本の美術界を振興することを叶える大きな一歩となったと考える。

【参考文献】

1）中川三千代：「東京府美術館での 1928 年開催『仏蘭西国立リュクサンブール美術館蔵品』の展示」，美術研究学研究，１号４８巻、pp. 289-296、2016 年

2）西原大輔：「コレクション・モダン都市文化　美術館と画廊」，ゆまに書房 pp. 551-566, 2013 年

3）斉藤泰嘉:「佐藤慶太郎伝　東京府美術館を建てた石炭の神様」，石風社 , pp. 162-332, 2008 年

4）米崎清実：「東京府美術館設立運動と東京府」，東京都現代美術館紀要 , pp. 5-14, 2004 年

5）斉藤泰嘉：「東京府美術館史の研究」，筑波大学芸術学系斉藤泰嘉研究室 , pp. 10-146, 2003 年

6）東京文化財研究所：「大正期美術展覧会出品目録」，中央公論美術出版 , pp. 544-553, 2002 年

7）前野まさる：「むかしむかし：なぜ上野にギャラリーがⅢ」，東京都美術館発行『美術館ニュース』No. 306, 1976 年７月

路地空間でつながる住宅

学籍番号　K20275
名　　前　佐藤光姫
指導教員　森重幸子

Houses connected by alley space

Student Number　K20275
Name　　SATO Mitsuki
Supervisor　　MORISHIGE Sachiko

1. 背景と目的

近年、京都市では人口減少が問題となっており、京都市の中でも最も人口減少が激しいのが東山区である。京都市の人口減少の要因の一つとして「若者・子育て世代」が市外に流出しているという点があげられる。東山区は人口減少に伴い、高齢化率や空き家率が高い割合を示しており、放置された空き地や空き地をホテルやマンション建設に利用している事例が多くある。これらの空き地には元々、路地や京町家が建っていたが空き家となり取り壊された場合が多く、路地や町家特有の地域コミュニティや生活文化・景観も同時に失われている。そこで、若い世代の転出に歯止めをかけ、学生や子育て中の家族が京都に住み続けたい・選びたいと思えるような住まいを路地空間や町家の魅力・景観に着目して提案することを目的とする。

2. 京町家と路地について

京町家は、京都の美しい景観や生活文化の象徴である。京町家には個々の建物と町との関係をつくる連坦の仕組みが存在し、町並みとしての美しさが特徴的である。近年では住まいのほかに、商業施設や文化・芸術施設等としての活用も進んでいるが、その一方で毎年約 800 件の京町家が減失し、空き家となる京町家も増加し続けている。

路地は、表通りから一歩踏み入れた空間であり、屋外の暮らしの一部となる。それぞれのお家が掃除や打ち水をし、お互いにお隣を思いやる穏やかな暮らしが息づいている。また、車の入らない安全な場として子供の遊び場となったり、ラジオ体操やマルシェなど住民同士の交流の場としても路地空間は活用されている。



図１　路地で子供たちが遊ぶ様子

4. 敷地について

対象とする敷地は、豊国神社近くにある空き地（京都市東山区大和大路一丁目付近）を選定した。この敷地の東側には豊国神社や京都国立博物館などがあり、比較的観光地的要素が多くある。一方、西側には住宅街が広がっており敷地の東側と西側では全く特徴の異なる敷地となっている。敷地周辺には、保育園、学校、スーパー、駅などがあり、若者・子育て世代が比較的暮らしやすい環境となっている。北側と南側には隣接する路地があり、本提案では既存の路地を含めた計画を考えている。

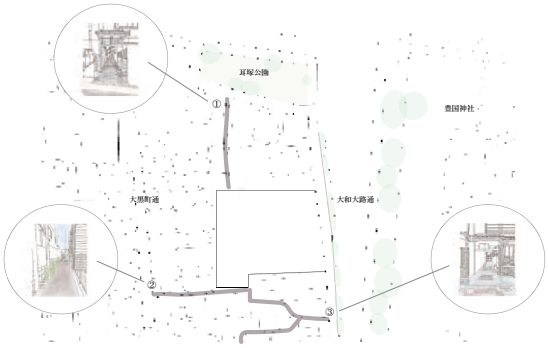


図２　敷地周辺の様子

5. 計画概要

5-1　プログラム

敷地の特性を生かし、東側は店舗やシェアハウスなどオープンな計画とし、西側はプライベートな空間を計画する。隣接する路地に加え新たに敷地の中に路地空間を計画し、若い世代にとって魅力的な空間を提案する。また、京町家や路地のもつ生活文化や住民同士の交流を活かした計画となるようにし、住まいだけではなく交流の場となるアトリエなどの施設や路地を活用したマルシェ・子供たちの遊びの場など、路地空間の活用方法を提案する。

5-2　コンセプト

「自由につながる空間」をコンセプトとし、コモンスペースである路地空間とプライベート空間を緩やかにつなぐ中間領域を計画する。この中間領域は扉などで自由にプライベート空間と区切ることができ、路地空間と段階的につながることができる。また、室内空間も各居室を自由に閉じたりつなげたりできる計画とし、住む人のニーズに合わせて変化する空間を提案する。これらの計画を設計に取り入れることで、家族や人の気配を程よく感じることができ、路地空間や中間領域を通じて住民同士のつながりを持てる提案となっている。

所在地：京都府京都市東山区大和大路１丁目
主な用途：住宅・アトリエ
敷地面積：1623.04 ㎡
建築面積：852.9 ㎡
延床面積：2045.46 ㎡
キーワード：路地・京町家・人口減少

Location ： 1,Yamatoooji,Higashiyama-ku,Kyoto
Main Use ： Housing・Atelier
Site Area ： 1623.04 ㎡
Building Floor Area ： 852.9 ㎡
Total Floor Area ： 2045.46 ㎡
Keywords ： Alley・Kyomachiya・Population decline

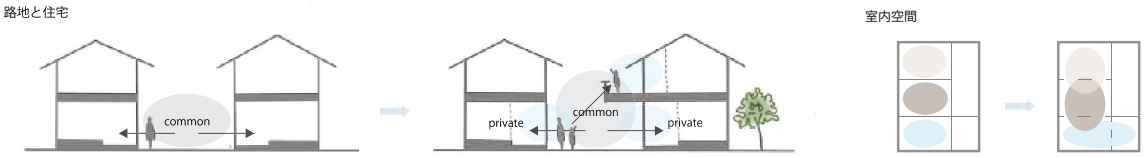


図３　ダイアグラム

5-3　路地の計画

本課題のキーワードである路地空間を計画するにあたり、路地に面した住宅だけでなく２階以上の路地に面していない住宅でも路地空間を感じることのできる計画を考える。2.3階へのアプローチとなる廊下部分をよくあるアパートなどの各住戸へアクセスするためのものではなくコモンスペースとしての空間を計画する。2.3階にも路地空間を計画することで、同フロアのつながりだけでなく上下のつながりも作り出し、より自由につながることのできる提案とする。



図４　大和大路通から見た外観の様子

図５　敷地西側から見た路地の様子



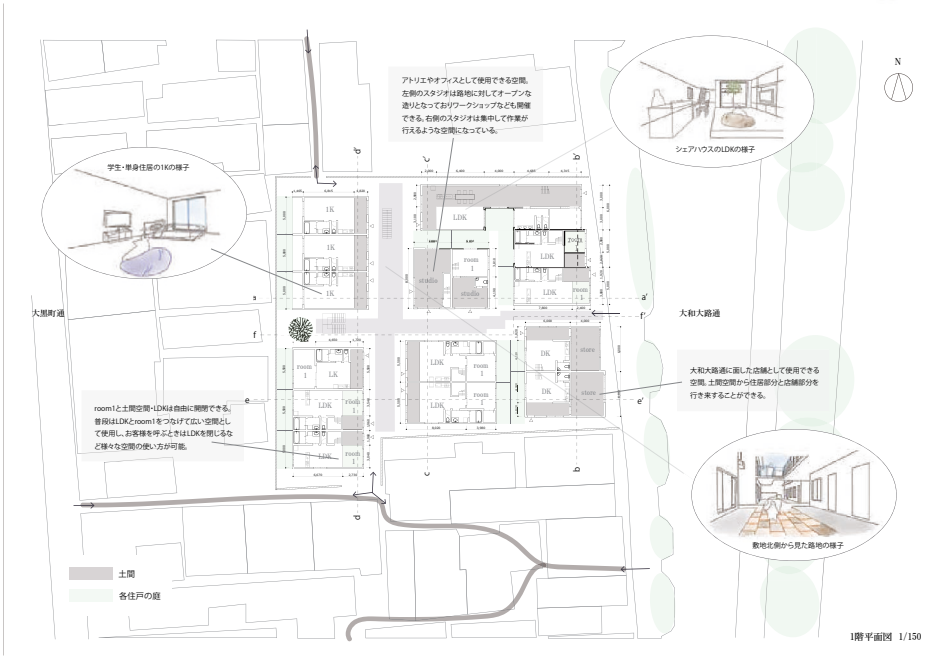


図６　１階平面図

数百年後を考える建築

～自然の入る余白をつくる～

学籍番号　K20277
名　　前　真田和奏
指導教員　生川教授

Architecture that looks hundreds of years into the future

～Create space for nature to enter～

Student Number　K20277
Name　Sanada Wakana
Supervisor Professor Narukawa



(図 1)沖島港



(図 2)沖島鳥瞰



(図 3)漁業の網

1. はじめに

今建てられている建築は 100 年後、200 年後、300 年後にはどんな姿になりどのような使われ方をされているか疑問を抱く。沖島の暮らしは数百年後どのようになっているのか、空き家は朽ち果ててしまい廃墟だけが残るとどうなるのだろうか。廃墟になるのではなく沖島の生活や思い出の記憶を継承する建築として在ってほしいため、数百年後を見据えた建築を考えていきたい。以後記憶継承の建築とする。

2. 研究の背景・目的

沖島は滋賀県にある唯一の有人島であり独特な時間の流れや豊かな自然、景観が形成されてきた魅力あふれる島である。しかし近年では島民の少子高齢化が進み、人口減少にも歯止めがかからず島として自立した生活が困難となりつつある。このまま進むと数百年後の沖島は廃墟と化してしまう。沖島は離島であるため廃墟は廃墟のまま取り残されると考えられる。数百年後も美しい島のままであってほしい。今、建築としてできることは何か、地域活性化とは異なる別の価値観での持続可能を考える。

建築は建物だけで存在するものではなく周囲の景観や自然と共存するものだと考えているため、美しい建築は時を経ることで文化性をまとい新たな美しさをかもしだす。そのため私はただ朽ちる廃墟ではなく数百年後も自然に溶け込み人の営みを想起させる沖島の記憶継承となる建築を設計する。

3. 調査内容

沖島へ現地調査に行き、写真やスケッチで島の風景などを記録する。また、文献資料で沖島の人口統計、琵琶湖の水深や地形について調べる。設計提案は図面だけでなく模型を用いて表現する(表４)。

4. 沖島とは

沖島は、滋賀県の湖東平野に位置する近江八幡市の北部にあり（長命寺港から沖島漁港まで 6.5km・堀切港から沖島漁港まで 3.3km)、一級河川琵琶湖（琵琶湖国定公園指定　昭和 25 年７月 24 日、ラムサール条約登録湿地　平成５年６月 10 日）に浮かぶ最大の島であるとともに、淡水湖内で集落を形成する島として世界でも希少な島である。面積は 1,51k ㎡であり、周囲は 6.8 kmとなる。

沖島の大部分は山地が湖単に迫る地形で、湖から直接上陸することが出来ない地域が広がる。西南部の 0.1km にも満たない狭小な平地に人家が新を接して密楽し、その間を下道がつづくという独特の集落景観を形成しており、生薬は菜を主とし、かたわらに農業を営むほか、古くは石材業が盛んであった。

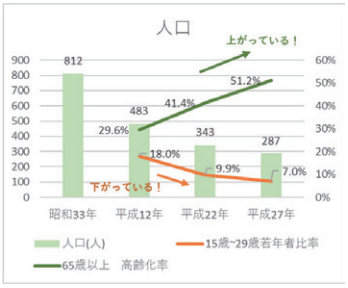
沖島の人口は昭和 33 年から令和４年までの 65 年間で約 70%減少している。更には、令和４年の 15 歳から 29 歳の若年者比率が 4.6%、高齢化率は 65.7%と非常に高い。(表 1)昭和 55 年と令和２年の産業分類別就業比率を比べてみると、沖島の主要産業である漁業従事者の減少が 38%と顕著である。(表 2)来島者数は、平成 28 年から 20,000 人以上を維持していたが、コロナ禍に伴い、令和２年は減少している。その後は増加傾向にあるもののコロナ禍前の水準には回復していない(表 3)。

5.「滋賀県離島振興計画」

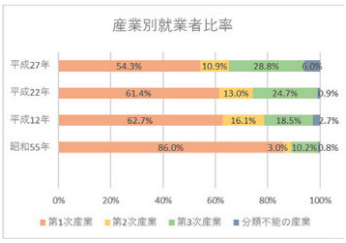
平成 25 に沖島は離島振興法に基づき離島振興対策実施地域の追加指定を受けたことを踏まえ、平成 25～令和４年度を計画期間として、「滋賀県離島振興計画」を策定し、離島振興に努めてきた。令和 4 年に現行法が改正され、法期限の延長などが図られた。この改正法の趣旨を踏まえ、滋賀県は引き続き沖島の振興を図るために計画期間を令和５年～令和 15 年とし、内容の充実化を図った。

計画の基本目標は(表 5)の①~③に示す。沖島の離島振興に向けた各種政策に取り組むうえで基本目標を実現するため、沖島の現状や固有の課題を勘案し、(表 6)の(1)~(4)に示す基本的方針を重点的な取組として位置づける。

(表 1)沖島の人口



(表 2)産業別就業者比率



(表 3)来島者数



(表 4)調査内容

4月下旬	滋賀県について文献調査
4月下旬	沖島全景模型作成
5月	近江八幡市について文献調査
5月上旬	模型完成
5月4日	沖島現地調査①
6月	沖島について文献調査
7月2日	沖島現地調査②
10月29日	沖島現地調査③

(表 5)基本目標

①安心して暮らし続けられる沖島
・医療福祉サービスの充実、移動手段の確保など、超高齢化社会に対応し得る体制整備を進める。
・多様なライフスタイルに対応できるハード・ソフト両面でのインフラ整備を進める。
・誰もが生きがいを持ちつつ、安心して暮らし続けることのできる沖島を実現していく。
②琵琶湖の恵みとともに持続可能な沖島
・基幹産業である漁業を魅力ある産業として復興させ、後継者の確保や育成を進める。
・その担い手の受け入れ態勢の整備や、その土壌づくりとしての関係人口の創出に向けた取り組みを進める。
③島民人口200人の維持
・持続可能な沖島を実現するうえで、人口の維持は必要不可欠である。
・基本目標に掲げるとおり、安心して暮らし続けることのできる沖島を実現が必要である。

(表 6)基本的方針

(1) 誰もが訪れやすく、住みやすい沖島（湖上交通・島内外交通）
・航路の維持・利便性の向上を図り、人口流出の抑制と、島へのU」 エターンや定住を促進する。
・島外交通を充実させ、観光需要に対応できる交通体系の整備を進める。
・島内移動の望ましい姿、自然環境にも配慮した沖島らしい移動手段について検討し、必要な対策に取り組む。
(2)琵琶湖の恵みとともに、島ならではの産業を育む沖島（産業）
・琵琶湖漁業の中心的な役割を果たす重要拠点として漁業の振興を図る。
・琵琶湖を内側から見渡すという沖島独自の魅力を活かし、体験、滞在型観光の産業化による振興を図る。
(3)安心していつまでも暮らし続けることができる沖島（福祉・医療）
・誰もが安心して暮らせる沖島をめざし、地域医療体制・介護サービスなどの充実を図る。
・健康でいきいきと暮らし続けられるように、予防医療を促進する。
(4) 島民だけでなく、みんなの力で発展する沖島（移住・関係人口）
・関係人口の創出を進め、島の取組を多くの人に協力・応援してもらえる体制づくりを行う。
・沖島に関わってもらうことを通して沖島の魅力を体感し、将来的に島民として沖島の発展に寄与できる人材を育成する。

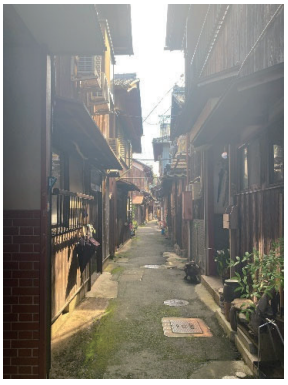
所在地：滋賀県近江八幡市沖島町
主な用途：環境学習広場
敷地面積：1486.62 ㎡
建築面積：488.26 ㎡
延床面積：488.26 ㎡
キーワード：離島、経年美化

Location :,Okishima-cho,Omihachimann-shi,Shiga
Main Use : Environmental learning plaza
Site Area : 1486.62 ㎡
Building Floor Area : 488.26 ㎡
Total Floor Area : 488.26 ㎡
Keywords : Remote islands, Declining birthrate and aging population, Sustainability, Terraced rice fields、Beautification over time

6. 計画概要・プログラム

沖島の暮らしや生活をより多くの人に知ってもらうため、「うみのこ」のタウンウォークラリーで訪れる環境学習の場を設計する。本研究では滋賀県独自の取組である「うみのこ」に着目し、一年を通してほぼ毎日小学生が環境学習を目的に来島が可能であることから、その学習拠点を中心に設計を行う。

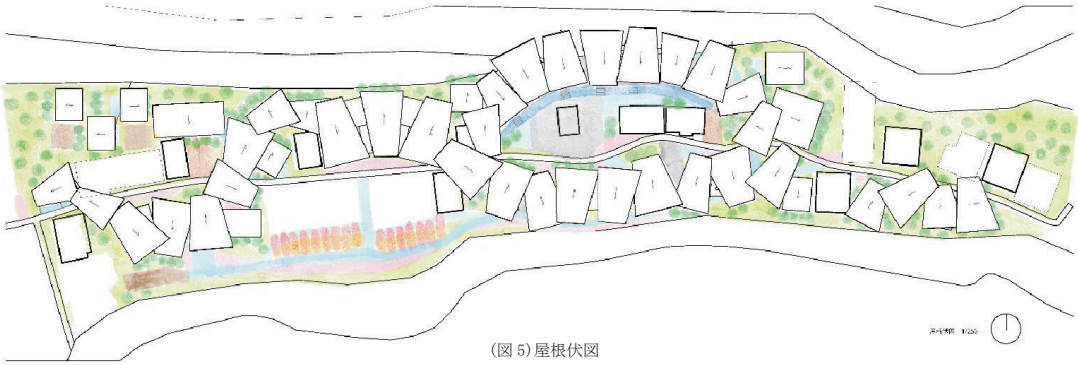
沖島に訪れてもらうことで「うみのこ」の思い出とともに、環境学習の場を通して沖島を知ってもらう。環境学習では各小学生が少しずつ手を加えて一つの東屋を一年かけて建てる取り組みを行う。また、沖島の漁業で用いられる網の染色体験を行い出来上がった網は建築の一部としてカーテンのように外に吊るす。それらを用いて他の小学生は網糸での編み物や工作を行う。



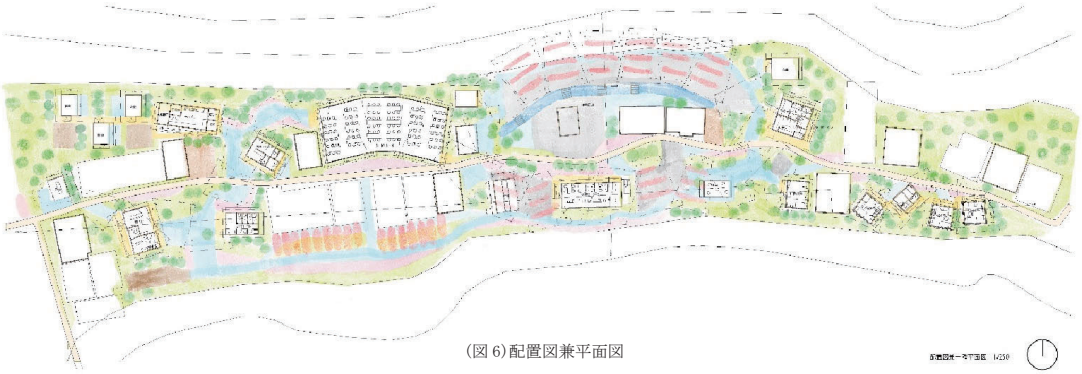
（図 4）沖島の風景

7. 計画コンセプト

今回の設計は経年美化をキーワードに設計を進めていき、地域活性化とは異なる別の価値観での持続可能を考える。経年美化とは年月が経つにつれて素材に味や深みがでて美しくなっていくことを指す。しかし今回私が考える経年美化は、年月が経つにつれて自然と建築の融合することを目指す。そのため建築に自然が入り込む余白をあらかじめ設計し、最終的に自然と絡み合う美しい建築を設計する。



（図 5）屋根伏図



（図 6）配置図兼平面図

8. 図面

数百年後自然が入り込むように、かつ子どもたちの活動の場をつくるために敷地全体を大屋根でデザインした。この屋根は格子状になっており、外部空間と中間領域が共存するように設計した。外部空間には日差しが射し込むことから植物が育ち、自然が中間領域に浸食することを狙いとした。

9. 参考文献

・総務部市町振興課　滋賀県離島振興計画（案）　令和５年１月 31 日
・近江八幡市総務部　市史編纂室　「水辺の記憶」ー近江八幡・島学区の民族誌ー　平成 15 年３月 31 日発行
・小川四良　沖島に生きる　琵琶湖に浮かぶ沖島の歴史と湖稼ぎの歩み　1996 年７月 10 日発行
・内藤正明　琵琶湖ハンドブック　改訂版平成 24 年３月発行
・篠原修　都市の水辺をデザインする　グラウンドスケープデザイン群団奮闘記　2005 年６月 10 日発行
・伊藤孝　水辺の土木　2003 年３月 15 日発行
・隈研吾、陣内秀信　広場　2015 年３月 23 日発行
・滋賀県商工労働部商工観光政策課　滋賀県伝統的工芸品　平成 11 年 11 月発行
・中塚雅也　地域人材を育てる手法　2022 年３月 20 日発行
・森一彦　福祉転用による建築・地域のリノベーション　2018 年３月 20 日発行

感性を育むこども園

A nursery school that nurtures sensitivity

学籍番号　K20278
名　　前　清水祥太
指導教員　河村大助

Student Number　K20278
Name　Shimizu shota
Supervisor　Kawamura daisuke

計画敷地(1)

京都府京都市北区上賀茂大柳町 91-1 を今回の計画敷地とする。敷地面積は約 *** ㎡、敷地の周辺には柊の小学校 :(2)、西側には鴨川 :(3)、畑 :(4)、MK ボウル :(5)、橋を渡り少し西へ行くと西賀茂中学校 :(6)、北へ行くと柊野グラウンド :(7)、があり、誰でも使用できる広場がある。地下鉄などの公共交通機関が近くにない。















選定理由

選定敷地付近に保育園や幼稚園がないため、自転車、車、バスで遠方の施設へ通うこどもが多く改善したいと思った。自然が豊かな地域であるので四季の変化をこども達が身をもって感じ、学び、楽しみながら成長できる場所であると考えたためこの敷地を選定した。

所在地：京都府京都市北区上賀茂大柳町 91-1
主な用途：認定こども園・小児科
キーワード：認定こども園・自然・木造・平屋建て

敷地面積 :5,107.55㎡
建築面積 :2,077.43㎡
延床面積 :2,336.43㎡

コンセプト

自然や農業を通じて感性を育む認定こども園

設計趣旨

地域のこどもたち自らが住む地域で畑、自然や生き物と触れ合い感性を育て、身体ともに成長し小学校へ送り出すことを目標に計画した。また、小児科を隣接して計画することで園に通うこどもたちの健康をバックアップするとともに園に通っていない一般のお子さんの診断、治療も行い地域一体となりこどもたちの健康をサポートできる施設を目指す。さらに地域の農家さんの協力をもとに種子から収穫までの一連の流れを実際に目で見て体験することのできるシステムを計画した。

計画内容

⑴保育室

保育室は園庭をはさんで東西に配置し、東側に０～２歳児の保育室西側には３歳児以上の保育室とし、半屋外デッキテラスで繋がっている。走り回って遊ぶこどもたちとは別に０～１歳児の保育室には、隣接して専用の芝生の庭を設けた。



⑵小児科

小児科は敷地北側に配置し、無駄な園内への侵入を防げるようにした。小児科待合スペースには、こどもが遊びながら待つことができるよう親の目が届くように椅子のすぐ横にキッズコーナーを設けた。



⑶ ウッドデッキ

このこども園は、ウッドデッキで建物全体を繋いでいるため、園庭や畑、小さな森などの屋外エリアに行く場合以外は中靴で過ごすことができる。ウッドデッキのある場所の上部には屋根を設けているので万が一雨が降った際でも濡れることなく、遊戯室や他のエリアに移動できる。



⑷ 園庭・畑・自然

園庭は建物で囲むように敷地中心に配置し、見守りやすい計画とした。シンボルツリーを毎日視界に入る園庭に設けることで四季の変化や木の成長を目で見て感じさせることができる。園庭の南側には畑と自然ビオトープを計画した。畑も園庭の南側に配置した。畑の南側には地域の農家さんの畑があり、農家さんの協力を受けて、農業を行う。



～ Second Laputa ～
Kayashima Station

学籍番号　K20279
名　　前　下田樹凜
指導教員　杉本直子

～ Second Laputa ～
Kayashima Station

Student ID number K20279
Name: Jurin Shimoda
Supervisor: Naoko Sugimoto

設計背景

現在では、高齢者も増え、多くの駅でバリアフリー化が進んでいる。今回の敷地の寝屋川市でも、実際に、総人口に対し高齢人口も増えている（図１）。また、平成 17 年１月１日現在の本市の身体障害者手帳所持者は 7,222 人となっている。なお平成 17 年現在の住宅基本台帳人口は 248,318 人で身体障害者手帳所持者の人口は約 3%となっている。それに比べ、令和２年４月現在の本市の身体障害者手帳所持者は 9,139 人となっている。　なお、令和２年の住民基本台帳人口は 231,189 人で身体障害者手帳所持者は人口の約 4% となっている。また、身体障害者手帳所持者のうち　29.8% が１級、14.7% が２級の所持者であり、重度の身体障害者の比率も高くなっている（表 1）。この駅では、高齢者の利用が多いにもかかわらず、川の上ということや神木が駅を突き抜けているということなど、難点がとても多く、なかなかバリアフリー化できていないなと日々の通学感じている。また、３つの市の交わる地点である為、行政管轄におくする問題点も多い。

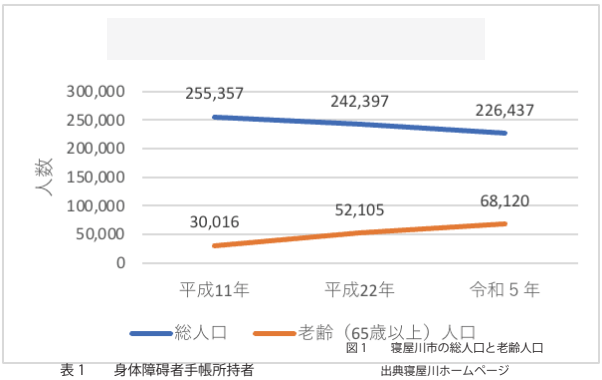


図１　寝屋川市の総人口と老齢人口
出典寝屋川ホームページ

表１　身体障碍者手帳所持者
令和２年

寝屋川市の人口	身体障害者手帳所持者	重度1級	重度2級
231,189人	9,139人	2,719人	1,339人
	4%(人口比)	29.8%(身体障害者手帳所持者全体比)	14.7%(身体障害者手帳所持者全体比)

設計目的

元々高齢者も身体障害者増えていた地域であり、近年ではさらに高齢化も進んだ。寝屋川を超える急勾配な道や階段が多く、高齢者の運動という面では良いかもしれないが、危険性、不便を解消するため利便性の良い駅を計画する。また歴史ある大きな神木の魅力をなくすことなく駅を継承しつつ、どのような利用者でも不自由なく、利用しやすい慣れ親しんだ駅、を設計していきたい。

設計敷地

設計敷地は萱島駅とする。この駅の、真下に神社があり神木の大楠が駅を突き破って伸びていることで知られる変わった、駅となってる。この神木は高さ 20m. 周囲 7m、樹齢 700 年と推定されている萱島神社は天明年間（1781~89）に神名社（しんめいしゃ）という名前の神社だったが 1907　年に廃社になった。その後京阪電車が高架、複々線化の為に駅を移動させる際に、土地を買収し、神木も伐採する予後だった。しかし地元の反対運動により神木の保存が決まり、駅を神木が貫く形で駅が完成した。その後　1980　年に新たに、萱島神社として、今の姿となり、1983 年には大阪市景観建築賞、2001 年には近畿の駅百選にも選ばれ、ラピュタとも呼ばれていた。所在寝屋川市ということになっているが、駅の西口の半分ほどは、門真市となっている。すぐ近くに守口市もあり、３つの市が交じり合う場所に位置している。そのため利用者は学生から社会人の通勤通学の利用者が多い。また、車庫がある為、始発電車や準急電車が止まることもあり時間次第では利用者がとても増加した状態となる駅である為、様々な人々がより利用しやすい駅を計画したいと考え、この敷地を選定した。



図２　計画敷地周辺の広域地図

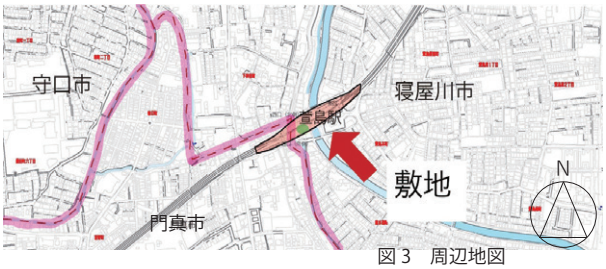


図３　周辺地図

敷地における課題

①　西口の北側の入り口に３ｍほどの高低差があるが階段がメインで使われていて、スロープは少し東方面に坂を上ってからでないと利用できない。
②　川沿いの駐輪場は狭く坂の頂上なので利用しにくい。
③西口の南側からの入り口で高低差３ｍを上る方法が幅約 10ｍの階段しかなく、で改札まで行くのが一苦労である。



図４　現状航空写真
（課題ポイント）

所在地：大阪府寝屋川市萱島本町 198 番 1
主な用途：駅
敷地面積：5,720㎡
建築面積：2,287㎡
延床面積：6,197㎡
キーワード：高齢者・ラピュタ・省エネルギー・

Address: 198-1 Kayashimahonmachi, Neyagawa City, Osaka Prefecture
Main use: station
Site area:5,720 ㎡
Building area: 2,287 ㎡
Total floor area: 6,197 ㎡
Keywords: Elderly people,Laputa, energy saving,

④　西口にはエレベーターがない為、高齢で足腰の弱い人や車椅子の方がエレベーターのある東口に向かう。そのためには、若い人でも自転車だと足をついてしまうような坂を上らないとならない。
⑤　西改札口には、エスカレーターと階段しかなく、車椅子の人などは、東口に行く必要がある。
⑥　エスカレーターの横はガラス張りになっており、神木を眺められるスッポトとなっているが、整備や清掃が行き届いておらず神木を見たり、魅力を感じたりすることができなくなっている。
⑦　東口はエスカレーターがなく、階段とエレベーターしかない状態となっている。エレベーターを使った場合、京都方面のホームには直接行けるが、大阪市内方面に行く場合は、２階を経由しなければならない為、ほとんどの人が階段を利用している。

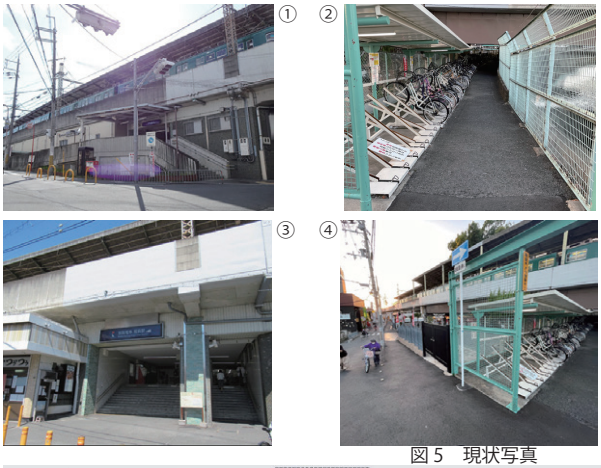


図５　現状写真

計画における要点

計画するにあたり重要な点は以下の通りである。
1. 改札口からのホームまでの動線で適切な位置にエレベーターやエスカレーターなどを新設して高齢者や身体障碍者にも利用しやすく計画する。
2. 周辺の駐輪場や、バス停から改札口の入り口までの動線を分かりやすく、スムーズになるように計画し、利便性を高める。
3. 神木を外部からでも内部からでも、眺められるようにし、身近に感じられるようにして、今まで以上に親しまれる駅へと計画していく。

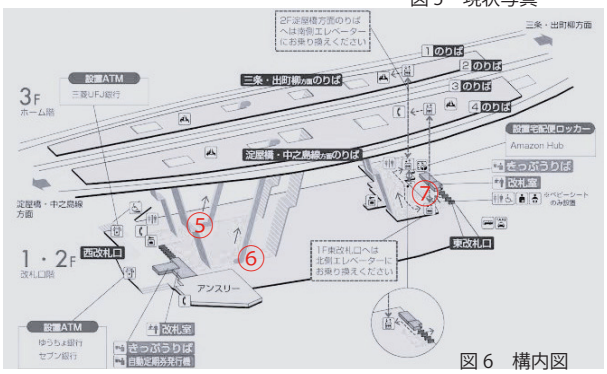
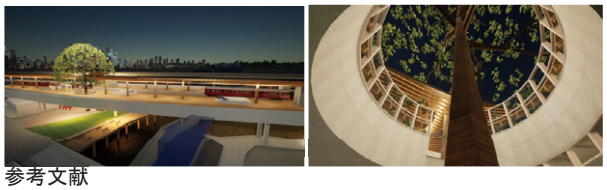


図６　構内図

ダイアグラム

この駅には、地元の人による反対運動により、神木が残されているが、現在では、駅からでも神社からでも、見えにくい状態となっており、神木への親近感が薄れている。
萱島神社の区切りをなくし半分を緑化し、駅からは、カーテンウォールなどで、近くから見やすい環境に計画する。





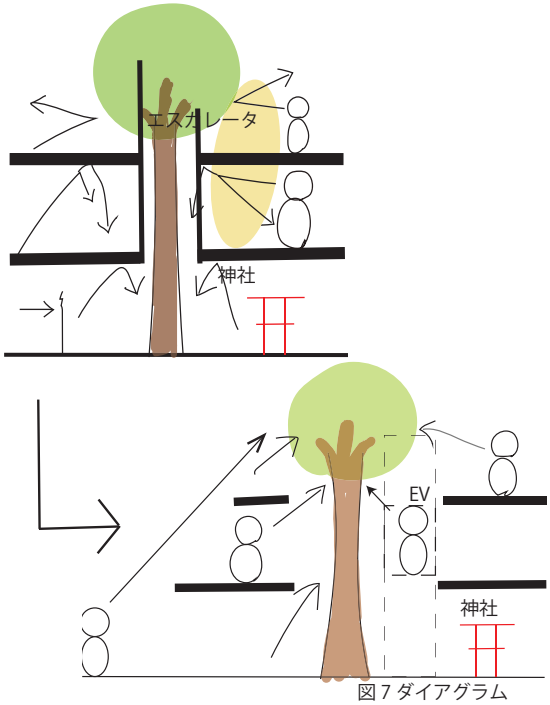


図７ダイアグラム

参考文献
・建築の多様性と対立性　鹿島出版会（1982/11/1）著者：ロバート・チャールズヴェンチューリ・ジュニア
・住まいの基本を考える　新潮社　（2019/4/25）
・建築を目指して　鹿島出版会（1967）　著者：ル・コルビュジェ
・寝屋川市ホームページ　https://www.city.neyagawa.osaka.jp/index.html0

東山アルケ

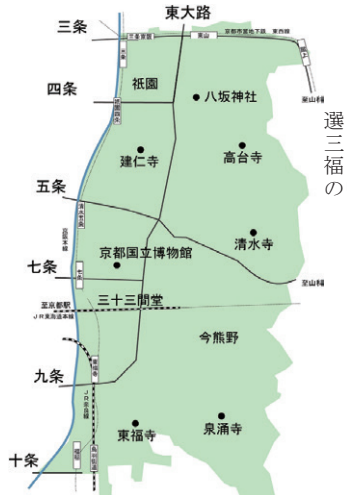
～Park PFIを利用した今熊野宝蔵公園の参道中継化計画～

学籍番号　K20281
名　　前　新田琉晟
指導教員　江本弘

敷地がある地域について

私が選定した敷地は京都市京都区の東山区、今熊野宝蔵町という場所にある。この土地は観光地と観光地の間に位置し、ここ一帯の用途地域の設定として、静かな住宅が多く存在する地域になっている。また高齢者が多いこともあり、地域の温かさが見受けられる。しかし、少子高齢化が進んでおり、この地域に賑わいはあまりない。そしてこの土地は観光地の中間地点になっているため、土日祝日は特にですが平日でもバスの混雑が確認できる。

東山区の社寺仏閣の分布



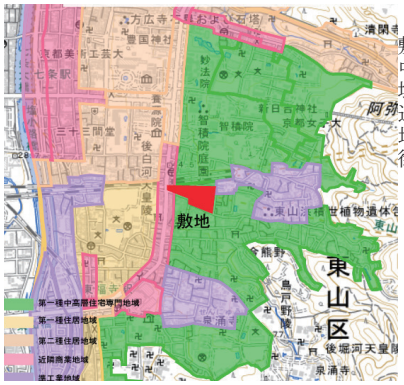
選定した敷地の周辺は三十三間堂や清水寺、東福寺などがあり、それらの中間地点に位置する

東山区の人口分布



６５歳以上の方が全体の30％を占めている。25歳以下の割合が18パーセントしかないこともあり、高齢者が多い地域という認識ができる。

用途地域で見る町の割合



敷地周辺は第一種中高層住宅専門地域になっている。近くにある近隣商業地域の部分は商店街になっている。

東山のバスの混雑状況

系統	３０年度	元年度	２年度	３年度	４年度	旅客数（人／日）
75	136	150	196	208	187	1, 346
78	180	200	239	224	223	842
80	101	109	156	149	123	2, 528
81	113	129	166	147	131	3, 459
84	221	244	281	268	247	1, 002
86	92	99	187	146	84	689
88	116	150	241	197	151	530
91	114	121	144	137	134	3, 606
93	98	114	148	139	133	4, 705
100	62	68	140	—	—	—
101	82	79	150	—	—	—
102	74	82	195	—	—	—
105	99	132	272	—	—	—
106	86	92	120	—	—	—
110	99	114	242	—	—	—
111	—	148	398	—	—	—
201	74	84	121	109	84	11, 343
202	78	83	114	106	88	12, 990
203	71	79	107	96	83	15, 529
204	82	89	122	115	103	9, 490
205	79	89	125	110	85	31, 651
206	64	73	110	96	79	24, 075
207	59	63	102	93	70	12, 036
208	105	115	155	143	122	3, 466
北１	84	91	119	115	104	1, 738
北３	120	128	217	168	127	1, 803
北８	117	125	161	155	143	2, 353
西１	214	236	260	277	274	592
西２	151	163	191	195	181	3, 175
西３	213	235	299	308	301	847
西４	132	140	180	205	176	1, 543
西５	221	236	260	256	244	1, 276
西６	173	193	215	191	181	1, 138
西８	175	187	213	196	203	1, 222
南１	218	226	273	256	241	1, 129
南２	136	134	170	158	164	1, 769
南３	139	148	195	187	159	691
南５	96	114	201	152	133	1, 716
南８	192	220	265	245	244	503
Ｍ１	97	102	123	131	127	997
循環２	142	160	232	—	—	—
合計	94	103	144	131	112	309, 337

東福寺と清水寺を通るバスの系統は202系統と207系統である。
一日の利用者が25000人。うち観光客30%、この敷地の利用者が30%だと想定する。営業時間が18時間なので一時間にくる利用者は125人になると想定した。

計画理由

主な理由は以下の３つである。

・地域活性化につなげる
・ピーク時のバスの混雑の緩和
・点の観光を線の観光にする

地域活性化について
土地の回りに観光地はあるが交通機関を使ってしまうと、この土地に観光客が訪れることがないので、交通機関を使わなくても訪れる理由を作る必要がある。
また高齢者が多いことが見受けられるので、地域住民にも訪れやすいようにし、休憩地とコミュニケーションの場にすることを目標としている。

ピーク時のバスの混雑の緩和
観光地が点在する東山区は交通機関を使うことが多く、ピーク時には満員電車のように混雑することが多々ある。
そこで観光地から次の観光地に行く移動を歩かせることや自転車、最近利用者が多いLuupの利用者を増やすことによって緩和させようと思い、休憩スポットや中間地点の役割にすることを考えている。

点の観光を線の観光にする
観光したら次の観光地に行くという点々と観光することを変えるため清水寺から東福寺までの景色を楽しみながら歩くことも観光にする。

総括
地域住民と観光客が訪れる、清水寺から東福寺までの休憩スポット、中間地点、となる敷地にし、地域住民と観光客の交流を促すことで地域活性化を図るということを目指している。

所在地：〒605-0952 京都府京都市東山区今熊野宝蔵町７
主な用途：公園
敷地面積：980.6 ㎡
建築面積：684.2㎡
延床面積：2106.85 ㎡
キーワード：地域活性化、ParkPFI、バスの混雑の緩和

計画内容

・自転車、Luup、徒歩の利用者を増やしてバスの混雑を緩和する。
この敷地は清水寺と東福寺の中間地点に位置している。
これらの間にある敷地を利用者ための中間地点、または休憩所、として機能させる。
そして観光客と地域住民の交流を図り、地域活性化を目指す

・ParkPFI という制度を利用し地域活性化を図る
ParkPFI とは
民間事業者と投資と収益を活用して公園を整理、管理する新しい手法
公園管理者の財政負担を軽減しつつ都市公園の質の向上、公園利用者の利便性の向上を図る目的で作られた制度
政府が事業案を公募し、公園管理者の委員会等により事業者を選定する。

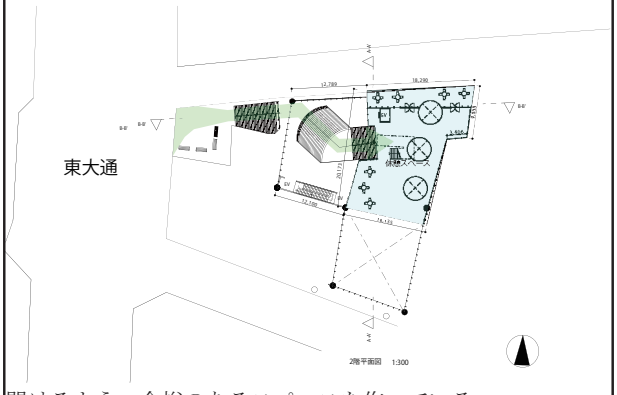
この制度を使い、この公園の管理をより行き届かせることと民間事業者の支援をすることを目的としている。これにより公園の質のさらなる向上と民間事業主による地域活性化を図る

建築計画

・この敷地で高齢者の方が朝の運動や休憩に使っていたり、近所の子供たちの遊び場になっている。
そのため公園としての機能を残し、地域活性化を促せる設計になっている。
・利用者の休憩スポットとなるように、3階にカフェテリアを設けている。
・敷地の西部分にスイーツが食べれる飲食店がある。その店舗に協力していただき、公園の休憩スペースでも提供できるようにする。

敷地から見る目的地の見え方
建築全体のデザインは近隣住民の採光や圧迫感をできるだけなくすために、ガラス張りの部分を多めにしている。

・地域の事業主が運営する店舗を3階部分に設けることで、公園の機能を保ちつつ、経営ができるようになっている。
地域活性化を図るために、公園部分と二階部分でイベントが



開けるよう、余裕のあるスペースを作っている。

駐輪場を地下に設け、公園の機能を維持しつつふらっとよったときにわかりやすい場所に入口を設けることで利用者を増幅させるよう考えている。

西側にある店舗から休憩スペースに入って行く様を東大通りから一目で見られるので、この通りを使う方々が施設に入る様子を見て利用したくなるように動線計画をしている。

階段を広めに計画し、駐輪場から来た利用者と休憩スペースに向かう人両者が同時に利用できるようにし、人の流れをつくって大通りの人々に賑わいを見せれるようにしている。

事例調査




渋谷区北谷公園　ブルーボトルコーヒー
・計画内容
企画から設計、運営まで一気通貫して善い公園の風景を描く。
誰もが巡り歩いて楽しい魅力のある町の基盤整理を目指す。
また日常と非日常の共存が課題
・改善されたこと
公園がある神南、宇田川周辺と連動して町全体の回遊性を高めた。
地域全体の活性化を図るため、公園の入り口面積を７％から17%に変えることで地域に開かれた設計になった。
テナントからの施設使用料や渋谷区からの指定管理費などを公園管理費に割り当て長期的な視点でコスト回収に当たる
イベント会場としても利用できるスペースを確保
仮施設を簡単かつ頑丈に建てれる仕組みを作り、屋台を簡易的かつ丈夫に設置できる
中央公園　Enlee
広島県福山市の中央公園
・計画内容
地域住民の暮らしの底上げを目指す
市が策定した魅力とにぎわいを取り戻すことを目的とした福山駅前再生ビジョンの一環として計画
エリア価値の向上と中央図書館との相乗効果を生むことが求められた
・公園の問題点
　自習する学生は多いが休憩する構えがない
　周囲に照明が少なく近寄りづらい
　路線価も公園の回りは下がっている
調査により需要を見出し、日常的なコンテンツの需要が高いことが分かった
・改善されたこと
ニーズにこたえること、駅から人を呼び込むことを考慮し、
　駅前から商店街に向けてボリュームダウンしつつ、大きな広場を持つ公園へとつながる既存の街並みと連続するよう、平屋の分棟にしている。
　住宅側と公園の芝生広場側に顔を向け、前者は日常的に使えるようエントランスを住宅側に設け、後者は一休みできるゾーンを配置
広場の建築は屋内でも公園にいることを感じれる空間
カフェ、レストラン以外の気軽に休憩できるスペースを作るため９本の高木を植えた。
地域の自重者やクリエイターが気軽にイベントを開けるようパークマネージャーを設け、それにより出典者の増加や樹庁舎同地のマッチング、図書館とのスムーズな連携を実現している。
・学んだこと
敷地に対する問題点と、地域の何かを促進する計画をすることが求められること
ParkPFI 制度を利用するにあたってこのほか３つの事例を見たが、どれも地域活性化を図っており、それに伴いイベントをできるスペースを確保していた。
居心地の良い開放的な空間を心がけている。

竹のこパビリオン

学籍番号　K20282
名　　前　末永大翔
指導教員　新海俊一

Title (Bamboo shoot pavilion)

Student Number　K20282
Name　　SUENAGA　Hiroto
Supervisor　　SHINKAI Shunichi

１　はじめに

21 世紀とこれからの時代に、世界的な課題として挙げられるのは、第一に環境問題・第二に地域性である。

第一に、現代社会において SDGS を初めとする環境に対しての建築的課題は多岐に渡り、特に過剰に建設され放置された建築物・建設の際に出る環境への有害物質は大きな課題である。

この問題に対して、必要なことは環境にやさしく、２次３次利用ができ、還元される材．サスティナブルな素材であること・ 大量生産、低コストであること・社会に環　境負荷的建築材として可能性を認識されるこの３点が大事であると考える。

第二に、地域力・コミュニティの衰退すなわち地方衰退である。現代社会では、地方の過疎化に対して都心の過密化が進み、かつ SNS の普及により対面での交流を必要とする公共施設の必要性が下がってきている。この問題は、地方経済・文化振興の衰弱を引き起こし、少子高齢化問題を加速させる。

このような俯瞰的な問題に対して、地域活性化に取り組む必要があり、社会的交流点・地域性を発信していく施設の提供が不可欠である。

２　設計趣旨

２－１環境問題に対して

SDG sを筆頭とする取り組みと環境保全の観点から現在社会的に機能的にもサステイナブルな資源〈図1〉として、着目されている「竹」に焦点を添えて設計計画を行う。具体的には、竹の半割材を用いた屋根材や竹筋コンクリート・竹を用いた意匠材である。〈図2〉

外構は計画敷地周辺の生態系環境保全に繋がり、‘体験‘を通じて自然の心地よさと理解を深めてもらうランドスケープデザインを検討する。加えて、長岡京は農業が盛んであり地元の野菜を給食として活用する取り組みがあることから、地元をより知ってもらう取り組みとして小規模の水田・畑を計画する。

２－２地域性に対して

地域力の向上として地域独自の個性、アピールポイントを設ける必要があり、観光資源的観点からも地域の特産品の活用が必要となる。また、地産地消とすることで半永久的にその土地に根付き、ブランディング化することができる。情報の海である現代においてインスタグラムをはじめとする視覚的なツールが普及しているように「ブランディングイメージ」はとても重要である。そこで、ビジュアル的に竹であると分かる設計の取り組みが必要であると考えている。〈図3〉

また、地元の価値を底上げし、深みを出すために地域の伝統的な側面をはじめとする「資料館・ギャラリー」を併設。

また、最近の空間への目的が場所の機能的利用よりも、空間の多目的な滞在を目的とすることが多い。そこで「カフェ・多目的ホール・コワーキングスペース」の併設を検討することで、地元の理解へと繋がる誘因コンテンツとし、幅広い層へのアプローチを期待しつつ日常生活との親和性を計る。

さらに、地域の発展場所および他企業誘致やイベント開催などで地域力の向上を図るため「テナント」を設営する。また､「地域工芸体験エリア」を設けることで、体験型の施設とし、産業の発展と認識の拡大を図る。

３　敷地選定

３－１敷地選定理由

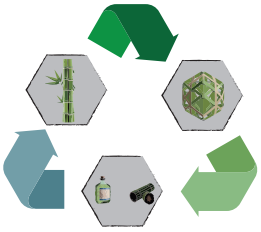
2の項目で述べたことを考慮し、計画敷地を「京都府長岡京市天神4丁目」とする。〈図4〉

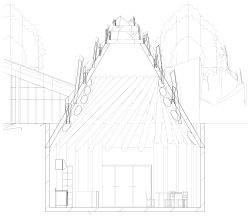
本計画敷地である長岡京は、地元であり地域についての理解度が高く、２－１で述べた「竹」の特産地であり、その歴史は非常に根深い。衣･食に深いかかわりを持つ竹を利用し､「住」というキーワードも属させるようにすることで竹の価値を向上させることに貢献。加えて、市が竹や筍を伝統工芸品・駅でのプロモーションへの活用を行うなどブランド戦略も着実である。また当敷地半径300m 以内に隣接する長岡天満宮・竹林があり、前者は長岡京を代表する最も大きい観光地点である。さらには市老舗の竹工芸を営む高野竹工株式会社が設営した、「錦水亭竹生園」など竹の工芸体験施設があり、観光動線としても非常に好ましいと考えている。

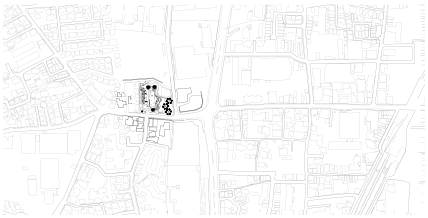
また、長岡京は西山をから連なる河川など自然豊かな街である。市の鳥はメジロであり、緑が多い環境を好むが、市街地にも活動範囲を広げ昔から人とのかかわりがある自然と人ととの平和の象徴である。本敷地は、駅と山の均等な距離に位置しており、観光ポイントとして有名である長岡京天満宮に隣接しており景観的にも、観光的にも理想的である。

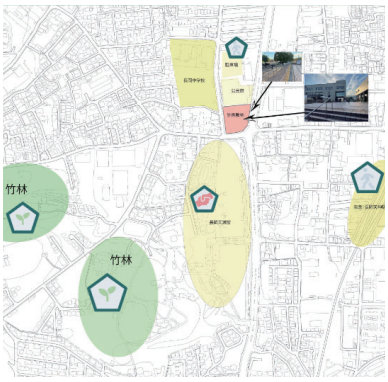
加えて、地域力に対しても市は活動的であり、地域間の交流・個人経営のカフェなどをインスタグラムで PR するなど、現代の若者誘致への姿勢が見られる。

以上のことから本敷地は設計趣旨に適した場である。









所在地：京都府長岡京市天神４丁目１－１
主な用途：資料館　テナント　ランドスケープ
敷地面積：4046m^2
建築面積：1983m^2
延床面積：2704m^2
キーワード：再生可能資材　地産地消　SDGs　ビオトープ
伝統工芸　地域活性　資料館

Location ： 4-1-1 Tenjin, Nagaokakyo City, Kyoto Prefecture
Main Use ：Museum Tenant, Landscape
Site Area ： 4046m^2
Building Floor Area ：1983 m^2
Total Floor Area ： 721m^2
Keywords ： Renewable materials Local production for local consumption SDGs Biotope

４　設計概要

（1）資料館・ギャラリー

本敷地は、隣接している長岡京公民館・図書館と長岡天満宮へは道路を跨いでいるだけであるため、直接的な繋がりが強い場である。これらの機能を相互的に強めるため、長岡京のことが歴史や産業・生態系などが楽しめる資料館・ギャラリーを計画する。また、（2）の工芸品などの展示を行うテナントと、隣接する図書館・公民館に併設している、約2000人収容可能なホールを活用し音楽や劇場を通して手段を選べる現代におけるメディアテークとしての役割を目指す。
半地下の資料館・ギャラリーは外部に左右されず、地中の温かみと静寂の中書籍に向き合うことができる。

（2）テナント

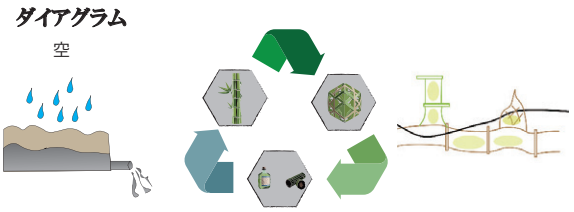
情報社会によって流動的に変化する社会のニーズや価値に対応・街の活動中心拠点となれるようテナントを併設する。多目的な利用、具体的には教育や研究などにも利用できるよう仮設的なテナントも併設する。
また、併設してある約3500m^{2}の駐車場の利用も可能であり、当計画敷地バス停・駅からのアクセス以外に手段が選べるためイベントの企画が行いやすい。

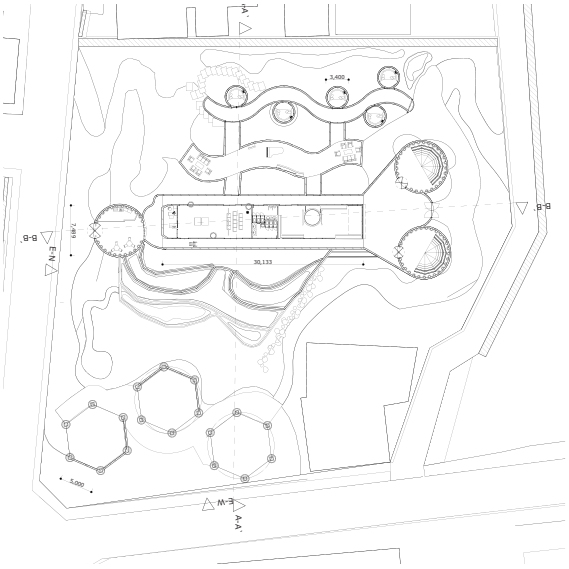
（3）カフェ

従来の一時的な休憩としてのカフェより施設全体での滞在を目的とした居場所を提供する。
個別の空間ではなく外部のランドスケープの空間利用も可能とすることで、手軽に長岡京の自然を自然を楽しむことができる。

（4）パビリオン

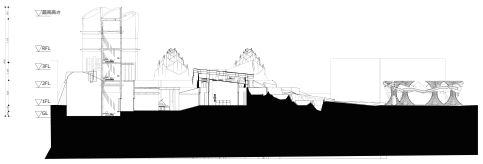
竹を用いた伝統工芸活動及び竹の２次・3次利用できるよう窯などの工業品の設営を行い体験を通して、社会的にサスティナブル・伝統のイデオロギーを持たせる。また、長岡京の産業を知ってもらう機会を提供する。

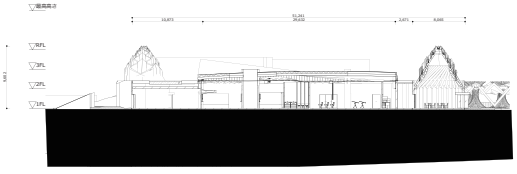




５　平面・断面計画

断面・平面計画は、竹の生態系から竹の「根」・「筍」・「竹」を施設全体を通して表現する。体験的に竹を訴求しビジュアル的にもブランディングを図る。





参考資料

竹の性質と加工
https://shopping.geocities.jp/taketora/special/takenokakou.html

竹の性質
https://shopping.geocities.jp/taketora/special/takenokakou.html
国連広報センター
https://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/sdgs_logo/
SDGs で注目の竹を使ったエコ素材「バンブーファイバー」のもつサステイナブルなパワーとは
https://k-daiwa.com/column/sdgs/bamboo.html
注目の環境にやさしいサステナブル素材「竹」を生活に取り入れる
https://kuradashi.jp/blogs/kuradashi-magazine/179

地域で守る砦　～土砂災害に対してのダムと広場建築～

学籍番号　K20283
名　　前　杉森拳心
指導教員　根來 宏典

A fortress to protect the community
～ Dam and plaza construction against landslides ～

学籍番号　K20283
Name　SUGIMORI Kenshin
Supervisor　NEGORO Hironori

1. 背景と目的

京都府では、22 の断層による地震が想定されている。この中で京都府全体に最も大きな影響を与えるのは、京都市内の被害が大きくなる花折断層の地震である。建物の崩壊や火災、斜面崩壊などにより、たくさんの死者や負傷者が発生する。また、京都府でおこる主な災害として台風や豪雨による被害が多く、そこから考えられる二次災害として土砂災害や洪水が挙げられる。その原因となっているのが、地球温暖化の影響で大雨が降ることが多くなったことである。実際に京都市でも、土砂災害による道の封鎖や山から流れた土砂が、町の大通りまで流れ込んだ事例もある。そこで過去に被害があった場所をピックアップし、土砂災害に対して有効なダムを建設し、地域に還元できる施設を計画する。

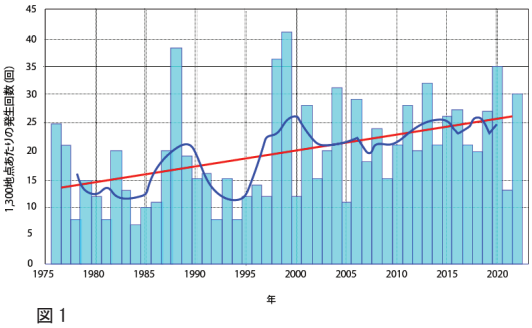


図 1
（全国アメダス）1 時間降水量 80 ㎜以上の年間発生回数

2. 選定敷地

京都府京都市左京区一乗寺松原町にある比叡山の麓。この敷地には、地域の人たちが守り続けている波切不動尊があり、ここを囲むように敷地を選定した。京都市の北東部にある比叡山が選定敷地であり、近辺には恵文社や、一乗寺のラーメン街道、天下一品本店、京都芸術大学などがあり、白川通へ出ると観光地としても人がにぎわう場所が多くある。また保育園や大学、公園など、学生が集う場所が多々ある一方で、この近辺の道の幅は狭く、急な坂が続くため、急な飛び出しなど交通上危険な箇所がある。2023 年 08 月 01 日に、土砂災害の影響でニュースがあった場所である。ここ 2 年間で 4 回の土砂流出が起きていて、昨年 7 月 19 に起きた最大 88㎜ の大雨の影響で、濁流が高さ 50 ～ 60 ㎝の砂で埋まった。行政からは軽視され、なかなか手がつかない模様。実際に治山ダムの計画が予定されているが、その予定着工日も数年後となっている。去年秋に、土のうが設置され現在は応急処置が施されている。



図 2　付近見取り図

・市街化調整区域
・建蔽率 60％，容積率 100％
・景観保全：風致地区大種地域，歴史的風土特別保存地区，歴史的風土保存地域
・眺望景観：遠景デザイン保全区域
・屋外広告物：第 1 種地域
・その他：宅地造成工事規制区域，保全区域

3. 計画概要

3-1 プログラム

敷地の中やその近くには、沢や谷がある。比叡山から大文字山にかけては、花こう岩が風化してできているため、非常にもろく崩れやすい地質だと言える。そこから、大雨で崩れる土砂土石流を防止するダムの計画を行う。実際に土砂災害が起こった場所と、土砂が流れ込んだ波切不動尊をつなぐダムを設置し、元々の背景に溶け込んだ建築とする。また前期の卒業研究では、木造の構造についてと、脱炭素社会に対してどう向き合うかを学んだ。この土地に対してコンクリートではなく、木造のダムで計画をすることにより、脱炭素社会に対しての取り組みを行う。その考えの背景として、自然に人工物がたくさんあるのも不自然であること、自然に対して、元あった自然を還元する取り組みが関わっている。また、ここに住んでいる地域の人たちの一番の主張は、早くダムを設置し安心して暮らしたい事である。その為に、コンクリートのダムではなく、木造のダムにすることにより工期を短縮する計画とする。

3-2 コンセプト

地域の人が安心できるダムを建設し、建物の用途としても、その概念としても砦となるような施設とする。ダムの中に商業施設を計画し、ダム以外の用途としても用いる。周りの自然を活用する。地域住民が利用したいと思う施設の計画をする。

所在地：京都府京都市左京区一乗寺松原町　比叡山麓

主な用途：ダム，広場建築，カフェ
敷地面積：6526.58 ㎡
建築面積：709.20 ㎡
延床面積：398.10 ㎡
キーワード：グリーンベンチ工法，刎橋工法，石垣

Location ： Foot of Mt. Hiei, Ichijyoji Matsubaracho, Sakyo-ku, Kyoto
Main Use ：dam, plaza, cafe
Site Area ：6526.58 ㎡
Building Floor Area ： 709.20 ㎡
Total Floor Area ： 398.10 ㎡
Keywords ： Green Bench Method, decapitation method, stone wall

4. 配置計画

敷地を、波切不動尊の道のりに沿った場所を選定しているため、実際に土砂災害が起きた場所と波切不動尊をつなげる計画にする。つなげる上で、景観に溶け込んだダムの計画とするため、和の要素を用いた木造ダムと不動尊を石垣でつなげ、石段で行き来できるようにする。更に、この近辺に住む地域住民の声の中には、歩道が広くないため犬の散歩がしづらい、学生が集まる場所が少ない、などの意見があったことから学生が集まれる広場と、子供が安心して遊べる場所の提供をする。ドッグランや犬と散歩できる道の計画をする。

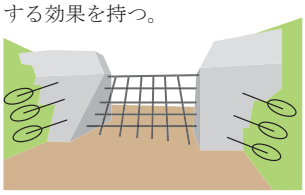
5. デザイン計画

山にダム施設を計画していることから、たくさんの高低差が生まれる。その敷地の特徴を生かし、様々なアクティビティを生む。カフェ施設まで不動尊からは石段でつなげる。道路からは、施設に最短で上る直線の坂道と、車いすの人でも登れる傾斜の緩い曲がりくねった道でつなげる。様々な場所に段差を設け、階段として使用したり、腰掛けたり、景色を見る為の足場として用いる。カフェ施設は、景色を見渡せるようにガラス張りとなっており、二階には更に敷地全体を見渡せるように、展望デッキを設けている。施設より奥には、ドッグランコーナーの配置と、山を登る目的とするために、木で作られたトンネルや、傾斜により、どこからでも見ることができるステージを設けた。

5. 構造計画

1）グリーンベンチ工法

木造でダムを計画するために、グリーンベンチ工法を用いた。敷地の形状から、受圧板（木材）を山の敷地にアンカーを打ち込むことにより、本来は、コンクリートで支えられている場所を、木材で代用できる。また、山に登る坂を曲がりくねった道で、その道もグリーンベンチ工法を用いることにより、治山ダムのように土砂の流れを緩やかにする効果を持つ。



本来ならコンクリートダムアンカーを差し、受圧板（木材）と山をつなげることで、強い構造になる。

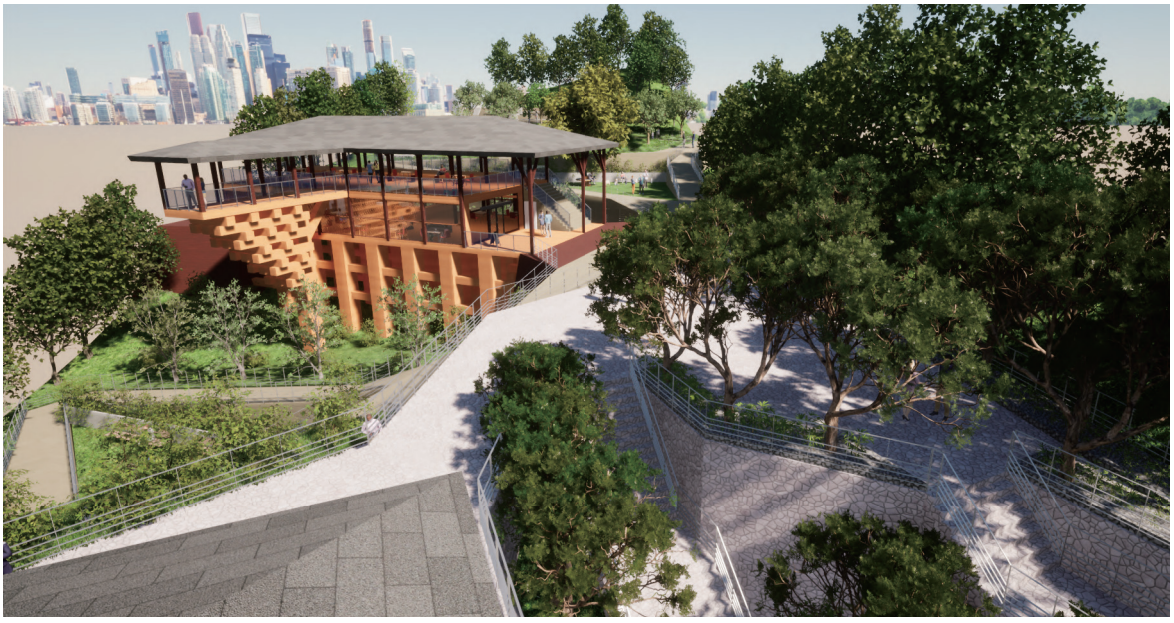
図３　アンカーの差し方

2）刎橋工法

カフェ施設の展望デッキの場所を、建物本体とは別にエキスパンションラインがある。やじろべえ型刎橋を用いることにより、突き出した展望デッキを支える構造になっている。

参考文献

1.）図１：https://www.data.jma.go.jp/cpdinfo/extreme/extreme_p.html
2.）https://www.mbs.jp/news/feature/hunman/article/2023/08/095951.shtml
3.）https://www.chugoku-np.co.jp/articles/-/26543



外観パース

蛸薬師柳馬場の京町家に関する研究

学籍番号　K20284
名　前　鈴木　来夢
指導教員　井上　年和

京町家　復原　保存
活用　継承　伝統建築

1. 研究概要

1-1. 研究目的

京都は伝統ある建築物の保存が多く行われている土地である。しかし京町家にスポットを当てれば、その数は年々減少していることがわかる。広く京町家の魅力を知ってもらい、保存活用の動きを更に高めていかなければならない。

そこで本研究では京町家の魅力を改めて探り、未来に残す意義を考察することで、京町家の可能性を広げることを目的とする。

1-2. 研究方法

目的を達成するため、以下の手順で研究を進める。
①ある京町家を例にとり、町家の現状を把握する。
②痕跡調査を行い建築当初の姿を復原する。
③時代の変遷を読み取り、未来の京町家の姿を提案する。

1-3. 研究対象

京都府京都市中京区蛸薬師柳馬場東入油屋町 121 に所在する店舗兼住宅の京町家。年代は確定していないが、幕末から明治初期に建てられたと推測される。通り沿いの二階部分の天井が低い、厨子二階の形式をとっている。



図 1. 北側ファサード

表 1. 面積一覧

敷地面積	116. 78 ㎡
建築面積	54. 6 ㎡
延床面積	88 ㎡

2.　蛸薬師柳馬場の京町家

2-1. 所有者について

建築当初の所有者は祐森長右衛門である。彼は京都府県議会の議員であり、土地貸しや古美術商の側面もあった。京都市内 16 か所に土地を持っており、特に蛸薬師通りに集中している。中には清水寺の門前という好立地を所有していた記録もある。

2-2. 建築概要

蛸薬師通り沿いに面して建てられた厨子二階の京町家。乾物屋に貸していた記録や資料があるが、営まれていた年代は特定できなかった。

2-3. 平面構成

一階は表の間、中の間、奥の間、奥庭と続いており、表の間から奥庭を通り庭が繋いでいる。二階は表の間、中の間、奥の間がある。また通り庭の二階部分は火袋という吹き抜けである。

2-3-1. 一階：表の間

見世を営む空間で土間仕上げの床。作り付けの大きな乾物棚の他、食品のホーロー看板など店の様子を感じられる資料がある。東西面に土で仕上げられたレンガ基礎がのぞく。

2-3-2. 一階：中の間

三畳の空間。畳敷きと板敷きが混じっており、板敷き部分が床下収納になっている。表の間との境に無双窓があり、住居部分から店の様子を伺うことができる。中の間の東側には舞良戸を介して二階へと続く急勾配の階段がある。

2-3-3. 一階：奥の間

4 畳半の畳敷きの部屋。北側のガラス戸を隔てて奥庭へとつながっている。ガラス戸の外には雨戸が設置されている。

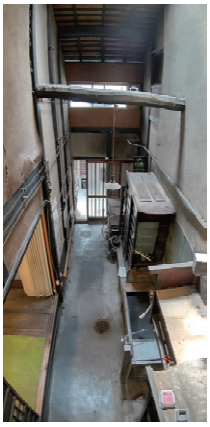


図 2. 二階表の間からみた通り庭の様子

2-3-4. 一階：奥庭

手洗い場や物置用の棚がある小さな小屋があり、母屋とつなぐようにトタンの屋根が葺かれている。

2-3-5. 一階：通り庭

おくどさんと呼ばれる台所の機能を有した吹き抜けの空間。京町家特有の調度品が多くみられる。

2-3-6. 二階：表の間

厨子二階の形式をとっているため、通りにむけて天井が下がっている。東側に二畳分の板敷き、西側に畳敷きの空間がある。3 つある桐箪笥の中には、乾物屋が取引した際の帳簿やふきんが入っている。通り庭との境に扉があり、開けた先の上部には滑車が設置されている。

2-3-7. 二階：中の間

階段をあがると三畳の空間がある。奥の間との間にある建具は、一階中の間と同様に無双窓がついたものである。

2-3-8. 二階：奥の間

4 畳半の畳敷きの空間。表の間同様に天井が下がっている。明かり取りのために瓦の一部がガラスになり、トップライトとして機能している。北側からデッキに出ることができ、洗濯物干しが設置されている。外壁から 1500㎜ 出ているものの支柱はなく、足部分が宙に浮いている状態である。

2-4. 構造形式

木造二階建ての伝統的な木造軸組構法の京町家である。礎石の上に柱が立ち建物を支えている。現状では見世の間が土間仕上げで 1 列 2 室型の間取りとなっている。間口は二間半、梁間は一階が五間半、二階が五間であり、軒高は 6044㎜、軒高は 4527㎜ となっている

3. 建物の変遷

3-1. 痕跡調査

残された痕跡を辿ると、大きく改築されていることがわかった。スポリアと思われる建具も二カ所程確認された。

しかし二階表の間の建具痕は当初のものではなく、初めは壁で埋められていたところを後世の改修で扉をつけたものと考えられる。

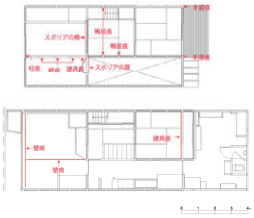


図 3.痕跡図面

3-2. 加工痕

釿等で木材の表面を加工している様子がみられる。ナグリとマルノコという加工が施されている部材が確認できた。

3-3. 類例調査

同じ蛸薬師通りに位置する祐森長右衛門所有の建物を参考に虫籠窓やガラス窓の位置を決定した。また乾物屋と関係のある麩屋格子を採用し、『格子の表構え』に表記されている三種類の寸法を比較した。その中から規模感の近いろうじ店舗の麩屋格子を参考に立面図を作成した。（図 5）

3-4. 当初の姿

以上の調査を踏まえて建物当初の姿を復原した。

3-4-1. 一階：表の間

入り口は約半分の幅にとどまり、代わりに平格子がはまっていたと考えられる。また空間が 2 つに分かれており、1 列 3 室型の一般的な間取りであったと考えられる。

3-4-2. 一階：奥の間

奥の間の南側一辺はくれ縁だった。境は 4 枚の建具で仕切られ、くれ縁と奥庭との間には 3 枚の建具と雨戸で仕切られていたと考えられる。

3-4-3. 一階：奥庭

建物配置等は不明である。便所だけの小屋があったと推測される。

3-4-4. 二階：表の間

通り沿いの壁には虫籠窓とガラス窓があったと考えられる。また部屋が 2 つに分かれており、西側の虫籠窓がある部屋は吹き抜けから滑車で荷物を運びこみ、倉庫として使っていたと推測される。

3-4-5. 二階：中の間

明かり取りのトップライトは瓦を葺き替え、後から設置されたものである。またデッキは材に鉄骨が使われていることから後から設置されたものだと考えられる。

3-4-6. 二階：デッキ

デッキが配置された柱に過去の手摺痕があることから、通常よりも高さのある縁の手摺があったと考えられる。

3-5. 未来に残すべき要素

歴史的な街並みを残すためには、本質を見極める必要がある。3D 化を進める中で明治大正時代の建具の美しさや職人の繊細な技を感じ取ることができた。そしてこれまで建物を使ってきた人々の生活も重要な要素である。建物の文脈を理解して活用することで、紡がれた歴史を壊すことなく建物に刻んでいく。本質とは、職人の繊細な技の中にあり、生活し、歴史を紡いできた空間にあると考える。

4. 結論

元は住居と店舗が共存している京町家が、時代が流れるにつれ、より店舗に特化した京町家へと変化した。急勾配な階段や危険性のあるベランダなどは改良の余地が残されている。所々に壁が剥がれ落ちていたり、材が歪んでいたりと経年劣化もみられた。伝統と使いやすさの均衡を重要視した保存活用を考えることが必要である。

図面という一次情報と広く人々が理解できる 3D 化を合わせて残すことで、記録保存の役割と認知度を高める目的を達成できると結論づける。

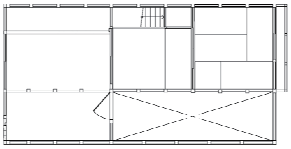


図 4. 当初の推定北側立面図

図 5. 現状の北側立面図



図 6. 現状の南北断面図



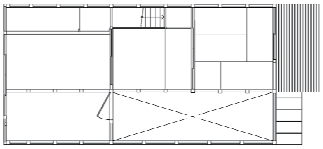




図 7. 当初の平面図



図 8. 現状の平面図

【参考資料】「京都商工人名録」小菅慶太郎 吉野久和編/「府県議会議員録」影山幸次編/「京都市及接続町村地籍図　第 1　附録」京都地籍編纂所編/「京都市及接続町村地籍図　第 2　附録」京都地籍編纂所編/「京都帝室博物館大和絵特別陳列目録　明治 42 年」京都帝室博物館/「格子の表構え　和を際立たせる意匠」京極迪宏著

町と川による交流の場

～伝統ある町並みで人と人が繋がる交流施設～

A place for interaction between town and river - A facility where people can connect in an old-fashioned streetscape -

学籍番号　K20285
名　　前　瀬島哲也
指導教員　山内貴博

Student Number　K20285　Name　TETSUYA Sejima
Supervisor　TAKAHIRO Yamauti

1. はじめに

私の地元である岡山県真庭市の人口減少を改善したく、地元観光地を使った地域活性化を提案する。観光客が訪れて真庭市の良さを知ってもらうために地域住民との交流を作ることで地域の魅力を理解してもらいたいと考える。

2. 敷地概要

2-1. 岡山県真庭市

岡山県真庭市は岡山県の北部に位置しており、県内で最も大きな市である。面積の約８割が森林という自然豊かな所であり、真庭市の観光資源となる。四季折々で移り変わる風景の他に食や文化、歴史、人など様々な観光資源がある。真庭市の北部の蒜山では寒暖差や火山灰からなる土から多くの高原作物が栽培されている。また南部は暖かい気候を生かしたピオーネなどのフルーツを栽培しており、作物が豊富な場所である。また、森林に囲まれていることから林業が盛んであり、バイオマス発電などの事業を行っている。(図１)
その中でも私は勝山町にある「勝山町並み保存地区」に着目した。

2-2. 勝山町並み保存地区

勝山町並み保存地区は江戸時代の美作勝山藩の城下町として栄えており、白壁や格子窓、なまこ壁などの江戸時代の街並みが残されている伝統的な町なみが特徴。また、昭和からは地元の染織物と関連づけてそれぞれの商店には個性豊かな暖簾がかけらており、「のれんのまち」として有名でもある。陸運の出雲街道と高瀬舟を使った水運により交通の要所として栄えており、政治、経済、文化の中心地となった。武家屋敷や酒蔵などの歴史的建物が保存されていることから、1985 年には岡山県で初の「町並み保存地区」に指定された。(写真１、２)


(図１) 真庭市の地図


(写真１) 勝山町並み保存地区


(写真２) 高瀬舟発着跡地

3. 保存活動

3-1. 改修工事

勝山町並み保存地区は歴史ある町並みを維持するべく保存整備がされた。1986 ～ 1989 年に第１回目の整備事業では郷土資料館や高瀬舟発着跡地などの修景を重点的に行い、41 戸の町屋と周辺環境を整備。第２回目は 1993 ～ 1997 年に行われ、民家の修復を中心に新たに観光客の休憩所や飲食店などの場所を整えた。この時に暖簾事業を取り入れ、保存地区の民家図ベ手に暖簾を掲げ、町の特色となった。この整備事業により、全国の「遊歩百景」に選定される。

3-2. 勝山重点景観づくり

勝山地区では歴史的資産を生かしつつ、市からの交付金事業による電線類地中化や散策道の美装化整備などの事業を行ってきた。また、地域住民団体による多彩なイベントや空き家の管理などを行い、観光客の増加を目指している。また、方針として重点的に整備が必要な地区とその周辺の地区と分けることにより、町並みの景観を保つために活動を行っている。

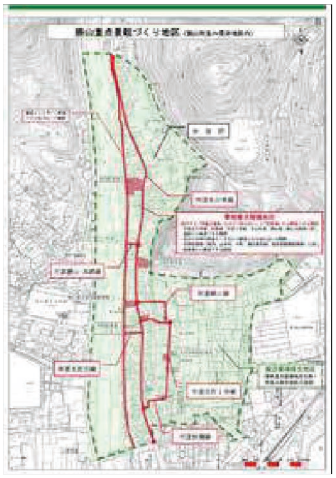
3-3. 問題改善

現在の勝山町並み保存地区では空き家を改修工事をして観光客の休憩所兼地域住民の交流の場や飲食店、空き家は駐車場にするなどの地域活性活動をしている。また、保存地区の周辺には新たに中央図書館を建設した。地元名物の喧嘩だんじりはコロナによりしばらくの間休止していたが、今年から再び再開したため、外部からの人を呼び込める。しかし、高齢化は年々進み続けているためいつの日か再復興出来なくなる危険性もある。真庭市はこの問題を解決するために活動しているため、自分もこの問題に向き合いたいと考える。


勝山喧嘩だんじり


暖簾事業


旭川



所在地：岡山県真庭市勝山町 161
主な用途：休憩所、交流施設
敷地面積：1796.25㎡
建築面積：1407.32㎡
延床面積：1629.82㎡
キーワード：交流施設・川・

Location : Katsuyama-cho, Maniwa City, Okayama Prefecture
Main Use : Rest area, social facilities
Site Area : 1796.25㎡
Building Floor Area : 1407.32㎡
Total Floor Area : 1629.82㎡
Keywords : Exchange facility,river

4. 計画概要

4-1. 設計趣旨

町並みと川、地域住民と観光客が交じることが出来るように計画した。まず、町並みから隔離された川に関係性を持たせるために道路と川を繋げるように横に長い建築物を計画した。これにより、川へのアクセスしやすくなり、自然を感じられると同時に高瀬舟発着跡地へ行きやすくなった。これにより、勝山地区の歴史をもっと感じられるようになった。横に長い建物は主に地域住民によるイベント活動が行えるような交流施設にした。観光客が訪れやすいようにイベント用のスペースの他にリラックスできるような空間を配置した。

4-2. 交流施設

１階部分に東西に長い土間を配置して、地域のイベントを行えるように計画した。また、町へ調査を行った際に自転車を利用する人が多いと感じたため、土間スペースに自転車を置けるように計画した。これにより、車以外でもアクセスしやすくした。土間に隣接するように畳の和室を配置した。この和室もイベント活動が行えるように２部屋が合併出来るように配置した。また、キッチンスペースを設けることにより、飲食に関するイベント活動も行いやすいように計画した。

4-3. 休憩スペース

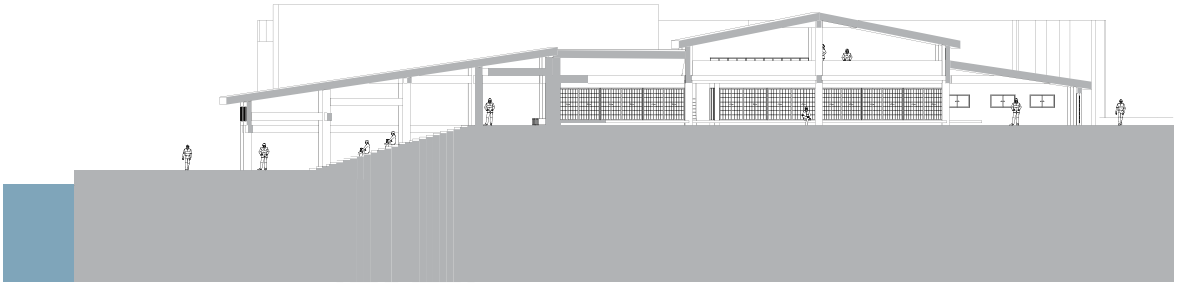
２階には１階の和室や土間とは異なり、フローリングの床のスペースにした。１階と区別させることで１階とは別の空間になり、観光客などが気軽に休憩できるスペースになる。１階の吹き抜け部分から下の様子が見えるので、観光客などの休憩以外に１階と２階を利用したイベントも行える。

4-4. 大階段

川側に大階段を設置して、高瀬舟発着跡地へアクセスしやすくなり、また大階段に座り、川や向こう岸の風景を楽しめる空間にもなる。移動以外に休憩や遊びの空間にもなる大階段はイベント活動にも使えるように計画した。

5. おわりに

今回の計画では勝山の町並みを生かし、また整備できていない高瀬舟発着跡地を整備して観光客が訪れやすいように町と川とを繋ぐ計画であった。町の歴史を受け継ぎつつ、現在の問題を改善していくのは中々難しいことである。地方での過疎化はどこであっても直ぐに解決できる問題ではない。この提案から今後より良い提案が出来れば良いと思う。



断面図



大階段パース



１階パース



川側パース

参考文献

岡山観光 WEB https://www.okayama-kanko.jp/spot/11347
真庭観光 WEB https://www.maniwa.or.jp/web/?c=spot-2&pk=47
真庭市ホームページ https://www.city.maniwa.lg.jp/soshiki/58/75076.html
岡山大学環境理工学部研究報告 岡山県真庭市勝山地区の町並み保存活動とその課題
https://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/files/public/1/11467/20160527191016623547/012_141_149.pdf

近代における上七軒花街の組織とその建築群（北野倶楽部の創設と変遷）

学籍番号　K20286
名　　前　染谷朋花
指導教員　井上年和

座敷　観覧席　舞台空間
防火壁　大広間　歌舞練場

1.初めに

1.2 研究目的

上七軒は、京都市上京区今出川通七本松西入真盛町に存在する京都最古の花街である。1912年に北野倶楽部が建設される。今回の研究では、お茶屋協同組合所から拝借した資料をもとに昭和13年の北野倶楽部を分析し、建築された建築群、舞台は、どのような平面構成を持ちどのように使われ方をしていたのかを、明らかにしていく。

2 近代京都の花街と北野倶楽部

2.1 近代京都の花街

この時代の京都花街では、街が悪習となっていた。その為明治三年京都府から布告が出された。この布告により茶屋女屋商売を運用するには、遊郭地ごとに会社を設立させ規則を決めなければならなくなった。明治5 年3 月に婦女職工引立会社芸娼妓が設立され、明治7 年4 月には、女紅場に改名される。今回の研究対象である上七軒では、女紅引立会社が設立された。

2.2 明治の上七軒花街

京都の花街が、組織を編成していく中で、八坂倶楽部と北野倶楽部倶楽部をつくっている。これは、京都のほかの花街とは、違う動きである。明治27 年4 月 2 日上七軒歌舞所の建設工事が開始され4 月23 日竣工予定、4 月22 日上棟式 5 月 7 日～9 日の三日間にわたり落成した歌舞練場で温習会が開催され明治37 年に謡曲會が北野倶楽部で開催されたという記載がある。このことから、北野倶楽部は、明治27 年から明治37 の間に建設された事がわかる。

2.3 近代における倶楽部の意義

北野倶楽部を研究していく中で、近代倶楽部がどのようなものであったのだろうか。

「近代の日本において倶楽部とは、「もろびと」が寄り合いて相談したり、書籍を読んだり、「さけくら」したりして遊ぶ場所」という記載がかなよみ新聞に存在する。この事から、場所や、空間を示す用語として用いられていた事が分かる。京都では、立ち位置であったのか、京都商工人名録を例に見ていく。明治38 年のものには、出張店のところに京都倶楽部という記載があり組織として記載がされているが、場所の記載が存在しない。しかし大正 3 年のものには、倶楽部の欄ができ、多くの倶楽部が名前とともに住所が記載されている。このことから組織であったものが倶楽部専用の建物を持つようになった事が伺える。

3.敷地内建築の変遷

3.1.1 敷地内建物の変遷

大正元年10 月22 日の大阪朝日新聞京都附録によると北野神社楼門脇に歌舞音曲演奏の理想的な設備が整った「北野倶楽部」が整備されたとある。このことから大正元年には、宴会場が建設されたことがわかる。図1



図1 大正元年頃の北野倶楽部_中庭ヨリ中三階座敷ヲ望ム
お茶屋協同組合所蔵

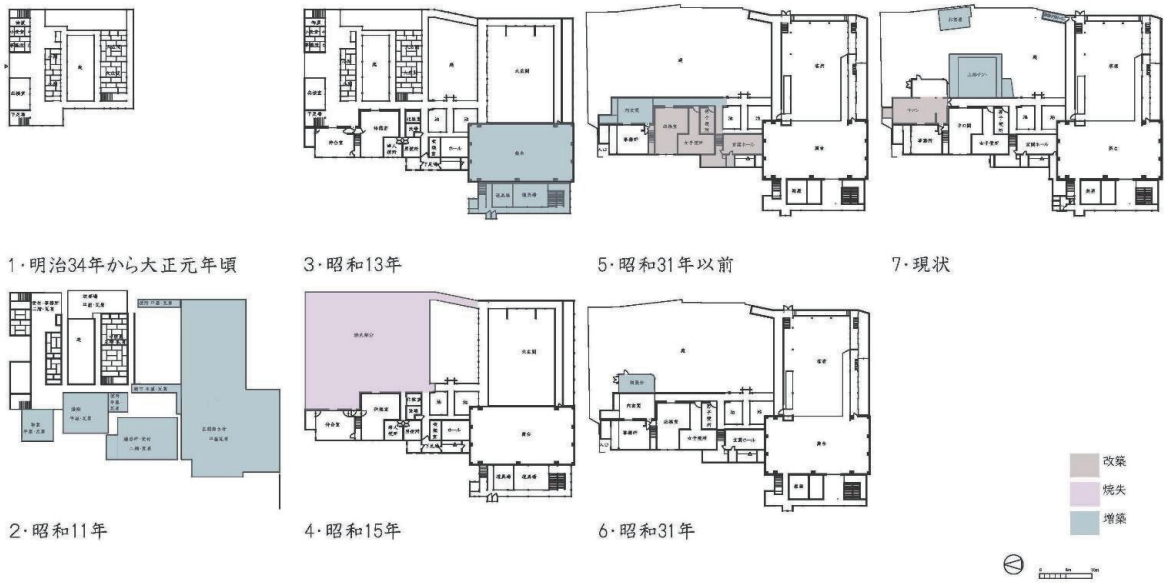


図2　北野倶楽部　変遷図

から三階建ての建物が建てられていたことがわかる。
お茶屋協同組合所から拝借した図面より以下のことが、推測できる。昭和11 年に舞台付廣間・炊事場。湯殿・湯呑・受付がつくられ、昭和13 年に演舞場が増築される。昭和15 年事務所棟・大広間棟部分が焼失。焼失。昭和25 年にダンスホールとして使うために、桟敷が取り払われる。昭和31 年の増築図に、廊下、内玄関、お茶室が書かれていることから、昭和31年までに増築されたことがわかる。昭和31 年に現在のサロン部分が増築され、昭和32 年観覧席が椅子式となる。平成18年に、外壁空調設備、便所の改修がなされる。その後中庭のテントが現在の形まで広がり現在の形となる。
3.2.2 各建物の詳細
今回、昭和13 年の敷地の状況に重点を置いていく。この敷地内の建築群には、3 つの特徴がある。
1.演舞場棟、待合棟、事務所棟、大広間棟の4 つの棟からなる
2.4 つの棟が廊下でつがっている
3.待合棟の周りが厚さ255ｍｍの防火壁で囲われている
3.2.3 防火壁
「建築面積200 坪以上の建築物には、建築面積200 坪以内ごとに防火壁を設けろただし、外壁、床、屋根、柱及階段が、耐火構造であるとき、もしくは壁体、床、屋根、天井、小屋、柱及階段不燃材料で構成されているとき又は地方長官がその用途によりやむを得ず認められるとき、もしくは土地の状況によって特に支障なしと認められる時にはこの限りではない。」
という規定がある。図面から、建築面積をだすと、表1、表2 である。このことから200 坪超えることから、防火壁を建設するために、替えられたのではないだろうか。更に細かな規定を見ていくと、
「第三十条 前二条の防火壁の構造は、左の規定とする。
一 耐火構造とすること。
二 両端は、外壁に達すること。ただし、木造建築物の場合近接する木部より一尺（303ｍｍ）以上屋外に突出することという記載がみられる。当時の図面（図４）を見ると突出していることが伺える。このことから当時の建築基準法を守った建築物だったことがわかる。
3.2.4 演舞場棟
部屋の規模から「観覧席」と「大廣間」の二つは、
同じ部屋だと思われる。
天井は格天井でありシャンデリアがつけられていることが分かる。左右には、欄間がはめられており欄間内に上七軒のマークである、七軒団子がかかれている。観覧席として使用する際は、左右の建具は、襖であり後方部の床の間は、襖で隠されている。客席は、桟敷席であり、後方に行くにつれて高さがあるものが置かれていることがわかる。また、花道もおかれている。大広間として使用する際は、床の間があり、不祝義敷きで畳が敷かれていることが分かる。
左右の建具は、雪見障子となっていることが分かる。
後方には、床の間があり、「床の間」「床脇、」「出入口」がある。床脇には、書院がつけられている。書院は、天袋、地袋、が設けられている。床の間と床脇の間の床柱が中抜きとなっている。床の間には、畳が敷かれている。

3.2.5 待合棟
二階建て、「待合室」「休憩室」「便所」「喫煙所」「化粧室」「洗場」「下足場」「玄関ホール」が一階にある。
図５から玄関の扉には、ガラスがはめられており、竹梅の模様がある。左右の柱にライトがある事がわかる。玄関庇は陸屋根であることがわかる。
この玄関扉のガラス戸と同じデザインの物が現在サロンの窓として2 枚使われている事がから確認することができ、改修の際に転用されたのではないだろうか。
3.2.6 事務所棟
二階建て、切妻屋根、「4.5 畳の小間」「６畳の小間」「小便室（4 畳）」「事務所（6 畳）」「物置」「応接室」「下足場」が一階にある。
現在は、事務所棟の前にある、塀のみが残っている。
3.2.7 座敷棟
二階建て、「広間（12,5 畳）」の二部屋が一階にある。この部屋は、二部屋とも床の間がつている。
屋根の西側が、防火壁に接していることから、防火壁側は、切妻屋根。東側は、入母屋屋根であったのではないだろうか。
4. 結び
京都中心から離れた場所で、狭い敷地の中でありながら祇園にある八坂倶楽部と同様に使用できる施設が作られていた。
北野倶楽部は、当時の法律を守りながらの設計ではあったが、敷地に対しての建物の密度高い土地となってしまっていた。そのため火災が起こった際に「座敷棟」「事務所棟」の二棟が損失する結果となってしまったのではないだろうか。
その後北野倶楽部では資金の調達ができなかった為か、宴会場が必要でなくなったのか定かではないが再建される事はなかった。この事を踏まえると昭和13 年の規模の物は必要だったのだろうか。


図3 上七軒北野會舘観覧席
お茶屋協同組合所蔵

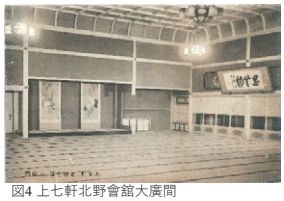


図4 上七軒北野會舘大廣間
お茶屋協同組合所蔵

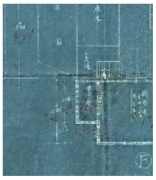


図5 上七軒北野會舘平面図
お茶屋協同組合所蔵


図6サロン「歌舞練場を借りる」
上七軒歌舞会
https://www.maiko3.com/
（2024/01/15）


図7 上七軒北野會舘北玄関
お茶屋協同組合所蔵

街を舞台に 日常に劇場を

学籍番号　K20287
名　　前　髙嵜温
指導教員　宮内智久

Theater in everyday life

Student Number　K20287
Name　HARUHI Takasaki
Supervisor　TOMOHISA Miyauti

1. はじめに

1-1 経緯
　より多くの人に舞台空間に触れ合うことでしか味わえない、息遣いや温度感など五感を直接刺激する感覚を知ってもらい、舞台芸術における文化力の向上を目指したいと考えた。

2. 敷地について

2-1 所在地
〒 600-8207 京都府京都市下京区上之町 [図 a]

2-2 選定理由
　文化庁が首都から京都へ移転してきたことも考慮し、芸術の先駆けとなる土地であること。また、京都駅と京阪七条駅の両方から徒歩圏内であり、京都府外からも公共交通機関を利用し、訪れやすいという点。
　実際に通学路として利用した時には、駐車場とフェンスに囲まれたという寂しい印象を受けた。計画を行うことで土地を有効活用できると考えた。

3. 計画にするに当たっての課題

3-1 舞台芸術の振興について
　舞台芸術という文化はリアルコミュニケーションを伴うため COVID-19 感染症の流行により、衰退してしまった文化の一つだ。現在は回復傾向にあるが、まだまだ活気のあるとは言えない状況である。これからの発展を目指すには、広く多くの人に知ってもらうことが不可欠であると考察する。

3-2 劇場の利用について
　利用者が減少したため、機能の停止や、用途を変更して運営する劇場が増えた。劇場という限定的な要素が強い特殊建築物は、利用されていない時間が存在する。特に大きなホールとなれば、利用可能な日数の半分ほどしか利用されていないことがわかる。[図 b] さらに、作品のジャンルや年代、内容によって求められる形態は様々であることから、自由度の高い劇場が必要なのではないか。

3-3 次世代の育成について
　インターネットの発展やコロナ禍の影響により、オンラインでの交流が浸透した十代、二十代にとっては、生の舞台との距離が遠くなった言える。次世代の育成のためにもコミュニティの確立や、若者が自らの意思で事業を企画し、実行することによって、同年代に舞台の魅力を伝えることのできる場所及び環境が必要なのではないだろうか。[図 c]

4. 課題に対する提案

4-1 舞台芸術の振興について
　まだ、認知していない人にも届くように、街中に溶け込み、日常に芸中を感じることのできる空間を設計する。

4-2 劇場の利用について
　公演時以外は別の用途として使用できるフレキシブルな舞台が必要である。最もその作品に適した空間を作るために、その時々に合わせて舞台を組むことを前提とした設計を行う。

4-3 次世代の育成について
　劇場に付随したレッスンスペースやレンタルスペースを設計し、コミュニティの発表や企画を行えるような動線を確保する。

所在地 : 京都府京都市下京区上之町 6
主な用途 : 劇場
敷地面積 :6033m^2
建築面積 :1886m^2
延床面積 :3466m^2
キーワード : 劇場・路地・身体表現

Location : 6,kaminotyo,shimogyoku,kyotoshi,Kyoto
Main Use : Theater
Site Area : 6033m^2
Building Floor Area :1886 m^2
Total Floor Area : 3466m^2
Keywords : Theater,Alley,Physical expression

6. 設計内容

今回の設計は、公演時以外の場面でも機能性を失わないために、劇場以外の用途のあるエレメントも多く存在するが、それらを共存させるために、エリアごとの回遊性を考慮した。また、利用者は観客だけではなく、建物で働く者や舞台の出演者も含まれるので、どの目線からも利用しやすい設計を心掛けた。景観を阻害しないためにシンプルなデザインながら、印象に残る規模の建築物を目指した。

6-1 ホール①
最もオーソドックスなプロセニアムの形式の中規模ホール。
アクティングエリア 12m × 6m
収容人数 200 人
推奨：バレエ・オペラ・ミュージカル

6-2 ホール②
芸術に限らず、イベントを行うことのできるホール。
アクティングエリア 27m × 12m

6-3 屋外舞台エリア
公演の度に無体を組まなければいけないという手間はあるが、自由度の高い作品を上映することができる。上演時以外は駐車場として利用する。
推奨：コンテンポラリーダンス・演劇・演奏

6-4 レンタルスタジオ
ダンスレッスンや芝居の稽古にも使用することのできるレンタルスタジオ。高い天井を利用し、ポールダンスなどの特殊なジャンルの練習も可能。
アクティングエリア 10m × 6m
推奨：ダンス・コミュニティースペース

6-5 ギャラリー
美術作品を展示するギャラリーを最上階に置くことで、舞台芸術への興味の誘導を促す。

6-6 ホワイエ
グランドピアノが置かれたガラス張で開放感のあるホワイエ。全ての場所につながるジャンクションの役割を果たす。

6-7 屋外テラス
出演者も利用可能な高瀬川へ開く屋外テラス

7. 参考文献

小川俊朗
『劇場工学と舞台機構』オーム社 2000.04.20
コトブキシーティングアーカイブ
『 劇場建築とイス 客席からみた小宇宙』ブックエンド 2019.12.02
日本建築学会
『劇場空間への誘い - ドラマチックシアターの楽しみ -』鹿島出版会 2010.10.01
新日本建築家協会篇
『DA 劇場・ホール』彰国社 1992.06.01
山崎泰孝
『劇場の計画と運営 - やわらかい建築へ -』鹿島出版会 2000.02.01
ユニハ・パッラスマー
『 建築と触覚 空間と五感をめぐる哲学』草思社 2022.12.13

劇場・音楽堂等の活動状況に関する調査報告書
https://www.zenkoubun.jp/publication/pdf/afca/r04/r04_activity.pdf

縁を紡ぐ～黒岡川のにぎわい再生～

学籍番号　K20289
名　　前　田島春菜
指導教員　根來宏典

1. 背景と目的

1-1 社会問題

現代では、地方の人口減少や地域社会の低迷が深刻な課題となっている。令和２年の国勢調査では、人口集中地区に総人口の 70%にも当たる、8829 万人が住んでいることが分かる。経済的な支援問題や地方の教育機会が限られていることが要因で、より住みやすい都市部へ若者や専門職が移り住む流れが出来ている。

また、都市部に住んでいる人でも地方の商業の多様性がないため、働きたいと思える雇用口が少ないことが、地方に移り住むことが難しくなっている要因として挙げられる。これらのことから、地域の働き手が減少することで地域企業の衰退し、少子高齢化が進むことで高齢者の単身世帯が増え、地域コミュニティの希薄化に拍車がかかっている。

兵庫県丹波篠山市も人口減少や少子高齢化に伴い、地域社会の空洞化が課題として挙がっている。

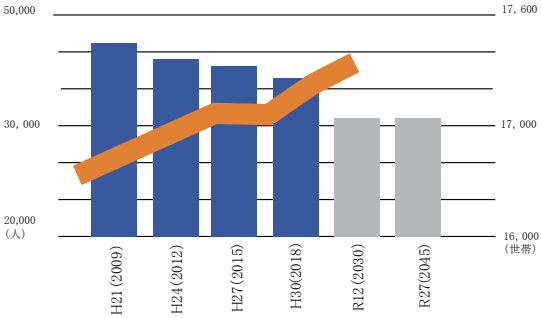


図１：人口・世帯の推移と将来推計人口

国立社会保障・人口問題研究所『日本の地域別将来推計人口（平成 30(2018) 年推計）』より

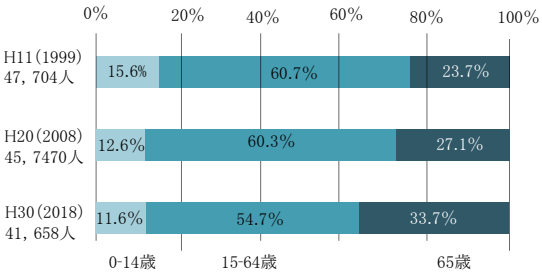


図２：年齢別人口割合の推移

市民生活部市民課　（総務省『住民気泡台帳人口・世帯数』に基づく）より

国立社会保障・人口問題研究所の『日本の地域別将来推計人口（平成 30（2018）年推計)』より人口減少に比例して世帯数のグラフが上がっていること（図 1）と、市民生活部市民課『年齢別人口割合の推移』より高齢者の割合が増えているため、高齢者や単身世帯が増えていることがグラフから読み取れる。

地域社会に若者が少なくなっているため、地域文化の担い手も徐々にいなくなり、地域で大切にしていたものを後世に残せなくなる問題が考えられる。

Spinning the Edge

～ Spinning and Succeeding to a Small Edge ～

Student Number　K20289
Name　TAJIMA Haruna
Supervisor　NEGORO Hironori

1-2 計画の目的

これらの問題を踏まえて、地方に住む選択を増やすためには、その地方の魅力を再発見し、その地域に住むことの意味を見つけていかなければいけないと考えた。

そこで、地域住民同士、地域住民と移住者、移住者同士が気軽にかかることのできる新しいコミュニティの再建を行う。

移住する際の問題点として、雇用機会が少ないことを解決するために、気軽に移住者自身で開業ができ、開業せずともコミュニティ空間を創ることができる職住一体型集合住宅を提案する。

住居と飲食などの施設ごとに分けられている建物を計画すると、プライベート空間とコミュニティ空間が明確に別れてしまう。プライベートを確保しすぎてしまうと、地域の一員だという意識が薄くなり、地域の問題について耳を傾けたり考えたりすることがなくなる。

また、その土地の人柄を感じる機会も少なくなるため、その土地に住む意味を感じられないまま生活することになってしまうのではないだろうか。

そこで、広い土間をもつ職住一体型住戸を計画することにより、プライベート空間にコミュニティ空間を引き込むことで、自分自身の生活と地域の生活が交わる空間が増えることを目的としている。

1-3　選定敷地

選定敷地は、兵庫県丹波篠山市東新町とする。丹波篠山市は、古くから京都と山陽・山陰を結ぶ旧山陰街道の要衝の土地であった。江戸時代になると篠山城が築城された。城下町は、城を中心に計画的に整備され、武家町と商家町が明確に分けられている。市の中心市街地では現在でも土地割ごと保全・継承され、多くの市民が住み続けている。

選定敷地は、篠山城後の東側に位置し黒岡川に隣接している。南には古い町並みが残る河原町妻入商家群があり、北には昔からの商店が並んでいるデカンショ通り商店街や下二階町商店街などの観光スポットに囲まれている。近くには、丹波篠山市役所・篠山小学校・篠山こども園などがあり、子育て環境にも選びやすい。

現在は空き地であるが、江戸時代には寺、明治時代に「東雲座」という芝居小屋に変わったが焼失した。その後、大正時代に「楽天座」として生まれ変わり、昭和になってから映画館として活用されていた土地である。
また、隣接している黒岡川は篠山城の外堀として利用されていた。数十年前までは、子どもたちの遊び場であった。

過去に失われた賑わいがあったことと、失われたままで現在でも活用されていない空き地であったため、今回の敷地として選定した。

所在地：兵庫県丹波篠山市東新町
主な用途：集合住宅　公園
敷地面積：2857㎡
建築面積：1076.86㎡
延床面積：1720.67㎡
キーワード：地域復興　集合住宅　職住一体　公園　河川

Location ：Higasisinmachi ,Tanbasasayama,Hyogo
Main Use ：apartment,park
Site Area ： 2857㎡
Building Floor Area ： 1076.86㎡
Total Floor Area ： 1720.67㎡
Keywords ： Community reconstruction, housing complexes, integrated work/residence, parks, rivers

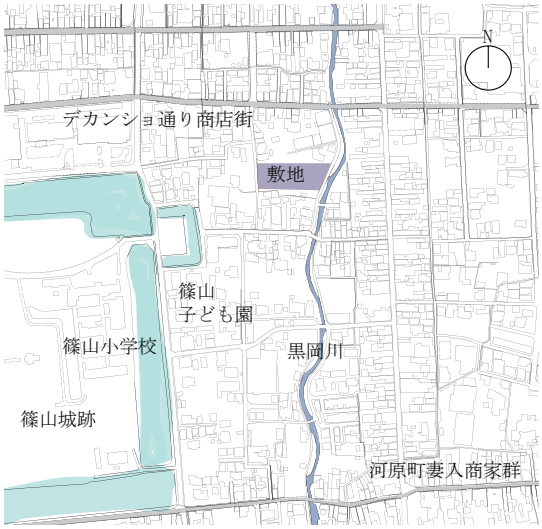


図４：敷地付近見取り図

2. 計画の概要

2-1 プログラム

敷地には、集合住宅とカフェ、公園・水路を計画する。

19 戸の職住一体型集合住宅をつくり、住戸には屋外の延長になるように繋げて使える広い土間スペースを併設した。その空間は、主にリビングやダイニング隣接するように配置したため、各住戸の特徴が空間に反映されやすい。

土間の使い方は、各住人の自由である。商店やアトリエ、レストランなど常に外に開く使い方もできる。また、週末だけ店や第二リビングとしても使用可能である。

地域住民の交流場所として、黒岡川の遊歩道の延長沿いになるように公園を計画した。この公園は、敷地がもともと映画館だったこともあり、公園に集まって屋外上映会やマルシェなどのイベントが行えるようにした。また、公園には子どもが遊べる水場と水路を計画し、丹波篠山の豊かな水環境を生活のすぐそばで感じられるようにした。

河原町妻入商家群や商店街、篠山城跡の観光ルートの中継地としても活用できるように、敷地内にベンチを配置したり、里山料理が食べられるカフェを計画する。

2-2　コンセプト

コンセプトは、「縁」である。

本計画も、地域に残されてきた歴史を大切に残し、衰退している地域社会を活性化させ、丹波篠山という都市が廃れることなく存続することを狙う。

そのためには地域に受け入れられやすいデザインにした。河原町妻入商家群のように妻入りのデザインにすることで、地域住民や観光客でも商売を営んでいることが一目で分かるようにした。

仕事を通して地域との関りも深くなることで、人情を含めた土地の良さをより見つけやすくなると考えた。

広い土間・庇・縁側・植栽などの余白を残し、住民自らが住まいに手をかけることで豊かな暮らしを実現できる。この集合住宅で先に地元住民との縁を紡ぎ、その後、丹波篠山市の好きな住宅に引っ越してそこでまた新しい縁を繋いでいく。

敷地内の縁が紡がれて、継いで行くことで地域全体に縁と賑わいが広がるように計画した。


図５：西側正面パース

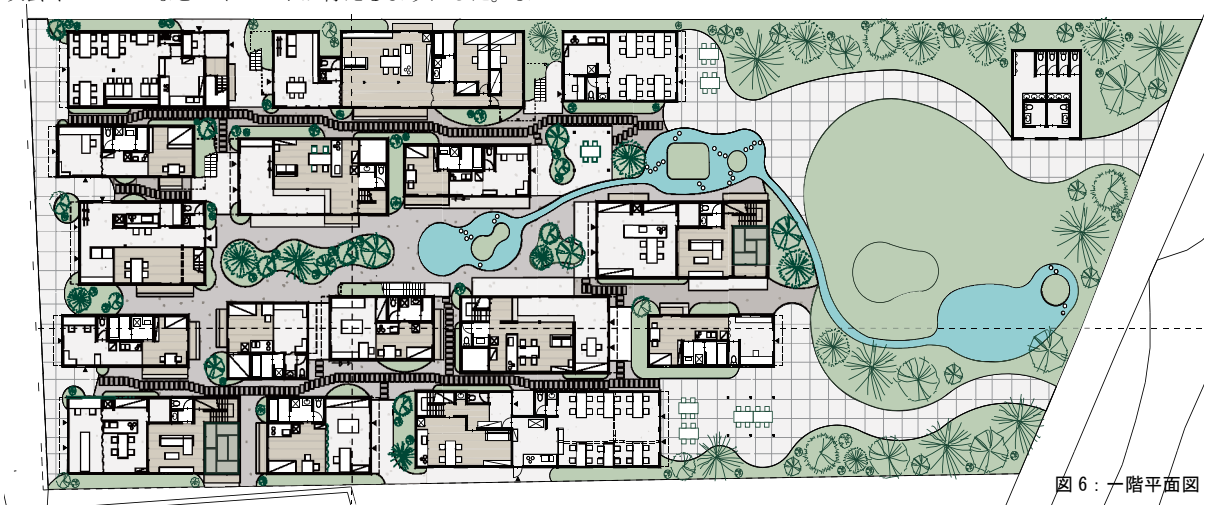


図６：一階平面図

未来に渡すターミナル

－木造船の復興と伝承－

学籍番号　K20290
名　　前　辰己翔真
指導教員　安田光男

Terminal handed over to the future

-Revival and inheritance of wooden ships-

Student Number　K20290
Name　TATSUMI Shoma
Supervisor　YASUDA Teruo

1. はじめに

日本には様々な文化や産業がある。この数多くある文化や産業の中から代表的に日本を支えてきた漁業と林業というものに着目した。そして、その２つをつなぐ木造船文化、つまり、造船業について焦点を当てた。

海に囲まれた日本というこの場所はかつてより漁業が盛んである。その漁業を行うには船が必要である。また、日本は森林にも囲まれている。その木を利用した船、木造船というものがある。木造船という文化はかつての日本の暮らしに深く関わっていた。しかし、現在では、木造船という文化はほとんど無くなっている。この木造船文化を復活させ、かつての日本の文化、伝統を取り戻すことを目指す。

2. 敷地概要

2-1. 岡山県瀬戸内市牛窓町

牛窓町は岡山県の南部に位置し、瀬戸内海に面する地域である。瀬戸内海に面していることや温暖なことから、「日本のエーゲ海」と呼ばれるほど綺麗な風景が見られる場所である。観光産業、農業、水産業など様々な産業が盛んである。

リアス式海岸による複雑な地形により、潮流が速く、複雑になっていて、かつてより「潮待ち港」として多くの船に利用されてきた。(図 1)

2-2. 牛窓の造船業

牛窓は潮待ち港として多くの船に利用されてきた。また、瀬戸内海に面しているこの地域は漁業が盛んであった。そのため、かつてより造船業が盛んであった。「船作りを学ぶなら牛窓に行け」と言われるほどであり、「牛窓名所うらづたひ」によると江戸時代には既に造船が盛んであった。

造船が盛んであった理由として、潮待ち港として利用されていたこと、職人が高い技術をもっていたこと、造船に必要な杉などの木材が手に入りやすかったことが挙げられる。(写真 1)

3-3. 牛窓だんじり

牛窓では「牛窓だんじり」と呼ばれるだんじりが毎年行われています。牛窓町内のだんじりの多くは船形になっていて、龍、獅子や麒麟などの頭がついている。この地方の船大工や宮大工の棟梁によって江戸時代から明治にかけて作られている。牛窓には、８基が伝えられ、岡山県重要有形民族文化財として指定されている。(写真 2)

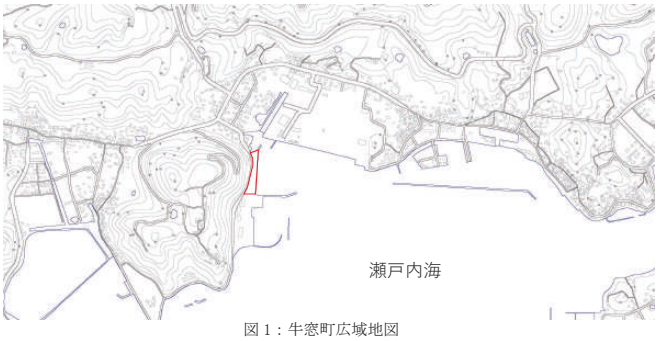


図 1：牛窓町広域地図

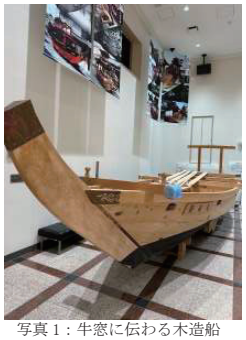


写真 1：牛窓に伝わる木造船

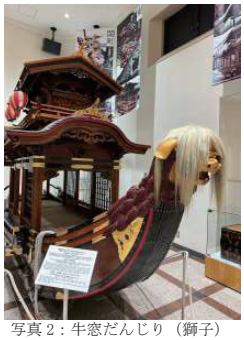


写真 2：牛窓だんじり（獅子）

3. 造船業の現状

3-1. 日本の造船業

日本は漁業大国である。そのため、造船業も盛んで、日本の造船業はかつてシェア率 50%を誇っており、世界一の造船大国であった。しかし、2008 年のリーマンショック以降徐々に減少していった。その理由として、少子高齢化による船大工の減少などが挙げられる。それにより 2019 年には、24%にまで減少し、かつて、世界一だった日本は、中国、韓国に抜かれ 3 位にまで落ち込んでいる。(図 2)

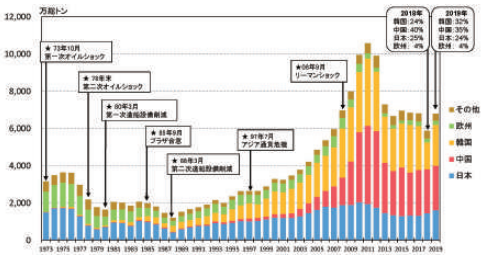
3-2. 木船造船業

日本では森林が豊富であったため木造船が多く製作されていた。昭和 39 年（1964 年）には木船造船業の企業数は約 1300 にも及んだ。しかし、日本の造船業と同じく、少子高齢化による船大工の減少や強化プラスチック製の船の普及によって現在では、ほとんど無くなっている。(図 3)

3-3. 木造船のメリット、デメリット

木造船は減少していっているが、木造船を利用することのメリットは数多くある。メリットとして、揺れがゆったりとしていて、船上での作業が行いやすいこと、丈夫なこと、見栄えが良いことが挙げられる。デメリットとしては、価格が高いこと、強化プラスチック製に比べてスピードが遅いことが挙げられる。

遊漁などのお客を乗せる場合やスピードが求められない漁などに利用する場合には、強化プラスチック製の船よりも木造船を利用するほうが揺れがゆったりで、作業しやすいため良いとされている。



国土交通省より

図 2：新造船建造量の推移

		企業数	造船工場従業員数	38 年度進水量
鋼船造船業	大手造船業	16 社	約　110 千人	252 万総トン
	その他の造船業	430	約　40	32
計		446	約　150	284
木船造船業		約　1300	約　20	5

昭和 39 年（1964 年）　運輸白書より

図 3：我が国造船業（鋼船造船業、木船造船業別）概況表

所在地：岡山県瀬戸内市牛窓町牛窓
主な用途：造船所、ターミナル
敷地面積：6264m^2
建築面積：1431m^2
延床面積：1467m^2
キーワード：木造船・造船所・ターミナル

Location ：Ushimado, Ushimado-cho, Setouchi City, Okayama Prefecture
Main Use ： Shipyard, Terminal
Site Area ： 6264m^2
Building Floor Area ： 1431m^2
Total Floor Area ： 1467m^2
Keywords ： Wooden Ship, Shipyard, Terminal

4. 計画概要

4-1. 造船業復興プログラム

造船業を復興を目的として計画した。造船業を復興するために３つのプログラムを計画した。「船大工育成プログラム」「木造船の製作、修理」「伝統的な木造船の展示、利用」の３つである。

4-2. 船大工育成プログラム

船大工育成プログラムでは、名前の通り、船大工を育成する計画である。船大工育成所をつくり、地域の船大工や残っている文献から伝統的な木造船の造船技術や近代の船の造船技術を学ぶ。メインとなるのは木造船の造船技術を学ぶことだが、座学として近代の船の造船技術も学ぶ。

船大工を育成することで、衰退していっている造船業を復活させる。近代の船の造船業も学ぶことで、将来的に、木造船の造船業だけではなく、日本の造船業自体の復興を目指す。

4-3. 木造船の製作、修理

木造船に関する書物などをもとに復元、製作する。プロの船大工が単に製作するのではなく、船大工育成プログラムの生徒と共に学びながら木造船を製作する。また、製作した木造船の修理やメンテナンスを行うことで長く使用できるようにする。

船大工育成プログラムの生徒と共に製作することで、学びを深めることや、木造船自体を増やし木造船文化というものの復活を目指す。

4-4. 伝統的な木造船の展示、利用

牛窓だんじり祭りの山車や伝統的な木造船を展示する。小規模なターミナルをつくり、選定敷地の近海にある前島、黒島を木造船でつなぐ。この木造船には船大工育成プログラムの生徒が製作したものを使用する。(図 4)

伝統的な木造船を展示することで、昔からの伝統を忘れずに受け継いでいく。また、木造船の歴史を知ってもらう。木造船を実際に利用することで、生徒たちのモチベーションを上げることや木造船の良さを知ってもらうことが目的である。

4-5. 計画まとめ

造船業復興プログラムで船大工の育成から製作、修理、展示、利用まで行うことで、単に木造船を製作して終わりではなく、生活の中に造船業文化や木造船文化が入り込み、生活の一部となることを目指す。将来的に、この場所で学んだ船大工たちが全国に広がり、造船大国であった日本を復活させることが目的である。

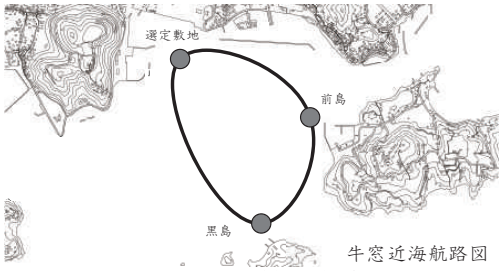


図 4：ターミナルと前島、黒島の航路


図 5：瀬戸内海側からのパース

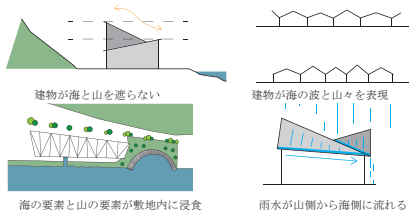


図 6：ダイアグラム

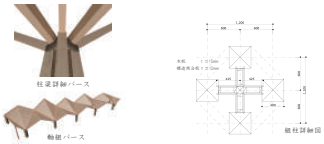


図 7：木構造図

5. 設計概要

5-1. 設計趣旨

海と山に囲まれたこの敷地を活かし、「海と山をつなぐ」をコンセプトとした。この敷地に建築することで海と山を遮るのではなく、これまで以上に海と山をつなぐ役目を果たせるように計画している。屋根の形やランドスケープなどの平面的要素と断面的要素の双方で海と山をつないでいる。木構造で架けた屋根は、舟屋をイメージして計画しつつ、海の波、山々を想像させるデザインとした。敷地内に海の要素と山の要素を浸食させ敷地内で交わるようになっている。敷地内に自然の要素を散りばめつつ、建物全体を木造にすることで、自然に囲まれたこの場所の中に溶け込むように計画した。(図 5.6.8)

5-2. 木構造

造船所、ターミナル利用のための大空間を確保するために、4 本の 400 ｍｍ角の柱を接続し、4 本柱とし、垂直荷重に耐えられるようにしている。すべての 4 本柱間に耐力壁と火打ち梁を挿入することで、水平力にも耐えられるようにし、剛性を確保した。また、最大 5 本の梁が柱に集まるので、その梁が 4 本の柱に分散するようになっている。

6. おわりに

今回の計画では、日本の伝統的文化である造船業、木造船文化を復興し受け継いでいくための提案を行っている。この計画によって、現在進行形で失われてしまっている木造船という文化を復活させ、昔のように生活の一部となることを目指している。今の日本では、強化プラスチック製の船だけに限らず便利で手軽なものは様々な場所に多く存在する。しかし、便利で手軽なものが必ずしも良いわけではなく、作ることが大変なもの、日本の技術力でしか作れないものにも良いものは数多く存在する。今回の計画では、木造船という日本の技術に着目し、取り上げることで、そのことを思い出すきっかけになればと考える。今後も、失われつつある日本の伝統を建築的な視点で考え、未来につないでいきたい。

7. 参考文献・引用文献

岡山県牛窓町における地域産業の現状と課題　中島茂・青山法子・横田由美子・郭芳串　https://www.jstage.jst.go.jp/article/sanyor/11/0/11_KJ00005162080/_pdf
牛窓港の「みなと文化」　金谷芳寛　https://www.wave.or.jp/minatobunka/archives/report/076.pdf
瀬戸内海地域振興助成　成果報告アーカイブ　aiue 絆協議会　中村和美　https://fukutake-foundation.jp/archives/archive_seto/586
東海岡山県人会　活動報告　森藤勝利・中村葉子　https://ameblo.jp/okayamakenjinkai/entry-12695845901.html?frm=theme
造船業の現状と課題　国土交通省　https://www.mlit.go.jp/common/001353025.pdf
運輸白書　２日本造船業の現状　https://www.mlit.go.jp/hakusyo/transport/shouwa39/ind090201/002.html

勝山左義長まつりの継承と地域交流

学籍番号　K20291
名　　前　立壁百葉
指導教員　人見将敏

Succession of Katsuyama Sagicho Festival and regional exchange

Student Number　K20291
Name　TATEKABE Momoha
Supervisor　HITOMI Masatoshi

1. はじめに

勝山市について

福井県勝山市は、人口約 22,000 人のまちで、四方が山に囲われており、市の中央には「九頭竜川」が流れる自然豊かな地域である。「苔寺」として有名な国史跡の「白山平泉寺」や西日本最大級のスキー場である「スキージャム勝山」、世界三大恐竜博物館である「福井県立恐竜博物館」があり、星野リゾートの進出など観光まちづくりに力を入れている。

また、勝山市は、北陸地方屈指の豪雪地であり、市街地でも１ｍ以上の積雪となる年が多くみられる。



図1. 地域の特徴例(スキージャム勝山)

計画背景

勝山市は、さまざまな観光資源や伝統といった魅力がある一方で、急速な少子高齢化や人口減少が問題となっている。このままでは、若者が中心となって行われる「勝山左義長まつり」も存続の危機にある。私自身も参加していた、勝山市の伝統文化をなくさないためにも、まつりへの参加者を増やすことが必要だと考えた。現在は、勝山市の 13 区が拠点となっており、その地域に住む人々がまつりに参加しており、他の地域からも参加者を集めている。しかし、まつりのための練習場や地域の交流の場が充実していない。そのため、まつりの区域外に住む人々も参加できるような交流の場を提案をしようと考えた。

2. 勝山左義長まつりについて

勝山左義長祭りは、年中行事として三百年を超える伝統をもち、旧勝山町域の 13 区で行われている。街中に色短冊が揺れ、２階建ての左義長櫓の上で、三味線、篠笛、鉦が「蝶よ花よ...」からはじまるおはやしに合わせて、三人一体となった浮き手が太鼓を叩いて浮かれ踊り、まちに太鼓の音を響き渡らせることが特徴である。



図２. 勝山左義長まつりの様子

現在は、２月の最終土・日曜日に行われており、春を呼ぶ奇祭として人々に親しまれている。最終日には、各町内の御神体が弁天河原に運び込まれて、「どんど焼き」の準備がはじまる。この「どんど焼き」は、火の神を祀り、幸福を祈願し、炎難除けを目的としたもので、のろしを合図に一斉に御神体に点火され、冬空美しく雪に映えて、燃え盛る炎の競演とともに、まつりのフィナーレを迎える。



図3. どんど焼きの様子

また、櫓は、入母屋造りと切妻造りがあり、１階部分は控え場、２階部分の畳敷きの舞台でおはやし太鼓が披露される。勝山左義長櫓は、本格的な木造建築の形式を持つが、組み立て式であることが大きな特徴である。

3. 敷地

計画の対象敷地は、勝山左義長まつりが行われる旧勝山町域の 13 区内のエリアである。

どの櫓も各地区の住宅地域内に置かれるが、それぞれ周辺環境に違いが見られる。私は、まつりが行われる地域の中心にある上袋田区、車通りが多い道路沿いにある沢区、少し入り組んだ住宅街にある下長渕区の３つの違いのある地域をピックアップしてそれぞれ計画を提案する。

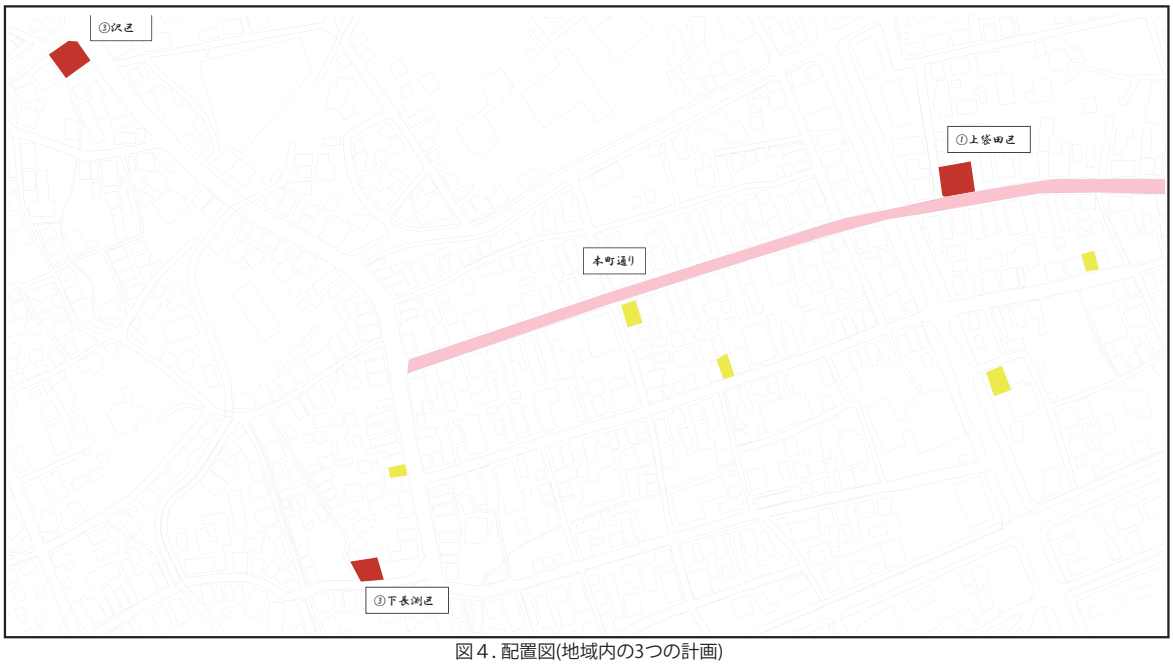


図４. 配置図(地域内の3つの計画)

所在地：福井県勝山市
主な用途：櫓倉庫、地域交流地
敷地面積：① 404 ㎡、② 416 ㎡、③ 519 ㎡
建築面積：① 131 ㎡、② 220 ㎡、③ 240 ㎡
延床面積：① 131 ㎡、② 220 ㎡、③ 253 ㎡
キーワード：まつり、交流

Location ： Katsuyama,Fukui
Main Use ： Yagura warehouse
Site Area ： ① 404 ㎡、② 416 ㎡、③ 519 ㎡
Building Floor Area ：① 131 ㎡、② 220 ㎡、③ 240 ㎡
Total Floor Area ： ① 131 ㎡、② 220 ㎡、③ 253 ㎡
Keywords ： festival,Regional exchange

4. 計画内容

3 つの建物には、以下の共通する用途を設定した。

・櫓倉庫、練習場、楽器などを練習する個室、トイレ、楽器をしまう倉庫
・まつりの期間外でも地域行事やワークショップなどに利用すること

①下長渕区

この区の計画は、敷地の形に合わせて、櫓倉庫とその他の用途を離した分棟とし、敷地の中央部分に広めのスペースを設けることで祭りの際に利用するだけでなく、地域行事や子供たちの遊び場として計画した。また、施設が利用できなくても外から直接利用できるトイレや屋根のあるテラスを設置し、地域交流の場となるよう計画した。また、多目的室には吹抜と開口によって光がたくさん入り込み広々と感じられるような空間となるよう設計した。

②上袋田区

この区の櫓は、まつりの中心地となる本町通りに置かれるため、人通りが多く賑やかな場所である。そのため、前面道路沿いにテラスとカフェを設けることで、祭りの際に観光客や地域住民たちが気軽に立ち寄り、休憩しながら祭りの様子を眺めて楽しめるように設計した。また、人通りの多いこの地域では、まつりの参加者の待機所や休憩所が必要なため、櫓倉庫によってカフェと分離させる設計とした。

③沢区

この区の櫓は、交通量の多い道路に面して置かれるため、まつりの区域外に住む人々も多く通りかかるため、他の計画よりも大きなスペースを取り、他地域に住む人々も積極的にまつりに参加できるような計画とした。また、広めの土間や図書コーナーを設けることで、祭りに参加するこどもたちの保護者や兄弟が待ち時間で交流や休息ができるようにした。また、二階部分に計画した図書コーナーからは、吹き抜けを通して多目的室や土間部分の様子がうかがえるようにして、上下でのつながりができるようにした。







図5. 各計画の一階平面図
(上から、下袋田区、上袋田区、沢区)

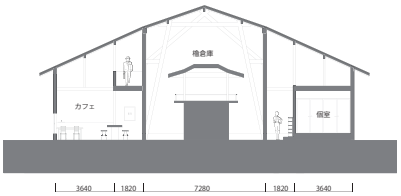


図6. 断面図(上袋田区)



図7. 外観パース(上袋田区)

参考文献

1). 奇祭「勝山左義長」と勝山市文化財のご紹介
https://www.city.katsuyama.fukui.jp/kankou/sagityo/
2). 勝山市ってどんなところ - 恐竜のまち 勝山市公式ホームページ
https://www.city.katsuyama.fukui.jp/site/iju/705.html
3). 人口と世帯 - 恐竜のまち 勝山市公式ホームページ
https://www.city.katsuyama.fukui.jp/site/mayor7/850.html

図版出典

図 1 ～ 3:「参考文献 2) より」

キッチンから始まる物語

Kittchenkarahazimarumonogatari

学籍番号　K20292
名　　前　田中日奈子
指導教員　人見将敏

Student Number　K20292
Name　TANAKA Hinako
Supervisor　HITOMI Masatoshi

1, 計画の背景と目的

食事を作る場として生まれたキッチンは、今やコミュニケーションの場として進化している。そしてキッチンはただ作業をする場として孤立していたが、リビング・ダイニングに溶け込むインテリアとしても活用されている。
そこで私は、新たな工夫から物語が始まるようなキッチンを設計しようと考えた。少子化が進む中、母親の負担は大きくなる一方である。コミュニケーションが飛び交うと同時に母親の負担を軽減することが今回の計画の目的である。

2, これまでと現在のキッチンの概略

2-1 現在のキッチンの考え方について

キッチンはライフスタイルの変化が現れる場所である。料理をしたり、家族と楽しんだり、時にはひとりでほっとくつろいだり、趣味や仕事をするコーナーがあったり。今やキッチンは色々な役割をもつ多目的スペースとして住まいの中心的な存在となっている。しかし、60～70年前頃には、単に調理という家事をこなすだけの簡単な場所であった。
ダイニングキッチンは、時代と共に家族のコミュニケーションの場や、おもてなしのスペースとしての役割を大きく広げた。また、女性の社会進出やライフスタイルの変化に合わせて、機能性や先進性、収納力、省エネ性能など求められるニーズの高まりに応じて、今日のような見た目も美しく、使い勝手に優れたシステムキッチンの登場へとつながった。

2-2 これまでのキッチンの変化について

現在に至るまでの、昭和初期以降のキッチンの変化に着目してまとめると次のようになる。
昭和初期の台所は、家の北側の、日のささない場所に配置されていた。まだ家庭には冷蔵庫がなかったころで、食材が腐らないようにというのが理由の一つだと言われている。
戦後、住宅団地が登場し、「台所兼食堂」の考え方が住まいに取り入れられるようになった。家族が過ごす部屋と同じ空間で食事をつくる、今の「ダイニングキッチン」の原型になった。
居室にキッチンが配置されるようになってからも、しばらくは「キッチン＝隠す場所」という意識が一般的で、吊戸棚や食器棚で囲って、見えにくいように配慮されていた。しかし、時代が進むにつれ、キッチンは家族が集う場所になり、さらにはお客様をもてなす場としての役割をもつようになった。
また、スムーズな家事動線、家事をしながら家族とコミュニケーションをとれることもキッチンに求められるようになった。世相の移り変わりとともに、対面式のキッチンが主流になった。アイランドキッチン、ダイニングとキッチンを一体化したカウンターキッチンなども登場し、キッチンはコミュニケーションを楽しむ場に進化した。

2-3 収納の変化について

これまで記した配置の変化以外にも、その時代のトレンドがよく現れる部分として「収納」があげられる。
かつて扉の中にものを収納する「開き扉」タイプが一般的であった。この場合、奥行きが深いと奥のものを取り出しにくい、高さを活用できないといった問題点があった。しかし、現在のスライド（引き出し）タイプなら、奥や上部にデッドスペースをつくることなく、収納したものはひと目で見渡せて、物を取り出すときの動作も軽減される。キッチンが使いやすいと家事がぐんぐん捗って、気分も良くなる。

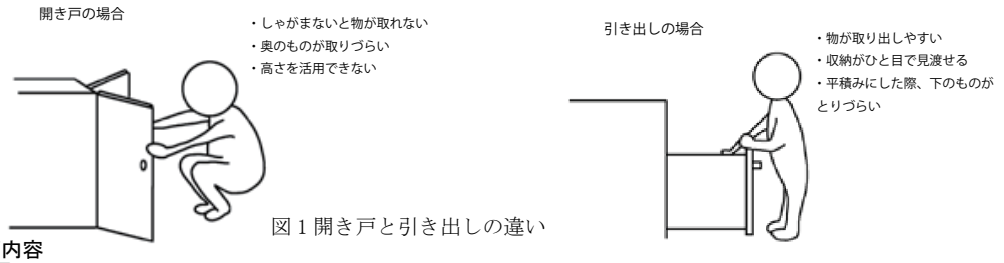


図１開き戸と引き出しの違い

3, 計画内容

3-0 概要

近年、コミュニケーションを重視していることから、キッチンの数あるタイプの中から、特にアイランドキッチンに着目した。

3-1 アイランドキッチン

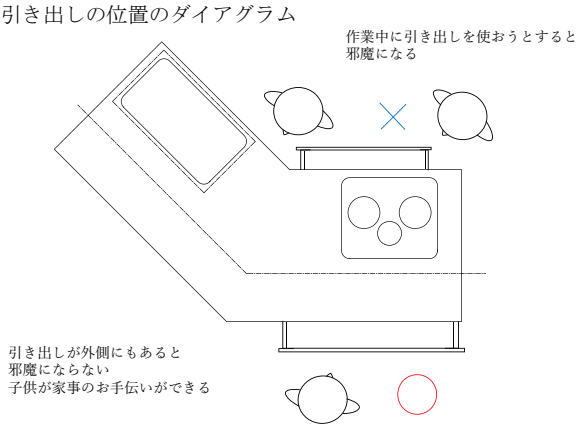
壁に接しない独立したキッチンである。

【メリット】
料理をしながらリビングにいる家族と話すことができる。
視界を遮る壁がないため窮屈な感覚はない。
見栄えが良く、360度回りこめるため、
ホームパーティなどに適している。
キッチンの対面側にスペースを設けることができる
【デメリット】
調理中のシンクや、作業スペースの汚れが気になる。
十分なスペースがないと非常に圧迫感を感じる。

3-2 現在の一般的な形（I型 L型）

I型キッチン
【メリット】
あまり幅をとらない
【デメリット】
横幅が短いと作業スペースが狭く、
横幅が長いと動線が悪くなる

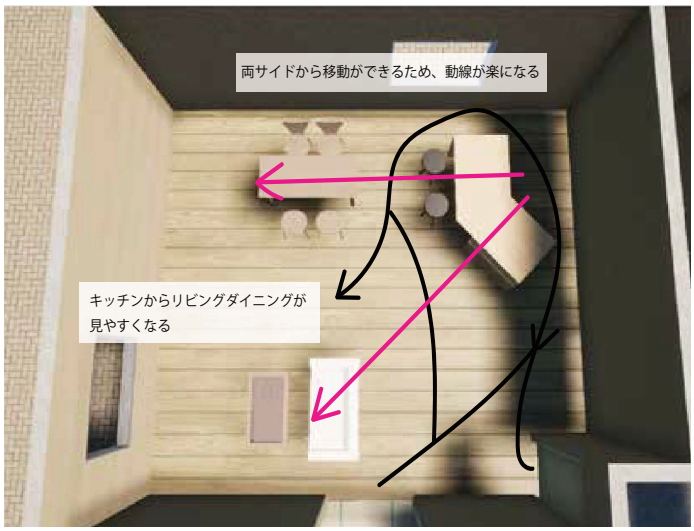
図２引き出しの位置のダイアグラム



所在地：なし
主な用途：台所、収納
敷地面積：なし
建築面積：なし
延床面積：なし
キーワード：キッチン、収納

Location ： nashi
Main Use ： Kitchen ,Storage
Site Area ： nashi
Building Floor Area ： nashi
Total Floor Area ：nashi
Keywords ： Kitchen ,Storage

L 型キッチン
【メリット】
作業スペースが広くなる
動線が短い
【デメリット】
コーナーがデッドスペースになりやすい
広いキッチンスペースが必要になる
結論：I 型と L 型のデメリットを考慮した結果、間をとって斜めに折り曲げる形とした。



配置例の動線

3-3 提案内容

I 型キッチンを斜めに折り曲げたようなデザインにした。
【メリット】
キッチンの内側に立ったとき、視野が広がる。
人の移動する距離が短くなる。
作業スペースが奥に向かって広くなる。
【デメリット】
I 型キッチンに比べて場所がとられてしまう。
中途半端なスペースができてしまう。

キッチンの詳細設計については以下のようになる。
1 家族のコミュニケーションが増えるように計画する。
・キッチンの背面にカウンターを設ける。
そうすることで調理場との距離が縮まり
コミュニケーションがとれる。
・一般的なキッチンの中で高めに設定する。
そうすることで女性だけでなく男性も調理しやすくなる。
・キッチンを扇形のように設計する。
そうすることでリビングやダイニングと
積極的にコミュニケーションがとりやすくなる。

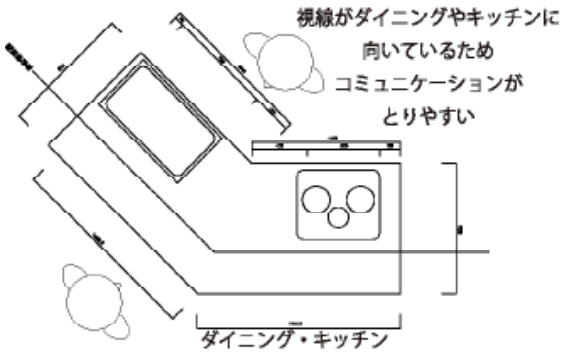


図 3 キッチンの視線のダイアグラム

2 母親の負担を軽減するような設計にする。
・キッチンの背面に収納を設ける。
その収納にお箸やスプーン、フォークや
取り皿などを置くことで、
成長したお子さんが家事のお手伝いをしやすくなる。
さらに、作業スペースの邪魔になることもない。
・ゴミ箱を収納させる。
作業スペースの下にゴミ箱を設置することで、
必要ないときは外から見えず、
必要な時はすぐ近くに出せるようにできる。
材料：木材

今回の計画を進めて行く中で、課題となる点が何個あり、以下のように解決策を行った。
・多くのスペースをとってしまう。
（解決）キッチンのトータルの長さを I 型キッチンと同じ長さにとどめる。
・汚れが気になる。
（解決）キッチン部分から 300 ｍｍ奥行を足し、
段差をなくすことで掃除をしやすくした。
・中途半端なスペースが出てきてしまう。
（解決）キッチンの側面に扉を設け、収納スペースとして活用した。

4 参考文献

キッチンの歴史
https://e-suteki.haseko.jp/cleaning/kitchen-history-01.html
キッチンの歴史２
https://cleanup.jp/select/reform/article-160/
I 型キッチンのメリットデメリット
https://www.sanwacompany.co.jp/shop/app/media/itype_kitchen/
L 型キッチンのメリットデメリット
https://www.sanwacompany.co.jp/shop/app/media/ltype_kitchen/

奈良今井町における町人の屋敷空間に関する研究～江戸時代の集まって住まう仕組みの解明～

学籍番号　K20293
名　前　谷口依里
指導教員　砂川晴彦

町人社会　都市型住宅　町掟
共有施設　無役大工　消防

本研究の目的

本研究は、『今井町絵図集成』[1]に載せられている絵図や史料を通じて、江戸時代に商工業都市として栄えた今井の都市空間の集住の形態について明らかにしていく。

奈良県橿原市の今井町は、16 世紀ごろに浄土真宗の称念寺を中心に形成された中世都市・寺内町である。今井は、はじめに東西南北で４つの町が形成され、その後２つの町が追加された６つの町になっている（**図 1**）。現在では、重要伝統的建造物群保存地区に選定され、今西家をはじめとした重要文化財が９件存在している。

今井は、1956 年の伊藤鄭爾氏ら東京大学の町家調査[2]をはじめにこれまでに多くの研究や調査[3]が行われている。しかし､今井の都市に焦点を当てている研究は少ない。

大阪・京都の研究が多くあるのに対して、町の今井の都市建築史的な研究は少ない。今井の集まって住まう仕組みを研究することは意義があることと考える。

研究方法と用いる史料

本論は第１部と第２部に分かれて論じている（**図 2**）。

第１部では『今井町絵図集成』[1]所収の「北町屋敷割図」を用いる。当図は今井の絵図の中でも街区の屋敷割が明確に描かれた精度の高い絵図として知られる。

第２部では、森本育寛氏の『今井町近世文書』[4]所収の町中掟（町規則）などの町文書を用いて、今井の町内の秩序や共有施設の維持管理の仕組みを明らかにしていく。

第１部
江戸後期の今井北町の屋敷割図にみる屋敷空間の特質

１．町屋敷の空間形態

以降では、北町の空間形態の分析を行うため、「北町屋敷割図」のトレース図を作成する（**図３**）。

町屋敷の表口（間口）の大小を把握すると（**表１**）、４間以上～５間半未満と２間半未満～３間半未満の間口にまとまりが認められ、これらが標準の間口と考えられる。

街区ごとに屋敷形態の特徴があると考えられ、街区別に印を分けた間口・奥行の散布図を作成した。

散布図を考察するにあたり、ある規模のまとまりを基準として赤丸で囲った（**表 2-3**）。その内、19 筆の奥行が９間半と等しい町屋敷群が認められ（橙の円）、先ほど述べた標準間口と合わせて、この奥行９間半の奥行をもつ町屋敷が基本形態といえ､屋敷割の計画性が指摘できる。また、奥行 11 間～ 13 間にまとまりがあり（青丸）、橙と青の町屋敷形態を図上で理解するために、北町屋敷割図のトレースに色を塗ると（**図４**）、橙の丸で囲った町屋敷（**表 2-3**）は、今井の中心に近い街区に多く、対照的に青の丸で囲った町屋敷は今井の外側に近い。以上から、同じ環濠内において、中心と周辺で２系統の屋敷形態の存在が判明する。

また周辺部の町屋敷ほど奥行が深い短冊型になる。形成時期が下るほど奥行の深い町屋敷が造られたと分かる。

２．町屋敷の所有形態

北町の町屋敷は 101 筆であり、所有形態としては、居宅（家持）と抱屋敷（居住用とは別の家屋敷）の２つが基本的な所有形態である。抱屋敷は、北町の６割を占める。

所有者の分析のために所有者別に色分けをした（**図５**）。その結果、町屋敷所有者が 38 名いることがわかる。

家持のうち抱屋敷も所有しているのは、11 名いる。この 11 名の所有形態を分析すると、居宅のまわりに抱屋敷がある・道を挟んでの所有・筋にそって連続する３筆以上の所有・離れた位置の所有、４形態に分類にできる。

北町に居宅がなく抱屋敷を所有している者（他町持）は、２筆以上とし、その数が少ないことから、自分の住んでいる町以外の所有者（他町持）は少なかったものと考える。

家持と他町持の所有比較をおこなったところ（**図６**）、家持の町人が所有している町屋敷は全体の７割程になる。以上から、基本的に北町に住んでいる家持が、中心となって抱屋敷を所有していることがわかる。

３．今井における大工の重要性～無役大工とその屋敷～

『今井町史』[5]（1978 年）を参考に今井の町人（町方）支配の構造を整理する。各６町には町年寄・町代・肝煎が置かれ、惣年寄が今井６町の全体の締括り取捌役として、町内を運営していた。惣年寄は、今西・尾崎・上田の３家が代々踏襲し、名誉職として扱われた。

町役はどの家持町人にも間口の規模に応じて等しく割付られていが、無役になっている屋敷が 10 筆もある。それは、「大工屋敷二付、無役」と書かれており（**図８**）、大工屋敷とわかる。

番号	町役	所有者	所有形態
F-1	大工屋舗二付無役	壺屋善兵衛	居宅隣抱屋敷
G-7	大工屋舗二付、無役	細井戸屋新助	居宅
G-8	無役、大工屋敷	不詳	不詳
K-2	大工屋敷二付、無役	飴屋清兵衛	抱屋敷
K-5	大工屋敷二付、無役	飴屋清兵衛	抱屋敷
K-6	大工屋敷二付、無役	新堂屋弥三郎	抱屋敷
K-7	大工屋敷二付、無役	小物屋清兵衛	抱屋敷
N-1	大工屋敷二付、無役	飴屋清兵衛	抱屋敷
N-2	大工屋敷二付、無役	順明寺	抱屋敷
N-3	大工屋敷二付、無役	小橋屋吉右衛門	抱屋敷

図 8 大工屋敷

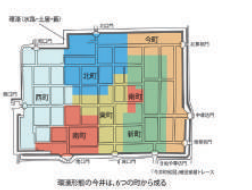


図 1 近世初期の今井町（トレース）


図 2 本研究の構成

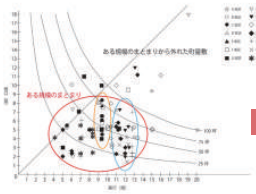


表 2-3 町屋敷の散布図


図 4 表 2-3 の町屋敷の色分け


図 3「北町屋敷割図」トレース

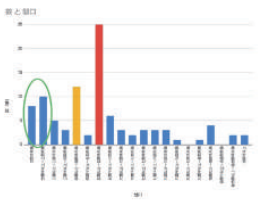


表 1 屋敷間口の大小（標準間口）


図 5 同一所有者の色分け


図 6 家持と他町持の比較

１つの町に複数名の大工がいることや町役が無役であることから、今井では大工が重要視されて来たことがわかる[6]。

４．町屋敷空間の特徴

いくつかの史料を基に、実際に建っていた町屋敷空間の特徴を考察する。再現に使うベースは「北町屋敷割図」のトレース図とし、判明している北町の町屋敷空間をはめ込んで作成した（**図９**）[1 3 7]。再現をした屋敷は、１列３間取りの借家長屋と２列６間取りの戸建てにわかれている。

２列６間取りの屋敷は他にも離れの奥座敷や蔵を複数棟もつ大きさから巨戸として見出す。再現したいくつかの巨戸の中に奥座敷がある。奥座敷は、武士が訪れた時、宿泊や接待のために必要であったため、年寄クラスの屋敷にみられ、吉左衛門（町年寄）（**図 10**）や上田氏（惣年寄）の居宅にみられた。

１列３間取りの借家の特徴として表長屋である点が挙げられる。町並みは、間口の大きい２列間取りの巨戸ばかりが並んでいたのではなく、こうした長屋であっても町並みの構成要素の一つであったといえる。

第２部
町文書にみる近世町内空間の秩序と維持管理

４．明和元年（1764 年）の町中掟（町掟）にみる町の秩序

『今井近世文書』[4]の「町中掟書家持借家印形帳」は、町人が生活する上でのルールとして町掟が記されている。その町掟を谷直樹氏の『町に住まう知恵』[8]の「町式目の項目分類」を基に分類を行う（**表３**）。

町掟のほとんどは、生活や共有施設の維持に関するものが多い。特に防火対策や消化後の行動についての掟が多いことから、今井では特に火事についての意識が高かったと考えられる。また､職種や家の売買に関する規制があるが、今井の町掟には、そのような規制は見当たらなかった。

町掟は、同意として町人の署名がされている。それは、家持であれば屋号を借家人であれば「かしや」と書き添えられ、町内の借家人の世帯数と借家の所有者がわかる。借家人の中には、「町家かしや嘉兵衛」がおり、「北町屋敷台帳」の町持借家に住んでいると考えられる。門の管理などの役割がある町持借家に常駐している可能性がある。借家人が多く借りていた町家の所有者は、惣年寄であり、今井の中でも屈指の有力者の上田忠右衛門である。惣年寄の今井への影響力は高いことがわかる。

５．共有施設の維持管理

『今井近世文書』[4]の史料から町人の生活に関わる共有施設の維持などについて明らかにしていく。

水路の掟は、水路の幅が細く、水量に限度があるため、掃除することで氾濫しないように記している。

今井の藪は、一切伐採することを禁止され、荒れていると藪に対面している町屋敷の住人の責任になり、また家主だけではなく借家人にも責任が追及されていた。町内の居住者全体が構成員であったことがよくわかる。

今井９門の内４つの門が 18 時から６時までの夜間も出入りが自由で、北口門も夜間開けられており、町持借家は番屋として警備のために使用されていた可能性がある。

６．生活の規制と運営

今井は火事なしと言われるほど、火事の被害が少ないと知られている。それは、消火する際に町人ごとに消火時の役割が決められており、役割をもつ人が不足しないように、代理人を補充するようにしている。そのことから、今井における火事に対しての認識が高いことがわかる。

交通や衛生面は、今井の細い道などを考慮した掟が決められている。牛馬の移動など町人の生活に配慮し、町人同士の問題が起こらないように規制が決められている。

今井の祭礼は、町人にとって重要な文化である。公費の使用や祭礼を華美にしたり、今井の町人たちは日々の生活に祭礼を行うほどの余裕があり、江戸時代に商工業都市として繁栄したため、都市は賑わっていたと考える。

8. 畿内三都（京都・大坂・奈良）の比較

今井の都市の仕組みを考察するため、他の都市との比較をおこない、今井の都市のあり方を明らかにしていく。そのため、町掟を京都・大坂と比較した（**表４**）[9]。

京都・大坂は、自治の役職と寄合、規制の家の売買や相続に関する掟が多いが、今井はどれも項目に当てはまる掟はなかった。家の売買や相続に関する掟は、町年寄の管轄のため、町ごとに決められていた可能性があるが、それらの項目がないことが今井町掟の特徴である。

また、今井は生活に関する掟が重点的に置かれているが、対照的に京都・大坂は生活に関する掟は。特に生活の火災に関する掟は京都や大阪では、今井ほどそこまで重要視されていないことがわかる。

結章　結論

江戸時代の今井の集まって住まう仕組みを明らかにしていくことが本研究の目的である。史料を用いて考察することで今井の都市空間の集住形態について述べてきた。

第１部では、「北町屋敷割図」を基に、町屋敷に関する考察を主に行ってきた。そして第２部では､『今井近世文書』[4]に載せられている史料を基に 18 世紀頃の町人の生活の様子について明らかにしてきた。

今井が現在も存続しているのは、火災に対しての対策や大工を守るしくみなど、多くの掟やルールが町人を守り、借家人までを含めた互いに支えあうしくみが作られていたからである。今日まで今井が最古の町屋の今西家をはじめ、江戸の街並みが残る貴重な都市として残ったことは偶然ではなく、以上の通り維持する仕組みがあって残ったことがわかった。



図９今井北町連続平面図



図 10 吉左衛門の屋敷空間

分類	項目	内容
自治		1.今井の定義
生活	消火	3.出火した際の行動
		4.出火した際の行動
		6.出火した際の行動
		5.消化後の行動
	紛争処理	9.賭博や勝負後の禁止
		16.若者の喧嘩や口論は主人が仲裁を行う
	衛生	14.ごみ捨てについて
	道路	11-3.歩きたばこの禁止
		15.昼に掃除をしない、見瀬開きしない
維持（共有施設）	警備	7.自身番について
		8.真夜中の門番について
	道路	10.道路を占有しない
	水門	11-1.水門の管理
		12.家の雨水を水門に流す
	交通	11-2.牛馬の管理
	藪	13.藪を伐採しない、荒れたら竹を設置する、家主も借家人も藪の面倒をみる
財産	税	2.田畑の質入、年貢の遅滞の禁止

表３今井町掟内容分類

		自治				規制					生活					維持		財産	
町名	年代	[illegible]	役職	寄合	交渉	売買	相続	借家	職規	家規	紛争	扶助	交流	火事	止宿	普請	共有	入用	割方
今井	享保元年（1716年）	○	○		○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○		○
今井	明和元年（1764年）	○									○	○	○	○			○		○
京都																			
柳八幡町	享保元年（1716年）		○			○	○	○	○							○	○	○	
饅頭屋町	享保８年（1723年）	○	○	○		○	○	○		○		○		○	○			○	○
二条西洞院町	享保11年（1726年）	○		○		○		○			○			○	○				
大黒町	明和７年（1770年）		○	○		○	○	○	○									○	
山名町	寛政９年（1797年）	○	○	○		○			○	○	○	○		○	○				
大坂																			
南米屋町	寛保元年（1741年）		○	○		○	○						○	○				○	○
南米屋町	明和２年（1766年）		○	○		○	○							○				○	
弐本松町	天明３年（1783年）		○	○	○	○	○	○			○					○	○	○	○
桝屋町	文政５年（1822年）	○	○	○		○	○	○	○	○	○		○		○		○	○	○
道修町三丁目	文政７年（1824年）	○	○	○		○	○	○	○	○	○			○	○		○	○	○

表４町式目の項目内容

参考文献リスト

１．森本育寛編『今井町絵図集成』株式会社中西文山堂．昭和 55 年８月 27 日
２．関野克、伊藤鄭爾、大河直躬、太田博太郎、稲垣い栄三、西川幸治「今井町民家の編年」日本建築学会論文報告集．昭和 33 年 10 月．第 60 号
３．林清三郎『今井の建物』井上印刷株式会社．平成 10 年７月 31 日
橿原市教育委員会『橿原市今井町伝統的建造物群保存地区見直し調査報告書』株式会社新踏社．平成 21 年３月 30 日ほか
４．森本育寛、堀内啓男編『今井町近世文書』三和コロタイプ印刷株式会社．昭和 53 年９月 30 日、森本育寛編『続今井町近世文書』株式会社中西文山堂．昭和 57 年２月１日
５．同史編纂委員会『今井町史』同史編纂委員会．昭和 32 年
６．無役大工に関する研究、今井の大工に関する研究に次がある。谷直樹「近世初頭における大工役と諸役免除　中井家配下６カ国大工の諸役免除に関する研究(1)」日本建築学会計画系論文報告集 . 1991 年３月．第 421 号、森本育寛「寺内町における建設職人の町ー摂津大坂本願寺寺内町・大和今井町を中心としてー」『関西大学博物館紀要』1 巻 . 1995 年
７．奈良県文化財保存事務所編『重要文化財上田家住宅修理工事報告書』奈良明新社．昭和 57 年５月
８．谷直樹『町に住まう知恵ー上方三都のライフスタイルー』平凡社 . 2005 年４月１日
９．谷直樹『町に住まう知恵ー上方三都のライフスタイルー』[8]の「表２主な町式目の項目内容一覧」[2]を参考にする。

諏訪大社上社の五重塔研究
～諏訪市立博物館所蔵絵図を基に～

学籍番号　K20294
名　前　田野菜月
指導教員　大上直樹

諏訪大社　立川流　五重塔
重要文化財　実測図　図面

1－1.研究の目的

本研究では今は解体されてなくなっている諏訪大社五重塔を研究する。他の五重塔と違い廃仏毀釈で解体され、実測図が諏訪市立博物館に残されている。研究するにあたり、その実測図を基に図面を書くことで諏訪大社五重塔がどういった構造になっているのかを学ぶ。また、他の塔と比較し、具体的に塔自体がどういう建造物であるのかを示す。ここでは国宝や重要文化財に指定されている24塔の五重塔を諏訪大社五重塔を中心として研究する。

1－2研究方法

かつて長野県諏訪市の諏訪大社上社神宮寺に建っていた五重塔の残された実測図を基にMicroGDSというソフトで図面を書く。

国宝や重要文化財に指定されている五重塔で24塔を対象に資料を集め特徴や意匠の違いを調べる。

2－1諏訪大社

長野県の諏訪湖を挟んで二社四宮が鎮座している。本宮は幣殿や拝殿など6棟が重要文化財に指定されている。幣拝殿と片拝殿のみで本殿を持たない諏訪造りという様式。

2－2二社四宮

上社本宮は守屋山、下社春宮はスギ、秋宮は一位の木を御神体としている。

上社本宮…境内のほぼ真ん中には東宝殿、西宝殿という二棟の茅葺の建物。本宮の昔の建物は天正十年(1582)に織田信長の兵火のため、山中に逃れた神輿の他は全て焼失。この時に仮殿が作られ順次再建され社殿は元和三年(1617)に完成。その後約二百年を経て社殿の改が計画され、立川和四郎二代目富昌が上社棟梁と共に事に当たり、天保二年から九年(1838)に現在の社殿ができる。これは立川流の代表的建造物と言われている。桃山時代の代表的建造物として重要文化財に指定されている。

上社前宮…本殿は内卸玉殿から200m程上段で古くは神殿に附属したお社だった。高台で豊富な水や日照が得られる地で御祭神が最初に構えられ、諏訪信仰発祥の地と伝えられている。

下社秋宮…身長1.7m、青銅製では日本一と言われる狛犬を両脇に従えた神楽殿は三方切妻造りで天保六年(1835)立川和四郎二代目冨昌の作。御社殿は神楽殿の奥で、二重楼門造りの拝殿と左方拝殿及び右片拝殿が横に並ぶ。現在の建物は安永十年(1781)春に立川和四郎初代冨棟の棟梁でできた。

下社春宮…入口の御影石の大鳥居は万治二年(1659)建立と推定。神楽殿と拝殿、左右片拝殿及び御宝殿と続く建物の配置は秋宮と同じ。神楽殿は修改築が幾度となくされている。

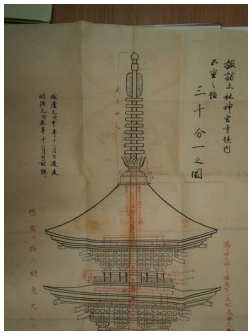
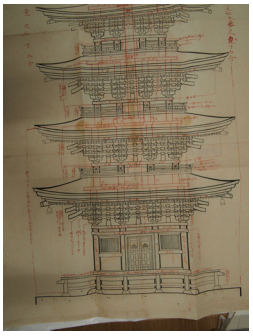
長野県諏訪市の諏訪大社上社神宮寺には鎌倉時代(永仁二年1294)に建立された五重塔が建っていたが、明治元年(1868)廃仏毀釈によって解体された。

2－3立川流

日本彫刻美術の最高峰「立川流」。信州諏訪で生じた立川流は二代目立川和四郎富昌の時代に完成された。

春宮と秋宮の現社殿は相前後して建立されたもので、前者は諏訪藩御大工の流れを組む大隅流柴宮長左衛門、後者は立川流初代富棟の手になる。大隅流の作った社が春宮、立川流の作った社が秋宮。

4－1実測図の写真

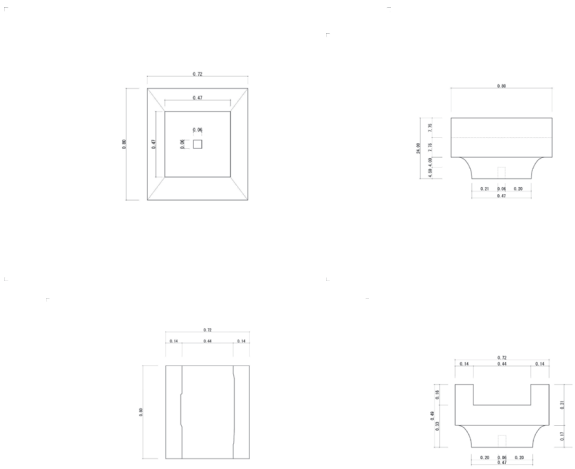
4－2伏鉢残欠の写真



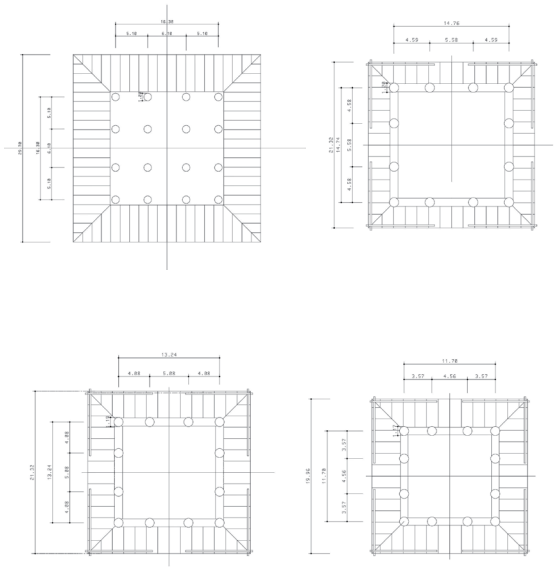

4－3斗の写真



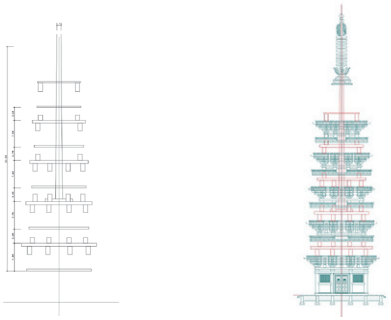

5－1斗の図面



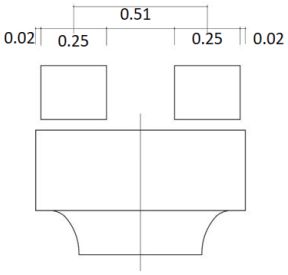
5－2平面図



5－4構造図



5－5斗と垂木の関係



6尺1寸に垂木が12枝、
5尺1寸に垂木が10枝あることから
6.1/12＝0.5833…
5.1/10＝0.51
よって垂木の真心の距離を0.51とする。

参考文献

1・関裕二『信濃が語る古代氏族と天皇』
祥伝社出版、2015年
2・藤森照信、前橋重二『五重塔入門』
新潮社出版、2012年
3・谷村康行『五重塔の科学』
日刊工業新聞社出版、2013年
4・井原今朝男『神社資料の諸問題：諏訪神社関係資料を中心に』論文、2016年
5・白井裕泰『五重塔の逓減について』論文、1990年

「スポーツランド宮崎」実現を図る体育施設
～シーガイア再建と共に目指すみやざき体育促進～

学籍番号　K20295
名　　前　田丸　智暉
指導教員　生川教授

1.始めに

宮崎県では現在「未来みやざき創造プラン」と称し、令和 12 年（2030 年）の将来像を描いた「長期ビジョン」と、4 年間の実行計画である「アクションプラン」の5項目を掲げている。その中でスポーツ・体づくりに注視し、スポーツの核となる「スポーツランド宮崎」を目指している。その取り組みの 1 つとして今年度4月にサッカー・ラグビー・陸上競技の為の施設「アミノバイタルトレーニングセンター」がシーガイアリゾート・オーシャンドーム跡地に建設され、県全体でのスポーツ・体づくりに対する意識改革が始まっている。

2.県スポーツの抱える課題

①幅広い世代でのスポーツの推進

宮崎県は運動・スポーツを週1回以上行っている県民の割合は上昇傾向にある。しかし、日常生活の中での運動やスポーツをする・関わる機会が少なく、年齢や性別、障がいの有無等に関わらずスポーツを日常的に実施できるよう、市町村やスポーツ関係団体と連携して取り組むことが必要とされており、県民の多様なスポーツニーズに対応し、誰もが生涯にわたってスポーツに親しむことができる機会の充実や環境づくりが必要とされる。

②児童生徒の健やかな体を育む体力・健康づくりの推進

全国体力・運動能力、運動習慣等調査（令和4年度）によると「平均値が全国平均以上の項目の割合」はおおむね良好な結果を示しているが、全体的には体力低下の傾向にあり、 生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを継続するための資質と能力の育成、学校等における体育・スポーツ活動に係る取組の充実。また、全国大会等における競技スポーツの成績は、十分な成果を収めていると言えず、競技人口の減少やアスリート雇用の受皿不足等が懸念される中、2巡目国スポの本県開催に向け、選手の発掘と育成・強化や指導体制の強化、環境条件の整備等に取り組み、競技力向上が必要とされるため「スポーツランドみやざき」の全県化などとの連携を図りつつ、スポーツによる地域活性化に取り組む必要がある。

3.宮崎のスポーツによる再生方針

スポーツに関する課題を受け、県民誰もが、体力や年齢、技術、趣味・目的に応じて、いつでも、どこでも、いつまでもスポーツに親しむことができる社会、本県で育ったトップアスリートの活躍により県民、子供たちがスポーツに夢を抱くことのできる社会を目指す。

主な実施内容として

①「する」「みる」「ささえる」の観点から広くスポーツの推進に取り組み、「1 週間に 1 回以上、30 分以上は運動・スポーツをしよう」を合言葉とする 1130（いちいちさんまる）県民運動や各種大会の開催・支援など、様々な形でスポーツ参加を促進するとともに、総合型地域スポーツクラブの育成・支援やこれを支える人財の育成を図りつつ、若年期から高齢期までライフステージに応じた多様なスポーツ活動の推進による<u>スポーツ参画人口の拡大</u>

②ジュニア段階からの有望選手の発掘と育成・強化、優秀な指導者等の養成・確保、アスリート雇用の受皿づくり、練習環境等の整備・充実を進め、競技団体等の支援や一貫指導体制の構築・強化などにより全県的な競技力強化の体制整備を図ることによる<u>トップアスリートの育成</u>

③プロチーム等のスポーツキャンプ・合宿の実施・誘致や各種スポーツイベントの開催の機会を活用し、市町村や関係団体・機関等と連携して、スポーツツーリズムの拡大を図るなど、<u>スポーツによる地域活性化の推進</u>等によりスポーツによる宮崎再生を目指す。

4.選定敷地

敷地は、現在フェニックスシーガイアリゾートホテルの駐車場として利用されている敷地を選定する。宮崎駅から車で約 20 分の海沿いにあり、海との間に南北約 5km に渡る防風林を兼ね備えた阿波岐原森林公園を有し、西側には市民の森・フローランテ宮崎（植物園）のある木々に囲まれた自然豊かな土地に位置している。4月にはアミノバイタルトレーニングセンターの屋外型スポーツ施設が敷地沿い南側に完成したことで、宮崎県民のスポーツ・体づくりの拠点として発展しつつあり、スポーツの核・スポーツランド宮崎を目指すに適した環境であると考えこの敷地を選定した。



5.コンセプト

「これまでにないスポーツ施設」をメインコンセプトとし、光・風の競技に及ぼす影響等による閉鎖性、閉鎖による外部からでは感じ取られないプレーの様子、最低限の着替え、汗流しのための更衣室・シャワー室などから開放的、浴場・更衣室等の付帯設備の充実、「見れる」「できる」の選択肢、利用目的に対応する属性の異なるコートなどこれまで一般的とされてきたスポーツ施設から形を崩すことで、よりスポーツを親しみやすい存在に近づける施設を計画する。

6.ダイアグラム

ダイアグラム①

スポーツを「見る」「する」を目的に来た人、スポーツ以外を目的に来た人の異なる目的で来た人同士であっても飲食・「見る」「話す」・休憩など何らかの共通する要素で交わり、その共通の要素を充実させることで本来の目的ではなかった要素に近づけることを示す。



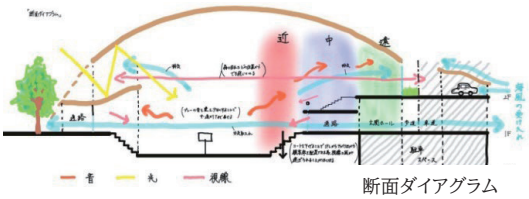
ダイアグラム①

断面ダイアグラム

コートを掘り下げて配置することで 1 階部分に観客席が現れないことにより、視線と風が遮られないこと、屋根の形状による自然光の取り入れ、コートからの距離によるスポーツへの感じ方を示す。

7.検討プロセス

上記の課題、コンセプト等を考慮して、コートを並列配置・分散配置する２つの案を検討した。並列配置案では、管理のしやすさ、コートの柔軟性等のメリットが考えられたが、1面1面のコートの見え方・見られ方が単一である点、中央のロータリーを境に用途が分断され施設密度の差、目的の異なる人同士の交流が生じにくい点などのデメリットが考えられた。一方、分散配置案では、左右のエリアそれぞれで管理が必要、土足可能・禁止のエリア分け等の難しさが考えられたが、コートそれぞれの属性分け、目的の異なる人同士の交わりの生みやすさ、敷地全体の施設密度の均一さなど、スポーツを県民にとってより身近な存在とするには分散配置案が適していると考え、配置計画を行う。



断面ダイアグラム

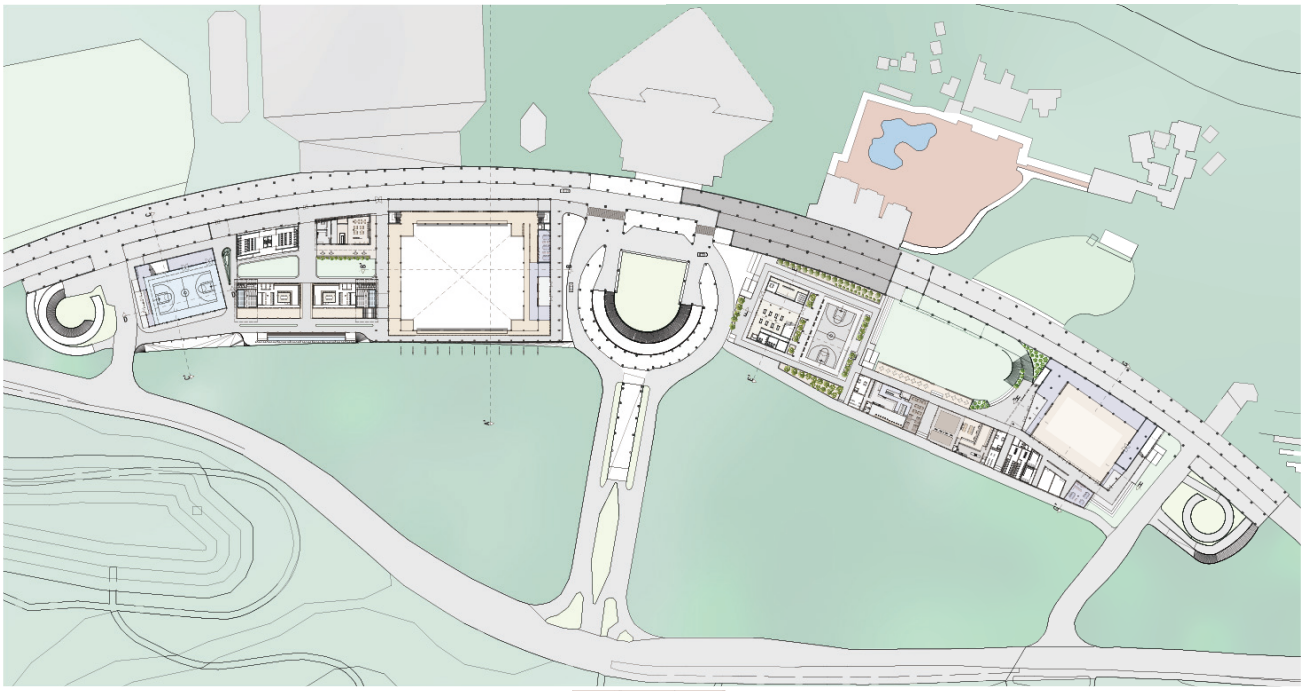
8.計画概要

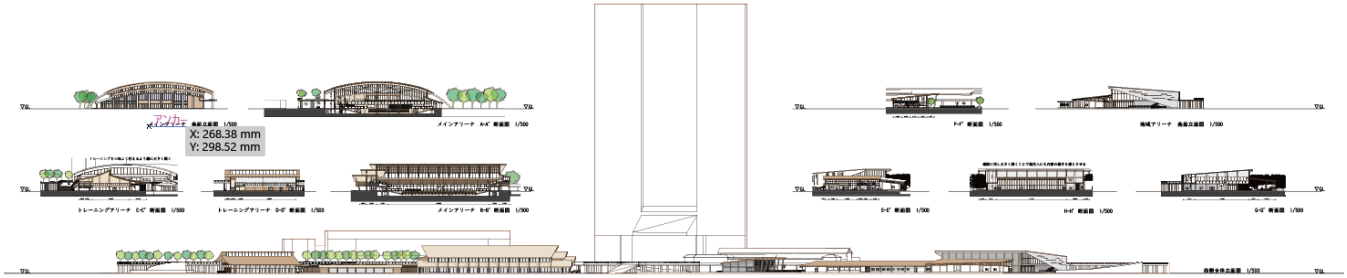
敷地の現状として、空きが目立つようになった1500 台収容可能な駐車場は、近くに立体駐車場もあることで、大部分が利用されない敷地となっている。また、敷地に隣接して建設されたアミノバイタルトレーニングセンターは、多様なスポーツニーズへの対応、参画人口の拡大等が課題とされている中、競技性的にも初心者、高齢者には利用しにくい施設であるように感じられた。そのため今回の計画では、敷地東側約600m に渡り円弧を描く既存立体駐車場の一部を高架緑道・メインストリートへとリノベーションし、空きが目立つ平面駐車場には屋内外スポーツ施設に加え、隣接してスポーツバー・カフェ・ベーカリー・芝生スペース等の娯楽・飲食の場を計画した。これによりこれまで競技者ばかりに焦点が当てられていたスポーツ施設ではなく、競技者・非競技者どちらの人々にも共通する休憩・飲食・談笑を行っている合間にも、スポーツを身近に感じられ、「やってみようかな」といったきっかけを与えられるスポーツ施設を目指した。また、3つのアリーナでは直射日光に配慮しつつ、屋根形状・利用目的等において最大限開放的に計画したことで、地上ライン・高架緑道からなど一般的なスポーツ施設では見られない建物外からでも内部のプレーの様子を覗き見ることができるように計画を行った。

これらの計画により、敷地全体でスポーツを感じられ、シーガイアリゾートの再建と共に、県民にとってスポーツ・体づくりの核としてスポーツをより身近な存在へと発展させられるそんな施設計画を目指した。

9.参考文献

・宮崎県教育振興基本計画（令和5年策定）
・宮崎県教育、学術、文化およびスポーツ振興に関する施策の大綱
・宮崎市スポーツ推進計画　2015～2024
・宮崎県屋外型トレーニングセンター　基本設計図
・アミノバイタルトレーニングセンター　パンフレット
フェニックスシーガイアリゾート　HP
・フェニックスシーガイアリゾート　シーガイアの沿革
・Google Map
・建築設計資料　2.体育館・スポーツ施設





新京町家 １人親３世帯

学籍番号　K20296
名前　田丸優羽
指導教員　井上晋一

1. 背景

1-1　京町家の現状

現在京町家は年間 800 軒の勢いで減少している。
平成 28 年に行われた調査では、7 年間で 5,602 軒の
京町家が減失したことが分かり、確率にすると
年間 2%の京町家が失われていることになる。
又、同時に行われた京町家の空き家率は 14%を
超えていた。
しかし、京町家には、伝統的な技術、意匠が詰められており
京都の魅力を作る貴重な財産である。
そんな京町家を保存・継承することは京都に課せられた
大きな課題である。

1-2　減少の原因

。減少の原因として、京町家の所有者が京町家の価値を
十分に認識していないこと、日常の維持管理費の資金不足
修復や改修の資金確保が難しいこと等がある。

1-3　現在の対策

京都市では、京町家を保存・継承する為に、多くの
取組が行われている。平成 12 年 5 月には、京町家の
支援策として、『京町家再生プラン」が策定され
取り組むべき項目として、21 のアクションプランが
決められた。
又、京町家条例に基づく指定制度では、修理・修景にかかる
経費の一部が補助され、また解体に着手する 1 年前までの
解体届を義務付けることで、解体の危機を把握し
京町家を保存していく方法を検討してもらうことが出来る。
平成 29 年 11 月には、『京都市京町家の保存及び継承に関する
条例』が制定され、京町家の保存・継承の取組を
推進されている。

1-4　新町家

京都市では、今ある京町家の保存・継承だけではなく、
京町家の知恵を活かした、新町家の普及にも取り組んでいる。
新町家は、伝統的な京町家の模倣ではなく、京町家の知恵を
受け継ぎながら、現代社会のニーズに合った新しい形の
京都の住宅である。
新町家は設計の際に重視すべき点を、以下の 5 つの指針と
して整理している。
指針 1：まちに暮らす
指針 2：場所になじむ
指針 3：季節や自然を楽しむ
指針 4：大切に使う
指針 5：和の技を感じる
又、新町家の普及に賛同する事業者を
「新町家パートナー事業者』として募集し、その事業者名や
取組事例を紹介している。

引用：京都市都市計画局「中京区の京町家の保存継承について」 https://kyomachiya.city.kyoto.lg.jp/wp-content/uploads/2023/02/R210matching.pdf

引用：京町家の総合情報サイト「京町家を未来へ」 https://kyomachiya.city.kyoto.lg.jp

New Kyomachiya Single parent 3households

Student Number　K20296
Name　Yu Tamaru
Supervisor　Shinichi Inoue

2. 提案

2-1　京町家の活用

『京都市京町家の保存及び継承に関する条例』の取組として
実地されている『京町家マッチング制度』では京町家の所有者
と
京町家の活用希望者のマッチング等を提案している。
実際の活用事例として、解体届が出された京町家がこの制度を
利用して、活用希望者とマッチングし、現在茶道等の
文化体験施設として活用されている。
この様に、京町家は個人の住宅以外にも体験施設、カフェ
オフィス等、様々な活用をされ、保全・継承がされている。

2-2　新しい活用方法

本設計では、新しい活用方法を提案をし、活用方法の
選択肢を増やし、又提案した活用方法に魅力を感じた
京町家の所有者が、京町家を活用に貸し出すことで
京町家の保存・継承に繋げることを目的とする。

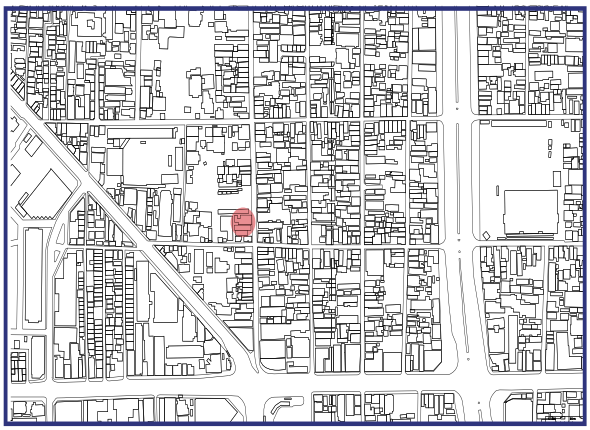
2-3　現在の対策

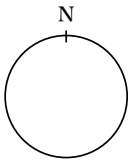
本設計では新しい活用方法をリノベーションと新町家で
提案する。まずは江戸～明治次代にかけて建てられた
厨子二階を利用してリノベーションを行い、次に
それを基盤に総二階の、より現代社会にあった新町家を
設計する。



3. 敷地

京都市中京区四坊大宮町 162 番地





敷地案内図

所在地：京都府京都市中京区四坊大宮町 162 番地
主な用途：住宅
敷地面積：255.79 ㎡
延床面積：208.58 ㎡
敷地面積：204.84 ㎡
延床面積：154.72 ㎡
キーワード：京町家・1 人親世帯・地域

Location ： 162 Shiboomiya-cyo Cyukyo-ku Kyoto-city Kyoto
Main Use ： House
Site Area ： 218.77m^2
Building Floor Area ： 187.61m^2
Total Floor Area ： 207.42m^2
Keywords ： Kyomachiya,Single parent,Region

4. 手法

4-1　京都の地域の繋がり

京都は祇園祭や地蔵盆など、古くから地域の人々が協力して
行う行事が多い為、地域の人々の繋がりが強い。
夏の終わりに行われる地蔵盆では、子供達が輪になって数珠を
回す「数珠まわし」があり、行う場所として
京町家が使われることもある。
本設計では、この様な地域の繋がりを利用した設計をする。

4-2　1 人親世帯

1 人親世帯は子育てと家事、仕事を 1 人で賄う為
負担が大きい。
又、1 人親世帯特有の悩みが存在する。
例えば、残業で親の帰りが遅くなった時、子供は
自分で食事の支度をし、また 1 人で食事をする
いわゆる孤食となってしまう。孤食は肥満・痩せ
コミュニケーション能力の低下等の問題がある。
他にも、子供が 1 人で、家に帰る必要があり
安全面でも不安な点がある。

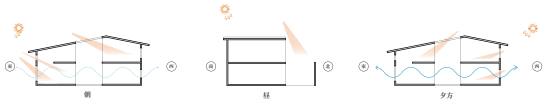
4-3　1 人親 3 世帯

本設計では、1 人親世帯が 3 世帯、1 軒の京町家で
暮らす 1 人親 3 世帯の住宅を設計する。
同じ悩みを抱える世帯が集まることで、助け合いの
環境が生まれやすく、また元々の半開放的な
京町家の特徴を活かし、住民だけではなく、地域の
人々の助けも借りられる環境を作る。

5. ダイアグラム

5-1　採光．通風

京町家の特徴である坪庭を配置することで、道路に面した
部屋だけではなく、奥に計画した部屋にも、採光と通風が取
れる。



6. 構成

6-1　住人構成

住人は、1 人親世帯が 3 世帯集まって構成される。親は 3 人
子供は各家庭 1 ～ 2 人、年齢は 0 歳から、成人までを
想定している。共有空間以外のプライベート空間は、各家庭
最低 10 畳以上の大きさを確保した。

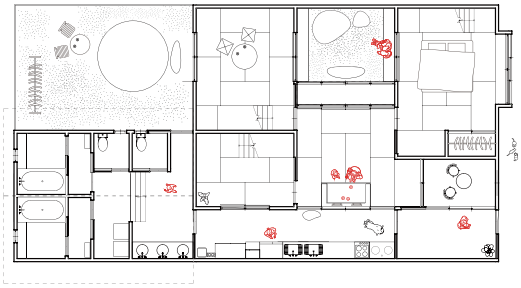
6-2　管理

共有空間の清掃は、住人が協力して行い、京町家の
構造や意匠的な管理は、京町家を持つ不動産が行う。

01. 朝の活動の様子

朝、どこかの世帯の親が仕事の為に、早く家を出た時は
共有のキッチンを
利用して、親が不在の子供に他の世帯の親が朝食を用意する。

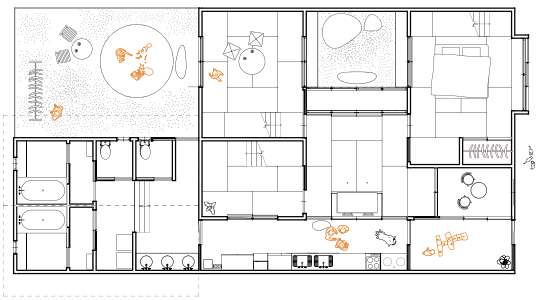
空気が澄んでいる朝は、縁側に座って、坪庭の自然を眺めなが
ら読書等を楽しむ。



02. 昼の活動の様子

まだ学校に通っていない幼い子供は、遊びに来た近所の大人や
在宅ワークの世帯の親と過ごす。

広々とした奥庭は、子供達の遊び場に最適。



伝統建築の耐震性能に関する研究
～限界耐力計算と三次元振動解析の比較・検討～

学籍番号　K20297
名　前　丹野優花
指導教員　井上年和

文化財建造物　耐震診断　補強設計
限界耐力計算　三次元振動解析

1．はじめに

1-1　研究目的

日本という国は、複数のプレートが重なっている場所にあるため、一年に数千の地震を観測するなど、地震被害が多い国である。建築分野において、地震の影響はとても大きく、地震やその二次災害によって倒壊や破損をした建造物は数知れない。これは、伝統建築も例外ではない。そのような中で、伝統建築を地震と共生させ、かつ文化的価値も守りながら後世に残していくことが重要である。後世に残していくためには、その伝統建築がどのような耐震性能を持っているのかを知る必要がある。

本研究は解析方法に着眼点を置き、宝積寺本堂の耐震性能から、複数の解析で耐震性能に関して比較・検討を行い解析手法の違いを考察する。

1-2　研究対象

本研究の対象は京都府大山崎にある天王山の中腹に位置している、「宝積寺の本堂」である。宝積寺は亀神元年、聖武帝の勅願に行基菩薩により建立された。研究対象である本堂は慶長 11 年頃に建立され、この本堂の構造形式として本瓦葺の向拝一間、桁行五間、梁行五間、入母屋造、一重になっている。



図 1　宝積寺本堂　外観



図 2　宝積寺本堂　内陣

1-2　研究対象の現状

本研究対象は現在改修工事を行なっており、その際に柱傾斜計測、床不陸計測を行なっている。柱傾斜計測では、南側に向かって傾斜していることが確認できており、床不陸計測では、中央が大きく沈下していることが見受けられている。

2．地盤種別

地盤の傾斜に関して、宝積寺は、天王山の中腹にあり、傾斜面に位置することがわかっている。特に、山門から、本堂までは、天王山の他の場所から見ると、傾斜が緩やかになっており、切り盛りした地盤になっていることが見受けられた。これにより、現状の床不陸が起こっていると考えられた。「地震ハザードステーション J-shis Map」では、表層地盤増幅率が 0.8 以下であり、この値は値が大きいほど地盤が弱く、大きく揺れやすいことを示しており、この値において、地盤は堅固であると考えられた。しかしながら、地理院地図（電子国土 Web）による地形分類としては、山地と山麓堆積地形との境界に位置していることが見受けられ、地盤がとても堅固であるとは判断しかねるものであった。

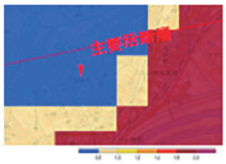


図 3　地表地盤増幅率[注 1)]



図 4　地形分類[注 2)]

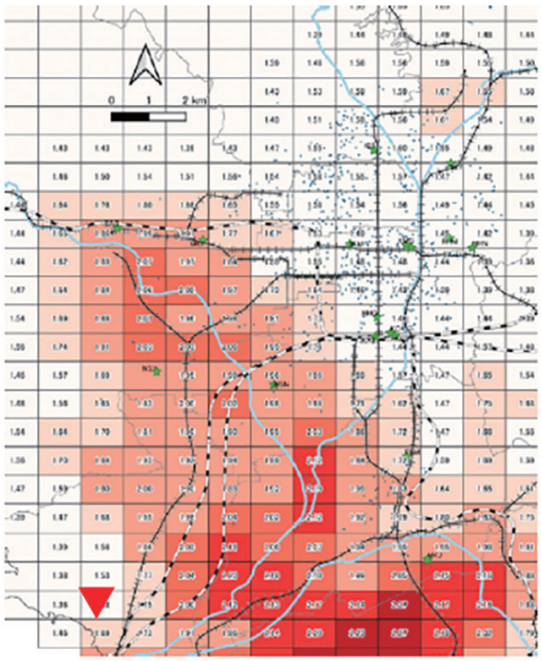


図 5　耐震診断用地震動増幅率　[注 3)]

そのため、地盤種別を第一種地盤であると断定はし難く、本研究では、地盤種別を特定しないものとし、耐震診断に用いる地震動増幅率 Gs は林氏らの研究[注 3)] である、「京都市域の耐震設計のための表層地盤増幅率評価」によるものを用いることとした。地震動増幅率は Gs＝1.69 とする。

3．耐震診断と耐震補強

3-1　耐震診断の考え方

耐震診断は現場の耐震性能を把握し、必要耐震性能を満たしているか判別するものであり、この必要耐震性能は 3 段階の水準で考えられている。これは「機能的維持水準」「安全確保水準」「復旧可能水準」の 3 段階である。[注 4)]

3-2　伝統建築の耐震補強における文化的価値への配慮

伝統建築の耐震補強は文化的価値を守るための考え方をする必要がある。本研究では以下の５つの原則を指針にし、耐震診断を行い、解析結果を比較・検討する。

① 意匠を損なわないこと
② 部材を痛めないこと
③ 可逆的であること
④ 区別可能であること
⑤ 最小限の補強であること

これら５つの原則全てにおいて満足していることが望ましいが、伝統建築の性質上、相反するものが多く、両立させ難いものある。そのため、この５つの原則をバランスよく成立させることが重要であると考えられる。

４．解析方法の選定と診断

4-1　限界耐力計算

限界耐力計算は建物の重量や構造特性を一質点系に置き換えて評価する方法。層間変形角が耐震性能の評価の指標である。層間変形角とは、地震力を受けた際に、その建築物の高さに対してどのくらい変形量があるかを示したものである。本研究では大地震時による層間変形角と主

要構造部材の断面算定検定値（層間変形角が 1/30～1/15 となる場合）により判定を行った。判定においては、壁、軸部、屋根、小屋組、天井、床の重量を算定し、耐震要素は壁、垂壁、腰壁、内法貫、飛貫、足固貫とした。地震動増幅率は Gs＝1.69 とし、これらから偏心率を算定し、準拠基準等５に基づき偏心率による変形量の割増を行った。計算結果は以下のようになった。

この図・表から、耐震性能の目標値である、≦１５をクリアしていることが見受けられた。
限界耐力計算からの考察として、大きな変形は予想されるが、倒壊には至らない可能性が高い。

4-2　三次元振動解析

三次元振動解析は解析モデルを振動させることで行う解析であり、本研究では WALL STAT を用いた。
WALL STAT は京都大学生存圏研究所が公開している、木造建築を専門に解析するもので、CAD 図面や手書き図面の数値を打ち込み、三次元の解析モデルを作成し、地震動を与えてシュミュレーションを行うことで変形量や破損状況、倒壊の過程を視覚的に確認できる数値解析ソフトウェアである。
解析結果は以下のようになった。

５．解析結果の比較・検討

比較としては、使用する数値の違いが根本にあり、また、検討においても限界耐力計算では倒壊しないという結果であったが、三次元振動解析で行ってみると倒壊に至ったため、１つの解析だけで耐震性能を診断するのは良いとは言えないと考えられた。また、小屋組があるかないかだけで、倒壊までに要する時間が大きく変わった。小屋組下だけでは、26 秒、建造物全体では 30 秒であった。このようなことから、小屋組があることによって耐震性能が変わってくることがわかる。
また、総合的な比較として、大きな相違点が２つ見受けられた。

	限界耐力計算	三次元振動解析
解析内容	数値で判断〇 視覚的に判断×	視覚的に判断〇 数値で判断△
解析範囲	軸部のみ	建物全体

６．結び

2 つの解析を比較・検討した結果、解析ごとに長所と短所があるため、伝統建築の耐震性能を測る手法として、一概にどちらが適していると言い難いと考えられた。

参考文献・使用ソフトウェア
注 1.国立研究開発法人防災科学技術研究所「地震ハザードステーション J-shis Map」
注 2.地理院地図（電子国土 Web）による地形分類（自然地形）
注 3.林康裕,杉野未奈「京都市域の耐震設計のための表層地盤増幅率評価」日本建築学会技術報告集第 28 巻第 70 号,1142-1147,2022 年 10 月
注 4 文化庁文化財部参事官『重要文化財(建造物)耐震診断・耐震補強の手引き』2013
注 5.

アグリ・パレット
～農業による人の循環～

学籍番号　k20298
名　　前　堤伶央
指導教員　小梶吉隆　先生

agri・palette
～Human circulation though agriculture～

Student Number　k20298
Name　Leo tsutsumi
Supervisor　KENCHIKU Saburo

1　設計背景

近年農業に興味をもち趣味として農業を行う人が増えているが、農業を含む日本の第一次産業は衰退し続けている。1950 年～ 2020 年までの産業別就業者数の推移をみると、2020 年の第一次産業の就業者数は 1950 年の約 15%にまで減少していることが分かる。（図１）しかしこのような数値にとらわれ、農業を産業というものさしだけで計るのではなく、地産地消で自給自足ができるツールとして見ることが必要だと考える。この製作では、定年退職後や人生の趣味として農業をしたい人、農業教育を受けたい子ども達の受け皿となり、農業が人々の生活の一部となるような環境を提供することが目的である。この施設では農業の魅了を発信するとともに、興味のある人が一歩踏み出せるようなサポートをすることで、地域の中で農業を通した人の循環を生み出したいと考える。

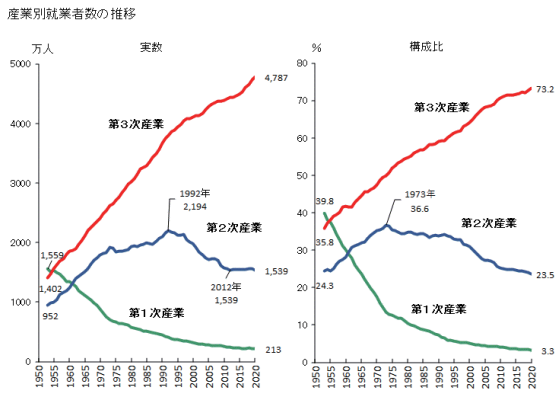


図１　1950 年～ 2020 年までの産業別就業者数の推移

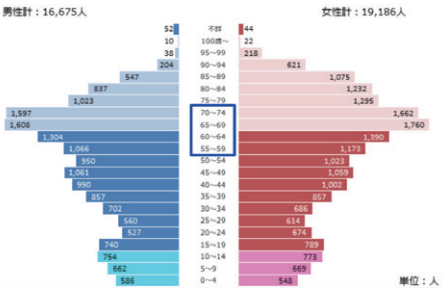


図２　2020 年のみやま市の人口構成

2　選定理由

生まれ育った福岡県みやま市の活性化となる施設計画をしたいと思い、みやま市の人が育つ濃瀬山公園の東側を敷地として選んだ。福岡県みやま市は、令和４年（2022）年３月末時点で人口は 35,788 人と小規模のまちで、平成１９年１月２９日に瀬高町、山川町、高田町の３つの町が合併し、誕生した比較的新しい市である。人口のボリュームゾーンは 50 代～ 70 代で、高齢化が進んでいる。（図 2）人口動態をみると出生数は平成 19 年から令和 4 年にかけ減少、転入転出による社会動態は毎年マイナスを記録している現状にある。（図 3）農業教育施設をつくることで人口の減少を止めることは難しいが地域で育てられた子ども達が成長し、大人になれば地域の子どもを育てるという人の循環を生むことでみやま市が活性化することを目標とする。


図３　みやま市の人口動態


図４ みやま市の位置と周辺の特産物

3　設計概要

①外観は農業に興味をもった人たちの受け皿となる形をイメージし、濃瀬山の地形に合わせて高低差を利用した農地と施設を散りばめる計画とする。農業を始めるきっかけとなるような体験施設とするために、栽培から収穫までの一連の流れが体験でき、技術的な相談ができるコーナーや農業を学ぶ学習コーナーを設け、地域でコミュニケーションを取りながら農業ができる施設計画とする。
②敷地西側にみやま市の人々が多数利用する濃瀬山公園がある。キャンプ場やイベント広場、遊具などの施設が、濃瀬山の地形に合わせて配置してある。敷地北西は公園の池に接するため、魅力的な景観を計画できる。公園からの人の流れを促進する動線計画で、農業体験施設と公園が一体となって、地域を盛り上げられるよう計画する。
③明治維新から立花家が土地にあう品種を研究した上で見出された「宮川早生」というみかんを育てる果樹畑。人口減少、少子高齢化によって整備されなくなった所が敷地の山に多くある。建物周辺に果樹園を計画して、みやま市のブランドみかんを展開していく。みやま市には他にも米、苺など特産品となっている作物があるため、農業体験施設周辺に農園を計画する。

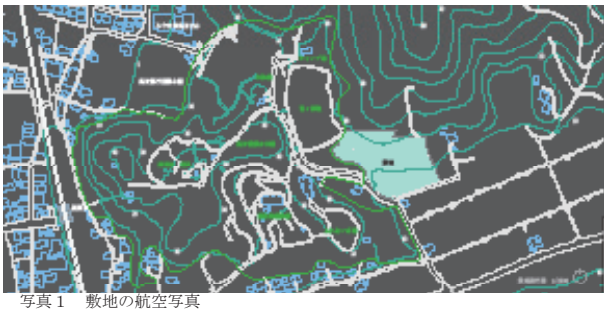


写真１　敷地の航空写真


写真２　敷地西側


写真３　濃瀬山公園

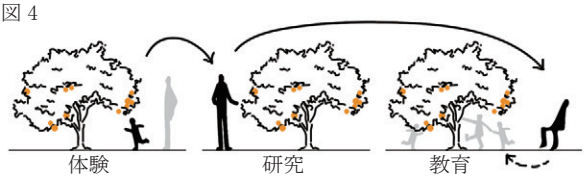
所在地：福岡県みやま市高田町下楠田
主な用途：学校（農業）、教育施設
敷地面積：13,930.8m^2
建築面積：5,171.02m^2
延床面積：3,419.87m^2
キーワード：農業・教育

Location ： Shimokusuhda,Takada-machi,Miyama-shi,Fukuoka
Main Use ： Educational institutions
Site Area ： 13,276m^2
Building Floor Area ： 4,448m^2
Total Floor Area ： 5,108m^2
Keywords ： Agriculture・Education

4　ダイアグラム

人が成長する過程で農業にふれる環境をつくることで、体験したことをもとに研究するようになり、自然から得た農業知識を後世に教育していくという「農業の循環」を生み出すことができる。（図４）この循環こそが地域の中で人が循環する仕組みになると考える。

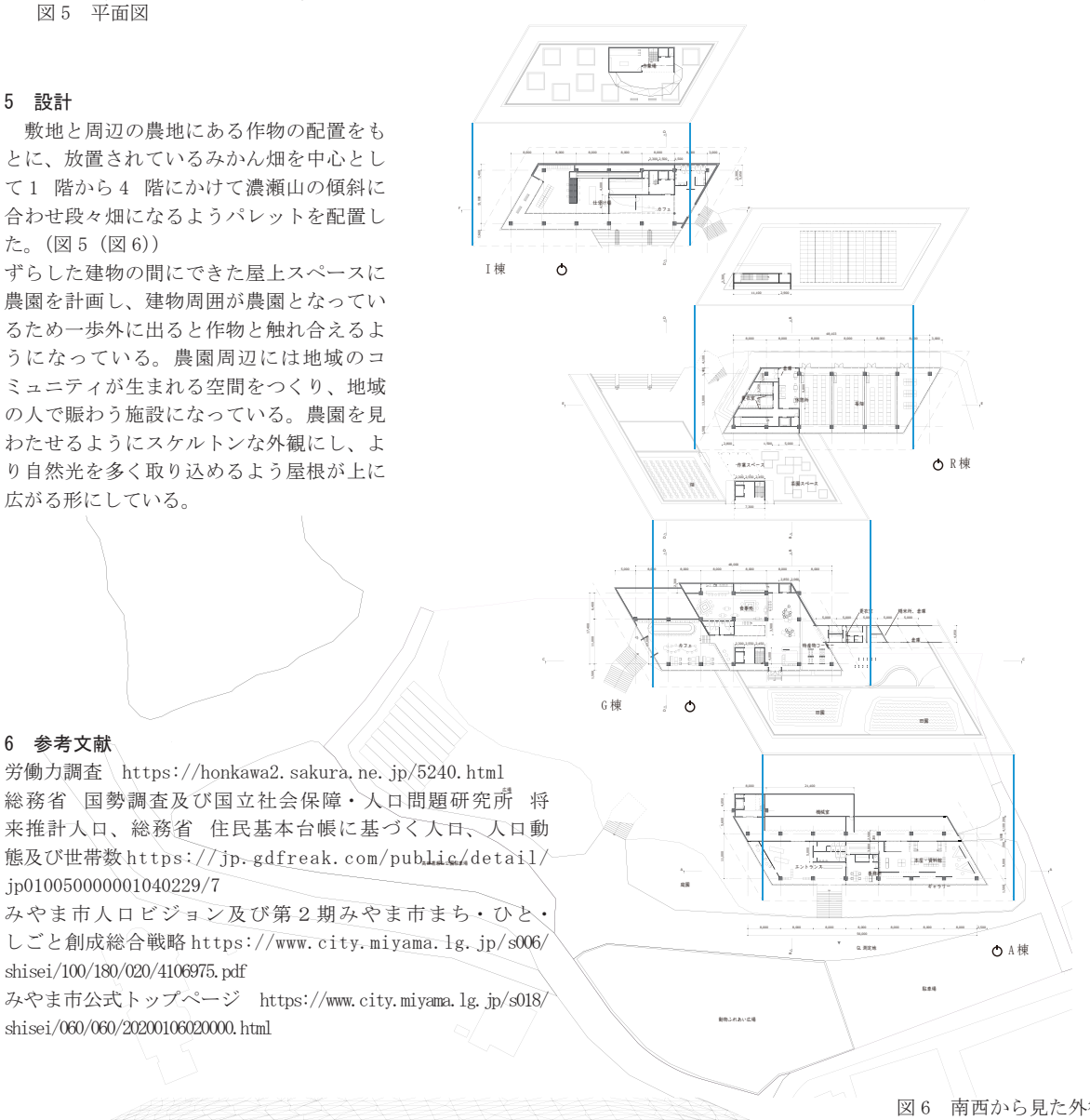
図４



5　設計

敷地と周辺の農地にある作物の配置をもとに、放置されているみかん畑を中心として１階から４階にかけて濃瀬山の傾斜に合わせ段々畑になるようパレットを配置した。（図５（図６））
ずらした建物の間にできた屋上スペースに農園を計画し、建物周囲が農園となっているため一歩外に出ると作物と触れ合えるようになっている。農園周辺には地域のコミュニティが生まれる空間をつくり、地域の人で賑わう施設になっている。農園を見わたせるようにスケルトンな外観にし、より自然光を多く取り込めるよう屋根が上に広がる形にしている。

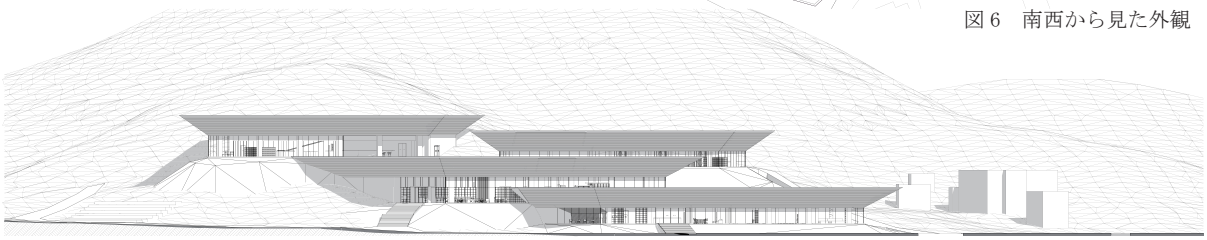
図５　平面図



6　参考文献

労働力調査　https://honkawa2.sakura.ne.jp/5240.html
総務省　国勢調査及び国立社会保障・人口問題研究所　将来推計人口、総務省　住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数 https://jp.gdfreak.com/public/detail/jp010050000001040229/7
みやま市人口ビジョン及び第２期みやま市まち・ひと・しごと創成総合戦略 https://www.city.miyama.lg.jp/s006/shisei/100/180/020/4106975.pdf
みやま市公式トップページ　https://www.city.miyama.lg.jp/s018/shisei/060/060/20200106020000.html

図６　南西から見た外観



現廃校青桃中学校校舎のリノベーション

学籍番号　K20299
名　　前　寺本　蓮
指導教員　江本　弘

現廃校青桃中学校校舎のリノベーション～観光拠点及び市民の集い場～

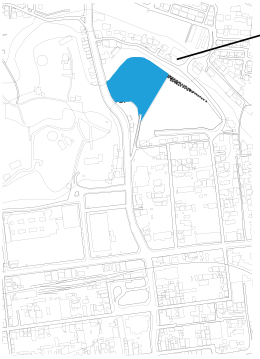
敷地紹介



上図は現廃校の様子

敷地の特徴

・伊賀市の中で栄えている場所にある点
・市街に対して少し標高が高いので市街を眺望できる点
・隣に上野城がある点
・周りに観光資源が多い点
・交通網が良い点
・敷地に入る際に綺麗なイチョウの木がある点
・隣に幼稚園がある点



周辺にある施設

上野城
だんじり会館
くみひも組匠の里
旧伊賀市庁舎
上野市駅
ハイトピア伊賀
上野運動公園
伊賀流忍者博物館
俳聖殿
芭蕉翁記念館
新天地

敷地周辺の紹介



敷地入り口のイチョウの並木



敷地下からの様子



敷地から見える市街の様子



敷地進入部分



幼稚園から見える敷地部分



幼稚園の様子

敷地及び敷地周辺から読み取れる点

上図のように敷地や敷地周辺には様々な特徴があります。敷地への入り方としては２方向ありその片方においてはイチョウの並木が綺麗に生えています。この並木を歩き終えた際にどの様な場所が広がっているのかや敷地下から少し建物が見える事で色々なものを連想させる時間になるなど様々な用途として使用できます。
また敷地は市街に比べて標高が少し高い位置になります。この事により市街を眺望でき展望台などの事に利用することができます。
隣地の幼稚園については考えることが多くあります。お互いの敷地が見える関係にあることからプライバシー面の配慮や観光客や市民の敷地への取り入れ方などについて考える必用があります。
敷地周りにある植栽の活かし方について敷地周辺植栽や木々などに覆われています。これらも建築計画と関連させる大きなポイントになると考えます。
これらが敷地や敷地周辺から読みとれる点ですｖ

伊賀市について

現在伊賀市の人口は 86157 人であり 10 年前と比較すると約 1 万人減少している。また観光客数においても年々減少傾向にある。観光客については滞在時間が短いことが問題となっている。これらの状況から伊賀市は観光復興に向けて次の目標を掲げている。

伊賀各地域に分散する多彩な「輝き」をつなぎ、一体的、有機的な「伊賀の観光スタイル」を提示する

これらのことから観光復興に繋がる物を計画する。

所在地：三重県伊賀市上野丸之内 177-1
主な用途：廃校
敷地面積：9771.06㎡
建築面積：1957.74㎡
延床面積：3506.61㎡
キーワード：リノベーション、宿泊施設、銭湯、飲食店

現在まで行なってきたこと

青桃中学校についての調査及び実測、図面作成
（右図が調査から作成した 1.2.3 階平面図）
伊賀市の観光スポットの調査（モクモク、芭蕉の湯、青山高原、岩倉峡..）
伊賀市が抱える問題点の調査（人口減少、観光客数の減少）
伊賀市の歴史背景の調査（上野城、城下町としての歴史、忍者..）
幼稚園との共存の仕方（展示等での連携、駐車場、プライバシー面..）
敷地内の特徴の整理（眺望、アクセス、校舎）

設計内容の計画

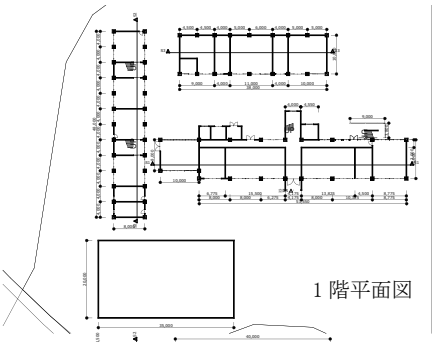
青桃中学校を図面化し考えたこと

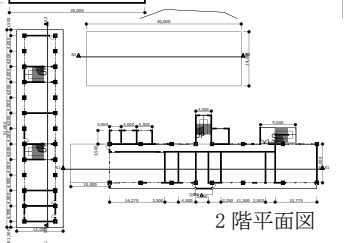
元が中学校となっており構造が SRC 造となっている。柱の間隔に合わせて各教室が設定されているのでこれに合わせ宿泊施設に入れる各部屋の設定をしようと考えた。また既存の校舎が 3 棟ありそれぞれに特徴があるので取り入れようとしているプログラムがどの棟に入れるのがふさわしいのかについて検討した。

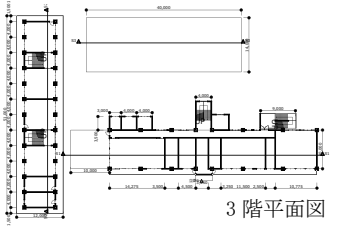
設計により解決したいこと　　プログラム

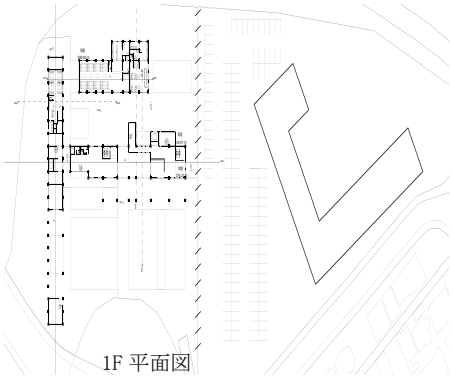
伊賀市に訪れる観光客の滞在時間が短い点
伊賀離れの抑制
既存校舎の活用
隣地幼稚園の送迎時のアクセントになるもの

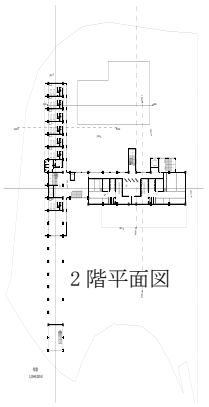
宿泊施設（観光拠点）
飲食店（観光客、市民の収集）
カフェ（幼稚園との連動）
銭湯（観光客、市民共有）
展望台（市街の眺望）
屋外イベント用スペース

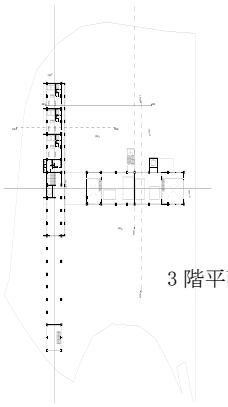

1 階平面図


2 階平面図


3 階平面図


1F 平面図


2 階平面図


3 階平面図

設計趣旨

ポテンシャルの高い敷地に現状廃校がありまたこの廃校は市の倉庫としてしか使われていない。この敷地を活かし廃校をリノベーションすることで伊賀市の抱える問題点の解決をしたい。
まず伊賀市へ訪れる観光客の滞在時間が少ないことから宿泊施設の選択肢に伊賀市が含まれるために宿泊施設のプランを取り入れる。伊賀市には自然を主とした観光地がありそれらを観光した最後に上野市街を観光しそのまま宿泊してもらえるような計画としたい。
隣地に幼稚園があるので保護者の方々が送迎時のちょっとしたアクセントや楽しさの一つなるものを取り入れる。送迎後にママ会がでたり幼稚園の先生が仕事終わりに来れる場所としたい。また計画としては幼稚園の作品を展示しそれを見ながらゆっくり話せる場所とする。
また伊賀市には銭湯が数が多くあったが現在は減ってきている。しかし現在サウナ等が流行しているためサウナを取り入れた銭湯を計画する。銭湯部分の計画としては宿泊者の利用に加えて銭湯のみの利用者も取り入れるよう計画する。銭湯には露天風呂を設ける事で伊賀市を眺望できるなど敷地を存分に活かすことができる。飲食店の計画宿泊者が利用すると共に飲食店のみの利用も可能とする。
これらの計画を組み建てることで伊賀市の問題点を解決し市民も集え観光客も訪れたいと思える物を計画する。

戦後那覇の復興した町並と建築に関する調査報告
～平和通り沿いの二階建て木造建築の遺構を基に～

学籍番号　K20300
名　　前　友寄安理沙
指導教員　砂川晴彦

沖縄　戦後　町家
大壁造　一番座　中廊下

序章

1. 那覇の戦後復興とは

沖縄県那覇市は沖縄の中心地である。その中でも平和通りのある牧志は戦後早期解放された土地であり最初の商業中心となった地域である。

2. 二階建て木造住宅について

沖縄では本州で言う住宅店舗併用の町家が発達せず代わりに広場に立つ市（マチ）が商業空間であった。戦後那覇の復興に形成された店舗併用住宅とその町並みが沖縄の住居史にどのように位置付けられるのかが論点といえる。

3. 本研究の目的と方法

上記を踏まえ、本研究では沖縄戦後の復興の際にどのような町並みと建物が形成したのかを明らかにすることが目的である。戦後早期解放された土地で形成が観察できる平和通り付近を研究の対象とする。研究方法として、初めに建築図面が残らないため古写真を用いる。そして当時どのように居住者が生活をしていたのか現地での二階建て木造住宅の遺構調査に基づいて考察する。2023 年 9 月 4 日～ 16 日に聞き取り調査、10 月 28 日～ 30 日に実測調査・聞き取り調査を実施した。

4. 先行研究と本研究の関係

戦後那覇市の牧志公設市場周辺における仮設建築とガーブ川水上店舗の形成について初田香成博士の研究がある。対して、本研究は通り沿いの町並みや住宅に注目している点に新しさがある。二階建て木造住宅の建築的特徴について福島駿介博士の研究がある。本研究もそれに習うが、福島博士は開南の専用住宅を中心にしており町並みや住居類系については扱っていない。

第 1 章　古写真による町並形成の解析

1. 市街地化の過程

初田香成博士研究資料から 1945 年から現在の那覇市公設市場付近市街地化の市街地化の過程を考察した。

2. 町並の移り変わり

戦後那覇の古写真を収集するにあたり、那覇市歴史博物館、沖縄県公文書館において現存する主要な古写真の把握ができる。那覇市歴史博物館のデジタルミュージアムに収集されてる写真資料から時代と通り事にまとめた。**図 1** はその抜粋である。

3. 古写真の位置比定

古写真の撮影地点の位置を比定した。**図 2** は 40、50 年代における平和通りの町並み写真の位置比定を検討したものである。注 1)

第 2 章　商店街図にみる商店構成

1. 商店街図にみる商店構成

1955 年那覇市主要通り商店案内資料より平和通りの業態を判定した。**図 3** はその業態を書き上げた表である。平和通り沿いに国際通り側から東側と西側で商店に番号を振り分け、業態を判定するため資料に記されている広告欄から判断した。

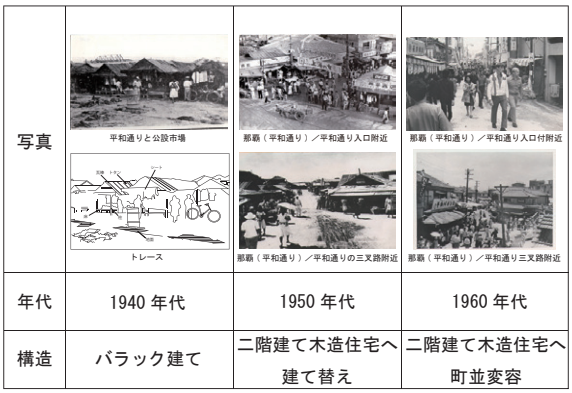


図 1　平和通りと町並

古写真を用いてトレース作成
出典：那覇市歴史博物館デジタルミュージアム所蔵

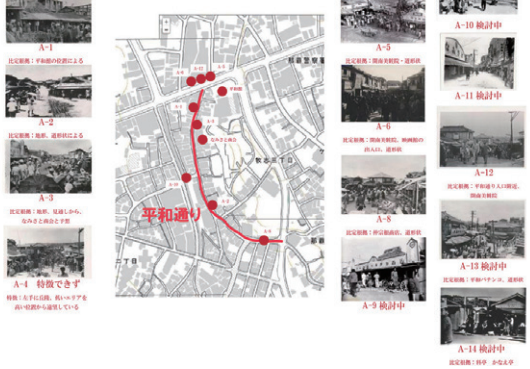


図 2　40 ～ 50 年代平和通りの古写真撮影位置の比定

地図・空中写真閲覧サービス（国土地理院）を加工して作成
出典：那覇市歴史博物館デジタルミュージアム所蔵

番号	店舗名	種別
西-1	丸正商店	外人向国土産品店
西-2	新光マーケット	マーケット
西-3	みやざ食堂	食堂
西-4	平和デパート	不明
西-5	澤村時計店	時計
西-6	渡口万年筆支店	万年筆
西-7	丸三マーケット	マーケット
西-8	あけぼのマーケット	マーケット
西-9	平尾本店	不明
西-10	トウママーケット	マーケット
西-11	すゞらん美容院	美容
西-12	あけみ商会　あけみマーケット	マーケット
西-13	パール商會	商会
西-14	マリー美容室	美容
西-15	信興商事本店	商事
西-16	豊里商店	不明
西-17	安村書店	書店
西-18	パリー美粧院	美容
西-19	丸良(○に良)マーケット	マーケット
西-20	丸一(○に一)マーケット	マーケット
西-21	レストランマサロ	レストラン
西-22	レストランクール	レストラン
西-23	二階安木屋ホール　安木屋百貨店	百貨店
西-24	昭和堂時計店	時計
西-25	レストランあをば	レストラン
西-26	興業商会	商会
西-27	城間商店	不明
西-28	通前交番	交番
西-29	雑貨の部　市場　靴之部	雑貨　靴
西-30	平和堂時計店	時計
西-31	綺平名商店	織物
西-32	雑貨店	雑貨
西-33	高良商店	不明
西-34	豊里商店	不明
西-35	小渡金物店	金物
西-36	上原茶行	茶屋
西-37	フタバ美粧院	美容
西-38	吉森商店	不明
西-39	キクスマーケット食糧品ストアー	マーケット
西-40	伊示根商店	不明
西-41	ナシロ薬房	薬局
西-42	新聞商店	新聞

番号	店舗名	種別
東-1	大栄マーケット	マーケット
東-2	三工美粧院	美容
東-3	新生堂楽器店	楽器
東-4	謝花履物店	靴
東-5	町田衣料品店	衣類
東-6	吉美マーケット	マーケット
東-7	平良商店	不明
東-8	スイス堂時計店	時計
東-9	富士靴店	靴
東-10	比嘉薬局	薬局
東-11	比嘉商店	不明
東-12	オーケーバザー	不明
東-13	こまどり	不明
東-14	オリンピック	不明
東-15	玉栄商会	商会
東-16	並里商会	商会
東-17	中央パチンコ	パチンコ
東-18	鉢嶺時計店販売部	時計
東-19	荒垣兄弟商会	商会
東-20	衆原商店	不明
東-21	平田専門大店	不明
東-22	中央デパート	不明
東-23	比嘉商店	不明
東-24	沖曦商生堂	婦人用品
東-25	高良時計店	時計
東-26	長嶺商店	不明
東-27	雑貨店	雑貨
東-28	姫一　マーケット	おもちや
東-29	垣花おもちや店	おもちや
東-30	桃見薬局	薬局
東-31	川田厚生堂	薬局
東-32	文楽堂	薬局
東-33	OK．BAZAR	不明
東-34	不明	不明
東-35	明新堂	不明
東-36	大丸百貨店	百貨店
東-37	スタイル堂開商店	不明
東-38	沖曦商会支店	商会
東-39	仁金物百貨店	金物百貨店
東-40	平山商店	不明
東-41	阿波根商店	不明
東-42	富村商店	不明
東-43	照屋楽器店	楽器
東-44	九十商会	商会
東-45	ライトハウス	不明
東-46	講雑貨	雑貨
東-47	みつや書店	書店

図 3　業態書き上げ表

出典：『那覇市主要通り 商店案内 1955』を用いて作成

第３章　遺構に基づく木造二階建て住宅の建築的特徴

本章では、平和通り付近に位置し現存する木造二階建て住宅の現地調査を行った。以下は木造二階建て住宅の２階部分を実測した成果を解説する。その調査家屋の一覧表は**図４**の通りである。

1. 調査家屋１

当初は店舗併用住宅であり、１階部分がお店で２階部分は住居となっていた。２列３間取りの間取りである。これは仏間のある二番座がないとみたられるので当家屋はお店として商売の役割がある建物であり住むための習慣を重視した建物ではないことが分かった。

2. 調査家屋２

当初は、二戸建て住宅、１階２戸１、２階は旅館利用として当時建てられたことが分かった。2列8間取りの間取りである。調査した結果、小さな部屋が中廊下の動線に並んでいる平面と判断し、床の間が無く押し入れが確認出来た。聞き取り調査から宿泊施設が多い地域でもあったという。宿泊者は地方からの取り付けにくる商人の宿であったという。この聞き取り調査から住まいとは考えにくく宿であることが明確になった。

3. 調査家屋３

聞き取り調査から当初は店舗併用住宅と専用住宅の２棟であったがその後２棟を繋げた人がおり１階はお店、２階は住宅と１つの店舗併用住宅に改築されたことが分かった。調査した結果、１列３間取りの間取りであり、当初の間取りとして残されていたのが中の間と床の間がある奥座敷と思われる室であった。



図４　調査家屋平面・写真

調査日：2023 年 10 月 28 日～ 30 日

終章　まとめ

第一章では、戦後那覇市平和通り付近の町並形成を古写真で解析すると、40 年代はバラック建てで 50 年代になると二階建て木造住宅が建ち始め、60 年代にはバラックから建て替わったことが分かる。

また古写真の位置比定より平和通り入口付近・市場付近・櫻坂通り付近の３つの地点から建物の移り変わりが想定できる。撮影地点が平和通り入口付近に集中していることが分かり、木造二階建て住宅が建て並んでいるのが観察された。入口付近から離れ、市場付近に南側へと降りると建て並んでいる二階建てから平屋建ても見られ、更に南側へ降りた櫻坂通り付近ではバラック建てが確認された。以上より３つの地点から二階建てに全てが建て替わっているわけではないことが分かった。

第二章では、1955 年の商店街図を見て、東側と西側の通りではそれぞれ店舗の特色があることが分かった。

東側は商会・薬局が多く、西側はマーケット・飲食・美容が多い。

西側に外国人向御土産品店と記される特徴的な業態がある。戦後まもない沖縄は 1972 年までアメリカ統治下に置かれていた為外国人向けの御土産品店を設けられたと考えられる。これは戦後沖縄の歴史的背景が記されていることが理解される。

第三章では平和通り付近に位置する当時の木造二階建て住宅の復原図面を起こした。

調査家屋１の当初は店舗併用住宅であり、１階部分がお店で２階部分は住居となっていた。従って、当家屋はお店として商売の役割がある建物であり住むための習慣を重視した建物ではないことが分かった。

調査家屋２の当初は、二戸建て住宅、１階２戸１、２階は旅館利用として当時建てられたことが分かった。

調査家屋３の当初は店舗併用住宅と専用住宅の２棟であった。その後２棟を繋げた人がおり１階はお店、２階は住宅と１つの店舗併用住宅に改築されたことが分かった。

また古写真の位置比定より平和通り入口付近・市場付近・櫻坂通り付近の３つの地点から建物の移り変わりが想定できる。撮影地点が平和通り入口付近に集中していることが分かり、木造二階建て住宅が建て並んでいるのが観察された。入口付近から離れ、市場付近に南側へと降りると建て並んでいる二階建てから平屋建ても見られ、更に南側へ降りた櫻坂通り付近ではバラック建てが確認された。以上より３つの地点から二階建てに全てが建て替わっているわけではないことが分かった。

【参考文献】

・初田香成　シンポジウム・シリーズ都市空間の物質性（マテリアティ）第４回　物質性が示す都市のかたちとイメージ『日本建築学会建築士・意匠委員会都市史小委員会』(2023 年２月 18 日）

・福島駿介、安藤徹哉「那覇市における木造二階建住宅の研究　戦後の市街地形成における位置付け」『日本建築学会計画系論文集』494 号、1997 年

・那覇市歴史博物館デジタルミュージアム所蔵

・『那覇市主要通り商店案内 1955』 那覇市歴史博物館所蔵

・『住宅地図那覇市　548(1973 年）』 那覇市歴史博物館所蔵

【注釈】

・地図・空中写真閲覧サービス（国土地理院）を加工して作成

滋賀県に IR なんてできる訳ない

学籍番号　K20301
名　　前　鳥井洸希
指導教員　杉本直子

Don’t think an IR can be established in Shiga.

Student Number　K20301
Name　Koki Torii
Supervisor　Naoko Sugimoto

計画背景

IR(Integrated Resort（総合型リゾート）の略､以下 IR)､リゾート型施設は日本にはないが、日本は地方都市の経済を活性化させるために IR の誘致を積極的に考えており、これから導入されることが決まっている案がある。IR の一部にカジノ（ゲーミング施設）が組み込まれている物も多くありその部分をどの様に商業施設に取り組んで行くかを考える。シンガポールなどの IR には全体の建築面積の３％しかカジノはない中でカジノの売上は IR 全体の売り上げの９３％を占めている。その場所で働く人たちによって消費される物も多くありそれによって色々な波紋効果が生まれている。米国の IR の直接消費に関してはギャンブル消費に付随した消費によって直接消費の合計額が 1.3 倍になっている（表１)。リゾート宿泊事業者が損益分岐点として目指している客室稼働率は 60 ー 70%で滋賀県は 59.5%で足りていない（表２)。

計画目的

もし滋賀県に IR を計画された時どのようにすれば滋賀の経済をよりよくなるのか考え、IR を計画して滋賀県が海外旅行客にとっての旅行先として認知される様にしていきたい。そのため滋賀県の今ある宿泊施設にプラスアルファとして IR 計画を行う。「地方型」と呼ばれる IR の形はいくつかある。リゾート地への形式はいくつかのパターンがあり、その一つのパターンを使ってすでに存在するリゾート地への統合型リゾートを導入する。

滋賀県は琵琶湖という日本最大の湖があり、春夏秋冬の四季を持つという世界にも珍しい特色を持ちマリンリゾート、スキーリゾート、フィッシングが存在している。その為元であり、フィッシングができる場所として存在している。その為リゾート地にプラスとして統合型リゾート施設を「地方型」として組み込んでいく事が大切なのでそれを踏まえて計画する。しかし問題点としてオーバーツーリズムが起きる可能性がある。その解決のために琵琶湖を横断してのアクセスができるように計画する。滋賀県には琵琶湖に浮かぶ島の港を含んだ時、港が１１港あり、滋賀県の各地に行くことが出来る。その港を利用して他県から琵琶湖を横断して IR 計画地にアクセスできる事で交通渋滞を減らす対策を含んで計画する。

計画敷地

敷地場所は、滋賀県の南東部に位置する滋賀県守山市今浜町で用途地域は商業地域である。

この敷地は草木、池や川が多く自然豊かな土地である。そばに琵琶湖湖岸公園がありそこは外国人観光客が多く見受けられる。周りの道路は県道で日中は混んでおり、それ以外の道路は車通りが少ない。ここに建つリゾートホテルやほかの施設は老朽化し、周りにはそれ以外のその周りには周りに建物はない。琵琶湖周辺をサイクリング、ランニングをしている人が多い。元々ラフォーレ守山を改装してマリオットホテルになった。今回の計画は地方型 IR なので近くにある大型ショッピングモールを含んだ IR 計画とする。（図３）

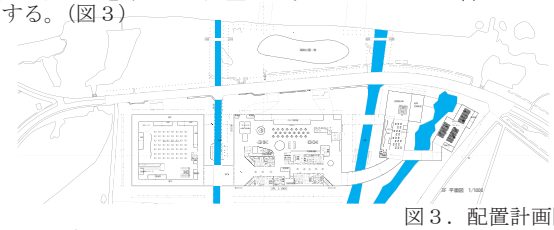


図３．配置計画図

地域の歴史

この地は守山宿として栄えた。寛永年間、徳川幕府から守山宿に制札が下されると、街道の整備とともに宿場が整い、朝鮮通信使が東門院で宿泊するなど､京発ち守山泊まりとして賑わい、また、花市は京、大坂にも劣らない活気があったということである。そのため京都、大阪への多くの観光客が滋賀県で宿泊してもらえるようになれば昔のように大阪にも劣らないくらいの賑わいを取り戻すことが出来ると考えている。

都市計画

守山市都市計画には、以下のスローガンがある。
① 市民交流ゾーンにおける適切な土地利用誘導について
② レインボーロード沿道における適切な土地利用誘導について
③ 市街化調整区域の既存集落型地区計画のあり方について
④ JR 守山駅周辺の立地特性と今後の変化を踏まえた都市計画

表１．米国の IR の波及効果による消費額

	カジノ施設でのギャンブル消費	カジノ施設での飲料消費	カジノに伴う宿泊費	カジノに伴うその他の消費	合計
直接消費	346	65	51	35	497
カジノ付近の消費*1	198	54	36	22	310
カジノ従業員の生活から生まれる消費*2	308	64	46	32	449
合計	851	184	134	88	1257

1.3 倍

書籍　木曽　崇『日本板カジノのすべて』より

表２．滋賀県
客室宿泊稼働率

全ての宿泊施設タイプ：53.7%
旅館：37.7%
リゾートホテル 59.5%
ビジネスホテル：66.8%
シティホテル 74.8%
会社・団体の宿泊所：13.1%
簡易宿所：17.1%

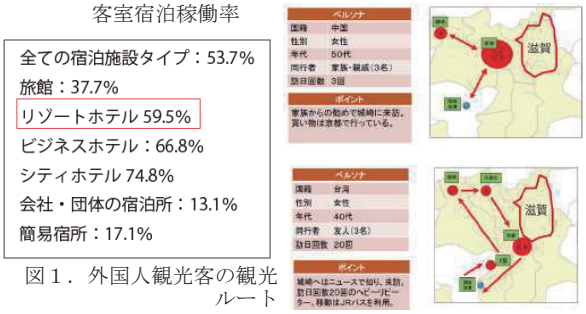


図１．外国人観光客の観光ルート

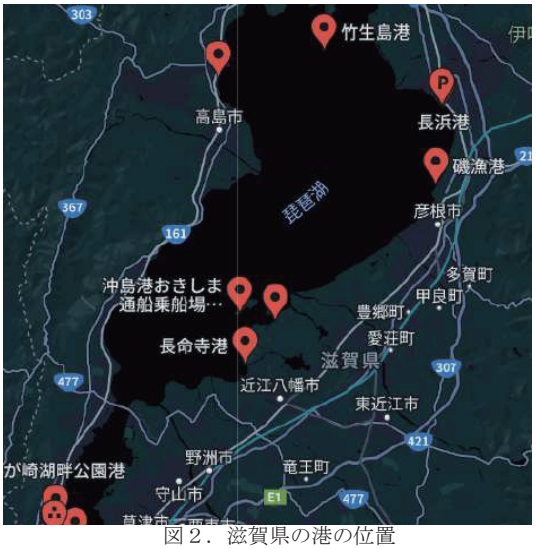


図２．滋賀県の港の位置



図４．計画地と周りの建物

所在地：〒524-0101 滋賀県守山市今浜町十軒家２８７６
主な用途：IR
敷地面積：139,233 ㎡
建築面積：26,119 ㎡
延床面積：31,206 ㎡
キーワード：IR　カジノ　滋賀　びわ湖　オーバーツーリズム　日本初　地方型リゾート　地域の特徴を活かす　経済活性化　ギャンブル　ギャンブル依存症　外国人観光客　国内観光客

Location ：524-01012876 Jukenya, Imahama-cho, Moriyama-shi, Shiga
Main Use ： IR
Site Area ： 139,233 ㎡
Building Floor Area ： 200㎡
Total Floor Area ： 200㎡
Keywords ： IR Casino Shiga Lake Biwa Overtourism Japan’s first regional resort Taking advantage of regional characteristics Economic revitalization Gambling Gambling addiction Foreign tourists Domestic tourists

のあり方について
⑤ 都市構造の変化、土地利用の動態変化を踏まえた用途地域等の見直しについて
⑥ 長期未着手の都市計画施設について

計画要点

①、宿泊施設以外は低層にして眺望を確保する
　周りに高い建物がないので宿泊フロアから琵琶湖や、山々を眺められるようにする。
②、水路からアクセスできるようにして動線を増やす
　港から宿泊施設、カジノ施設まで徒歩ではなく船でアクセスできる特別感を演出できるようにする。
③、高低差を作って琵琶湖へ視線を確保し開放感を得る。
　元々琵琶湖に近い敷地で琵琶湖に向けて高低差を感じられる場所なのでそれを生かして人が歩いているときに琵琶湖を見て自然を感じられるようにする。
④、カジノ施設を分散させる。
　カジノの施設の間を結ぶ場所に飲食店、物店などを配置しそこに人を来てもらえるようにする。カジノのゲームの種類によって分けることで色々な角度から琵琶湖の景色を楽しむことが出来るようにする。
⑤、地域の特徴を組み込んだ計画
　池と川が周りに多くあり、その池や川は琵琶湖につながっている。そのため計画敷地から水路を作って琵琶湖につなげ、一つのモニュメントとして扱い、その水路から宿泊施設、娯楽施設にアクセスできるようにする。また、周りに緑が多いことからカジノ施設にも多くの緑を含み、カジノの奇抜さを残した形のまま緑をとり入れる。

ダイヤグラム

琵琶湖から計画敷地まで高低差があるのでその高低差を生かして宿泊施設は眺めが良いように高くし、カジノ施設は琵琶湖川に設け眺めを良くする。また港からアクセスする時に道路の下を通りアクセスできるようにする。そのようにすることで港から施設まで動きが出来る。琵琶湖から宿泊施設、カジノに水路を引いてその場所から船でアクセスできるようにして動線を増やす

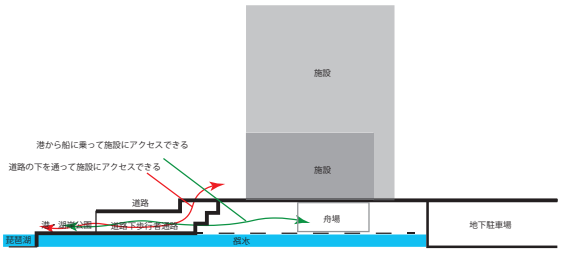


図６．ダイヤグラムⅠ

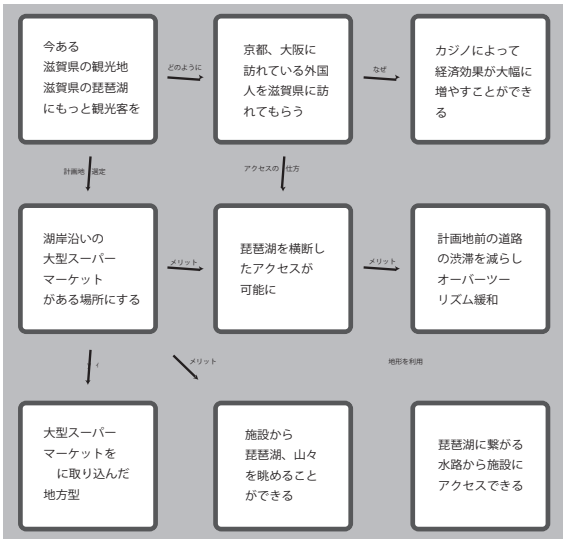


図５．計画背景と設計意図

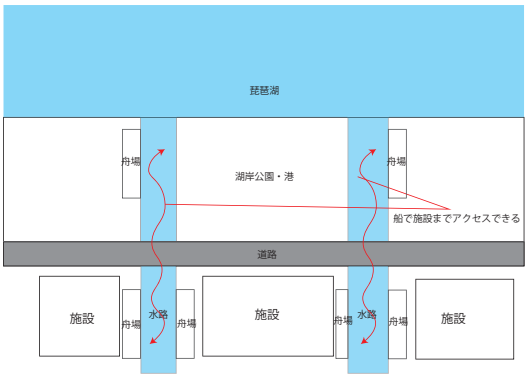


図７．ダイヤグラムⅡ

この計画を通して

日本にはまだない IR だが、IR と言えばカジノ＝ギャンブル＝危ないのイメージをどの様に滋賀県に組み込むことで緩和し、滋賀県の経済をよりよくできるのかを考えていかなければならない。IR 一つの作るのには多額の資金が必要だが、その場所の特徴を生かした計画を行うことで一つの観光地となって地域が潤うことは間違いない。



図８．現状写真

参考文献

https://resas.go.jp/#/25/25207　参照 23/07/26　RESAS
https://kansai.or.jp/wordpress/wp-content/uploads/2018/08/.pdf　参照 23/07/06 関西圏における観光統計総合分析参考資料
木曽　崇『日本版カジノのすべて』、2014/10/1、日本実業出版社
商店建築、2021/6/1、カラーキネティクス・ジャパン株式会社
『一からわかる統合型リゾートのイロハ』、2018/9/7、共同印刷株式会社
渋谷和宏、『IR（総合型リゾート施設）はニッポンを救う！』、マガジンハウス　2019 年
高坂明子、『オーバーツーリズム』、2020/3/20 学芸出版社

技芸に携わっていた女性の職能と貸座敷の分布との関連性

学籍番号　K20302
名　　前　内藤 由華
指導教員　井上 年和

京町屋　花街　技芸
貸座敷　町なみ　大正時代

1-1 研究目的

現在も芸妓や舞子が活躍している花街には、町屋が多く残り、景観が保護されている。このことから、町屋や町なみの保全継承には、技芸文化も関係があるのではないかと考え、今回の研究テーマとした。

1-2 研究方法

大正時代に刊行された雑誌である、『技芸倶楽部』[注 1] には、芸舞妓及び娼妓名簿や貸座敷一覧が掲載されていた。その中から、祇園町（甲部・乙部）、宮川町、先斗町、上七軒、北新地の内容を抜粋し、まとめる。当時の地籍図[注 2] から、地番の数を数え、上記のデータと比較する。
比較結果を地図上にまとめ、現状の京都の町と比較することで、技芸文化が京都の景観にどのように影響を与えているかを考察する。

1-3 先行研究

狩野歩夢, 岡崎篤行「花街の貸座敷に関する戦前の分布　―祇園を対象として―」公益社団法人日本都市計画学会　都市計画報告集 No. 21, 2023 年 2 月
祇園甲部に注目して貸座敷分布に関して研究している。今回は、他の花街にも研究対象を広げ、花街同士で比較し特徴を見つける。

2-1 職能別分布から見る各花街の特徴

祇園町は、甲部と乙部に分かれていたため、以降祇園甲部、祇園乙部としてそれぞれ比較する。
6 つの花街全体に対する各職能の花街ごとの割合では、芸妓と総数、義太夫と舞子、それぞれの割合の分布の仕方が似通っていた。娼妓は唯一最も所属人数の多い町が祇園甲部ではなく、北新地が半分以上の割合を占めていた。

2-2 各花街の内部の職能別分布の特徴

祇園甲部の四条通より北側の町では、中心ほど芸妓が多く所属していたことに対して、娼妓は、外側の町ほど人数が多くなっているため、芸妓と娼妓の分布は真逆となっている。（図 1）芸妓以外の 3 つの職能の割合が近しいことも祇園甲部の特徴である。

先斗町の上下の端の町は、どの職能でも所属が少ない。どの職能も先斗町通より東側に比較的多く分布していた。また、舞子以外は下椎木町に所属している女性が最も多く、芸妓は下椎木を中心に全体に、義太夫は下椎木町から下側に、舞子は下椎木町から上側に分布しており、娼妓は下椎木町と先斗町通を挟んで西側の梅之木町と若松町にのみ所属していたことから、先斗町の技芸文化の中心は下椎木町であったことが伺える。先斗町全体に対する芸妓の人数の割合は、他の花街の芸妓の割合よりも高い。

宮川町は、祇園町の次に技芸に携わる女性が多かった。宮川町の芸妓の分布は、他の花街に比べ、比較的均等に所属していた。宮川筋四町目に最も所属が多く、この町を中心として上下に分布していた。芸妓と義太夫の分布の仕方が似通っていた。新宮川松原下は舞子の所属人数の最も高い町であり、娼妓の所属がない唯一の町でもあった。宮川町の中心に位置する宮川筋五町目はどの職能の所属も少ない。祇園甲部や先斗町と比べると娼妓の割合が高い。

北新地は他の花街と違い、最も所属の多い職能が芸妓ではない。全体の 91%が娼妓であることから、娼妓本位の町であったと考えられる。また、娼妓の総人数の割合において北新地が最も高く、52%を占めることから、京都の娼妓文化の中心となる花街であった。どの職能も四番町が最も多く、次いで五番町であることから、北新地の技芸文化の中心は四番町と五番町であったと考えられる。

上七軒は、技芸に携わる女性の人数が最も少ない町である。そのためどの職能でも上七軒の占める割合は低いが、花街ごとの職能別割合の義太夫が占める割合は最も高い。

祇園乙部は、芸妓と娼妓のみの所属となっており、芸妓と娼妓の人数が近しい唯一の町である。

3-1 貸座敷の花街ごとの分布

技芸に携わる女性の総人数の花街ごとの割合と比べると、貸座敷数の花街ごとの割合では、北新地の割合が低くなっている。貸座敷の数は、技芸に携わる女性の数の半分以下であることから、貸座敷 1 軒に対して 2 人以上の女性が所属していたと考えられる。

3-2 花街ごとの分布の特徴

祇園甲部の宮川筋一丁目と中之町は、芸舞妓及び娼妓名簿に記載がなかったため、貸座敷のみが存在していたと考えられる。他の花街に比べ地番数に対する貸座敷数の割合が低いことから、貸座敷以外の建物も多くあったと考えられる。(図 2)

先斗町は、下椎木から下の町にかけて貸座敷が多い。職能分布と同じで、下椎木の割合が最も高い。鍋屋町は職能分布の割合は低かったが、貸座敷数の割合は高かった。ほとんどの町で地番数よりも貸座敷数のほうが多いことから、同じ地番に複数の貸座敷が存在していたと考えられる。

宮川町職能分布と貸座敷の分布が似ていた。先斗町と同じく、地番が細かく分かれており、その地番数よりも貸座敷数が多いことから、貸座敷が非常に密集していたと考えれえる。

北新地の全体の半数以上が四番町に位置していた。白竹町

は、地番が 1 つしかないため、地番数に対する貸座敷数の割合が 700%と高くなっていたが、貸座敷数は最も少ない町であった。

上七軒には、大きな地番があったが、地番数に対する貸座敷数の割合は高くなかったことから、貸座敷以外の建物が多くあったと考えれる。

祇園乙部には第 1 種貸座敷と第 2 種貸座敷という区分があり、区別の定義もあったが、実際にどのような基準で分けられていたか正確にはわからなかったため、合計して考える。[注 3]

地番数に対して貸座敷数の割合が高いため、同じ地番に貸座敷が複数位置した場所もあったと考えられる。

4 職能別分布と貸座敷数の比較

各花街の町ごとに貸座敷数に対する職能別の人数の割合を算出し考察した。

祇園甲部の貸座敷数に対する芸妓の割合は、他の花街よりも比較的平坦であった。元吉町は芸妓の割合は低かったが、娼妓の割合は高いほうであった。

対して、常磐町川端町は、祇園甲部の中で芸妓の割合が 2 番目に高い町であったが、娼妓の所属はなかった。

先斗町の柏屋町西側は、貸座敷数が少なかったため、貸座敷数に対する芸妓の割合が、900%となっており、これはすべての花街の中で最も高い割合である。他の町は、祇園甲部と似たような数値の町が多い。

宮川町は他の花街より、貸座敷数に対する芸妓と娼妓の割合の差が小さい。芸妓の割合は、四番町が最も高く、四番町を中心に上下に離れていくほど割合が低くなっていた。

北新地は唯一すべての町で、貸座敷数に対する芸妓の割合よりも娼妓の割合のほうが高い花街であった。先斗町の柏や町西側以外の全ての町より、北新地の娼妓の割合が高い。割合で見ると貸座敷 1 軒にあたり、3～5 人の娼妓が所属していたことになる。

上七軒は貸座敷数が少ない花街であったが、芸妓の人数も少なかったため、割合でみるとほかの花街と大差があるわけではなかった。芸妓と義太夫の多い町であったため、娼妓の割合は非常に低い。

祇園乙部は芸妓と娼妓の人数が近いため、貸座敷数に対する割合も近かった。どちらも 100%を少し超える程度であったため、1 つの貸座敷に対して、芸妓や娼妓合わせて 2～3 人程度の所属であったと考えられる。

5 結論

現在京都市の条例で景観保護されている町は、大正時代においても貸座敷数の多い町であった。

娼妓の多かった町でも、花街全体で見たときに舞子や義太夫も所属のあった場所は、現代でも町屋が残っている傾向が見られた。北新地や祇園乙部は、芸妓と娼妓のみ所属が多く、舞子の所属が無かったことなどが、町屋の減少に影響したのではないかと考えられる。

上七軒は、6 つの花街の中で、貸座敷数や技芸に携わる女性の数が最も少なかったが、現在も町屋が残っていることから、花街同士の相対的な数値は、保全継承には、直接関係があったわけではないと考える。

宮川町全体の職能別割合では、娼妓の割合が高く、舞子や義太夫の割合が低いが、6 つの花街全体で考えると、割合が低いわけではない。また、地番数に対する貸座敷数の割合や、6 つの花街全体の貸座敷数に対する宮川町の割合が高いことも、現在までの町屋の継承とかかわりがあると考える。

【注釈】

注1　技芸倶楽部社『技芸倶楽部』1926

注2　京都地籍図編纂所『京都市及接続町村地籍図』1912

注3　第一種 客ヲシテ遊興セシムルモノ　第二種 客ヲシテ遊興セシメサルモノ

注4　学校法人八坂女紅場学園『都をどり創始百五十年・歌舞練場新開場記念　祇園甲部と都をどり　～あゆみと未来～』2023



図 1　祇園甲部の芸妓と娼妓の分布

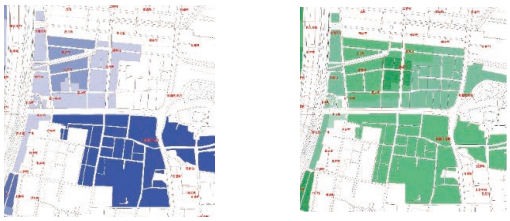


図 2　祇園甲部の貸座敷の分布

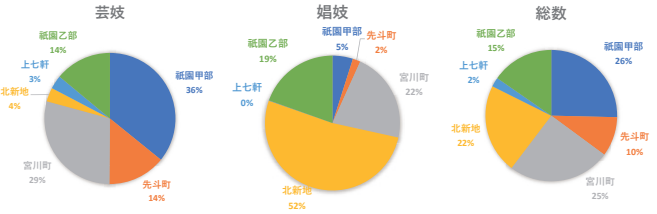


図 3　各職能の花街ごとの割合

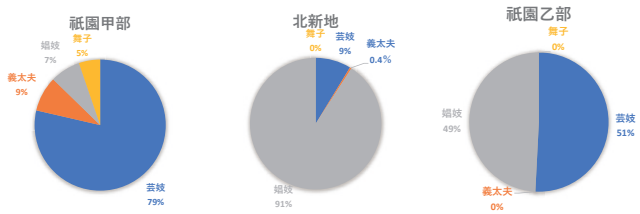


図 4　各花街の職能別分布

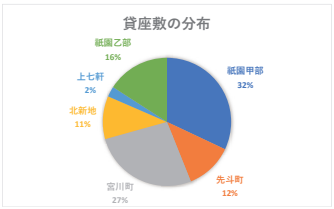


図 5　花街ごとの貸座敷の割合

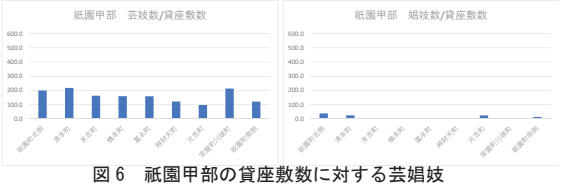


図 6　祇園甲部の貸座敷数に対する芸娼妓の割合

GREEN PLAZA

～“とかいなか”で緑あふれる駅前空間～

学籍番号　K20304
名　　前　中上 歩美
指導教員　杉本 直子

計画背景

地元である高槻市の駅前にある商業施設グリーンプラザ（図1）が駅前にあるというにもかかわらずシャッターが閉まった店が多く、施設に入る人も少ない。駅前が開発され、グリーンプラザができた1979年から（図2）長い年月が経ち、1号館、3号館ともに衰退している。バブル崩壊とともに都心も崩壊し、都心空洞化が起こり、シャッター街が増えた。グリーンプラザも多くの店が閉店しシャッター街と化している。
駅前にあるのにもったいないと思い、より多くの人が訪れたいと思う商業施設にリノベーションするだけでなく、周辺のデッキも計画し、駅周辺を統一することで多くの人でにぎわう駅前空間に再生するべく、計画を行う。

計画目的

廃れたグリーンプラザを多くの店と人で賑わう商業施設にもう一度取り戻すことが目的である。

時間帯問わず多くの人が利用するJR高槻駅は、デッキでつながっている。そのすぐそばにあるというにもかかわらず、どの時間帯でも施設に入って行く人が少ない。塾やオフィスなどが入っているため、目的を持った人しか利用しない様子を現地に行って感じた。

デッキとグリーンプラザを統一するだけでなく、出入口を広げ誘導する工夫をする。また、テラスや緑化スペースを設け、駅前にいながらも自然を多く感じられる空間を計画し、高槻市の特徴である“とかいなか”を感じさせる。デッキは現在のデッキよりも幅を広げ、人々が「通る」だけでなく「止まる」場所を計画する。

計画敷地

敷地場所は大阪府高槻市紺屋町にある。JR高槻駅前にあり、駅北側にはアル・プラザや高槻阪急、南側には松坂屋（旧グリーンプラザ2号館）、高槻センター街、飲食店などが立ち並ぶ。
計画敷地である高槻市は、大阪・京都へ通勤通学が便利なベッドタウンとして有名である。（図3）また、“とかいなか”という特徴があり、都会の便利さと自然が共存する街である。市の７０％近くの土地が市街化調整区域のため、開発に制限があり、山林・緑地・農地が守られている。

人口は、昭和35年から50年にかけて約4倍増加し、平成7年の約36.2万人をピークに横ばい傾向である。2023年9月現在の高槻市の人口は約34.7万人である。（図4）
日本は2008年から減少傾向にあるが、高槻市は全国に比べて減少率が少ない。

そういった面で、駅前空間を再生できる可能性があると考えた。
そのほかにも、子育て支援や医療体制も充実しており、住みやすい街として人気である。

GREEN PLAZA

～A space in front of the station full of greenery in a “tokainaka” style～

Student Number　K20304
Name　Nakagami Ayumi
Supervisor　Sugimoto Naoko



図１　グリーンプラザの現在の様子　出典 Wikipedia　グリーンプラザたかつき



図２　グリーンプラザがオープンした時の様子　出典　高槻市ホームページ



図３　計画敷地周辺

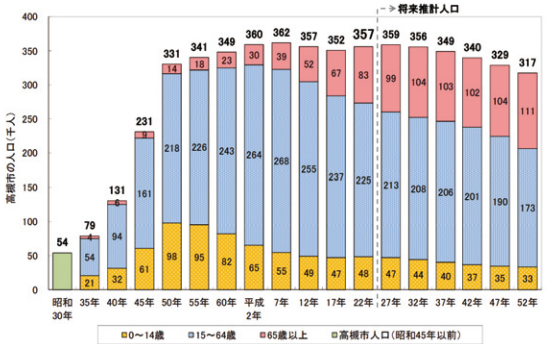


図４　高槻市の人口推移　出典　高槻市ホームページ

所在地：大阪府高槻市紺屋町1-1、3-1
主な用途：商業施設
商業施設面積：6,587m^2
延床面積：18.860m^2
キーワード：リノベーション、商業施設、ペデストリアンデッキ

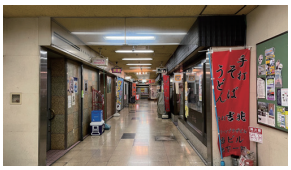
Location ： 3-1,1-1,Konya machi,Takatsuki-city,Osaka
Main Use ： Commercial facility
Commercial facility Area ： 6,587m^2
Total Floor Area ： 18,860m^2
Keywords ： Renovation,Commercial facility,Pedestrian deck

計画要点

計画するにあたって、重要な点は以下の通りである。

1．デッキとグリーンプラザの外観を統一することで、駅前空間の統一性を図る。
2．デッキの幅を広げ、緑化スペースやベンチを設け、人々が止まるスペースを設ける。デッキで休憩や交流するなどコミュニケーションの場を設ける。
3．グリーンプラザに半屋外空間やテラスを設け、緑化スペースを作る。高槻市の魅力である“とかいなか”を駅前で感じさせる。
4．出入口を広く設け、人々を誘導させ、来店数を増加させる。
5．現在の古く暗い空間を払拭させ、開放的で明るい空間にする。吹き抜けや回遊性のある空間をうまく活用し、外から見ても明るい印象にする。


三号館側から全体を見た様子

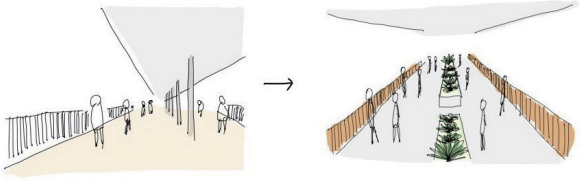

三号館地下飲食店街の様子


一号館吹き抜け部分の様子

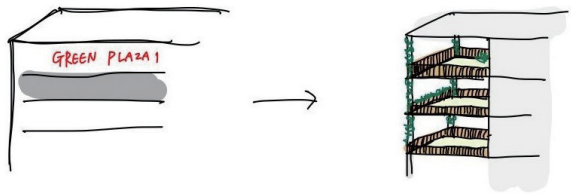

三号館地下飲食店街のパネル

図５．現況写真

ダイアグラム



１．デッキの幅を広げて緑化スペースを作る



２．各階にテラスを設けて駅前で緑あふれる空間、“とかいなか”を感じさせる空間をつくる



３．交流する場や止まる空間をつくる



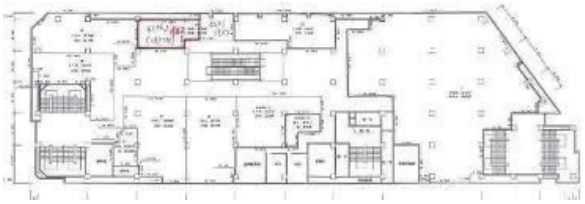
４．吹き抜け空間をつくることで上下階をつなげる

この計画を通して

廃れた商業施設をリノベーションすることでもう一度多くの人々を呼び込む。多くの目的を持った人がそれぞれの過ごし方で施設を利用し、多くの人であふれる明るい空間を作りあげる。新たな街のスポットとなり、市民だけでなく市外からも人々を呼び込み、高槻市全体を活性化させる。

参考文献

高槻市ホームページ https://www.city.takatsuki.osaka.jp/
高槻子育て情報 WAIWAI カフェ https://www.city.takatsuki.osaka.jp/site/waiwai/
グリーンプラザたかつき 1 号館 https://guripura1.jp/



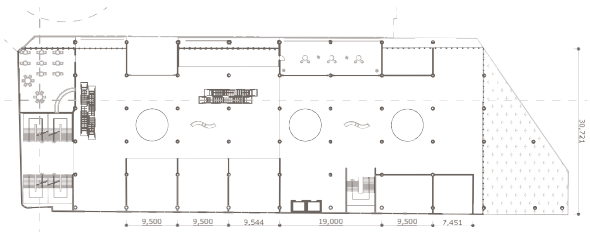


図６．グリーンプラザ１号館４階現況平面図（上）
図７．グリーンプラザ１号館４階改修平面図（下）

史実に基づく層塔の耐震性に関する検証

学籍番号　K20305
名　　前　中嶋莉菜
指導教員　井上年和

層塔　地震史　構造解析
耐震性　比較検証　振動解析

１．本研究の目的

日本は地震が多い国である。日本に建っている層塔は、建築基準法が施工される前の時代に建てられたのにも関わらず、今でも地震に耐えている。2012 年に建てられた東京スカイツリーには、五重塔の心柱の技術が使われている。私はなぜ昔の建築技術が現在の建物に使われているのか疑問に思った。層塔の構造について研究をして、構造解析結果と史実の照合性を確かめ、五重塔の耐震性について検証をすることが本研究の目的である。

２．本研究の内容

先行研究では、特定の塔に対して構造解析をしているものや、史料に基づいた研究をしているものがあった。

本研究は構造解析と史実の 2 つの観点から層塔の構造について検証を行う。構造解析の研究では、層塔の構造形式ごとに 3D モデルをつくり、耐震性の構造解析を行う。史料研究では、層塔における地震被害状況が書かれた史料や、層塔が建っている地盤の地形分類、地質、表層地盤の増幅率についてまとめる。構造解析で得られた結果と史料に照合性があるか、比較検証を行う。

３．五重塔における地震被害状況

『地震史料集テキストデータベース』から、五重塔における地震被害状況が書かれた史料をまとめた表を作成した。塔自体が傾いた、相輪部分や屋根が少々損傷したなどの記載が多いことが分かった。元興寺五重塔は嘉永 7 年（1854 年）に発生した地震で五重塔の 3 層目が潰れたと書かれた史料があった。調査した史料の中で最も大きな地震被害を受けていたのがこの元興寺五重塔であった。元興寺五重塔は、現在は五重小塔として国宝に指定されている。嘉永 7 年当時は五重大塔の時代であった。元興寺五重塔は嘉永 7 年に地震の被害を受けた後、安政 6 年（1859 年）に焼失した。現在残っている礎石から、五重大塔の時代は、総高約 72m のとても高い五重塔であったと推測されている。

４．地盤について

次に、五重塔が建っている地盤について地形分類，地質，表層地盤の増幅率について調べた。表層地盤の増幅率が 1.0 以下の数値である五重塔や、地質が堆積岩になっている五重塔が多く、地盤が硬くて強いところに建っているものが多いことが分かった。表層地盤の増幅率が高い数値の池上本門寺や法華経寺の五重塔は、地質や地形分類を見てみると地震に強い地盤になっている。備中国分寺五重塔は、表層地盤の増幅率の数値も高く、山の斜面に建っている塔である。備中国分寺の地震被害の史料が無いため、記録を残すほどの地震が来ていないので建っている塔なのではないかと推測する。

表１　地形分類、地質の表

No.	社寺名	地形分類	地質	増幅率	所在地
1	法隆寺	更新世段丘	堆積岩	0.8~1.0	奈良県
2	室生寺	山麓堆積地形	火成岩	~0.8	奈良県
3	醍醐寺	扇状地	付加体,堆積岩	~0.8	京都府
4	海住山寺	山麓堆積地形	火成岩,変成岩	~0.8	京都府
5	明王院	山地斜面等	火成岩	~0.8	広島県
6	羽黒山	山麓堆積地形	堆積岩	0.8~1.0	山形県
7	厳島神社	山麓堆積地形	堆積岩	0.8~1.0	広島県
8	興福寺	完新世段丘	堆積岩	0.8~1.0	奈良県
9	法観寺	更新世段丘	付加体	1.0~1.2	京都府
10	瑠璃光寺	山麓堆積地形	変成岩	0.8~1.0	山口県
11	池上本門寺	更新世段丘	堆積岩	1.4~1.8	東京都
12	妙成寺	完新世段丘	堆積岩	1.0~1.2	石川県
13	法華経寺	氾濫平野	堆積岩	1.4~1.8	千葉県
14	旧 寛永寺	更新世段丘	堆積岩	1.4~1.8	東京都
15	教王護国寺	砂州,砂堆,砂丘	堆積岩	1.2~1.4	京都府
16	仁和寺	更新世段丘	堆積岩	0.8~1.0	京都府
17	最勝院	更新世段丘	堆積岩	1.0~1.4	青森県
18	大石寺	火山地形	堆積岩	1.2~1.4	静岡県
19	興正寺	山地斜面等（切土の範囲）	堆積岩	1.0～1.2	愛知県
20	日光東照宮	完新世段丘	堆積岩	~0.8	栃木県
21	妙宣寺	完新世段丘	堆積岩	0.8~1.0	新潟県
22	備中国分寺	山地斜面等	火成岩	2.3~	岡山県
23	善通寺	盛土地,埋立地	堆積岩	1.2~1.4	香川県

また、塔が建てられた年代、塔の構造形式、心柱の種類、表層地盤の増幅率についてまとめた構造年表を作成した。心柱の種類は、「心柱掘立て」，「四天柱」，「心礎建ち」，「懸垂式」の 4 種類あることが分かった。

年表にしてまとめてみると、時代の移り変わりとともに、五重塔の構法が積み重ね構法から櫓構法に変化していることが分かった。積み重ね構法でも、上層の柱盤を受けているところが違っていたり、積み重ね構法と中柱構法が混在している瑠璃光寺五重塔があったりと、1 基 1 基塔の構造が異なることが分かった。

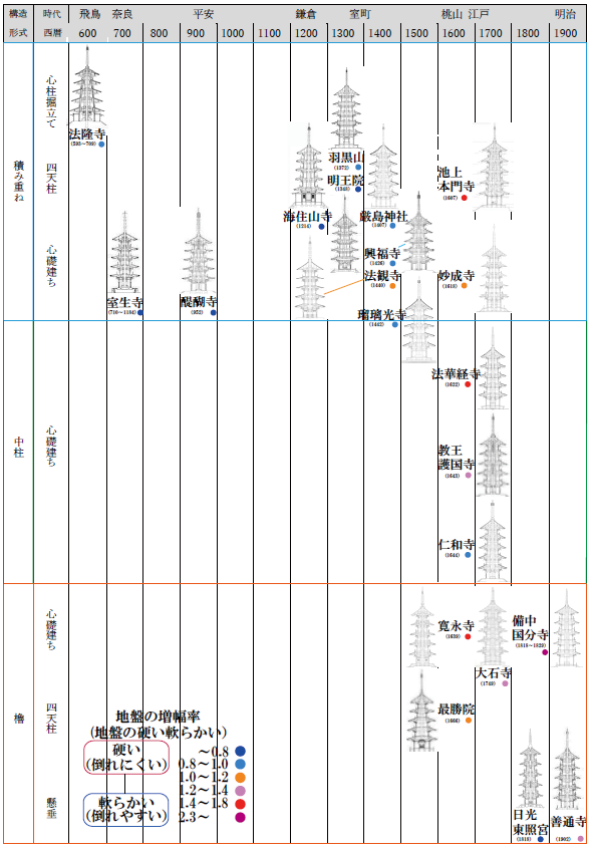
５．塔の構造形式

五重塔の構造は、大きく 3 つに分類できる。

積み重ね構法は、柱と軒を支える部材が下から順に積み重ねられてつくられる構法である。櫓構法は、柱は間に梁を挟むだけで五重までの塔の軸部が独立した櫓のようにできている構法である。中柱構法は積み重ね構法と櫓構法の中間的な構法である。

積み重ね構法では塔の軸部の骨組みと軒の部材が一体となって建物を支えていたが、櫓構法になるにつれて塔の軸部の骨組みと軒を支える部材が分離していることが分かる。その他の構法として、瑠璃光寺五重塔は積み重ね構法と中柱構法が混在している構造になっている。備中国分寺五重塔は、五重塔では唯一、軸組が丸太で構成されている。

表 2　構造年表



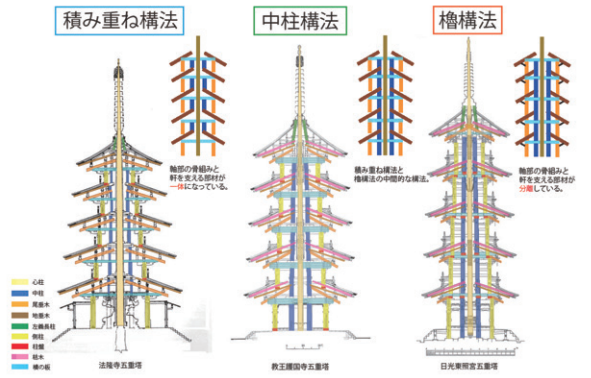


図 1　塔の構造形式

6．構造解析について

構造解析には、京都大学生存圏研究所が公開している wallstat ver.5.1.10 と ver.6 を使用した。

地震波は、短周期と長周期の 3 種類の地震波を作成した。ソフトウェアの関係で加速度を合わせて五重塔が地震波を受けた時の揺れ方が視覚的に分かりやすくなるようにした。

本研究の構造解析では、積み重ね構法、中柱構法、檜構法の 3 種類の 3D モデルを作成した。同一の地震波で計算し、3 種類の構法で地震波の伝わり方によって層塔の揺れ方にどのような違いがあるか比較する。

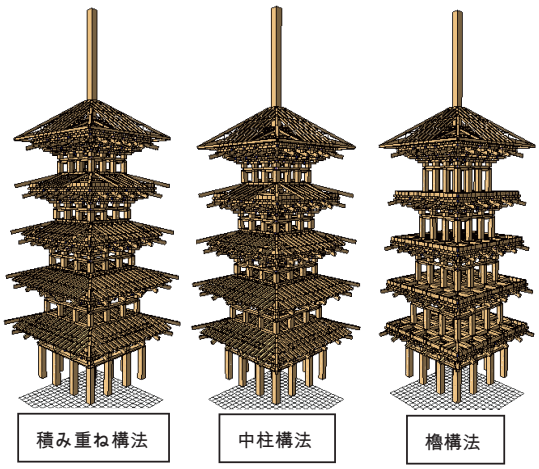


図 2　WALLSTAT で作成した五重塔の 3D モデル

7．構造解析結果

3D モデルを構造解析した結果、3 つの構法全てに心柱の閂作用と 3 層目の中間層破壊の動きが見られた。積み重ね構法と中柱構法は、外側の軸部が共通しているので、ほとんど同じ揺れ方をしていた。檜構法は、側柱と中柱が軸部を支えていることもあり、この 2 つの部材が大きく揺れた。積み重ね構法と中柱構法は、3 層目が傾いたまま上層階が大きく揺れていたが、檜構法は、4 層目と 5 層目が左右に大きく揺れる分、3 層目が少し元に戻ろうとする動きが見られた。

動画　wallstat での構造解析結果

8．史実と構造解析結果の照合

元興寺五重塔では、3 層目が潰れたと書かれた史料があった。史料から中柱構法で、約 72m の五重大塔であったと構造解析の結果からも 3 層目の中間層破壊が見られたので、このような大きな被害が起こってもおかしくないと推測できる。

今回、史実と構造解析の 2 つの観点から研究をすることで、層塔が地震に強い原因をより深く検証することができた。五重塔が地震に強いと言われている原因は、「建っている地盤が強い」、「短周期の地震波に強い」であると考えられる。

参考文献・使用ソフトウェア

『地震史料集テキストデータベース』　東京大学地震火山連携研究機構
『地理院地図　地形分類』　国土地理院
『20 万分の 1 日本シームレス地質図』　国立研究開発法人産業技術総合研究所
『J-SHIS　地震ハザードステーション』　防災科学技術研究所
「五重塔のはなし」　濱島正士, 坂本功　建築資料研究社　2010 年
「全国五重塔 年代順 図書全集」
　吉岡正見 京都新聞出版センター 2017 年
「伝統を永遠に　総本山大石寺五重塔　修復工事六四三日全記録」
　麓和善　大日蓮出版　2017 年　93 頁
wallstat ver.5.1.10、ver.6　京都大学生存圏研究所

饒平名コミュニティスクール

学籍番号　K20306
名　　前　中野玲
指導教員　宮内智久

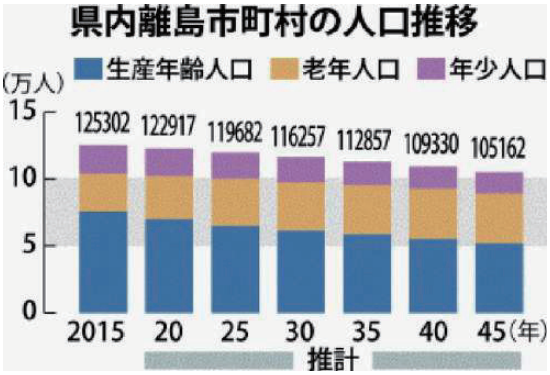
Student Number　K20306
Name　NAKANO Rei
Supervisor　MIYAUCHI Tomohisa

1. 計画背景

・近年、沖縄県の離島では過疎化は年々増加傾向にあり、人口の推移を見ると、沖縄本島の人口が昭和 45 年から平成 22 年までの約 40 年間で 約 45 万７千人、率にして 56.6%と大幅に増加したのとは対照的に、離島においては 約９千人、率にして 6.8%減少している。この減っている人口のほとんどが、若い年齢層である。この若者離れにより、子どもが少なくなり多くの学校が廃校となるケースが増加している。

　そんな沖縄の離島、名護市に属する屋我地島の饒平名（よへな）という集落に滞在させていただく機会をいただいた。滞在の間に屋我地島は、昔からハンセン隔離病棟が存在したとして沖縄県内でもよいイメージは持たれていないという話を現地の方が語っていた。実際にハンセン隔離病棟は黒い歴史を多く抱えており、そういうイメージが持たれるのは仕方がないことである。そうして余計に人が寄り着きにくくなっている。

　そこで、自然豊かでのどかな小さな集落で何か使えるものはないかと思い、少子化に伴い廃校になった校舎のリノベーションを計画しようと考えた。



2. 選定校舎

・リノベーションをするにあたって名護市立屋我地中学校を選んだ理由は三つある。

一つ目は上記した通り、廃校が増えておりまだまだ利用可能である大きな施設であり、再利用できる。

二つ目はまだ体育館だけはとなりにあるひるぎ学園の生徒が部活等でまだ使用していて、イベントでも度々使用されているため人が集まりやすい。

三つ目は饒平名に唯一残る学校、ひるぎ学園が道を挟んだ向かい側にあり、連携がとりやすいと感じた。

以上の三点から当中学校を利用しようと考えた。



名護市立屋我地中学校

3. 現状の問題

3-1. 少子高齢化

　若い層の多くが島外へと出ていってしまう離島の現状は屋我地島も例外ではなく、少子高齢化が進んでしまっている。

3-2. アコウｓを含めた学生の活動場所の不足

　島内外の学生は中学校と小学校を統合したコミュニティスクールのひるぎ学園で学生活動を行っているが、どうしてもコミュニティスクールとしてのスペースが足りないと感じた。

3-3. 屋我地島のイメージ

　ハンセン病棟の黒い歴史も含め、やはり印象が良いとはいえない屋我地島のイメージをどう回復するか。

・アコウｓ
地域的活動を行うひるぎ学園のチーム
最近の活動ではゴミの不法投棄に勧告する看板を製作し地域問題にも積極的に活動に取り組んでいる。

・コミュニティスクール
学校と地域の人々との活動を共有し、課題解決などを行う地域一体型の学校運営である。
伝統舞踊や塩田作業の手伝いなど、地域を知る取り組みを子どもたちが行えるものになっている。

1. 計画背景

所在地：沖縄県名護市饒平名３４０
主な用途：宿泊施設
敷地面積：8338m^2
建築面積：4006.72m^2
延床面積：6020.78m^2

Location ： 340,Yohena,Nagosi,Okinawa
Main Use ： Hotel
Site Area ： 8338m^2
Building Floor Area ： 2695:21m^2
Total Floor Area ： 4709.27m^2

4. 計画

近年廃校リノベーションは増えてきているがその中でも地方に多いリノベーション案は廃校宿泊施設である。実際にその場所で日跨ぐことのできる施設は出先で非常に便利だろう。
今回は宿泊施設としても集団をメインターゲットとした。主には学校の部活の合宿やツアー利用に向けた施設としている。もともと学校ということもあり大きな部屋が多く、そこ目いっぱいそのまま使ってほしいと考えた。



準備室

5. 狙い

現状大きな問題点として、外部の人は施設で集客すつもりだが、少子化の方は施設を建てたところで若者離れは絶えない。実際に現地で調査したところ、現地の子供たちはどうしても自分たちの故郷の良さを自覚していなかった。当たり前の事である。

そこでコミュニティスクールの一環で宿泊している方たちと一緒に活動してもらう事を考えた。自分たちの故郷の伝統が実際に外から来た人に反響があれば故郷に誇りを持つ考えられる。どうしても高校が島内に無いという理由で出ていく子どもたちは多くなるが、誇りを感じた子どもたちが増えれば島に残る人も増えていくだろう。

そういった部分で廃校敷地と隣接するマングローブやその内海をカヌーで行けるような計画を考えている。



敷地南西のマングローブ

参考文献
「沖縄タイムス」
https://www.okinawatimes.co.jp/articles/-/1188573

「沖縄 NEWS WEB」
https://www3.nhk.or.jp/lnews/okinawa/20231102/5090025525.html

まほろば－高齢者と子どもを結ぶ－

Mahoroba:Connecting the elderly and children

学籍番号　K20307
名　　前　中村鈴音
指導教員　杉本直子

Student Number　K20307
Name　NAKAMURA　Rin
Supervisor　SUGIMOTO Naoko

計画背景

日本が抱える課題のひとつに少子高齢化がある。右のグラフを見ると０～14歳の人口は減少し、65歳、75歳以上の人口は増え続けている。このグラフから今後も高齢人口は増加すると予想されている(図1)。2つ目は､高齢化が進んでいる今、孤独死も無視できない問題になっている。日本全体の事例がないので、東京の事例を見ると65歳以上は、2003年に比べると2018年は約3倍になっている（図2)。この、孤独死の大きな問題は、発見されるまで平均して17日程度かかってしまうということである。3つ目は待機児童数が減ってきているが隠れ待機児童が増えていることである。2019年にSNSに書かれたつぶやきが話題となり待機児童数が徐々に減ってきている。しかし、厚労省の発表によると2016年の段階で隠れ待機児童数が待機児童数の約3倍であった（図3)。

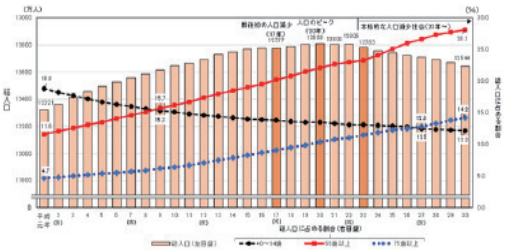


図１　総人口及び総人口に占める０～14歳、65歳以上及び75歳以上人口の割合の推移（平成元年～30年）
（出典）総総務省統計局「国勢調査」、「人口推計」

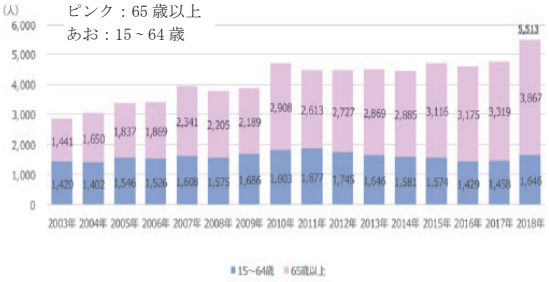


図２　保育所等待機児童数及び保育所等利用率の推移
（出典）国土交通省「死因別統計データ」



（注）令和３年の保育所利用率については、前年に国勢調査を実施した関係で直近の就学前児童数が今後公表される予定であるため、集計を行っていない。

図３　保育所等待機児童数及び保育所等利用率の推移
（出典）厚生労働省「保育所等関連状況取りまとめ（令和４年４月１日）」



図４　広域図

計画目的

これらの課題から、高齢者と子どもが世代間関係なく交流できる幼老複合施設を計画する。幼老複合施設とは、保育園などの児童向け施設とグループホームなどの高齢者向け施設を併設した施設で､施設ごとに様々な組み合わせがある。現在、国が推進している「地域共生社会」の実現に向けた取り組みの一つとして設立が進んでいる。これまで、子ども・高齢者・障がい者それぞれに対し、必要な施設を作りサービスを提供してきたが高齢社会が急速に進行している日本では、日を追うごとに福祉のニーズが複雑化してきている（図7)。

そこで、デイサービス、老人ホーム、保育園、学童保育、障がい児施設、この５つの要素を取り込んだ複合施設を計画する。

計画敷地

敷地場所は、大阪府大阪市平野区瓜破西にある（図4)。平野区は昔地域の約８割が遺跡地に指定されているように新旧のまちなみと広々とした空間が特色の歴史がある。第一中高層住居専用地域であり小学校、中学校や高齢者施設が数多くあり、さらに多くの畑が点在している。近くには駅やバス停がなく最寄りの駅まで、車で約10分（徒歩約50分）最寄りのバス停まで車で６分（徒歩15分）交通の便はよくない。平野区は、大阪府の中で隠れ待機児童が一番多い大阪市内にあり、地域別要介護認定者数が多く、また、０歳から14歳までの子どもの数が一番多い。敷地場所の南側には河川敷があり大和川が流れている。河川敷は昼間は、人通りが少なく夕方になると高校生が登下校に使っており、ランニングをしている人が増え始める。計画敷地の南側の敷地には河川敷に登るためのスロープがある。現在、敷地の周りはやく約３ｍの塀が建っているため中に入ることができない。

計画要点

計画するにあたって、重要な点は以下のとおりである。

1　高齢者には、サービス付き高齢者住宅などの集合住宅ではなく平屋の戸建てにし、今までと変わらないような生活を行ってもらう。
2　戸建て同士の塀は無く、家の近い人と交流がしやすいようにし孤独感を感じさせないようにすると共にお互いを見つつ生存確認をできるようにする。
3　敷地内の道を直線の道にするのではなく、曲線にすることにより普通に道とは違うので外に出て散歩しようと思えるようにした。
4　戸建ての屋根の色をかえることによって自分の家を判別しやすいようにする。
5　戸建ての周りにいくつかの畑を用意し、家庭菜園ができる用意なっているため体を動かすことができる。
6　前の河川敷ののり面の半分を使い、高齢者の運動公園を作ることで遠くに行かなくても運動ができ地域の人と交流ができるようにした。
7　施設には、保育園、学童保育、発達障害の人、デイサービスが入っており、個別で仕切るところはあるが、この施設の人が集まってイベントができるスペースを作ることで、今まで関わって来なかった人と関わることができる。
8　保育園と高齢者が住む場所の明確的な仕切りは無く、敷地内に住む高齢者は子どもが遊んでいるのを見ることができる。

所在地：〒547-0025 大阪府大阪市平野区瓜破西３丁目１１−１
主な用途：幼老複合施設
敷地面積：47,462.01㎡
建築面積：4,662㎡
延床面積：6,372㎡
キーワード：高齢者　少子化　待機児童　地域交流
コミュニティ　人と人との繋がり

Location ： 3-11-1 Uriha Nishi, Hirano-ku, Osaka, Osaka 547-0025
Main Use the elderly and children
Site Area ： 47,462.01㎡
Building Floor Area ： 4,662㎡
Total Floor Area ： 6,372㎡
Keywords ：Elderly people, declining birthrate, children on waiting lists, regional exchanges
Community, connections between people

9　前の河川敷のもう半分は子どもの遊び場とし、芝滑りやクライミングができるようにし、近くに親の交流に場所をつくり子どもを見守れるようにする。
10　敷地の周りは植栽を植え、出入口を制限することで防犯対策をする。
11　デイサービス、保育園はシャトルバスを出し交通便に関して対策した。

ダイアグラム
(1) 保育園、学童保育、デイサービス、サービス付き高齢者住宅、障がい児の人たちが集まる場所がバラバラになっており繋がりがない
(2) 幼老複合施設の中に保育園、学童保育、デイサービス、サービス付き高齢者住宅、障がい児の人たちが集まる場所を入れた。老人ホームは戸建てにし、今までの生活ができるようにした。
(3) 敷地の真ん中に施設を配置しその場所が中心になるようにした。戸建てをその周りに置き施設に行きやすいようにした。
(4) 戸建てを並べておくのではなくバラバラに置き、道も曲線でひくことにより街並みが変化し外に出たくなるような仕組みにした。

動線計画
保育園と学童保育の主要な入口は北側においた。障がい児施設とデイサービスの主要な入口を南側に置いた。「結びの場」は施設の真ん中に置き全ての施設から行き来できるようにした。保育園は、保育室は外に出られる窓をつけた。保護者がくる場所とと保育ルームを分けた。障がい児施設も保護者と生徒たちで仕切りを作った。サービス付き高齢者住宅は敷地に入る入り口を制限し敷地内でお散歩ができるようにしました。(図6)

この計画を通して
これまでの福祉施設のあり方であれば、高齢者と保育園児、小学生、障がい児の人たちはあまり関わることがなかった。この計画を通して、属性の違う人たちがこの施設を活用し関わるきっかけを作ることで、高齢者は孤独感がうすれていき、子どもたちは年上の人との付き合い方、障がい児の人たちも人との関わり方を学んでいく足がかりになる可能性がある。

概要
用途：幼老複合施設　構造：鉄筋コンクリート地上１階　建築面積：約 4.662 ㎡　延べ床面積：約 6.372 ㎡

参考文献
金子智紀他（2022）　『ともに生きる言葉〜高齢者向けホームケアと場づくりのヒント〜』 丸善出版
中西拓郎他（2022）　『おもしろい地域には、おもしろいデザイナーがいる地域×デザインの実践』 学芸出版社
老田智美他（2022）　『心を癒やす環境デザイン　デンマーク・オランダの高齢者住環境に学ぶ』 彰国社
仲綾子（2018）　こどもとおとなの空間デザイン』 産学社
西上原三千代他（2016）『季刊「UR PRESS」Vol.46』 UR 都市機関
西上原三千代他（2016）『季刊「UR PRESS」Vol.47』 UR 都市機関
西上原三千代他（2016）『季刊「UR PRESS」Vol.48』 UR 都市機関

表１　選定理由

大阪府の隠れ待機児童が多い市町村		大阪市の地域別要介護認定者数		行政区別の年齢別人口	
大阪市	2,504人	平野区	14,800人	平野区	19,818人
高槻市	618人	西成区	13,300人	城東区	19,716人
堺市	578人	住吉区	11,900人	住吉区	16,158人
枚方市	506人	東淀川区	11,100人	東淀川区	15,980人
茨木市	399人	生野区	11,100人	東住吉区	14,108人
豊中市	377人	東住吉区	10,700人	生野区	11,012人
東大阪市	358人	城東区	10,200人	西成区	6,751人

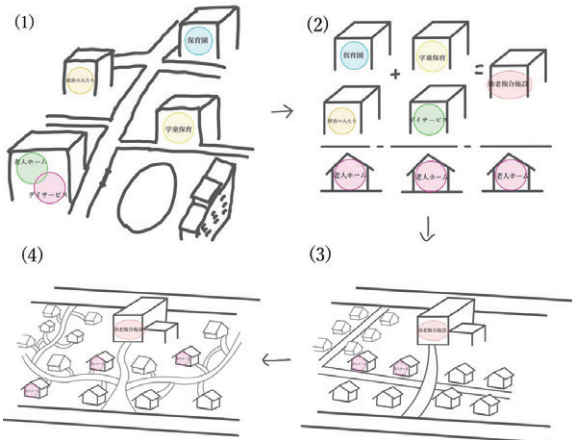


図５　ダイヤグラム



図６　動線計画

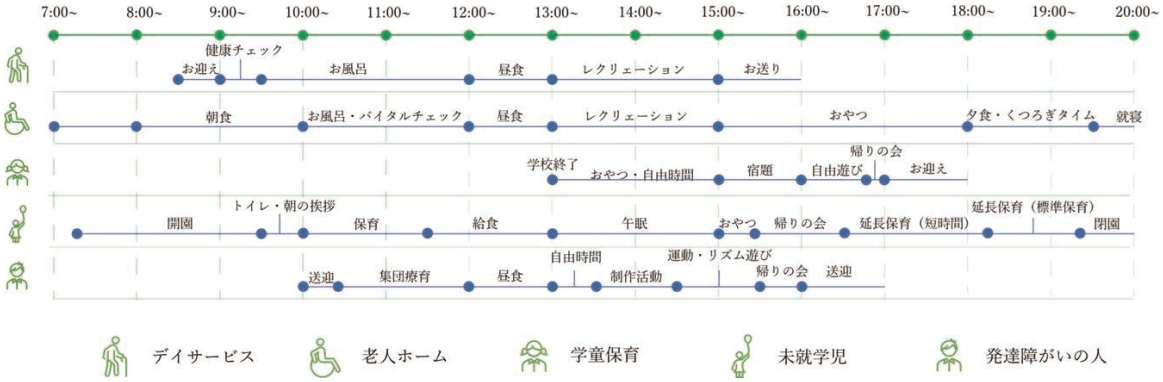


図７　タイムスケジュール

楽器を直し、演奏する

学籍番号　K20308
名　　前　中本珠李
指導教員　人見将敏

Repair and play musical instruments

Student Number　K20308
Name　NAKAMOTO Shuri
Supervisor　HITOMI Masatoshi

1. はじめに（計画の背景）

1-1　楽器のリペアについて

一般的に楽器は高価なものが多く、そのため、普段から手入れをし、そして壊れた場合には修繕をすることが重要である。その修繕を「リペア」と呼び、またそれを行う専門家のことを楽器リペアマンと呼ぶ。
楽器リペアマンになるための必要な資格は特になく、楽器リペアについて学ぶためには工房に弟子入りする、楽器リペア科のある専門学校に入るなどして知識や技術を学ぶといった方法がある。
楽器リペアマンの現状は、楽器演奏人口に対するリペア技術者への志願者数は少なく、日本だけでなく、世界を見渡してもリペア技術者は不足していると言われており、修理が追いつかず、楽器演奏に支障をきたしている人々も相当数存在している。

1-2　リペアマンの育成を建築的に支援する

私自身、中学校、高校の頃に吹奏楽部に所属していたこともあり、楽器リペアについて興味を持っていたことから、この問題点を解決することが出来ないか考えた。

そこで、大阪府にある管楽器のリペアについて学べる専門学校、「ESA 音楽学院専門学校」を含め、最寄り駅である JR 環状線「玉造駅」の周辺の敷地を例として、楽器リペアマンを目指す人を増やすために建築が支援できることを考えた。より多くの人に楽器リペアについて興味を持ってもらえるように、学校としての機能だけでなく、リペアの見学、体験ができるスペースや、リペアを行った後の楽器を演奏できるような空間、さらに楽器を演奏できる空間としてスタジオや小ホール、屋外でも演奏できる広場を含めた施設を設計する。



図１．リペアの作業イメージ図

2. 敷地について

・選定敷地（配置図の赤枠）
ESA 音楽学院専門学校、JR 環状線「玉造駅」周辺

・ESA 音楽学院専門学校の敷地における特徴

JR 環状線「玉造駅」（図２青枠）北口改札出て左すぐ、大阪メトロ長堀鶴見緑地線「玉造駅」4・5 番出口から徒歩３分と、敷地までにアクセスがしやすく、どの年齢層でもアクセスがしやすい。

敷地から「玉造駅」を挟んで東側に「東小橋北公園」（図２緑枠）という公園があり、この公園は緑が多く、たくさんの木陰があることから、遊びだけでなく休憩や電車の待ち時間にも使用するため、小さいこどもからサラリーマンの人まで、多くの人が使用している。
したがって、楽器に触れる機会がなかった人でも敷地周辺に訪れる機会があるため、より多くの人が立ち寄れるような場所になっている。



図２．全体計画図

3. 計画内容

より多くの人に興味を持ってもらえるように、ESA 音楽学院専門学校の敷地を含め、人通りの多い JR 環状線「玉造駅」を中心に円環状になるように、「東小橋北公園」や使われていない高架下、空地を活用しつつ５つの敷地を選定した。
それぞれの敷地の性格や大きさ、使用目的に合わせて、建物を建てて室の配置まで設計したところもあれば、簡易的な建物を建てたり、什器を設置したりして空間を設計した程度のところもある。

①の敷地：専門学校

ESA 音楽学院専門学校を含めた敷地で、主に学校としての機能を損なわずに「楽器リペアについて学べる」施設を設計した。

学校外の人が楽器リペアについて知れる要素として、
外部の人が楽器を修理するために利用できるリペアスペース、
そのリペアを待つこともできて楽器リペアのことについて知ることが出来る待合スペース兼展示スペース、
楽器リペアを体験することが出来る体験コーナー、
楽器リペアの様子を見学することが出来る見学コーナー、
今まで楽器に触れたことがない人も気軽に立ち寄れる楽器ふれあいコーナーを主に配置した。

学校としての要素として、
楽器リペアについて学べる教室、
楽器リペアを行った後の試し吹きができる防音室、
授業の合間の休憩時間を過ごせる休憩所、
専門学校の中でも吹奏楽学科、吹奏楽コースの人に向けた、大規模な演奏もすることが出来る大教室、
授業に使用する楽器や楽器リペアに必要な道具を保管するための倉庫を配置した。

さらに、体験コーナー、見学コーナー、楽器ふれあいコーナーの３つの部屋では学校の雰囲気も知ることができるように教室の近くに配置した。その上で、それぞれの部屋と教室の間にどちらの部屋からでもはいれる公開倉庫

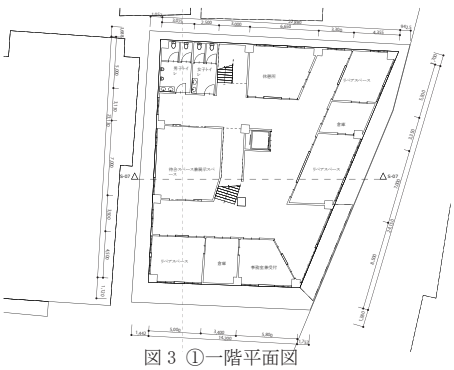


図３ ①一階平面図

所在地：大阪府大阪市天王寺区玉造元町２−６
主な用途：公共施設
敷地面積：6431.51m^2
建築面積：1771.6m^2
延床面積：2769.74m^2
キーワード：楽器リペアマン、楽器演奏、専門学校、小ホール、スタジオ

Location ： 2-6 Tamatukuri Motomachi,Tennoji Ward,Osaka City,Osaka
Main Use ： Public facility
Site Area ： 6431.51m^2
Building Floor Area ： 1771.6m^2
Total Floor Area ： 2769.74m^2
Keywords ： Musical instrument repairman, Musical instrument performance,Vocational school,Small hall,Studio

を設け、保管している様子も見学することができるように配置した。
　また、待合スペース兼展示スペースの上部を吹き抜けにして体験コーナーの一部を腰壁にし、その吹き抜けと隣接させることで待合スペース兼展示スペースにいる人も体験コーナーの雰囲気を感じることができるようにした。

　②の敷地：案内所
　JR 環状線「玉造駅」北改札から出て西側の出口から出て南下した所にある敷地。５つの敷地に分けられた建物についての案内を行えるように案内所を設けた。また、案内所としての機能だけでなく、それぞれの敷地に訪れた人たちが休憩することもできるように、カフェも併設した。

　③の敷地：演奏所
　②の敷地よりさらに南下した所にある敷地。
　主に楽器を吹く場所に困っている人に向け、屋内でも屋外でも演奏することができるように設計した。建物の二階の高さを JR 環状線「玉造駅」のホームと同じ高さに設定し、テラスを設けることで、ホームで電車を待っている人も、電車から降りてくる人も、楽器を演奏している音が届くようにした。

　④の敷地：小ホール
　JR 環状線「玉造駅」の南側にある敷地。100 ～ 200 人程入る規模のホールを設計した。ESA 音楽学院専門学校の学生含め、専門学生以外の人も小規模の演奏会の開催やリハーサル練習などにも使用できるように設計した。高架下の柱を活用するために、柱を囲うようにして椅子を配置した。

　⑤の敷地：公園
　既存する「東小橋北公園」の敷地。現在の公園よりもベンチを増やしたり、屋外でも演奏できるスペースを設けたりして、公園としての要素だけでなく、他の人も気軽に訪れるような場所になるように設計した。また、「ESA 音楽学院専門学校」と近いことを活かして、屋外でも楽器を直すことができるような簡易的な楽器リペアも行える仮設スペースも設けた。

　⑥の敷地：スタジオ
　JR 環状線「玉造駅」から道路を挟んで北側の高架下にある敷地。
　ESA 音楽学院専門学校の学生含め、専門学生以外の人も使用できるスタジオを設計した。ギターボーカル、ベース、ドラムなどのシンプルな三人編成の３ピースバンド向けの小スタジオの建物、４～５人編成、６人以上のバンド向けの中スタジオの建物、ビッグバンド向けの大スタジオの建物を設計した。
スタジオに高架下の柱を出てくるように配置し、柱の一部をくり抜き、チューナー置きや譜面台として活用できるようにした。

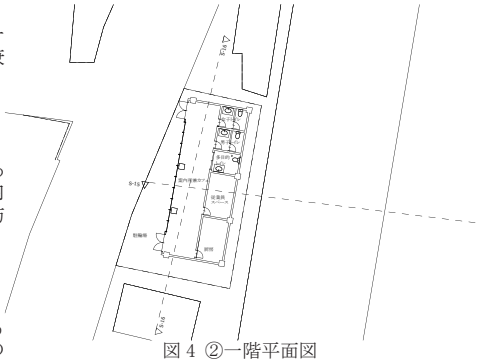


図 4 ②一階平面図

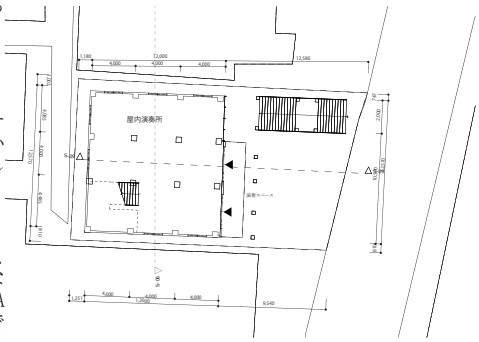


図 5 ③一階平面図

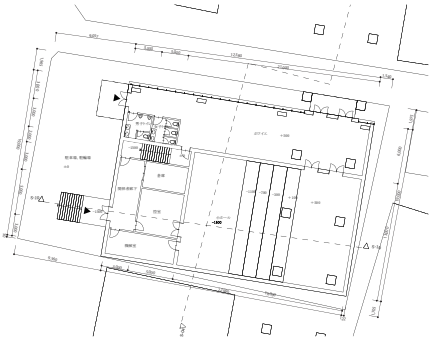


図 6 ④一階平面図

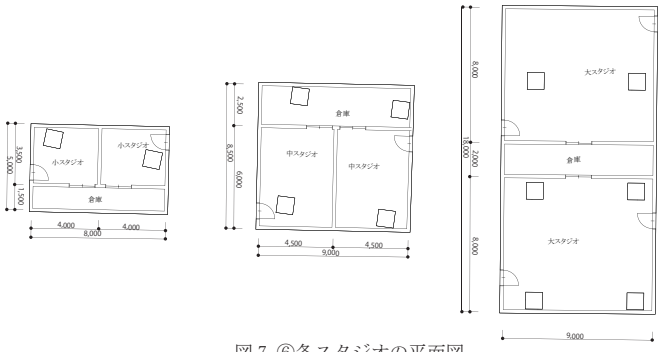


図 7 ⑥各スタジオの平面図


図 8 ①の東側の外観パース

4. 参考文献

ESA 音楽学院専門学校について　http://www.esa-music.com/index.html
東小橋北公園について　https://iko-yo.net/facilities/167286
リペアマンについて　https://korekarashinro.jp/special/consult/work/musical-instrument-repair/

まわるこども園～だいひが こども園計画～

学籍番号　K203010
名　　前　仁尾遥香
指導教員　白鳥洋子

Rotating Kindergarten～Kindergarden project in Daihiga～

Student Number　K20310
Name　NIO Haruka
Supervisor　SHIRATORI Yoko

1. はじめに

2023年3月、私が幼稚園児時代過ごした幼稚園が閉園した。

そのことにより、現在私が住んでいる地域の子は隣の地域の幼稚園に通っている。通う地域が変わったことで今まで放課後多くの園児が遊んでいた公園や芸術文化会館の広場では子どもたちの姿がほとんどなくなった。

2. 研究背景

2.1 幼稚園の閉園

上記で述べた通り、私が3年間通った幼稚園がピークだった平成16年度頃より人口が減ったため昨年度で閉園した。閉園したことにより、現在栗東市内に9学区あるうち唯一大宝東学区だけ幼稚園がない状況になった。

2.2 栗東市の人口

現在日本では人口が減少し、少子高齢化が進行しているのが問題視されている。だが、滋賀県では2023年11月現在、先月と比べて県内人口が91人増加した。そして、過去5年間の人口を比較していると県庁所在地である大津市、県内でも賑わいがある草津市など湖南地域では人口が増加傾向にあり、長浜市や米原市など湖北地域では人口が減少傾向にあるとわかった。

また、栗東市では先月と比べて62人増加している。栗東市の南の方は森林で覆われているが市街地では住宅街やマンションが多く建ち並んできている。そこで、教育施設をつくることで、住みやすい街にしたいとより強く感じた。



図１　県内と栗東市、草津市、大津市、長浜市の過去５年の人口推移

3. 研究方法

3.1 栗東市の未就学児の調査

こども園を計画するにあたってまず、未就学児の人数と小学生の在学数を学区別で調査した。その結果、最も多かったのは治田学区の1475人で、次いで治田西学区の1010人であった。大宝東学区は市内で2番目に少ない541人であった。この調査をして、大宝東学区は市内で一番新しい学区であるが、一時期の人口増加が落ち着いて現在は年々減少していることが分かった。その原因としては、大宝東学区は東には工業地域が広がっているのと、駅前開発が約25年前に始まり、その間に生まれた子どもたちが大人になったからだと推測した。また、私自身も生まれも育ちも大宝東学区なので母親に聞いたところによると転勤の家庭が多く人の移りが激しいということも分かった。

3.2 市内の幼稚園保育園の現状

栗東市には40の幼稚園や保育園があるが、市内には現在こども園が1つもないということに気が付いた。また、幼稚園より、保育園のほうが通っている園児の数が多いということも調査で分かった。

栗東市の未就学児の人口（0~4,5~9）	
金勝学区	大宝学区
232+273＝505	402+456＝858
治田学区	大宝東学区
807+668＝1475	264+277＝541
治田東学区	大宝西学区
275+368＝633	280+303＝583
葉山学区	治田西学区
359+330＝689	535+475＝1010
葉山東学区	
417+460＝877	

図２　学区別10代以下の人口

栗東市の幼稚園や保育園		
金勝学区	治田東学区	大宝西学区
・金勝第1幼児園	・治田東幼稚園	・大宝西幼稚園
・金勝第1保育園（第2）	・治田東保育園	・大宝西保育園
治田学区	・栗東くじら小規模保育園	・なないろ保育園
・治田幼稚園	葉山東学区	・家庭的保育の家ふわり
・治田保育園	・葉山東幼稚園	大宝学区
・栗東くじら保育園	・葉山東保育園	・大宝幼稚園
・栗東くじら小規模保育園	・ももか保育園	・大宝保育園
葉山学区	治田西学区	・グランマの家保育園
・葉山幼稚園	・治田西幼稚園	・こだまふれんど保育園
・葉山保育園	・治田西保育園	大宝東学区
・ぱれっと園～たかの～	・治田西カナリヤ第三保育園	・大宝カナリヤ保育園
	・しもまがり　ゆずのき保育園	・こだま保育園
	・ぱれっと園～おがき～	・こだま乳児保育園
	・HOPPA栗東下鈎	・HOPPA栗東駅前園

※勝は公立の園

図３　市内の幼稚園・保育園の一覧

4. 対象敷地

4.1 敷地外用

滋賀県栗東市は滋賀県の南部に位置し、市の北部は平坦地､南部は緑豊かな産地となっている。国道1号･8号の通貨、名神高速道路栗東インターチェンジ・栗東湖南インターチェンジの設置など、交通の要衝として、製造業・商業・流通業など数多くの企業が立地している。

また、平成3年、JR琵琶湖線栗東駅が開設されたことにより、京阪神への通勤圏となり、大規模な住宅設備が進み、人口増加が続いている。

大宝東学区は市の北西部に位置している。学区内に東海道新幹線が横断し、西側には東海道本線が通過している。栗東駅の開業後、駅の東側は市街地整備進み、マンションや住宅が多く建ち並んでいる。

所在地：滋賀県栗東市野尻 397
主な用途：こども園
敷地面積：5,336.84m^2
建築面積：1,600.14m^2
延床面積：1,459.117m^2
キーワード：こども園・地域包括支援センター・木造

Location ： 397,Nojiri,Ritto-shi,Shiga
Main Use ： Kindergarden
Site Area ： 5336.84m^2
Building Floor Area ： 1,244.3m^2
Total Floor Area ： 1,232.2m^2
Keywords ： Kindergarden, Community Comprehensive Support Center, wooden

5. 計画概要

5.1 プログラム

大宝東小学校の南西の空き地にこども園とカフェ、地域子育て支援センターを建てる計画とする。この場所に選定した理由は、道路挟んで向かいには大宝東小学校、近くにはリンヤード－絆－栗東（旧称シルバーハウス栗東）や放課後デイサービスがあり、小学生や高齢者、障がいをもってる方たちと交流がしやすくなったり敷地内にカフェ、地域子育て支援センターがあることで保護者同士の交流の場となっている。世代を越えた交流をすることで、地域の憩いの場となったり、コミュニティの場になるように計画する。

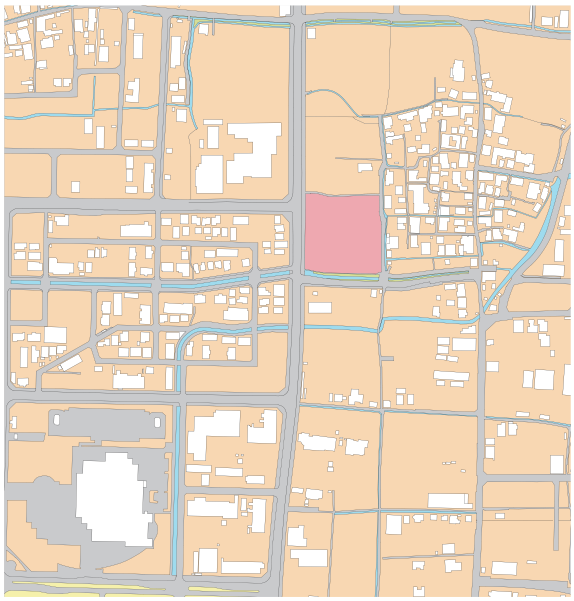


図４　敷地周辺図

5.2　提案

敷地内にこども園、地域包括支援センター、カフェを計画する。

こども園の園舎は中庭を囲うようにし、園児たちがぐるっと一周することができるようにする。また、０～２歳児、３～５歳児の使える園庭を分けた。そして、教室と教室の間に「憩いのスペース」を設けた。ここではクラスの子と遊ぶのはもちろん、違うクラスの子や、年齢の違った子たちと遊べるようになっている。そのことで、違う年齢の子たちと接する機会が増え、友達の輪が広がるだけでなく、協調性・社会性・人間関係の構築など身につけられるようになっている。

地域包括支援センターは主に児童館のような小さい子供たちが室内に遊べるような空間を作ったり、子育てに悩んでいる保護者の相談ができる相談室を設ける。

カフェでは住宅街の近くに設け、地域住民が集えるような場になるようにしたいと考えている。また、園庭にある「畑スペース」の近くに設けた理由としては、地元住民と園児たちが畑で野菜を育てれるような交流の場を作ることで、食に対する関心や興味を与えるだけでなく、住民の方と交流することで家では出来ない体験をすることができる。



図５　１階平面図兼配置図



図６　エントランスからのパース

6. おわりに

私は卒業制作を始めるにあたって生まれ育った大宝東小学校区または栗東市で計画したいと強く思っていた。その時に通っていた幼稚園の閉園を機に、栗東市の保育園や幼稚園の現状、市内の人口や県内の人口の変化など、知らないことを知る機会にも繋がった。

この計画を通して、こども園に通う園児・保護者はもちろん地域包括支援センター、カフェを利用する地域住民や高齢者の方など様々な人たちの繋がりの拠点になればと思う。

7. 参考文献

栗東市の人口データ：　https://www.city.ritto.lg.jp ＞ toukei ＞ jinnkoudeta
草津市人口：　https://www.city.kusatsu.shiga.jp ＞ jinkosuii ＞ suii
大津市人口：　otsu.lg.jphttps://www.city.otsu.lg.jp ＞ soshiki ＞ kokai ＞ jinko
長浜市人口：　nagahama.lg.jphttps://www.city.nagahama.lg.jp ＞ category

近世京都の町規則における業態・身分の規制よりみた都市空間の分布図的考察

近世　京都　町規則
身分　山鉾町　親町枝町

学籍番号　K20311
名　　前　西澤　直
指導教員　砂川　晴彦

序章　研究の目的と研究資料

本研究は、近世京都の町規則に記載される規制された業態・身分を読み解き、表や分布図に起こすことで都市空間の特性に関する考察を加えることを目的とする。これまでに町規則に関する研究は歴史学[1]で行われているが、都市的な性格の読み解きについては十分とは言えない。

第１章　規制された業態・身分の把握

１節　規制された業態・身分の資料化

本節は、町式目集成[2]に記載される各町より規制された業態・身分が記載されているかいないか、規制されている場合、記載された内容、年号を表にまとめる（表は未掲載）。

２節　規制された業態・身分の分布図化

本節は、町式目集成に明文化される町、規制された業態・身分が記載されてある町、記載されていない町の３種類を分布図化した。（図１－１～図１－３）

３節　小結

その結果、規制された業態・身分を明文化する町は 37 町、明文化しない町は 41 町であった。また、町によって業態の呼び方や文章の書き方が違いが表れていた。

第２章　絵図と分布図の重ね合わせ

１節～３節　絵図の選定と資料化

本章では、本研究の規制された業態・身分、分布の特性を検討するため、1786（天明６）年の京都洛中洛外絵図[3]と分布図を重ね合わせた。

４節　小結

その結果、御城兼武家方と堂上方兼御所役人を挟むように上京と下京にわかれ、規制された業態・身分を記載した町が分布している。鴨川の東側は、規制された業態・身分を記載した町は少ない。寺社が多く見われ、町方が少ないため、記載が少ないと考えられる。規制された業態・身分のある町は町方が多くみられるところに集中しており、絵図と町式目との関わりが証明される。

第３章　業態・身分別に見た特色

１節　業態・身分の分類

本章は、業態・身分を分類するうえで、町ごとに違いがある言葉や、現在では使われていない言葉を整理していく。本節では、分類した業態・身分を表にしてまとめた（表は未掲載）。

２節　分類した業態・身分の数量

本節では、町ごとに規制された業態・身分の数量に関する表を作成し把握した（表は未掲載）。

３節　規制された業態・身分ごとの分布図化

本節では、分類した業態、身分の中で銭湯、米・脱穀、芸能、武士を抽出し分布図化し、どのような業態をどの地域が嫌うかを調査した。（図３－１～図３－４）

４節　小結

その結果、染織や金属加工などの製造業、飲食や銭湯など人が集まる町、芝居役者や座頭と人が見に来たり寄ってきてしまう人を規制している町が多い。

銭湯は、下京の周辺部に多く規制している町があり、寺社、御城兼武家方の集中している所で規制されている。米・脱穀は、上京下京共に、規制している町が多くあり、山鉾町で規制が多く見られた。芸能は、上京にあまり規制が見られず、下京の山鉾町に規制している町が多く見られた。武士は上京にあまり規制が見られず。山鉾町に規制している町が多く見られる。

第４章　年代別に見た分布の特徴（18 世紀以前と 19 世紀）

１節　年代別の規制された業態・身分の分類

本章では、年代に分けて調査することで、時代の変化によってどのように規制された業態・身分が変化していったかを、表に起こすことで読み解く（表は未掲載）。

２節　年代別の規制された業態・身分の分布図化

本節では、規制された業態・身分に、年代の変化によりどのように変化しているかを分布図化した（図４－１、図４－２）。

３節　年代別の規制された業態・身分ごとの分布図化

本節は、規制された業態・身分の中で銭湯、米問屋、芸能、武士を抽出し、分布図化した。（図４－３～図４-10）

４節　小結

その結果、18 世紀以前のほうが 19 世紀より禁止された業態を記載している町が多く存在した。19 世紀は 18 世紀に比べ規制された業態が減っているが、分布に特徴は表れていない。

第５章　町の親・枝関係から見た特色

１節　町の親・枝の把握

本章は、規制された業態・身分が親・枝町との関係があるかを、読み解くため、表を作成[4]し、親・枝町の把握を行う（表は未掲載）。

２節　親・枝関係の分布図化

本節は、表から読み取った親・枝関係をもとに、分布図を親町、枝町ごとに作成した（図５－２、図５－３）。また、親町の後に生まれた枝町の形成過程の違いから、親町＝中心、枝町＝周辺の関係がある。

３節　親・枝と業態・身分ごとの分布図化

親町で規制された業態・身分ごとの分布図（図５－４～図５－７）と枝町で規制された業態・身分ごとの分布図（図５－８～図５-11）を作成し、規制された業態・身分ごとの親枝との関係を読み解く。

４節　小結

親町に多く、枝町に少ない、あるいはその反対に親町に少なく枝町に多いといった、親町枝町ごとに見られる共通性があるか確かめたが特徴は認められなかった。枝町（新町）は親町（古町）とほぼ同数ある。町組の構造として格差があるとされる[4]親町（古町）枝町（新町）と、規制の明文化とには関係性が低いと考えられる。

結章

以上、資料化を通じて近世京都の都市空間の分布的特性の検討を試みた。山鉾町の規制意識の強さが指摘される。山鉾町、その周辺、下京と上京、という地域差が規制内容から確認される。町の構造上の格差があるとされる親町・枝町に、規制内容の差が認められないのは、京都の町の自立性を裏付けるものと考える。

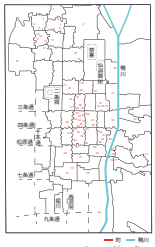


図１－１　町式目集成に記載されている町の分布

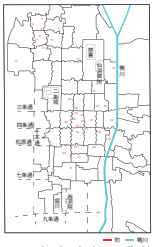


図１－２　規制された業態・身分が記載されている町の分布

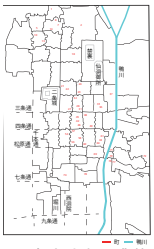


図１－３　規制された業態・身分が記載されていない町の分布


図 2-8　分布図と絵図の重ね合わせ

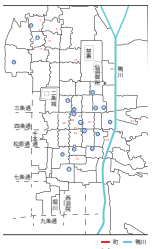


図３－１　銭湯

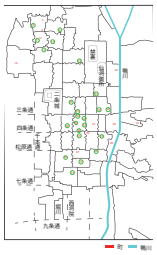


図３－２　米・脱穀

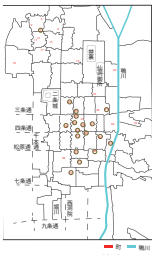


図３－３　芸能

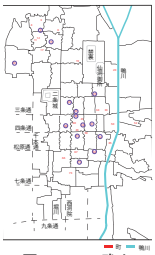


図３－４　武士

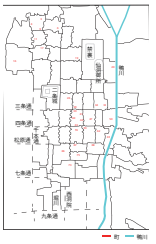


図４－１　18 世紀以前に記載された町

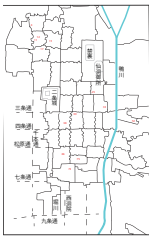


図４－２　19 世紀に記載された町

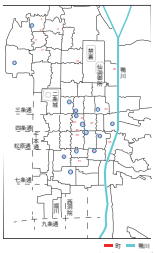


図４－３　18 世紀以前に記載された銭湯

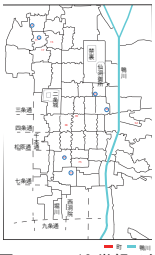


図４－４　19 世紀以前に記載された銭湯

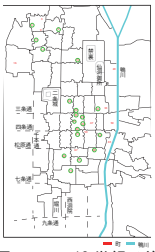


図４－５　18 世紀以前に記載された米・脱穀

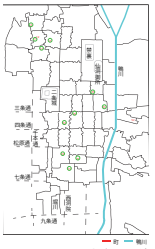


図４－６　19 世紀以前に記載された米・脱穀

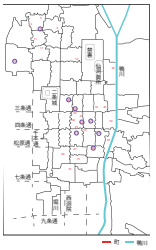


図４－７　18 世紀以前に記載された武士

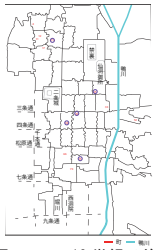


図４－８　19 世紀以前に記載された武士

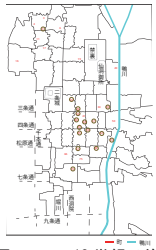


図４－９　18 世紀以前に記載された芸能

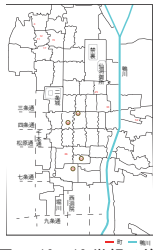


図４-10　19 世紀以前に記載された芸能

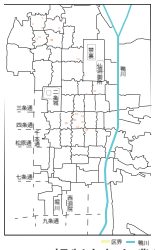


図５－２　規制された業態・身分を明文化する親町の分布

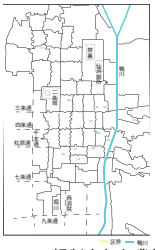


図５－３　規制された業態・身分を明文化する枝町の分布

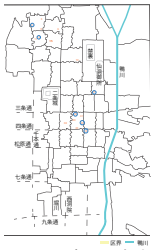


図５－４　親町で規制された銭湯

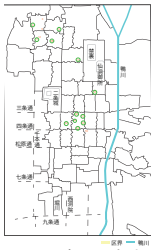


図５－５　親町で規制された米・脱穀

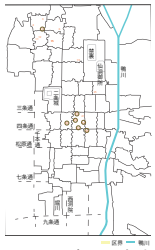


図５－６　親町で規制された芸能

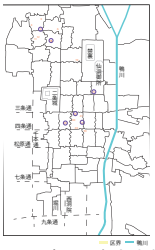


図５－７　親町で規制された武士

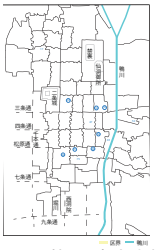


図５－８　枝町で規制された銭湯

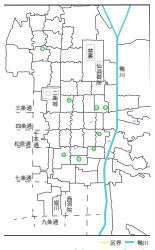


図５－９　枝町で規制された米・脱穀

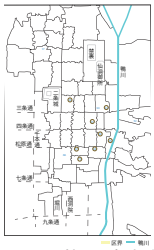


図５-10　枝町で規制された芸能

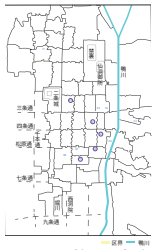


図５-11　枝町で規制された武士

【参考文献】１谷直樹『町に住まう知恵』（2005 年）鎌田道隆「町の成立と町規則」『京都町触の研究』（1996 年）横田冬彦「京都町式目についての断章」『京都市歴史資料館紀要』17 号、2000 年　２京都市歴史資料館『京都町式目集成』（1999 年）３大塚　隆 編・解説『慶長昭和京都地図集成　1611（慶長 16）年～ 1940（昭和 15）年』1994 年　４秋山国蔵『近世京都町組発達史』1980 年　小林丈広「解説」『京都町式目集成』京都市歴史資料館、1999 年

近世の西国城下町人地の住居形態に関する一考察～九州佐賀の唐人寺町を対象に～

学籍番号　K20312
名　前　西村　楓
指導教員　砂川晴彦

佐賀　城下町　住居形態
竈帳　水路　揚場

序章　はじめに

1. 研究背景・目的・意義

本研究は、江戸時代における低地に開発された西国城下の町人地の住まいの形態を九州佐賀城下町城辺の唐人寺町を対象に明らかにすることを目的とする。

佐賀城下の先行研究としては、町家の遺構に関する研究[1)]、建築史以外でGISを用いた土地利用に関する研究[2)]、竈帳による就業形態に関する研究がある[3)]。一方で、宮本雅明博士の1990年代の住居形態に着眼した都市史的観点からの研究[1)]以降、都市史研究には乏しく一層の発展が望まれる。本稿はこうした佐賀の住まいの研究のひとつに加わる試みである。

2. 研究の方法・構成

第１章は、研究の町人地の形成を述べる。第２・３章は、地割が高い精度で判明する明治初期の町絵図[4)]から土地利用・地割・所有形態の特徴を明らかにする。第４・５章は、『竈帳』[5)]から家族構成と住まいの形態を明らかにする。

第１章　佐賀城下町と町人地の開発

1. 佐賀城下の町人地形成の概説

佐賀城下町は、北側に十間堀川を外堀とし、その内側に外堀と平行して長崎街道が整備され、街道沿いには両側町を細長く形成し、佐賀城を囲むように武家地が形成される。研究の対象とする唐人寺町は、朝鮮人宗歓一族が当地の居住を契機とし、正保年間以降に城下町に編入され、外堀の外の城辺に町人地を形成した[1)]。

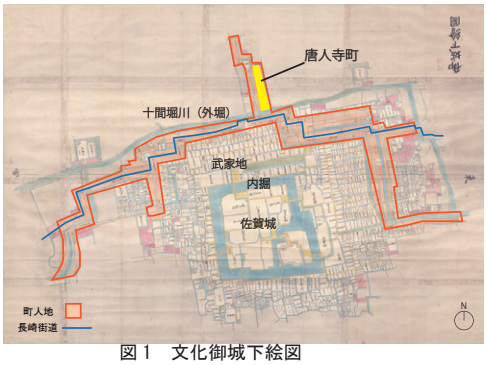


図１　文化御城下絵図
公益財団法人鍋島報效会所蔵
名商・解説図を加筆

2. 城辺の町人地開発～唐人町の形成～

城辺の３町は、正保年間の絵図から唐人町と唐人寺町の２町が描かれており、このころにに成立した。元文５年(1740年)の絵図に新たに新町の成立が確認できる。

3　城下町の商家～『佐賀独案内』より～

明治23年刊行の商家絵図[6)]より、佐賀城下は、江戸から明治中期までにかけて水路を利用した石垣と雁木からなる町屋敷の景観が一般的にあったことが分かる。

4　現在残る歴史的環境

唐人寺町に歴史的環境が残っており、現在も江戸時代以来の道・水路、その石垣を残していることが判明した。

5. まとめ

研究の対象である唐人寺町は、佐賀城下の慶長の成立を経て外堀の外に正保までに形成された城辺の町人地である。水路を利用した石垣と雁木からなる町屋敷の景観が一般的で、現在も道・水路や石垣が残っている。

第２章　明治町絵図の解析その１ 土地利用・地割形態

1. 水路形態・街路

寺町筋幅はおよそ３間、水路幅は１間未満である。水路はすべての町屋敷に面し、屋敷の背割として通されている。街路・水路が一定の間隔で並ぶことで均等に屋敷が画されている。町内の北東にある島は舟廻（方向転換）と考えられる。

2. 屋敷の種類

明治町絵図を参考に屋敷を区別すると寺屋敷、町屋敷に分けられ、寺町筋の両側に短冊型地割の屋敷が並ぶ、両側町となっている。東側の町屋敷には水路で囲われた裏屋敷がある。

3. 地割形態（間口・奥行き・裏屋敷）

各町屋敷は、道沿いに宅地とし奥は畑にする構成が、一般形である。裏屋敷は大半が畑となっている。揚場が諸々に示される。十間堀川沿いは、塵芥捨場と揚場になっており、前述の明治の商家絵図にみられた風景が想起される（**図2**）。

4. まとめ

唐人寺町は、ほとんどが町屋敷であり、町内には寺屋敷が１つ、東側には水路に囲われた裏屋敷がある。寺町筋の両側に短冊型地形の屋敷が並ぶ。道沿いに宅地が並び奥は畑とする構成が一般的であり、裏屋敷は大半が畑となる。十間堀川沿いに明治の商家図にみられた風景が想起される。

第３章　明治町絵図の解析その２ 土地所有形態

1. 土地台帳の作成

番地、土地所有者、間口の大きさを表にし、土地台帳を作成した。

2. 土地所有の分類

町内133筆のうち104名所有者の存在し、そのうち４名は他町の住所が添えられ、この土地には住んでいないと考えられる。複数の土地を所有する者、一筆の土地所有者がいる。裏屋敷のある東側の土地に複数土地所有者が多い。西側は、一筆持ちが大半を占める。

3. 複数土地所有者の特徴

複数土地所有者は大半が水路を介した裏屋敷を所有する(**図3**)。所有形態は、水路を挟むタイプ、道路を挟むタイプ、隣接し拡張するタイプの３タイプに分けることができる。

4. まとめ

町内には104名の土地所有者が存在し、うち４名は他町の住所が添えられ、この土地に住んでいないと考えられる。一筆持ちの大半は西側の土地を所有し、複数土地所有者の多くは裏屋敷のある東側の土地を所有している。

第４章　竈帳の解析その１ 江戸後期屋敷割の復原とその特徴

1. 地割復原の方法

江戸後期の『佐賀城下竈帳』をもとに作成する。

2. 間口・奥行き

平均間口は約３間５尺、奥行き約 14 間である。明治の「肥前国佐賀郡寺町絵図」にほぼ一致する。

3. 裏屋敷の形態

裏屋敷 19 筆のうち 14 筆が東口、４筆が南口、１筆が西口とする。東口、西口の奥行きは約７間、南口は間口が約７間とする。北南側に広い土地が多く、中央は狭い土地が集まる。裏屋敷の番地割の形の特徴は明治の「肥前国佐賀郡寺町絵図」と類似する。

4. まとめ

大半の屋敷は短冊型地割だが、東側の屋敷の一部は台形の土地がみられる。対して裏屋敷は、東口、西口の奥行き、南口の間口が約７間であるため、南北に細長い形をしていることが分かった。裏屋敷は東側にアプローチが形成され、北南側に広い土地が多く、中央は狭い土地が集まり、明治町絵図と類似する。

第５章　竈帳の解析その２ 家族・職業・身分にみる町の性格

1. 竈帳台帳の作成

『竈帳』の、屋敷の書き上げ順に番号を振り地番とし、間口や住居形態、職業、家族数などを表に作成した。

2. 家族数（竈数）

竈とは世帯数を示すと考えられる。原則「〆〇人」で１竈と数え、５～１０竈ほどを単位に、その取りまとめとして組頭がおかれる。平均家族数は約 3.7 人と集計され、21 の組合がある。

3. 職業

職業数は 76 種類余ある。日料稼や野菜物売、大工、木挽が多い。職人系は北側に多く、野菜物賣は南北に多く分布する（図 4）。

4. 身分と居住

有姓者は武士である。全体のうち、町人は 83 世帯（51%）、武士は 59 世帯（36%）である。住職が２世帯（1.2%）、身分の判断ができない者が 17 世帯（10.6%）である。武士は町内中程に多く分布し、町人は町内の北側と南側に分布する（図 4）。

5. 住居形態

戸建て、長屋建の建物に、同居と非同居の２種類区別ができる。独立（非同居）52.4%、独立（同居）27.2%、割竈（非同居）2.9%、割竈（同居）7.8%である。長屋に代わる借家の住まいが考えられる。武士が町人の住まいに同居する場合があり、零細な者が多いことを示している（図 5）。

6. まとめ

『竈帳』は屋敷の所有形態や税収を目的としたものではなく、民衆の檀家の所属と人数を把握したもので、各世帯の住居形態についてうかがうことができた。売り物屋などが多く、当町は日常生活の商店街的な性格が指摘される。

終章　西国城下の町人地　～佐賀城下の城辺に注目して～

佐賀城下の城辺の町では、外堀内側の町と同様に、石垣や雁木の揚場からなる水路が巡る一方で、畑（空き地）もみられる都市周辺部的な景観が明らかになった。本稿では江戸後期の町人地における庶民的な住まいのありようを鮮明に出来たのではないかと考えられる。当町にみられた裏屋敷とは、低地という条件から水路を巡らし建設された町人地の開発形態のひとつであったと考えられる。本稿ではその裏屋敷の屋敷形態を明確にすることができた。

【参考文献】
1) 宮本雅明ほか「佐賀城下町の町家に関する考察」 1996 年建築学会大会、佐賀市『城下町佐賀の環境遺産調査報告書Ⅰ・Ⅱ』 1993 年
2) 宮崎良美「佐賀城下町『竈帳』と町絵図を用いた GIS 分析の試み」 2015 年人文系データベース協議会発表論文
3) 松本四郎「佐賀城下竈帳の研究」 1989 年資料館研究紀要、山本文夫「佐賀城下人別竈帳における階級別及び職業別家族構成について」 1956 年佐世保商科短期大学研究紀要、三上禮次「竈帳による佐賀城下町の就業構造の分析」 1980 年、「竈帳における佐賀城下町の身分と就業との相関」、
4)「肥前国佐賀郡寺町絵図」 佐賀県立図書館所蔵
5) 三好不二夫・三好嘉子 編『佐嘉城下城下竈帳』 1990 年、公益財団法人鍋島報效会所蔵 / 佐賀県立図書館寄託
6) 中谷与助 編輯『佐賀県独案内』1890 年、復刻版 1983 年

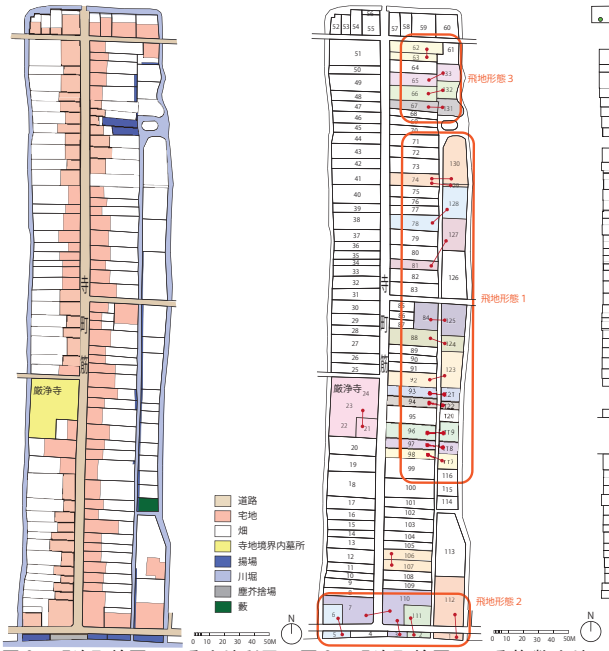


図２　明治町絵図にみる土地利用

図３　明治町絵図にみる複数土地所有形態

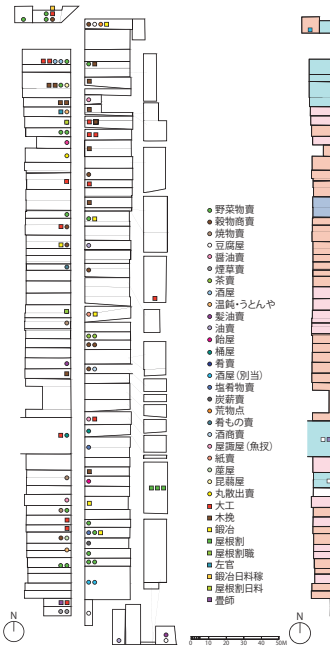


図４　物売り系と大工・鍛冶・屋根・畳の建築系職人の分布図

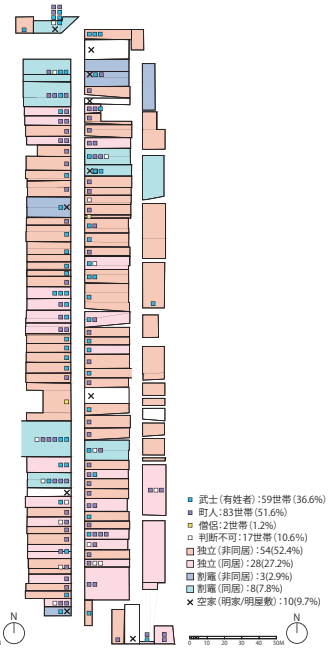


図５　住まい形態別の屋敷分布図

ENERGY PARK ～NIMBY から YIMBY へ～

学籍番号　K20313
名　　前　西村瑠己亜
指導教員　宮内智久

Energy Park ～NIMBY to YIMBY～

Student Number　K20313
Name　NISHIMURA Rukia
Supervisor　MIYAUCHI Tomohisa

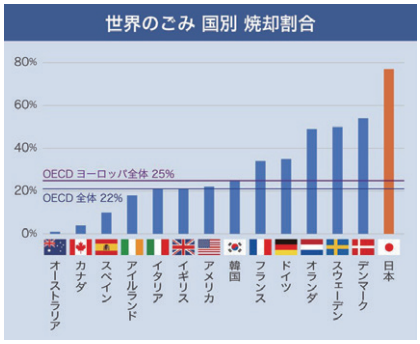
1. 設計趣旨

NIMBY(Not In My Backyard)、いわゆる「迷惑施設」と呼ばれる清掃工場だが、日本はリサイクルという概念があまり進んでおらず、焼却場数は世界一位という現状がある。その現状に目を向け、リサイクルを楽しみながら普及していけるような清掃工場を設計した。

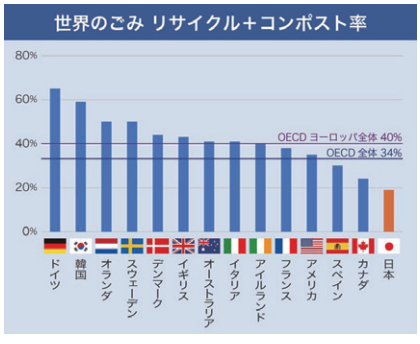
2. 現状の課題

現状の課題として二つ課題が挙げられる。

一つ目として、前章でも述べたように焼却場数が世界１位という点である。日本はゴミの排出量としては世界８位にも関わらず、焼却場数は世界１位という現状がある。一方、アメリカはゴミの排出量が世界３位なのに対し、焼却場数は日本より少ない。



二つ目として、リサイクル率の低さである。日本においてリサイクルの概念はそれほど進んでおらず、OECD（経済協力開発機構）の中では日本のリサイクル率は最下位である。

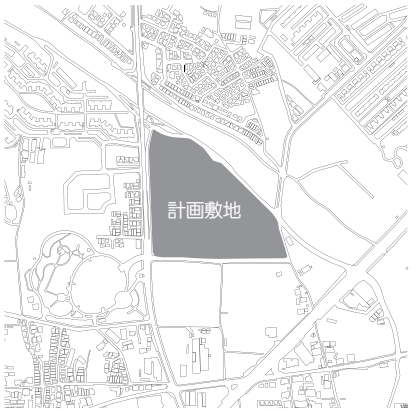


3. 敷地選定

大阪府枚方市田口５丁目１−１
区域区分：市街化調整区域

計画敷地として枚方市穂谷川清掃工場を選定した。枚方市穂谷川清掃工場の焼却施設は昭和３８年７月に完成しており、今年（２０２３）で築６０年となり、老朽化が進んでいる。そのような点から建替も含め、新しい形態の清掃工場を提案する。

敷地西側には比較的新しい住宅地があり、清掃工場を地域にひらけたものにすることで、より地域が活性化されることが予想される。



4. コンセプト

今回の制作においてコンセプトは「NIMBY から YIMBY へ」とした。清掃工場を迷惑施設という存在「Not In My Backyard」から歓迎される存在「Yes In My Backyard」となるような清掃工場を目指す。そのためには清掃工場を日常から地域に開かれた施設、地域に愛される施設とし、今までの概念を排除していくことが必要だと考えられる。今回の提案では、タイトルの「ENERGY PARK」のように、清掃工場から生まれる「熱エネルギー」「電気エネルギー」、ゴミから生まれる肥料を用いて栽培した「食エネルギー」といった様々なエネルギーを利用した施設を提案し、ゴミを回収するためだけの施設ではなく、日頃から多くの人が利用する施設とした。

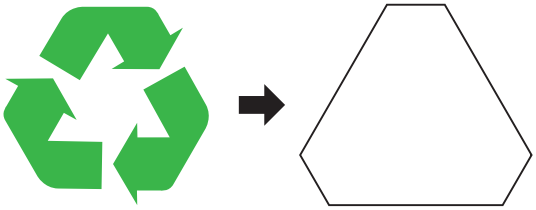


所在地：大阪府枚方市田口５丁目１−１
主な用途：清掃工場
敷地面積：36,644m^2
建築面積：11,714m^2
延床面積：21,482m^2
キーワード：清掃工場・エネルギー・NIMBY 問題

Location ： 5-1-1,Taguchi,Hirakata-shi,Osaka
Main Use ： waste incineration plant
Site Area ： 36,644m^2
Building Floor Area ： 11,714m^2
Total Floor Area ： 21,482m^2
Keywords ： waste incineration plant, Energy, NIMBY

5. 建築計画

今回の設計の大きな特徴でもある六角形の形状は、リサイクルのロゴをイメージし、作成した。リサイクルを通した様々な施設、アクティビティを設計する事で、焼却場数が多い点や、リサイクル率の低さを解決していけると考えられる。



今回、大きく三つのエネルギーの施設・アクティビティを計画した。

一つ目は「熱エネルギー」である。清掃工場で生まれる熱エネルギーを利用し､敷地内に「室内温水プール」「浴場」を設計した。

二つ目は「電気エネルギー」である。清掃工場で生まれる電気エネルギーを利用し、地域イベントや発表会などに利用できるシアター。また、駐車場内に電気自動車の充電スポットを多く設置した。今後、電気自動車が普及し、需要が増えてくる事が予想される中で、地域住民が充電のために訪れ、充電時間を利用し、清掃工場を見学し、ゴミの問題について考える機会とする。プールを楽しむ。など充実した時間を送る事ができるようにした。

三つ目は「食エネルギー」である。ゴミから生まれる肥料を利用し、野菜などを敷地内で栽培し、敷地内のレストランで提供、生ゴミは再度肥料として利用できるようにしている。

引用資料・参考事例

＜引用資料＞
Yahoo　ニュース　「なぜ日本のリサイクル率は世界ランキングで低いのか？全国トップ自治体の事例から探る」
https://news.yahoo.co.jp/expert/articles/59d4317798557a0b7536d74d3935cbd0fc378866

SGDs COMPASS　「世界のゴミ問題とは？現状・原因と今からできる対策を解説」
https://sdgs-compass.jp/column/4354

＜参考事例＞
広島市環境局中工場　　谷口建築設計研究所
武蔵野クリーン工場　　KAJIMA DESIGN 武蔵野市
Waste-to-energy Plant　　Gottlieb Paludan
Amager Power Station, BI04　　Gottlieb Paludan
アマー・バッケ発電所　　ビャルケ・インゲルス
Glass bottling Plant Cristalchile　　Guillermo Hevia

寺院建築の設計技法
～仏教寺院の設計及び寺院本堂と門の規模の関係性に関する試案～

学籍番号　K20314
名　　前　貫井美柚
指導教員　大上直樹

1. 研究概要

これまでに大上研究室で研究されてきた設計技法の成果を用い、実際例として本堂及び門の設計を行う。実際例として設計を行うことで、設計技法を実証、再現性を確認し、体系的な理論を確立する。

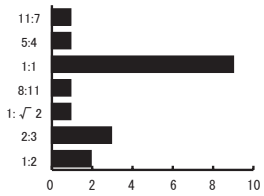
また、設計を行う前に本堂と付属建築物の関係性を明らかにし、設計を行う際の規模決定に利用する。寺院本堂と門の規模の関係性、寺院本堂と塔婆の規模の関係性については、大学院１年の降簱優花さん、大上直樹教授と共同で論文を執筆し、日本建築学会技術報告集（10 月締め）へ投稿した。

本研究は設計であるが、寺院建築の設計技法を解明し実際例に用いるものであるため、寸法の決定方法や先述した寺院本堂と付属建築の規模の関係についての事例研究の結果などについてまとめるものとする。

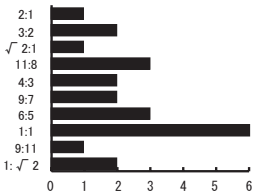
2. 寺院本堂と門の規模の関係について

表の間及び高さについて、本堂と門を比較する。表の間の比較において、棟門や四脚門等の一間門と八脚門や楼門等三間以上の門では規模が異なるので、一間門については本堂中央間、三間以上の門では本堂中央三間との関係について、それぞれ区別して考察を進める。高さについては、化粧棟木のある場合はその下端を基準として、本堂と門の棟高相互に比例関係が存在するのかを検討する。

表の間の関係については、一間門、三間以上の門ともに 1:1 と同規模かそれに近い整数比をとる（グラフ 1）（グラフ 2）。

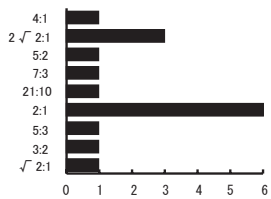


グラフ１　表の間の比の分布（一間門）

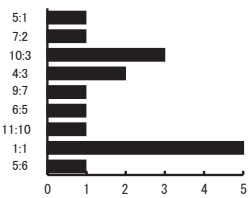


グラフ２　表の間の比の分布（三間以上門）

高さについては、一間門では 2:1 を基本に本堂の 1/2 程度、三間以上の門では 1:1 近辺のほぼ同規模の整数比をとる（グラフ 3）（グラフ 4）。



グラフ３　高さの比の分布（一間門）



グラフ４　高さの比の分布（三間以上の門）

Design techniques for Buddhist temple architecture

Student Number　K20314
Name　NUKII Miyu
Supervisor　OUE Naoki

3. 寸法決定の方法

3.1. 決定寸法一覧

本堂（五間堂）	
表の間	42.01 尺（裏目 30 尺）
柱径	側柱　1.2 尺 内陣柱　1.3 尺 来迎柱　1.4 尺
垂木割	中央間 14 枝 脇間 / 端間 12 枝
留先幅	57.61 尺
垂木総数	658 枝
垂木寸法	巾 3.0 寸 / 成 3.7 寸
奥行	43.62 尺
棟高	33.60 尺
内法高さ	8.40 尺
軒の出	7.80 尺
軒高	13.12 尺
床高	3.36 尺
内陣天井高	15.96 尺
四脚門	
表の間	12.11 尺
柱径	本柱 1.45 尺 控柱 0.87 尺
留先幅	18.98 尺
控柱までの距離	4.845 尺
棟高	16.81 尺
軒の出	3.44 尺
軒高	12.61 尺

表　決定寸法一覧

3.2. 寸法決定の方法（本堂）



図１　本堂表の間の寸法決定方法

表の間

30.00 尺（裏目）× 1.4（√2）=42.00 尺
柱間を 6:5:5 に按分
→中央間 9.69 尺　脇間 / 端間 8.08 尺

垂木割

柱間の按分率と異なるので、一枝寸法が柱間によって異なる
中央間 14 枝@ 0.692 尺
脇間 / 端間 12 枝@ 0.673 尺

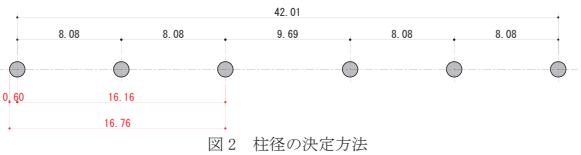


図２　柱径の決定方法

所在地：京都府京都市東山区川端通七条上ル
主な用途：寺院
敷地面積：8107.84m^2（CADによる計測）
建築面積：205.52m^2
床面積：168.28m^2（本堂以外は工作物とする）
キーワード：寺院・表の間・比例関係

Location:Kawabata-Shichijo agaru, Higashiyama-ku, Kyoto-shi, Kyoto
Main Use:Buddhist temple
Site Area:8107.84m^2 (measured with CAD)
Building Floor Area:205.52m^2
Total Floor Area:168.28m^2
Keywords:Buddhist temple, Frontage, Proportional relationship

柱径
中央間の√3倍（16.76尺）－脇間と端間の合計（16.16尺）
=0.60尺→側柱の半径
内陣柱、来迎柱は側柱から1寸ずつ大きく
→内陣柱1.30尺、来迎柱1.40尺に

垂木総数
端間柱真から留先までの垂木数を12枝とする
地垂木348本、飛檐垂木310本→総数658本

垂木寸法
垂木巾：成=4:5（背返し）
地垂木、飛檐垂木ともに元の
巾0.30尺、成0.37尺
地垂木木口の成は1割5分増
→0.42尺
飛檐垂木木口は
巾1割5分落→0.25尺、成元の巾と同寸→0.30尺

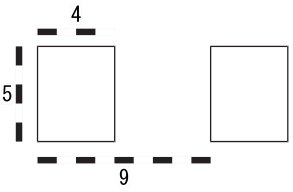


図3　垂木寸法の決定方法

奥行
正面中央間をA、脇間/端間をBとする
外陣をB×2、内陣をA×2+Bで→総間43.62尺

棟高
屋根は寄棟、表の間：棟高=10:8→33.60尺程度

軒の出及び高さ
留先幅/正面ヲゼ=4/3→57.61尺
→軒の出7.80尺
側柱真の床天から√2勾配（1.40/1.00）
→軒高13.12尺

床高
礎石天から床天まで棟高×1/10
→3.36尺程度

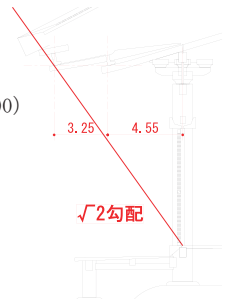


図4　軒の決定方法

3.3. 寸法決定の方法（四脚門）

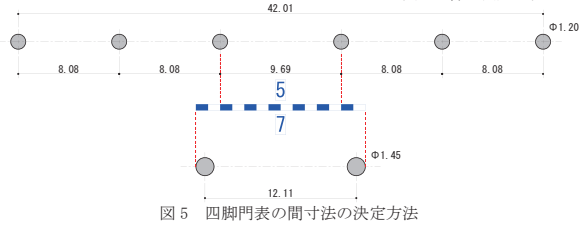
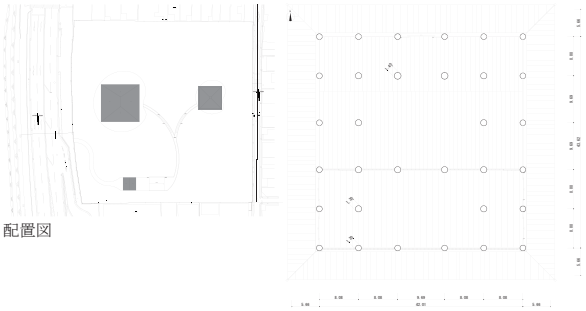


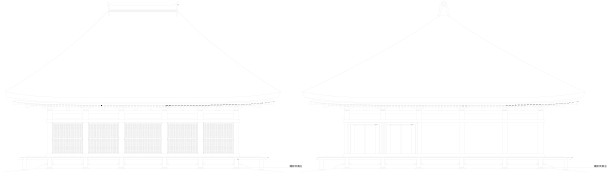
図5　四脚門表の間寸法の決定方法

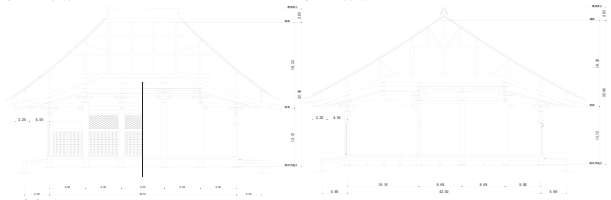
表の間
本堂中央間ナカスミ：門ヲゼ=1:√2
柱径からナカスミ→12.11尺

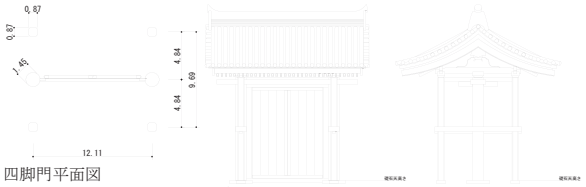
柱径
本柱の径は表の間ナカスミの一割二分算→1.45尺
控柱は角柱、径は本柱の6割→0.87尺

棟高
本堂棟高：門棟高=2:1→16.81尺

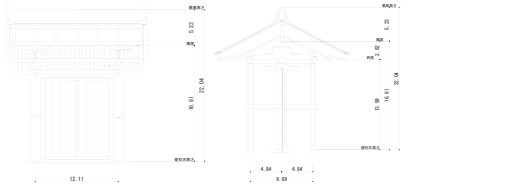

配置図
本堂平面図

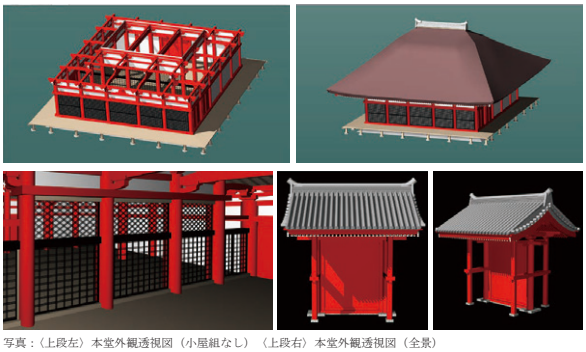

本堂正面図
本堂側面図


本堂桁行断面図
本堂梁間断面図



四脚門平面図
四脚門正面図
四脚門側面図


四脚門桁行断面図
四脚門梁間断面図


写真：（上段左）本堂外観透視図（小屋組なし）（上段右）本堂外観透視図（全景）
（下段左）本堂内観透視図（外陣）（下段中央）四脚門透視図（正面）（下段右）四脚門透視図（二点透視）

re start　～淡海で癒される桃源郷～

re start oumideiyasarerutougennkyou

学籍番号　K20315
名　　前　野口拓馬
指導教員　宮内智久

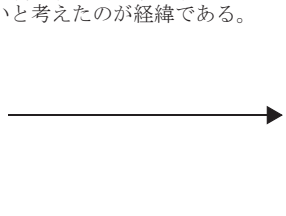
Student Number　K20315
Name　NOGUCH Takuma
Supervisor　MIYACH Tomohisa

はじめに

制作物と考えにいたった経緯

利用したらリフレッシュして利用後は清々しい気持ちで帰れるような複合施設を制作する。そこで、ホテルをメインにした琵琶湖沿いの複合施設を提案する。大学に入ってからバイトやイベントごとを通じて様々な会社員・派遣社員の人と出会った。その中で多くの人が休みは「家で寝るだけ」や「なんもすることなくてひま」などと言う人が多くおり退屈な日々を送ってるという印象を受けた。この時、リフレッシュの仕方を知らない又は知ってるが行動に移せていない人がいることを知った。この人たちの人生がつまらなくなる何かを作りたいと考えたのが経緯である。







敷地選定理由

リフレッシュするには自然がある場所が良いと考え、緑や水などはストレス軽減があるため琵琶湖を絡ませた建築にしたいと考えた。滋賀県で琵琶湖に接する地域は多くあるが滋賀の北側は、交通の便が悪く、人口が多い京都や大阪から遠く多くの利用者は利用しずらいと考え、そこから近い交通の便が良い浜大津の敷地にしようと考えた。
浜大津には京阪京津線のびわこ浜大津駅があり、国道 161 号線など通っており立地が良い場所である。また、浜大津は「びわこ花火大会」が開催される場であり選定敷地から見ることが出来ることも選定理由の１つである。



図１：敷地図

周辺・敷地の調査

選定敷地調査・周辺

選定敷地の隣は､設計:竹中工務店の浜大津アーカスと大津港がある｡選定敷地内には大津港シンボル緑地公園･大津城跡がある。大津港シンボル緑地公園はそこまで緑化はされておらず大きなオブジェがあり公園の端にベンチがあった。人は休日は子連れの家族が来ており、平日は昼の時間帯はほぼ人がいない状態であった。大津城跡は石碑が置かれいるだけであり跡らしい形跡はなかった。石碑前の道路は学生などが通っていたが石碑たちどまったり大津城跡を見に来ている人はいないと印象を受けた。大津港にはクルーズ船の乗客者がおり賑わっていた。敷地の中心部は草が生えており何も建っておらず空地のようになっていた。選定敷地は広く横約 200m 程度あり奥行は約 85m 程度ある。選定敷地周辺を利用する人の多くは、びわこ浜大津駅から来る人が多い。あとは近くに住んでいる地域住民が多く見られた。



図２：車道側の歩道



図３：図２から見た



図４：道路側中心からの敷地



図５：隣接するアーカス

京阪びわこ浜大津駅周辺

京阪びわこ浜大津駅は、階段上り出口は浜大津スカイクロスにでて地上に降りるには改札を出て左手または真っすぐ進んだ所にある階段・エレベーターを使用すると降りられる。浜大津スカクロスからは、子育て支援センター・健康施設がある明日都浜大津や浜大津アミューズ館に直接いけるようになっている。びわこ浜大津駅周辺には、選定敷地内にある大津港の地下駐車場･タイムズがあり改札出て右手に浜大津公共駐車場がある。浜大津スカイクロスの下の道路は朝･昼･夜と交通量が多かった。びわこ浜大津駅周辺は比較的に人が多く歩いており人が多い印象を受けたが明日都浜大津、浜大津アーカスアミューズメント館の館内は人が少ない印象を受けた。それに比べ浜大津公共駐車場・タイムズには７割程度駐車していた。しかし、大津港の地下駐車場は３割程度であまり駐車していないと印象を受けた。



図６：駅の改札



図７：浜大津スカイクロス



図８：改札でて敷地に向かう



図９スカイクロスから敷地

所在地：滋賀県大津市浜大津 5-2
主な用途：ホテル
敷地面積：18520.5m^2
建築面積：7000m^2
延床面積：94609.59m^2
キーワード：ホテル複合施設・琵琶湖・ラーメン構造

Location ： 5-2,hamaootu,ootu-si,Shigaken
Main Use ： hotel
Site Area ： 18520.5m^2
Building Floor Area ： 7000m^2
Total Floor Area ： 94609.59m^2
Keywords ： hotei, biwako , Ramen strcture

計画内容

1. 今回の建物で目指す効果 「ストレスの緩和・解消」
現代の日本では技術の発展も進んでいるが、効率化を求めすぎていることなどから、ストレス社会という大きな問題を抱えている。図 10 を見て分かる通り約 4 割の人ストレスを感じておりストレスと向き合って行く必要があるということが分かる。ストレスには「急性」（失恋・配偶者の死など）と「持続的」（家族間のケンカ・貧困など）の 2 種類ある。これらストレスを抱えている人達をリフレッシュ出来る誰もがずっといたくなる建物を計画していく。

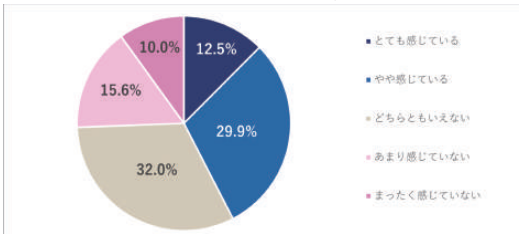


図 10：ストレスにより不安を感じているのかのグラフ

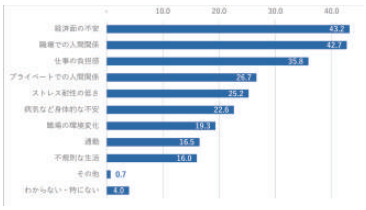


図 11：どのようなことからストレスを感じるのか

2.「ストレス緩和・解消」目指すために考えたこと
サウナ・ジム・緑のある建物・図書館・美味しい食べ物などとリフレッシュ出来る建物はいくつもあるが個々が別々の場所にあり移動にかかるコストや時間などがストレスに感じてしまうことがあるのではないかと考える。1 つの建物で完結できる施設を作れば利用しやすく良いと考えた。なので、re start では商業施設フロアとホテルフロアに分けて設計していく。商業施設フロアには、サウナ・書店・カフェ・温泉・びわこ展望テラス・駐船場を設けホテルフロアにはレギュラールームと VIP ルームの 2 種類を設計していく。商業フロア・ホテルフロア共に主要な室はびわこを眺めれるようにするためびわこ側に配置し道路側に従業員の動線を確保するようにする。1 ～ 4FL を商業エリアとし 5 ～ 22FL をホテルエリアとし設計した。

3. アクセス
re start では、車・電車・船のアクセスを考えている。駐車場は、敷地の道路側向かいに浜大津公共駐車場を使用し電車はびわこ浜大津駅から敷地に浜大津スカイクロスから直接行けるように計画している。びわこから近い敷地であることから敷地の半分を水を引き込み船でもアクセス出来るようにした。

4. フロア説明

商業施設フロア
・1FL 半屋外スペースがほとんどであり、四角の立体ボリュームの中身を東西南北方面から中心にくり抜き屋内全部を見渡せるようにした。案内所・マーケット・カフェ・事務室を配置する。マーケットには滋賀県の特産物やお弁当などを販売する。敷地北西側の水を引き込んでいる場所に駐船場があり乗り降りできるようになっている。
・2FL 開放感を持たすためにはとんどが吹き抜けであり、1FL の室の上に 2FL の室があり 1 FL と 2FL の室外の吹き抜け部分から、来場者たちの視線が繋がるような空間となっている。交流の場多目的室・カフェ・を配置し駐船場側のテラスは浜大津スカイクロスとつなげ行き来出来るようになっている。
・3FL ジム・カフェレストラン・事務室を配置している。びわこ側にジム・カフェレストラン・テラスを設けびわこを眺めながらトレーニング、飲食、休憩できるようになっている。
・4FL 温泉施設を配置した。露天風呂をびわこ側に配置しびわこを眺めることができるようにした。、休憩スペース・マンガコーナーなどを道路側に配置した。床に穴を設けることでゆったりくつろげるスペースを確保した。

ホテルフロア
・5FL エントランスであり、びわこ側にソファを設け屋内から琵琶湖が眺められるようにした。
・6 ～ 11FL 客室・スタッフルーム・テラスを配置した。中心には半屋外スペースを設け緑が感じられる空間とする。半屋外スペースから上階の雰囲気が感じられるようなっている。
・12FL 極力壁を設けず展望テラスのようになっている。宿泊者以外も立ち入ることができびわこを一望出来るフロアとなっている。
・13 ～ 18FL VIP ルーム・スタッフルーム・テラスを配置している。中心にエレベーターを設置しエレベーターホールをカーテンウォールにすることで屋外の緑を外からも中からも感じられるようにした。屋外スペースを設けびわこを眺められる場を設けた。
・19 ～ 22FL 客室以外は屋外空間となっており屋内に比べびわこの風や景色が感じられるフロアになっている。また、大きなガラスのある劇場を設けることでびわこをバックにした音楽など楽しめる空間を設けた。

参考文献：
2023 年ビジネスパーソンが抱えるストレスに関する調査 ZURICH チューリッヒ生命
https://www.zurichlife.co.jp/aboutus/pressrelease/2023/20230928

図版出典：
・図 地理院地図
・写真 筆者撮影

100 年集合住宅

K20316　　萩原弥和＊
指導教員　井上晋一＊＊

＊　京都美術工芸大学　建築学科
＊＊　京都美術工芸大学 教授・工博（設計指導）

Apartment building lasts 100 years

HAGIWARA Miwa*
INOUE Shinichi**

*　Department of Architecture, Faculty of Arts, Kyoto Arts and Crafts Univ.
**　Prof. Graduate School of Applied Art., Kyoto Arts and Crafts Univ., Dr.Eng.(※ Adviser)

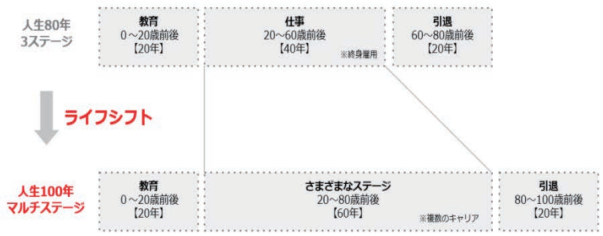
研究背景

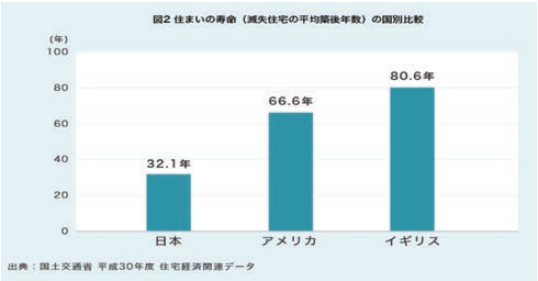
2007 年に産まれた子どもの半数が 107 歳より長く生きるという研究結果があるように人生は 100 年時代を迎えている。従来は「教育」→「仕事」→「引退」という３つのステージがライフプランの基本的な形だったが、人生を 100 年という単位で捉えた時、このライフプランが大きく変わる可能性がある。また、年金の支給年齢は引き上げられ、平均寿命は延びている。もし 60 ～ 65 歳で定年退職・引退した場合、残りの約 40 年分の人生をまかなえるほどの貯蓄を現役中にする必要があるが、なかなか難しいのではないのだろうか。

そのため、60 ～ 65 歳以降も健康で長く働き、充実した人生を歩むために、多様な働き方、暮らし方、生き方など、さまざまなステージを選択していくマルチステージへとシフトする必要がある。

しかし、この「教育」→「仕事」→「引退」３つのステージの内、どれか一つもしくは全ての期間を少しずつ伸ばすという、単純な変化だけでは対応することができない。また、日本人が長寿社会であるにも関わらず、居住水準の向上、生活様式の変化、住空間を支える設備の変化、地価と住宅価のアンバランスなどにより、日本の住宅の寿命は 32 歳と、あまりにも短くなっている。

＜図1：人生モデルのシフト（転換）＞





計画敷地について

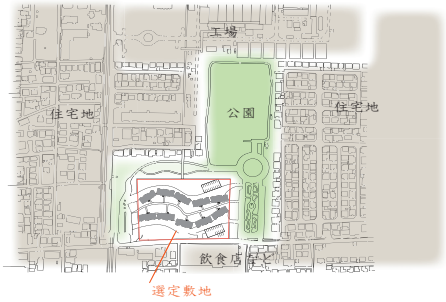
本計画地は、私の地元である広島県福山市に位置する。駅家町万能倉にある駅家公園に囲われており、現在は敷地内に築 55 年の４階建ての RC 造が全７棟ある。建物は並列に並び、敷地の全方位を高いフェンスや木で囲われているため公園と完全に分断されており、どの棟も暗い印象である。

敷地周辺には団地、工場があり、そのほかにも市営住宅、パン屋、美容院、家電量販店、大手寿司店、ハンバーガー店、和菓子屋、餃子屋、中華料理屋などが立ち並び、車で５分のところに私立大学やスーパー、薬局がある。そのため、子育て世代から高齢者まで生活しやすい環境となっている。駅家公園は普段、ウォーキングコースとして地域住民に利用され、年に数回、地域のスポーツ大会でにぎわう。４月ごろになると桜が咲き誇るため夜桜や花見を楽しむことができ、５～６月には公園の駐車場付近に福山市のシンボルであるバラが咲き始める。

所在地…広島県福山市駅家町３７３－３８

公園面積…12, 830 ㎡

内運動場面積…11, 050 ㎡



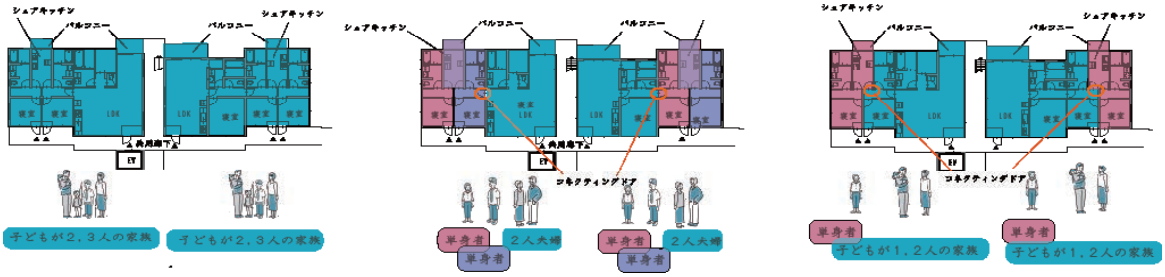
所在地：広島県福山市駅家町万能倉 35-29

主な用途：公園、集合住宅
敷地面積：12830㎡
建築面積：1781.24㎡
延床面積：5343.72 ㎡
キーワード：ライフステージ、地域コミュニティ、公園

12830Location : 25-29 Managura,Ekiya-chou,Fukuyama-city,Hiroshima
Main Use : Prk,Apartment building
Site Area : 12830m2.
Building Floor Area :1781.24m2
Total Floor Area : 5343.72m2
Keywords :Life stage,Local community,Playground

住戸・外構計画

ライフステージの変化に対応できるようにするため、ひとつの住戸で様々な世帯か変化しながら暮らすことができるように計画した。計画した住戸の主な室は、リビングダイニングキッチンをまとめた大きな１部屋と、寝室が２，３部屋である。それを、子育て世帯がライフステージがが変化した際に、単身者や夫婦が暮らすことができるようにする。例えば、はじめ、子どもが２，３人いる家族の場合、寝室２部屋を両方子ども部屋として使用する。その後、進学や就職の関係で子どもが独立し親元を離れるとき、かつて子ども部屋として使っていた２部屋が空き部屋となってしまう。そこで、その２部屋を近隣大学の学生などの単身者に向けた賃貸物件とする。寝室の前の廊下と LDK をつないでいたドアはコネクティングドアを使用し、壁としてもドアとしても使用ができる。賃貸部屋の玄関は共用廊下からつながり、単身者同士使うことのできるシェアキッチンもあるので、単身者でも孤独を感じにくく、近隣住民と交流を持たせることができるようにした。
また、中庭にまたがる通路は公園の道と各住戸への入口とをつなぎ、２階部分は、立体街路により全ての住戸間のつながりを持たせた。







参考文献

・カオナビ人事用語集 編集部人生『100 年時代とは｜働き方、求められる人材像、生き抜き方は？』
・研究員コラム『人生 100 年時代のキーワード「ライフシフト」とは？企業にも重要な理由』
・長谷川愛子、『SD 別冊 25 近未来型集合住宅 NEXT21 環境共生をめざした実験のすべて』、鹿島出版会（1994 年８月３日）
・国土交通省『高齢者の生活・外出特性について』
・大阪ガス『大阪ガス実験集合住宅 NEXT21』
・北陸銀行『ほくぎんマネーのツボ～読めばなるほどお金のコラム～』
・三井住友銀行『人生 100 年時代の住まいと住まい方 長く住み続けるためのリフォームのすすめ』
・松村秀一、田辺新一『近未来住宅の技術が分かる本～新しい日本の住宅の開発コンセプト～』

まちなか小学校

－子どもの学びと地域を活性化する新しい学校の形－

学籍番号　K20317
名　　前　濵口峻佑
指導教員　杉本直子

計画背景

新たな学校のかたちとして定着したオープンスクール。その登場から 50 年が経ち、学校に求められる機能の変化や、少子高齢化などの問題に直面する今、現代・未来にあった新たな学校のかたちを考える必要がある。

計画敷地である三重県玉城町は少子高齢化で人口は減少しているものの、良好で安定的な働く場があり、近隣市町へのアクセスも良く、今も転入超過であることから（図 1）、教育機関をより良くし、ここで子育てしたいと思える町・学校にすることは、子育て世代を誘致でき、人口増加に転じる一歩になりうると私は考えた。

計画目的

学校がある場所はその町に住むほぼ全員が知っているのにそこに行くのは子どもの時だけである。そんな場所に大人も使える施設を併設することで、施設を使いたい人、懐かしむ為に訪問する人、学校に通う子ども達が一堂に会することで新たな活動・交流が生まれることによる地域活性化を図る。

「玉城町都市計画マスタープラン」では、町民が期待することに「安心して子どもを遊ばせることができる広場、公園の整備」が挙げられている。学校に公園の要素を掛け合わせることで、基本的には人がいるのである程度安全であり、未就学児にとっては学校に慣れる場として、児童や高齢者にとっては交流の場にもなる。

子どもと周辺住民を対象とした小学校×公園×公共施設の複合施設を計画することで、小学校が地域コミュニティの核として使われる場になるようにする。またこれらが組み合わさることで、子どもの学びと地域活動の活性化を図る。

計画敷地

敷地場所は三重県度会郡玉城町佐田 1247 にある。玉城町は人口が比較的多い伊勢市、松阪市に近接している。昔は伊勢神宮への参拝客が集まる宿場町として賑わう。JR、高速が通っているため、近隣市町へのアクセスが良い。パナソニックや美和ロックの工場があるため製造業が盛んで、近隣市町から多くの人が働きにきており、引っ越して来る人も多い。しめ縄、最中、豚等がブランド認定されている。

敷地には小学校があり、玉城町に住む小学生の 4 割が登校しており、児童館も併設されている。町役場や駅が近くにあり、玉城町の中心部に位置している。以前は田んぼに囲まれていたが、最近は田んぼを潰した住宅団地が計画されている。

計画要点

計画するにあたって、重要な点は以下の通りである。

(1) 子どもの遊び場となるように

仙田満著「遊環構造デザイン　円い空間が未来をひらく」に記されている 6 つのあそび空間を備える。6 つのあそび空間とは、公園、校庭、神社の境内などの具体的な場所ではなく、子どものあそび行為を基準とした実体験的空間のことで、この空間で遊ぶことで子どもは様々な能力を開発していく。

1. 自然スペース... 採集あそびが可能。他のあそび空間では代替できない。
2. オープンスペース... 力いっぱい走り回れる広がりのあるスペース（≒運動場）
3. 道スペース... 子どもたちの出会いの場。色々なあそびの拠点を連携するネットワークの空間
4. アナーキースペース... 煩雑な場所、想像力が刺激される空間
5. アジトスペース... 秘密基地のようなスペース。独立した空間を持つことで独立心や計画性、共同体としての意識を育む。
6. 遊具スペース... あそび場だと示す象徴性を持つ。

これら 6 つのあそび空間をただ配置するだけでなく、学校が元から持っている要素と上手く組み合わせながら効果的に敷地に配置していく

(2)「4 つの S」のコモンズ空間 を小学校に

子ども学の研究者、上田信行は学びの風景を次の 4 つに分類した。

1. schoo（学習）... 教室等の一般的な学びの場
2. studio（実践）... アトリエやラボ等の体験学習
3. stage（発信）... 仲間やオーディエンスに発表・プレゼンテーションするなかで気づく学び
4. street（交流）... 知識交換を行うなかで、新たな疑問提

The school in town:

A new school format that revitalizes children's learning and the communityStudent

Number　K20317
Name　HAMAGUCHI Shunsuke
Supervisor　SUGIMOTO Naoko

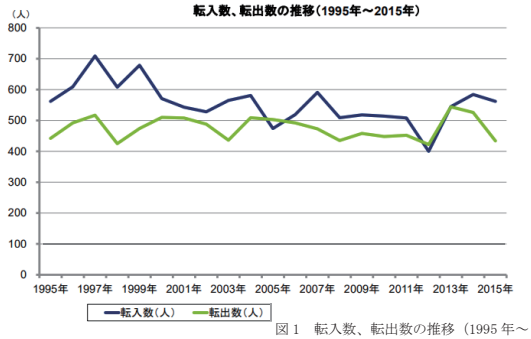


図 1　転入数、転出数の推移（1995 年～ 2015 年）

住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数に関する調査（1995 年～2015 年：総務省）

＜町民の意見＞

- 玉城町の現状として、「秩序ある土地利用、開発指導」の満足度が低くなっています。（問 13①）
- めざすべきまちの将来イメージとして、「子育てしやすいまち」、「事故や犯罪が少なく安心して暮らせるまち」、「道路・公園・河川・上下水道などがよく整備されたまち」を望んでいる住民が多くなっています。（問 14）
- 子育て支援施策として、「子どもが犯罪、交通事故などから守られる地域環境の整備」、「安心して子どもを遊ばせることができる広場・公園などの整備」への期待が高くなっています。（問 15）
- 移住・定住施策として、「子育て支援・子育て環境の充実」、「空き家等を有効に活用するための支援」が求められています。（問 16）

資料：第 6 次玉城町総合計画策定に向けた住民意識調査結果報告書（令和 2 年 1 月）



（出典）google map を元に作成　　図 2　敷地上空写真



図 3　敷地スタディ模型



図 4　四つの S を内包する空間構成のイメージ

所在地：三重県度会郡玉城町佐田 1247
主な用途：小学校
敷地面積：24760㎡
建築面積：2609㎡
延床面積：5449㎡
キーワード：学校・公園・地域活性化・４つのＳ・６つのあそび空間

Location ： 1247, sata, tamakitown, watarai-gun, mie
Main Use ： elementary school
Site Area ： 24760㎡
Building Floor Area ： 2609㎡
Total Floor Area ： 5449㎡
Keywords ： School, park, regional revitalization, 4 S, 6 play spaces

起が起こり、学び続けること。
これら４つのＳは主に大学機関で導入されているが、小学校で４つ全て導入されている事例はない。しかし、それぞれの行為自体は小学生でも可能なので、小学校という１つの建物に落とし込むことは可能であると考える。

(3) 学校を地域交流の場に

学校の敷地内に積極的に地域住民を招き入れることで、児童と地域住民、そして地域住民同士の出会いの場となるようにする。その為に、地域住民も使えるレンタルキッチン「みんなの家庭科室」や、コワーキングスペース「みんなの教室」を敷地内に併設した。更に、特に利用目的がなくても学校に来てもらえるように遊歩道を整備し、高齢者等の散歩道になるようにした。

ダイアグラム

６つのあそび空間と４つのＳそれぞれのスペースが相互作用するように，一度それぞれを分解し似たような機能をまとめ、校舎・敷地に配置する。４つのＳは本来、１つの建物の中に入れ込み、一筆書きで体験できると良いとされているが、６つのあそび空間との併用と、地域活性化も狙うことを考え、１つの敷地内に入れ込むことにした。この２つ（+ 利用者）が組み合わさることで単に子どもが遊ぶ場所のみにとどまらず、利用する人全員が新たな学びや気付きを得られ、交流が生まれるようにする（図 5）。

従来の学校は、敷地の周りを柵や塀等で囲むことで防犯性を担保してきた。しかしこれでは学校と住民の間で交流は生まれにくい。この設計では、塀を取り払い住民を敷地内には入れるようにし、普段から児童・住民間の交流が生まれるようにする（図 6）。防犯性については賑わいや、住民同士・住民と児童の交流によって犯罪の発生を抑制し、万が一校舎内に侵入された時を想定して、行き止まりを作らないことと可能な限り回遊性を高めるようにして、逃げ道を沢山作った（図 7）。

この計画を通して

基本的に地域に閉じられた学校を地域に開き、児童と住民との交流を日常的に生み出すことによる、学びと地域の活性化は、十分に可能であると考える。

近年、スマホや習い事が増えたことによる影響で、子どもが遊ぶ時間が減ってきていたが、６つのあそび空間が学校に落とし込まれることで、日常的に遊び（を通した学び）に触れることができ、学力向上も見込める。

学校を魅力的にし、子育て世代を中心とした若い世代を誘致することで人口増加を図る事例は少なからず存在する。十分な働く場があり、近隣市町へのアクセスも良い玉城町でもこの施策は成立できると考える。

建築概要

用途：小学校 / 公共施設
階数：地上３階 / 地上１階　構造：RC 造（一部 S 造）
建築面積：2609 ㎡　延床面積：5449 ㎡
屋根：スレート葺　外壁：エポキシ樹脂吹付仕上げ

参考文献一部

仙田満『遊環構造デザイン 円い空間が未来をひらく』(2020)
小嶋一浩『アクティビティを設計せよ ！ 学校空間を軸にしたスタディ エスキスシリーズ』(2000)
日建設計『未来を拓くキャンパスのデザイン』(2018)
10+1 website 学校建築の経験と展開
https://www.10plus1.jp/monthly/2013/03/issue01.php
玉城町ホームページ
https://kizuna.town.tamaki.mie.jp/chosei/gyokaku/shisaku/documents/kobetsushisetsu_gakkou.pdf
https://kizuna.town.tamaki.mie.jp/chosei/gyokaku/shisaku/documents/jinkovision.pdf
寝屋川市 号外ネット https://neyagawa.goguynet.jp/2020/11/05/4chu-kouku-syochuikkanko/
寝屋川市 号外ネット https://neyagawa.goguynet.jp/2022/09/28/nozomigaoka-shochuikan/
RESAS 地域経済分析システム
https://resas.go.jp/industry-all/#/map/24/24461/2016/2/3/1/-/1/1/1/-/-/2012/2016

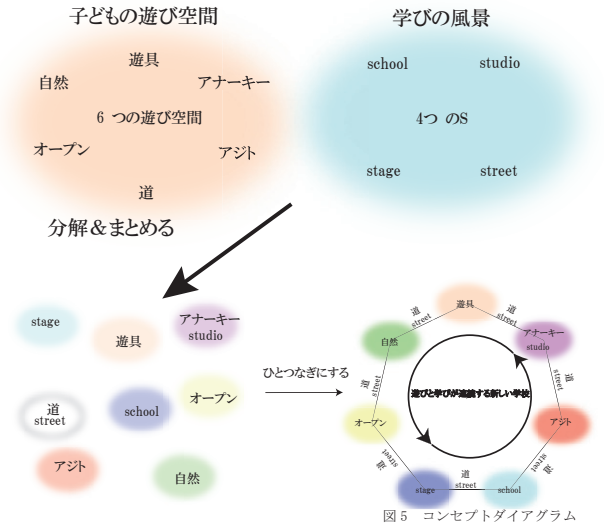


図 5　コンセプトダイアグラム

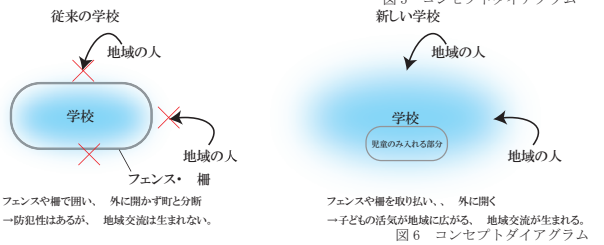


図 6　コンセプトダイアグラム

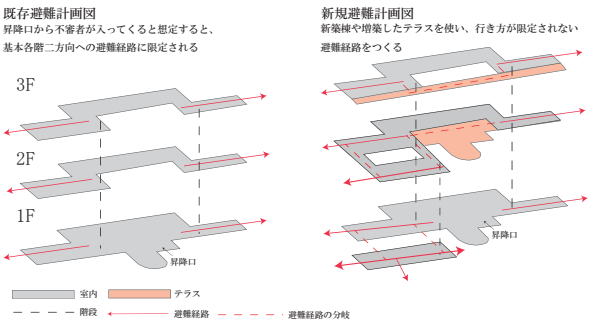


図 7　コンセプトダイアグラム


図 8　小学校全景パース

図 9　遊歩道パース

Co-Lab Street

人・緑・知で溢れるまちづくり

学籍番号　K20318
名　　前　濱田哲平
指導教員　宮内智久

1. 元岡地区について

福岡県福岡市西区九大新町の位置する元岡地区は、第９次福岡市基本計画において、「学生や研究者などが、新たな知を創造し、発信する研究開発拠点の形成を図る地区」と位置づけられており、地区計画として、産学連携・交流のための研究・開発・交流機能や、居住機能等を誘導することを目的としている。これまで当地区においては、九州大学伊都キャンパスに隣接する立地を活かし、福岡市産学連携交流センターの開設、有機光エレクトロニクス実用化開発センターの誘致などを進めており、令和５年４月には新たに研究開発次世代拠点（いとLab+）が開業した。

2. 現状と問題

九州大学は、施設の老朽化やキャンパスの分散立地等の課題を解決するため、箱崎キャンパス・六本松キャンパスを元岡地区の伊都キャンパスへと統合移転することとなった。伊都キャンパスへと統合することによって研究・学習の効率や学内での交流が増加するなどの利点はあるが、山を切り拓いてキャンパスを整備したため環境破壊や緑地の減少等の問題が指摘されたり、キャンパス周辺に店舗や施設がなく生活の利便性が著しく欠けるなどの欠点もある。



図 1. 九州大学キャンパス移転図（福岡市 HP 参照）

そのような中伊都キャンパスを核とした知の拠点づくりをめざす「九州大学学術研究都市構想」が策定され、ついに令和５年４月に「いとLab+」が開業し、今では九大新町は学生寮やマンションが立ち並ぶまちへとなった。

しかしまちに住む人が増加した割には新しく出来た施設は主には書店であり、まだまだ生活利便性に欠けるため魅力のあるまちとは言えないのが現状である。またマンションなどの高層建築が立ち並んでいるため山などの自然も感じにくくなっている。

Co-Lab Street

planning town full of people, greenery, knowledge

Student Number　K20318
Name　　HAMADA Teppei
Supervisor　　MIYAUCHI Tomohisa

3. 敷地選定

計画敷地は、福岡県福岡市西区九大新町の大通り沿い総距離 600m 程度とする。前述したように九大新町のある元岡地区は九州大学のキャンパス統合移転計画に伴う開発により緑地が減少しており、さらにマンション等が立ち並ぶことによって山や田んぼといった景観も損なわれている。

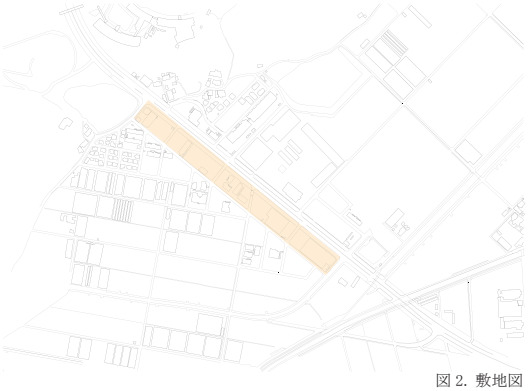


図 2. 敷地図



図 3. 元岡地区の緑地減少変遷図

4. 計画の目的

大量のマンションにより損なわれた景観を取り戻し、学生や近隣住民の生活利便性を向上させるため、本制作では元岡地区の自然を活かし、知の拠点にふさわしいまちづくりを目指す。さらに新町という名に値するような新しいまちを計画する。

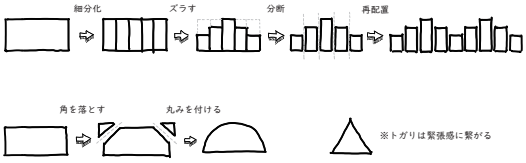
所在地：福岡県福岡市西区九大新町
主な用途：店舗、飲食店、植物園、ギャラリー
敷地面積：29,605.57 ㎡
建築面積：9,924.84 ㎡
延床面積：12,781.12 ㎡
キーワード：ウォーカブル・まちづくり・産学連携

Location ： Kyudai Shinmachi,Nishi-ku,Fukuoka-city,Fukuoka
Main Use ： Shop,Restaurant,Botanical garden,Gallery
Site Area ： 29,605.57 ㎡
Building Floor Area ： 9,924.84 ㎡
Total Floor Area ： 12,781.12 ㎡
Keywords ：Walkable,Town planning,Industry-academia collaboration

5. 計画概要

九大新町は比較的新しいまちではあるが、そのほとんどを学生寮やマンションが占めており、背後の山や周囲に広がるのどかな田園風景のよさを打ち消してしまっている。そこで、本制作では景観に配慮したまちづくりを軸に進めていく。

5-1. ダイアグラム



マンション等の高層建築はどうしても景色を遮る壁となってしまうことが多い。効率よく人を住まわせるために大量のマンションが次々と建てられている新町では、より周囲の風景がまちから切り離されてしまう。

そこで建物を直線的ではなくずらして配置し、高さもそれぞれ変えることで、それまで感じることのなかった建物背後の風景を感じられるように計画した。さらに建物の高さを変えることで、建物自体で山並みを表現した。また建物の断面形状を四角から半円状にすることで空に向かって視界が広がり、緊張感のないのびやかな空間となるよう計画した。空への広がりの点だけで見れば断面形状は三角形でもよさそうではあるが、三角形にしてしまうと、生じる角によってかえって緊張感を与えてしまうので不採用とした。

5-2. プラン

緑地・景観の改善や生活利便性の向上、産学連携による研究開発次世代拠点という特色を活かしたまちづくりを実現させるため、敷地を５つに分け、それぞれ植物園、店舗・ジム、ギャラリー、店舗・広場、ホームセンターを計画する。植物園は来訪者が植物を鑑賞したり植物について学んだりできるだけでなく、九州大学の植物に関する研究のために利用してもらう。店舗は雑貨や衣服などを想定し近隣住民や学生の利用を主に目指す。ジムは主に近隣住民が日常的に利用できるようにし、ウォーカブルなまちづくりをするうえで必然的に必要となる運動の要素を取り入れた施設とする。ホームセンターでは農具等の専門的な用具も取り扱っているので今まで通り農家の方も利用できるよう計画した。

敷地中間辺りの広場ではマルシェ等が行えるブースを設置し、交流等も促すことのできる広場とした。

5-3. イメージパース


外観パース 1


外観パース 2


内観パース

6. 参考文献・引用元

・矢木達也・Robert J.Gibbs,
Town Center 商業開発起点によるウォーカブルなまちづくり， TWO VIRSINS, 2021
・日本建築学会， 都市・建築デザインのための人間環境学，朝倉書店， 2022
・いと Lab+ ， https://itolabplus.com/outline/outline.html
・Google Earth

道でもなく庭でもなく建築でもない～信楽の新たな産業を目指して～

学籍番号　K20319
名　　前　林田 悠我
指導教員　根來 宏典

Not even a road・garden・architecture
Aiming for a new industry in Shigaraki

Student Number　K200319
Name　HAYASHIDA Yuuga
Supervisor　NEGORO Hironori

1. 背景と計画1-1　現状と問題

近年、機械技術の発展や都市部への人口集中により、地方の人口が減少傾向にある。そのため、地方の伝統産業の衰退や若者離れによる伝統の継承が危機にある。本計画は伝統や技術を残すだけでなく、地域の住人が建築を通して、地域全体が活性化されることを目的とする。

滋賀県甲賀市信楽町長野では750年前から続く『信楽焼』の歴史がある。信楽町の土は、焼くことで人間味あふれる、柔らかく暖かな色味を見せるの特徴的である。

信楽町の最盛期には、登り窯が多くあり、多くは建材や民藝品として生産されていた。かつて鉄道のお供であった、『汽車土瓶』は信楽焼が発祥であり、多種の工芸品を生み出し、一つのものに特化するのではなく、色々な形で継承してきている。

現在では、機械産業の影響により電気窯が流通し、登り窯の稼働の減少，プラスチック製品の登場によって陶芸品の需要が低下した。しかし、陶芸家の数は増加傾向にあり、アーティストとしての個々の作品が主流となっている。

最盛期には工房で働く職人、従業員やその家族が住む場所であり住民同士の繋がりや職人と住民の交流が盛んであった。しかし、個々の窯を持つようになり、職人と住民との交流が鈍化されてしまった。

そのため、産業としての信楽焼や再生させることで信楽町の活性化させ、職人と住民の距離を近づける。

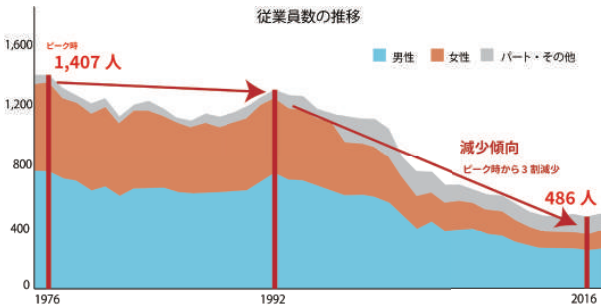


図１ 甲賀市陶芸従業員数の推移　（甲賀市商業関連データ集参照）

1-2 敷地選定

計画敷地は、滋賀県甲賀市信楽町長野である。信楽には様々な陶芸家が暮らしており、陶芸家たちの特徴に合わせてコミュニティがある。コミュニティは「ろくろ坂」「窯場坂」「ひいろ壺坂」と名づけられており総して、「窯場散策路」と名付けられている。図２

窯場散策路にはアトリエや工房が集まっており、窯場坂には経済産業省の近代化産業遺産に認定された「丸叉窯」が隣接されている。

信楽町長野には、多くの「登り窯」が残っている。しかし、そのどれもが現存維持に留まっておりほとんどが放置状態にある。窯場坂に面した土地では、壊れた登り窯図３を見ることができる。４層ほどの部分が崩れており、ビニールシートにて放置されてる。数十年前までは残っていた様だが、大雨によって崩れてしまっている。電気釜の普及や一品ものとしての陶器重要が求められたため、登り窯は修理されず現在の状態にいたっている。写真１

1-3　登り窯の修復

壊れた登り窯を修復することから計画を始める。産業体制を整えるにあたり登り窯による大量生産を行っていく。

工房を営む夫婦がこの土地を購入すると仮定し、年数を重ねるごとに登り窯を修復していく計画とする。従業員の増加に合わせて、生産数を上げながら登り窯のブロックを修復していくため、修復仮定を住民が見ることにより意識を改革し、工芸体験をしにきた観光客や小学生に対しての学習にも繋がっていく。

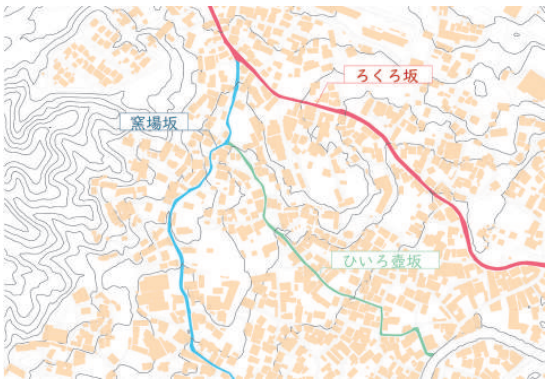


図２「信楽町長野　窯場散策路」



写真１「崩壊した登り登り窯の状態」

所在地：滋賀県甲賀市信楽町長野
主な用途：工房兼住宅
敷地面積：1,6400.00 ㎡
建築面積：774.00 ㎡
延床面積：734.00 ㎡
キーワード：住宅兼工房・木造住宅

Location ： Nagano Sigaraki Kouga Siga
Main Use ： Workshop and residence
Site Area ： 1,6400.00㎡
Building Floor Area ：774.00㎡
Total Floor Area ： 734.00㎡
Keywords ： House/workshop/wooden house

2. 計画の概要

2-1　コンセプト

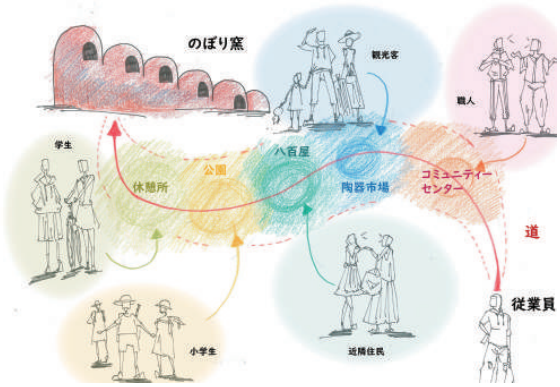
工房から従業員たちの住宅までの道のりは，道路沿いを歩くことでしかない。そこでは人々の交流も無く，ただ職場に向かうだけだ。そこで、工房から各従業員たちの住宅までの「道」としての建築を計画する。

道では、市場や広場、コミュニティーセンター、店舗などが組み込まれている。職人が通勤中に、お昼ごはんを買ったり、他の職人との交流をしたりすることを想定する。

陶芸を体験しに来た観光客や、小学生もこの道に集まり、道は様々な人々の交流の場となっていく。交流が増えるとこの道は連鎖反応により広がり、町全体に浸食を始めていく。

工房の従業員が増えると、また道は作られていく。工房を中心に無数の道を伸ばしいくことで町全体がこの建築を通して活性化していく。

図３ 道としての建築イメージ



2-2　信楽町の生活領域の現状

のぼり窯工房の設計を行うにあたり、工房周辺の調査を行った。工房を中心とした周辺を生活行為ごとに分類し生活領域を整理した。図４

工房周辺は、付き合い（体験所や工房）は多くある。しかし、その他の項目は当てはまっておらず、集まる場は設けられているが工房が稼働しているか分かりにくいことや、人通りの少なさによって活かされていない。

生活行為における、大半が 60 分圏に存在することが、住居者の少なさや、若者離れを加速させていると仮定する。

信楽町は甲賀市の中では、コミュニティーバスの利用が多い。一極集中方の施設による生活の充実性を上げるのではなく、バスの利用を考え、生活領域の分散を行っていく。

図４　信楽町の生活行為と領域

	登り窯工房	のぼり窯カフェ	信楽駅	小学校	貴生川駅
	徒歩 10 分圏	徒歩 20 分圏	徒歩 30 分圏	徒歩 60 分圏	公共機関 120 分圏
付き合い	●	●	●		●
買い物			•	●	●
娯楽・余暇	●		●	•	●
医療・理容		•	●	•	●
教育・教養			●	•	●

図5 信楽町長野の配置計画

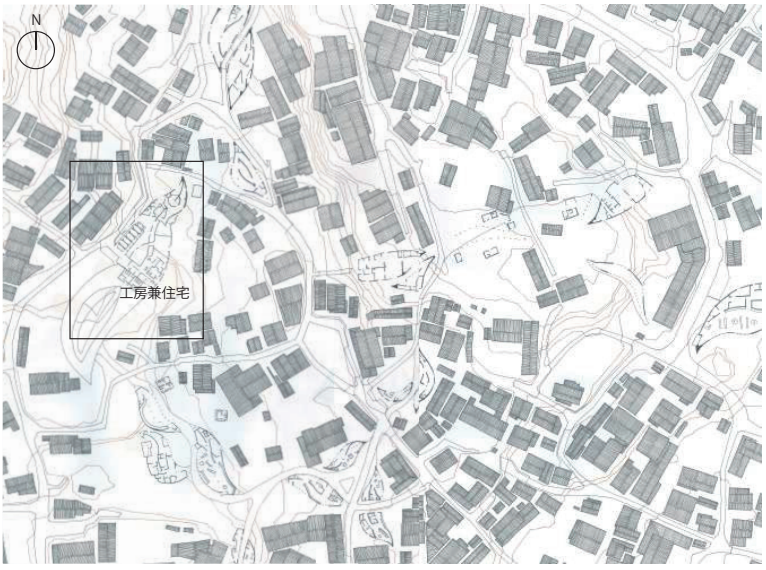


図6 工房兼住宅の断面計画

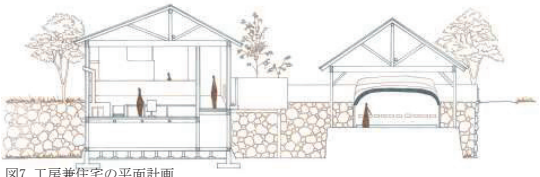
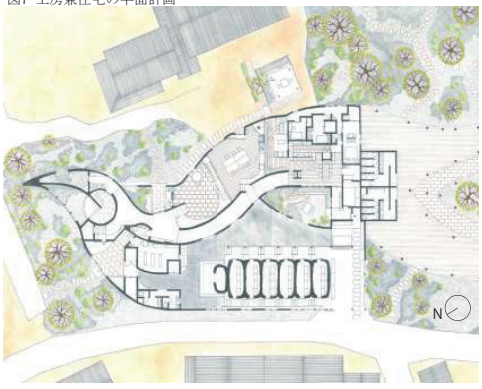


図7 工房兼住宅の平面計画



泡沫の泊地

学籍番号　k20320
名　　前　檜山立樹
指導教員　小梶吉隆

Title　foamy anchorage

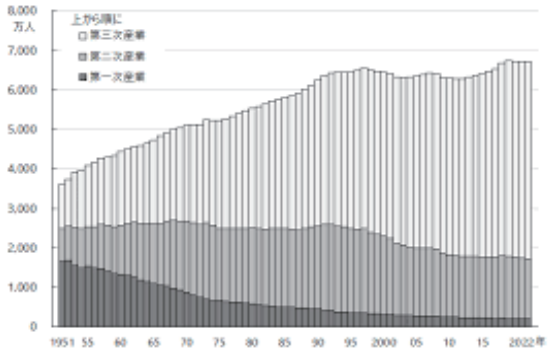
Student Number　K20320
Name　　Tatsuki Hiyama
Supervisor　　Yoshitaka Kokaji

1 背景

1-1　加速する自然との自然との乖離

私は海と山、田畑などの自然に溢れた町に生まれ、今まで約 20 年間生きてきた中で、自然が暮らしの風景からなくなっていってしまう寂しさを身をもって感じていた。

それは産業別就業者数の推移のグラフからも読み取ることができ、第三次産業が発展する一方で農業、漁業、林業を含む第一産業は衰退しており、自然とともに生きてきた暮らしが失われつつある。



1-2　琵琶湖の現状

「近畿の水がめ」と称され、約 1450 万人の水道資源であり、農業用水、工業用水などにも利用されている琵琶湖だが、内湖の干拓や護岸整備によって、かつて行われていた半農半漁や水辺での暮らしは失われつつあり、更にヨシ原の減少なども影響され、アオコの発生など水質汚染が進んでいる。京都でも大きな問題となっており、京都市の浄水場では臭みの除去のために投入される粉末活性炭を 4 年前から導入していて、年間 5 億円もの経費がかかっている。

環境汚染、生態系の変化が著しい琵琶湖ではあるが、琵琶湖と共生してきた人と自然に優しい持続可能な「琵琶湖システム」が 2022 年に世界農業遺産に登録され、「農、林、水」の三つの第一次産業の活性化を図ることで琵琶湖の復活を目指している。



2　目的

2-1　水辺での暮らしの再編

内湖の干拓や護岸道路の建設が行われる前は舟に乗って水田や真珠の養殖場、エリ漁、ヨシの刈り取りなどを行うために湖上に浮かぶ飛び地に向かい、水辺での活動は日常であり、農業と漁業などを兼業する「半農半漁」が行われるなど互いに協力し合うことで継承してきた。しかし、第一次産業の衰退や水と陸を遮る湖岸道路の整備などによって繋がりのあった産業は衰退し、小規模かつ別々となって西の湖を含む一部の地域でのみ水辺での暮らしが行われている。そこで難しくなった水辺での暮らしから離れるのではなく、問題と向き合い、繋がりが途切れてしまった水上での活動をもう一度繋ぐための拠点をつくり、学生や観光客ともに継承し、環境の復活を目指す。





2-2　環境変化への対応

人工物の中でも最大である建築は人々の暮らしだけでなく自然環境にも多大なる影響を及ぼすため水位変化や気候変動などに対応できる自然に配慮した建築計画を行う必要がある。海抜ゼロメートルの国とも言われているオランダでは解決策として可動性や可変性を持ち合わせているフレキシブルな水上建築が増えてきている。将来水上建築が増えていくことで崩れた生態系の復活や迫りくる気候変動時代を生き抜いていくためのモデル拠点となることを目指す。

3　敷地

3-1　対象敷地

琵琶湖の南東、滋賀県近江八幡市に位置する現存する 33 の内湖の中でも最大の面積を誇る西の湖湾奥部の廃港を対象敷地とする。最大の内湖である西の湖は琵琶湖と長命寺川で繋がっており、琵琶湖に流入する水量の調整や水質の浄化の他、在来魚の産卵等生育の場所、渡り鳥の中継地点としても重要な役割を担っている。ビワイチやよし笛などのサイクリングロードや安土城からも近いため学生や地域の人々の他、観光客の流入も見込める。



3－2　敷地の現状

琵琶湖のヨシ原の約 6 割を占めている西の湖のヨシ原だが、湾奥部にはヨシが生えておらず、台風によって沈没した舟が浮かぶ廃港がそのままの状態となっており、アオコの発生も著しい。近くに交流施設（西の湖ステーション）があるが利用する人は少なく、閑散としている。また西の湖周辺に数軒しか残っていないヨシ工房ではヨシ葺屋根の他に壁や簾、ペン、紙、ストロー等新しい需要を見出しているが後継者不足に悩んでいる。

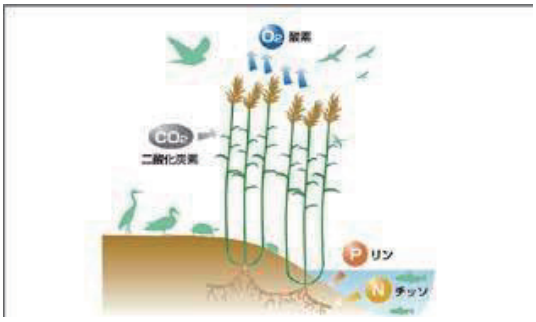
所在地：滋賀県近江八幡市安土町下豊浦
主な用途：広場、事務所、カフェ、ホテル
敷地面積：
建築面積：848㎡
延床面積：753㎡
キーワード：水上建築

Location ： shimotoira,azuchichou,oumihachimanshi,sigaken
Main Use ： square,office,cafe,hotel
Site Area ：
Building Floor Area ： 700㎡
Total Floor Area ： 700㎡
Keywords ： floating architecture

4　提案

4-1　ヨシの活用

内湖や湖岸など水深の浅い湿地に多く生えているヨシには水の流れを抑え汚れを沈める、付着した微生物によって汚れを分解する、窒素やリンを養分として吸い取るなど水質を浄化する機能が多く備わっている。ヨシは一年かけて成長し、刈り取らないといけないが、現在は需要の減少によって刈り取りが行われなかったり、焼かれたりしており、手入れが行き届いていない。高い防水性能や断熱性能を兼ね備え、デザイン性にも優れているヨシの建材としての魅力を建築を通してもう一度認知してもらいヨシ産業の復建を行うことで水質改善や湖魚、野鳥の生態系の保護につながる。



4-2　水×陸

琵琶湖を代表する舟として、日本海側から京都・大阪までをつなぐ重要な物資運搬の経路を行き来していた丸子舟の船首部分にはダテカスガイと呼ばれる模様があり、このダテカスガイによって板と板の継ぎ目からの漏水を防いでいた。この模様を平面計画に落とし込み、水上で漁業や農業、真珠の養殖やヨシの刈り取りを行う人と陸上で生活する近隣に住んでいる人や学生、サイクリング、観光客等の交流を促す。



4-3　水上建築

水面上昇や多様性に対する対応するため、鉄線でかごをつくり岩を入れる低コストで直ぐに作れる外構などに用いられるガビオン構造からヒントを得て作られた組み立て式モジュールは人の手で手軽に運べるため、組み立て、解体、移動が容易に行える。また、面積に応じて浮き材を調整できるので様々な規模の建築に対応できる。水上だけでなく水中環境にも配慮した物を採用し、壁や柱には湿気に強い琵琶湖の水源林で伐採されたびわこ材を用いる。





5　計画概要

5-1　主要施設

①ヨシ体験工房
　観光客や学生など外部の人のアイデアを生み出す。
②展示広場
　ヨシ灯り展だけでなくヨシ筆を使ったアートなどを展示。
③西の湖教室
　水辺で生きる職人と学生の交流を促し、継承していく。
④西の湖事務所
　西の湖で行われている様々な活動の拠点とし、協力を強める。
⑤ BBQ 広場
　学生の野外学習や観光客のグランピングとして利用。
⑦コテージ（n 戸）
　可変性、可動性を持たせ、人数によって合体、分解できる。
⑧カフェ
　護岸に沿うように配置することでどの施設からもアクセス可能。

5-2　平面計画

湾岸に残された護岸をそれぞれの施設をつなぐ道として計画し、陸側にはヨシを植えていき一年かけて変化する内湖を縮景する。道に沿って船着き場と施設を連続させることでより水上での活動を活性化させる。敷地の中心に位置するカフェでは学生や職人、観光客が交流できる。
　今後ダテカスガイの模様を基に平面を再計画し、広場や道のランドスケープのデザイン性の向上を行う。

5-3　断面計画

西から東に向かって吹く風の流れを利用した心地良い空間をつくるために勾配屋根の角度を高さなどを計画していく。

5-4　設備計画

電気に関しては太陽光を考えているが、水道などライフラインについても整備する必要がある。

6　事例調査

エネルギーを自給自足するサスティナブルなオフィスビル
川の水を利用した熱交換システムと大屋根の太陽光発電によって自給自足を実現。木造となっており、解体再利用できるため循環型経済にも適応している。



参考文献
1)https://www.jil.go.jp/kokunai/statistics/timeseries/html/g0204.html
2)https://www.pref.shiga.lg.jp/kensei/koho/e-shinbun/oshirase/332684.html
3)https://www.yoshi-tome.com/about

どうぶつのもり

学籍番号　K20321
名　　前　平尾彩香
指導教員　小梶吉隆

Animal Crossing

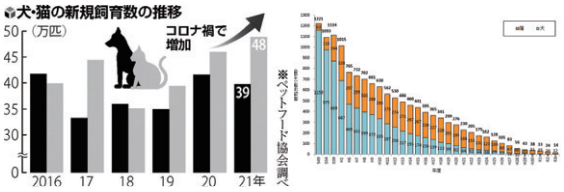
Student Number　K20321
Name　HIRAO.Ayaka
Supervisor　KOKAJI Yoshitaka

■背景

私は生まれたとき物心ついたときからそばに動物がいる生活でした。そして兄弟のいなかった私にとって、両親以外の家族であり、遊び相手であり特別な存在でした。先代の犬は、私が小学５年生の時に17歳で亡くなりました。亡くなる2.3カ月前から一気に体調を崩し、みるみると老いを感じるようになりました。動物は人間よりも人生ははるかに短いです。それにもかかわらず、人間の勝手な都合により、手放される犬や猫がたくさんいます。思っていたよりも大きくなった、吠える、言うことを聞かない、、、また、悪質なブリーダーによる多頭飼育崩壊や飼い主の高齢化により育てることが難しいということから簡単に施設に持ち寄られる動物がたくさんいます。先代の犬が亡くなったあと、私はどうしても新しい犬を受け入れたくて母親に相談したところ地元の保護施設に連れて行ってもらいました。暗くて冷たい檻にたくさんの犬が収容されており、最初は驚きましたが、何度も通い、新しい家族を受け入れました。この経験から、よりこういった施設や現状を知ってほしいために、今回本計画を提案します。

■現状の問題

ペットの殺処分は、年々減少している問題ではありますが、日本からも世界からも亡くなった問題ではありません。人々の中には癒しや寂しさから、安心感を求めペットを迎え入れる方が多くいます。2020年に起こった変化としてコロナが挙げられます。このパンデミックにより世の中に「ステイホーム」という言葉が広まりました。人々は今までにないほど自宅で過ごす人や仕事をリモートワークに切り替えた人が増えました。そのため、「ステイ―ホーム」と同時に「ペットブーム」が進みました。しかし、コロナが収まるにつれ、以前の生活に戻る人が増え始めました。物価の高騰や仕事の完全復活など自由が効かず育てることが難しくなったことがこの問題を進めていると考えます。



■世界における動物理解

【米国のペット市場】

ペットを飼っている世帯数は8960万世帯で全体の2/3に当たる約66%もいるペット王国です。また、空きがない等の理由により多くの健康な犬猫が殺処分されています。ペットの数が多すぎることや施設のスペースが限られることから最終手段としての殺処分が容認されているのです。ある保護団体の推計によれば、全米の動物保護施設に入居する年間600～800万頭の犬猫の約4割である約270万頭の健康な犬猫が殺処分されているといいます。

【イギリスのペット市場】

コロナ過のパンデミックのさなか、急激なペット需要の増加がみられました。2020年から2022年にかけて、犬は約900万頭から約44%の1300万頭、猫も750万頭から約60%増の1200万頭に急増しました。しかし、物価が高騰し、インフレ率が40年ぶりとなる高水準となり、餌代や医療費が払えなくなり飼育放棄する人が続出しました。イギリスの動物保護施設における捨て犬･猫等の受け入れ頭数は、犬が9～13万頭、猫が13～16万頭に達し、そのうちの約10%が殺処分されていると推定されます。大部分は、病気やケガ、所有者が見つからなかった野良犬なども含まれていますが、一部の犬猫は視察の空きがないという理由で健康であるにも関わらず殺処分されているといいます。

【ドイツのペット市場】

ドイツでは犬を保護する法律が多くあり、厳しく決められています。犬の飼い方から時間をかけて説明するなど飼い主として適性に判断されるまで迎え入れることはできません。ケージのサイズや散歩の時間、留守にしてよい時間やリードの長さといった細かいところまで法律で厳しく定められているため、安易な気持ちで飼うことができないようになっています。



ドイツでは上の写真に挙げた「ティアハイム」という施設があります。これは、各地の動物保護協会が運営する全国500ヶ所以上の施設であり、施設の犬猫を引き取るには飼育環境等の審査があり、安易な譲渡を防いでいます。ドイツ動物保護連盟は、「ティアハイム」の運営方針において、基本的に殺処分してはならないと定めています。ただし、治る見込みのない病気やけがなどの動物については、動物福祉の観点から殺処分が必須であるとしており行われる場合もあります。また、殺処分の判断は獣医師によってなされ、安楽死に限られています。

■「動物保護」について

日本には「動愛法」という法律があり、このように記されています。

「国民の間に動物を愛護する気風を招来し（中略）人と動物の共生する社会の現実を図ること」

所在地：滋賀県草津市矢橋町
主な用途：動物保護施設
敷地面積：約 68000㎡
建築面積：7342㎡
延床面積：8977㎡
キーワード：動物愛護

Location ： Yahashi, Kusatsu, Shiga
Main Use ： shelter
Site Area ： 約 68000㎡
Building Floor Area ： 7342㎡
Total Floor Area ： 8977㎡
Keywords ： animal protection

これに対してドイツは「動物保護法」という法律があります。「同じ構造物（生物）としての動物に対する責任に基づいて、動物の生命及び健康を保護すること」

殺処分に関しては「何人も合理的な理由なしに、動物に対して痛み、苦痛又は障害を与えてはならない」と記されており、この合理的な理由とは、病気等の苦しみからの解放、防疫・防衛の観点での安楽死とされています。

なぜ動物保護法という動物の権利や禁止事項などが厳格に規定された法制度があるのか、、、といいますと、19 世紀に一部の連邦国家で動物虐待について規定されました。その後、統一されたドイツ帝国の刑法では、「公然と又は不快感を感じさせるような仕方」で動物を虐待したものは、軽犯罪として罰金や交流の刑罰を受けることが定められました。つまり、動物保護ではなく、人間の感情を保護することが目的であって、あくまで人間中心的な部分があるのです。第二次世界大戦後、動物保護法は何度も改正されました。1972 年「この法律は、動物の生命及び健康に奉仕するもの」、1986 年・2006 年（現行版）動物を人間の同胞と表現し、動物の地位がより高められました。

また、ドイツには TVT（動物保護のための獣医師協会）という団体があります。ペットだけでなく家畜や野生動物、実験動物、動物園の在り方や取り扱い方といった、様々な観点をテーマとする１１のワーキンググループがあり、多くの報告書・ガイドラインを形成しています。そして、動物を擬人化するのではなく、学術的に基づいた観点から動物保護を提案しているのです。つまり、幸せの感じ方もストレスのかかり方も書く動物によって異なるので認識し、解剖学や生理学、行動学という様々な分野に音づくケアを認識することが求められます。この考えが「ティアハイム」に繋がっているのです。

■計画 1-1

捨てられ身寄りのない動物たちや、多頭飼育崩壊やペットショップで売れ残った犬・猫たちなどを対象とした施設を計画します。実際に現在日本各地にある動物保護施設では、毎日収容する動物たちは増え続けています。ですが、反対に譲渡する動物たちの数は簡単に増え続けているわけではありません。このことから、目的である「新たな環境を求める動物たちの助けとなる施設」から動物たちが残りの限られた時間の中で幸せに生きていくことができるように本計画を提案します。

①人のぬくもりを思い出す
捨てられたりなど人から一度突き放されることがあったとき、孤独感や恐怖などを覚えてしまう動物たちも少なくはありません。新たな飼い主と次の道へと進むためにも、人と触れ合うことになれる訓練をする必要があります。

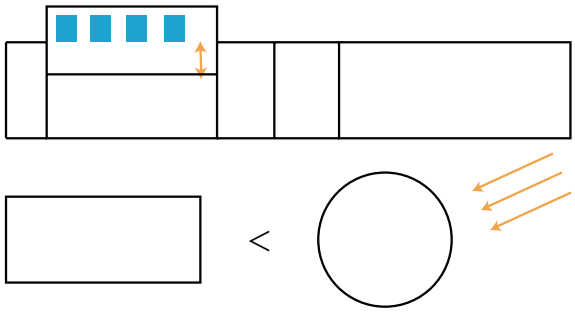
②新たな道へ進むための手伝いをする
①より新たな飼い主のもとに進むための心理的なケアに対応できるようにしたいと考えています。また、ほかの道として盲導犬や警察犬といった社会の役に立てる方向も考えて、訓練施設を設けます。

③知恵を差し出す
動物愛護について知らない人はたくさんいます。より多くの人に知ってもらうために、施設一丸となって現在の状況を発信し、これからどうしていくべきなのかなど訪れた人とともに考えていく必要があります。

■計画 1-2

従来であれば、檻に必要なものだけを用意してもらい、来る人が一周回って見ていくだけ触れ合ってもらうことができないところが多くあります。私自身も実際に、今飼っている犬を引き取った所はそういった施設でした。これでは、動物たちにとっても私たち人間にとっても、お互い安心して受け入れることができないと考えます。そのために、動物たちにもう一度人と関わる気持ちを持ってもらうために、人間は動物の事を人間と同様に向き合い、関わる努力をしなければなりません。このことより、私は「新たな環境を求める動物たちの助けとなる施設」で動物たちの明るい未来に繋げたいです。

■ダイアグラム



より多くの人に知ってもうために、従来ある動物保護施設とは違う印象を持ってもらえるようにしました。ケージの中にいる犬・猫たちを見て回るのではなく実際に触れてあげながらお互いコミュニケーションを取れるようにしました。人のぬくもりを知らない動物たちにとって、新たな道に進む初めの一歩となります。そのため円を使って柔らかい表現を出しつつ、レベル差を使い分けながら、自然を取り入れることを大切にしました。

■参考文献

環境省＿統計資料「動物の愛護と適切な管理」
ドイツと動物のやさしい関係（動物と幸せに暮らすヒントを探る） 2020 年 11 月 20 日
anicom you　アニコムどうぶつコミュニティー
2019 年 8 月 6 日
スマートジャパン
「人工の島にメガソーラー完成、琵琶湖から 2600 世帯分の電力」 2015 年 11 月 5 日
国立国会図書館「諸外国における犬猫殺処分をめぐる状況―イギリス、ドイツ、アメリカ― 」

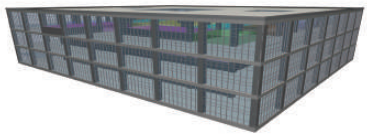
湖の子夢の図書館

学籍番号　K20322
名　　前　平田陸人
指導教員　小梶吉隆教授

Student Number　K20322
Name　RIKUTO　HIRATA
Supervisor　YOSHITAKA KOKAJI

目次

１計画の動機と目的
２計画敷地とその場所を選んだ背景
３滋賀県湖南市について
４計画について
５システム計画
６図書館としての機能
７学生のメリット
８企業のメリット
９職業に分けて図書を分類する



全体パース

１計画の動機と目的

このテーマで設計に取り組もうと考えた動機は３つある。まず中学生の頃の自分の周囲を含めた自身の将来の夢について考える環境が無かったことにある。次に地域の図書館は学生が勉強することが禁止されていること。最後に滋賀県が学力テストの結果が思わしくないことにある。
将来の夢というのは自身に何か強く影響を与えた者になりたいという目標を持つことで得られることがある。体験や経験を得ることは、将来の目標を見つけるうえで大きなカギを握る。昔はあった図書館での無料自習も現在は、騒音や、本来の目的に沿わないと判断され、自習を禁止されている図書館もある。自転車で行ける距離の無料の自習スペース。そしてそこでふと読んだ本から得る興味という相乗効果のポテンシャルが活かされていない。
学力テストの結果は得意不得意とは別の勉強の強制や、理由の分からない勉強といった受動的な学習にも影響されていると考える。

２計画敷地とその場所を選んだ背景

計画敷地は滋賀県湖南市にある石部駅の裏側。現状は工場が立ち並ぶ工業地域である。駅前は住宅街側に向いており開けたロータリーではない。その一方で裏側は工場を挟んで野洲川に沿うように国道と県道がある車の交通量が多い場所である　現在 JR 石部駅は駅の改修を行っており、それに合わせて工場側の駅前に広場を計画している。広場を計画し用途地域が変更されるのは現状工場に面した県道そしてその先にある国道に面した駅前の都市計画の見直しを長期的に行っていくのではないかと想像ができる。
学生をメインとした多くの市民に何度も利用してもらうため通勤通学時にイヤでも目に入る駅と県道に挟まれた位置に計画することとした。



敷地近くから見た　JR 石部駅



滋賀県の学力テストの記事



敷地南東から見た敷地



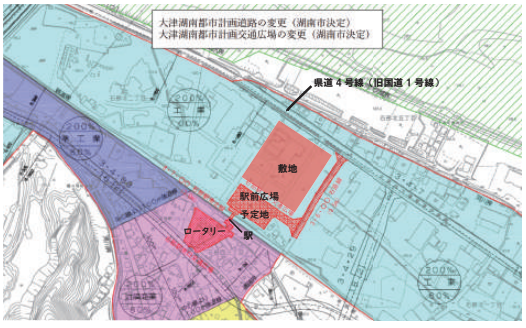
敷地北側道路から見た敷地

３ 滋賀県湖南市について

滋賀県湖南市は琵琶湖につながる一級河川である野洲川に沿うように街があり山々に南北を挟まれている。
この滋賀県湖南市が抱える問題として学習意欲の低下と都市計画の問題を挙げる。まず滋賀県は８年連続で全国学力テストの全教科で平均点を下回っている。これはほおっておけない課題であると考え、どのようにして学習意欲を高めるかということ。その手段として職業に触れることができる図書館を計画する。次に敷地に隣接する石部駅の周辺が工業地域であり工場やスクラップに溢れる都市計画の改善の一歩となるような計画を行う。

４計画について

三階建ての図書館をボックスインボックス型のアトリウム建築を参考に計画する。図書館とは原則本棚で空間を分けるように間仕切りを減らして広々と構成し、落ち着きをもたらすために天井高を下げることが、一般的であるが、地域にあるもう一つの図書館との差別化と、本と職業の関係の可能性をを広げるため、従来の図書館とは違った屋内で屋外で読書をしているような計画を目指す。職業に触れる場所として職業を１２に分類し、その職種ごとに調べることのできる図書スペースや学生や社会人が勉強やワークができる学習スペース、そして講演や、気軽な話し合いとちょっとした体験ができるトークスペースを　職業ごとに分けて隣接させる計画とした。



主な計画スペース

図書スペース　小説や雑誌、参考書に限らず関係するもので１ブースに集める

トークスペース　講演や指導、簡単な体験などを行う多目的スペース

ワークスペース　自習スペースとコワーキングスペースを合わせたスペース

所在地：〒520-3113 滋賀県湖南市石部北２丁目１−１
主な用途：図書館
敷地面積：約 23400㎡
建築面積：5600㎡
延床面積：15400㎡
キーワード：図書館　職業　夢

Location ： 2-1-1 Ishibekita, Konan City, Shiga Prefecture 520-3113
Main Use ： libraryLibrary Occupation Dream
Site Area ： about 23400㎡
Building Floor Area ： 5600㎡
Total Floor Area ： 15400㎡
Keywords ：Library Profession Dream

５システム部分の計画

竣工後も長く都市計画の一助を担える場所としてなんども利用してもらえるように実際に社会で働く人や地域の人に講演をしてもらうことで企業と街の繋がりを持つことで人と街になじみ深い計画となるようにする。
学力テストの結果が動機であるように学生には特に力を入れて利用してもらいたいと考えているため、駅と道路と隣接しているという敷地条件とに加えて中長時間利用できる居心地のいいアトリウム建築を参考にし、屋内に居ながら自然光や緑を感じられる計画で進めている。

６図書館としての機能

湖南市にある二つの図書館が機能が被っていること人口減少の影響から石部図書館は 2024 年の３月に閉館することが決定しており、図書館に通うことが手間な学生ともう一つの図書館との差別化を目的とした従来の図書館とは違う図書館が求められる。

７学生のメリット

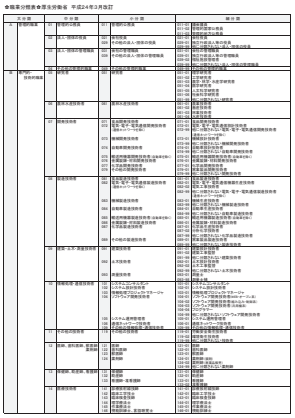
10 代で就職や社会の仕組みを知ることができ、自分がどのように社会の一員として働くかの未来のイメージができる。
学習環境が手に入り、将来について考えるキッカケとなる。知り、興味を持つことは何も知らない時と比較しても学習意欲との差がでる

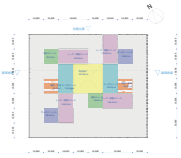
８企業側のメリット

企業が求める人材を地域全体で育むことができる。
これから減っていく学生に会社と業界に興味を持ってもらうことができる
インターンも含め紹介など企業側の求める人材や会社についてしっかりと知ってもらうことができる。

９職業の分類 12 個

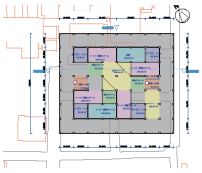
１経済（会計士など）　２法律（弁護士など）　３農林水産　４サービス（美容師　調理人など）　５発明　開発　６工科学　７IT（システムエンジニアなど ８建築　９芸術（作家､漫画家､デザイナーなど　１０医者　療法士など　１１教育　１２安全（自衛隊や警察など）

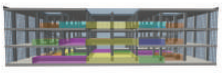

職業分類表一部抜粋


３階平面図


２階平面図


屋根伏図兼配置図


１階平面図


断面パース



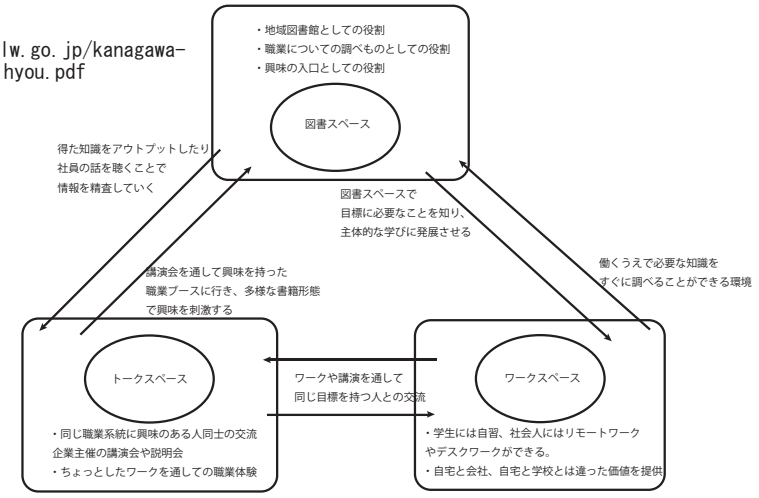

断面図・立面図

参考文献

職業分類表　厚生労働省 https://jsite.mhlw.go.jp/kanagawa-roudoukyoku/var/rev0/0112/9664/06bunruihyou.pdf

図書館の建築計画
https://www.lics-saas.nexs-service.jp/city-fukuchiyama/use/images/kihon_05.pdf

湖南市道路計画
https://www.city.shiga-konan.lg.jp/material/files/group/21/reiwakonannsidouroseibikeikaku.pdf



PLANT ～緑のチカラ～

学籍番号　K20323
名　　前　平生寛太
指導教員　白鳥洋子

PLANT ~power of nature~

Student Number　K20323
Name　　Hirabae Kanto
Supervisor　　Siratori Yoko

①　研究について

1. はじめに

かつて活気にあふれた、建物やテーマパーク。
そんな場所も時間の経過とともに、利用されることも次第に減り、忘れ去られ、そして朽ち果て自然にのみ込まれていく。かつて、自然環境を破壊し、建てられたはずのものが再度、植物たちによって浸食されていく様子を見たことがあるだろうか。その様子は、儚く、人間の愚かさすら感じる。しかしその愚挙すらも受け入れ、のみ込んでしまう自然の偉大さと力強さには「美」を感じてしまう。そう、美しいのだ。
私は廃墟を浸食する植物の姿に魅せられてしまった。

2. 研究背景

本来、建築とは、自然由来の材質を用いたり、その土地の気候や文化、宗教など自然との向き合い方の最適解として生まれたものだと考える。しかし今日、人々は自然と乖離した生活を送っているのではないか。自然を捨て、利便性を追求した人々は、大量消費大量生産の日々を送っている。
そこで今一度、自然と人間について見つめ直す。

3. 廃墟の魅力

3.1 不思議な雰囲気

廃墟は、長期間使われず荒廃した場所であり、その不思議な雰囲気が人々を引き寄せます。遺された建物や遺物が当時、何があったのかを想像させ、訪れた者に物語を語りかけるような感覚を生み出す。

3.2 荒廃と再生

廃墟は人の手が介入することなく、自然に侵食され、荒れ果た場所である。しかし、緑が育まれる植物の群生の場でもある。非日常的な場所での探索は興奮とスリルを。そして神秘をも感じることができる。

3.3 朽ちゆく記録

廃墟は停滞した場所であると同時に朽ちゆく場所でもある。そこには歴史的な価値があり、過去の時代や文化についての貴重な情報を提供し、失われた技術や建築様式を見せてくれる。

3.4 静寂とリラックス

廃墟は都市の喧騒や日常のしがらみから離れる場所として、静寂とリラックスを提供してくれる。大自然に囲まれたり、都会の喧騒から遮断された廃墟の場所で、心身共にリラックスすることができる。

4. 廃墟の事例



事例１
「軍艦島（端島）」

長崎県に位置する、その名の通り軍艦に似ていることから軍艦島と呼ばれることになった端島。透き通る海に一際、存在感を放ちながら浮かぶ姿は思わず息を呑んでしまう。風化し、剥き出しになったコンクリートからは、炭鉱労働の不安の感情が伝わってくる。



事例２　「ジャングルジム」

何も建物だけが廃墟ではない。校庭にある遊具達にも当てはまる。鄙びた光景にも関わらず、喪失感と虚無感を感じさせる。



事例３　「木々は、」

この写真はホテル、もしくは住宅のバルコニーの様子である。すっかり荒れ果てた木々は手入れされることを待ち続けているようにも見える。

②　自然と建築の関係

建築と自然環境の関係性は世界各地の家の特徴から見ることができる。移動式の住居として有名なモンゴルの「ゲル」は羊や山羊などと生活を共にする遊牧民の住居で、定住地の草原の草を家畜が根こそぎ食べてしまうのを防ぐのと同時に、寒暖差の少ない、快適な地で過ごすためでもある。エジプトなどの乾燥地帯では、藁や動物の糞を混ぜてつくられた日干しレンガを使用した住宅や倉庫が見られる。この日干しレンガの構造物の壁は厚く、夜間は熱を発散させ、夏場には家を涼しく保つ効果を持つ。その他にも、タイなどの熱帯周辺の湿潤な地域や多雨地域では、通風を良好にし、冠水を防ぐための高床式住居、ブラジルのアマゾン川流域では増水期での水没を防ぐための水上住宅、日本では豪雪や水はけを良好にするための白川郷の合掌造りなど家はその国の気候や生活習慣によって様々な形をしており、「建築」とは「自然」に対する人々が出した答えなのである。

所在地：ユジノサハリンスク市ポロナイスク 694240
主な用途：植物園
敷地面積：≈ 199,735㎡
建築面積：≈ 2,348㎡
延床面積：≈ 5,000㎡
キーワード：廃墟・植物と人間・植物園・アップサイクル

Location ： Khabarovskaya Ulitsa, 4, Poronaysk, Sakhalin Oblast, 694240
Main Use ： plant
Site Area ： ≈ 199,735㎡
Building Floor Area ： ≈ 2,348㎡
Total Floor Area ： ≈ 5,000㎡
Keywords ： ruins・plants and humans・upcycle

③　大量生産・大量消費社会

日本は戦後の復興後、1950 年代中頃から 1970 年代初めにかけて高度経済成長期を迎えることとなる。生産技術の革新と技術向上により、大量生産・大量消費の時代に突入する。市場にはプラスチックなどの合成樹脂製品や合成繊維製の衣類などが並び、インスタント食品や家電製品などが続々と発売されていった。高度経済成長により、生活に余裕が生まれ、消費者の選択肢が広がったことから、本格的に大量生産・大量消費時代が到来する。明治初期のの日本にとって、近代産業の育成は当時､重要であり､｢殖産興業｣のスローガンのもと、西欧の先進技術導入のため、製鉄所、紙幣局、製糸工場をはじめとする、官営模範工場の設立や専門技術等をもった外国人の雇用などを積極的に進めました。製糸業では、明治 16 年に創業した大阪紡績会社を筆頭に輸入機械を投入した大工場が次々の建設されていくこととなる。

④　研究目的

殖産興業というスローガンのもと、工業化を進め、大量生産・大量消費のために建てられた工場、しかしその工場が稼働する日はこない。捨てられたのである。このかつて工場だったものを緑のチカラを借りて再度蘇らせる。

⑤　敷地

5.1 敷地概要

ロシア連邦ユジノサハリンスク市ポロナイスクに位置する旧敷香王子製紙工場の跡地を敷地の対象とする。
工場の敷地面積は約 199,735 ㎡。
この内の下図で示す◆の部分をアップサイクルの対象とする。



図 4 対象敷地

5.2 樺太の歴史

北海道の最北端、宗谷岬の北 43 キロに位置する島、樺太・サハリン。江戸時代、幕府直轄領として蝦夷地と呼ばれていたこの島は、1855 年（安政元年）にロシアと交わした日露和親条約の時点では日露両国民混在の土地とされていた。しかし、1875 年の千島樺太交換条約で、明治政府が樺太を放棄したため、いったんは全島がロシア領となる。その後、日露戦争で戦勝国となった日本が、1905 年のポーツマス条約により北緯 50 度以南を再び領有することになり、以後、第二次世界大戦敗戦までの約 40 年間､日本による樺太各地の開拓が進められた｡その後、現在に至るまでロシアが事実上の統治国となっている。

5.3 王子製紙の概要

王子製紙工場はかつて樺太に 9 箇所存在していたが、廃墟が確認されたのは 7 箇所。日本の製紙産業の黎明期にあたる、明治初期の 1873 年（明治 6 年）に設立。社名の由来である東京の王子で創業し、国内（内地）各地のみならず朝鮮や樺太へと進出、富士製紙・樺太工業などとの合併を繰り返して国内市場 8 割以上を握る巨大製紙会社へと発展していった。その規模から「大王子製紙」と称された。

5.4 旧敷香王子製紙工場廃墟

今回の計画地である旧敷香王子製紙工場廃墟の内観、外観それぞれの様子である｡荒れ果てた姿の中にも力強さ｡そして、落ちてくる光による神秘性。退廃的な美を感じる。



旧敷香王子製紙工場跡の内外観

⑥　提案

廃工場を緑のチカラを借りて昇華させ、アップサイクルを試みる。工業化のために建てられ、自然環境を破壊し、そして不要となり捨てられてしまった工場を、植物を用いて別の形で蘇らせることにより、人間（工場）と自然（植物）の対比が生まれる。これにより、互いの関係を理解し、建築の根本を想起させることができるのではないか。

⑧　終わりに

今回のこの提案は、環境問題に対する解決法や社会問題についてのものでもない。あくまで全てを「見直す」場所なのである。生きるとは、幸せとは、人間とは、自然とは何かを探求し、自らの答えを見つけてほしい。

参考文献

1）消費と資源についての動き
https://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer_ research/white_paper/2020/white_paper_127.html
2）明治の産業
https://www.archives.go.jp/exhibition/digital/modean_ state/contents/meiji-industry/index.html
3）製紙会社平面図 https://papermuseum.jp/ja/shoshigaisya150-collection-05/
4）王子製紙（株）王子工場平面図 https://papermuseum.jp/ja/shoshigaisya150-collection-06/
5）大平裕の北辺紀行 https://hiroshinotabi.blog.jp/archives/11517587.html
6）中田薫（2023）「廃界本」
7）MdN 編集部（2019）「世界で美しい廃墟」
8）かさこ 「サハリン工場廃墟写真集」

鷹峯　瑞芳寺方丈の研究

学籍番号　K20324
名　　前　福留慶晃
指導教員　井上年和

京都鷹峯　瑞芳寺　日蓮宗
方丈　変遷　寺院

1　はじめに

1-1 研究概要・目的

瑞芳寺方丈は京都府京都市北区鷹峯町に位置する。幕末に建てられ寺院兼住居として残っているが、現代では無住の寺院として残っている。瑞芳寺方丈は日蓮宗の建物であり、敷地には開山した日達上人のお墓がある。瑞芳寺方丈は令和五年に改修が行われ、三度の改修が行われている。

そして本研究では、瑞芳寺方丈の変遷を明らかにし、過去の改修の姿と当初の姿を復原する。

1-2 研究方法

瑞芳寺方丈は令和５年１月から改修工事が行われ、令和５年４月まで行われていた。令和５年３月に実測調査と痕跡調査を行い、瑞芳寺方丈は三度の改修が行われていたことが分かった。

瑞芳寺方丈の建物は鷹峯という歴史ある土地に建てられており文献調査を行った。

2　建物概要



写真１　瑞芳寺方丈　外観

瑞芳寺方丈は京都府北部にある鷹峯町に位置し、江戸時代に本阿弥光悦により芸術村として発展した土地であり、現在の瑞芳寺は本阿弥光悦の土地に建てられたと推測されている。

瑞芳寺方丈は元禄に一度火災にあい、正徳五年に（1711年）に日達上人により再興し新たに瑞芳寺を開山し現在の瑞芳寺がある。

瑞芳寺方丈は棟札から文久元年に建てられ、四間取りの寺院である。近代頃に１回目の改修が行われ前室が増築され玄関の位置が前に突き出した。昭和中期頃に２回目の改修が行われ、寺院としてではなく居住メインの改修・増築が行われ外壁にはトタン板が張られており寺院としての姿を失いかけていた。令和５年に３回目の改修があり二期の姿に近い改修が行われトタン板など取り払い寺院らしい姿を取り戻した。

敷地には、日達上人のお墓があり、須弥壇には日蓮上人や日妙上人、日達上人の仏像が祀られている。建物の裏側には30基の墓石がある。門付近には寺号碑があり、瑞芳寺方丈は明治12年（1879年）に知足庵と合併されたとされている。

表１　瑞芳寺方丈の改修内容

時期	主な改修内容
文久元年（1816）	・了義院日達上人により瑞芳寺が開山
近代頃	・一回目は玄関の位置が前に突き出し、室中と玄関の間に前室が設けられた。
昭和中期頃	・二回目は建物の劣化により外壁補強としトタン板が疎らに張られ、用途不明の増築が二か所ほどされており居住するために改修された。
令和５年（2023）	・三回目は近代頃の姿に近しい改修が行われ、トタン板や増築部分を撤去し寺院の姿を取り戻した。

3　鷹峯

鷹峯は京都府の京都市北部に位置し、江戸時代初期に芸術家の本阿弥光悦が鷹峯で芸術活動を行い芸術村として発展させ江戸時代には「光悦村」と呼ばれていた。

この土地は豊臣秀吉が洛中内への外敵侵入を防ぐために御土居がつくられ鷹峯は洛外となり、盗賊などが出没し治安の悪い場所であった。そして徳川家康は鷹峯が丹波に通ずる道であり治安解消のために、辺土希望をしていた本阿弥光悦に鷹峯町の土地を拝領し光悦は一族を連れて居を移した。本阿弥光悦は光悦屋敷を中心に街路に面して集落を形成し、芸術家や豪商などが移り住み、芸術・文化の拠点となった。

現在でも過去の歴史ある景観が残り、源光庵や光悦寺、常照寺などの有名な寺院などが残っている。

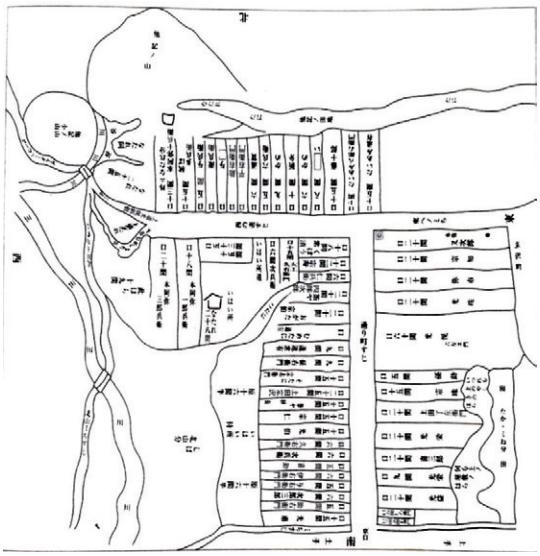


図１　光悦町古図（大正８年）

4　棟札

瑞芳寺方丈の小屋裏には当時の棟札が見つかった。棟札は黒くなっており普通では文字が書かれていることすら分からなかった。棟札を解析するために赤外線のカメラを通して棟札の文字を解明した。棟札全体には日蓮宗の曼荼羅が書かれており、愛染明王と不動明王は梵字で書かれていた。棟札上部には火災が起こらないための願い文『聖中天中天、我陵瀕迦、哀愍衆生者、我等今敬礼』の文字が書かれていた。下部には瑞芳寺方丈の住職の名前があり、瑞芳寺の方丈であったことが分かった。そして、本圀寺住職の日妙上人と頂妙寺住職の日道上人の名前が書かれていた。

瑞芳寺方丈の開山年、文久元年（1861年）の文字がありここで開山年が明らかになった。

棟札の裏面は大工の瀧川安兵工の名前と当時の建物の世話をしていた日享上人と松野新元郎の名前が書いてある。

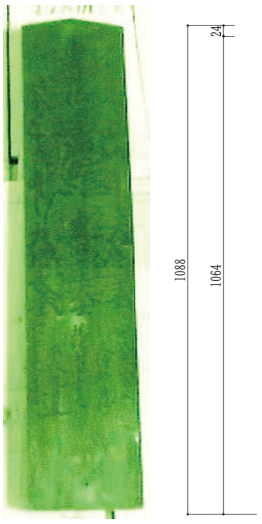


写真 2　棟札（赤外線）

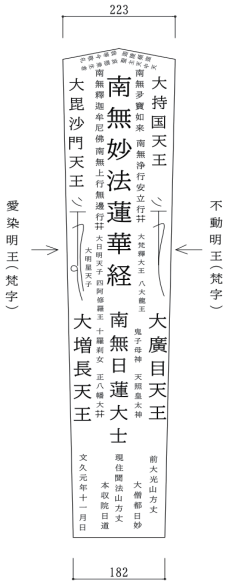


図 2　棟札

5　変遷図・敷地図

瑞芳寺は建物の左に玄関、前室、仏間と法要のための空間があり、右側は脇室や縁側、台所と法要後の座敷としての空間がある。

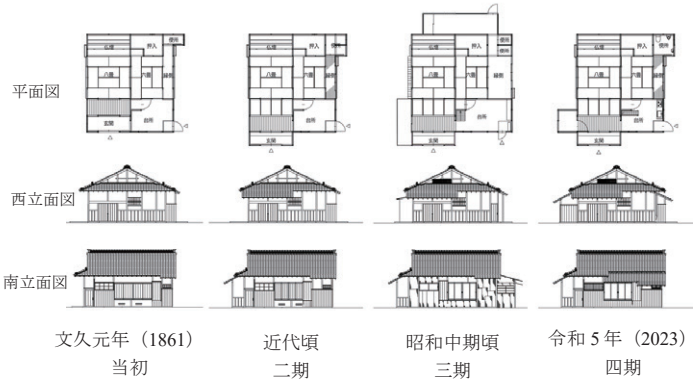
当初の姿は四角形で最小限の空間で法要などが行われていたことわかる。

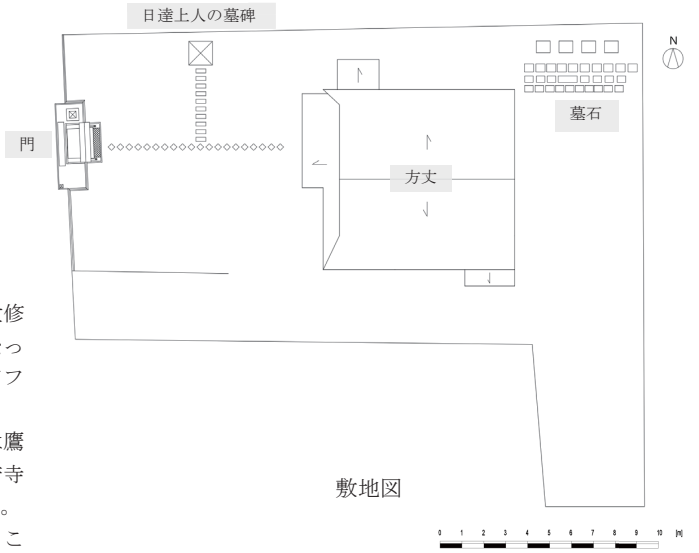
近代頃の 1 回目の改修は、寺院に参拝する人が増えたことから前室の増築により玄関の位置が変わり、便所の増築があったことが分かる。

昭和頃の 2 回目の改修は、寺院としての機能を果たしていたのかを疑う、酷い改修工事が行われ、トタン板で外壁の補強や建物の側面にモルタル壁で増築やトタン板の壁で増築された室があり、寺院としてではなく居住としての改修が行われていたことが分かった。

令和の 3 回目の改修は、昭和の姿の建物と変わり伝統工法を用いた改修が行われ、文化的価値が高められた。建物には、昇降機のスペースが造られ、障害のある方に優しい建築になった。

瑞芳寺の敷地は西面に府道があり門がある。方丈でありながら建物の向きは西向きである。門から建物へのアプローチの左手に「日達上人」の墓碑があり、建物の裏側には 30 基の墓石が並んでいる。





6　まとめ

瑞芳寺方丈は京都鷹峯の歴史ある場所に建てられ三度の改修が行われた。改修では一事は寺院として文化的価値がなくなったが、令和の改修により伝統工法で改修工事が行われバリアフリー機能を持ち現代的で優しい寺院になった。

瑞芳寺は鷹峯という歴史ある場所で建てられ、日達上人は鷹峯にゆかりのある場所で生涯はこの場所で終えるために瑞芳寺を再興し位牌所として瑞芳寺を残したのではないかと考える。

瑞芳寺は今回の改修で新たに寺院としてお姿を取り戻し、これから先、文化的な価値が損なわれないように建物を使い続けてほしい。

【参考資料】

「京都文化博物館　桃山の春・光悦展」

京都美術工芸大学 工芸学部 建築学科
井上年和ゼミ

Toshikazu Inoue Seminar, Department of Architecture, Faculy of Applied Art, Kyoto Art and Crafts University

協働住宅群

～京都東九条地域において新たな住空間の提案～

学籍番号　K20325
名　　前　福中青空
指導教員　安田光男

Cooperative housing group

~Proposing a new living space in the Higashikujo area~

Student Number　K20325
Name　FUKUNAKA Sora
Supervisor　YASUDA Teruo

1. はじめに

人々が生活をするうえで大切な住空間は世代やライフステージ、家族構成によって理想の空間が異なるのは当然である。また職種の特性や､住まい手の性格によっても変わる。しかし、「快適性」、「居心地の良さ」を求めない人はいないのではないか。このような「理想の住空間」は生活の質を豊かにし、生きていくうえで重要な仕事の効率化や、モチベーションの向上につながると考える。そこで、主に自宅を勤務の拠点とする個人事業主や、新たに企業を挑戦する人々を対象とした職住融合の住宅群の計画を検討した。

2. 敷地周辺の特徴

1-1) 計画地周辺の地域資源（ポテンシャル）と課題

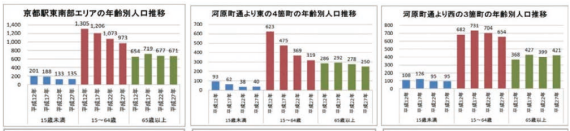
・地域資源（ポテンシャル）
→魅力的な水辺空間など創作活動にふさわしい環境
→住民主体のまちづくり
→京都駅周辺のまちづくりの取り組み
・課題
→「文化芸術」の復興による新たな人の流れの創出
→将来のまちづくりの担い手の確保
→幅広い多文化共生の促進





1-2) 年齢別人口推移と高齢化率

本計画エリアの年齢別人口推移は 15 歳から 64 歳までの人口減少が進んでいるのに対し、65 歳以上の人口は横ばいとなっている。今後は若者を中心とした移住・定住を促進し，将来のまちづくりの担い手を確保することが，本エリアの課題となっている。



数値はいずれも国勢調査

※高齢化率：総人口に占める 65 歳以上人口の割合

1-3) 京都駅東南部エリア活性化方針

上記の地域資源（ポテンシャル）及び課題から、京都市は市の取り組みとして**「京都駅東南部エリア活性化方針」**を政策した。本計画地の東九条地域をはじめとする京都駅東南部を方針の対象とし、本エリアで培われてきた地域力と芸術力を融合して近隣エリア化を連動させることで、文化芸術に関心のある若者が国内外から集い、学び、定住し、交流して、自らを高め合い、新しい価値を創造することを目的とする方針である。それは目指すべき将来像である、「京都の玄関口にふさわしい魅力的な機能が集束するまち」、「様々な人がお互いの多様性を認め合い、心豊かに住み続けられるまち」を達成するための方針である。

2. 計画目的

2-1) 職住融合の住宅群

「京都駅東南部エリア活性化方針」を基盤に対象地域の空き地で新たな住空間の提案を検討した。主に自宅を勤務の拠点とする個人事業主や、新たに企業に挑戦をする人々が地域活性化を目指すエリアに移住することで、お互いに触発しあえる環境、地域活性化への貢献をモチベーションに暮らすことができる「職住融合の住空間」を提案。
職種が類似する居住者同士は仕事仲間として、地域交流のイベント開催や、新プロジェクトなどを「協働」し、地域交流の活性化、各々の生活、仕事の質の向上を図る。

2-2) 住民の職種

・喫茶店経営者	4 人暮らし
・ファッションデザイナー	2 人暮らし
・プロカメラマン	単身
・酒造、酒屋	2 人暮らし
・料理教室経営者	2 人暮らし
・家具大工	2 ～ 3 人暮らし
・インテリアコーディネーター	4 人暮らし
・建築家	単身
・　〃	2 人暮らし
・　〃	4 人暮らし
・その他× 2	単身
	計 12 戸

2-3) 職種が創るコミュニティ

地域の発展、活性化を目指すうえで住民同士、また近隣住民や観光客との交流によるコミュニティは必要不可欠である。あらゆる職種が混在し､経営者がそこで住むことにより、まちづくりの発展を目指す。

・飲食店（喫茶店、酒屋、料理教室）
→地域住民の溜まり場、観光客の休憩場として機能。
→経営者、地域住民、観光客のあらゆるコミュニティの可能性が期待できる。

・技術、芸術系（建築、大工、インテリア、ファッション）
→技術者同士の「協働」、交流により新たな価値を発信。
→技術、芸術系を学ぶ学生（京都芸術大学、京都美術工芸大学）と交流し、まちづくりの担い手の確保。

3. 機能と効果

地域住民、観光客を招き入れた建物全体としての機能と、そこで住む人々が快適に暮らすための機能を充実させることは、その効果として地域活性化や、仕事、生活の質の向上へとつながる。

3-1) 建物としての機能と効果

・[街の立体化]
敷地内を街として考える
→道、広場の立体化（ベンチの設置等）➡住民同士のコミュニティの回復

・[機能の複合化]
暮らす人々（内部）、訪れる人々（外部）それぞれの消費率の向上を図る
→飲食（喫茶店、酒屋、料理教室）➡街の活性化

所在地：京都府京都市南区東九条河西町 24
主な用途：住宅
敷地面積：2560㎡
建築面積：1920㎡
延床面積：5230㎡
キーワード：住宅・協働・地域交流・コミュニティ

Location ： 24,Kawanishi-cho,Higasikujo,Minami-ku,Kyoto-city
Main Use ： House
Site Area ： 2560㎡
Building Floor Area ： 1920㎡
Total Floor Area ： 5230㎡
Keywords ： House, Coiiaboration,Regional exchange,Community

・[人と自然の共存]

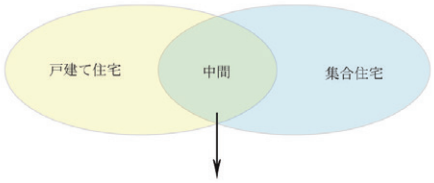
外構、共用部に積極的な緑化計画
→外壁を覆う緑のカーテン、屋上に樹木を栽培➡視覚的、感覚的なリラックス効果により生活、仕事の質の向上

3-2) 住宅としての機能と効果

・[戸建て住宅×集合住宅]

戸建て住宅が持つ長所と集合住宅が持つ長所をそれぞれ内部空間及び、外部空間に取り入れる。お互いが持つ長所は反対に片方に欠けている部分（短所）でもあるため、それぞれの短所を打ち消し合う効果も期待できる。

（戸建て住宅が持つ長所）
→プライベート空間を広く確保できる
→希望の住まいづくりができる
（集合住宅が持つ長所）
→防犯性に優れている
→共用空間を広く確保できる



共用空間を含め、住空間に戸建て住宅と集合住宅の中間的な役割を生み出すことにより新たな住宅群を形成。

・[眺望テラス]

鴨川沿い部分の 2.3 階に住民の共用空間として鴨川、東山などの自然を眺望、また住民同士の交流を目的とした眺望テラスを計画。全面の遊歩道には桜並木が立ち並んでいることから、四季の変化を十分に感じることができる。



4. パース写真





5. 断面計画

西側の高瀬川から東側の鴨川に向かって段々と高さが高くなるように計画。また西日対策、プライバシー対策の観念から積極的な緑化計画を施した。



6. 参考文献

・スクウォーター地区における住環境整備家庭と主体関係に関する研究―京都市南区松ノ木町を対象として―
韓勝旭　高田光雄　神吉紀世子　日本建築学会計画系論文集 2009 年 6 月

・戦前期京都の東九条地域における都市形成―大地主の土地運用と市街化過程との関係性の分析―
中村景月　田路貴浩　日本建築学会計画系論文集 2010 年 11 月

・京都駅東南部エリア活性化方針の制作にあたって
https://www.city.kyoto.lg.jp/sogo/cmsfiles/contents/0000217/217013/houshin.pdf

琵琶湖にまなぶ
－なぎさ公園における広場・教育施設の提案－

学籍番号　K20326
名　　前　福永 彩乃
指導教員　新海 俊一

Learning from Lake Biwa
-Planning for outdoor educational facilities in Nagisa Park-

Student Number　K20326
Name　Ayano FUKUNAGA
Supervisor　Shunichi SHINKAI

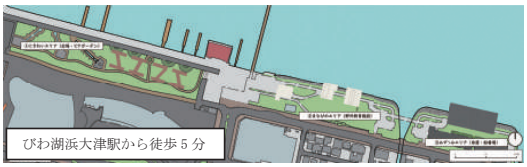
１．はじめに
滋賀県の数ある魅力の内、ひとつを挙げるとするなら「豊かな自然」である。“うみのこ学習”という滋賀県在住の小学生が琵琶湖を巡回する船に寝泊りして滋賀県の自然を学習する活動に対して“やまのこ学習”という森林体験学習もある。
このように、滋賀県民は学生時代から自然について学ぶ機会が設けられているが、大人になってその体験をするという人はそう多くはない。
また、学習施設を計画する際に、前者のような活動が既にあるためどのようなテーマをもって計画するか考え、私は大人になっても学ぶことができる機会の提供とレクリエーション活動や健康増進を推奨する野外教育施設を提案する。

２．計画敷地
滋賀県大津市島ノ関 13「なぎさ公園」（図１）
最寄り駅：びわ湖浜大津駅（敷地から徒歩５分）
計画敷地周辺は大津港ターミナル、琵琶湖ホテル、ラウンドワン浜大津など観光地としての一面がある。
選定理由として、琵琶湖は南側になるほど水質低下が著しくなる点や、人の行き来が多い点を踏まえ、今回の計画敷地で琵琶湖周辺の環境を改善する見込みがあると考えた。
また、多様な世代の快適な暮らしや大津駅から計画敷地の動線を生かした集客力の向上に努め、市民や来訪者が都心で憩い、楽しめる環境を創造していくことが大津市都市計画プランのひとつとして挙げられていた。
以下のことを踏まえて、今回の計画敷地は琵琶湖の自然と賑わいを育むことが可能な場所として適切だと考えた。

３．計画背景
3-1. 課題について
滋賀県が抱える課題として、琵琶湖周辺の環境改善がある。
課題の内容は主に琵琶湖水温の著しい変化やそれに伴う水草急増、琵琶湖に生息する外来種による在来種の存在などが挙げられた。
3-2. 敷地調査
午前はランニングや犬の散歩をする人、午後は子供連れの家族・学校帰りの学生などが見受けられた。
湖岸沿いの場所であり見通しの良い敷地でもある（図 2）
湖岸付近では溜まった水草が漂い、撮影当時では昨夜の影響で水溜りができていたため水はけは良好とは言えない状況であった。

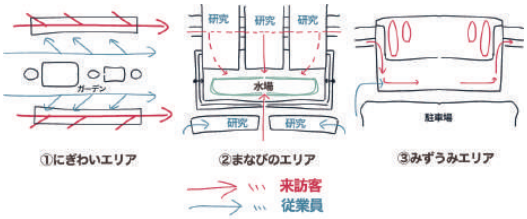
４．計画目的
琵琶湖周辺の環境改善、滋賀県の植生や琵琶湖のに関する学習と魅力の発信を目指す。
また、大津市の都市計画として市民等のレクリエーション活動や健康増進、琵琶湖岸の特性を生かしたにぎわい創りを挙げているため、水辺付近での交流を促す施設を設けることを計画として考えた。

５．計画要点
5-1. 敷地と施設の共通項について
今回の敷地は利用者の種類や用途、各部分の敷地が持つ特性を調査した際に３つに分類された。（図 5）そして動線は各エリアごとに来訪客と従業員（図 3）
また、敷地内で計画する際に以下のことを定めた。（図 4）
①分裂型の建物
選定敷地が利用者によって用途が異なり（ランニング、犬の散歩、ボール遊びなど）、それぞれの用途に沿った活動が一定の距離を置くことでお互いの活動を邪魔しないような空間を目指した。
②建物の上・周辺を歩ける歩道橋
元々敷地を利用していた人のための道を、施設を建てた際になくしてまうのを避けるために計画。また、広場なのでお互いの存在感を感じられるようにする意図もある。

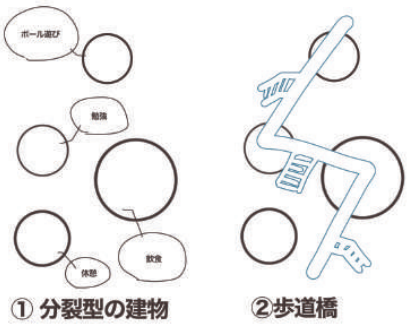


（図１）　敷地案内図


（図２）　計画敷地（北側から撮影）

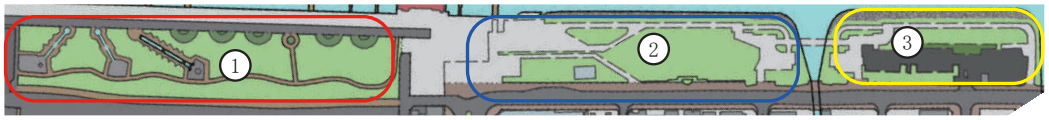


（図３）　動線



（図４）　施設の共通項


外観パース（北側）



（図５）
敷地の分類

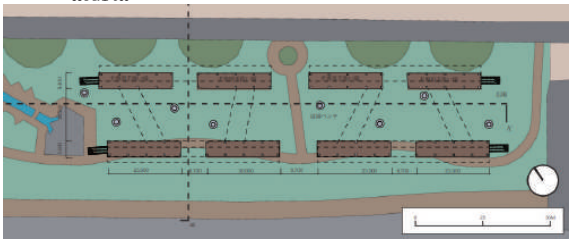
所在地：滋賀県大津市島ノ関 13
主な用途：広場、野外教育施設、船着場
形式（構造）：木造、鉄筋コンクリート造
敷地面積：26,400㎡
建築面積：7,500㎡
延床面積：12,300㎡
キーワード：環境、広場、学習施設、回廊、健康

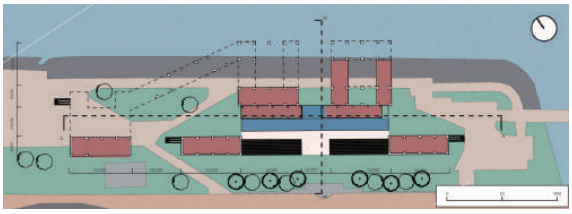
Location ： 13,Shimanoseki,Otsu-shi,Shiga
Main Use ： Square,Planning for outdoor educational facilities
Format(structure)：Wooden,RC
Site Area ：26,000 ㎡
Building Floor Area ：7,500 ㎡
Total Floor Area ： 12,300㎡
Keywords ： Environment,Square,Learning facilities,Corridor, Health

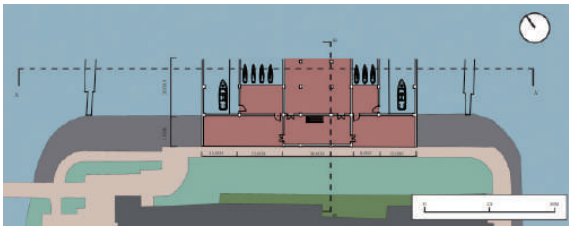
5-2. 施設内容
① にぎわいエリア（広場・ビアガーデン）
・犬の散歩やランニングをする人が見受けられた敷地周辺。普段歩き慣れた道に変化をもたらすような回路や犬専用の手洗い場（雨水を利用した水道付きタンクを散歩道近くに設置）、歩行者の興味を惹くような空間を目指した。（図 6）
・自然や季節の様子が伺える場所として、敷地全体の緑化に努め、半屋外空間を目指した。広場の様子を伺えるような座席配置にした。夏はハンモックやビーチベッドで木陰の心地よさを楽しみ、冬は掘りごたつ式の足湯席で寛ぐ。

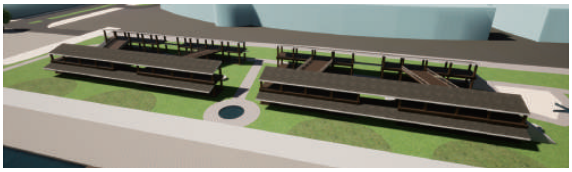
② まなびのエリア（野外教育施設）
・ヨシ工作のための、ヨシの苗育成水田…琵琶湖の在来種・ニゴロフナの産卵の場所であるヨシの植林地をつくる取り組みとして「ヨシの植栽」がある。その活動を支援すると同時に、このような活動があることを一般人にも認知してもらう為、ヨシの苗を育てる水田（小規模）を人の目が行き届き、日照を十分に得られる屋上に計画。また、育った苗は各地の湖岸に届けられる。（図 7）
・野外炊事場、バンガロー…バンガローは小規模施設（2 × 5 人規模）。野外炊事場は災害時にも利用できる。

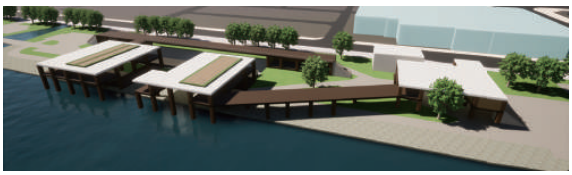
③みずうみエリア（舟屋、船着場）
・カヌーと屋形船（10 人規模）の為の船着場。（図 8）主に飲食としての利用が多い屋形船の更なる機能の拡大としてミーティングや琵琶湖の水質・植生の調査などを目的とした利用を考えている。カヌーは自然観察と観光をメインとし、沖から近い場所で利用されることを目的としている。（図 9）
・舟屋の二階建て部分は、小規模のジムを設け琵琶湖の景色を眺めながら運動ができる。


（図６）　①広場・ビアガーデン


（図７）　②野外教育施設


（図 8）　③舟屋、船着場


①広場・ビアガーデン


②野外教育施設


③舟屋、船着場

６．参考事例
・広場をつくるにおいて守る「ジッテの五原則」
1. 広場の中央を自由にしておくこと（アクティブのために）
2. 閉ざされた空間としての広場（領域性の優れた）
3. 広場の大きさと形（景観に対して適切な）
4. 古い広場の不規則な形
5. 広場群（広場が群で構成されている）
…引用：広場のデザイン 「にぎわい」の都市設計 5 原則
（著：小野寺康、出版社：彰国社）
・鹿島台町学童農園施設（宮城県志田郡鹿島台町）
・甲山ふれあいの里（広島県世羅郡甲山町）
…引用：[建築設計資料] 保養・研修・野外教育施設（編：建築思潮研究所、発：建築資料研究社）

７．参考文献
目で見る琵琶湖水域圏（編：龍谷大学　里山学研究センター）
琵琶湖の水草問題の現状と課題
（編：滋賀県琵琶湖環境科学研究センター）
琵琶湖の在来魚保全の現状と課題
（編：滋賀県琵琶湖環境科学研究センター）
滋賀の植物（編：滋賀植物同好会）
琵琶湖の科学　みずのこと・いきもののこと
（編：滋賀県琵琶湖環境科学研究センター）
雨の建築道（編：日本建築学会）
雨の建築術（編：日本建築学会）
広場のデザイン 「にぎわい」の都市設計 5 原則
（著：小野寺康、出版社：彰国社）
大津市都市計画マスタープラン 2017-2031 より引用
https://www.city.otsu.lg.jp/soshiki/035/1303/g/keikaku/1490267670875.html
滋賀の環境　2022（令和 4 年版環境白書）（編：滋賀県）
[建築設計資料] 保養・研修・野外教育施設
（編：建築思潮研究所、発：建築資料研究社）
[建築設計資料] 植物園・温室（編：建築思潮研究所、発：建築資料研究社）
BYQ 水環境レポート－琵琶湖・淀川の水環境の現状－　2021
（編：琵琶湖・淀川水質保全機構）
琵琶湖岸からのメッセージ　保全・再生のための視点
（編：西野麻知子・秋山道雄・中島拓男）

青の記憶～神秘の海に浮かぶ海洋博物館～

学籍番号　K20327
名　　前　藤井幸正
指導教員　白鳥洋子

Blue Memory

~A maritime museum floating on the mysterious sea ~

Student Number　K20327
Name　　Kosei Fujii
Supervisor　　Yoko Shiratori

1. はじめに

私たちが普段身近に目にする海はとても広大で、地球の表面の約７割を占めているが、その多くは謎に包まれており、たった15%ほどしか解明されていない。だが、その謎多き海に人々は集い、美しいと感じる。しかし、実際に海の中をのぞき、そこに生きる生物たちを目にする機会は少ない。

そこで、実際に自分の眼で海の中をのぞき、海の美しさを感じることのできる海洋博物館を計画したいと考えた。

2. 研究背景

2.1　背景と課題

壱岐島は離島ならではの自然が特徴的で、美しい海や緑に囲まれている。海水浴場やビーチが多く点在し、シュノーケリングやシーカヤック、島周辺の絶景を船で巡る遊覧など様々なマリンアクティビティが楽しめる。また、豊かな自然が生む食材も豊富で、魚やウニ、サザエなどの海の幸をはじめ、米や壱岐牛などの山の幸も豊富である。壱岐島の歴史は長く、古事記の国生み神話の中にも登場した。神秘の島や神々の島とも呼ばれ、島内には150社以上もの神社が点在しており、島全体がパワースポットとしても知られている。そのような自然やパワースポット、食材を求め、夏場を中心に家族連れや若者など多くの人々が訪れる。その他にも、豊富な魚が取れる壱岐周辺の海は釣り人の聖地としても知られ、年中を通して多くの釣り人が訪れる。



その一方で、レジャー施設やアクティビティの多くは屋外を中心とした施設であり、屋内の主要観光施設は「一支国博物館」のみである。そのため、雨天などの天候が悪い日や夏季以外での利用が可能な屋内施設が少ない。また、近年では夏場の気温上昇による身体への影響も問題となっており、屋内施設の重要度は高まっていると考えた。

2.2　第４期壱岐市観光振興計画

壱岐市観光振興計画策定委員会により、令和４年から開始されたこの計画は、新型コロナウイルスの感染拡大により激減した観光客を元の状態まで回復させ、さらにその先を目指していくものである。

(1) 数値目標

現行の第３期計画の数値目標である「観光客実数」、「宿泊客実数」、「観光消費額」、「外国人宿泊客実数」は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け非常に厳しい状況に陥っている。目標設定として激減した数値を短期間で伸ばすのではなく、コロナ禍前まで回復させることとし、その指標として第３期計画の数値目標に対する成果を踏まえるとともに、国内外の感染状況及び経済状況を鑑み、次の目標が数値化された。

目標項目	基準年	基準値	目標年	目標値
観光客延べ数	H30年	384,809人	R6年	390,000人
観光客実数	H30年	230,548人	R6年	240,000人
観光消費額	H30年	56億円	R6年	60億円
外国人宿泊客実数	H30年	1,798人	R6年	1,800人

(2) 教育旅行の推進

多様化する教育旅行ニーズに対応するため、受入体制の整備強化やセールス活動を目的に設立された「壱岐教育旅行誘致促進委員会」を中心に、壱岐市の自然環境を活用した魅力ある体験プログラムの開発、一支国博物館等の活用など学習環境の満足度向上を図る。

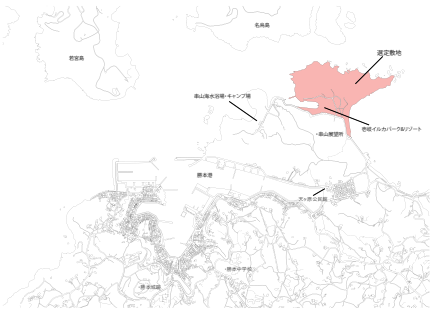
また、ＳＤＧｓをモデルとする「自動灌水システム構築・スマート農業」、「海の学びの島・海洋教育」など、壱岐市が取り組む事業を学びの場と捉えた教育旅行の商品開発に力を入れる。このような計画から、教育的施設としての役割も必要である。



3. 対象敷地

長崎県壱岐市は、九州北部の玄界灘、福岡県と対馬の中間地点に位置する南北17㎞、東西14㎞ほどの大きさの島である。人口は約26,000人。福岡、佐賀、長崎と九州北部がアクセスの起点となる。

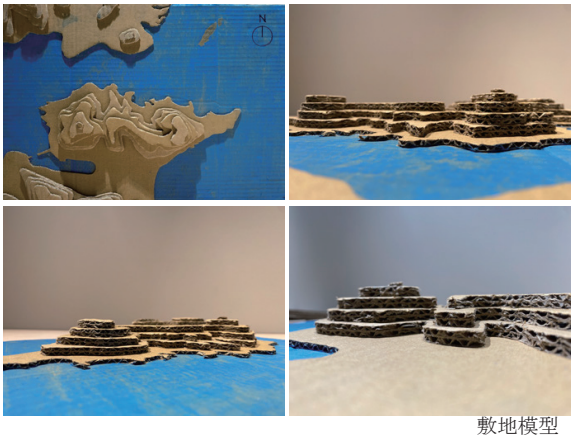
選定敷地は壱岐島本島の最北端に位置する。敷地周辺には自然が多く残り、海水浴場やキャンプ場などもある。敷地内には、多彩な体験プログラムを通してイルカと触れ合える「壱岐イルカパーク＆リゾート」がある。



選定敷地及び周辺地図

所在地：長崎県壱岐市勝本町東触 2668-3
主な用途：博物館
敷地面積：
建築面積：
延床面積：
キーワード：海、博物館、水族館、海洋生物

Location ： 2668-3,Higasifure,Katumotochou,Iki-shi,Nagasa
Main Use ： Museum
Site Area ：
Building Floor Area ：
Total Floor Area ：
Keywords ： Sea, Museum, Aquarium, Marine life



敷地模型

4. 計画概要

日本は、世界的に見ても水族館の数が多く、新しく計画するにあたり、他の水族館との差別化要素が必要となる。

(1) 教育的観点

水族館は教育と娯楽が複合化された集客施設で「現代と未来」が主なテーマとなる。生命が誕生する一方で、死んでいく様も日常的に起こることから「生と死」の問題を常に扱いながら、命の大切さを問いかける必要がある。

そこで、娯楽として楽しむだけのものではなく、水族館、博物館との複合施設とすることで、海洋生物の進化の歴史や生態を学びながら、実際に生きている様子も見ることができ、学びとしての要素を持たせることができと考えた。

(2) 既存のイルカパークとのかかわり

壱岐市には、古くからイルカ漁、クジラ漁の歴史があった。1980 年に壱岐の無人島「辰の島」において、駆除のために捕獲されたイルカを、米国の動物愛護団体のメンバーが網を切って逃がし、漁民に損害を与えた壱岐イルカ事件が起こった。その後、1986 年を最後に大規模な捕獲が行われることはなく、今は捕獲が許可されてない状態である。漁協ではイルカ対策委員会による漁場からの追い払いが行われ、長崎県ではイルカの対策と研究が行われている。その一環として、イルカパークが設立された。

今回の計画では、イルカが生活する既存の入り江を残し、イルカショー等は行わず、イルカとの触れ合いや生態の観察、研究に特化したものとする。



(3) 大水槽

今回の計画ではこれまでにない大水槽をメインの計画とする。既存の水族館の大水槽の周りに動線が配置され、外から眺めるものがほとんどである。本計画では、大水槽に囲まれた展示空間を目指す。大水槽の中と外を行き来する動線計画とし、実際の海の中にいるような空間を目指す。

5. 終わりに

今回の計画で、より多くの人に海の美しさや、そこで暮らす生き物について興味をもってほしい。そして、過去や現状を知ることで、美しい海を未来へと残す小さなきっかけとなればと考える。

6. 参考文献

建築設計資料　建築思潮研究所・編　110 水族館
実りの島、壱岐　壱岐観光ナビ
https://www.ikikankou.com/
いきしまくらし　IKI UI-TURN PORTAL SITE
https://ikishimagurashi.jp/
第４期壱岐市観光振興計画　令和４年～６年
https://www.city.iki.nagasaki.jp

北野社多宝塔に関する研究

学籍番号　K20328
名　　前　藤井遥夢
指導教員　井上年和

北野天満宮　北野社多宝塔　絵図
「北野社建築図」　右木擂　復元研究

1. 研究目的

神仏習合という考え方が平安時代に広まり、神と仏を同一視する考えで、仏が人々を救うために神という仮の姿で現れる説明がこの頃に広まった。この時代には確かに建築されていたことが多数資料などから分かる。明治時代に、明治政府が神道を国教化するため、神と仏を分離する神仏分離令を出し、このような神社から仏教的な要素を排除しよう、分けて考える動きの中で、北野社多宝塔も取り壊された。御本殿は現在も残っていて、国宝であることで北野社多宝塔も現存していれば、とても貴重な建物になったと考えたこと。扉は地蔵院地蔵堂に、宝珠は北野地主神社にそれぞれ転用されていて、この北野社多宝塔はどのような姿であったのか。北野社多宝塔の神仏習合の実態はどのようなものだったかを考察、解明していきたい。



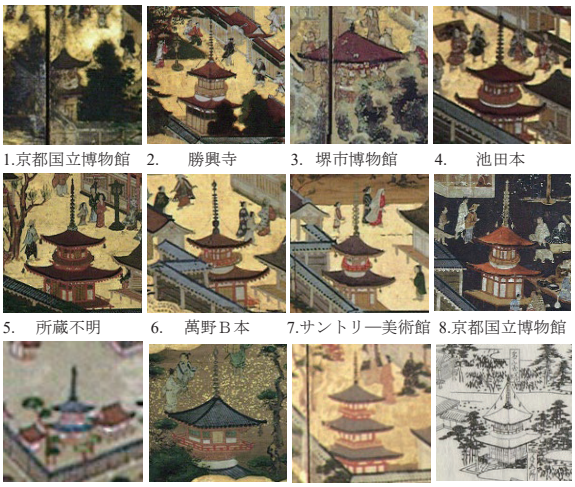
図１　北野天満宮社頭古絵図[注1]

2. 北野社多宝塔について

北野社多宝塔は北野天満宮の敷地内に建築されていたという今は現存しない建築物で、北野社多宝塔は明治時代に神仏分離令が発令されるまでの神仏習合の時代の建築物である。神仏分離令によってこのような神と仏が混合している場所では取り壊されたとすればこの建築物の解明を進めることは神仏習合の実態を明らかにできるのではないかと考えた。

2−1. 絵図資料から見る北野社多宝塔

洛中洛外図と都名所図絵などの絵図資料から北野社多宝塔をまとめた。絵図資料によっては鮮明に様子を伺えないものもあるが、ほとんどの絵図資料で柱などの構造材は朱色であることが絵図資料から分かる。屋根については植物性の屋根葺き材、瓦葺きに見られるものもある。二層目の柱は 12 本で描かれているものや、本来は二層構造であるが、11 の北村家本を例に見てみると三層の屋根で描かれており、色々な資料から得た情報とはかけ離れたものだと考えられる絵図資料もある。どの絵図資料でも北野社多宝塔は本殿から見て左手の敷地の端の方にあったことがわかる。建築されていた場所はこの場所であったと考える。



1.京都国立博物館　2. 勝興寺　3. 堺市博物館　4. 池田本
5. 所蔵不明　6. 萬野Ｂ本　7.サントリー美術館　8.京都国立博物館
9. 所蔵不明　10. 祇園祭礼・賀茂競馬図　11. 北村家本　12. 都名所図絵

図２　絵図資料[注2]

3. 復元考察

3−1. 北野社建築図について

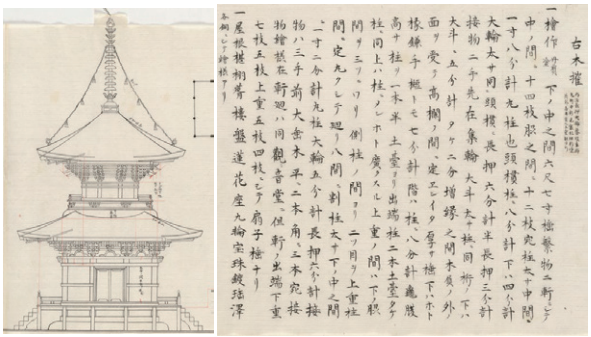


図３　北野社建築図　　図４　木擂[注3]

北野社建築図は現在、国立歴史民俗博物館に所蔵されている。この資料は元禄年間のものと考えられる。この資料の中に北野社多宝塔について記されている部分がある。これは、多宝塔の復元に関する重要な資料と考えられる。北野社多宝塔については建築図と右木擂という木割があり、多宝塔建築図は七十分の一の縮尺で作図されている。屋根の勾配は、一層は四寸五分、二層は七寸五分であることが記されていて、屋根について初層は平行垂木、二層は扇垂木であることが分かる。右木擂には中の間は六尺七寸で十四枝、脇の間は十二枝だということが右木擂から分かる。このような情報から大まかな平面の寸法が分かる。

そのほかの部材についても記録されているが、高さ関係や屋根の詳細など情報の不足している部分があることが分かった。この北野社建築図から重要な情報を得られたが、欠けている情報もあり、その部分については江戸時代の木割書「匠明」を参考とし、復元を進めることにした。右木擢から得た情報を項目ごとで整理し、図面の作図を進めた。規矩図については右木擢で得られた情報から屋根についての情報が不足しており、匠明と建築規矩術の本から作図した。資料として残っている他の多宝塔 12 塔についても調査し、比較した。その中で兵庫県の伽耶院多宝塔の屋根の仕様が似ていることが分かった。伽耶院多宝塔についても初層は平行垂木で、二層については扇垂木であった。

表１ 木割を項目した資料

部材名称	数値	摘要	寸法(尺)	寸法 mm mm	備考
下ノ中之間	6尺7寸	14枝	14α	2,030	
1枝			α	145	
禰繁物		2軒			
脇之間		12枚	12α	1,740	
柱太さ	中間に1寸8分		B=1.8α	261	
頭貫	柱の8分		0.8B	209	
丸柱也					
下	4分		0.4B	104	
大輪太さ同じ			0.4B	104	
頭貫に長押	6分		0.8B×0.6	125	
平長押	3分		0.8B×0.3	63	
接物		2手先			
集輪				261	
大斗	太さ柱に同じ			261	
桁ノ下	大斗に5分		0.5B	131	
ヲヤ2分増し				157	
縫之間					
木貫の外の面を受けて					
高櫨ノ間に定	エンイタ厚さ				
種下ハホト(など)					
桷(垂木)縫手	■トモ七分				
階（一段）	柱に8分		0.8B	209	
亀腹	高さ柱を1本半		1.5B	392	
土台より出端	柱2本		2B	522	
土台タケ	柱に同		B	261	
上ハ柱ニタンホト	廣くする				
上重ノ間ハ					
下ノ脇間	3つにわり			580	
側柱の間					
よりニツ月を					
上重柱間に					
定丸くして					
縋り	8間に割				
柱太さ					
下ノ中之間に	1寸2分			174	
丸柱					
大輪	5分		0.5B	131	
長押	6分		0.6B	157	
接物は	三手前				
大垂木平ならに	2本				
角に	3本宛				
接物	模様在				
軒廻は	同				
観音堂に					
但軒の出端					
下重	7枝				
	5枝				
上重	5枝				
	4枝にして				
扇子	種ヤリ				
一屋根	種棚葺				
蓮花	座九輪				
宝珠	鍍金薄				
各銅にして	模様あり				

資料として残っている他の多宝塔の事例を調査していると、大体のものが二層目の柱は12本である。しかし、北野社多宝塔は 8 本であることが木割から分かり、北野社多宝塔は資料の残っている他の多宝塔とは違う二層目の作りをしていることが分かった。これを平面的に考えていくと 12 本の柱では二層目の隅木の位置に柱がくるが、8 本の柱であると柱と柱の間にちょうど隅木が来てしまい、隅木が浮いているような状態となることが分かった。



図６　立面図



図７　断面図

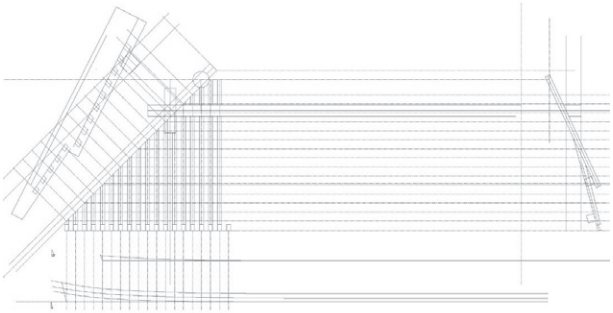


図５　初層規矩図 注4

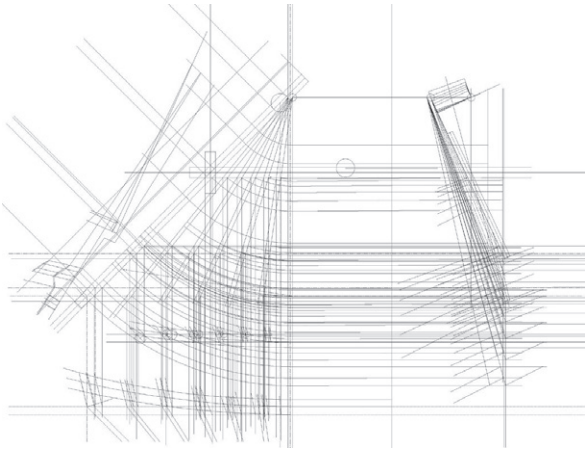


図６　二層規矩図注5

4. 結論

4−1. 現状から考えること

右木擢で書かれている北野社多宝塔は二層の柱が 8 本であることが分かっており、他の多宝塔は二層の柱が 12 本であった。他の 12 塔の多宝塔についても知ることで北野社多宝塔の特徴や違っている部分についてより気づくことができた。第 3 章第 3 項で紹介した通り二層目の構造に大きな違いがあり、この特殊な構造が神仏習合の時代の特質なのではないかと考えた。神仏分離令があったことで北野社多宝塔のような仏教関係の建築物が取り除かれていき、そのような建築物はすべてなくなっていた明治時代を乗り越え、北野社建築図のようにその当時の姿について記録がここまで細かく残っていることでさえ貴重であることが研究を進めていくにつれて強く感じた。また、北野社建築図のような資料が現在にもこのように残っていて私たちが見ることができることもとても貴重なことだと研究を通して感じた

参考文献

注 1　国立歴史民俗博物館編『なにが分かるか、社寺境内図』便利堂, 2001 より引用

注 2　1 から 11 は『洛中洛外図　都の形象 - 洛中洛外の世界』淡交社 1997 より引用
12 は国際日本文化研究センター所蔵『都名所図会データベース 都名所図絵』

注 3　国立歴史民俗博物館所蔵『北野天満宮社堂図』

注 4　持田武夫『建築規矩術　扇垂木二軒』北國新聞社，2019 および伊藤要太郎『匠明五巻考』鹿島出版会 1971 を参考に作成

注 5　持田武夫『建築規矩術　二軒隅』北國新聞社，2014 および伊藤要太郎『匠明五巻考』鹿島出版会 1971 を参考に作成

波紋を広げる

K20329　藤尾哉汰 *
指導教員　井上晋一 **

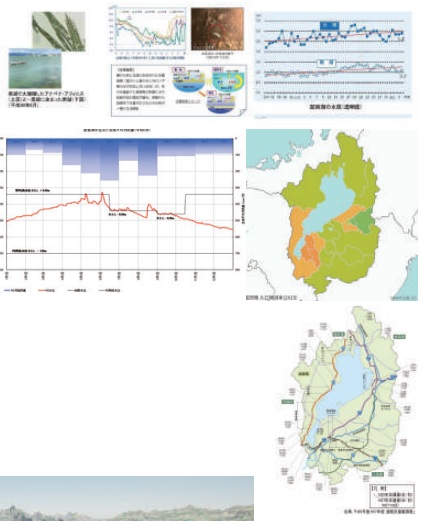
*　京都美術工芸大学　建築学科
**　京都美術工芸大学 教授・工博（設計指導）

Title of the spread the ripples

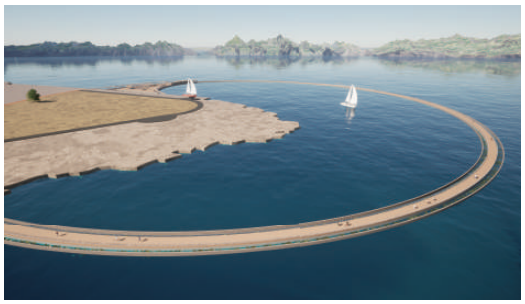
FUJIO Kanata*
INOUE Shinichi**

*　Department of Architecture, Faculty of Arts, Kyoto Arts and Crafts Univ.
**　Prof. Graduate School of Applied Art., Kyoto Arts and Crafts Univ., Dr.Eng.(※ Adviser)









計画趣旨

現在の琵琶湖は、全層循環が正常に行われない事による底生生物の死滅や、植物プランクトンの増加による富栄養化という水質汚染問題や琵琶湖の水位低下問題が起きている。その中でも水質汚染が起こる事で琵琶湖の中でも現状南湖におけるレイクレジャーが北湖に比べ非常に少ない。この問題の背景には 1977 年に起こった赤潮の被害や定期的に起こるアオコ等による被害が南湖と北湖では南湖に多くの被害が出ている事や、枯れた水生植物の根や葉が湖底に貯まって低生成物が死滅してしまっている事があり、実際にデータとしても湖の透明度においても北湖と南湖では大きな差があり、この事が北湖と南湖のレイクレジャーの差になっているのだと考えられる。だが、交通の便や南湖周辺がベッドタウン化していて人口増加している事等、周辺地域の状況において南湖が北湖より優れている部分もあり、滋賀県を活性化させ、新たな活力を生む為にも必要な場所でもあるため、環境改善、琵琶湖のアクティビティの形成に対しての新たなアプローチとして施設を計画しようと考えた。

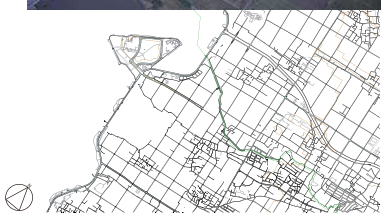
目的

この問題に対し、琵琶湖に触れる場所が必要なのではないだろうか。様々なアクティビティを行う事が出来、琵琶湖に触れる事が出来るカフェを併設したハーバーバスとリングを用いた浮体建築物を計画する事で、琵琶湖を身近に感じる機会や琵琶湖に新たなアクティビティを創出し、琵琶湖の南湖を遊び場として活用する事でこれからの世代に水に親しみを持つ習慣を与える事の出来るような空間していくと共に、今現在の琵琶湖で起きている水位低下問題や水質汚染問題に対応した建築物を計画する事で琵琶湖に起きている異変を肌で感じ、琵琶湖の水に対して考える機会を創出していきたい。そしてこの計画地はイナズマロックフェスも行われる場所であり、イベントの際に使用する事で新たなコンテンツを作り出す事の出来る場を計画し、滋賀県に対して波紋を広げる事の出来るようなランドマークにしていきたいと考えた。

所在地：滋賀県草津市下物町 1091
主な用途：広場、プール、カフェ
敷地面積：
建築面積：
延床面積：
キーワード：浮体建築、親水空間

Location : 1091 Shimomonocho, Kusatsu City, Shiga Prefecture
Main Use : parks, event venues
Site Area :
Building Floor Area :
Total Floor Area :
Keywords : Floating structure, Hydrophilic space





選定敷地

烏丸半島芝生公園周辺

選定理由

現在でもイナズマロックフェスといったイベントが実際に行われているという事や琵琶湖を介して向かい側には比叡山の山嶺を望む事が出来る敷地であり、琵琶湖、そして滋賀県について深く触れる事が出来る敷地なのではないかと思い選定した。今回の計画では烏丸半島芝生公園周辺の水上にハーバーバスとリングを計画しようと考えている。

図面



参考文献

令和 5 年 5 月版琵琶インフォメーション

水質の汚濁の防止のための措置等 https://www.pref.shiga.lg.jp/file/attachment/5401426.pdf

令和 2 年 5 月版琵琶インフォメーション

琵琶湖における気候変動の影響 https://www.pref.shiga.lg.jp/file/attachment/5178900.pdf

北欧のパブリックスペース　街のアクティビティを豊かにするデザイン

学芸出版社　著 / 小林隆 / ディビット・シム　p98~p129

滋賀県の人口増加率の統計

https://town-lab.azurewebsites.net/Item/%E4%BA%BA%E5%8F%A3%E5%A2%97%E6%B8%9B%E7%8E%87/%E6%BB%8B%E8%B3%80%E7%9C%8C

国土交通省　近畿地方整備局　滋賀県国道事務所　滋賀の交通量 https://www.kkr.mlit.go.jp/shiga/genjyo/koutsu.html

令和 5 年の琵琶湖水位曲線 https://www.water.go.jp/kansai/biwako/html/graph/index.html

多様な水上建築を実現するサステナブルな基礎 https://mag.tecture.jp/culture/20221025-land-on-water

日常の一コマに運動

Exercise in one frame of daily life

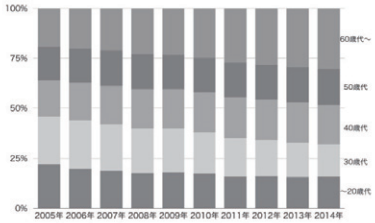
学籍番号　K20330
名　　前　藤田　聖矢
指導教員　河村　大介

Student Number　K20330
Name　SEIYA FUJITA
Supervisor　DAISUKE KAWAMURA

背景・目的

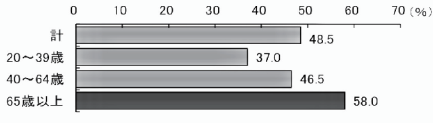
今現在日本国における普段の運動不足を感じているという人は７６．２％が感じると回答しており、１年以内に行った運動については「ウォーキング」を挙げた者の割合が６２．０％と最も高く、次いで「体操」（１４．０％）、「トレーニング」（１３．６％）の順となっている。近年コロナ禍の影響もあり、スポーツ志向、健康志向の高まりによってスポーツクラブやフィットネスジムの利用率が全国的に高くなっている。舞鶴市において高齢者の１日３０分の運動を週に２回以上する人の割合は４８．７％となっており全国の５４．７％に比べて低いことが読み取れる。現在舞鶴市にある運動の可能な施設は４店舗あり、フィットネスジムやパーソナルジムのみとなっています。昨今２４時間営業のフィットネスジムが多くなってきており、利用者は４０代以下の若者が９割以上を占めているところが多く、高齢者層には少し敷居が高く、利用しづらい状況にあることが舞鶴市の運動習慣の低さにつながっているのではなかと考える。それに対してフィットネスクラブ会員における２００５～２０１４年の１０年間年齢別構成比の推移は、（図表１）「～２０歳代」は微減、「６０歳代～」は増加を示しており、高齢者層利用者が拡大傾向にあることが読み取れる。高齢者の中で運動を始める理由として多いのが、膝が痛い、肩が痛い、腰が痛いといった身体のどこかに支障があり、医者に進められて通い始めたという方が多く存在しています。全国的に見ても（図表２）６５歳以上の高齢者の健康意識は他の年齢と比較しても高くなっており、高齢者は健康意識から運動習慣の定着に繋がりやすいと考えられる。そこで舞鶴市でも運動を生活の一部として利用してもらうことを目的にこの計画を行う。

図表１フィットネスクラブ会員における年齢別構成比の推移



（出所）経済産業省　(2015)「産業活動分析：平成 26 年 10 月～12 月期」page. 7

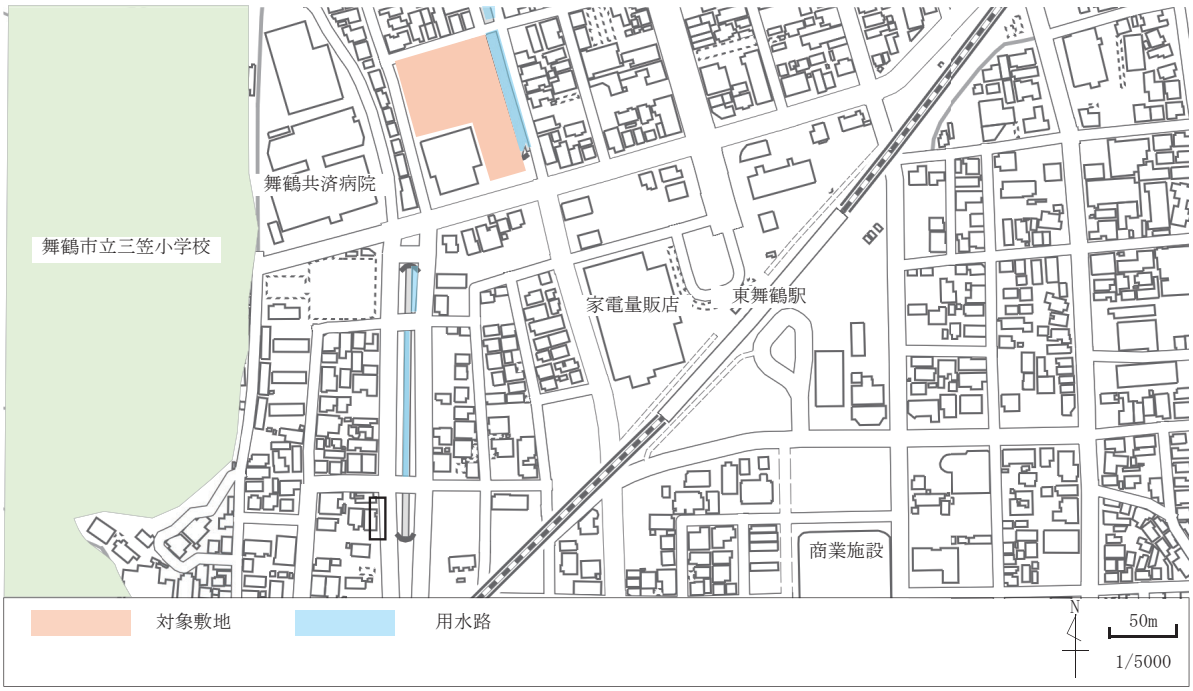
図表２健康のために「運動やスポーツをするようにしている」と回答した人の割合



（注）健康に気をつけるよう意識していると回答した人のうち、「健康やスポーツをする ようにしている」と回答した人の割合。
資料：厚生労働省「平成 26 年版厚生労働白書」から作成

敷地

京都市舞鶴市、JR 東舞鶴駅から徒歩５分、共済病院の近くに位置しており通院前後のアクセスはしやすい。現在は駐車場となっており、平常は半分ほどの利用となっている。周辺には駅、商業施設、病院があり、利便性のよい立地となっている。敷地東側には用水路が流れている。周辺には住宅地が広がっている。



所在地：京都府舞鶴市浜 1054
主な用途：フィットネスクラブ，カフェ，処方箋薬局
敷地面積：5,156m^2
建築面積：1,698m^2
延床面積：2,843m^2
キーワード：運動、日常、通院

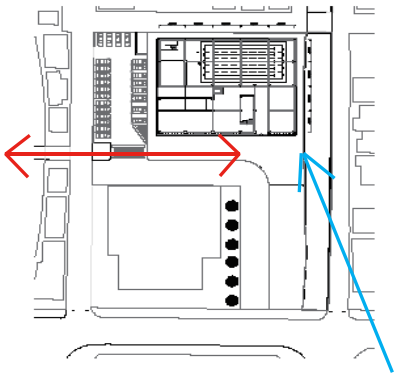
Location ： 1054,Hama, Maiduru-si, Kyoto
Main Use ： fitness,cafe,pharmasy
Site Area ： 5,156m^2
Building Floor Area ： 1,698m^2
Total Floor Area ： 2,843m^2
Keywords ： exercise,daily,hospital visit

計画趣旨

通院や買い物の際に立ち寄り、高齢者層においての運動の定着を主の目的とするフィットネスクラブを含んだ複合施設を計画する。フィットネスクラブを主として計画し、普段の生活の中で立ち寄れる場所の提供をするとと共に、楽しみながら運動ができる、高齢者においては生きがいとなる場所の提供を第一の目的として計画を行う。第二の目的として、病院が近くにあることから処方箋薬局、喫茶店を併設して短時間利用者から長時間利用者の両方をターゲットとし、施設の利用を促進させ、高齢者だけでなく舞鶴市民の運動習慣の定着を目指し計画を行う。

敷地計画

建物は敷地北東に配置した。敷地へは西側と南側から徒歩、自転車、自動車でのアクセスとする。対象敷地から病院へ行き来できるよう西側に敷地出入り口を計画する。公共交通機関でのアクセスも考慮し、南東側は駅からアクセスしやすように出入り口を計画とした。敷地内道路を設けスムーズに駐車スペースへ行けるようにした。



フィットネスクラブ

プールエリア
足の不自由な人でも運動の習慣化ができるようにプールを計画する。普段長く歩けない人も負荷の軽減された水の中でウォーキングをすることで筋力の向上に繋がり、普段の生活に活気をもたらすことを目的にプールの計画を行う。コース数は歩行者コース、初心者コース、往復コースなど幅広い用途のコースが取れるよう５コース計画した。
ジムエリア
スタジオを作り、様々なスタジオレッスンが行えるようにした。有酸素マシンやトレーニングマシンを配置し、筋力の向上、運動の習慣化を目的とし計画をする。ジムエリア北東側は視界が開けるよう開口を設ける計画とした。



プールエリア



ジムエリア

処方箋薬局

近くに総合病院があるため、出された処方箋をこの施設で受け取れるように処方箋薬局を計画する。利用者が利用しやすいように対象は１階に計画し、出入りしやすい位置に配置をした。待合室を計画し、調薬に時間がかかる際も薬局内で待てるように工夫した。搬入がしやすように西側中央に中廊下を配置し直接駐車場から行き来できるよに計画した。

カフェスペース

カフェは誰でも利用できように薬局と同じ１階に配置した。入り口は建物南側に設け、前面道路から見えやすい位置に配置した。開口はカーテンウォールとし明るくひらけた空間になるように計画した。２階にはロフトのスペースを計画し眺めよくリラックスできる空間を計画した。半屋外スペースを計画し屋外でも快適に過ごせるように計画をした。



カフェスペース

参考文献
「スポーツの実施状況等に関する世論調査」スポーツ庁（令和４年 12 月調査）
「産業活動分析：平成 26 年 10 ～ 12 月期」page.7 経済産業省
平成 29 年度「スポーツの実施状況等に関する世論調査」について

近代尾道の旧陣屋街区における土地所有と町屋に関する調査報告
～西国街道沿い旧井上吉兵衛邸を対象に～

学籍番号　K20331
名　前　藤田蒼士
指導教員　砂川晴彦

尾道　西国街道　都市形成
細分化　山陽鉄道　近代和風建築

序章 研究の概要

１．研究の目的

本研究の目的は、尾道の平地に残る旧陣屋街区の歴史的環境の評価を行うことである。

当街区には北の旧西国街道沿いにかつて本陣にされた小川家（笠岡家）があり、向かいには豪商の一つ橋本家（加登灰屋）をはじめに大型の商家が軒を連ねていた。西には千光寺から港までの尾道を南北に繋げた薬師堂通りがあり、南は港湾のための埋立地であった地域で、広島県の銀行の発祥地である銀行浜や現在の市役所がある。つまり当街区には尾道の都市形成を語る上で重要な要素が集中しており、尾道の都市形成に関する基礎的な考察を加える上で重要な地区と位置付けられる。このことから研究の対象地として選定した。

２．先行研究と本研究の関係

尾道市による尾道の町並み報告書[1]がある。ここでは現在の尾道に残される町並み・歴史的建造物の価値の把握や、空き家対策のための調査がなされている。当調査報告を通じ戦前の遺構の分布的概要を知ることができる。一方で本研究では、西国街道沿いの街区に注目し、都市形成過程を念頭にしながら、土地と家屋の双方の関係を明らかにしつつ、建造物の建築的特徴を解明する。建物単体からその建物が立つ土地の成り立ちまでの形成過程を考察することで歴史的環境を評価する。

３．研究の方法

旧陣屋街区の建築遺構を把握するために、まず現存遺構を表した屋根伏図を衛星写真[2]と現地調査を基に作成する。次に地割図（和紙公図）[3]をトレースした図を作成し、それを現存遺構の屋根伏図と照らし合わせることで、江戸から戦前の昭和初期までの街区・地割所有形態の考察をする。

2023 年 6 月 29 日、12 月 20 日に実測・聞き取り調査を実施した。

第１章 江戸後期から近代までの都市形成

１．江戸後期 宿場・港・大型商家（図１・２）

江戸時代の尾道では、現在の本道りである西国街道沿いに、土堂・十四日・久保の３町の町人地が形成されている。十四日町には本陣があり、宿場町として栄えていた。また、北前船による交易の港湾設備のために埋立地により拡大された。

『尾道町絵図』[4]からは西国街道沿いに多くの商家の形成が分かり、中には大型商家や幕府階定の本陣宿屋もあり、西国街道沿いの宿場町の機能も果たした。その南側の沿岸部には荷上げ場や蔵屋敷が並ぶ。



図１ 江戸時代の尾道概要図

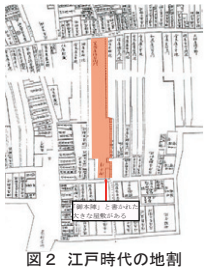


図２ 江戸時代の地割

２．近代

明治になると斜面地と平地の間に山陽鉄道が開通したことで尾道は海だけでなく陸路からも人や物が行き来するようになった。造船の発達により都市労働者が急増した。それに伴って平地には高密化した市街地が形成され、斜面地の宅地化もさらに進んだ。そして大きな屋敷を有した寺一つ一つの境内は小さくなり、現代の姿となっている。さらに商工会議所が尾道に建てられた前後には、金融機関が発達し、尾道は経済面でも注目された。本陣の小川家屋敷の建物は現存しない。明治維新以降の社会変容を経て、江戸後期の家屋敷は大きく変容している。

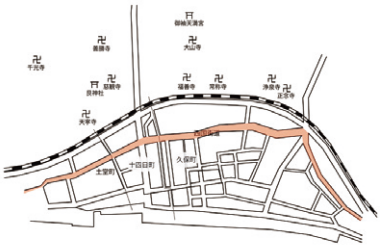


図３ 明治の尾道概要図

第２章 旧陣屋街区の地割に見る変容

１．江戸後期から明治へ（図４）

江戸時代は西国街道沿いに奥行きが深い屋敷が連なっていたが、図の明治になると敷地奥が分割され小さくなっていることが分かる。これは本陣であった小川家も該当する。また、旧本陣屋敷の西側のように江戸時代では見られなかった小路（小川小路）が発生した点に注目される。本陣であった小川家の敷地が大きかったため西国街道から南下するためには小倉家を大きく迂回する必要があった。その苦労をなくすために小川家は敷地を分割してそこに小路を作ったとされる。

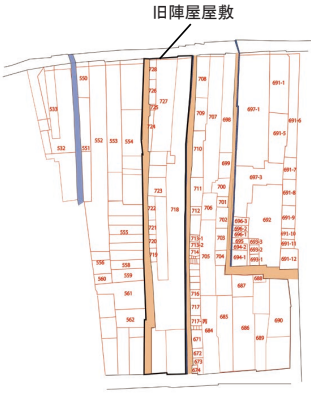


図４ 明治の旧陣屋街区の地割

２．明治から昭和初期へ（図５）

図の青線は昭和に発生した地割である。新たに通された小路に沿ってさらに敷地が分割されたことが分かる（青色）。本陣であった小川家の敷地は細分化の典型的な例と捉えることができる。

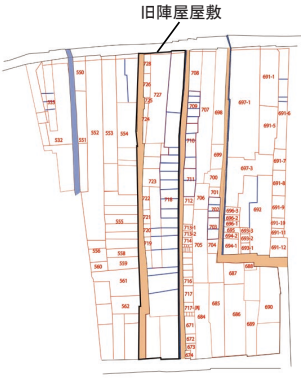


図５ 昭和初期の旧陣屋街区の地割

第３章 現存遺構と建物類型（図６）

１．旧陣屋街区の屋根伏図

旧陣屋街区の戦前の建造物の屋根伏図を作成した。そこからは薬師堂通り沿いや小川小路沿い、今蔵小路沿いに店舗併用住宅（町家）や専用住宅の遺構が確認された。

２．旧陣屋街区における家屋タイプ

明治維新以降に細分化された新しい宅地において、３つの住居集合のタイプに分けることができた。（図６）

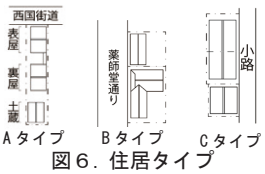


図６．住居タイプ

Aタイプは尾道の主軸になる旧西国街道沿いに連なる住居、Bタイプは西国街道に直行する方向の道（薬師堂通り）沿いの住居、Cタイプは街区内の小路の両側に連なる小さな家屋の住居である。

３．明治の地割との照合

明治の地割図と現存遺構を照らし合わせると、水路が現在の小路と一致することが分かる。旧西国街道沿いには南北に伸びる敷地の細分化が確認できる。

第４章 旧井上吉兵衛邸の建造物調査

１．屋敷内構成（図８・９）

Aタイプの住居集合における中層クラスの家屋（以下、旧井上家）の実測を行った。旧井上家の構成は旧西国街道に面し、表屋・中庭・裏屋・奥庭・土蔵と並んでいた。東側には走り庭があり、裏屋の台所上部は吹き抜けとなっている。表屋一階は柱が２本あるのみの空間となっており、それぞれの柱に遺構が見られた。奥庭には井戸があり、台所の近くであったことから水仕事をする際に用いられたことが分かる。奥庭には両側の塀からトタンの屋根がかかっている。

２．間取り分析～料亭経営の町家～

平面図を復原したところ、１階は表屋・裏屋を通してハシリニワがあり、裏屋には家屋規模に比べて小さい台所がある。表屋と裏屋の一階には和室がそれぞれ３室設けられており、奥屋の奥和室には付け書院が設けられている。また、表屋の２階には揚屋形式の座敷とし、１０畳以上大座敷がある。こう　した平面形式から料亭であったことが推測できた。また、台所が小さいため仕出しを別にした料亭経営の町家ではないかと推測できた。断面図からは、表屋・裏屋ともに小屋組みは飛び梁がかかっていることが分かる。また表屋は裏屋と異なり棟が中心に位置していない。

３　細部意匠

裏屋の欄間は１階と２階で意匠が異なっていた。２階の意匠の方が豪華なことから１階はプライベート空間として使われていたと推測できた。また、床の間の意匠も部屋によって異なり、中には杉や檜以外の木材を使用した床の間も見られた。土蔵の木鼻は玉が３つ彫られた特徴的な意匠であった。

４　沿革調査

尾道市法務局で閲覧した土地台帳から調査家屋の明治の所有者は「井上吉兵衛」であることが確認できた。また所有者の小倉さんに聞き取り調査をしたところ、「三上呉服店」の三上正雄氏から譲渡された建物であることが分かった。これは土地台帳と一致するため 553 番地が調査家屋であることが確定できた。

５．痕跡

５－１．屋根裏の痕跡

表屋と裏屋の屋根裏では棟木等に焼け跡が確認できた。表屋では北側の部材はほとんど焼けておらず、南側に焼け跡が確認された。裏屋は全体に焼け跡が確認された。以上のことからこの焼け跡は旧井上家の台所があった裏屋の奥を中心に起こった火災によるものだと推測した。近年では旧井上家周辺での火災はなかった[5]。そのためこれらの焼け跡は井上家が所有していた明治にできたものだと推測した。

５－２．柱の痕跡

表屋一階に残されていた柱を調査したところ東側以外の面に建具等の遺構が見られたため、当時は裏屋と同じように東側を走り庭とし西側を和室３室とした構成であったことが分かる。

５－３．その他の痕跡

表屋１階の玄関前には敷石が設けられていた。２階の旧西国街道側には増築されたような縁が見られた。この増築は旧井上吉兵衛邸を看板建築にする際にできたものだと推測できた。また敷石の上部が増築された縁の位置と一致するため、復原すると敷石よりも内側に外壁があったと推測できた。

結章 まとめに代えて

本研究を通して旧陣屋街区には江戸時代から存在する小路があり、その道沿いには現存遺構の建物が未だ残されていることが分かった。その中にはまだ本格的に調査されていない町屋があり、それは歴史的に価値のあるものもある。そのため本研究が、市が尾道の歴史性を再評価するきっかけとなることを願う。

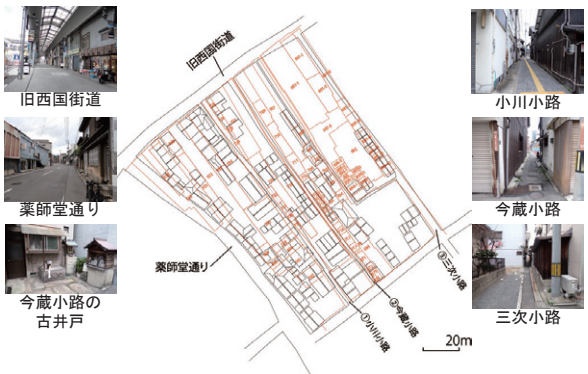


図７ 明治の地割図と現存遺構の屋根伏図の照合図

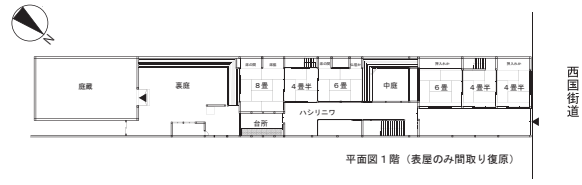


図８ 旧井上吉兵衛邸 平面図


ナカニワより２階表屋を見る
2023 年 6 月 29 日撮影


２階大座敷
2023 年 6 月 29 日撮影

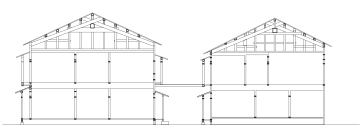


図９ 旧井上吉兵衛邸 断面図

再開発ビルのリノベーション

学籍番号　K20332
名　　前　古谷貴一
指導教員　生川教授

Redevelopment building renovation

Student Number　K20332
Name　Kiichi Furutani
Supervisor　Professor Narukawa

1.はじめに

私の生まれ育った谷町六丁目、東西南北に観光地や商業エリアがあり、利便性に優れた土地である。時代の変化とともに人の生活エリアが広がり、人の生活も変わってきている。そんな時代の中で谷町六丁目は姿をあまり変えずに残っており、谷町六丁目の象徴ともいえる「空堀商店街」と「再開発ビル群」がある。時代の流れに沿ってなくなって行ってしまった交流や集まり、人の往来の減少が見られる。また、北には大阪城や梅田、南には天王寺、阿倍野、東には心斎橋、難波、西にはコリアタウンが広がる。これらとの距離が近いことから東西に南北に行き交う人の姿を度々見ることがある。そのような谷町六丁目の町に新しい活気を流し込む再開発ビルのリノベーション計画を提案する。



（図1）地下鉄谷町線3番出口



（図2）1番出入口から



（図3）南西側歩道から



（図4）南側横断歩道から

2.研究目的

全国で問題となっている再開発ビルは大阪府内に60棟存在する。昭和から平成初期に建られており、主に老朽化や郊外立地の大型店舗による中央市街地の人の空洞化により空き室の増加が顕在している。問題が起こっている。しかし、時代の流れに沿って新しく建てられた再開発ビルはその時代と地域柄などに則した建築物になっており、大きな問題を抱えていない。

谷町地区の再開発ビルは昭和に建設され、良好には管理されているが、街への開き方が異なっていると感じた。そこで、1970年に建てられた谷町地区再開発ビルについて既存建物を活用しながら近年求めらる場所の創造と街へ開き方を考え直すことで、まちに新たなる人の往来と活気を取り戻し自立再生のできる再開発ビルにする。



（図5）再開発ビル分布図

3. 現状分析

3-1.再開発ビルについて

再開発ビルは市街地再開発事業の取り組みであり、既成市街地におけて老朽建築を除去し、公共施設や優良な建築物を整備し、良質な都市空間を形成する事業である。

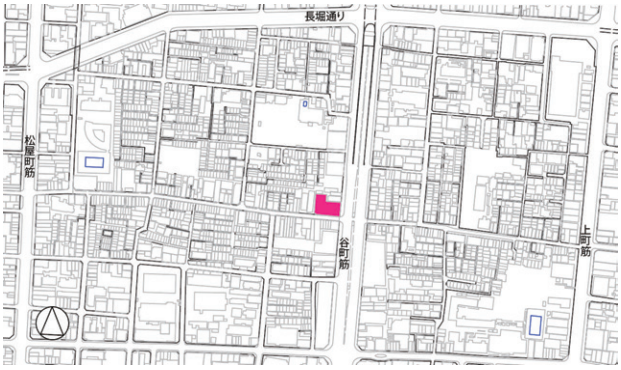
3-2.谷町地区の再開発ビル

谷町地区の再開発ビルは地下鉄谷町線を作る際に、並行して市街地整理として建設されたビルである。

新空堀ビル・谷町第1、第2、第3ビルがあり、そのどれもが1階には飲食店、2、3階には税理士事務所や会計事務所、テナントが入っている。4階から上階は住宅階となっている。竣工は1970年（昭和45年）築年数でいうと築53年になる。この谷町地区の再開発ビルは地下鉄谷町線の開発ともに都市計画決定されたものである。

3-3.谷町地区の再開発ビルと近年建ってられた再開発ビルとの比較

谷町地区再開発ビルと近年に建てられ良好な管理がなされている再開発ビルとで比較した際、5つの違いがあると感じた。まず、一つ目に再開発ビルへの入口が町に対して大きく開いているか否か。二つ目に広場やたまり場になる空間の有無。三つ目に緑化の試みがされているかの有無。四つ目に再開発ビル内の店舗の構え方。五つ目に館内の廊下のあり方の違いがあるのではないかと感じた。この5つは谷町地区の再開発ビルや昭和、平成初期頃に建てられた再開発ビルには見られない。そのため、この5つを取り入れることで時代に則した再開発ビルなり、本来の目標である、自立再生を行っていけるビルになるのではないかと考える。



3-4.新空堀ビルに隣接する空堀商店街について

昭和20年から続く商店街であり、太閤秀吉の時代の大阪城の南惣構堀の遺構上に位置している。上町筋から松屋町筋に東西かけて広がる全長約800m続くアーケードのある商店街である。太平洋戦争で多大な被害を受けた大阪市で奇跡的に焼き残ったあり、どこよりも早くに商売の灯りを灯すことができた。そのため周辺には古い建物が多くの残っている。

3-5.敷地

所在地：大阪府大阪市中央区谷町6丁目4-8

地下鉄谷町線から5分ほどの距離に位置している。保育園、幼稚園、小学校、中学校、高校、病院など子育てに必要な施設などが密集しており、非常に子育てのしやすい環境の町になっている。その団登校する姿、夕方には下校する姿が見られる。また、夕方頃には買い出しに来た主婦の方の姿をよく目にする。そして谷町六丁目は、北に大阪城やオフィス街、少し足を延ばせば大阪梅田。南には、谷町九丁目・天王寺・阿倍野。東には、森ノ宮・玉造。西

には、松屋町・心斎橋・難波があり、そのどれもに自転車で15～20分で移動可能な距離に位置している。谷町筋にはアンダーパスが通っており、車の交通量も多く、電車・車・自転車と移動に便利な土地である。また、戦後の復旧から印刷業の需要が高まりたくさんの印刷会社が集まり印刷横丁と呼ばれていた町である。

3-6.大阪市「おおさかヒートアイランド現象対策推進計画」

大阪市が執り行うヒートアイランド現象の対策にあたり、4つのことが掲げられており、1.人口排熱の低減、2.建物・地表面の高温化抑制、3.都市形態の改善、4.適応策の推進がある。今回制作では2.3.4の項目から建物に熱をためないための対策、水とみどりの空間を増やすための対策、クールスポットの創出を念頭に置いた計画を行う。

3-7.クールスポットについて

クールスポットは体感的温度を涼しく感じれる場所のことであり、クールスポットは都心に起こるヒートアイランド現象の対策に貢献するもので、常時存在する場所もあれば時間によって日の角度が違うことで存在したりしない場所もあり、形は様々である。例として、並木通りの木の影、日除けの屋根付きベンチ、商業施設の躯体の影がクールスポットになっている。

3-8「.風の道」ビジョン

大阪市が掲げるビジョンに「風の道」があり、「水と緑に包まれ 心地よい風が流れる 環境先進都市大阪」をめざすべき将来像として掲げ、その実現に向け「風通しのよいまちをつくる」「涼しい『風』を保つ」「協働と連携を強化する」の3つの戦略に基づき、施策を推進して行っている。風には熱を拡散させ、建築物を冷却し、気温を下げるだけではなく、体感温度を下げる効果がある。暑い時に風が吹くと、同じ気温でも涼しく感じる。私たちの体が感じる温度、すなわち体感温度が下がれば、快適性が向上する。



（図7）クールスポットマップ

4.提案

4-1.再開発ビルによる緑地化

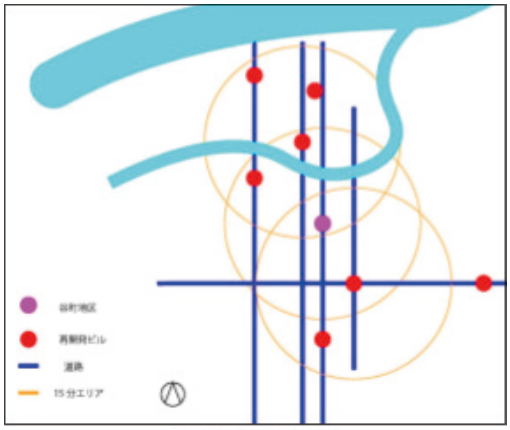
ビル全体の緑化、風通しの良い、見通しの良いビルによりビル全体がクールスポットとなることを考えました。そして、各地に点在している再開発ビルがこのような計画でデザインされていけば市全体、都市全体の既存のクールスポットの間を埋めるように面積が広がっていき、緑地面積が増え、クールスポットのネットワークが向上しヒートアイランド現象の対策になると考えた。

4-2. 紙を使った再開発ビルのデザインの検討

谷町6丁目は戦後焼け残った長屋などで印刷業が行われており、印刷横丁と呼ばれていました。しかし、現在インターネットの普及やプリンターの普及により印刷業の需要が減ってしまいました。そこで、紙が木材からできていることから、建築物の表面から蓄積される熱を紙素材の「障子」や「シェード」を使ったデザインで抑えることを考えた。また、ビル内で育てた木々から紙を作りその紙を町へ流すことで収入源となり、ビルの自立再生の手助けになる計画を行う。

4-3.検討プロセス

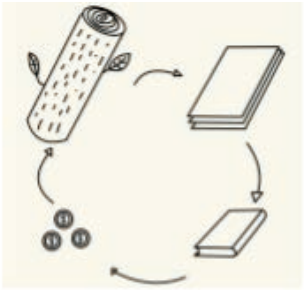
大阪市には「風の道」というものがあり、これもヒートアイランド現象に対する取り組まれていることで、大阪湾からの吹く涼しい風をビル内に取り組みビル内を風が循環するすることができるように吹き抜けを設けることを考えた。



（図8）ダイヤグラム



図10 リノベーション案



（図9） 木材のサイクル

5.参考文献

・大阪府　再開発ビル等の再生に向けた方策検討・とりまとめ
https://www.pref.osaka.lg.jp/attach/2543/00000000/housakukentou%20torimatome%20H27.10kaitei.pdf
・大阪府都市計画　https://www.pref.osaka.lg.jp/attach/2836/00000000/04_hokubu_2syou.pdf
・大阪府ヒートアイランド対策　https://www.city.osaka.lg.jp/kankyo/page/0000305187.html
1）おおさかヒートアイランド対策推進計画その1　https://www.city.osaka.lg.jp/kankyo/cmsfiles/contents/0000305/305187/honpen1.pdf
2）おおさかヒートアイランド対策推進計画その2　https://www.city.osaka.lg.jp/kankyo/cmsfiles/contents/0000305/305187/honpen2.pdf
・空堀商店街HP　空堀商店街の歴史　https://karahori-osaka.com/aboutus.html
・大阪府クールスポット100選　http://www.coolspot-osaka.jp/list.html

guest- 九州の景観を活かした住める宿 -

学籍番号　K20333
名　　前　別府佳昌
指導教員　宮内智久

A can live inn that makes use of the scenery of Kyushu

Student Number　K20333
Name　BEPPU Yoshimasa
Supervisor　MIYAUCHI Tomohisa

はじめに -

本格的な人口減少。少子高齢化、不況や国内外の激しい競争、産業や社会構造の変化など、社会の成熟とともに製造業からサービス業へとシフトしつつある日本において、ホスピタリティ産業が注目されている。本研究では、ホスピタリティ・マネジメントの産業分野の中でも、ホスピタリティという概念において高付加価値の提供が求められる「ラグジュアリーホテル」と日本の特徴である「和風」を研究対象とした。

現在、福岡市は活気に満ち溢れた都市である。全国の都市で人口減少を強いられているなかで、福岡市は人口を着実に伸ばし、平成 27 年国勢調査の集計結果では 153 万人 8510 人と神戸市を 650 人上回り、政令市のなかで 5 位の都市となった。平成 26 年には国家戦略特区「グローバル創業・雇用創出特区」の認定をうけ、海外起業家が企業しやすい環境づくりや都心の機能強化を目的に都市改造に取り組み、少しずつそれらの成果が目に見えるような形で表てきている。

また、福岡市が発表している「入込観光客数の推移」によると 2017 年から宿泊観光客数を少しずつ伸ばしており、2020 年に新型コロナウイルスにより一度 1/5 まで宿泊観光客数を減少させたがその次の年から 2019 年の 978 万人まで戻しつつある。宿泊施設の客室数では 2018 年から今まで伸ばし続け、2022 年には 38,535 部屋を記録している。客室稼働率でいえば 2018 年には 82.1%を記録し、宿泊観光客数と同様に 2020 年は 35%まで減少したが 2022 年に 51.8%まで回復した。



図１　福岡市 入込観光客数の推移

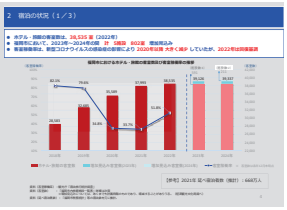


図２　福岡市 宿泊の状況

さらに、2019 年から「博多コネクティッド」、2023 年から「天神ビッグバン」といった政策から博多や天神周辺の都市開発計画がされている。現在の政令では、既存の古くなった建物を建て替えるとき既存のモノより大きく建てられないようになっており、建て替える人がいない状況になっている。そのため考案された政策で高付加価値になる建物であれば容積率を緩和するとういうものである。その政策により既存より高いホテル等が建築され、最上階付近では福岡の都心を眺められる 100 万円以上の富裕層をターゲットにしたラグジュアリーホテルを計画したりとインバウンドの需要が高まっているため、泊める、住める、貸せる宿泊施設を計画した。



図３　天神ビッグバン施策

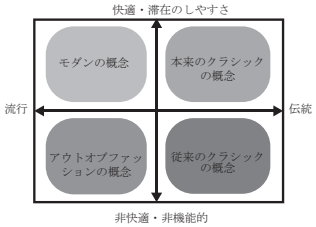
宿泊施設の課題

1. 宿泊施設における文化的自価値という概念の必要性 -

世界各国では、国や地域固有の文化的価値を宿泊施設として活用しながら、快適性・滞在のしやすさにおいても質の高さを実現している宿泊形態が見られる。一方、日本においては、古いものや伝統的なものは、全般的に機能が低く、分かりづらくなっているものが多く、旅館ををはじめとする宿泊施設においても、一泊二食の料金体系による分かりづらさや宿泊施設のカテゴライズの不明性が伝統と機能性の両立を妨げる原因と推測される。

西洋においては「クラシック」とは「伝統的かつ最高級」を意味するものであるが、日本においては「最高級」の部分が抜け落ちて理解され、単なる「古典的」、「伝統的」なものだと理解されている点に大きな問題があると考えられる。

図４　宿泊施設における文化的自価値という概念



宿泊施設とは、「快適に滞在する」という宿泊施設が本格的に提供する環境や条件を示すことであり、宿泊施設の伝統を魅力として活かし、滞在の快適性を高める工夫とともに、この両者を実現させている宿泊形態を考える。

2. 若年者の早期離職 -

若年者の早期離職については大きな社会問題の一つとして認識されている。であった。全国の大卒者の　3年以内離職率の合計は　31.8%であり、近年の観光需要の増大でようやく改善が見られるようになったが、新卒者の多くが早期離職し、その後も転職を繰り返すことが大きな要因であると指摘されている。これらは若年者のキャリア形成のとっても極めて大きな損失となっている。一般に、宿泊業・ホテル業の早期離職率の高さについてもよく指摘される。厚生労働省の調査によると、ホテル業を含めた「宿泊業・飲食サービス業」は、産業別早期離職率において最も高い産業となっている。全国値で高卒者は　64.4%、大卒者は　50.2%　が入社後　3年以内に離職している　4)。沖縄県は近年増加の一途を辿る観光入込に対応すべく、既存ホテルの拡充および新規開業が相次いでいるが、既存・新規いずれのホテルでも若年者の早期離職および人材不足が非常に懸念されている。

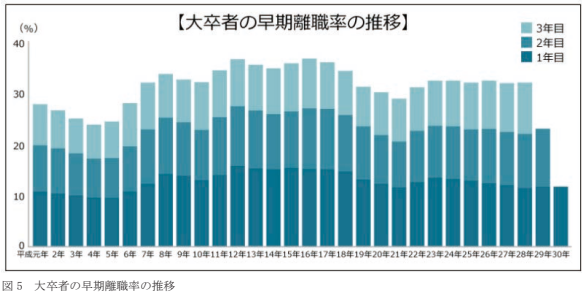


図５　大卒者の早期離職率の推移

3. ファミリービジネスと資金難-

宿泊事業はファミリービジネスの所が多い。特に中小規模の旅館業が多く見られる。旅館業では、常に資金不足に悩まされている。理由としては設備投資が必要、多額な修繕、費高い借入金依存率などがあげられる。また、長時間営業や高いパート従業員依存度による人材不足にも悩まされている。立地産業で売り上げが地域としての集客力によることも原因の一つだろう。代表者のほとんどが60～70代で継ぐ子も不足してのでおり、近年の時代に流れについていけず経営方法が近代のものについていけていないのではないかなど考えられれる。施設の強みとしては食事、接客、立地がトップ3であり、経営上の課題として施設、設備の老朽化、従業員の確

所在地：福岡県福岡市西区生の松原 1-21
主な用途：宿泊施設
敷地面積：40,000㎡
建築面積：3,360㎡
延床面積：6,660㎡
キーワード：宿泊施設・文化的価値・ファミリービジネス

Location ： 1-21,Ikinomatsubara,Nishi-ku,Fukuoka
Main Use ： Hotel
Site Area ： 40,000㎡
Building Floor Area ： 2,310㎡
Total Floor Area ： 4,272㎡
Keywords ： Hotel, Cultural values, Family business

保・育成、売り上げ減少がトップ3である。その為、上記の3つの課題をどのようにして建築的解決に繋げるのか考えなければならない。若い人でも働きたいと思う改革や施設・設備にしたり、メンテナンスがしやすい集成材を用いた計画にしたりとさまざまな方法を考えていく必要がある。

選定敷地

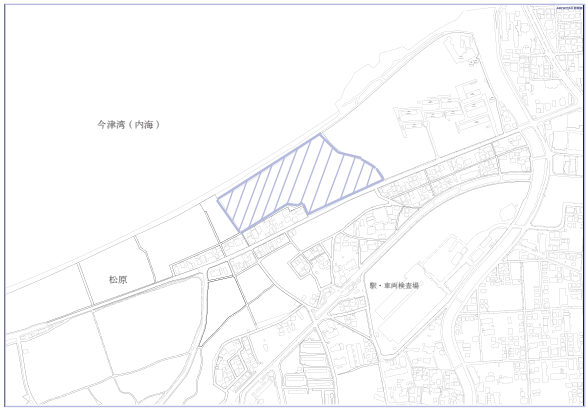


図５　敷地とその周辺の建物

1. 敷地–

選定敷地は福岡県福岡市西区生の松原にある海側の松原の一角に計画する。主にクロマツが植えられている。

周辺には生の松原海岸森林公園や今津湾があり、自然豊かな場所である。また、他に壱岐神社やJR下山門駅、車両検査場があり、都心からの交通機関も整っている。

2. 歴史–

今津湾に面したクロマツ林。今の松は江戸末期から明治にかけて植林されたものが多く、海岸の防風林として用いられた。

壱岐神社は「日本書紀」に登場する壱岐値真根子(いきのあたいまねこ)がまつられている神社である。生の松原のちめいは、神功皇后が三韓出兵の折、松の小枝を逆さに挿して、戦勝を祈ったとき、その松は不思議なことに生きて栄えたことから名付けられたと伝えられてる。その後その松は逆松といわれていましたが今は枯れ、幹だけが壱岐神社に奉納されている。

鎌倉時代に元が来襲した文永の役(1274年)の後、再度の来襲に備えて、鎌倉幕府の報権北条時宗の命により、博多湾に沿ってやく20kmの海岸に気づかれた石築地(いしついじ)が元寇防塁残されている。



写真１　敷地クロマツ

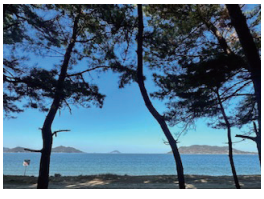


写真２　クロマツ林から見える今津湾



写真３　元寇防塁



写真４　壱岐神社

3. 選定理由 –

中心市街地と老若男女から人気な糸島市の間に位置し、どちらも車 30 分以内で交通機関もあり、アクセスが良く、博多湾を眺められるため福岡の景観を伝えられる場所であるため選定した。福岡西部は近年最も福岡の中で注目を浴びている地域である。食、観光、SNS 映えスポットと様々な理由で人気であり、県内外問わず全国から観光客が足を運ぶ地域。しかし、日帰り観光客が多い。理由として中心市街地よりアクセスの面で劣っている。そのため、福岡西部に宿泊施設を作ることで都心中心部以外にも観光客の動線が向くように誘導し福岡の発展につながる計画をした。

コンセプト

昭和 30 年頃までは樹齢 150 年程度のクロマツ大径木が多い松原であったが、昭和 40 ～ 50 年代にかけて松枯れが猛威をふるい、大径木は急速に減少したため、昭和の間に 20 万本の植林がされ､現在では樹齢70年ほどの松と、わずかに残った明治以前の松が明るく重厚で密やかな松原に佇み緩やかに迂曲する松。また、博多湾から吹く海風や波の音、敷地周辺から聞こえる鳥のさえずりなど、中心市街地の喧騒から離れたところに位置するからこそ中心市街地とは別世界を創り出す。分棟タイプだからこそできる長いアプローチや建物周辺の松原は残し、福岡の自然をまとう精神的な安らぎを与えてくれる松の森のサンクチュアリで静寂につつまれるひとときを提案する。

計画概要

1. 到着棟 –

貴重な今津湾への景観を重要視し、エントランス・サウナ・ラウンジ・図書コーナーから今津湾を眺められるように計画する。また、前面道路から距離をとることで静寂というサービスを提供する。

2. 宿泊棟 –

松の木に囲まれるように計画し、一棟に上部屋と下部屋の二部屋のみにし、他人への配慮を減らし、全部屋から今津湾への景観を確保することで快適な滞在を提供する。

参考事例



写真 1. Daichi Isumi



写真 2. アクロス福岡



写真 3. アマン京都

参考文献

・ラグジュアリーホテルにおけるホスピタリティ価値の研究
・宿泊業における若年者早期離職の現状と課題
・国内における宿泊施設型ゲストハウス経営と利用の事態
・宿泊施設における文化表現と宿泊施設が有する文化的価値
・アジアの玄関口としての福岡市の取り組みと課題
・ツーリズム空間の変遷に関する研究
・ファミリービジネス研究–同族経営旅館の現状と課題–
・宿泊施設の顧客拡大の施策が外国人宿泊者数に与える影響

コミュニティを生み出す空間

学籍番号　K20334
名　　前　星塚将也
指導教員　新海教授

A space that creates community

Student Number　K20334
Name　Masaya Hoshizuka
Supervisor　Professor Sihnkai

1. はじめに

コンテンツを小さな単位で数を増やし、ミックスすることで効率的に店舗等が並ぶ近代的な空間ではなく複数の行為が混ざり合い、境界が曖昧になることで空間に多様性を生み出す。これにより多くの人を惹きつけ、新しいコミュニティを生み出す。そんな空間を計画する。

2. 背景と目的

一般的に店舗やブランドといったコンテンツは、それ専用の箱を必要とする傾向があった。その箱は動かせず、変化を加えることが難しい。新しいコンテンツの更新が加速する現代では、上記のような専用の箱は使いにくい。そのため、大きく立派な専用の箱を計画する代わりに、小さな箱を複数集めて大きくすることで柔軟に変化が可能になる。また、仮設的であることで移動が容易となり、より多くの人々にコンテンツの魅力を伝え、体験してもらうことができる。構成単位が小さいからこそ可能となるレイアウトがあり、加えて、様々なコンテンツが並ぶ多様な組み合わせによりコンテンツを成長させ、常に新しく魅力的な空間つくる。この空間に集まることでコミュニティが生まれ、新しい価値観が生まれる計画を提案する。

3. 研究方法

3-1. イベント事例の調査

飲食や音楽、物販やアート等ジャンルに関わらず事例を集め、各イベント全体の共通点と各ジャンルごとの共通点を調査する。また、これまで選定施設で行われたイベントではどのようなコンセプトで空間が活用されてきたかを施設ホームページのイベントレポートを参照し、明らかにする。

3-2. 人の集まり方の調査

イベントベースでの集まり方とコミュニティでの集まり方を調査する(図 1)。特に現代ではオンラインでのコミュニティが形成されているため、ここでの人の繋がり方を調査する。

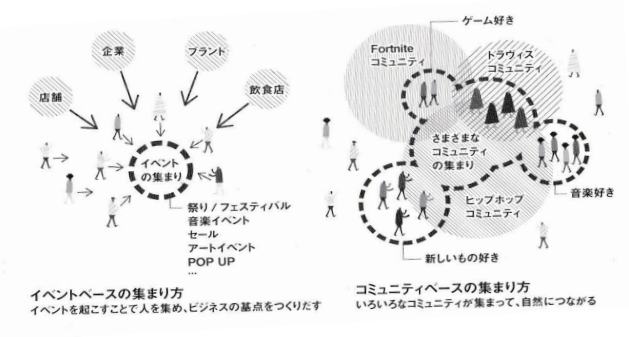


図 1　集まり方の違い

4. 選定施設

今回イベント空間を計画するためにデザインクリエイティブセンター神戸 KIITO を選定した。この建物は神戸市中央区小野浜町にあり、JR 三ノ宮駅から南に約 20 分の場所に位置する。1927 年に輸出生糸の品質検査を行う施設、神戸市立生糸検査所として建設され、(図 2) 1932 年に国に移管され、国立生糸検査所が東側に増設された。(図 3) 近代日本の産業や文化を輸出するための重要な拠点であった。後に役割を終えましたが、新たに、町や文化を継承し新しい価値を生み出す場所、加えて、神戸市が認定されたユネスコ創造都市ネットワークのデザイン都市として 2012 年 8 月にデザインクリエイティブセンター神戸 KIITO は開館した。

(表 1)　デザインクリエイティブセンター神戸 KIITO の歴史

年	事　　項
1901	関西生糸市場の不振から神戸生糸検査所閉鎖
1921	神戸商業会議所で生糸市場設置委員会開催
1923	神戸港からアメリカ向け生糸を輸出／神戸で初の生糸取引
1924	神戸市立生糸検査所　神戸税関監視部跡で業務開始、同年に元町 4 丁目に移転
1925	日本絹業博覧会が神戸で開催
1927	旧神戸市立生糸検査所（旧館）竣工。設計：清水栄二
	(日本の生糸輸出がもっとも盛んな時期。およそ 3 割を神戸から輸出していた)
1931	国営に移管、農林省神戸生糸検査所となる
1932	旧国立生糸検査所 (新館) 竣工。設計：置塩章
1945	山手国民学校内に移転、仮事務所で業務を行う。10 月、GHQ の接収を受ける
	1 階は室内運動場や読書室、喫茶売店などの設備が整えられた。音楽、映画も
	楽しめた。室内運動場ではバスケットボール、バレーボール、テニス、ピンポンなどの設備があった
1946	仮事務所から本庁舎に戻る
1950	この年を境に、ナイロンほか合成繊維の出現により生糸の輸出が減少
1952	全面接収解除
1974	生糸検査所閉所（神戸農林規格検査所と統合)。生糸検査は続ける
	(生糸相場続落。1 万円の大台割れ。生糸の輸出がなくなる)
1980	神戸生糸検査所閉所（生糸検査業務を農林規格検査所に吸収)
1991	農林水産省消費技術センターに改称
1994	神戸市の景観形成重要建築物の指定対象候補として選定される
2001	建物は農林水産消費技術センターとして使用される
2007	独法農林水産消費安全技術センター神戸センターの移転に伴い土地建物が売却方針と報道される
2008	保存活用要望の運動が高まる
	神戸市がユネスコ創造都市ネットワークのデザイン都市に認定される
2009	神戸市が建物のデザイン・クリエイティブセンターとしての活用可能性について調査を進めると発表。
	神戸市が土地建物を購入
2010	「クリエイティブスペース提供事業」によりさまざまな利用者が建物を活用
2011	センターのオープンに向けた改修工事
2012	デザイン・クリエイティブセンター神戸 (KIITO) としてオープン

所在地：兵庫県神戸市中央区小野浜町 1-4
主な用途：ギャラリー
敷地面積：8601m²
建築面積：旧館 868m²　新館 4338m²
延床面積：旧館 3489m²　新館 10290m²
キーワード：イベント・アクティビティ・コミュニティ

Location ： 1-4, Onohama-cho, chuou-ku, Kobe-city, Hyogo
Main Use ： Gallery
Site Area ： 8601m²
Building Floor Area ： Old building 868m² New building 868m²
Total Floor Area ： Old building 3489m² New building 10290m²
Keywords ： Event, Activity, Community



図２　KIITO 新館（1932 年築）

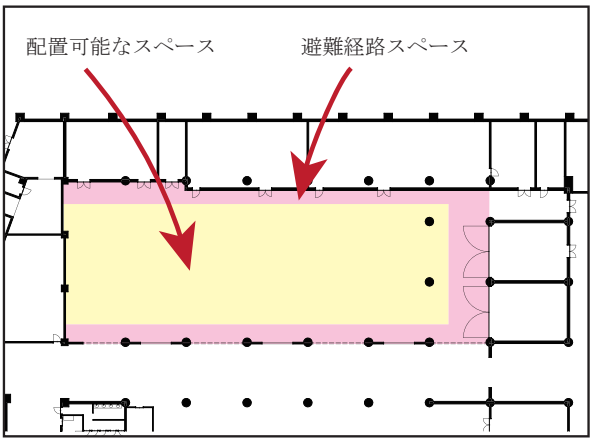


図３　KIITO ホール内平面図　1/600

5. 計画内容

KIITO ホールは、年間で定期的にイベント会場として複数回利用されているが、それ以外は活用されていないことが多い。より施設の活用度を高める為、施設で持続的に使用できるブースを計画。このブースは使い捨てではなく、定期的イベントが長期間開催されない場合、壊さず配置しておけるよう設計。また､利用者によってレイアウトを変えることが可能。

KIITO ホールから見て南西側と西側エントランスがあるため、そこからの動線を考え、KIITO ホール南側の出入をメインとし、北側と東側、南側にはそれぞれ避難経路として確保が必要なスペース（図 4）がある為、利用者又は運営側の動線として活用できるようブースを配置。

今回の計画イベントは音楽や飲食、アートや物販など様々なジャンルの個別ブース約 10 個配置し、ブース間にできた領域を動線兼フリースペースとすることでアクティビティの混合を図り、多様なコミュニケーションをとるきっかけをつくる。

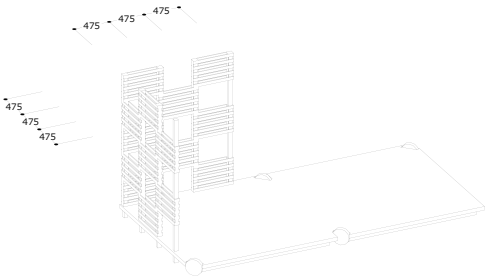


図４　設計ブース平行投影図　1/100

参考文献・引用画像
・KIITO ホームページ
　https://kiito.jp/
・「POP URBANISM」 学芸出版社
　2023 年 4 月 10 日　発行
・「YOUNG ARCHITECTS:SCALE」
　Princeton Architectural Press
　The Architectural League of
　New York
・「SPA-DE Vol.9 特集：インスタレーション・アーキテクチャー」
・図 2：図書出版　弦書房
　https://kiito.jp/common/img/about/about2.jp



図５　KIITO ホール内観パース

始まりの残丘

-経験を与える美術館の提案-

名　　前　前田大登
Monadnock of beginning
-Suggestion of the art museum giving experience-
Maeda　Hiroto

はじめに-

美術館の概念はアートの変化と共に変わり続けている。芸術に礼拝的価値を見出していた古典パトロネージの時代から複写や模造などの技術が発達した事によって宗教的な儀式から解放され、展示価値が増していった時代。そして、現在はエンタメから学習に至るまでの多種多様な経験をパトロンが追求する口実価値の時代へと変化した。勿論、美術館・アートの概念が変わる事で作品の展示方法や運営形態も変わってくる。その変化に伴い大量動員を置く敵としたブロックバスター展やアーティストの美術館離れなどの様々な問題が発生し、美術館に足を運ぶ意味が見失われつつある今、今後の美術館の在り方を考える。

美術館の問題

1. 肥大化する美術館-

アートシーンの度重なる変化によって美術館は幾度も内容的の危機を迎えてきた。そして美術館は原因の根本的な解決は行われず、収蔵量・展示空間の拡張を繰り返す事年々巨大化の一途を辿っている。最近では、来館者が参加型活動を行う教育普及のための場所も設ける美術館が増えており、美術館の肥大化は留まることを知らない。

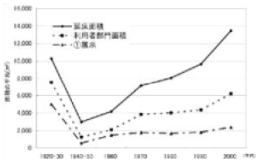


図１　延床、来館者部門、展示空間面積の変化

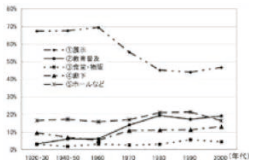


図２　空間単位ごとの割合の変化

2. 収益性重視の運営形態

美術館の肥大化に伴い嵩んでしまった運営コストを回収するために収益性重視の運営形態となり、大量動員を目的としたブロックバスター展などを優先して行うようになる。

3. アーティストの美術館離れ-

美術館は資金の多くを民間企業からの寄付に頼っていることからスポンサーの意向や要請に応えて大量動員を目指すブロックバスター展を優先して、話題性の低い若いアーティストの企画展が開催されにくい状態が続いている。また、公的機関である美術館では規制が多く、アーティストの表現の幅が狭まっていることもあり、アートイベントや個展などの自由な表現が行える美術館外での活動をメインで行うアーティストが増えている。

4. オンライン展覧会-

哲学者ヴァルター・ベンヤミンは、複製技術によって喪失された何かを「アウラ」と呼び、「芸術作品のもつ〈いま-ここ〉的性質」と定義した。そして複製されることを前提に作られる写真や映画などの非アウラ的芸術を「芸術作品の展示可能性を飛躍的に増大させるもの」だと評価した。

新型コロナ以降頻繁に行われるようになったオンラインでの美術展もベンヤミンのいう非アウラ的なものの一つであり、Ｇｏｏｇｌｅストリートビューのように４Ｋ画質の３６０度パノラマ空間を歩き回るができ、会場で実物を見る以上に細密にディティールを見ることが出来る。ネット配信によってこれまで美術館に足を運ばなかった人や社会的に弱い立場の人たちがアートの面白さに目覚めることも十分にあり得るため今後こうしたオンラインコンテンツがますます増えると考える。では、画面越しに芸術作品を見ることが出来るようになった今、美術館に足を運ぶ意味とは何か。美術館の存在価値を考えたとき、アウラが持つ〈いま-ここ〉的性質を保証する美術館がこれから必要になってくると考える。

美術館の概念の拡張-

テート・モダンの館長クリス・デルコンは美術館を「他者と過ごす社会的・社交的な場」と述べたように、美術館は単なる鑑賞、教育、経験の場であるだけではなく参加することによってここが成長し学んでゆく場になりつつある。アートが時代の変化とともに絵画からインスタレーションなどの伝えることのできる情報量が多い表現方法へ移行したように、美術館の「知識の場」としての概念も時代やートとともに変化・拡張していくべきである。

選定敷地



図３　敷地とその周辺の主要公共施設

1, 敷地

選定敷地は京都府京都市北区北舟岡町にある残丘、船岡山にある船岡山公園に計画する。周辺には千利休の墓がある大徳寺や「玉の輿神社」とも呼ばれる今宮神社、大正 12 年開業の船岡温泉がある。

2. 歴史

選定敷地は、京都府京都市北区北舟岡町にある残丘、船岡山にある船岡山公園に計画する。船岡山は平安京を造営するときの基準となった山であり、「岡は船岡」と枕草子で清少納言が称える歴史と関係が深い山である。しかし、1000 年以上の長い歴史の中でその重要性や役割は薄れていった。代わりに処刑場や風葬地だった暗い歴史が目立ち、　いつしか心霊スポットとしての顔を持つようになってしまった。

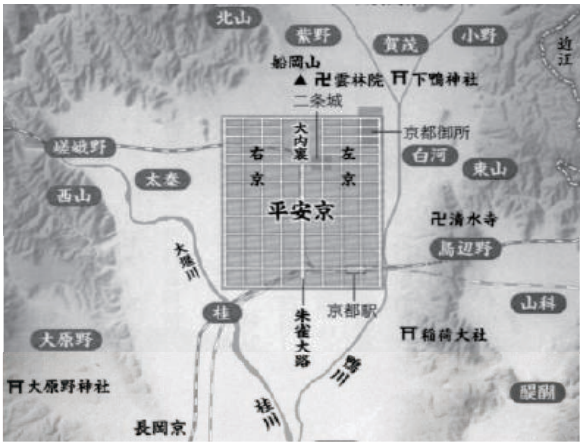


図４　　平安京と船岡山の位置関係

3. 地質・自然環境

船岡山は 100 万年前の六甲変動によって隆起したチャート山地の一部であり、10 万年に及ぶ河川の浸食によって隣接するチャート山地から切り離されできた残丘が船のような形をしていたことから船岡山と呼ばれるようになった。船岡山の主な構成要素はチャートと呼ばれる堆積岩であり、岩盤の露出する場所が多いが、その他の部分は、岩盤の風化生成物及び腐食からなる土壌が基盤岩を薄く覆っている。船岡山は、市街地にありながら緑豊かな自然が保たれていることから、「京都自然 200 撰」の第 1 号に認定された。





写真４　マヤガラの写真





写真５　ナエガの写真

コンセプト

アートイベントやオンラインコンテンツが充実した現在、それでも美術館に足を運ぶ意味は何か。　その問いの前に現在の収益性優先の現在のシステムからの脱却を行い、パトロンやマスコミ各社の干渉がない新たな運営形態を構築することが必要。次に、量より質を重視することで機能の縮小・単純化を図り柔軟に変化し続けることができる展示空間を計画する。そして、哲学者ベンヤミンが定義した「アウラ」の持つ〈いま-ここ〉的性質を保証し〈いま-ここ〉でしか味わうことのできない経験を美術館が提供する。そんな美術館を平安京造営の際に基準となった山に計画し、新たな美術館の在り方を提案する。

設計概要

フランシスコ・トレドの小さな美術館はオアハカ・セントロの主要なアトリエや工房、広場や公共施設を小さな美術館と称して街の至る所で展示会やアートイベントを行うことで街をアート一色にしていた。アーティスト、来館者の善意、京都市が共同で運営する５つの小さな美術館を船岡山に計画し、〈いま-そこで〉しか味わう事が出来ない経験を提供する場所をつくる。船岡山は市街地にありながらも「京都自然１００選」の第一号に認定された自然豊かな山であるため、現在船岡山公園の広場となっている場所や木が生えていない場所に散りばめるように小さな美術館を配置する。

－運営－

1. 運営方法

計画する美術館は展示場所を無償で提供する。アーティストが自分で作品を自由に持ち込み、好きな場所に一定期間展示できる。また、多くの歴史を持つ船岡山をより知ってもらうための企画展を一部の展示スペースを利用して行う。収蔵部分については展示場所の貸し出しがメインなため収蔵量は持ち込まれた作品を一時的に保管する場所として使用する。

2. 資金源

京都市は船岡山公園の維持費に年間 1 億円近く費やしている。その費用を美術館の運営費として使用する。その他にはクラウドファンディングや来館者にお布施のような形でお金を頂戴し、資金を確保する。

3. 展示以外のアクティビティ

現在、船岡山公園では福祉施設と大学が行う「福祉まつり」や公園側主催の「オープンパーク」など様々なイベントが行われている。こうしたイベントを計画する美術館内の敷地で行えるようにフリースペースを確保した。

参考文献

1.『空間構成からみた日本の公設美術館の変化に関する考察』小池志保子
2.『現代アートとは何か』小崎哲也
3.『美術館の概念は無限に拡張可能ではない』クリス・デルコン
4.『それでもなお、文化芸術が自律的に存在する場所』清水千夏
5.『これからの美術館を考える』深川雅文
6.『複製技術時代の芸術作品』ヴァルター・ベンヤミン
7.『東西高低差を歩く関西編第 21 回』梅林秀行

京都美術工芸大学芸術学部建築学科４年

組物と垂木の関係性に関する基礎的研究　～非六枝掛組物に関する既往研究批判～

学籍番号　K20336
名　前　増田愛
指導教員　大上直樹

六枝掛　垂木　組物
比例　寸法　社寺建築

研究目的

六枝掛になっていない非六枝掛組物がどのようにして寸法決定されたのかを名古屋工業大学准教授濱田晋一氏の論文を用いて解明する。また、濱田論文の論文批評も行う。

濱田論文の内容

国宝並びに重要文化財に指定されたものの中から、修理工事報告書等の保存図が収集できるものを対象に、非六枝掛建築における垂木割と三斗組の寸法関係について考察した。研究対象は198棟・216例である。これらの例をまず組物上に廃される垂木数をもとに、六枝・五枝・四枝・三枝に分けた。さらに、それぞれの垂木と斗の位置関係に着目し、a三斗両端の外面とその上の垂木の内面が一致するもの（垂木内面・斗外面型）、b三斗両端の外面とその上の垂木の真が一致するもの（垂木真・斗外面型）、c三斗両端の外面とその上の垂木の外面が一致するもの（垂木外面・斗外面型・六枝では六枝掛になるため除く）、d三斗両端の斗の真とその上の垂木の真が一致するもの（垂木真・斗真型）、およびそれ以上のいずれにも該当しないもの「その他」とし、さらにその中から三斗上で左右非対称となっているものを「柱間で垂木割相異」と「丸桁間で垂木割又は柱間総間で垂木割」に分類した。分類した結果、六枝掛ほどの一般性はないが、a, b, c, dに分類可能な事例が少なからず存在することから、垂木と斗を偶然一致したのではなく六枝掛と同じように垂木と斗の納まりを意識して計画的に寸法決定がされたと考える。

濱田論文の問題点

濱田論文には大きく以下の２点の問題点があげられる。

一、形式的な問題点

・事例に江戸時代のものが多く含まれていたが、江戸時代になってくると設計手法が自由になり、形式的な技法とは関係なく設計されたものが多く見受けられることから研究対象にはならない。

・向拝や側面などの事例があるが基本的に本堂の正面から設計されたものであると考えるため研究対象にはならない。

・建て替えがされた建物は当初の規模とは変更されているので研究対象にはならない。

・垂木が柱上で真を踏む事例

二、結論の不合理性

・この論文は垂木と斗の位置関係を分類しただけであって、細かい寸法を見て分類したとは見受けられず、根拠がなく技法とは言い難い。

・今回修理工事報告書を参考に研究したが、修理工事報告書がないものや、修理工事報告書があっても寸法がないものが多くあり、研究対象とならないものが多くみられる。

研究方法

研究対象は濱田論文の研究事例198棟・216例から、江戸時代、向拝、側面、建て替えされたもの、真を踏む事例、報告書がないないもの、寸法がないものを除外して、約60例を研究対象とした。これらの組物と垂木の図面データを作成し、以下の既往研究を用いて分析する。

・葛西論文（2022年卒　大上研究室）
三ツ斗の幅は表の間から整数割によって算出できることを説明
例）添御縣坐神社は総間の中墨を9等分することで三ツ斗の幅が決定した。（図1）

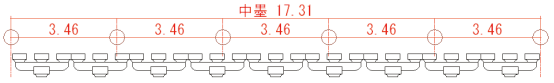


図1

・西邑論文（2023年卒　大上研究室）
三ツ斗のそれぞれの寸法は比によって算出できることを説明（図2）

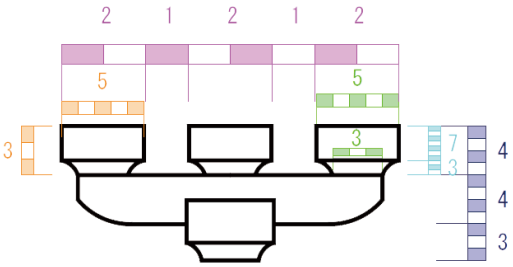


図2

・玉山論文（2023年卒　大上研究室）
垂木の寸法がそれぞれ比によって算出できることを説明（図3）

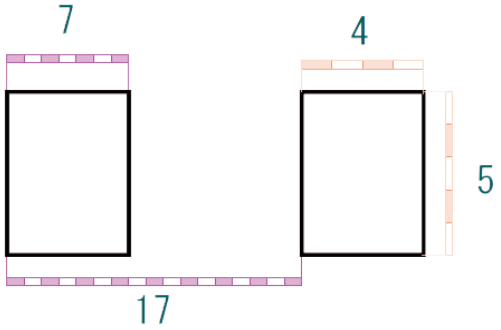


図3

以上の分析結果を報告書から用いた図面と建物の概要とともに、どのようにして設計されたのかをまとめる。（図4）

護徳寺観音堂

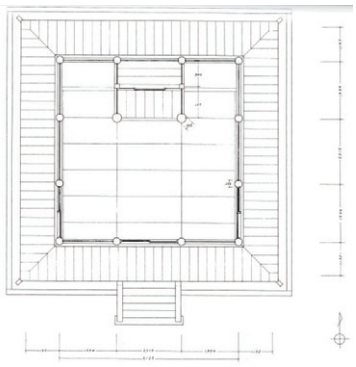
年代	室町後期	西暦	1557　弘治３
種別	重要文化財	用途	寺院
構造及び形式	桁行三間、梁間三間、一重、寄棟造、桟瓦葺		
所在地	新潟県東蒲原郡阿賀町大字日出谷甲		
組物形式	平三ツ斗組	濱田論文の分類	d> １枝寸法

全体写真



写真：文化遺産オンライン https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/199589

平面図



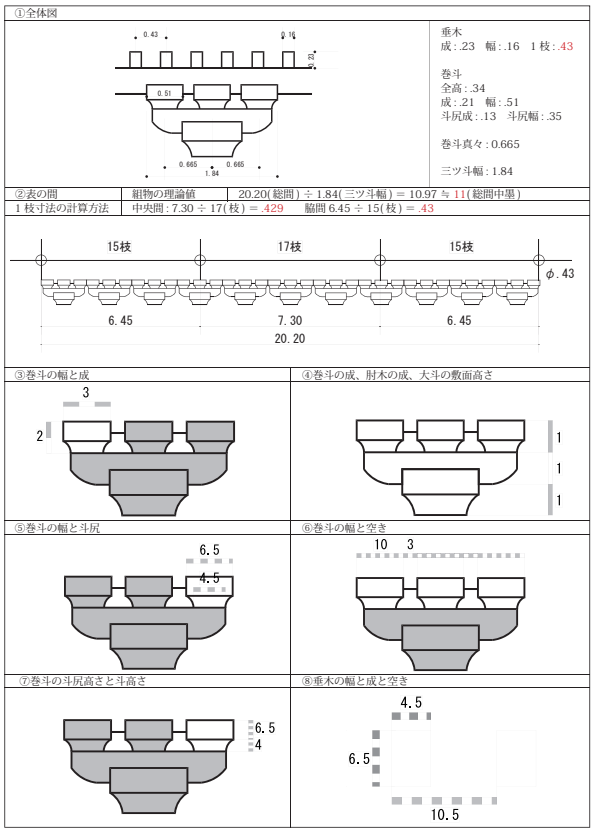


図 4

まとめ

組物の算出方法

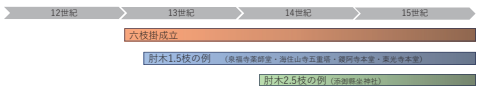
組物は表の間を整数割することによって三ツ斗の幅が算出される。そこから比によって、巻斗の幅と空き、巻斗の幅と成、巻斗の幅と斗尻幅、巻斗の成と斗尻成、巻斗の成と肘木成と大斗の敷面高さが算出される

垂木の算出方法

垂木は一間または総間を垂木数で割ることにより、１枝寸法が算出される。そこから比によって垂木の成と幅が算出される。

以上二つのことから非六枝掛組物において組物と垂木にそれぞれ技法的な関係は存在しない。また、濱田論文において曖昧な分類とされていた例についても説明ができる。しかし、垂木と組物の関係を揃える意識があり、調整の結果濱田論文のような分類が見えてくる。

組物と垂木の関係において大きく二つに分けられる。一つ目は、肘木の長さから決めるものである。肘木の長さを垂木の１枝寸法から割り出した事例が見られる。調査した中では肘木の長さを 1.5 枝・2.5 枝・3 枝にした事例が見られた。二つ目は、三ツ斗の幅から決められるものである。多くの事例がこれに分類され、整数割によって算出されるものである。これには古式と禅宗も含まれる。時間軸で見ると以下のようになっている。



・時代の流れや地域性の偏りについては現在研究中

参考文献

１、「非六枝掛建築における垂木割と三斗組の寸法関係について」（濱田晋一、櫻井敏雄、麓和善）
日本建築学会計画系論文集　第 74 巻
第 638 号 , 927-935(9p), 2009 年 4 月
2、「枝割の発達、特に六枝掛斗栱の発生について」
大森健二 , 『建築史研究』第 21 号 , 彰国社 ,
1995 年 7 月 , p6-p11
3、「社寺建築の技術・中世を主とした歴史・技法・意匠」
大森健二 , 理工学社 , 1998 年 8 月
4、「中世における斗栱組の発達」大森健二 ,
『世界建築禅宗２　日本Ⅱ　中世』, 平凡社 ,
昭和 35 年 5 月 , p82
5、「非六枝掛建築の隅柱上における垂木割と丸桁および組物の寸法関係について」（濱田晋一、櫻井敏雄、麓和善）日本建築学会計画系論文集　第 75 巻
第 647 号 , 201-210, 2010 年 1 月
6、「特異な仕割の成立過程について」（櫻井敏雄、濱田晋一）理工学部研究報告　第 42 号　101
7、「非六枝掛組物の設計技法の研究～古代から中世までの組物の変遷過程～」
葛西論文 2021 年卒　大上研究室
8、「非六枝掛組物の設計技法の研究～所寸法の設計方法～」西邑論文 2023 年卒　大上研究室
9、「垂木の断面寸法決定方法について」
玉山論文 2023 年卒　大上研究室
10、各修理工事報告書

戦前期の災害復興事業による地方の町場の近代化と住まいに関する調査研究
～富山井波にみる近代の町並みの再評価を目指して～

学籍番号　K20337
名　　前　水上碧純
指導教員　砂川晴彦

昭和初期　井波　近代化
大火復興　町家　町並

序章 はじめに

井波は富山県南砺市の東部に位置し、木彫刻の町として知られる。越中地方の中核的な真宗寺院・瑞泉寺の門前町として八日町及び本町は形成されている。大正に起きた大火で本町の大半が焼失し、八日町は被害を免れている。

いずれの井波における歴史的評価を試みる研究では復興当時の本町の町家・町並に関する歴史的研究[1]は行われていない。本研究では大火復興で町場の近代化がみられる井波の特質的な都市計画とその事業が実現した社会背景、建設された住宅の特徴を明らかにする。

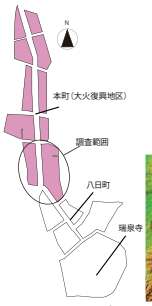


図１　対象
地理院地図よりトレースして作成

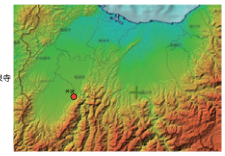


図２　井波の位置
国土地理院

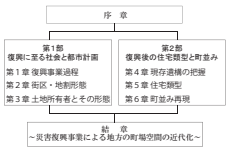


図３　研究構成

第１章『井波町復興概観』を用いた復興過程の整理

大火からの復興を目指して井波では復興委員会が開かれ、7つの部門が設立された。天皇陛下からの奉戴、一般社会からの寄与で大火以前よりの繁栄を目標に復興がなされた。

道路拡幅に際し、井波町により土地の買い上げに当時の町長、複数の地主の協力[2]によって２か月後にはすでに工事が行われ、２年で土地の所有移転が完了している。

住宅組合法により本町（当時は新町）では８組合が設立し、木造瓦葺２階建てあるいは同平屋建てが建てられている。建てられた戸数及びその坪数から融資を受けた復興住宅が供給を優先した住居形態であると窺われる。また地蔵の寄進や屋台蔵の土地の合同所有など町民による復興もみられた。

第２章 街区・地割形態～拡幅前後の比較から～

南北の本通りは11 mの街路が通されて、東西方向の11 m街路と交差し、11 m街路による交差点が生まれている。

１丁目を除く地域で各街路に囲われた長方形街区の形成が確認でき、長方形街区の奥行きは20 ～ 30 m程に整えられている。隅切り街区の形成が本町各所で見られ、大火以前の町並を残す八日町では見られない近代化の象徴といえる。

本町１丁目では建物が先行した地割や直線でそろわない地割がみられ非計画的な地割である。他の町では本通りとは別に裏動線の形成や直線による計画的な地割が確認できる。

第３章 昭和２年における土地所有者とその形態

和紙公図[3]、土地宝典[4]から当時の本町１丁目をトレースし、旧土地台帳より該当する土地所有者ごとに色分けを行った。200 ㎡以上の土地所有者は名確認でき、伊藤六左衛門、加藤徳造、金栄庄太郎、大谷次郎作、大谷和一、木谷宇平である。33名の土地所有者のうち土地を集積しているのは12名である。通りに面した土地の方が狭く、後ろ側の土地の方が広くなっていることから雪下ろしのために必要な庭を用意するため[5]と考えられる。土地は東西に長いものが多く復興当時は川や畑を糞尿や雪を捨てられていた可能性が高い。

第４章 現存遺構から見る復興町家の規模

2023年４月１日に調査を行い、本町の通り沿いに位置する遺構は目視による判定で59軒確認された。瑞泉寺のある南側で規模の大きいものが確認できる。確認された遺構から間口が３間から３間半には１列型の町家、４間から４間半には２列型の町家が想定され、復興時の標準間口であったと考えられる。また現存する遺構では２間半が少ないが、建て替えが起こった可能性も考えられる。

外観意匠には八日町の建物にはみられない洋風の尖塔アーチを感じさせる縦長窓や銅板で表層を覆う看板建築が確認でき、復興後には多種多様な町家が建てられていることが分かる。遺構の多くは１階部分の改造の激しい。２階は真壁の漆喰塗りとして２階ガラス窓にするのが標準とされる。２階の開口部は間口いっぱいを開口とするもしくは両脇１間あまりを漆喰塗り壁としている。また軒廻りの意匠は意匠上の共通性が指摘され、大型の町家から中小規模の町家まで共通して確認される。

表１　復興部門

復興委員会の復興部門
1　道路改修
2　住宅建設
3　宅地整備
4　資金供給
5　職業斡旋
6　建築用材供給
7　警備に関する施設改善

表２　住宅組合建築戸数

組合名	種類及び構造	坪数
①上新町住宅組合	木造瓦葺二階建十六	二〇七
②中新町第一同	同　平屋建　二	一三二
③同　第二同	同　平屋建　一〇	二七一
④同　第三同	同　二階建　六	一三六
⑤同　第四同	同　二階建　一〇	九六
⑥下新町第一同	同　二階建　二	一一四
⑦同　第二同	同　平屋建　七	一一六
⑧同　第三同	同　平屋建　八	九六
⑨山ノ下　同	同　二階建　四	一九三
⑩山見　同	同　平屋建　一四	一六〇
⑪新山　同	同　二階建　一	一六二
⑫下ノ河原　同	同　平屋建　八	九七

井波町復興概観より作成



写真１　道路復興中
出典：井波町ボランティアグループ草の根サークル／編『写真は語る　井波の近代』井波町，2000年



写真２　町内施設　地蔵堂と屋台蔵
2023年11月6日撮影

寄進人
昭和二年十月
大谷和一
加藤徳造
木谷宇平

図４　地蔵堂の寄進人

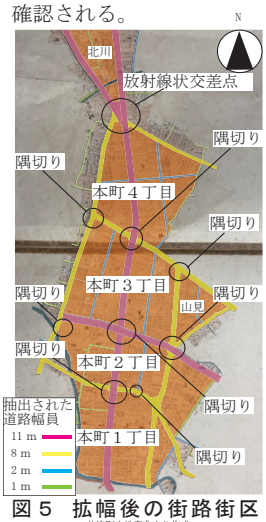


図５　拡幅後の街路街区
井波町土地宝典より作成



写真３　軒回りの意匠
2023年４月１日撮影

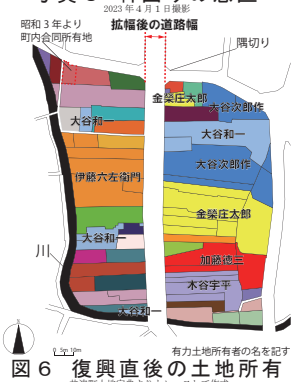


図６　復興直後の土地所有
井波町土地宝典よりトレースして作成

第５章　昭和初期の大火復興町家の建築類型

2023年11月５日～６日に実測調査･聞き取り調査を実施し、調査家屋を表にまとめた。大型の類型として上げらる伊藤邸は２列８間取りで構成されている。中戸の先は砺波地方でみられるワクノウチとされ、室の数が多くゆとりをもった造りとなっている。標準類型として上げられる田村邸は２列４間取り薮野邸では１列３間取りで構成されている。薮野邸では隣家境界の共同利用がみられ[6]、これは大火以前の町並を残す八日町でもみられる。１階の外壁が隅切りに沿った隅切り形態の町家も２棟確認された。これは隅切り街区が形成されていないよう町では確認できず、復興後の町家の特徴として平屋建て部分に台所を設けるなど防火対策が共有されていたと考えられる。

第６章　昭和初期の大火復興時の町並

当時の有力土地所有者の住宅をとらえた古写真をもとに復興時の町並の再現を試みた。町並の構成として隣家間隔は隙間なく並びつつ、大谷次郎作邸と金栄邸の大国屋との間隔はが１間から３間程あけていることが分かり、防火意識によるものであると考えられる。

大谷和一邸は移築されたものであり、大谷次郎作邸と金栄邸の棟高が一層に高くなっていることが分かり、立ちの高い町並は、昭和の町並の特質である。また復興後の町家には瓦葺屋根が多くみられるが大火以前は石置き屋根であり屋根の構造に関しても違いがみられる。庇下の利用において八日町では雁木とすることで積雪時の通行を想定したものであるのに対し、本町では庇下をショーウィンドウや壁にするなど通行ではなく最大限利用するようになる変化がみられる。本町には洋風の意匠が取り入れられているが、八日町では確認できず近代化の影響が確認できる。

終章　大火復興事業による地方の町場の近代化

井波は大火からの復興によって目覚ましい変化を遂げた。被災した本町では近世以来の町並を残す八日町ではみられない街区整備や隅切りの登場といった単なる復興事業ではなく、都市計画といえるほどの事業がなされている。復興の背景には有力土地所有者の協力が窺われ、行政と町民が一体になって復興事業が取り組まれていた。町並は八日町でみられる近世以来の要素を一部に残しつつ、大火からの教訓による住まい形態が見出され、新しい町並を形成している。

以上の通り、地方の町場の近代化を観察した。こうした井波の町並とは地方の近代化事業を述べる上での特色をよく示す事例と位置付けることができる。

【参考文献】
1 江島祐輔『井波八日町通りの町並み～伝統的建造物郡保存地区へ向けて～』2000
野口莉奈『木彫り彫刻業を営む町家の改修と地区展開の過程～富山県南砺市～井波地区を対象として』2016
須山聡『富山県井波町瑞泉寺門前町における景観の再構成―観光の舞台・工業の舞台―』2003
2 2023年11月５日大谷氏に聞き取り
3 富山地方法務局砺波市局所蔵「和紙公図」
4 帝国市町村地番反別入図刊行会『井波町土地宝典』1940
5 2023年11月５日大谷氏に聞き取り
6 2023年11月６日廣瀬氏に聞き取り

表３　間口ごとの棟数

	間口	棟数
	2間半	5
１列型	3間	9
	3間半	13
２列型	4間	15
	4間半	11
	5間	1
	5間半	3
	6間	1
	6間半	1


2023年４月１日撮影


2023年４月１日撮影

写真４　隅切り形態の町家

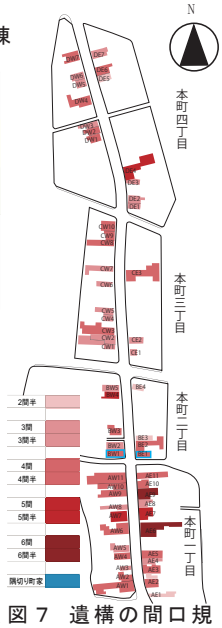
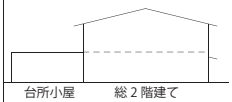
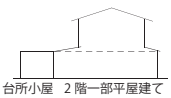
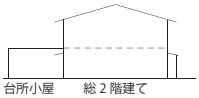
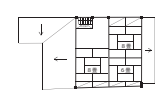
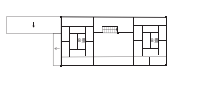


図７　遺構の間口規模別分布

表４　大型類型・標準類型の町家の平面図

建物名称	伊藤邸（家屋遺構 AW７）大型類型	田村邸（家屋遺構 AW10）標準類型（２列型）	廣瀬邸（家屋遺構 AW３）標準類型（１列型）
外観写真			
建物構成	 台所小屋　総２階建て	 台所小屋　２階一部平屋建て	 台所小屋　総２階建て
１階平面	 台所 カマドは母屋に設けない 県道27号 2列8間取り　１階平面図	 台所 カマドは母屋に設けない 県道27号 2列4間取り　１階平面図	 台所 カマドは母屋に設けない 県道27号 1列3間取り　１階平面図
２階平面	 2列8間取り　２階平面図	 4間取り3室　２階平面図	 1列3間取り　２階平面図

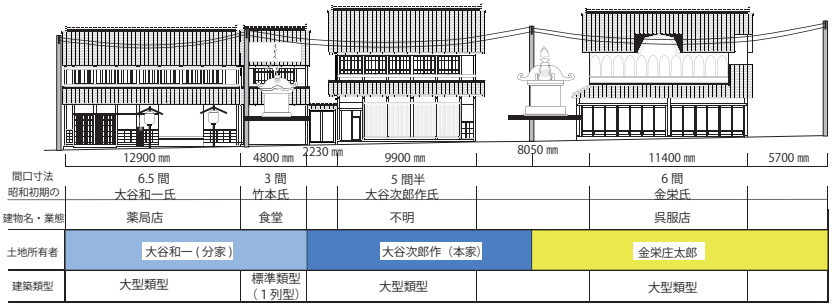


図８　復興時の本町１丁目における町並再現（古写真より作成）
井波八幡宮祭における総代の大谷分家邸の装いを再現


現在の町並
2023年11月６日撮影


復興直後の町並
（井波八幡宮祭礼時の様子）
出典：同編集委員会『富山県 100 年』北日本新聞社，1989

選択出来るコミュニティ

学籍番号　k20338
名　　前　三井愛理
指導教員　森重幸子

community of choice

Student number　k20338
Name　MITSUI eri
Supervisor　MORISIGE sachiko

1. 計画背景

2020 年頃から大流行した感染症によって、突然私たちの生活は一変し、不要不急の外出を控えるなど閉鎖的な生活を送らざるをえなかった。しかし今では、そのような生活も改善され、気軽に窓を開けたり、外へ出たりできるようになった。コロナ禍によって感じた孤独感や、他人の存在を感じない生活は、集合住宅に住む人々にとっては特に異常であり、今まで通り人の顔を見て話したい、他人とコミュニケーションをとりたいと強く思ったのではないだろうか。

厳しい制限が緩和された今、集合住宅に住む人々にとって必要なのはどのような場所なのだろうか。

気軽に人の存在を感じられるコモンスペースとプライバシーを守る自室を明確に分けてしまうのではなく、開いているがプライバシーがきちんと守られているスペースや、少し閉じているが他人の気配を感じ、様々な人が出入りするスペースを設け、様々な空間を造り出すことができる集合住宅とした。そして住人自身が空間の分け方や他の住人たちとの過ごし方を選び、一人ひとりが居心地よく過ごせるような集合住宅を計画したいと考えた。(図 1)

2. 計画目的

本計画は幅広い年代、世代、家族構成の人が生活することを想定した集合住宅の計画である。

この集合住宅は住人の住まい方によって周囲とのかかわり方を選択し、住人一人一人が心地よいコミュニケーションをとりながら生活していけるような集合住宅として計画した。新型コロナウイルスによって窓を開けるだけで不安が募ったり、密を避けるために知り合いと会っても話すことが出来なかったりと生活が一変し、今まで当たり前だったことが出来なくなった。罪悪感なく窓を開けられる、隣人の顔を見て挨拶ができる、子供たちが気兼ねなく外で遊ぶことができる、そんな場所が必要であると考え、計画を進めた。

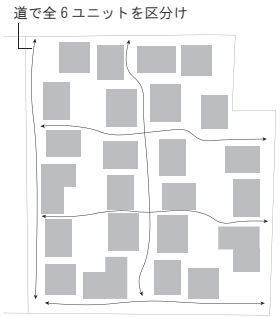


図 1　ダイアグラム

3. 概要

3-1. 平面計画

住戸一つ一つを独立させ、まるで一戸建てに住んでいるかのような集合住宅を計画した。また、一階建てと二階建ての住戸があり、住人が好きなほうを選択できる。そして各住戸にはプライベートな外部空間を設けており、他の住人の視線などを気にせず窓を開けたり外に出たりできる。オープンなプライベート空間や少し閉じた限定的なコモン空間など、様々なタイプの空間を用意し、それらを緩やかに並べることで住人が自分で選択して空間を利用することができる計画とした。一階はプライベート、コモン、パブリックが連続しているが二階はプライベート、コモンのみがつながり、各住戸の壁で空間が分けられている。三階にはコモンスペースなどはなく、プライベートな住宅部分のみである。住人の生活スタイルに合わせて住みたい住戸や階数も選択することができる。

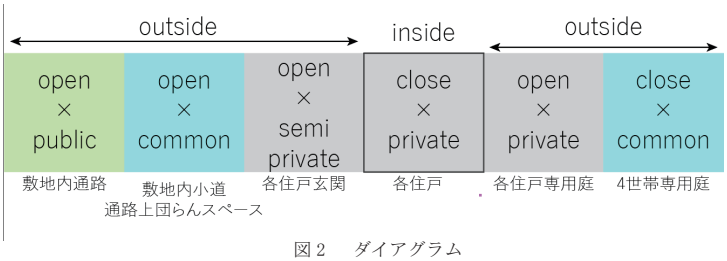


図 2　ダイアグラム

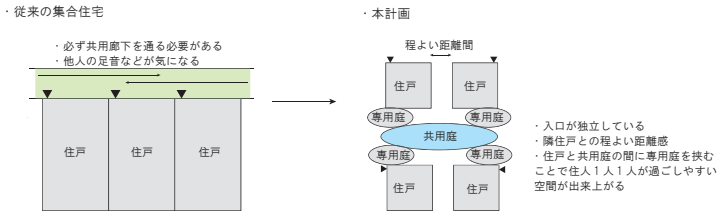
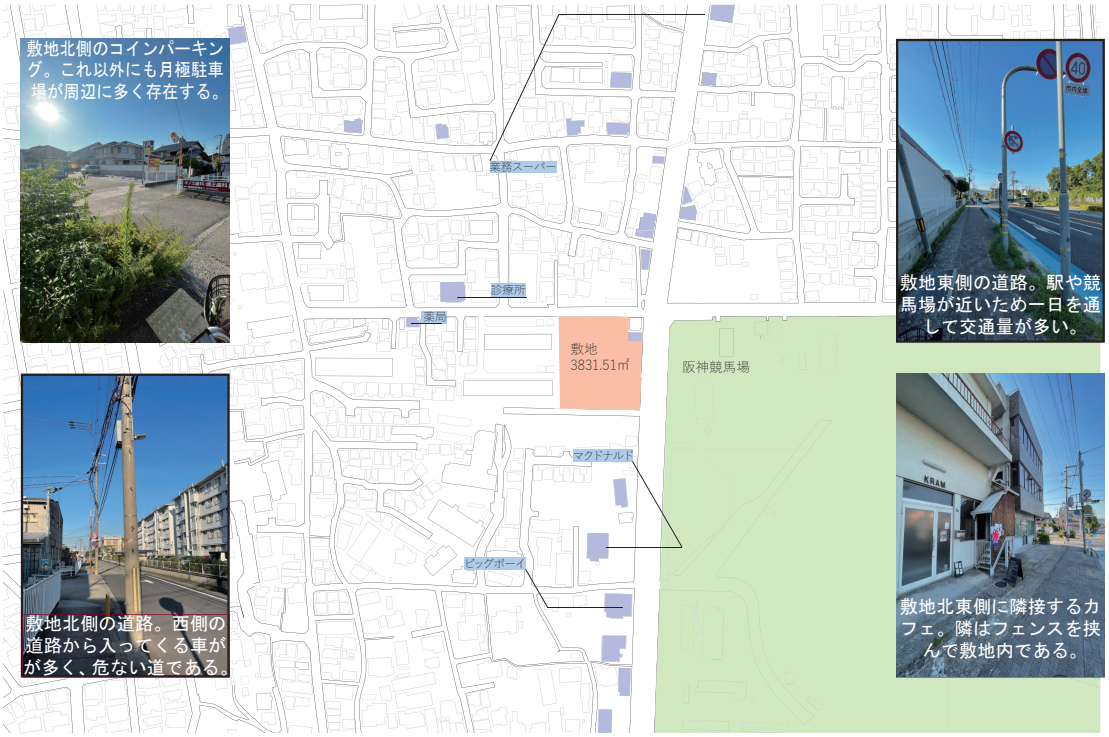


図 3　平面計画

所在地：兵庫県宝塚市鹿塩１丁目１８−１
主な用途：集合住宅
敷地面積：3831.51㎡
建築面積：2233.71㎡
延床面積：3149.26㎡
キーワード：集合住宅、コミュニケーション

Location ： 1-18-1,Kachio,Takaraduka-si,Hyogo
Main Use ： apartment building
Site Area ：3831.51 ㎡
Building Floor Area ：2233.71㎡
Total Floor Area ： 3149.26㎡
Keywords ： apartment building,communication



計画敷地は兵庫県宝塚市の住宅地とした。近隣にはスーパー、診療所、飲食店などがそろっており、徒歩５分でコンビニ、徒歩 11 分で駅がある。集合住宅を計画する意味のある場所で、景観を崩さない場所を対象とした。

敷地周辺には小学校と中学校があり、子連れの家族が多いことや、生活する上で必要な施設が一通りそろっていること、周囲が住宅街であるため集合住宅を計画しても景観を壊す心配がないこと、そして大通りに面しており、敷地へのアクセスが容易であることからこの敷地を選定した。

3-2. 配置計画

住戸は４棟で一ユニットとしており、各住戸の一階部分にはプライベートな庭と、一ユニットに住む四世帯ためのコモン庭が計画されている。各住戸のプライベート庭からコモン庭へは特に仕切りなどはなく緩やかにつながっており、特に使用用途は決めないことで、住人同士の偶発的なコミュニケーションが生まれるような場になってほしいという意図がある。また、一階部分の敷地内通路にはところどころベンチを配置して、積極的にコミュニケーションをとりたい住人が集まれる場として利用できるスペースを設けた。コモンを介さず自宅へアクセスすることが可能であったり、必要に応じてコモンに参加できたりと住人の意思でどのコミュニティに属するのか選択できるような配置を心掛けた。本計画では、あくまで住人同士が自発的にコミュニケーションがとれることを重視しているため、外部空間の用途については特に決めず、住人自身が選択し、空間を利用できることが理想である。



図４　配置計画

水彩の拠点

～サインによる観光資源の発信～

学籍番号　K20339
名　　前　宮嶋大和
指導教員　小梶吉隆

Waterside Nexus

～ Fushimi through the sign ～

Student Number　K20339
Name　Miyajima Yamato
Supervisor　Kokaji Yoshitaka

1. 計画背景

京都には、世界的にも有名な観光名所がたくさんある。しかし、アフターコロナにおける京都の観光業が回復している現在、一部の観光地に人が集中し、それにより観光客の満足度の低下や市民生活への影響が問題となっている。「とっておきの京都プロジェクト」など、市ではこれら一部地域の混雑緩和を図るとともに、観光客の来訪を求めるエリアへの誘客を進めて、市域全体の活性化につなげるため、観光地の分散化に取り組んでいる。

そのひとつに伏見がある。日本史に“安土・桃山時代”と名前が載る伏見は、成立以来、独立した城下の都市として発達してきた。豊臣秀吉が築いた伏見城から明治維新の端緒となった鳥羽・伏見の戦いなど、**伏見は歴史の宝庫である。**

しかし、**それらのほとんどが資料や石碑でしか残っておらず、歴史が町に埋もれている。**そのため目立った名所が少なく、他の観光地に引けを取っており、市内中心エリアからなかなか観光客が流れていないのが現状である。

本設計では、**埋もれている歴史・文化をサインとして顕在化させ、伏見の魅力を発信するとともに、伏見桃山エリアの観光促進**を目的とする。また、単に観光客の増加を目指すだけではなく、地域住民もこれらの観光資源を享受することができる、地域振興に向けた観光交流施設『ながれあい』を計画する。

2. コンセプト

かつての港のような人・物・文化が交わる伏見の新たな拠点をつくる。

本建築は観光客と地域住民に開き、情報提供、交流の場、余暇活動、創作活動などと、様々なアクティビティに対応できるようにし、そこから新たな交流や学び、発見、文化の接点を生み出す。

港は地域のアイデンティティや歴史の一部であり、その復活は地域への誇りとアイデンティティの強調につながる。


「伏見船場」『都名所図会』


『豊国伏見城之図』

3. 選定敷地

敷地は京阪電車「中書島駅」と「大手筋商店街」の中間地点にある濠川沿いである。近くに架かる蓬莱橋は歩行者がよく通り、北に進めば竜馬通り商店街へと続く。観光客も観光ルートとしてよく通ることから本設計の敷地とした。また敷地周辺には、日本有数の酒どころとして知られる月桂冠の酒蔵や坂本龍馬ゆかりの寺田屋などの史跡が点在し、伏見酒が楽しめる飲食店も充実している。

4. 伏見が目指す観光

伏見には多くの歴史的史跡があることは確かである。しかし、単にそれらのみを売りにして観光客を集めようとしたところで、他の観光エリアには太刀打ちできない。

『伏見の自然と環境』第一章で久米直明氏は、「伏見の売りは自然との共生の上に立った文化と伝統」と述べている。これを参考に、**伏見が歩んできた文化を感じられる計画を提案する。**文化を売りとしたまちづくりは、人のあるべき暮らしを示し、まちづくりの一つの模範となることができる、まちそのものが観光の対象になると考える。

5. 計画内容

①サインによる観光資源の発信

1）雁木広場

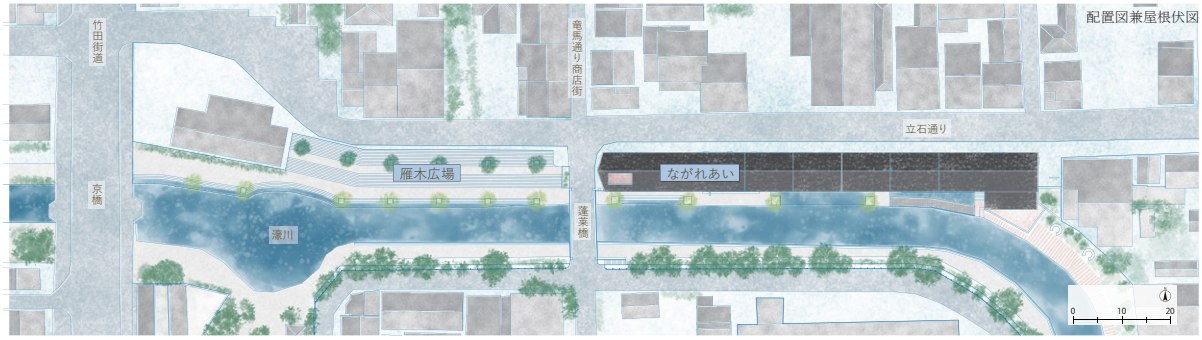
かつて南浜町は、豊臣秀吉の伏見城築城にともなう建築資材を運ぶため、宇治川の流路改修工事を行い、“伏見港”と呼ばれる荷揚げ場であった。江戸時代の濠川沿いには問屋、宿屋、酒蔵が建てられ、米や薪炭、できた酒などを運ぶ小舟や、三十石船などの大小の船で賑わい、大坂との水運の拠点となった。

しかし、鉄道など陸上交通機関により、やがて水運の機能が衰えた。かつての船着き場は現在ではおおよそ半分ほどが埋め立てられ、“雁木”があった場所には建物が建ち並んでいる。

今ではその姿が見られないが、港は地域のアイデンティティや歴史の一部である。港を特徴づける要素である**雁木を復興し、地域への誇りとアイデンティティの強調につながることを期待する。**


大正～昭和初期の寺田屋浜


現在の南浜町　濠川



所在地：京都府京都市伏見区南浜町
主な用途：観光交流施設
敷地面積：1,144m^2
計画面積：2,135m^2
建築面積：724m^2
延床面積：1,270m^2
キーワード：観光・サイン・地域コミュニティ・地域文化

Location ： Minamihama-cho,Fushimi-ku,Kyoto-shi,Kyoto
Main Use ： Tourism exchange facility
Site Area ： 1,144m^2
Plan Area ： 2,135m^2
Building Floor Area ： 724m^2
Total Floor Area ： 1,270m^2
Keywords ： Tourism, Sign, Local community, Local culture,

2）伏見のランドマーク
建物そのものが観光拠点のサインとなるように計画した。南側の外観は、横を流れる濠川との調和を図るためにワイヤーを使用し、滝のような迫力ある演出を施した。建物はただの構造物に留まらず、周囲の自然との調和を体現し、地域全体に独自の存在感を放つこととなる。
北側の外観においては、町の重要な文化財である酒蔵の特徴的な要素を取り入れ、建物が町と一体となるような外観を目指した。このアプローチにより、建物が単なる存在にとどまらず、地域の文化的な背景と調和しながら、町全体に愛着を持たれるようになる。そしてながれあいが観光客だけでなく、地域住民の拠点にもなることを目指す。

3）手すりが示す伏見のアイデンティティ
建物の手すり、柵は臙脂色で彩られている。これは伏見城の高欄などに使用されている色であり、伏見のアイデンティティを象徴している。臙脂色の手すりを設置することで、手すりが空間アートの一部となり、訪れる人々に特別な空間体験を提供することができる。
また臙脂色は赤系統であり、警戒色としても知られている。これを濠川沿いの柵に用いることで、危険を知らせるサインとしての役割を果たすと同時に、伏見のアイデンティティを際立たせることができる。


蓬莱橋からのながれあい

②『ながれあい』で交わる人・物・文化
1）人 / 集いの場、交わりの場
２階の集いの場では、ものづくり体験教室や子育て支援講座など、**多様なアクティビティを開き、子ども、高齢者や観光客の交流を図る**。
柔軟なレイアウトや多様なイベントのニーズに対応できるように、狭い間口の中でも部屋を仕切る壁を設けないことで広々とした空間を作り出す。代わりとして、ここでは可動柱を使い、パーティションや展示スタンドなどに転用することで、空間にフレキシビリティを与える。
３階の交わりの場では、コワーキングスペースとして利用し、地域のビジネスコミュニティを支援する。地元のフリーランスやアーティストなど、**異なる分野の人々が出会い、アイディアの交流やプロジェクトの共同推進**が可能となる。

2）物 / テナント
１階のテナントには、地元アーティストや新しくお店を開業したい人のためのポップアップストアを設ける。一定期間ごとにテーマを決めてテナントを募り、それに合わせたイベントを施設全体で行う。
ポップアップにすることで、施設には常に変化があり、地域住民も飽きることなく訪れるようにする。また、テーマを決めることで同じ業種の人同士が互いにコミュニケーションを取って学び、スタートアップハブのような場所にもなる。
このような生産者と消費者が直接交流し、物のやり取りをすることで、人々や文化を結びつけ地域全体の経済的な発展と社会的な連帯感を促進することが期待される。

3）文化 / 地域住民とアーティスト
多様性の尊重や教育的価値の観点から、地域住民が新たな文化に触れるために**“アーティスト・イン・レジデンス”**を施設に取り入れ、アーティストと地域の文化の接点を生み出す。滞在中のアーティストは通常、自分の制作に専念するだけでなく、地域の文化やコミュニティとも交流し、異なる視点からの刺激を受けることが期待される。

6.『ながれあい』が伝える“サイン”
道端には歴史的な事件の跡が刻まれた石碑や、名だたる大名の名前が掲げられている町名案内板があり、観光客はまちを歩くだけで様々な歴史文化に出会うことができる。このように、まちには気づかないだけで小さなサインが溢れており、それが伏見の雰囲気や特色を形成している。
『ながれあい』では、伏見の文化を感じてもらうために地域の文化的な要素を取り入れ、伏見のアイデンティティを表現した。また、伏見にとって多くの文化を生み出し歩んできた水を空間に取り入れ、**水を通して伏見の文化を知ってほしい**。これが『ながれあい』が伝える“サイン”である。

集いの場

雁木広場


参考文献
書籍
『グラフィックデザイナーのサインデザイン』廣村正彰ほか . 2009 年 9 月 10 日
『伝えるデザイン　サインデザインをひもとく 15 章』日本サインデザイン協会 . 2016 年 2 月 20 日
『伏見学ことはじめ』聖母女学院短期大学伏見学研究会 . 1999 年
『伏見の現代と未来』聖母女学院短期大学伏見学研究会 . 2005 年 4 月 11 日
『旅行者と地域が創造する「ものがたり観光」』片山明久 . 2021 年 3 月 20 日
『京都を学ぶ【伏見編】ー文化資源を発掘するー』京都学研究会 . 2022 年 3 月 24 日
『伏見の自然と環境』聖母女学院短期大学伏見学研究会 2004 年 6 月 1 日
WEB
京都市観光協会「とっておきの京都プロジェクト」
JR 東海「そうだ京都、行こう」
伏見観光協会

僕がいた街　-22 年前からの置き手紙 -

学籍番号　K20340
名　　前　宮田凌誠
指導教員　白鳥洋子

The town I was in

-A letter left from 22 years ago-

Student Number　K20340
Name　　MIYATA Ryoma
Supervisor　　SHIRATORI Yoko

1.　はじめに

人々が抱く歴史と文化、自然が調和した伊賀への印象とは裏腹に、様々な課題を抱えている。2022 年 1 月から 3 月にかけて行われた、坂倉準三が設計した旧伊賀市役所のリノベーションに関するワークショップに自身が参加し、これらの課題が浮き彫りになった。それは届かぬ市民の声や労働・観光の衰退などであり、昔から認知されていたが、未だ理想とは離れた平行線上にいる現状であると言える。

それに対して自身や人々の 22 年間の記憶の蓄積を舞台に、住人や社会の出来事、想い出との対話を通じて、集合住宅を主軸に浴場（テルマエ）及び観光も含むイベント屋台を設け、課題に関する接点や交点とし、諸状況の改善を試みる。加えて伊賀の歴史や都市性を読み解き、建築的観点から更なる魅力を持つ伊賀の未来について再考することを目標とする。

2.　研究背景

2.1　背景

2022 年に行われた旧伊賀市役所に関するワークショップに一市民として参加したことが、伊賀の未来を再考する契機となった。そこでは参加者には付箋とペンが配布され、「どのような空間や施設が望ましいか」「3 階の議会室をどのように活用すべきか」などのテーマが提示され、各自の考えを付箋やホワイトボードを使ってディスカッションする形式であった。多くの参加者が挙げた伊賀の現状に対する課題や、中には涙ながらに地域が抱える問題や設計案に対して改善を求めて、懸命に訴える姿が印象的であった。これに触れ、伊賀の課題を改善すると同時に、伊賀の今と未来についてワークショップのように、全ての人が語り合える場が必要であると確信した。

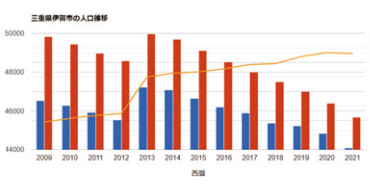


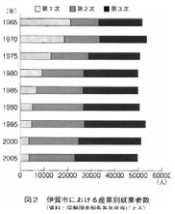
写真 1　旧伊賀市役所に関するワークショップの様子

2.2　課題

(1) 労働力・職人の減少

過去には企業の進出や住宅団地の開発などにより、人口は緩やかに増加していたが、最近では住宅団地への人口流入が減少し、それに伴って全体的な若手の人手不足に転じている。同時に、伊賀牛や伊賀米、伊賀茶などの第一次産業に従事する労働者も年々減少しており、これにより伊賀の労働力確保がますます課題となっている。





左）図 1　三重県伊賀市の人口推移
右）図 2　伊賀市における産業別就業者数

(2) 届かず埋もれる市民の声

ワークショップでは市民の様々な声を聞くことができた。それは前向きな希望や、悲痛な叫び声。反映されることがほとんど無く、日々積もらせる想いを一方的ではなく、すべての人が語り合えるフラットな場が必要である。

(3)PR 力不足

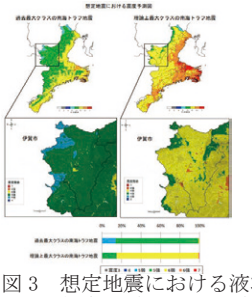
伊賀市は様々な魅力を有している。世間一般的には忍者が有名であり、市民としても誇りに思う。しかし伊賀の観光は忍者の一本槍であり、天神祭りや町家が並ぶ旧市街地などのその他の魅力を十分に伝え切れていない事実は大変もったいないことである。一つの大きな強みのみならず、多彩な可能性にも目を向けることも大切なのではないだろうか。

(4) 自然災害への対策

三重県は南海トラフなどの自然災害に対して大きな被害を受けると想定されている。理論上最大クラスでは伊賀市で震度 6 弱、海岸沿いでは 6 強から 7 とされている。また想定地震における液状化危険度では三重北部の桑名市から伊勢市までの海岸沿い全域が極めて高いとされており、また尾鷲などの南部も津波で大きな被害に見舞われる。

これらを踏まえ、以前陸上自衛隊員に窺った話では、災害発生後　伊賀には自衛隊による救助や支援が行われないそうだ。正確には、比較的に三重県全域の中でも伊賀市は被害度が少ないことから他の地域に比べて優先順位が低いとのことである。市民は受け身の姿勢でよいのだろうか。

また伊賀市には外国人住人数は約 5500 人にのぼり、外国人の視野に入れた災害計画が必要である。加えて関西圏からの来訪者も多いことから、多数の帰宅困難者などの影響を受けると想定される。伊賀市内に留まらず、外部からの避難者受け入れ体制を整えることも未来を考える上で、必要である。



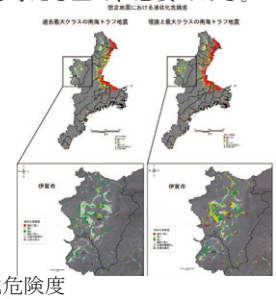


図 3　想定地震における液状化危険度
図 4　想定地震における震度予想図

3.　対象敷地

3.1　敷地概要

三重県伊賀市は三重県北西部に位置しており、山や川に囲まれ田畑の広がる豊かな自然を誇る。また伊賀上野城と城下町、忍者、俳句、伊賀焼など多彩な文化価値を多く有する。現在の伊賀簡易裁判所の敷地を対象とし、周囲には旧伊賀市役所や伊賀上野城などが近接する街の中心地である。





左）図 5　敷地案内図
赤：敷地　　緑：樹木　　青：堀、川、池
旧市街は城下町の街区が残り、概ね古地図と一致する。
右）図 6　伊賀市の古地図

3.2　敷地分析

敷地の特徴として、学生の通学路に面しているだけではなく、周辺には駅、公共施設、店舗が多数存在しており、時間帯によらず絶え間ない人通りがある。このため地域の活気や交流が期待できる場所と言える。さらに、観光客が多いことから、単なる市民の循環にとどまらず、広範囲にわたる人々が訪れる場所であることが分かる。

敷地の北側と南側では、周辺の町並みが異なる特徴を持っている。北側は住宅地や大型商業施設が建ち並ぶエリアであり、近代的な商業活動が盛んである。一方で、南側は城下町の趣

所在地：三重県伊賀市上野丸之内 130-1
主な用途：複合施設（集合住宅、浴場、観光施設）
敷地面積：3278.15㎡　建築面積：2076.04㎡　延床面積：3803.06㎡
想定利用人数：住宅：34 住戸 82 人　浴場：約 200 人
観光施設：約 140 人
キーワード：記憶の蓄積、都市性、集合住宅、テルマエ、広場計画、観光屋台

Location ： 130-1,Uenomarunochi,Iga-shi,Mie
Main Use ： Complex Facility （Housing Complex,Thermae, Tourist Facilities)
Site Area ： 3278.15m^2
Building Floor Area ： 2076.04m^2
Total Floor Area ： 3803.06m^2
Keywords ： Accumulation of Memory, Urbanity, Thermae

を残しつつも、商店街の再生や美観の向上に力を入れており、魅力的なエリアが拡がっている。これにより、敷地は異なる雰囲気やアクティビティを楽しむことができる多様性を持った、地域のインターセクションの機能を持つ場に位置する。

4.　旧伊賀市役所の概要

坂倉準三が 1964 年に三重県伊賀市丸之内に設計した元市庁舎。機能的でありながらも美的な要素を備え、スキップフロアが特徴的である。市庁舎が単なる行政機関ではなく、地域のアイデンティティや共同体としても大きな影響力を持つ魅力的な建築である。

5.　計画概要

(1) 木造フレームと多様な住空間

木造フレームを採用することにより、建物の軽やかさと透明感を引き立て、旧伊賀市役所との調和を試みる。また木の温もりが地域の文化や町並みと呼応するとともに、建物全体に木材の温かみを与える。

またフレーム内の住戸に蔵の設置や豊かなアプローチ空間、趣味やライフスタイルが反映される可変性のあるプランとすることにより一軒家に住んでいるような豊かな内外部空間を創出する。木造フレームを取り入れることで、住まいの選択性を拡張し、地域全体に一体感と美しさをもたらすことを目指す。

(2) 伊賀上野の伝統的な町家の特色を取り入れたデザイン

伊賀の古風な町並みに調和するためにも、伊賀上野の町家の特徴に注目した。そのため、本計画では、伊賀の町家で見られる妻入りと平入りが入り混じる独自の町並みや、特有の平面構成を取り入れたデザインを採用することで、伝統的な雰囲気を引き継ぎつつも、新しい魅力を加えた空間を提案する。

(3) 浴場空間を構成するローマ建築の木造的解釈

・テルマエの平面的な特徴を浴場空間に組み込んだ。具体的には、脱衣所を介して 2 つの浴場にアクセスできる構造とし、全利用者と子供連れ、高齢者、身体が不自由な方が利用しやすいような浴場構成とした。

・浴場空間に木造アーチを取り入れることで、西洋の伝統的な建築様式と自然素材を組み合わせ、温かみのある雰囲気を演出する。木造とアーチが生み出す直線と曲線美は、空間に柔らかな印象を与え、木の質感と調和している。これにより、訪れる人々に心地よいリラックスを提供し、浴場の特別な雰囲気を醸し出す。

・構造体である柱の柱頭に南北方向と東西方向に交差するように柱に沿って梁を配置することで、柱頭デザインを施すと同時に、水平剛性を確保する。

・シュラクーザの教会を参考にしたテルマエ空間のペディメントを木造で解釈することで、西洋建築様式と伊賀の風土が融合したデザインが生まれる。この融合により、伝統的な西洋建築の要素が伊賀独自の雰囲気と調和し、独創的で魅力的な空間を創り上げる。

(4) ギリシアの都市的特徴を組み込んだ広場計画

伊賀上野城周囲がアクロポリスの丘、旧伊賀市役所や小中学校、本建築がアゴラという関係性に注視し、広場を建築内に挿入することにより、都市性を創出する。
また「火・風・雷・水・土」の五大性質を広場や住戸に取り入れることで、伊賀の忍者文化を広場に織り交ぜつつ、同時に伊賀とギリシアの文化を結び付けることにより、独自で豊かな都市環境が生み出せる。



◂写真 2
伊賀上野城と旧伊賀市役所、小中学校の関係を表した図

(5) 楽市楽座を取り入れた屋台型観光施設

軽快な構造を持つ屋台の形態を採用することで、移動可能な特性を活かして様々な場所で伊賀のマーケット文化の雰囲気を再現し地域の特産品や食文化を提供する。

これにより、地域の観光資源を魅力的に展示し、観光客や地元の住民が気軽に楽しむ場となり、地域の活性化と新たな訪問者誘致に寄与することを試みている。偶発性に満ち、賑やかで活気に満ちた商店空間と移動可能な屋台型観光施設が共存することで、地元の魅力と個性が感じられる総合的な場を創出する。

6.　記憶の蓄積

22 年間の住人や社会の出来事、想い出との対話を通じて「記憶の蓄積」から本質的な建築を見つめ直し、新たな視点からその魅力を引き出す試みを行った。住人について深く考察することにより、建築物が単なる空間の提供者だけでなく、共感や思い出の場としていかに機能しているかを再認識することができる。
記憶の建築化

6.1　記憶の建築化

・22 年間を彩る 34 住戸 83 人の住人情報を具体的に設定することで、記憶を介した時間軸の奥行きを創出し、生活や体験を通した住人同士、地域、建物との繋がりを図る。

・住み継ぎ、住みこなし、住み開き、住み替え、住み分けの 5 つの手法を住戸内に取り入れることで、住まいは単なる空間を越え、家族や住人の世代を経て、歴史や思い出、地域との繋がりを空間的に継承する機能を果たす。以下は 5 つの手法の例である。
住み継ぎ：301 明原さんがドイツで買ったソファを継ぐ
住みこなし：501 松井さんは WIC を動画撮影室として使用
住み開き：103 浪川さんはアプローチ空間に本棚を置き、ブックスペースとして提供
住み替え：302 中村さんの妊娠が分かり、ファミリータイプの 402 杉山さん住戸と交換
住み分け：201 井上さんは蔵を 308 白鳥さんに住み分ける。白鳥さんは絵画教室として蔵を利用。



◂写真 3
22 年間の住人同士と共通要素、建築との繋がりを視覚化した図

7.　おわりに

22 年間の住人や社会の出来事、感情との対話を通じて築かれた『記憶の蓄積』から本質的な建築の魅力を見つめ直し、建築的に伊賀の様々な問題に向き合った。

卒業制作に取り組むにあたって、映画のシナリオを描くように建築設計を行った。以下は本物語のあらすじである。
「ある男のもとに一通の差出人不明の手紙が届く。そこにはどこか見覚えのある文体で「　　」と綴られた記憶にない文章。にわかに信じがたいが、どうやらこれは〇〇に〇〇ことが記されているらしい。そして知る。自分がしなければならないことを。男は名もない設計士であった。」

この制作は映画のシナリオを描くように拓く、未来への手紙である。

8.　参考文献

1)　三重県伊賀市の人口推移
https://www.population-map.com/mie
2)　伊賀市中心部における観光地業の現状と課題
https://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/files/public/4/47101/20160528084926351951/bgeou_147_035_044.pdf
3)　伊賀市地域防災計画について
https://www.city.iga.lg.jp/0000003257.html

まちに寄りそう産業の館

学籍番号　K20341
名　　前　村木駿太
指導教員　杉本直子

House of Industry

Student Number　K20341
Name　MURAKI SHUNTA
Supervisor　SUGIMOTO NAOKO

計画背景

浜松市は工業が盛んでありスズキ自動車、ホンダ自動車、ヤマハ、河合楽器など多くの企業の発祥地でもあり、自動車、楽器の街として知られている。しかしかつては農業が盛んな街でもあった。南アルプスから流れる河川や扇状地、台地など農業をするのに適した条件が揃っている。しかし、少子高齢化や産業の工業化により多くの人が農業から離れてしまった。そうした過去から浜松の農業の復興をはかり、工業も農業も盛んな街として復活させる。

計画目的

浜松市は面積の 70 パーセントを森林が占め工業のみでなく豊な土壌から農業、林業に適した土地である。そういった可能性のある土地でありながらここ 40 年で林業従事者は約三分の一に、農家もここ 10 年で３分の２程度に減少してしまっている。かつては農業も非常に盛んな土地であった。技術の進歩や効率化されてきているとはいえ人手不足は深刻化しているのが現状である。これらの要因の一つに身近に農業などの一次産業に触れる機会が顕著に少ないことが挙げられる。
これから先、さらに人手不足が深刻化すると産業の衰退や地域の特色がなくなってしまうということに繋がりかねない。このような人手不足の農林業で障害を持った人や幼稚園児、観光客、地域の住民などを巻き込んで栽培する事のできる施設を計画する。

敷地内には障害を持った人が生活をすることができる建物と様々な人を呼び込む事のできる畑、直販所を配置する。また障害を持った人が栽培し、販売までを行うことで通う人の自立、雇用の場になるようにする

計画敷地

浜松市は静岡県西部に位置し、南は遠州灘、北は南アルプスに囲まれ非常に自然豊かな場所でもある。人口は約 80 万人おり政令指定都市に指定されており全国的に見ても人口の多い都市である。
敷地場所は静岡県浜松市南区砂山町にある。浜松駅から徒歩数分の場所に位置し､比較的人通りの多い住宅街にある。近くには税務署、保育園、小学校、ホテルなどが立ち並び様々な属性のひとが行き来する場所にある。
付近は近年、区画整備などの開発が行われ非常に人の往来がしやすい場所になっている。住宅地でありながらも様々な属性の人が行き来するこの場所を選択した。飲食店等も多く様々なきっかけになる場所だと考える。

大きな駅の近くの計画することで気軽に立ち寄ってもらうことのできる場所にする。また『近所の公園』という要素の組み込むことで子供が小さな頃から畑に触れることで将来の選択肢の可能性 WO 広げることのできる空間とする。

天竜杉の歴史

天竜杉の産出地である天竜区は約 90% が山林で占められている。浜松市はかつて農業の街として発展してきた。
浜松市を流れる天竜川はかつて暴れ天竜と呼ばれるほど洪水等の災害災害を繰り返していた。そこで浜松市出身の金原明善が天竜川上流に杉の木を植林し、洪水から守ったという歴史がある。約 300 万本の樹木を植樹した。天竜区は急斜面かつ雪害が非常少ないため真っ直ぐな材が育つ。それらの杉やヒノキが現在では日本三大美林の一つとして知られている。

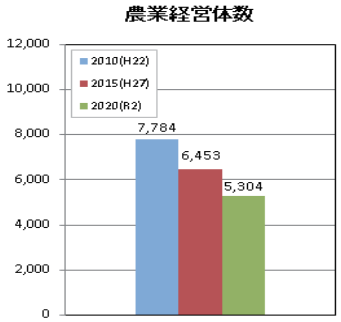


図１　農業経営対数の推移

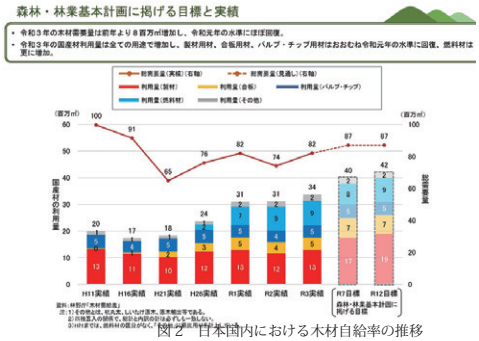


図２　日本国内における木材自給率の推移



図３　静岡県と周辺



図４　敷地周辺図

所在地 : 静岡県浜松市南区砂山町 698
主な用途 : 障害者施設
敷地面積 :6,842.86 ㎡
用途：福祉支援複合施設
用途地域：近隣商業地域
建築面積 :2,115.02 ㎡
延床面積 :2,331.02 ㎡
建蔽率：80%
容積率：500%
区域区分：市街化区域
キーワード : 産業復興、地域活性化、林業、農業

Location : 698 Sunayama,Minami-ku,Hamamatsu-City,Shizuoka
Main Use : welfare support complex
Site Area : 6,842.86 ㎡
Building Floor Area : 2,115.02 ㎡
Total Floor Area : 2,331.02 ㎡
Keywords : industrial restoration,community revitalization,forestry, agriculture

計画要点

計画するにあたって重要な点は以下の通りである

1) 地域産業の復興と若年層への継承

工業製品だけではなく、農作物、天竜杉などの名産品の発信、継承ができるような場所の計画。地元の人だけでなく観光客、若い層も訪れるような計画。

2) 地域コミュニティの形成

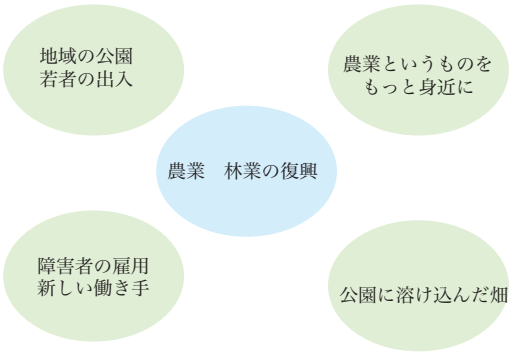
障害者施設を含む計画とし地域の子どもたちや近所の人たちを誘い入れることで近隣地域でのコミュニティを図る。また小さい頃から地元の特産品に触れることで将来の選択肢を増やす。

3) 木質感を基調としたデザイン

日本三大人工美林の一つでもある浜松市天竜地域で多く産出され全国的にも評価されている天竜杉、ヒノキを多く使い産業の発展に繋げる。
日本では非常に多くの木材を採ることができるが外国産の安い木材が現状があり国産材の消費を促す事のできる空間づくり。

4) 若い世代が地場産業にふれることのできる環境づくり

現代の若い世代は大学を卒業後にサービス業に就くことが多く一次産業に興味を持つ人の割合が非常に少なくなっている。
そこで普段の生活動線の中に農業や林業という仕事にふれることのできる機会が混在している必要があると考えた
かつては畑の中に宅地があるというのが当たり前の光景だった。しかし現在は都市部に農地があることは極めて少ない。
そこで









農福連携

今回の計画の一つに障害を持った方が働くというものがある。
現在、この取り組みは厚生労働省と農林水産省が行っていると取り組みの一つでもある。農業従事者が顕著に減少している中で施設で時間を過ごすことの多い人を実際に労働者として雇用することで自立を促し高齢化が進む中新たな働き手として人手不足の解消に繋げることができると考える。
またこの農福連携という取り組みをもっと世の中に広めることのできるモデルになると考えている。

この計画を通して

地元の若者の『働く』選択肢を増やし衰退しつつあるかつて盛んだった農業と林業の復興をはかりさらなる浜松の魅力を発信、推進できる空間づくりをする。また障害を持った方が農作物の生育から販売までを行うことで自立を促進し、活躍の場を広げる。地域の人から観光客、老若男女かかわらず多くの人が気軽に利用し利用者やそこで働く人が交流しコミュニティの輪を広げることができる気持ちの良い空間づくりをする。

構造形式

障害者施設：木造軸組平屋建
カフェ：木造軸組平屋建
直販所、レストラン：木造軸組地上 2 階建

参考文献

・新しい郊外　馬場正尊著
・街並みの美学　芦原義信著
・アメリカの家・日本の家―住宅文化比較論　戸谷英世著
・厚生労働省 HP
・農林水産省 HP
・浜松市 HP：https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp

枚方パノラマBBQ ~それぞれの楽しみ方~

学籍番号　K20342
名　　前　森下武海
指導教員　河村大助

HIRAKATA PANORAMA BBQ ~ one's own way of ~

Student Number　K20342
Name　morishita tatsumi
Supervisor　kawamura　daisuke



背景
日本でもBBQは数多くの人たちに利用されており、
夏のイベントでは目立った存在である。
ただ現在のBBQ広場では規模感・つながりが
あまり感じられない。

敷地
広々とした空間にはなっているが、最大限に
活用できているとは感じられない。
さらに整備なども行われておらず無法地帯となっている。
周りのは水があり、植栽があるので
それを活かした広場を提案した。
近くにはスタジアムがあり、淀川公園では
イベントなどが開催されているが、
あまり注目されておらず閉鎖的なものである





現段階の敷地周辺写真



改善後
元々あるイベントごとつぶしたくないので、
つながりをもたせることを大事にした。
夏場だけでなくどんな時期でも利用者が増えるように
中の施設を導入する。
元々あるものを壊さずつながりをもたすことで、
元々の利用者と新たな利用者の交流をもたらす。

イベント等が開催

つながりを持たせる

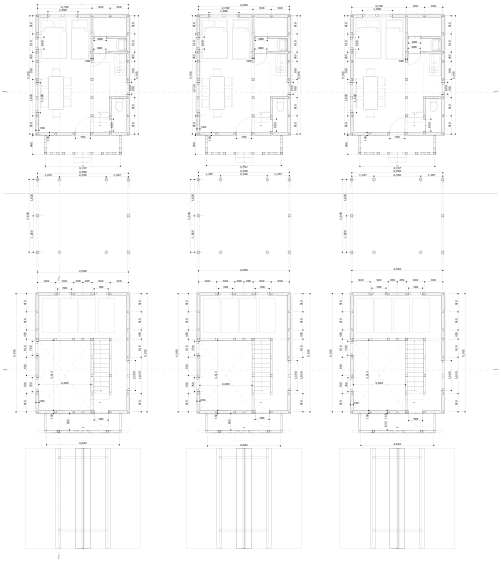
施設を並べて繋がり持たせることでグラデーションのようない一体感のある広場になる。



所在地：大阪府枚方市　淀川公園
主な用途：コテージ・広場
敷地面積：14，140.80 ㎡
建築面積：コテージ一階 26.91m²
二階 17.76 ㎡　BBQ スペース 521.81 ㎡　その他 201.52 ㎡
延床面積：コテージ 44.97 ㎡　620.60m²
キーワード：自然・BBQ・デトックス・つながり・木

Location ： osaka hirakata yodogawakoen
Main Use ： cottage/square
Site Area ： 14,14080m²
Building Floor Area ： cottage26.91m² 17.76m² BBQspace521.81m² other201.52m²
Total Floor Area ： cottage44.97m² other620.60m²
Keywords ： Office, Energy Conservation, Base Isolation

施設概要



1 コテージ（2 階建て）
ポイント
寝具や水回りがついているので、キャンプ初心者にぴったりとなっている。
1 家族でも十分楽しむことが可能だが、2 家族でもゆっくり利用することができる。

テラス設備
大きなテーブルが真ん中にありそれを囲むように
イスが並べてある。
BBQ グリルや焚火台が屋根の下にあるので雨の日でも
安心に利用可能。

室内①
1 階にはテーブル、イスやベットのほかシャワールーム、
キッチン、トイレ、洗面台がある。

室内②
2 階には広々とした空間の就寝スペースがあり、
吹き抜けとなっており、広々とした空間になっている。



コテージ外観



入門向けの
BBQ 広場



受付・ショップ

5 受付・ショップ
エントランス受付とショップが一体型の施設になっている。
ショップは 3 つにわかれており食材・BBQ 機材・遊び道具のレンタルができる施設。
（BBQ グリル・薪・網・タオル・軍手・コップ・箸・皿）
などといった BBQ で必要不可欠なグッズが購入、レンタルえｄきるようになっている。

2 上級者向けの BBQ 広場
自然体を体験してほしいと考えた広場になっている。
ここでは基本的にすべて持ち込むとし、テントなどを
自らで設置し、本格的にキャンプを楽しむことができる空間になっている。
車も乗り入れることができ、車中泊も可能。
他の広場より自由度が高めの広場になっており、
周りも樹木で囲まれているのでマイナスイオンを感じながらリラックス効果を堪能できる。

3 BBQ 入門向けの BBQ 広場
この広場は誰でも気軽に手ぶらで立ち入ることができる広場になっている。半屋外になっていて、雨風を気にすることなく楽しむことができる空間になっている。テラスも併設しており天気のいい日にはテラスでの食事も可能で様々な環境でも利用者が不便なく利用できるようになっている。

4 こども広場
BBQ だけの利用だけでなくこどもが遊ぶ場所、ペットが遊ぶ場所も併設。
駐車場の隣と BBQ 広場の間にあるので親御さんが目の届く範囲になるので安心して遊ばせることができる。
ペットも利用可能にすることで、こどもたちのふれあいの場としても活用でき、コミュニケーションがとることが可能。

6 その他
各施設にはトイレが併設しており、トイレが遠くて不便などといった問題点をなくしている。
駐車場は広々としており、不便なく駐車することが可能。

竹をあじわう―西山の竹林保全と活用―

学籍番号　K20343
名　　前　森下菜々香
指導教員　小梶吉隆

1. はじめに

1-1　研究背景

私は近くに西山や川、竹など自然を身近に感じられる環境で生活してきた。しかし、2013 年に駅が開業し、高速道路が開通したことにより便利になった一方、川にいたホタルが見られなくなり、環境が大きく変化した。こうした経験から、今まであった自然環境は当たり前ではないと実感し、今ある自然環境を守り、これからにつなげたいと考えた。西山では森林整備計画が行われている。しかし、森林整備には多くの手間と費用がかかるため思うように進められない。また、この地域には竹が生殖しており、成長速度が早いため、放置竹林の拡大が進んでいる。よって今ある自然を守るために民間主体の計画を立て、より多くの人に認知してもらい、訪れたくなる場を計画する。

1-2　研究目的

近年、地球温暖化など環境問題が懸念されており、環境負荷を削減する取り組みが注目されている。環境省が発表している脱炭素先行地域での取組内容の一つとして「地域の自然資源等を生かした吸収源対策等」がある。しかし、実際の地域に目を向けると自然資源を生かすための活動があっても周りが周知できていなかったりと十分に生かしきれていない面が多くある。そこから今回、私は西山の利点や課題に注目し、地元の特産品である筍だけではなく竹の様々な利用方法について研究し、竹の良さを人々に感じてもらえる提案をする。

2. 対象敷地

2-1　西山の現状と課題

面積は約 800ha あり、西山の植生は二次林 64%、竹林 20%、人工林 16% となっている。竹林面積は 215ha あり、そのうちの 80ha（40%）は農地竹林である。竹林はタケノコの生産を目的として植えられたため、山裾に位置している。

課題としては、手入れ不足による森林や竹林の荒廃、放置竹林の拡大、イノシシやシカなどによる獣害、生物多様性の低下、病害虫や自然災害による木々の枯死な森林ど、多くある。図 1 は現在の植生図で図 2 は手入れをしなかった場合の将来の予測植生図である。

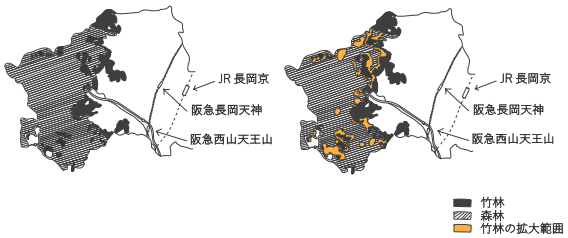


図 1　左：現在の植生図　右：将来の予想植生図
出典：西山森林整備構想ゾーニング資料

実際に竹林の管理をされている方に話を伺うと山に広がってしまった竹林は車が入れないところも多く、手入れが行き届かないことから元の里山に戻す活動をしていると教えてくれた。また、成長速度が早い竹は料が多く、活用しきれないため邪魔になる。大量に工業的に活用できるようにする必要がある。

2-2　乙訓地方と竹の歴史

乙訓地方は京たけのこの発祥の地とされており、宇治黄檗山の僧が中国から持ち帰り、日本で初めて孟宗竹を植えた場所と伝えられている。

927 年に完成した法典「延喜式」に、朝廷に納める竹が「乙訓園」産出と記載されていたり、1416 年伏見宮貞成親王の日記「看聞御記」に西岡の竹商人が登場している。また、「枕草子」で「鞆岡は笹の生いたるがおかしきなり」と乙訓地方の竹について、桂宮家では乙訓産のたけのこを題材に和歌が読まれていることから古くから竹があったとされている。江戸時代の初期には乙訓地方一帯で竹年貢が定められている。孟宗竹の栽培の歴史は約 300 年で、この間に味を高めるため栽培方法を考え、現在の栽培法があみだされたとされている。

2-3　敷地分析

対象敷地は京都盆地西側に南北に連なる西山の一部の乙訓地方のものとする。西山とは北は愛宕山、嵐山から南の天王山までの範囲のことを指す。また、乙訓地方とは、向日市、長岡京市、大山崎町からなるものである。



図 2　敷地周辺俯瞰図

西山と隣接した敷地となっており、山の管理にをするには適所であると感じた。また、道路が整備されており、山に入りやすいようになっている。

2-4　森林保全の利点

森林を保全することには様々な利点がある。樹木は土砂崩れを防止し、下草は雨によって土が流れることを防ぐことから山地災害防止、土壌保全に繋がる。また、森林の土壌は雨水を吸収し、水を貯えることにより、地下水の涵養源となる。木材は環境にやさしい資材として、資源の循環利用ができる。豊かな森林には気温や気候を調整する機能があり、防風、防音などの役割を担うことができる。豊かな自然は多種多様な同生物の生育の場となる。そして、二酸化炭素の吸収量が増える。ただし、これらの利点を得るためには森林の管理をする必要がある。

3. 竹

Experience bamboo

-Bamboo forest conservation and utilization in Nishiyama-

Student Number　K20343
Name　　MORISHITA Nanaka
Supervisor　KOKAJI Yoshitaka

所在地：京都府長岡京市奥海印寺西台 6-2
主な用途：展示館
敷地面積：20650m^2
建築面積：1209.6m^2
延床面積：759.7m^2
キーワード：展示館・茶室・竹造建築

Location ： 6-2,Nishidai,Okukaiinji,Nagaokakyo-shi,Kyoto
Main Use ： exhibition hall
Site Area ： 20650m^2
Building Floor Area ： 1209.6m^2
Total Floor Area ： 759.7m^2
Keywords ： Exhibition hall,Tea room,Bamboo architecture

3-1　性質

竹は木材に比べて軽く、柔軟性がある。そして、乾燥しても伸縮しないことから建築材料としても用いやすいとされている。また、木に比べて成長速度が速く、生育期間の５年間は管理されている竹であると、針葉樹、広葉樹よりも多くの二酸化炭素を吸収することができる。デメリットとしては、火に弱い、カビやすい、虫がつきやすいなどが上げられる。これらの対策としては、ホウ砂塩を用いた塩水の中に小さな穴を開けた竹を浸しておく。こうすることにより、竹の内部に自然に生成される砂糖が流れ出し、虫がつきにくくなる。そうして、砂糖の代わりに塩分が内部に入り込むことで、防水と防腐剤の役割を果たすことができるようになる。

3-2　活用

現在、竹は様々な活用がされている。肥料や家具（ライト、椅子、机）、竹細工（かご、アクセサリー）、ホテルのアメニティ、建築意匠、竹の紙、ビニールハウスの骨組みなど様々な使い方をされている。



写真１　活用例（照明、家具）

画像出典：WAZAI　Materials

また、構造材としての研究もされている。日建ハウジングシステムが中心となって行っている「竹集成材構造プロジェクト」では、竹が構造材になると立証をした。今回、竹を構造材として利用するにあたり、「竹集成材構造プロジェクト」を参考に行った。

4. 設計概要

4-1　コンセプト

竹をあじわう
1. 筍堀体験や竹細工体験を通して竹と触れ合う
2. 建築を通して竹の様々な活用方法を知る
3. 食を通して筍の魅力を知る
竹の様々な魅力を多方面から感じることが出来る計画とする。

4-2　プログラム

上記のコンセプトを満たすためにも管理棟、展示棟、竹造棟、竹の茶室を計画する。

管理棟では実際に西山から切り出した竹を加工できる。竹の加工場を山のそばに計画することでより手入れがしやすいようにした。また、訪れた人は竹が加工されていく様子を見ることができる。

展示棟では内装に竹を用いた。ここでは自習室や図書スペースを設け、隣接した公園に遊びに来た子どもたちが気軽に利用できるようにした。多目的室は、筍堀体験や竹細工体験の際の教室としても利用する。また、開けた階段スペースでは遊びに来た人たちの休憩所や講演会スペースなど多様な使い方ができるようにした。階段の先の開口部には竹林が広がっており、景色を楽しむことができる。また、この建物は周囲の景観に溶けこむように斜面に沿った平屋とした。



図３　展示棟断面ダイアグラム

竹造棟は孟宗竹の利用促進のため、構造を竹の集成材で計画した建物とする。こうすることで竹のさらなる利用方法を広めるとともに建物を利用する中で竹の良さを感じられる。夜に屋内の光を外部に優しく漏れるようにすることで、竹の照明のようにした。また、もう一つの孟宗竹の利用方法として、竹の茶室を計画した。構造から仕上げまで竹でできていることで利用者により竹の魅力を感じてもらう。また、外部に設置することで自然豊かな敷地の良さを感じてもらえる。

最後にそれぞれの場所をつなぐ道を竹林の道とすることで訪れた人が気持ちよく敷地内を歩けるようにした。また、竹林の道に回遊性を持たせることで、散歩道としても利用できるように計画した。

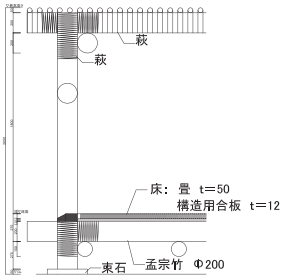


図４　竹の茶室　矩計図

5. おわりに

竹の利用が促進されることによって、放置竹林による森林の状態の悪化を防ぐことや二酸化炭素の吸収量が木よりも多いことから、環境負荷をさらに低減することにつながる。また、地域との歴史の深い孟宗竹を無くすのではなく、構造材としての利用など継続的に消費できる循環をつくることでより地域に欠かせないシンボルとなるだろう。

参考文献

・西山森林整備構想ゾーニング資料
・『長岡京市文化財調査報告書第 40 冊京タケノコと鍛冶文化』
・林野庁
・農林水産省
・環境省「脱炭素ポータル」
・IDEAS FOR GOOD「タイ特集」2019/3/28
・日経クロステック「竹造建築」2023/7/28
・Design and Make with Autodesk 2019/9/2

「夢への一歩」
～アーティストの卵を支援、
自邸兼アトリエ兼ギャラリーの設計～

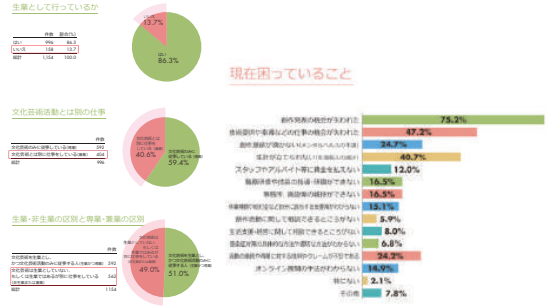
学籍番号　K20344
名　　前　山浦拓真
指導教員　江本弘

Title（MS ゴシック 12P）

Student Number　K20344
Name　　ISHIO Jiro
Supervisor　　KENCHIKU Saburo

1.　はじめに
1.1　研究概要

まず初めに、日本の芸術に対する関心は海外に比べるととても薄いと感じる。そのため、芸術活動のために海外に行く人も多い。芸術家が独立するのには制作費用や、制作場所、活動機会など初期投資は大きいが自分の作品が売れないと生活することができない。芸術家の収入は非常に不安定であり、生活を賄えるだけの収入を得られている人はほとんどいない。そのため、生計を立てるために副業をすることが一般的になっている。日本の芸術家に対する今の考えを変えたいと考えている。

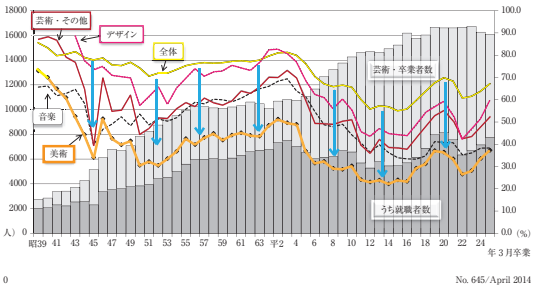


■京都芸術センターによるアンケート結果
■ 回答期間
　令和２年５月７日～５月20日（14日間）
■ 調査対象
　(1)　京都市内に居住あるいは拠点をもつ芸術家及び文化芸術を支える個人
　(2)　京都市内に拠点を持つ又は市内で活動する文化芸術活動に関わる団体・事業所
■ 調査方法
　インターネット調査（一部、郵送調査）

左の円グラフは京都芸術センターが行った京都市内の術家に行ったアンケートだ。アンケートによると文化芸術活動生業とは別に仕事をしている（兼業している）割合は40.6%だ。また、非生業もしくは兼業である割合は49.0%もある。半数の芸術家が兼業副業をしている現状にある。

右のグラフはコロナ化に芸術家が困っていることとして、京都芸術センターがアンケート調査を行ったものである。現状芸術家が困っていることとして制作場所、制作費用、展示機会、精神面など様々な面で困っていることが見て取れる。

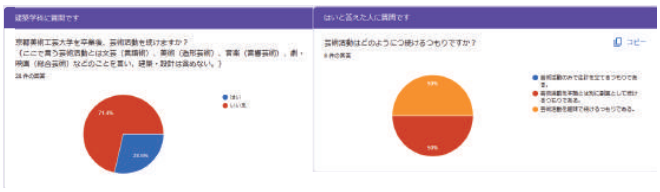
図１　芸術関係学科における就職者数及び就職者率の50年間での推移[1]



引用：芸術系大学出身と労働　喜始照宣

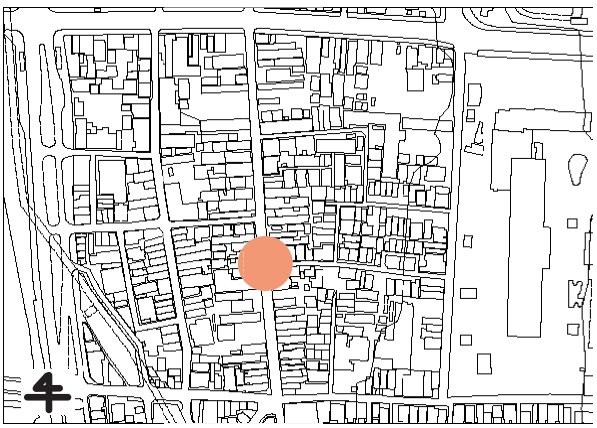
図１では芸術系大学生と就職：50年間での推移を表している。黄色で表しているのが就職者全体の平均のデータだ。オレンジ色、赤色で表しているのが、デザイン、美術、芸術の就職者データである。大学卒業者全体と比べて、芸術系、美術系学科での就職者率が一貫して低いまま推移していることが分かる。芸術家は技術だけでなく上下左右の繋がりもとても重要である。そのため卒業せず繋がりを広めるため大学院にいく学生も多い。それは芸術家として独立することの難しさを表している。
「就職」を「制作の休止、趣味化」ととらえる人も多い。そのため就職率が全体に比べ低くなっている。実際自分も就職をきに制作活動をあきらめつつあった。あらゆるギャラリーを巡り、様々な芸術家と巡り合った。最初から独立している人は少なく強い意志を持って芸術活動を続けていた。芸術活動を続けようと決意したのはつい最近である。

1.2　京都美術工芸大学



京都美術工芸大学建築学科４回生にアンケート調査を行った。卒業後制作活動を続ける可能性のある人の割合は28.6%もあった。建築学科内での28.6%は大きいと考える。就職するからといって作品制作を諦めず続けてほしい。続けると答えた人の中で芸術活動のみで生計を立てる人は一人もいなかった。趣味で続ける割合が50%、副業として続ける割合が50%という結果になった。これは芸術家として生きて行くことの難しさを表している。

2. 建築概要
2.1　敷地選定



対象敷地は京都府東山区本町七丁目48の道路を挟む３つの敷地である。この敷地の近くには京都駅や京都美術工芸大学、京都芸術大学がある。しかしギャラリーの数は少なく敷地の付近にはほとんどない。美術系大学の付近にギャラリーがほとんどないのはどうなのだろうか。よってこの敷地にギャラリー兼アトリエ兼住宅を設計する。
京都駅が近くにあるため観光客を呼び込むことが見込める。より多くの人に見てもらうことはアーティストにとってはとても良いことだ。また、交通アクセス面でも京阪七条駅、京都駅の付近

所在地：京都府東山区本町七丁目 48
主な用途：アトリエ、ギャラリー、住宅
キーワード：住宅、アトリエ、ギャラリー、集合住宅、
敷地面積：自邸 :71.14m2　共同ギャラリー :156m2　集合住宅 :550m2
建築面積:自邸 :50.05m2　共同ギャラリー :133.5m2　集合住宅 :427.1m2
延床面積：自邸 :205.6m2　共同ギャラリー :126.16m2　集合住宅 :847.

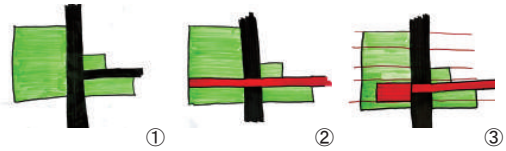
であるため多くの人々が集まることが予想される。
　敷地は現在、東にある二つの敷地は空き地であり使われていない。しかし、西にある敷地は住居が三棟並んでいる状態だ。
　敷地をここにした理由はたまたま巡り合った思い入れのある敷地だからである。人通りがとても多いわけではない。京都美術工芸大学に通う時、毎日のように見ていたたまたま見つけた空き地である。愛着のあるこの敷地を自分の力で自分の思いなままの設計にしたいと思いこの土地にした。



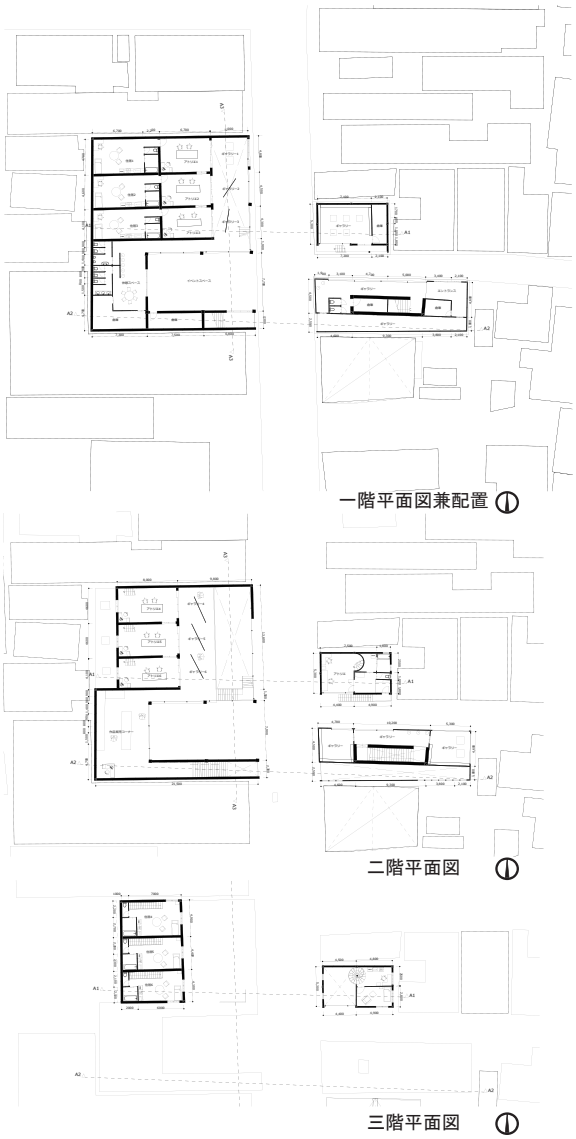
2.2　設計概要

　京都美術工芸大学の付近に山浦拓真の自邸兼アトリエ兼ギャラリーの設計。そして、京都美術工芸大学を卒業して一年目のアーティストが暮らす共同住宅兼アトリエ兼ギャラリーの設計。そして、イベントなどで使う共用のギャラリーを設計し、京都美術工芸大学卒業後一年間芸術家を目指すアーティストを支援する。一年後、入れ替わりで新しくアーティストを招き入れる。アーティストの移動と共に作品も入れ替わる。
　工芸領域の陶芸コース、木工・彫刻コース、漆芸コースから一人ずつ。デザイン領域から一人、建築学科から一人の計５人を山浦拓真が面接で採用する。計５人のアーティストにはアトリエ、住居、ギャラリー、仲間などを提供し芸術家への一歩を後押しする。制作場所、制作発表の機会、活動資金、活動仲間、活動時間を提供することで芸術家として独立する手助けをする。また、５人が共同して運営するギャラリーを設け、上下左右の繋がりを支援する。共同して運営するギャラリーには展示場所がないアーティストを呼び込むなど、アーティストを支援する活動を行う。それにより、繋がりが生まれ、お互いにインスピレーションを受けるなど良い面がたくさんあると考えられる。

2.3 ダイアグラム



①が当該敷地である。縦に大きな道がありこの道が軸になると考えられる。
②で左の敷地を左右に割ることで疑似的な軸ができる。これにより敷地が四等分される。四等分された敷地との繋がりが大事である。
③で少し空間を作ることでここに人が集まるようにする。



山浦拓真作品集


千の縁　タクマのひまわり　口は災いの元

3. 参考文献

京都芸術センターアンケート内容
論文「芸術系大学出身と労働」　喜始照宣

アートを中心とした空間の創出と アトリエ併設住戸の計画

学籍番号　K20345
名　　前　山口誠太郎
指導教員　小梶吉隆

Mainly art space and a dwelling unit with a studio attached

Student Number　K20345
Name　YAMAGUCHI Seitaro
Supervisor　KOKAJI Yoshitaka

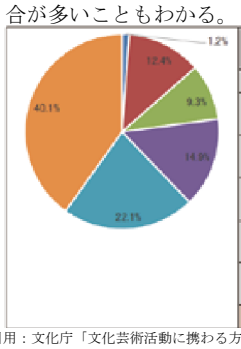
1. はじめに

1-1 社会背景

京都市内は美術系の大学が多いことや、美術館やアートギャラリーなどの場所も充実しているため、芸術と触れ合う場所は整っている。しかし若手アーティストを中心に、活動を行う上で必要となる環境や、展示等に必要となる資金的な面が、不十分かつ不安定であったり、社会状勢の変化に影響を受け、活動を継続することが難しい現状もある。

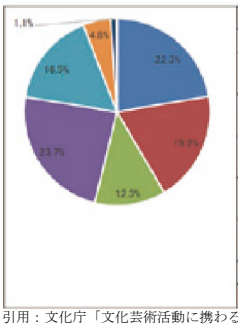
また、不動産屋や大家から入居を断られることや、アトリエを自宅のほかに借りなければならないといった、創作活動がによって金銭面や住居の縛りを感じる人も少なくはない。

令和２年 10 月に文化庁によって行われた「文化芸術に携わる方々へのアンケート」の調査においても、収入面や活動場所の減少により活動の継続自体を不安に感じる方の割合が多いこともわかる。



	割合（%）	度数（人）
1 文化芸術活動からの収入は増えた	1.2	198
2 文化芸術活動からの収入はあまり変わらない	12.4	2,081
3 文化芸術活動からの収入は75%程度になった	9.3	1,553
4 文化芸術活動からの収入は50%程度になった	14.9	2,492
5 文化芸術活動からの収入は25%程度になった	22.1	3,702
6 文化芸術活動からの収入はほぼ0%になった	40.1	6,711
合計	100.0	16,737

引用：文化庁「文化芸術活動に携わる方々へのアンケート」【令和２年３－６月の収入変化】



	割合（%）	度数（人）
1 生計を維持できるか不安	22.3	3,829
2 文化芸術活動をこの先続けられるか不安	19.2	3,297
3 所属先、得意先の経営が立ち行かなくなる不安	12.3	2,112
4 業界全体として明るい見通しが立たないことへの不安	23.7	4,064
5 不景気が影響して生活が苦しくなることへの不安	16.5	2,835
6 はっきりと原因はわからないが、漠然とした不安	4.8	817
7 特に不安はない	1.1	192
合計	100.0	17,146

引用：文化庁「文化芸術活動に携わる方々へのアンケート」【不安に感じていること】

1-2. 計画の目的

京都市内に若手アーティストが住まい、住戸と隣接して設けたアトリエ内で活動し、同一敷地内のギャラリー等で【生活＋創作→展示→販売】を一元的に行うことのできる場所を提供することで、創作活動を後押しする環境を計画する。

また、京都という土地柄を活かし、ワークショップなどを行うことで旅行客や学生、地域住民との交流を促す場を設け、日本の文化・芸術の普及や推進に寄与する建築を目指した。

敷地内にカフェやライブラリー等の市民利用空間を計画し、壁面に作品を展示する空間を設けることを行うことで、作品との距離をより密接にさせ、一般利用者に対しても関心を持たせるアプローチを行うことを目的とする。集合住宅と一体として計画を行い、活動の利便性を上げるとともにアトリエの公開や文化交流を促すことで、制作に対する関心を持たせることに寄与する役割を持つ。

2. 対象敷地

2-2 敷地概要

対象敷地は京都府京都市東山区石橋町および林下町の白川にまたがる２つの敷地とする。敷地周辺には知恩院や八坂神社等の主要な観光地があり、白川に沿って観光客や地元の人々の往来が多くあり、年間を通して国内外の人々が多く訪れる地域である。

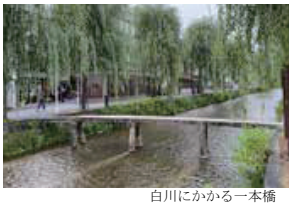


また、敷地近辺の祇園エリアには観光地のほかにも数多くのアートギャラリーや、京都市京セラ美術館、京都近代美術館といった、アート関連施設もあるため、活動のしやすさと共に、アートをより身近に感じることのできる敷地である。交通アクセスにおいても利便性が高く、徒歩圏内に京阪本線「祇園四条駅」「三条駅」京都市営地下鉄「東山駅」塔の鉄道駅、京都市営バス「知恩院前バス停」と隣接しているなど、多くの人々を呼び込むことができ、なおかつ生活するアーティストの活動の幅を広げることにもつなげることのできる敷地である。

2-2 敷地の現状

２つの敷地間には２本の橋が架かっており、北側の橋（推定築 80 年）は現在閉鎖されており、南側（築 50 年程度）はマンション専用の私道で駐輪場としても使用されているが、通路に沿う形に駐輪されているため、乱雑におかれているという印象を抱く。また、敷地北側には白川の一本橋もあり、観光スポットにもなっている。さらに敷地下流には、各店舗や住宅が個別に設置したとみられる、自由なデザインの橋も数多くある。


敷地東から白川を見る


白川にかかる一本橋

2-3 東山区の現状と課題

東山区の掲げる課題として「多くのプロフェッショナルがいるが知り合って刺激を受けあう機会がなくポテンシャルを生かし切れていない。」「活動する人々と地域に人々が語り合うきっかけを増やす必要がある。」【『東山・まち・みらい計画 2025』より引用】とある。

それを踏まえ、文化芸術活動に従事するアーティストや事業者と交流することのできる環境を生みだし、住民や観光客との交流機会を増やすことで、活動をより活発化させる。また、東山区は小規模事業所の割合が多いため、1~4 人の事業所を対象としたレンタルオフィスも設け、さらに多様な交流機会を生み出せるよう計画する。

所在地：京都府京都市東山区松原町 294
主な用途：集合住宅、ギャラリー、カフェ
敷地面積：871.3㎡
建築面積：658.3㎡
延床面積：1291.2㎡
キーワード：アーティスト　集合住宅　公共空間
　　河川　ギャラリー

Location ： 294,matubaracho,Higashiyama-ku,Kyoto-shi,Kyoto-fu
Main Use ： apartment・gallery・cafe
Site Area ： 871.3㎡
Building Floor Area ： 658.3㎡
Total Floor Area ： 1250.6㎡
Keywords ： artist　apartment　public space
　　rivers　gallery

3. 計画概要

3-1. 主要施設

本計画においての主要施設は以下の物とする。

1. アトリエを併設した住戸（10 戸）
2. アートギャラリー
3. ワークショップスペース
4. 共用アトリエ
5. 多目的ホール
6. カフェ
7. ショップ
8. コワーキングスペース
9. レンタルオフィス

上記の施設を一体的に計画し、アーティストと利用者との距離を近づけることで、アートを中心としたアクティビティを生み出す公共空間を計画する。

3-2. 住戸計画

アーティストが生活する住戸にはアトリエを併設し、個別の作業空間を計画している。アトリエは各住人が自由に使うことのできる空間であり、絵画をはじめデジタルデザインなどジャンルを絞らず自由に利用できる空間づくりを行う。

アトリエは敷地内及び敷地周辺から様子をうかがうことが可能となるよう、開放可能な建具やカーテンウォールを用いる。

住戸タイプは２タイプであり、１フロアのみの住戸とメゾネットタイプを計画する。

3-3. 公共空間計画および配置計画

ワークショップスペースやアートギャラリーを計画し、白川を間近に感じながら利用者同士の交流や芸術鑑賞を行うことのできる空間づくりを行う。
また、白川に沿って観光客や住民の移動が行われているため、現在の人々の往来を敷地内に取り込むことのできる、入りやすいアプローチを計画する。

東大路通に面した人々の往来が最も多い南側敷地１階にはカフェや、アート関連ショップを配置し、観光客や地域住民の関心を誘い、より多くの人々に訪れてもらうことのできる配置計画としている。２階には近隣の人々や学生の利用できるコワーキングスペースを計画し、多くの人々に居心地の良い空間を計画している。また、この２つの空間には入居するアーティストの作品を展示することで、作品や活動自体に関心を持ってもらうことのできるようなスペースの計画も行う。

東側２階にはレンタルオフィス空間を配置しており、少人数のデザイン系会社を対象として入居してもらうことで、アーティスト等との交流も可能にしている。

南東には多様な用途で使用できる 80 ㎡程度の多目的ホールを計画している。大規模の作品や、講演会、イベント等に使用できるように天井高を高くしている。

集合住宅部分１階には住民共同で利用できるアトリエを計画しており、自身のアトリエのほかに共同や大規模の作品を制作できる空間を計画している。

こうした空間を繋ぎ、利用者や住人が心地よく過ごすことのできる計画を行い、自由に往来できるような動線計画を行う。

4. 本計画をため調査を行った類似事例について

4-1. ヴィラ九条山

フランスの海外アートレジデンスの一つで、日本の支部の一つとして、ヨーロッパ・外務省の文化機関であるアンスティチュ・フランセ パリ本部と連携して運営され、日本と関わりのあるプロジェクトを進める中堅・若手アーティストやクリエーターを受け入れている。アーティストたちは日本のスタッフのサポートを受けつつ、全国のアート・大学・文化関係者などと仕事を行うことを求められている。


中庭


テラス

4-2. Y3

神戸市にある、1928 年に竣工した「国立移民収容所」をリノベーションしている建築である。
十数名のアーティストが個々のアトリエで活動している。廊下に面したアトリエはドアが解放されており、気軽に見学も可能である。地域に開放されたワークショップスペースもあり、交流の場としても利用されている。


アトリエ


コミュニティスペース

4-3. 河岸ホテル

京都市内にある若手芸術家の共同生活の場とホテル、カフェ、ギャラリーを一体の場としている施設である。宿泊客は芸術家の創造の場に滞在し、関心を持った作品を鑑賞したり、宿泊部屋に飾ることや、購入も可能なホテルである。施設内部にはカフェがあり、地域住民であっても気軽に立ち入り、作品を鑑賞することが可能である。


１階


ホテル室内

5. 参考文献・引用

文化庁「文化芸術活動に携わる方々へのアンケート」
令和 2 年 12 月
京都市都市計画局「京の景観ガイドライン」
令和３年６月
東山区役所地域力推進室「東山・まち・みらい計画 2025」
令和３年８月

山の抱擁、未来への約束

～傾斜地農村に息づく文化と農業の縦結び～

学籍番号 K20346
名　　前　山下雄大 指導教員　小梶吉隆

Embrace of the mountains,promise for the future~Culture that lives on in a rural village on a slope Vertical connection of agriculture~

Student Number　K20346 Name　　YAMASHITA yudai
Supervisor　　KOKAJI　yoshitaka

1. はじめに

現代の日本は少子高齢化が進み、若者も地元ではなく仕事や利便さを求め都市部へ出てしまい地方の限界集落が増えている。2023 年の現時点で 2 万を超える集落が限界集落として認定されている。その限界集落は特に四国地方に多く、その中でも山間地域が 75.6%を締めている。また、農業の衰退で、食糧自給自足の低下、耕作放棄地の増加による景観の悪化など、日本の素晴らしい景観が損なわれており、昔ながらの集落の良さがどんどん薄れつつある。その集落と農業の問題を両方抱えている場所が私の出身地である徳島県三好市西祖谷山村でそこを今回の敷地に選定した。

西祖谷山村は徳島県の西部に位置しており、徳島市内から車で２～３時間程の場所である。西祖谷山村改め、祖谷村は日本三大秘境の１つであり、四方を山に囲まれた山間集落である。「祖谷のかずら橋」、「祖谷温泉」、「大歩危の舟下り」などといった観光地も多くあり、毎年大型連休や夏休み期間になると多くの観光客が訪れ賑わっている。
一方で集落には人も訪れることがなく、高齢者ばかりであまり賑わっているとは言えない。そうすると人は出ていく一方でその集落は姿を消してしまう。しかしその村、集落にしかない景観や自然などの良さがある。しかし今のままだと老朽化した住居があるだけで魅力を感じたり、住みたいと思えるような場所ではない。そこで村の伝統と文化を残しながら、農業と傾斜地が共存することのできる新たな村を提案する。

茶畑の様子



2. 有瀬集落について

有瀬集落は西祖谷山村の中でも一番南に位置しており、高知県（大豊町）と徳島県（三好市）の県境である。標高は 500m ～ 700m 程と山間集落の中でもかなり標高が高い地域である。冬は雪も降る地域であり 20 ～ 40cm 程の積雪量になる。
ほかの集落に比べても木の数が少なく開けた土地で見晴らしが良く夜は満天の星と朝には雲海を眺めることができる。有瀬（上）と有瀬（下）に分かれており、（上）は一番年下の方で 70 代、令和五年 10 月時点で 12 世帯 18 人と超限界集落である。
有瀬（上）は（下）に比べ土砂災害警戒地域になっているのだが（上）の南側はトンネル作業など地盤を固める作業を施しているため、ほかの場所に比べて崩れにくくなっている。
特産品はお茶が有名であり斜面には茶畑が多く残っている。
有瀬集落の中では有瀬かぐら踊りが伝統文化として残っておりこれは悪病を祓う舞である。西祖谷山村全体では神代踊りと呼ばれる舞がユネスコ無形文化遺産され世界からも注目を集めている。

敷地からの眺め



3. にし阿波傾斜地農耕システム

四国中央部の「にし阿波」と呼ばれる徳島県西部の山間部では、場所によっては斜度 40 度にもなる急傾斜地で、段々畑を作らず傾斜地のまま農耕し、草地で採取した敷き草（カヤ）を畑にすき込むことで土の流出を防ぎ、ソバやイモなどの多様な作物を栽培している。
400 年以上にわたり、山間地の環境に適応したこの農耕システムが継承されてきた。
そして 2018 年 3 月、国連食糧農業機関（FAO）の世界農業遺産に認定された。
FAO が認めた傾斜地農耕システムの 5 つのポイント
1. 食と暮らしを支える
粟（あわ）と呼ばれる雑穀産業が盛んで徳島の古い呼び名である阿波（あわ）の語源であり自給自足と物々交換をしてお互いの食生活を豊かにしていった。
2. 生物と植物の宝庫
カヤを採取するためのカヤ場には 342 種類の植物が確認されており、28 種類の鳥類、絶滅危惧種を含む 241 種類の昆虫、」9 種類の哺乳類が生息している。
3. 伝統と自然を守る働き
「コエグロ」と呼ばれる刈り取ったカヤを円錐形に積み上げて乾燥させそのカヤを畑に利用する。土の流出を防ぐために「サラエ」という農具を使い、その農具はそれぞれの傾斜地の角度に合わせたオーダーメイド品で集落の鍛冶職人が 1 つ 1 つ手作業で制作する。
4. 風土に根付いた文化
食材が限られる山間部では農作物を「干し」て保存食にしていた。吹き下ろす冬場の風は干し物作りに適しており、干し芋や干し柿などの特産品がある。また集落の情報交換や相互扶助のシンボルである「お堂」も各集落に 1 つ存在している。
5. 人と環境が調和した景観
傾斜地で農耕生活を送ることでほかの土地にはない「にし阿波」ならではの景観。
しかし山間部集落の少子高齢化により農業を継続できなくなった畑は荒れ地と化し、サルやイノシシなどの害獣が住みつくようにな場所も年々増加している。

地すべり対策工事



斜面集落のコミュニティ



4. 平家の落人伝説と生きるということ

1185 年の屋島の合戦に敗れた平国盛一族が山奥の祖谷へと逃げ込み隠れ住んだと伝えられている。現存している「祖谷のかずら橋」は源氏が攻め押せてきた場合に侵入させないように、野生のシラクチカズラという植物を編んで架けた日本三大奇橋の一つで平家の落人伝説が色濃く残っている。
私は平家の落人は命を守るために山奥の祖谷集落へと逃げ込み、そこから自給自足の生活をして住民同士と物々交換や力を合わせて村というコミュニティを確立し、生きる術を多く残している。だが今ではインターネットやコンビニ、スーパーなど物を購入できるツールが多くあり、生きていくことがすごく楽になっていた。また私が一人暮らしをしていてマンションで生活をしているのだが人との距離が近く蜜な空間なのに対し、隣の住民とはあまり話すことはない。しかし村は家の距離は遠いのに人との心の距離はすごく近い。これは助け合う

祖谷平家まつりの様子



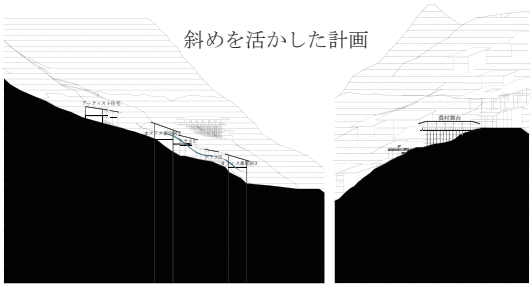
所在地：徳島県三好市西祖谷山村有瀬
主な用途：複合施設（住宅、舞台、商業施設）
敷地面積：39000 ㎡
建築面積：2762 ㎡
延床面積：2254㎡
キーワード：集落、住宅、伝統継承、農業、再興

Location ： aruse nisiiyayama village miyoshi city tokushima
Main Use ：complex facility(housing,stage,commercial facility)
Site Area ： 39000 ㎡
Building Floor Area ： 2762 ㎡
Total Floor Area ： 2254 ㎡
Keywords ： village,housing,tradition inheritance,agriculture renaissance

文化が残っているからだと思う。

5. 傾斜地を生かした設計

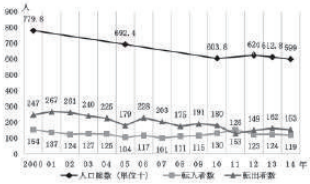
祖谷集落は傾斜地にへばりつく様な形で集落を形成しており、縦でコミュニティを形成している。そこでオフィスは横に移動して作業をするのではなく縦で移動し、晴れた日には外のテラスや屋根の上でパソコンで仕事をするという仕事の新たな形式を作る。傾斜地は前に遮るものが何もないので見晴らしがすごくよく解放的な場所でのびのびと作業に励むことができる。
またレストランと村の住民が集まる詰所兼管理棟は集落の中でも緩やかな斜面へ計画することでレベル差を活かした建築とする。3 フロアに分け、大屋根を斜めに架けることによって上から下へと風が抜け、1 階の空間は集落で採れた新鮮な野菜や加工した食品を販売する直売所を設け、2 階では住民同士が村のことについて話し合うことができる場所を設ける。3 階は管理棟でコンドミニアムを借りる人の受付や移住者の手続きなどこの村の中心となるようにする。
管理棟の上にコンドミニアム、下にオフィスと住宅という配置で立ち寄りやすくした。



6. それぞれの住居スペース

この村には 4 つの異なる住居スペースを設けた。
1. 村の中でも仕事ができるように、サテライトオフィスを設けた。ただ住むのではなく自然の中で働く。
このサテライトオフィス誘致は徳島県の神山町で実例があり、はじめは数軒だったオフィスもどんどん数を増やし今では数十件ものオフィスを誘致に成功しており、若い人がどんどん増え、地域活性化へとつながっている。そして仕事の合間に畑での農作業をしてオフィスのチームで育てた農作物を収穫し、調理をしてみんなでご飯を食べチーム力を向上させる。
2. アーティストの卵を育成させるための住居を設ける。私も大学で創作活動をしていく中で周りの環境は作品のクオリティをあげるためにすごく重要なことだと思った。自然いっぱいの場所で暮らしながら村の人たちの暖かさに触れ創作活動に集中することのできる唯一の場所だと考える。
3. 農家専用の住居
世界農業遺産である傾斜地農耕を守り継承していくための農家が住む住居を計画する。そこで住宅の下には畑があり直ぐ畑作業ができるように畑と住宅の境目を無くすために中間領域となるテラスを設けた。そこでは村民たちが収穫した農作物を交換したり、休憩したりできる。
4. コンドミニアムとして利用できる住居
集落の中で一番高いエリアには 1 週間のうち 2，3 日ほどしか利用しない方がコンドミニアムとして移住希望の方が短期滞在できる。特産品の祖谷蕎麦、岩豆腐、こんにゃく、団子を調理する体験や畑を実際に耕してジャガイモを収穫したり、山へ入って山菜採ったりなど村の疑似体験ができるようにする。

・オフィス　　復興事例
人口約5,400 人の町にIT 企業が集まる 徳島県神山町は、ここは近年で移住者が増え、起業家やIT 系ベンチャーが古民家を利用したサテライトオフィスを相次いで開設することで注目を集めている。また今年から20年ぶりとなる高専が開校し、徳島で一番成長している町である。また、名刺ソフトのSansan をはじめ、約16 社がサテライトフィスを設置しておりどんどん増えていっている。



2010年にオフィスが来るまで人口は減少しているのに対し2010以降は増えていることがグラフから読み取ることができる。

神山町えんがわオフィス
古民家、蔵を改築したオフィス





7. 農村舞台をイメージした伝統継承のための展望台

農村舞台では村の豊作祈願や豊作感謝の祭りを行っていた場所で、歌や踊りなどの芸能も奉納した。山奥の集落であるために踊り子を常に呼ぶことができたいため、人形を作ってその人形を操る稽古をするための練習場として村の人々はお金を出し合い農村舞台を建て、そこで空いた時間を村人が協力して「人形浄瑠璃」の練習を欠かさず行っていた。
この「人形浄瑠璃」とユネスコ無形文化遺産に登録されている雨乞いの儀式「神代踊り」の伝統を継承していくために、人が訪れやすい展望台で披露する場を設ける。
この展望台は集落の東側に位置しており傾斜地から突き出た形になっている。そこで披露される踊りは村を背景に実際に天空で舞っているかのような情景を生み出す。その美しい傾斜地と踊りは人の心に残る素晴らしいものとなる。
通常の展望台では朝早には素晴らしい雲海が見え、昼には農作業をしている村の風景を望むことができる。



神代踊り



有瀬集落の雲海

8. 参考文献

・徳島剣山世界農業遺産推進協議会
→ https://giahs-tokushima.jp/steepslopeagriculture
・NHK アーカイブス　徳島・祖谷 平家伝説
→ https://www2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0004990268_00000
・国土交通省 四国地方整備局 四国山地砂防事務所
→ https://www.skr.mlit.go.jp/sabo/office/aruse/aruse.html
・国土交通省　四国地方整備局　有瀬地区進捗情報
→ https://www.skr.mlit.go.jp/sabo/office/pdf/202311_aruse.pdf

老いと向き合う～自分らしく生きるために～

Facing Aging - To Live Your Life Your Way

学籍番号　K20349
名　　前　山本逸貴
指導教員　山内貴博 ***

Student Number　K200349
Name　Yamamoto Itsuki
Supervisor　Yamauti Takahito

＜背景と目的＞

2023 年現在我が国の 65 歳以上の高齢者人口は 3,623 万人、高齢者人口率は 29.1%となってる。超高齢社会が進み切り離すことができないものが介護だ。少子高齢化が進み、介護を必要とする高齢者が増える中、人手が足りず働く人の負担が大きくなっている。家族だけではどうしてもケアが行き届かない部分を、介護職員に任せることになる。実際、私自身の両親が介護の現場で働いており、働く環境としてはあまりいいとは言えないと感じた。そこで職員の働く環境を改善することができれば、十分なケアをすることができるのではと考えた。

高齢者が希望する介護を受ける場所は、一番が「自宅」となっており、家族と離れたくない、住み慣れた土地がいいといった理由もある。しかし、最期を自宅で過ごす人は、15%ほどになっている日本では「バリアフリー法基準の遵守・衛生環境を保つための汚れにくく掃除しやすい内装材の採用・入居者を管理しやすい見通しのよい配置計画」に配慮した計画がされているが、福祉先進国の北欧デンマークをはじめとしたヨーロッパでは介護施設に入るのではなく「今まで住み慣れた家」でのケアができるような計画がされている。

施設に入ることで家族と離れてしまったり、今までの生活の環境から大きな変化を感じさせないため、収容の場ではなく自分らしく生活できるような場所にする。

＜敷地について＞

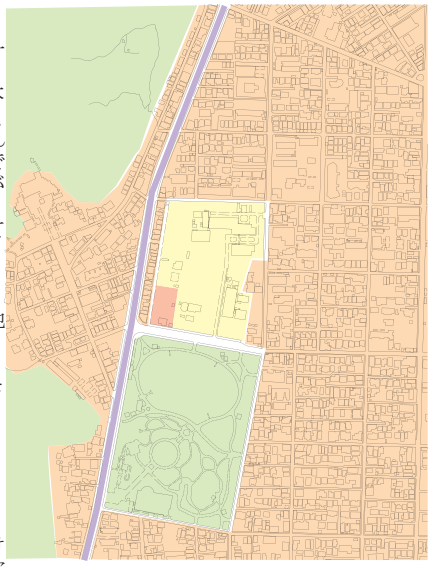
敷地は静岡県静岡市葵区大岩町にある城北公園の北に位置する城北運動場の一部を選択した。

敷地の南に位置する城北公園は、日本の都市公園 100 選に選ばれており、日本庭園をはじめ、直径 19 mの花時計や水の広場、花木園などの施設がある。また、市立図書館、アスレチック広場など地域の住民の散歩コースとしても多く使われている。マルシェなどのイベントだけでなく、災害などが起きた時の避難場所でもある。地域に愛された公園であり、園路が整備されているため、足腰に不安があった場合でも、安全に歩きやすくなっている。

住宅街に位置し、静岡大学教育学部附属特別支援学校や付属幼稚園が隣接しているため子供や地域との交流ができる。

毎年 12 月に行われる静岡県市町対抗駅伝が敷地の西にある麻機街道を通る。

近くの施設や寺など・臨済寺，静岡県立総合病院まで 1 km，静岡駅まで 2 km



赤が敷地

＜グループホーム＞

グループホームでは認知症の高齢者が家庭的な環境でケアを受けることができる施設として、全国に約１３００ヵ所ある。

５人から９人の少人数ユニット型となっている。少人数のなじみの関係をつくることで、心身を穏やかに保ち安心して暮らしてもらうことを目的としている。

認知症の方は、環境の変化に特に弱い。不安を減らすことが重要になる。

グループホームの入居条件

- 医師から認知症の診断を受けている
- 65 歳以上
- 要支援２、要介護１～５の認定を受けている
- 施設がある市区町村に住民票がある
- ひととおり自分で身の回りのことができる
- 医療ケアを必要としない

・暮らし

介護職員のサポートを受けながら、自宅で行うような炊事や洗濯、掃除などを行う。生活している人がそれぞれの『役割』を持つことで、自分が今何をしているのか、何ができるのかを自覚することができる。結果、認知機能の低下や身体機能の低下を緩やかにすることにもつながる。介護職員はあくまでサポートである。役割の損失による人間のダメージは大きい。

自宅での介護ができなくなった場合でも、慣れ親しんだ地域で暮らすことで、住み慣れているという安心感につながる。グループホームでは、住み慣れた街で共同生活を通して自立した生活を送ることを目標にしている。

＜設計＞

ユニット型グループホーム（認知症対応型共同生活介護施設）を設計する。

- 介護を受ける高齢者（以下利用者とする）が自分の意志でやりたいことができ、自立した生活を送る。
- 介護職員（以下職員とする）の肉体的身体的疲労を減らし、利用者と良い関係を築くことができる。
- グループホームの強みである、地域とのつながりをもたせる。

個の設計では、上記三点を目標とする。誰しもが歳を重ねる先にある「老い」というものに向き合いながらも、「自分らしさ」を忘れずに一度しかない人生を豊かに過ごす手伝いをする。

・職員

職員の動線が短くなることで、無駄な動きをなくしスムーズに対応ができる。事務室から共有スペース部分のキッチン、風呂、倉庫へ行けるように隣接させて配置する。また、実際の現場でも、利用者に対して職員の数が足りていないことは、問題になっているため、改善案として職員の目が常に利用者に向くことができる使用にする。そのため、共有スペースを真ん中に持っていき、食事や日中のレクリエーションの際には、その空間で居心地よく過ごしてもらえるような工夫をする。

休憩時や夜勤務の際などに職員のリフレッシュができるよう、仮眠スペースを配置し、心と体の安定を図る。

所在地：420-0885 静岡県静岡市葵区大岩町１-20
主な用途：共同住宅（グループホーム）
敷地面積：1829.40㎡
建築面積：494.94㎡
延床面積：420.67㎡
キーワード：認知症、共同生活、地域交流、自立、老い、職場環境

Location ： 1-20,Ooiwa,Aoi-ku,Shizuoka,Shizuoka
Main Use ： communal housing
Site Area ： 1829.40㎡
Building Floor Area ： 494.94㎡
Total Floor Area ： 420.67㎡
Keywords ： Dementia, communal living, community interaction, independence, aging, work environment

・地域とのつながり

住み慣れた地域で暮らし続けるためにも、様々な人の協力が必要になる。敷地周辺には大きな公園や学校などの人が集まる場があるため、交流の場としての役割も持たせる。時代も変わり認知症への偏見は少なくなっているが、まだまだ分からないことが多く、地域のひとの中でも認知症であったり、家族が介護をしている場合もあるため交流の場を設けて理解を広めていく。　またそれまでの暮らしのように、地域のお祭りやボランティア活動にも参加し、地域の交流をすることで利用者の自立を促すことができる。

《地域との交流》
- お祭りやボランチィアの際の休憩スペースの提供
- 地域の高齢者との交流サロンの実施
- 子供や学生、家族とのふれあい教室
- 趣味活動の展示や発表

などの地域との交流ができるような場所を設計する。



・五感

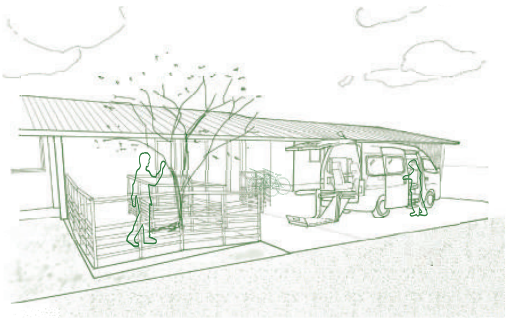
光、色、香り、音、感触などで五感を刺激する。通常の施設では、不便がなく「安全で安定的な」環境に保たれていることがとが多いため、自然の移ろいなどを感じにくく、刺激が少ない。その結果利用者の心や体が動きにくくなってしまう。

そこで、建材によって五感を刺激できる設計にする。日々の生活に取り入れることで、脳が触発され機能が活性化される。五感の刺激によって、刺激から連想されるエピソードを思い出し「やりたい」につながる。やりたいことをやった結果、「できた」という満足感が積み重なり、新しい「やりたい」につながっていく。五感の刺激から、心の豊かな時間を生み出すことができる。

テクスチャ、振動、味、湿度、温度、風などの五感を動かすために、様々な素材を用いる。土壁、竹の格子、木の床、タイルの壁、ガラス、足つぼロード、石の床、コンクリート、木材、畳、天井を高くし光や風を入れる







＜イラスト＞五感イラスト@ hanasaku_hannko 花咲くハンコ屋～花織（カヲリ）/ パース自作

＜参考文献＞

・〈参考文献〉
・田中直人・老田朋美　心を癒す環境デザイン　デンマーク・オランダの高齢者住居環境に学ぶ　彰国社
・厚生労働省　認知症グループホームの強みを生かして
〈https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000-Roukenkyoku/grouphome.pdf〉
・横松建築設計事務所　介護施設でのスタッフ動線を考える必要性〉
〈okomatsu.info/blog/2020/11/26/ 介護施設でのスタッフ動線を考える必要性 /
・快適な介護施設を目指して、進化する建築設計の工夫とは　2020.9.17
〈https://www.tsukui-staff.net/kaigo-garden/howto/comfortable-nursing-facility/〉
・社会福祉住居施設の設備基準
〈https://www.mhlw.go.jp/content/12201000/000456694.pdf〉
・大切な人をサポートし続けるために介護者とは？
〈https://hattrbridge.jp/with-family/continue-to-support/what-is-caregiver〉
・高齢者住宅施策における「施設」と「住宅」の選択 -「サービス付き高齢者向け住宅」増加を視点として -

京町家を継承していこう
～京都の伝統文化と共に～

K20350
山本ちひろ
指導教員　森重幸子

Let’s inherit the Kyomachiya ～Along with the traditional culture of Kyoto～

K20350
Yamamoto Chihiro
Supervisor Morishige Sachiko

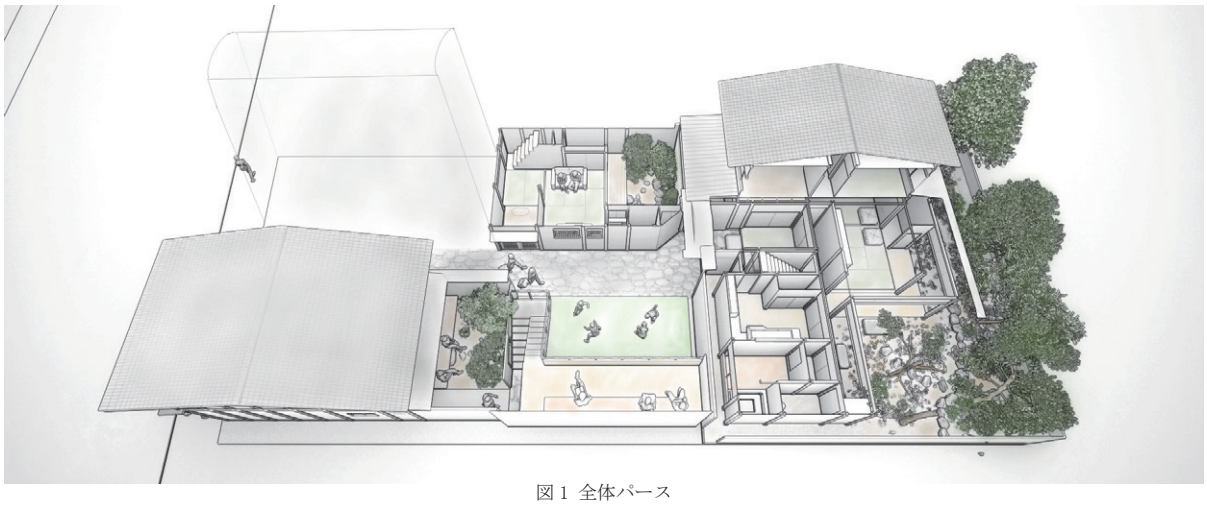


図１ 全体パース

1.　計画趣旨

京町家は京都市の調査によると、平成 21 年で 47,000 軒残っていたものが平成 28 年度に実施された調査では、40,146 軒まで減少しており、そのうち空家率は 10.5%から 14.5%へと増加している。この結果から現在も京町家が活用されないまま残っていたり、京都から失われていると考える。なぜこのような現状に陥ってしまっているのか、京町家について学ぶ機会が少ない、中々担い手が見つからないなど様々な問題がある。そこで、今回路地に建っている京町家を色んな形に改修することで、京町家の魅力だけでなく、京都の文化も実際に体験しながら魅力を感じられるような改修案を計画した。

2.　敷地について

○特徴

東大路通りに面する路地であるため、周辺は観光地が多くにぎやかな場所である。しかし、路地の入口に立っているトンネル路地を思わせるような看板を抜けて敷地内に入っていくと、閑静な路地空間が広がっており、秘密基地に入ったようなちょっとした特別感が味わえるような敷地になっている。現在路地の中に表２軒、奥３軒のコノ字型に配置されている建物のうち、１軒が１階で美容室を経営している鉄筋コンクリート５階建ての建物で、他４軒が空家状態になっている。



図２　周辺見取り図

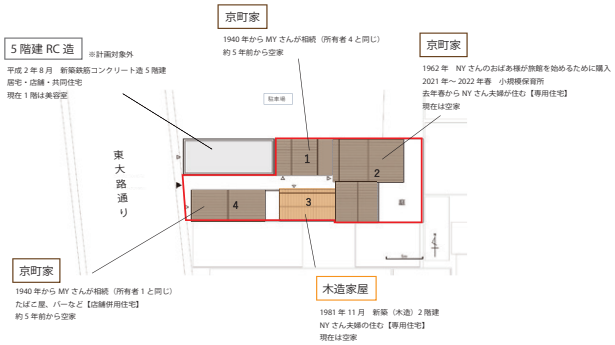


図３　配置図兼対象敷地背景



図４　東大路通側外観



図５　２の京町家外観



図６　１の京町家外観



図７　３の木造家屋外観

所在地：京都府京都市東山区毘沙門町 26-3
主な用途：カフェ、宿、多目的施設、広場
敷地面積：410.872 ㎡
建築面積：160.793 ㎡
延床面積：292.062 ㎡
キーワード：京町家・伝統文化

Location ： 26-3,bishamonn-cho,Higashiyama-ku,Kyoutoshi,Kyoto
Main Use ： cafe,Inn,Multi-purpose facility,Plazza
Site Area ：410.872 ㎡
Building Floor Area ：160.793 ㎡
Total Floor Area ：292.062 ㎡
Keywords ： Kyomachiya,Toraditional culture

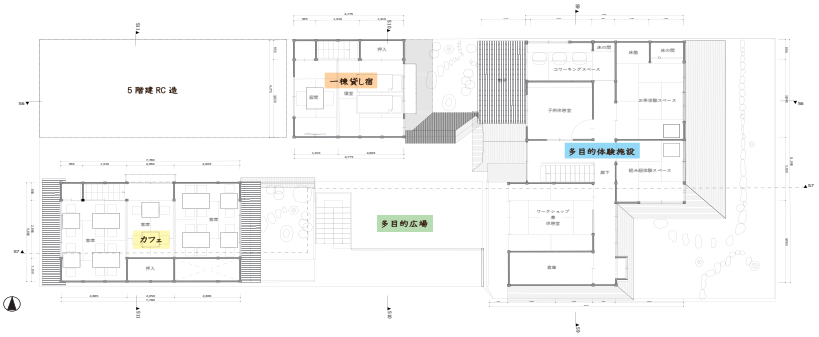


図 8　1 階計画平面図　1/50

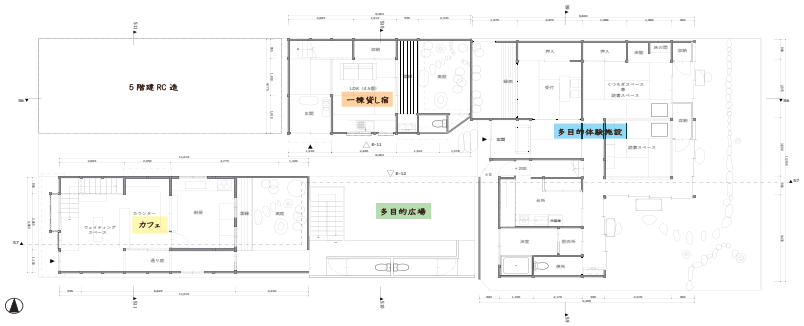


図 9　2 階計画平面図　1/50

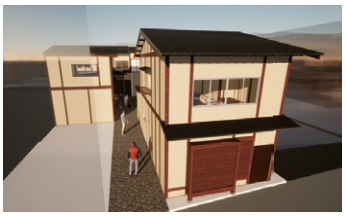


図 10　東大路通側外観

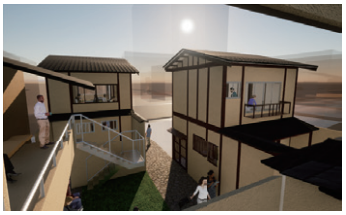


図 11　多目的体験施設からの路地の様子



図 12　カフェ 2 階内観

4. 計画概要

鉄筋コンクリート造以外の空家４軒の改修案を計画した。路地の特別な雰囲気も活かしながら、町家を利用して、京都の伝統工芸、食文化、生活文化などをそれぞれの建物で感じられるようにし、京都の文化や京町家の魅力を路地全体で体感できる計画にした。図 3 に示している 1 の建物は、生活文化を体感することが出来る一棟貸しの宿泊施設を計画した。1 階ではリビングや濡れ縁で過ごしながら奥庭も眺められるような計画にした。2 階は和室のみを設け和室で過ごす良さが体感できるように計画した。2 の建物は非日常空間でリラックスしながら京都の伝統文化を体験できる建物として計画した。周辺の観光地に行く際に必要のない荷物を預けて観光地へ行き、体の疲れを取るために自由に休憩しに戻ってこられるような建物として計画した。1 階は主に休憩スペースを設け、2 階にはお茶体験ができるスペースや、コワーキングスペースなどを設けて、非日常空間で仕事をしたり、奥庭の風情を感じながら伝統文化を体験できる空間にした。3 の木造家屋は、広場にすることで閑静な路地空間の中に光を取り入れられるように計画したいと考えている。4 の建物は､京都の食文化を体験できるカフェを計画した。和食を基本としたカフェで、京おばんざいを中心とした料理など、観光客だけでなく和食好きの方や健康に気を使っている方も利用できるような京町家カフェを計画した。

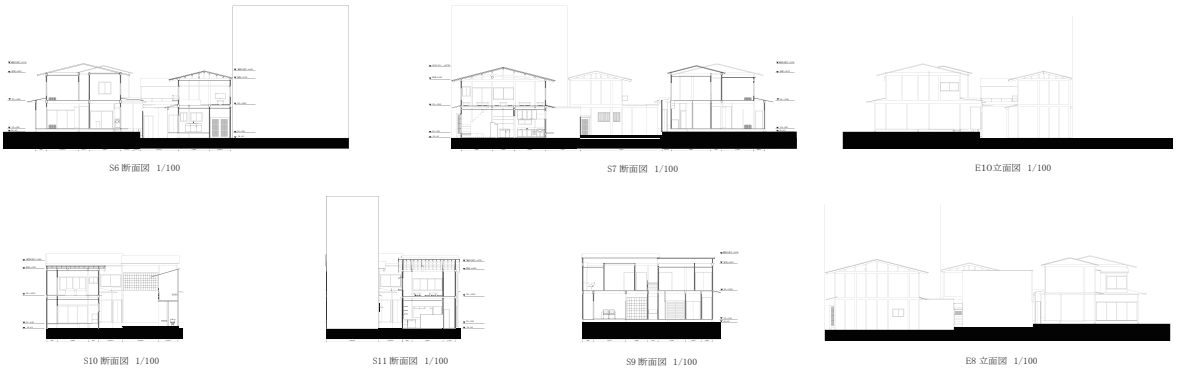


図 13　計画断面・立面図

Matinee & Soiree

学籍番号　K20351
名　　前　山本茉奈美
指導教員　宮内智久

Matinee & Soiree

Student Number　K20351
Name　YAMAMOTO Manami
Supervisor　MIYAUTI　Tomohisa

1. 計画の背景

「働きたいけど働けない」

私はアルバイトでキャバレークラブの黒服をしている。

機会があり、マネージメント業務に参加し、様々な担当を持つことができた。担当するキャストたちの年齢層は幅広かった中で、特に思い入れの深い担当は、一人で三つ子の女の子を育てているキャストだった。

初めて持った担当者であり、彼女とは多くの会話を通じてマネージメントを行った。その中で彼女は夜に働くことが難しいという悩みを抱えていた。そのため、彼女は週に１回の出勤となり、その日は市が運営している夜間保育施設に子供たちを預けていた。市が運営しているため、民間よりは費用は抑えられているが、三人の子供がいるため、金額はそれなりにかさみ、また、施設の営業日も週末の土日だけとなっている。１年間ほど担当し、一緒に頑張ったが、最終的には子供を預ける場所がなくなり、固定客もいなくなったため、彼女はその仕事を辞めざるを得なくなった。

ナイトワークをしている親が直面する最大の課題は、子供と一緒に生活するための資金を稼ぐことが難しいという現状だ。調査や経験から、このような状況に直面しているキャストが多数いることが明らかになった。子供との時間が短くなる中で働く親が安心して子供を預けられる場所を計画したいと思った。

2. 敷地選定

敷地は祇園の八坂神社の中に位置する、円山公園祇園北側にした。

祇園は、京都市東山区に位置する歴史的で観光地として知られるエリアだ。富永町通りと末吉町通りは、祇園エリア内で繁華街やエンターテインメントの中心地となっている。

祇園エリアへのアクセスを交通量の面で考えると、祇園四条駅から祇園に向かう途中に位置するエリアが最も適していると言える。ただし、残念ながらこのエリアには既に 24 時間営業の託児所が存在している。一方で、八坂神社周辺にはまだそのような施設が整備されていない状況だ。周辺にはバス停やタクシー乗り場があるため、登園に不便さは感じない。

帰りもお店の送迎サービスを利用しても、待ち時間に迎えに行くことが可能な距離に位置しているのでこの敷地にした。

建物周辺を既存の木々で囲むことで、街中で自然と接することも可能になり、公園という広い敷地で自由に遊ぶことができる。








3. 問題提起

施設の運営側と利用者側、両者は異なる問題を抱えている。

〈施設側〉
・利益が出ない　→　特定の場所が運営する
・働き手の不足　→　長時間ではなく短時間の就業を可能にする
・少子化に対応しきれていない　→　保育士の活動可能時間で配置する

〈利用者側〉
・お迎えの時間が遅い　→　最終保育時間を長くする
・利用可能な時間帯の制限　→　常に１人多くのスタッフの配置
・経済的な負担　→　キャストの売り上げに応じた料金スライドを採用



4. 計画内容

今回の計画で目指すもの「働けない理由を子供にしない」

私がアルバイトしているお店のキャストで子供がいる人に話を聞いたところ、子供を預ける場所が見つからず出勤できなかったり、預けるための費用が高くて困っているなど、本人だけでは解決できない問題があることが分かった。

一番多かった意見は、お店のグループが運営する施設が欲しいという意見だった。

そこでナイトワークを運営している会社が運営する 24 時間の保育園を計画しようと思った。朝 9 時から夕方 17 時までは通常の保育園として機能し、夕方 17 時からは夜間保育に切り替わり、ナイトワークをしている親の子供たちを預かる通常の保育時間を設けることは、保育士の勤務可能時間に自由度を入れ働きやすさを考慮した。

施設の従業員には、運営企業のグループの店舗に在籍していたキャストや黒服を優先的に採用する方針を採用する。キャストとして働いている人の中には、保育士や管理栄養士、保健師、調理師免許など、保育園の運営に役立つ資格を持つ人が多くいる。これらの資格を有するキャストは、保育園において子供たちに適切なケアを提供するだけでなく、専門的な知識やスキルをもって運営に貢献できる可能性が高まると考える。そのため、保育園を運営する上で非常に価値のある人材となる。キャストが引

所在地： 京都府東山区円山町　円山公園祇園北側
主な用途：保育所
敷地面積：17,478m²
建築面積：2,652m²
延床面積：2,652m²
キーワード：保育所　24 時間

Location ：Maruyamacyo,Higasiyamaku,Kyoto
Main Use ： nursery school
Site Area ： 17,478m²
Building Floor Area ： 2,652m²
Total Floor Area ： 2,652m²
Keywords ： nursery school 24H

退する理由はさまざまで、その中には昼間の職業に就きたいという希望も多く見られる。しかし、再就職が困難な状況であることが実際の課題となっている。そのため、新たなキャリアへの移行をサポートする取り組みや、キャストの経験を生かした仕事への橋渡しを提供することができる。

5. 施設説明

運営会社：INSOU 西
稼働時間：昼 9 時～ 17 時　夜 17 時から 9 時
定休日：日曜
定員：0・1 歳　20 人
　　2 歳～（各年齢）　20 人

昼間の保育時間を 17 時までに設定しているが、延長保育を可能にするために、保育室とは別に広めのプレイルームを設置した。これにより、子供たちはより広々とした空間で安全に遊び、親が仕事を終えるまでの時間を楽しく過ごせるようになる。延長保育を提供することで、親たちにとっても柔軟で頼りになるサービスを提供できる。

その一方で、同伴や早い時間から出勤が必要なキャストにとっては、このプレイルームを利用して早い時間から子供を預けることが可能になる。キャストたちにとって、仕事と子育ての両立がしやすくなることで、働きやすい環境を整えることができる。



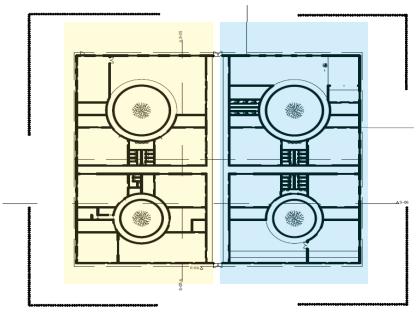
写真 1. プレイルームの様子

6. ダイアグラム

24 時間稼働する保育園では、親の仕事の都合により子供を預ける時間が異なるため、昼間と夜間で保育室の使い方を変えた。昼間は子供の年齢ごとに使っていた保育室を、夜間は子供を預かる時間ごとに室を分けることで、食事、自由な遊び、就寝時間などが室ごとに区別することが可能になる。

これを実行するために、建物自体をブロックごとに分け、建物内で環境を区別できるようにした。各ブロックは異なる目的や利用時間に合わせて計画し、昼間の保育と夜間の保育に関連するスペースが効果的に分かれている。これにより、子供たちが適切な環境で安心して遊び、学び、成長できるようになり、親たちにとってもニーズに合わせた柔軟な保育環境が提供できる。

各ブロックの中心には中庭を配置した。夜間の子供たちが安全に遊ぶことができるスペースを確保するため、中庭を活用することで外遊びを可能にした。これにより、子供たちは広々とした開放的なスペースで遊び、新しい体験を楽しむことができる。同時に、観光客が多い昼間でも子供たちが外で活動できるようになり、環境の最適な利用が実現できる。安全性と遊びの充実した環境を提供することで、子供たちと保護者の満足度を高めることが可能になり、需要が高まることが期待できる。



1 階平面図
黄：夜間　　青：昼間

風の通りを確保し、室内に自然光を取り入れるために、建物の屋根に切り抜きを設けました。この工夫により、屋内に開放感が生まれ、自然な風が通り抜けることで心地よい空間が形成される。また、中庭の周りを室内ではなく、廊下にすることで、どこからでも中庭にアクセスできるようにした。これにより、子供たちは建物内のあらゆる場所から簡単に中庭へ移動でき、年齢の違う子や時間帯が違う子とも交流する機会が生まれる。

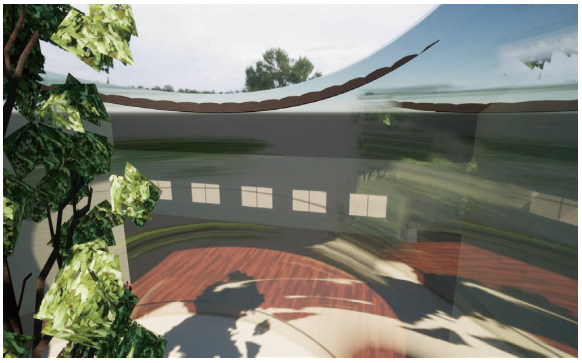
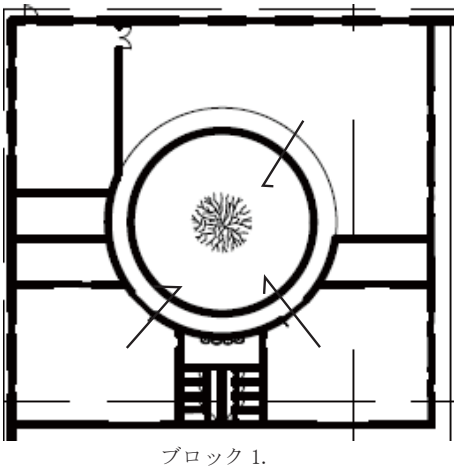


写真 2. 園内に太陽の光が入る様子



ブロック 1.

中庭へのアクセス 7. 参考文献

https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11600000-Shokugyouanteikyoku/0000057759.pdf　/ 保育士の現状
https://www.city.kyoto.lg.jp/hagukumi/page/0000002649.html　/ 京都の夜間保育
https://www.google.com/search?q=%E4%BF%9D%E8%82%B2%E5%A3%AB%E3%82%A4%E3%83%A9%E3%82%B9%E3%83%88%E3%80%80%E5%BF%99%E3%81%97%E3%81%84&tbm=isch&ved=2ahUKEwjd-O32rbaEAxVOVvUHHS72CtsQ2-cCegQIABAA&oq=%E4%BF%9D%E8%82%B2%E5

さんぽ道でつながる

学籍番号　K20352
名　　前　山本夕有花
指導教員　森重幸子

Connested by a walking path

Student Number　K20352
Name　Yamamoto Yurika
Supervisor　Morishige Sachiko



1. 背景と目的

少子高齢化が問題である今、子育てしやすい環境と同時に高齢者の生きやすい環境も必要である。高齢者は一人暮らしにより、運動能力や言語能力の低下が問題視されているが、老人ホームへ入居することに抵抗がある人も多い。一方、子育て世帯では、親は子育てへの不安感や孤独感を抱えている人が多く、子どもは電子端末の普及により体力低下、運動不足が増加していることが問題視されている。私は、高齢者も子育て世帯の人々も外に足を運び、人と交流することででこれらの問題を軽減できると考える。本計画では、散歩道を歩いていく中で、広場や施設など地域の人々が交流できる場へ立ち寄ることで、孤独感のない安心した子育てができ、高齢者の生きがいが生まれる複合施設を提案する。

2. 敷地

敷地は大阪府の東に位置する交野市星田北の空き地を選定した。最寄り駅である星田駅からは徒歩５分の距離にある。周辺には住宅が多く、この駅の利用客も多いため、多くの人が訪れやすい。交野市の人口は減少傾向にあるが、75 歳以上のみ増加傾向にあり少子高齢化が加速している街である。しかし、保育園や小学校もいくつかあるため、子育て世帯にも需要のある場所である。

3. 計画概要

子育て世帯と高齢者が交流することで言語能力の低下を防止したり、安心した環境で子育てできるメリットがある。しかし､子どもと親､高齢者とでは暮らしやすい環境は異なってくるだろう。子どもにとっては気軽に外で遊べる場所や勉強する場所があることで充実した暮らしになる。親にとっては子どもが充実できる環境であることはもちろん、悩みを話せる人が近くにいることや近所の人にも子どもを見守ってもらえる環境も必要である。高齢者にとっては子どもや動物と交流できたり、介護サービスが受けられたり、日常的にも安全な場所で運動できることが求められる。これらを全て実現するために敷地内を散歩していく中で多くの施設等に気軽に立ち寄ることができ、多くの人と交流できるよう計画した。





表１　交野市の人口

	2010年	2020年
0~14歳	11,832人	9,641人
15~64歳	49,197人	43,621人
65~74歳	10,452人	10,072人
75歳	6,165人	11,509人
総人口	77,686人	75,033人

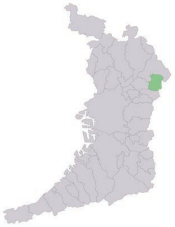


図１　大阪府交野市

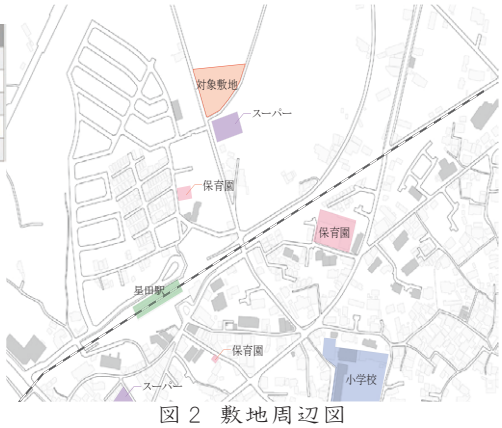


図２　敷地周辺図

所在地：大阪府交野市星田北
主な用途：福祉施設
敷地面積：3,343.5 ㎡
建築面積：2,337.97 ㎡
延床面積：2,337.97 ㎡
キーワード：高齢者、子育て世帯、少子高齢化

Location ： Hoshidakita,Katano City,Osaka
Main Use ：welfare facility
Site Area ： 3,343.5 ㎡
Building Floor Area ：2,337.97 ㎡
Total Floor Area ： 2,337.97 ㎡
Keywords ： senior citizen,Child-rearing household,
Declining birthrate and aging population

4. プログラム

4-1. さんぽ道が多くあることのメリット

高齢者や子どもは街中で散歩すると交通事故の危険性があるため気軽に散歩が出来ない。しかし、敷地内に多く散歩道があることで気軽に外に出て歩くことが出来、運動不足解消につながる。散歩道は屋外や半屋外、屋内にも設けており、晴れた日には屋外を、雨の日には半屋外、屋内を歩くことができる。楽しみながら続けられるよう同じような道ではなく様々な道や空間をつくり、歩きたくなるよう計画した。また、植栽やいくつもの施設が多くあるため目でも楽しむことができ、人と関われる楽しさも感じることが出来る。

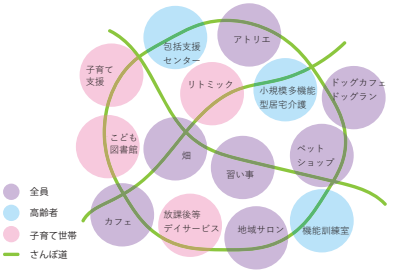


図３ さんぽ道と施設の関係

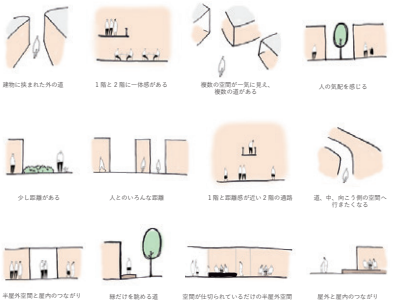


図４ 様々な空間

4-2. 地域の人々との関わり

放課後等デイサービスは障害のある小学生や中学生が利用でき、敷地周辺にある保育園で勤務する保育士と連携し、児童指導員として働きに来る。またイベントとしてその保育園の児童と小規模多機能型居宅介護を利用する高齢者とも交流することを計画する。春になると 15 分程歩いた位置に桜並木があり、その先に桜が綺麗な公園があるため、小規模多機能型居宅介護の春のイベントとしてそこに散歩しに行く。また、芋掘り体験ができる農園が徒歩 10 分の場所にあるため、地域サロンの秋のイベントとして足を運ぶことで地域の人々と関わる機会が増えると考える。

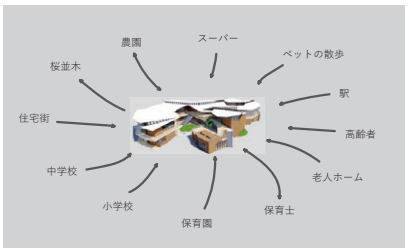


図５ 街とのつながり

4-3. 設計内容

人々がこの施設に興味を持ち、奥へ行きたくなるような複数の道を計画した。。様々な施設があるが、それらを壁で完全に区切らないことで目や耳で互いに雰囲気を感じとることができ、一体感が感じられる。面積が大きい建物であるため屋根の高さを変え、ハイサイドライトから光が差し込むよう計画した。窓を多く設けており、吹き抜けもあるため空気循環をよくしている。庇や半屋外空間があることで雨でも窓を開けいつでも換気することができる。

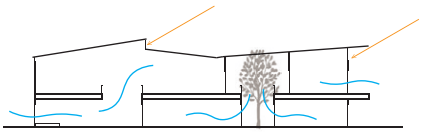


図６ 光と風

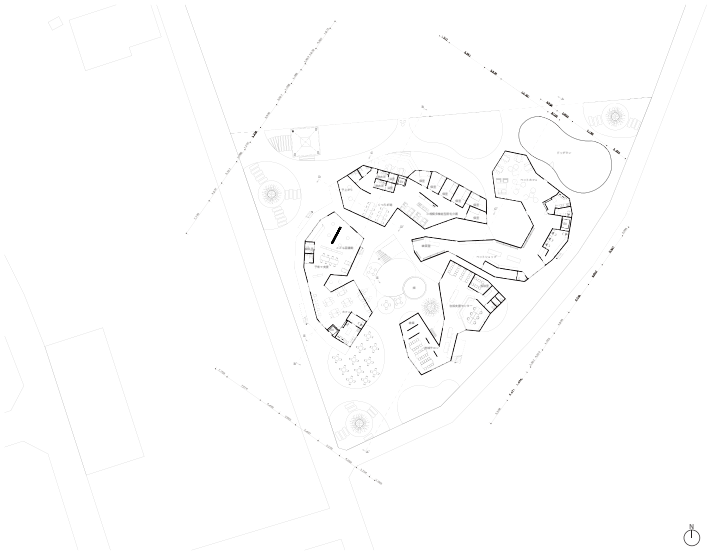


図７ 平面図

変態するよすが

長浜市で取り組む景観まちづくり

学籍番号　K20354
名　　前　湯浅晶喬
指導教員　山内貴博

A stronghold for a city undergoing transformation

Landscape town developement in Nagahama

Student Number　K20354
Name　YUASA Akitaka
Supervisor　YAMAUCHI Takahiro

1. はじめに

・少子高齢化、人口減少、中心市街地の衰退、環境問題など、近年の日本の社会および地方都市が抱える課題は複雑で深刻なものになっている。このような状況の中、長浜の中心市街地では、秀吉の時代から続く民間主導の自治の文化のもと、多様な事業者が、様々な組織や住民とのネットワークを作りながら活動を展開させ、歴史的な資源を核に、新しい文化を積極的に取り入れることで地域固有の景観を創造し、多くの人々を引き付ける観光地となった。

このような背景を持つ地域における現状と課題を分析し、魅力的な景観とは？長浜のまちづくりの活動が得意としていること・苦手としていることとは？という問いを軸に地域価値を高め地域を活性化させるための提案をする。

2. 背景

2-1 まちづくりにおける固有性とは

・少子高齢化、労働人口の流出、地域コミュニティの衰退など各自治体が共通の課題を抱えている中で、どのようにすれば他とは違う長浜らしいまちづくりを実践する事ができるのだろうか。

この問いに対する答えは景観の中にあると考える。景観はそこで暮らす人の共有の財産であり、これまで生活してきた人たちによって継承されてきたまちの記憶が可視化されたものであるといえる。つまり、景観形成の背景を読み解き、時代に対応した様々な活動に組み込むことで他とは違う長浜のまちに固有の価値を生み出すことにつながるのではないかと考える。

長浜で暮らす人々それぞれが自分の活動によって景観形成にどのような影響を与えるのか関心を持ち、目指すべき景観の将来像を共有し、それをもとに交流する事ができれば、希薄になってしまった地域コミュニティを活気あふれる豊かなコミュニティへと生まれ変わらせる事ができるのではないだろうか。

2-2 まちづくりにおける景観と立ち位置

・景観とは、山、川、湖、田園、建物、街並み、道路など私たちの暮らしで目にするものだけでなく、音や光、香りなどの感じるもの、さらには歴史や文化、風土、暮らしの中から感じる雰囲気など、様々の要素が深く関連しあって成り立っているものである。

こうした景観を構成するそれぞれの要素を、貴重な資産として認識し、活かし、育んでいくとともに、より魅力ある景観を作り上げ、次代屈継承していく必要がある。魅力的な景観の形成には、行政、市民、NPO法人、事業者など多様な立場の協力が必要不可欠である。

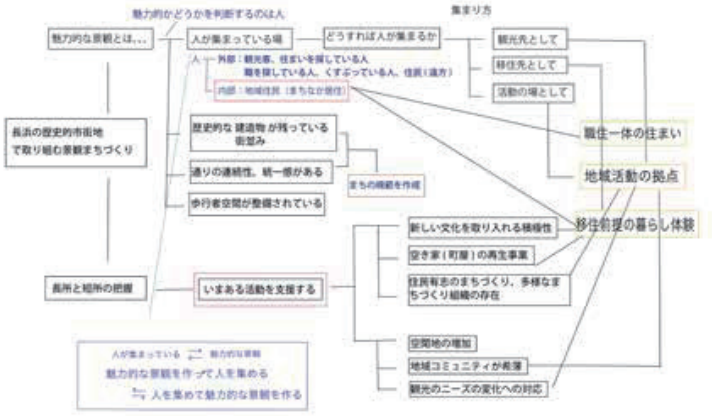
古くより受け継がれた「まちの記憶」は、私たちの知恵や、街並み、伝統行事、祭りなど随所に垣間見る事ができる。このまちの記憶が形作る長浜の景観は、暮らしに潤いや安らぎを与え、街や自然に対する親しみや愛着をもたらし、歴史を感じさせる地域住民が共有する有形・無形の財産であるといえる。また、訪れる人々の心に響き、まちの賑わいと活気を生み出す原動力ともなっている。

2-3. 魅力的な景観を形成するためには

地域独自のまちづくりに取り組む際に最も重要なことは、どのようにしてまちの個性を創出していくかという所にある。そしてまちの個性は景観に現われると考え、我々は、現在の長浜の景観形成の背景を読み解いていき、これからのまちづくりの指針を立てていくべきなのではないかと考える。

魅力的な景観について考えたとき、魅力的かどうかを判断するのは人であるから、景観が魅力的であれば人が集まる。それと同時に景観に魅了されて集まった人の活動によって景観は作られていくので、人が集まるから景観が魅力的になるとも考えられる。

この考えのもと、単に魅力的な空間をデザインするのではなく、地域の人々にとって魅力的な生活環境、活躍の場を整えることで、地域住民の活動意欲を引き出したり、他所からこの活動に惹かれた人を呼び込むような景観形成の活力を底上げする仕掛けを生み出すことが求められているのではないかと考える。



所在地：滋賀県長浜市
主な用途：地域交流の場
敷地面積:3,240 ㎡
建築面積:3,240 ㎡
延床面積:4,248 ㎡
キーワード：まちづくり、まちなか居住、地域交流、

Location ： ,,nagahama,Shiga
Main Use ： A Place for local communication
Site Area ： 3,240㎡
Building Floor Area ： 3,240㎡
Total Floor Area ： 4,248㎡
Keywords ： town development,Living in town,Regional Exchange

3. 選定敷地

3-1. 長浜市の概要

長浜市には多くの美しい景色が広がっている。姉川や高時川、余呉川等の琵琶湖へと注ぐ水景、伊吹山をはじめとする美しい山々を背景とし・た里山や田園などの鮮やかな「緑」が広がっていて、自然と人々の暮らしが密接な関係にある、美しく、豊かなまちである。また、古くから交通の要衝、情報の交流点にあり、街道や琵琶湖航路などの交通の利便性により、様々な地域の人々が行き交う街として栄え、様々な地域の文化がもたらされることによって、個性的で多彩な独自の地域文化を育んできた。

このように豊かな自然や地域の風土に囲まれた暮らしが長浜で暮らす人々の心の拠り所になっている。また、「町衆文化」の名残からくる市民自治の精神や、相互扶助の精神が今日の長浜を築いてきた。

4. 設計概要

4-a. いまある活動を促進させる

・一般的な中心市街地、歴史的市街地と長浜市のまちづくりの歴史と現状を比較し、どのような取り組みが成功しているのか、どのような課題を抱えているのか把握し、それぞれに対する活動を促進させるための場の創出を目指す。

4-b　まちの「規範」を作成する

・地域構造、地域資源、地域ブランドなど地域に固有な価値を読み解き、地域の固有性をかたち」にするための「まちの規範」を提案しまちの将来像を示す。

4-d　まちなか居住の回復を図る

・　景観の魅力を推し量る指標の一つとして「人の気配の濃さ」が挙げられる。景観の良し悪しを判断するのは人であり、魅力的な景観を有するまちには多くの人が集まる。そうして魅力に惹きつけられた人々の活動によってそのまちでの暮らしはより豊かななものへと育まれていく。

現在の長浜の中心市街地は、「町衆精神」のもと地域資源を生かしたまちづくりを成功させ観光地として成長した。しかし、地域住民の視点に立った時、暮らしを送る場としての改善点は少なくない。地域の外から長浜へと人を呼び込む仕組みを作ることで、まちの生活の場としての魅力の向上させ、まちなかの居住を回復させることで地域の活力を底上げし、より魅力的な景観の形成を目指す。

5. 設計手法

5-a　建物の連なりとファサードの徹底

・街並みの保存に関して、重要なのは環境であり景観であるから、建物のファサードを徹底すれば、建物の内部は背後に応じて改造しても構わないのではないか？景観を損なわない限り個々の建築物は新しい機能への適応を図るべきではないか？という考えのもと、より良い景観を作り、育てていくために通りの連続性を図るために建物の連なりとファサードに関する基準（まちの規範）を作成する。

5-b. スケルトンインフィルの採用

スケルトンインフィルをとは、 建物をスケルトン部分（構造躯体等）とインフィル部分（間取り内装等）前者は 100 年以上の耐久性と耐用性を重視し、後者は利用者のライフステージの変化や、社会状況に応じて柔軟に喧嘩することができる柔軟性と後進性を有している。日本の建物の建て替えの実態は、構造体の老朽化によってではなく、住宅の広さが足りないであったり、間取りや設備面とライフスタイルにずれができてしまうなど、機能面が理由で行われることが多い。その結果、まちなかの建物が個人によって手が加えられていくことで、街並みと調和の取れていない建造物が建てられたり、計画性のない駐車場におきかえられていくなど、緩やかに景観が損なわれている。まちなかの建物を群としてスケルトンインフィルの建物に置き換えることで、街並みの調和、建物の老朽化などの対策につながり、100 年先を見据えたまちの骨格形成につながると考

参考文献

長浜市総合計画第３ 期総合計画　https://www.city.nagahama.lg.jp/cmsfiles/contents/0000001/1416/last.pdf
・長浜市国土利用計画　https://www.city.nagahama.lg.jp/cmsfiles/contents/0000004/4677/design.pdf
・新市まちづくり計画　https://www.city.nagahama.lg.jp/cmsfiles/contents/0000000/864/20191001.pdf
・長浜市歴史的風致維持向上計画の構成（案）
・長浜市景観まちづくり計画　https://www.city.nagahama.lg.jp/cmsfiles/contents/0000002/2131/keikannkeikaku20200701.pdf
・長浜市の歴史まちづくり　https://www.kkr.mlit.go.jp/kensei/town/rekimachi/qgl8vl0000001rl6-att/summit_nagahama.pdf

WORK+VACATION　～大自然に囲まれて～

学籍番号　k20355
名　　前　湯本深月
指導教員　森重幸子

WORK+VACATION　～ surrounded by nature ～

Student Number　K20355
Name　YUMOTO Mizuki
Supervisor　MORISHIGE Sachiko

1. 計画概要

長野県下水内群栄村上ノ原に位置する「のよさの里」をリノベーションし、ワーケーション施設を提案する。ワーケーション（Workcation）とは、「ワーク（Work）= 仕事」と「バケーション（Vacation）= 休暇」を組み合わせた造語で、観光地やリゾート地など、普段のオフィスとは離れた場所で休暇を楽しみながら働くスタイルのことである。対象地である「のよさの里」は大自然に囲まれている。この特徴を活かし、宿泊施設としての利用も可能な、大自然の中でリフレッシュしながら仕事ができるようなワーケーション施設を設計する。

2. 制作背景

新型コロナウイルスの感染拡大により、働く場所の多様化がみられる。また、感染拡大の影響が無くなったアフターコロナにおいても進んでいくと考えられる。そして、新しい柔軟な働き方として、地方や観光地で仕事をするワーケーションというスタイルが確立した。対象地のような大自然に囲まれた中など、非日常的な空間で仕事・滞在することで、ストレスの軽減やリフレッシュ効果が期待できると考える。また、余暇を楽しみながら仕事ができ、五感の刺激や、モチベーションの向上に繋げることができる。そして、新たなアイデアの創出や、自分のリズムで ON/OFF を切り替えることも可能となると考える。これらのように、ワーケーションを実施する従業員にとってはウェルビーイング向上という面で多くのメリットが期待できる。(ウェルビーイング (well-being) とは、肉体的、精神的、社会的に満たされた状態を指す概念のこと)

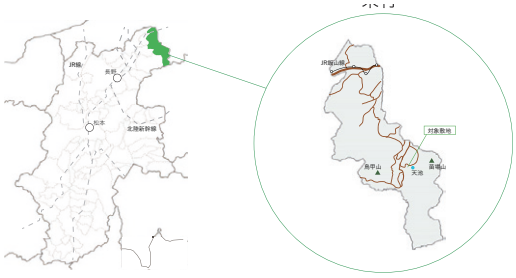


図 1　栄村地図

3. 対象敷地

本提案では、長野県下水内群栄村上ノ原に位置する「のよさの里」を選定した。栄村は長野県最北端にあり、新潟県との県境に位置する自然豊かな村であり、「のよさの里」までは、豊田飯山 IC から車で約 90 分の所に位置する。上ノ原付近には鳥甲山や苗場山など、2000m 級の山々があり、その山あいには美しい紅葉の名所と知られる秘境・秋山郷がある。村内各地には泉質が異なる様々な温泉が湧出している。また、対象敷地である「のよさの里」周辺には自然が広がっており、徒歩 5 分程の所には水面に木々や山が映りこむ天池がある。空気が澄んで人工的な灯りが少ない大自然に包まれているため、夜には満点の星空を見ることができる。



図 2　鳥甲山

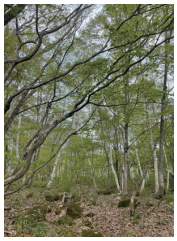


図 3　自然が広がる



図 4　星空



図 5　天池

4. 利用対象

本提案で検討しているターゲットは個人事業をしている人や副業での活動をしている人 (もう一つの仕事を場所を変えておこなうなど)、プロジェクトでの活用をする人、普段はある仕事をしているが、個人の勉強のために夏休みとかに来る人などをターゲットとする。また、滞在施設として利用する家族や友達同士などもターゲットとして計画する。主に仕事を中心に訪れている企業 (グループ) であったり個人事業をしている人が使用する宿泊棟のバリエーションとして、ドミトリー (6 人用)、1~ 2 名用、2~4 名用、の宿泊棟を計画する。2~4 名用は、友達や家族で訪れた人も使用できるような宿泊棟として計画した。

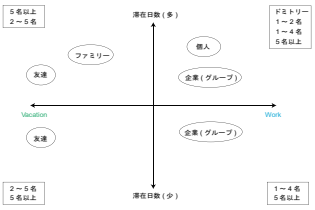


図 6　利用対象者

所在地：長野県下水内群栄村上ノ原
主な用途：ワーケーション施設、宿泊施設
敷地面積：23,552.20 ㎡
建築面積：882.99 ㎡
延床面積：882.99 ㎡
キーワード：温泉宿、リノベーション、ワーケーション、自然

Location ： Uenohara, Sakaemura,Shimominochigun,Nagano
Main Use ： Workation facility,accommodation
Site Area ：23,552.20 ㎡
Building Floor Area ：882.99 ㎡
Total Floor Area ：882.99 ㎡
Keywords ： Hot spring inn,Renovation,Workation,Nature

5. 配置計画

本提案では、本館の東側にある宿泊棟を曳家で位置を変え配置する。全宿泊棟から、西に位置する鳥甲山を望むことができるように配置した。また、南からの光、そして東からの朝日が全宿泊棟に入るように、ずらして配置した。宿泊棟へは、周りの木々の自然を感じながら、歩いて移動する。東の方へ登っていく所には、ワークスペースを計画する。建物の他に傾斜をいかしたテラスを設け、木々に囲まれた開放的なスペースとする。また、本館の北側にもワークスペースを計画する。このスペースは、山を見ながら集中して仕事に取り組むことができる場所として計画する。本館の南側には、木々を眺めながら入ることができる内風呂を、南西には山を見ながら入ることのできる露天風呂を計画する。ここへは、渡り廊下を渡って向かう。

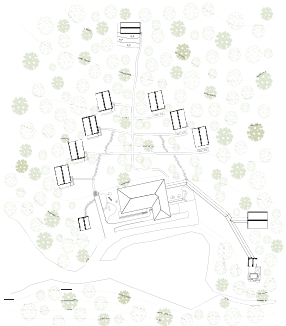


図７　配置図

5. 計画概要

本提案では､のよさの里をリノベーションし､宿泊のみの使用も可能なワーケーション施設を計画する。本館の計画としては、訪れた人同士がコミュニケーションをとりながら仕事ができるよう、共有キッチンと近接してワークスペースを設けた。ここはもともとあった天井を抜き、梁を見せ開放的な空間とした。また、和室を設け、床に座りながらといったまた異なるワークスペースとした。ホールと隣接して、薪ストーブのあるラウンジをくつろげるスペースとして設けた。食堂は中からも鳥甲山が見える位置に配置し、テラスを隣接させ、周りの自然を感じながら食事をとる事ができるようにした。ふるさと広場と呼ばれるスペースは、キャンプファイヤーやバーベキュー等ができるスペースとする。宿泊棟の計画は、鳥甲山が見える側にテラスを設け、夜には星空を見ることができるスペースとした。梁が見えているスペースをそのまま活用し、開放的な空間と閉じた空間ができるように計画した。東に上ったところ、そして本館の北側にもワークスペースを計画する。周りの木々や景色を活かした計画とする。温泉の計画としては、内風呂からも外を見ることができるようにする。露天風呂も設けて、山や木々を感じることができるようにし､。もともとある渡り廊下は、内風呂、露天風呂へ行く所に設け、宿泊棟へ行く時には周りの自然を感じながら歩き、各々の棟へ行くようにした。

6. のよさの里本館と宿泊棟の平面図・立面図

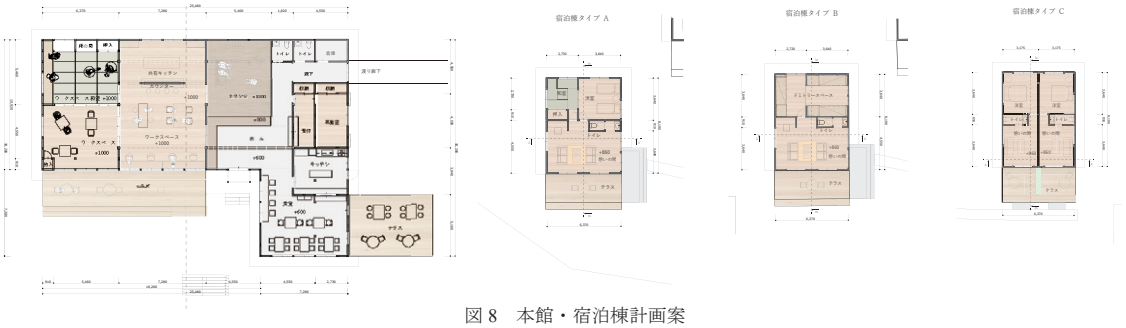


図８　本館・宿泊棟計画案



図９　本館・宿泊棟平面図

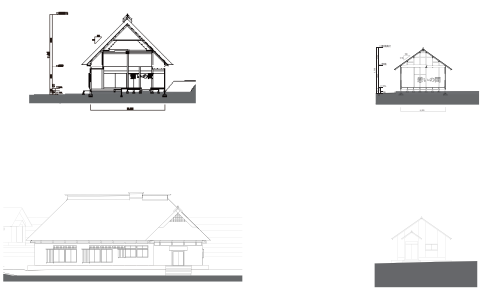


図 10　本館・宿泊棟断面図立面図

小さなまちの大きな絆

～負の連鎖から子育て世帯を救う～

学籍番号　K20356
名　　前　横井亜衣
指導教員　小梶吉隆

Big bonds in a small town

Saving child-rearing households from the negative cycle

Student Number　K20356
Name　　YOKOI ai
Supervisor　　KOKAJI yoshitaka

1. 計画背景・目的

現在、「子どもの貧困率」が高く、日本では７人に１人の子どもが相対的貧困下に置かれているとされている。さらに、ひとり親世帯の貧困率が高く、ひとり親世帯の２世帯に１世帯が貧困状態にある。貧困は、経済的な困窮自体問題であるが、子どもにさまざまな影響を与える。虐待や孤立といった深刻な事態を招く主要因にもなるため、解決しなければならない問題である。また、子どもの貧困は連鎖し、次世代にもつながってしまうと言われており、貧困による負の連鎖を止めなくてはいけない。そこで、貧困に苦しむ子育て世帯の親子を助けるための集合住宅を計画する。

2. 貧困原因

貧困の主な原因として、収入に差があることやひとり親の増加がある。また、支援情報が必要な人に届いていないことや、自己責任論や恥ずかしさから人に頼ることができないことも原因として挙げられる。

・所得格差
日本には地域間、産業間、世代間、男女間などで所得格差がある。また、何らかの事情により親が働けない場合や、働いていても非正規雇用のため収入が不安定で少ないということがある。

・ひとり親の増加
ひとり親世帯は貧困に陥りやすい傾向にある。親が一人しかいない分収入が減る。また、子育てと仕事の両立は難しく、子どもが幼い家庭では、子育てや家事に追われ正規雇用やフルタイムで仕事ができないこともある。病気やケガにより働けなくなると収入が減少したり、ゼロになったりする。

・情報格差
支援制度の存在を知らない家庭がある。インターネットが普及している現在だが、「制度をどのように見つければよいのか分からない」「そもそも調べようとしていなかった」ということがある。また、仕事、子育て、家事に時間を追われ時間のない人が支援を十分に理解したうえで、必要な書類を用意して申請まで至るのはそう簡単なことではない。

・自己責任論
貧困であるのは自己責任ととらえ、人に頼ることなく自分たちで頑張って生活をしていかないといけないと思っている人がいる。

3. ひとり親世帯に貧困が多い理由

ひとり親世帯に貧困が多い理由は、非正規雇用やフルタイムで働くことができなため収入が少ないこと、病気やケガにより働けなくなり、収入が減少したりゼロになること、教育費がもらえていないこと、ローンなどの返済があることなどが挙げられる。

・非正規雇用
子どもが幼いと子育てに充てる時間が必要となるため、正規雇用の仕事に就きづらい状況にある。また、女性は出産を機に退職し専業主婦やパートをしていた人も多くいる。そのためシングルマザーとなり仕事を探す場合には、正規雇用に就くことが難しい場合もある。雇用側もシングルマザーであることから雇用を敬遠するところもある。

・教育費がもらえない
ひとり親となる原因の多くが離婚である。この場合、教育費を受け取る権利がある。しかし、離婚の際に教育費の取り決めをしていなかったり、離婚後に教育費が支払われず受け取れないこともある。

4. 貧困問題と影響

子どもの貧困は、最低限度の衣食住が確保できていることが多いことから、絶対的貧困に比べて表面化しにくく、見えにくいという問題がある。また、貧困である子どもや親に自覚がなく、自ら支援を求めなかったり、貧困の自覚があっても、周囲の目を気にして支援を求めない人もいる。中には、貧困を自己責任ととらえ、誰にも頼らず自分たちで頑張らなくてはという意識を持っている人も多くいる。背景は様々だが、周囲に気づかれないように隠そうとする人もいる。

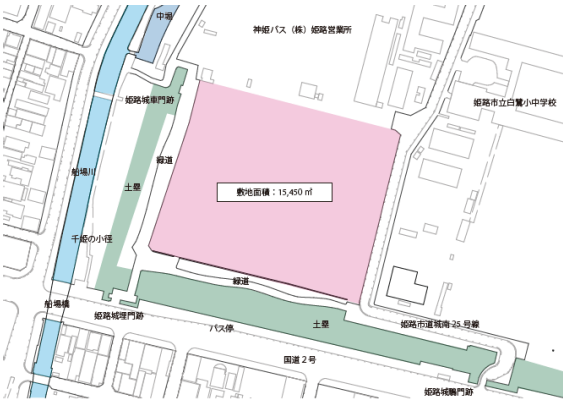
貧困状態にある子どもは、食事や教育、進学、医療などさまざまなことに影響が出る可能性があると言われている。また、親は働くことを余儀なくされ、子どもの一人でいる時間が長いことで親子でコミュニケーションを取る機会が減り、コミュニケーション能力が身につかなかったり、生活習慣や衛生習慣が身につかなかったりする。親子関係が希薄になり、相談や本音が話せなくなるということにもつながる。さらに、貧困によって「自分だけできない」という環境に置かれることにより、子どもの自己肯定感が下がってしまったり、自分を価値のない人間だと考えるようになってしまう。この自己肯定感の低下は、学習意欲を削ぎ、将来の夢や希望を失ってしまう原因にもなる。

5. 敷地

敷地は、兵庫県姫路市本町 68-53 県営本町住宅跡地（現在の本町臨時駐車場）である。姫路城城下町は、姫路城を中心に内堀、中堀、外堀の３つ堀で分けられた内曲輪、中曲輪、外曲輪で構成されている。対象敷地は、姫路城跡中曲輪の南西に位置している。現在は、老朽化に伴い県営本町住宅は廃止され、繁忙期のみ利用されている本町臨時駐車場となっている。現在も敷地周辺には城門跡や土塁、千姫の小径など歴史的要素が残っている。

6. 敷地選定理由

対象敷地は、以前、県営住宅が建てられていた。敷地周辺には学校や保育園、幼稚園が多くあり、子どもを預ける場所がある。また、敷地に隣接しているのは住宅ではなくバスの車庫や学校であり、子どもが多少騒いでも近所迷惑になりにくいと感じた。さらに、敷地の東側の道路は交通量が少なく、南側の国道２号線と敷地の間には広い歩道や緑道、土塁があるため、交通事故などの危険が少ないと考えた。よって、子育て世帯のための集合住宅を計画する場所として良いのではないかと考えた。





所在地：兵庫県姫路市本町 68-53
主な用途：集合住宅
敷地面積：15,450m^2
建築面積：4,290m^2
延床面積：8,008m^2
キーワード：集合住宅・貧困問題

Location ：68-53,Honmachi,Himeji City,Hyogo
Main Use ：apartment
Site Area ：15,450m^2
Building Floor Area ：4,290m^2
Total Floor Area ：8,008m^2
Keywords ： apartment, poverty problem

7. 計画内容

貧困に困っている子育て世帯を救うための集合住宅を計画する。同じ環境下の人が近くに住むことで安心できたり、相談しやすくなったり、苦しんでいるのは自分だけではないということが分かり、孤独や孤立から解放されやすいと考えた。貧困に困っている親子に必要なことは、助け合える環境や場所、健康的で温かい食事、安心して過ごせる場所、教育・医療・経験などの格差を広げないための場所だと考え、それらを計画する。

住戸

1 可変性
子どもの成長に合わせて壁を付けたり外したりすることができる。子どもが小さいうちは壁をなくし部屋を広く使い、子どもが成長するにつれ、家具や壁で仕切って子どもの自立支援ができるようになっている。

2 リビングアクセス
親子が毎日顔を合わせコミュニケーションを取れるようにするため、個室に行くには必ずLDKを通るようにしている。

3 水廻り
水廻りを集め動線に回遊性を持たせることで家事動線を短くし、家事を楽にする。家事を楽にすることで家事をする時間を少なくし、親子の時間に充ててもらう。

4 見守り
料理をしながら子どもを見守ることができるようにキッチンは対面式になっている。対面にすることで会話がしやすく、壁に向かって一人で料理をする孤独感もなくなる。

5 玄関
玄関を広めに設計することでベビーカーでもスムーズに出入りができたり、置き場所に困らなくなる。子どもの遊び道具などを置いても狭くならない。

6 テラス
洗濯物を干すだけではなく、イスやテーブルを置いたり、テントを張ってアウトドア気分を味わったり、植物を育てたり、天体望遠鏡で星の観察をしたり、子どもの興味関心を高める。



その他施設

1 食堂
・温かく栄養バランスの取れた食事が食べられる
・孤食を防ぐ
・料理する時間を子どもと過ごす時間に充てることができる

2 勉強スペース
・みんなで勉強したり、ボランティアの人に教えてもらうことができる
・自習スペースとして利用することもできる

3 医務室
・病院に行かなくても簡単な診察や治療をしてもらうことができる
・経済的な理由で病院に行くことを控え、ケガや病気が悪化するのを防ぐ

4 屋上菜園
・一から野菜などをつくる経験ができる
・育てた野菜などを食堂で出すことにより、親子の会話のきっかけになる
・食育になる

5 公園
・自然に触れながら遊ぶことができる
・走ったり、飛んだり、登ったり、遊具やボール遊び、水遊びなど、子どもたちが自由に遊ぶことができる

6 相談室
・不安に思っていることや分からないことがあれば、一人で溜め込まずに相談することができる

7 託児所
・親が仕事や用事で子どもが一人になってしまうときに利用することができる

8 図書室
・本を読むことで知識や教養が身につく
・創造性、思考力、読解力、語彙力、共感能力などが向上する

9 交流の場
・敷地内に多く配置することでコミュニケーションを取りやすくする

10 カフェ
・住人じゃなくても気軽に利用することが出来る
・子どもが遊んでいる待ち時間に利用することが出来る
・住人と地域の人の交流の場となる

11 室内遊戯室
・雨の日でも遊ぶことが出来る
・住人の人以外も利用することが出来る

8. 参考文献

・株式会社　第一生命経済研究所
・GREEN　NOTE
・私たちについて　認定NPO法人PIECES
・Living　Peace
・姫路城跡　整備基本計画
・姫路城跡中曲輪施設整備方針
・姫路城周辺風景形成地域の基準
・もっと詳しく！姫路城
・姫路城城下町跡

居場所をつなぐ中間領域

学籍番号　K20357
名　　前　横山波南
指導教員　森重幸子

Intermediate area connecting whereabouts

Student Number K20357
Name YOKOYAMA Hana
Supervisor MORISHIGE Sachiko

0. 設計目的

京都の町の京都の町の象徴ともいわれる京町家だが、経年劣化だけではなく現代の住まい方に対応していない。その結果うまく活用されてず空き家や空き地の増加が促進してしまっている。

そこで、今回の課題では地域交流の減少にも注目し、町家を改修・リノベーションを行い、また空き地に新たな空間を計画し、地域活性化と共に住人だけでなく地域住民、観光客など様々な人の居場所になるような新しい空間と住まい方を提案する。

そして魅力を感じる中間領域に着目し、地域と築く新しい住まいについて考える。そこで、１つの路地を共有しながら生活をする京都ならではの路地空間に注目し居住空間と中間領域の活用を考え計画し空間構成を提案する。

1. 敷地

敷地は京都府京都市東山区の北端に位置する粟田学区白川周辺の空き店舗・空き地を選定した。

粟田学区は観光地である祇園や岡崎の中心に位置し、三条通りから東西に広がる地域。中心街に比べ豊かな自然を持ち、粟田神社など様々な観光資源を持ちながら、年々人口減少が進み高齢化によって衰退が進む地域である。

粟田学区内の賑わいの中心は東山駅東大路通との間に配置されたアーケードのある古川町商店街であるが、現在新たな店舗の入店も進んでいるが、空き店舗も多く存在しているのも現状である。多くの歴史が残り魅力のある地域であるのにも関わらず観光客や地域住民が立ち寄る場所が少ない。継承していくべき京都の良さが薄れていってしまう。

京都市全体に着目すると、空き家や空き地は年々増加しており、空き家率が右肩上がりである。また単身世帯が増加し、世帯数も増加しているのにも関わらず空き家率が増加しているため、町家がうまく活用されていないことが分かる。

粟田学区は観光客も多い地域だが、世帯数２,338 世帯、人口総数３,640 人、高齢化率 23.2%（令和２年国勢調査より）であり、ファミリー層も多く学生から高齢者まで幅広く生活している。

近年実際に、地域活性化に向かうため「粟田まちづくり協議会」が設立され、空き家・空き店舗の対策や路地再生・地域活動が進んでいる。歴史が残り、観光地に囲まれている好立地である。この地域の空き家や空き店舗を活用し、新たな空間を提案する。



図１　粟田学区全体地図

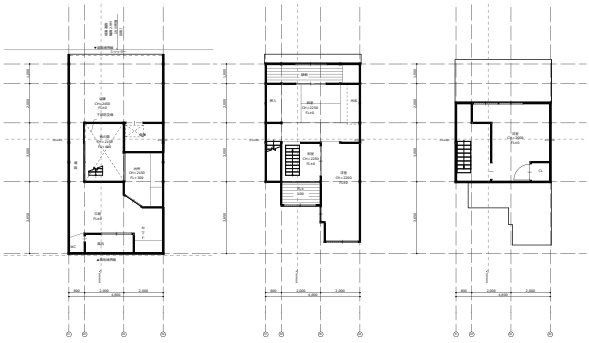




図２　商店街既存図面・改修前調査写真

所在地：
主な用途：複合施設
敷地面積：改修 51.45 ㎡　新築 308.11 ㎡
建築面積：　46.32 ㎡　187 ㎡
延床面積：　101.62 ㎡　142 ㎡
キーワード：中間領域・改修・まちづくり・町家・伝統・地域

Location ：
Main Use ：
Site Area ：
Building Floor Area ：
Total Floor Area ：
Keywords ：

2. 設計概要

選定した２ヶ所に住居部分であるプライベート空間と、地域住民や観光客が自由に利用できるカフェなどのパブリック空間を１つの建物に中間領域を用いて計画を行う。

プライベート空間とパブリック空間をどのように共存させるかという問題について、私は中間領域の活用を考える。

今回の課題に取り組むに当たり、日本の伝統にも注目した。日本独自の住空間の構成として、中庭・坪庭・通り庭などの庭、内部は土足禁止が定着する日本だからこそ生まれた土間空間、そして、現代の新築などでは無くなってしまっている家庭が多い軒下空間や縁側など日本には魅力的な中間領域が多く残っている。時代が進む中でうまく活用されにくくなってしまったが自然と人が集まるような空間を生み出すと考え、今回の課題で活用したいと考え取り入れる。

3. 中間領域について

中間領域とは、主に内部空間と外部空間が交じり合う場所だと一般的に解釈が広がっている。具体的に例を挙げると、建物外部にあるものの内部のような場所（半屋外空間）と、建物内部にあるものの外部のような場所（半屋内空間）のような場所の事である。

だが私はプライベート空間とパブリック空間が交じり合う場所にも中間領域は活用できると考える。

そこで、プライベートな中間領域（住民がくつろ具場所・屋外の作業場所）とまち・地域とつながる中間領域（敷居が低く誰もが気軽に立ち寄れる交流の場になる）という中間領域を計画する。

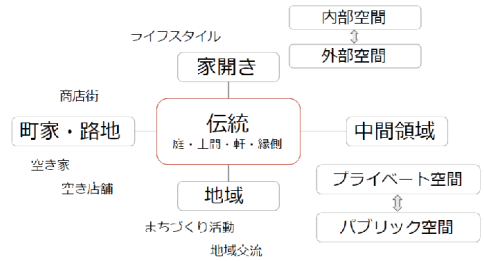


図３　構想・キーワード

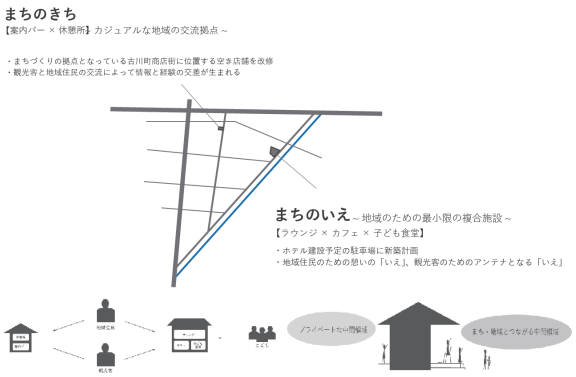


図４　まちのきち・まちのいえ・中間領域ダイアグラム



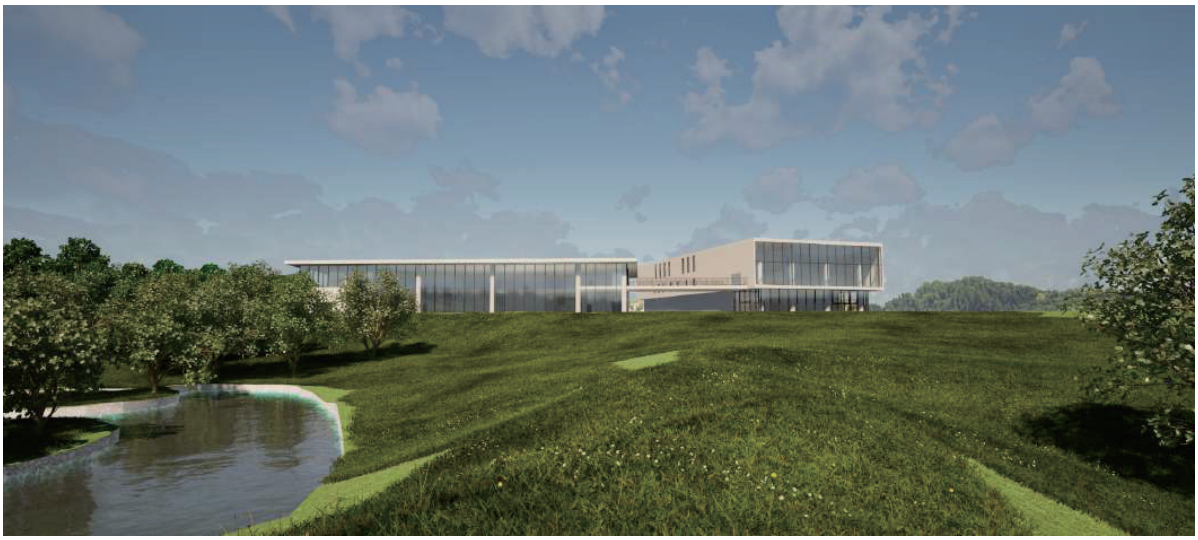
図５　計画図面・パース

自然と親和する河川空間

学籍番号　K20358
名　　前　吉岡 駿祐
指導教員　河村　大助

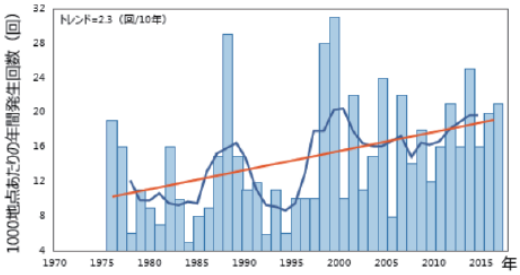
A river space in harmony with nature

Student Number　K20358
Name　SHUNSUKE Yoshioka
Supervisor　TAISUKE Kawamura



計画背景

近年、日本では洪水災害が増加傾向にあり、これに対処するため全国各地で河川敷の治水能力の強化が進められている。しかし、護岸工事が進む一方で、河川の流化能力や土手の耐久性向上のために多くの森林が伐採され、かつて美しい自然環境であった河川敷が失われつつある。このような状況を受けて、治水の強化だけでなく、自然環境の保護にも焦点を当てる必要があると考える。人と自然との調和を図りながら、河川計画を進めることが重要である。自然と共生しながら治水対策を進め、地域の安全性を確保すると同時に、美しい景観や豊かな生態系の保全にも努めることが求められる。これにより、将来の災害リスクを軽減し、人々が安心して自然環境を楽しむことができる河川空間を生み出したい。



1時間降水量80mm以上の年間発生回数　出典:気象庁資料

敷地の現状

かつてのこの土地は蛍の群生や、天然記念物であるアユモドキなどが生息することができる程の豊かで綺麗な自然環境であった。しかし、現在では岡山市の都市化が進む中、河川の水質が悪化し、かつて見られた自然の美しさが失われつつある。

また平成25年から平成30年にかけて行われた分流部の堤防の大改修工事により、野生動物の住処であった多くの樹木が失われ、長期間にわたって周辺地域への侵入が禁止された。2020年には新型コロナウイルスの蔓延の影響で、河川広場周辺でのBBQやピクニックなどの活動が制限され、これが要因となりかつて賑わっていたせせらぎ広場および周辺エリアの活動が減少している状態にある。



かつての様子



整備後の現在の様子

敷地情報

計画地は岡山市の一級河川である旭川の下流域にあり、百間川への分流部である「せせらぎ広場」及び周辺の河川広場とする。

岡山市の4行政区の中で最も人口密度の高い中区の北西部に位置し都市部である北区の境に位置する。

江戸時代に岡山藩の頭首でる津田永忠によって治水政策が行われ、旭川から放水路である百間川が生まれた歴史があり、現在も当時の堤防が現存し活用されている



計画概要

人々の日常的な活動と自然が交差し、共生する美しいランドスケープデザインの計画を行う。河川内に動植物が生息できるビオトープ空間と、人が自由に活動できるエリアを交互に配置し、それらの動線を交差させることで、自然と人が調和した空間を河川内に生み出し、同時に人々が手入れを継続的に行える環境を整備する。

・自然と人の共生

ビオトープ空間と人の活動エリアを巧みに配置し、交差させることで河川内において人と自然が共生する環境をデザインする。これにより地域住民が自然と触れ合い、環境への理解が深まるよう狙う。

・持続可能な整備

自然環境の改善を恒久的かつ持続的に行えるようにするため、地域住民が積極的に関与し手入れがしやすい状態にするよう計画する。自然との調和を大切にし、長期にわたって美しい河川空間を維持していく。

・自然学習センター

現在の岡山市中消防署があるエリアに、河川広場に向かって開かれた自然学習センターを計画する。学習センターは河川広場の中心的な拠点となり、子供たちの自然学習活動やマルシェ等の地域のイベントが行われ、地域住民の交流と活動の活性化を促進させる。

所在地：岡山市中区今在家地先427
主な用途：公園
敷地面積：238000㎡
建築面積：2500㎡
延床面積：7732㎡
キーワード：ランドスケープ・学習センター・河川敷

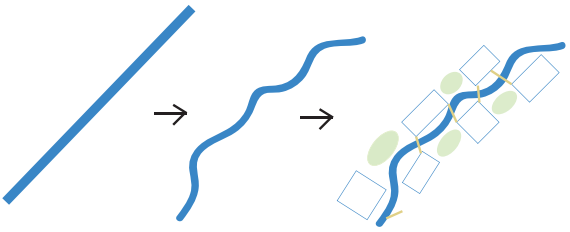
Location ： 427,Okayama city,nakaku,imazaikechisaki
Main Use ：park
Site Area ： 238000mm²
Building Floor Area ：2500㎡
Total Floor Area ： 7732㎡
Keywords ：landscape,learning center,riverbed

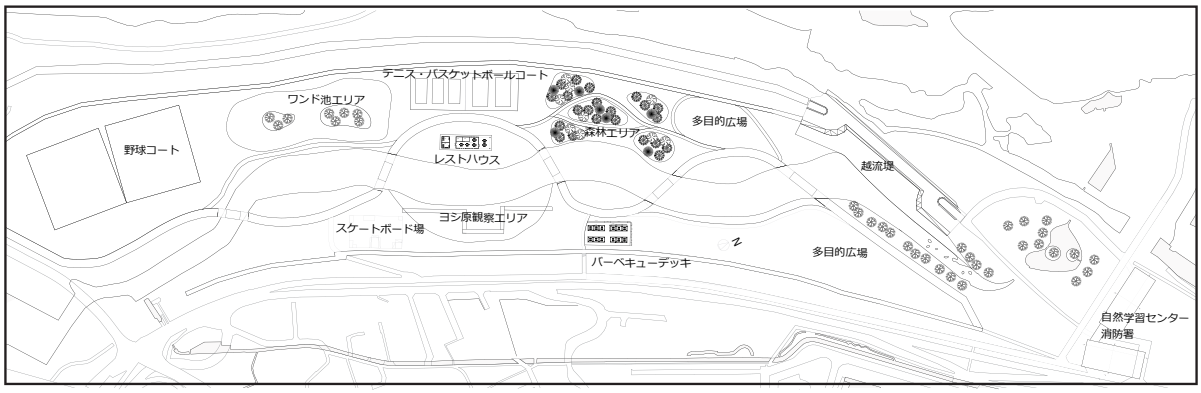
■ランドスケープ計画

百間川の従来の直線状の形状を緩やかな波状に変える。これによって河川広場内の景観をより豊かにし、ワンド域やたまり池など多様な河川地形を生み出す。水域内における酸素供給の向上やヨシなどの水生植物の導入による自然浄化を促し、水質の改善を図る。これにより、多様な水生動植物が生息できる環境を整備する。

さらに、運動広場やキャンプ広場など人々が日常的に活動するエリアと、自然の動植物が生息するビオトープエリアを交互に配置を行う。これにより、人間の活動と自然環境が調和する空間をデザインする。自然観察の動線と人間のアクティビティーエリアを繋げる動線を、河川に架かる橋の上で交差させることでアクティビティーの多様性が生まれ、訪れる人々が自然とのふれあいを楽しむことができる。

ダイアグラム





■自然学習センター・消防署の計画



敷地の北東端部に位置する、岡山市中消防署の裏手にある一般駐車場に河川広場の拠点となる自然学習センターを計画する。学習センターは河川広場の自然や治水の歴史に関する学習活動の場を地域の子供たちに提供するだけでなく、カフェやワークショップスペースとして利用できる広いエントランスを設けることで、地域住民の交流の拠点としても機能する。

また、学習センターの新設だけでなく消防署の再設計も行う。河川敷に向けて開いたファサードにデザインすることで河川広場と親和する空間を生み出し、河川敷の利用者の来館を促す。

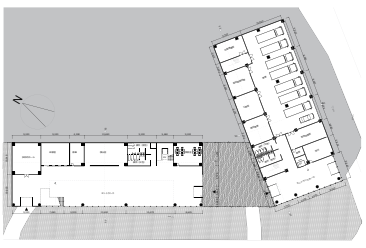
災害発生時には防災拠点として機能するようにし、エントランスやト防災協議室を避難所として利用できるよう幅広い空間とした。

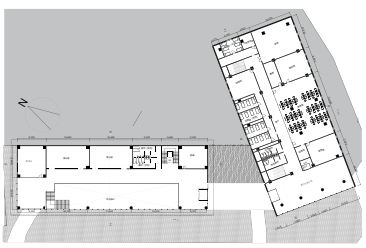


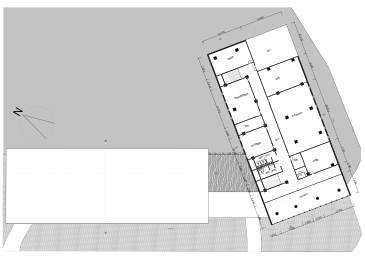
消防署事務室



学習センター　エントランス







昭和初期における天理外国語学校（現・天理大学）のキャンパス形成と建築物に関する考察
～現・一号棟、旧寄宿舎を中心に～

学籍番号　K20359
名　前　吉岡諒
指導教員　砂川晴彦

近代　大学キャンパス　武田五一
校舎　学生寮　入母屋造

序章　はじめに
１　研究の目的
天理外国語学校とは現在の天理大学の前身であり、天理教二代目代表の中山正善が創立した。天理大学のキャンパスには戦前に建てられた建物が多く現存している。本研究ではこれらの建物の中から最初に竣工した現一号棟、旧寄宿舎を対象とすることにした。これらは現在使用できず､取り壊しの可能性もある。そこで本研究では現一号棟、旧寄宿舎（竣工 1927 年）が保存活用されるよう情報の基礎となる調書を作成することが目的である。
２　研究の構成と方法
本稿では武田五一の試作したキャンパス構想図（以降、武田案）とその弟子岩崎平太郎が制作したと考えられる詳細図（以降、実施図）、1945 年の航空写真の全点をトレースし比較することでキャンパス形成過程を検討する。次に形成過程からキャンパスの主要建築と判明する現一号棟、旧寄宿舎について現在状況を把握し、類似比較から建築的特徴を位置づける。2023 年 9 月 28 日に現地調査を実施した。
３　研究の位置づけ
先行研究[1]では公文書の実施図面が扱われておらず、キャンパス全体の形成過程を踏まえた建築物の評価がなされていない。ここに本研究の新規性がある。
第１章　戦前の奈良県下における天理外国語学校について
１　天理外国語学校の創立
天理外国語学校は日本初の私立外国語学校であった。
２　沿革年表の作成
1925 年の開設決議から校舎他の建設を経て景観整備に至るまでの年表を作成し、形成過程の基礎資料とした。
第２章　図面比較によるキャンパスの形成過程
１　図面史料について（図１）
奈良県図書情報館所蔵の奈良県庁公文書「天理外語設置一件」に添付された図面を収集した。当図面は計５枚添付されており、キャンパス全体の配置図に始まり校舎と寄宿舎の平面図から成る。天理外国語学校の当初計画案としては『武田五一博士作品集』[2]に収録されたキャンパス配置図が知られている。一方で当図面は武田の立場と年齢から弟子が作成したものと考えられる。建物の実施図は天理大学年史編纂室では把握されていない初出の図面史料と確認された。
２　武田五一の構想から実施設計まで（図２、図３）
武田案と実施図の比較を行う。大きな違いとしては寄宿舎の正面の方向と位置が敷地南へ変更された点に注目される。また、既存の平場に建てられており造成の必要のない位置に計画し、必要不可欠な施設を短期間に実現させようという意図を読み解くことができる。
３　実際に建設されたキャンパス
建物が計画通りに建てられたかを知るために実施図と 1945 年の航空写真（国土地理院）の比較を行う。校舎と寄宿舎は実施図の通りに建設されていた。
４　小結
学校を建設することで人が集まることを想定して図書館より寄宿舎の立地を優先したと考えられる。このように武田案では理想のキャンパス計画がされていたが実際は建物に優先順位があったと考えられる。
第３章 古写真に見る昭和初期のキャンパス建築配置の配置再現
１　古写真の収集
天理外国語学校のキャンパスを図面比較以外の方法で明らかにするために天理外国語学校の形成過程の古写真を収集した。
２　昭和初期・景観整備の進展
1932 年に天理外国語学校は陸軍特別大演習の会場となルに伴って、キャンパス内の電柱の埋没、樹木、門柱、道の舗装によって景観が整えられた。そこで整備後のキャンパスの様子を知るために古写真から再現図を作成する。
３　再現図から読み取れること（図４）
敷地整備により植栽が設けられることによって景観が整えられた。また景観が整備されただけでなく施設利用の充実化が行われたことがわかる。
４　内田祥三案との比較
武田の死後は内田祥三がキャンパス案を制作している。内田案と再現図を比較したところ校舎周りの外構の平面計画は当案をほとんど踏襲していた。



図１　図面史料

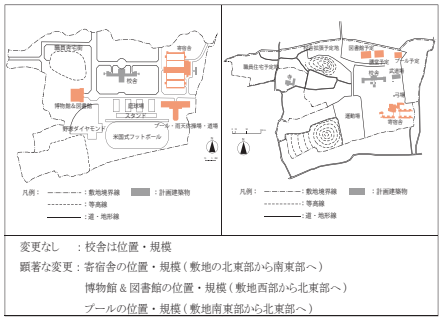


図２　武田案（左）と実施図（右）の比較

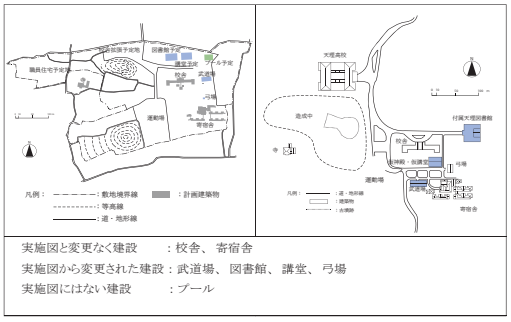


図３　実施図（左）と航空写真（右）の比較

第４章　現・一号棟の実施・現在状況・外観意匠比較

１　実施図に見る平面計画の特徴

校舎は玄関広間のある中央部と東西に伸びる両翼棟の部分と南側に２階建ての建物から構成される。

２　現在の建築状況と実施図との比較

古写真から創立当初は校舎の外壁には装飾が施されていたが現在の外壁には装飾が残っていなかったが失われた装飾は今後の課題となっていくだろう。校舎は実施図通りに建築されていたが校舎の南のボイラー室や石炭置き場、食堂があった２階建ての建物は取り壊されていた。

３　武田五一の作品（監修を含む）との外観意匠比較（図５）

1930 年前後に陸屋根の量塊的な箱形とした古典的要素を排除した造形の建物が作品集[2]と現存遺構[3]より４棟見られる。天理大学の校舎も同時期の一群に含まれるといえる。

第５章　寄宿舎の現在状況と学生寮建築としての特質

１　実施図に見る平面計画の特徴（図６、図７、図８）

実施図より寄宿舎は食堂や風呂、講堂等がある本館と学生の部屋がある北寮、南寮、西寮の構成と分かる。学生部屋はすべて１間取り、標準６畳で２間取りとする舎監室は２か所ある。

２　現在の建築状況と実施図の比較

旧寄宿舎はすべて木造で本館と炊事場の一部と旧北寮の玄関が現存している。現地調査より本館現存部の柱は５寸角を用いる。図面が残らない本館２階は３間取り構成で大広間がある。

３　戦前の学生寮との比較（図９）

戦前に建てられた日本の学生寮との平面比較を試みる。同じ点としてすべて木造で、学生部屋と共用部とを別棟に分ける点であった。異なるのは当寄宿舎は角部屋が多く、寄宿舎の屋根は瓦葺の入母屋造となっているところである。

４　小結

本館は一部改造されながらも現存している。入母屋造で外観を重視した計画が比較によって判明した。これは学生寮の中でも入口の格式を高めたものとして稀である。

６　まとめ

以上本稿では形成過程から校舎と学生寮の２棟の重要性と類例の比較から建築的特色を指摘した。それら創設当初のキャンパスの中心となっていた２棟が今も現存していることは希少と考えられる。

参考文献：1　川島智生「天理大学キャンパス計画と本館建築について」文教施設 84　2021
川島智生「近代奈良の建築家岩崎平太郎の仕事」2011 年　淡交社
吉村綾子　天理大学百年史コラム（15）（16）「新聞記事で見る本学の創立から校舎建設まで」校舎建設まで（前編）、（後編）」2022 年２月 17 日
吉村綾子　天理大学百年史コラム（24）「空から見るキャンパスの変遷」2023 年２月２日
吉村綾子　天理大学百年史コラム（7）「絵はがきから探る」2020 年 10 月 14 日
吉村綾子　天理大学百年史コラム（9）「天理学寮　柚之内ふるさと寮」2021 年３月１日
吉村綾子　天理大学百年史コラム（2）「講堂から伝道実習棟へ」2020 年１月 10 日
2　「武田博士作品集」1933
3　Web サイト「国指定文化財データベース」

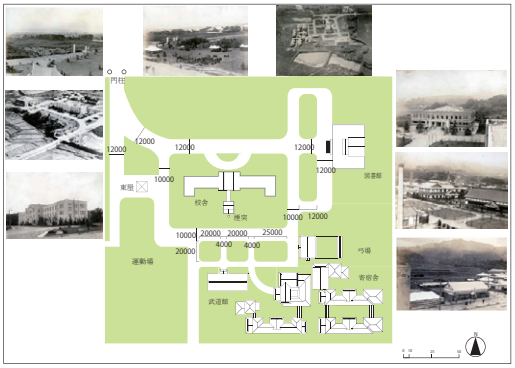


図４　校舎周辺配置再現　古写真と航空写真のトレースにより作成　写真：天理大学所蔵・国土地理院航空写真・奈良県公文書実施図を基に作成

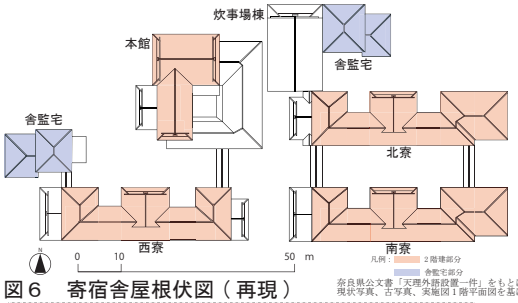


図６　寄宿舎屋根伏図（再現）　奈良県公文書「天理外語設置一件」をもとに作成　現状写真、古写真、実施図 1 階平面図を基に作成

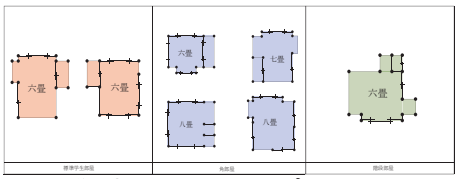


図５　学生部屋の平面のタイプ

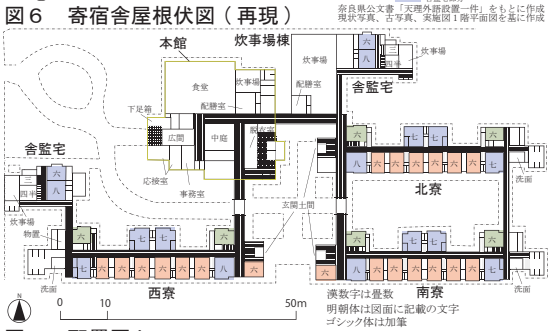


図８　配置図トレース　出典：奈良県庁公文書「天理外語設置一件」　漢数字は畳数　明朝体は図面に記載の文字　ゴシック体は加筆



図５　武田五一の作品比較



撮影日　2023 年 9 月 28 日

図９　寄宿舎本館　１階食堂、２階広間　入母屋造

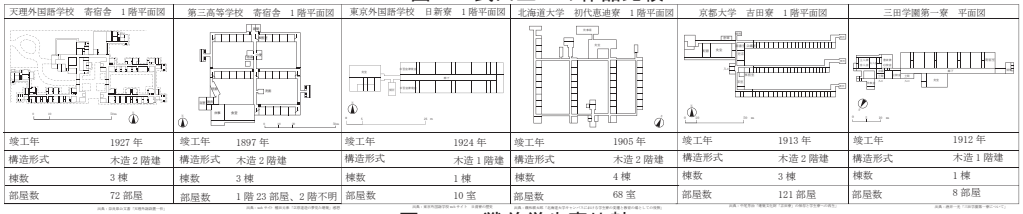


図１０　戦前学生寮比較

play と display-関西におけるアイスホッケーの普及のために-Play and display-To popularize ice hockey in Kansai-

学籍番号　K20361
名　　前　吉田優稀奈
指導教員　人見将敏

Student Number　K20361
Name　Yoshida Yukina
Supervisor　HITOMI Masatoshi

1. 計画の背景

1-1 はじめに

私は現在もアイスホッケーをしている。アイスホッケーとは、黒くて丸いゴム製パックという球、スティックを用い、サッカー同様にゴーリー（ゴールキーパー）が守るゴールに入れて、そのゴール得点を競い合うスポーツである。アイスホッケー専用の氷を張ったスケートリンクで、危険を防ぐための約 10kg になる防具を全身に装着しプレーをする必要がある。
そのようなアイスホッケーの競技人口を増やすため、小中高生がプレーするきっかけとなる場所、そして気軽に練習できる場所を身近に増やしていきたいと考えた。特に、関西でアイスホッケーと関わりながらセカンドライフを送れるような施設を設計する。



イメージ図

図 1：全国リンク図
東日本 / リンク数：101 か所　西日本 / リンク数：31 か所

1-2 国内アイスホッケーの現状

アイスホッケーは、欧米ではメジャーなスポーツであり、北米では四大スポーツの一つに数えられる、日本国内では知名度が低く、競技人口も他のスポーツと比べ少ない。オリンピック出場で注目されつつあったものの競技人口は減少が続いている。その理由して、競技場、練習場所の不足。競技場、練習場所を利用できるのが夜遅い時間帯しかなく、他の習い事のように子供だけで通うことが難しいこと。そして少子高齢化や新型コロナウイルスの影響により試合数や登録者数が減ったことも要因の一つである。

1-3 関西アイスホッケーの現状

西日本のなかでも関西は特にアイスリンクや競技人口が多い。そして、競技人口に対して練習場所の不足していること、親の送迎なしでは通えず両立困難や練習環境の差が生じていること。また実業団やプロチームが無いことから中学・高校生は活動の盛んな東北、北海道へ移住する必要があるなど様々な問題がある。東北、北海道へ移住し実業団やプロチームで活躍したとしても引退後に関西に戻り、セカンドライフとしてアイスホッケーに関わりたくても関われる場所が少ないのが現状である。その結果競技者人口が減少し続けている。

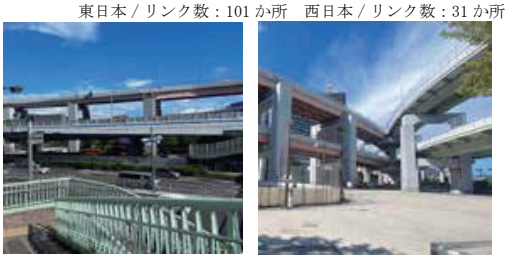


図 2：敷地周辺の高速道路の様子

2. 敷地について

2-1 計画敷地

兵庫県神戸市の三ノ宮駅より南へ徒歩約 10 分の 2 つの敷地を対象とする。1 つはみなとのもり公園（神戸震災復興公園）の北西部分に位置し、もう 1 つは駅から同公園にたどり着く道の途中の一画とした。敷地周辺には、図 2 や図 3 のようにいくつもの高速道路が通り、乗り口降り口が集まる交通量の非常に多い場所になっている。

2-2 周辺環境の特徴

みなとのもり公園（神戸震災復興公園）とは「神戸の中心に森をつくること」を公園のテーマに掲げた公園である。災害時の備えのために作られ、大きな芝生広場を中心にジョギングコース、バスケットコートが設けられている高架下エリアにはインラインホッケーコートやスラローム用コートのあるニュースポーツ広場があり、（インライン）スケートスポットとなっている。またみなとのもり公園より電車で約 15 分の所にシーズン中のみ営業しているアイススケート場がある。現在の神戸では、神戸の中心から神戸・ウォーターフロントエリアまでを、潤いがあり人々が集まり憩えるエリアにしようと計画しておりそれぞれエリアごとにコンセプトを定めた「神戸ウォーターフロントビジョン」という取り組みが進められている。
ビルが建ち並ぶことから歩行者の数は元々多い方ではあるが、ウォーターフロントエリアへつながる地、緑豊かな地となりコロナ終息後リニューアル化が進み様々なイベントが月ごとに開催されている。そのため地域住民だけでなく観光客なども含め歩行者はさらに増えている。

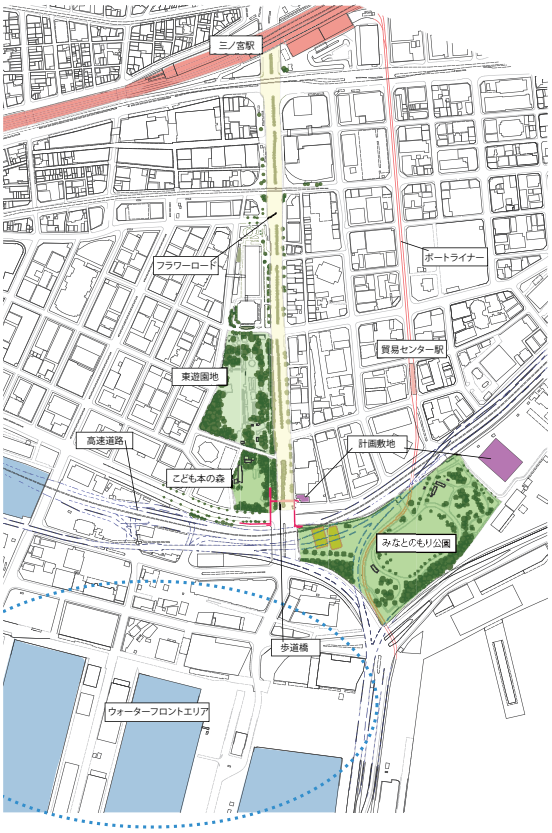


図 3：配置図

所在地：神戸市中央区浜辺通６丁目 3-8/ 神戸市中央区小野浜町 3-1
主な用途：スポーツ施設
敷地面積：412 ㎡ /20,077 ㎡
建築面積：325.08 ㎡ /8,118.93 ㎡
延床面積：1,174.42 ㎡ /1,496,898.72 ㎡
キーワード：スポーツ、アイスホッケー、森

Location ：6-3-8,hamabe-dori,chuo-ku,Kobe
3-1,onohamatown,chuo-ku,Kobe
Main Use ： Sports Facilities
Site Area ： 412m^2/20,0772m^2
Building Floor Area ： 325.08m^2/8,118.93m^2
Total Floor Area ： 1,174.42m^2/1,496,898.72m^2
Keywords ： Sports,Icehockey,Forest

3. 計画内容

計画にあたり以下の３点に着目した。
①人の目に触れやすく、気軽に練習できる場所であること。関西でアイスホッケーと関わりながらセカンドライフを送れる。働き口にもなるような施設であること。②インラインホッケーコート、アイスホッケー場がある神戸の中心にアイスホッケー練習（競技）場を設計することでアイスホッケーゆかりの地となること。③神戸の中心がさらに緑の多い空間となり緑豊かな都市であり続け、訪れる人々がそれぞれ思い思いの場所で憩い、集い語らえる森のような公園のような施設であること。
具体的には以下の２つの建物を設計した。

A 複合施設

シンセティックアイスタイル（まな板素材のような合成氷）という素材を用いたアイスホッケーの練習用の施設である。このタイル上では、防具を全て身に付ける必要が無いため揃える物が少なく手軽に体験や練習ができる。地域住民や観光客が、スポーツ目的でなくても利用できる憩いの場である。

1F：シンセティックアイスタイル練習場１・
　　アイスホッケーショップ、休憩スペース
2F：カフェ・ショップ・バー
3F：シンセティックアイスタイル練習場２・講義室（自習室）
4F：ジム（トレーニング室）

B スポーツ施設（アイススケートリンク）

プロチームも合宿を行うことができるアイスリンクと宿泊施設等が併設したスポーツ施設である。このような施設は関西のはまだ存在しない。通常時は一般の人も利用できる施設であり、中に入らずとも中の様子を宿泊施設は伺え、憩えるようなカフェや屋上庭園を設けている。
また３チームが同時に宿泊できるよう３棟を分棟方式で計画した。さらにみなとのもり公園にこのような施設を設計することで、震災時の避難施設にもなることを想定している。

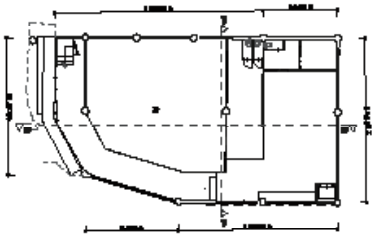


図４：複合施設 1FL 平面図（S ＝ 1/200）

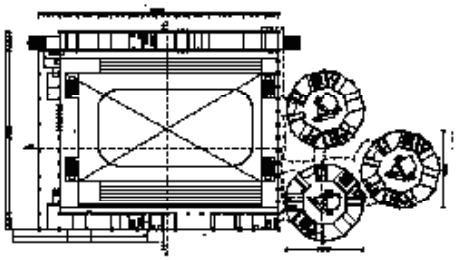


図５：スポーツ施設 1FL 平面図（S ＝ 1/500）

図版出版

図１：筆者



図６：1/500　複合施設東側断面図



図７：1/500　スポーツ施設東側断面図



スポーツ施設東側外観パース



複合施設南西外観パース

五感をめぐらす思考空間~通りの活性化と折口から学ぶ人生観~

A thinking space that engages the five senses

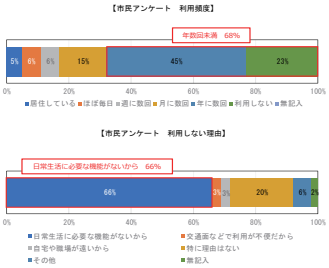
~Learning Japanese culture and ideas from Nobuo Orikuchi~

学籍番号　K20362
名前　芳永匠海
指導教員　山内貴博

Student Number　K20362
Name　Takumi Yoshinaga
Supervisor　Takahiro Yamauchi

1. 背景と目的

この計画では、現在衰退してしまっているパセオ通りを市民の人たちが気軽に立ち寄ることができ、休日には市民のたまり場となるような空間を作ることを目的として設計した。



1－2. 問題点

敷地の問題となっている点は、駅近の通りであるにもかかわらず利用者がほとんどいないことだ。羽咋市の調査によると、利用されない原因として日常使いに適した施設がないことや休日や余暇を過ごす場所がないことがあげられていました。羽咋駅周辺には小中学校や市役所、住宅街があるなど多くの人が暮らしている場所がありますが、娯楽施設がないことは自分自身も住んでいた時に感じていました。

休日や日常で利用する施設が少ないのはパセオ通りだけではなく、市内全体で娯楽施設や商業施設が少ない。

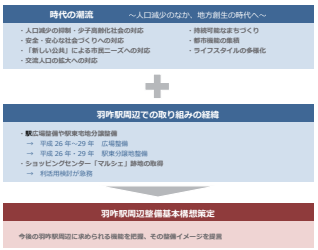
そのため、多くの人は市外の施設を利用する人が多いのも現状である。

1－3. 市の取り組み

これまでにも、羽咋市の魅力を全国に広めようと「町おこし」の取り組みはされていたがその効果をあまり感じることができないのが現状である。

そこで、羽咋駅前に昔建てられていたマルシェという商業施設跡地に新たな商業施設の建設計画が立てられており、市の方でも羽咋駅前の現状を打破したいという試みがあることが分かる。

羽咋駅前の改革構想の取り組みとしては、駅前広場の整備、駅東側住宅地の整備に加え商業施設の建設といった構想である。この構想に、自分自身が考えているパセオ通りに記念館と交流施設を設けることでさらに駅前の活発な改革へつながると考えたため、この計画を提案したいと思った。



2. 計画敷地

計画する敷地は石川県羽咋市旭町コにあるパセオ通りです。

石川県羽咋市には有名な観光地として「千里浜海岸」があり、そこは車で海岸線を走ることができる日本で有数の海岸線として人気がある。

敷地はその海岸と羽咋駅を結ぶように通っている全長約 500 mほどの通りとなっている。

通りの周辺には住宅街や小学校、中学校があり人口が多く集まっている場所である。

その中でパセオ通りは羽咋市の中央部分に位置し、駅からの利便性もよく選定した敷地の隣には「羽咋」の地名の語源となったとされている神様が祭られている「羽咋神社」がある。







3. 計画概要

3-1. 羽咋神社について

敷地に隣接する羽咋神社は「羽咋」の地名の由来となった伝説の人物のイワツクワケノミコトを祀っている神社である。

・羽咋伝説

かつてこの地には疫病が蔓延しており、盗賊が横行し、加えて滝崎の森に怪鳥が出現し民を苦しめていた。

このため鎮圧の使として、皇子であるイワツクワケノミコトが派遣された。イワツクワケノミコトが連れていた３匹の犬が怪鳥の羽を食いちぎり退治した。その後、農業を奨励するなど行ったことにより人々は安心して生活ができるようになった。

このことから、この地は「羽咋」という名前になったとされている。

・御陵山の水

イワツクワケノミコトは境内の中の「大塚」と呼ばれる古墳に眠っている。

この古墳は御陵山とも呼ばれており、この地に恩恵をもたらしてくれた人物の山からは万病に効くとされている良質な水が湧いており、「御陵山の水」として今でも利用されている。



3-2. 折口信夫について

折口信夫とは、古代研究や日本の文学研究にいそしんだ学者であり、歌人「釈迢空」としても活躍されており、羽咋の地にも多くの歌碑が残っていることから羽咋に訪れていたことが分かる。その弟子にあたる折口春代の出身地が羽咋市の一ノ宮町であることからゆかりの地とされている。

折口信夫の研究は幅広い分野にわたるものだが、大きな研究テーマとしては、日本文化の淵源に迫ることである。その研究の中で自分が心に残っていることとして、「実感」という言葉がある。知識を蓄えることは研究するうえで大切なことに変わりはないが、そのことと同様に「感じる」という感覚も大切であり、その感覚を大切にしていた人物こそ折口信夫であった。

所在地：石川県羽咋市旭町エ　パセオ通り
主な用途：美術館、交流館
敷地面積：約 950 ㎡、約 320 ㎡
建築面積：記念館 319.25 ㎡、交流拠点 114.75 ㎡
延床面積：記念館 384.25 ㎡、交流拠点 89.75 ㎡
キーワード：記念館・交流館・体験施設

Location : Asahimathi,Hakui,Ishikawa
Main Use : memorial hall,exchange hall
Site Area :950 ㎡、320 ㎡
Building Floor Area : 319.25 ㎡、114.75 ㎡
Total Floor Area : 384.25 ㎡、89.75 ㎡
Keywords : memorial hall,exchange hall

折口自身このを「五感」から学問について考えているという思考の過程をとっている。

・「他界」と「まれびと」

折口の学問の基点には、「他界へのあこがれ」というものがある。他界とは人が生きていては行くことのできない永遠の場所であるとされており、そこは現実でどのように生きていくかということを考える際に重要な役割を果たしている。

折口の学問において「まれびと」という言葉がある。これは「稀に来る人」を表しており、「ひと」＝「人間」という意味に固定される以前は、「神、継承者」という意味があったとされている。つまり「まれびと」は「神」を表す言葉であり、珍しい客というのは「神」と言い表すことができるというのが折口の主張である。

これらの考え方が根底にある折口の研究をまとめると、

他界へのあこがれ→他界からやってくるまれびと→そのまれびとのもてなし方をどうするか→そのもてなし方から様々な文化が生まれ他界へのあこがれを深める

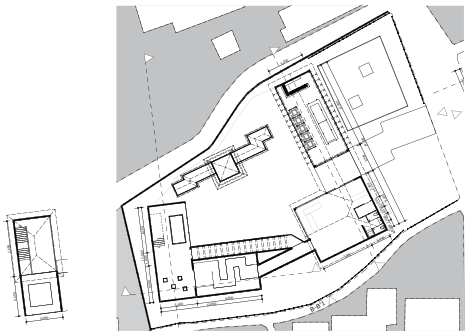
といった円環によってまとめることができる。

4. 設計趣旨

コンセプトとして考えていることは、折口信夫の記念館では展示してあるものを眺めるだけでなく、折口が大切にしていた「実感」を感じることができるような体験型施設を計画したいと考えている。

4 － 1. 記念館

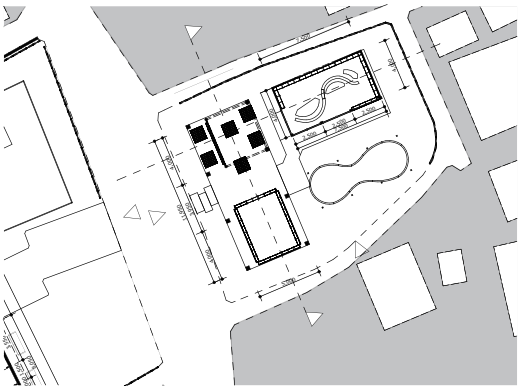
この記念館では折口信夫の学問の基点となっていた「他界へのあこがれ」とそれを通して発展した日本文化を感じてもらうことができる施設としている。建物の中から中庭（他界）を眺め中庭にある茶室は日本文化を表す空間としつつ、神社祀られている神をおもてなしする場として計画した。神が茶室まで訪れる参道として神社で湧いている銘水を利用した水の参道を計画することで、神がいることを暗に伝えている。





4 － 2. 交流施設

この施設では、記念館で思考したことや感じてもらった日本文化を実際に触れて体験してもらい「実感」を体現することを目的とした施設となっている。施設としては折口信夫の研究していた日本文化についての資料や万葉集の口語訳にもかかわっていたことから、それらに関連する資料なども扱うブックショップと学習スペースを兼ねた建物を計画しようと考えている。茶道を通して日本文化と触れ合ってもらうために、茶道で使われるような陶器や季節によって変わるお茶菓子なども購入することができるショップも計画している。





5. 参考文献

・羽咋市ホームページ　https://www.city.hakui.lg.jp/index.html
・羽咋市ホームページ　（羽咋駅周辺都市構想）　https://www.city.hakui.lg.jp/shiseijouho/machidukuri/6/7452.html
・Google earth　　https://earth.google.com
・上野誠 『折口信夫　古代研究』 NHK テキスト　P4 ～ P11、P14 ～ P24

近代の王朝文化の再興～大正大礼「大饗の儀」における二条離宮の建築について～

学籍番号　K20364
名　　前　渡辺実玖
指導教員　井上年和

巨大木造建築　近代化　王朝文化
豊楽殿　舞楽場　饗宴所

1.　はじめに

1.1　研究目的

大正大礼における大饗で用いられた豊楽殿は、その他の行事とは離れた二条離宮を会場とし、この二日間のためだけに建てられたという特徴がある。本研究では、二条離宮に建てられた経緯、様式の復古と、西洋設備・様式の融合を図った建物構成、模様からカラー情報等を含めた内装の形式を復元し、大規模な施設を建てるに至った意図を考察していく。

1.2　大正大礼とは

大礼とは主に「即位礼」「大嘗祭」「大饗」「親謁の儀」といった一連の皇位継承儀礼全般のことを指す。

そして大正大礼は大正 4 年に京都で行われた。大正大礼として天皇は東京から移動し、京都御所で即位式後、各地の山陵に親謁の儀を行っている。この大礼では地方でも様々な行事や恩赦が行われ、開催地域だけでなく、全国で大正天皇即位の影響があったことが分かる。

1.3　大正大礼の日程

大正大礼は 1915 年大正 4 年 11 月に挙行され、天皇は東京から京都への御幸を経て、およそ 1 か月間の儀式を行う。ほぼ毎日儀式は行われ、移動で用いられる駅や、道路の整備など全国で大礼の準備が行われた。また地方の地域でも提灯行列や運動会植樹等様々な記念行事が行われ、開催都市のみならず、国家行事として日本全土で影響があった。

表 2.　大正４年大正大礼日割（大正四年９月 22 日官報）

月日	曜日	内容
11/6	土	京都行幸の儀
11/7	日	賢所奉興殿に渡御の儀
11/10	水	即位礼及び当日皇霊殿神殿に奉告の儀 即位礼当日賢所大前の儀 即位礼当日紫宸殿の儀
11/11	木	即位礼後一日賢所御神楽の儀
11/12	金	神宮皇霊殿神殿並び官国弊社に勅使発遣の儀
11/13	土	大嘗祭前一日鎮魂の儀
11/14	日	大嘗祭当日神宮に奉幣の儀 大嘗祭当日皇霊殿神殿に奉幣の儀 大嘗祭当日賢所大御饌供進の儀 大嘗宮の儀（悠紀殿供饌進の儀・主基殿供饌進の儀）
11/16	火	即位礼及び大嘗祭後大饗第一日の儀
11/17	水	即位礼及び大嘗祭後大饗第二日の儀 即位礼及び大嘗祭後大饗夜宴の儀
11/20	土	休息日
11/21	日	即位礼及び大嘗祭後神宮に親謁の儀
11/24	水	即位礼及び大嘗祭後神武天皇山陵に親謁の儀
11/25	木	即位礼及び大嘗祭後明治天皇山陵に親謁の儀
11/26	金	即位礼及び大嘗祭後孝明天皇山陵、仁孝天皇山陵、光格天皇山陵に親謁の儀
11/27	土	東京に還幸の儀
11/28	日	賢所温明殿に還御の儀
11/29	月	東京還幸後賢所御神楽の儀
11/30	火	還幸後皇霊殿神殿に親謁の儀

2.　豊楽殿

二条離宮で行われた儀式は「大饗の儀」であり、宮内庁ホームページより『大嘗宮の儀の後，天皇陛下が参列者に白酒，黒酒及び酒肴を賜り，ともに召し上がる饗宴』とされる。本来、大饗は大嘗祭後、その日に行われるものであったが、大正大礼以降の大礼ではいずれも別日に分かれている。また初の内外に開かれた大礼であり、大饗には各国の国賓が参列している。

会場は豊楽殿と呼ばれ、これは本来、平安宮の中で天皇が出御する太極殿と並ぶ格式を持つ建物であり、豊楽院の正殿である。本研究では復古として大饗宴場・舞楽場を総称し豊楽殿とする。豊楽殿は二条離宮二の丸御殿北方の松林を拓いて建設された。豊楽殿の設計は宮内省技師の木子幸三郎の判子が確認されている。

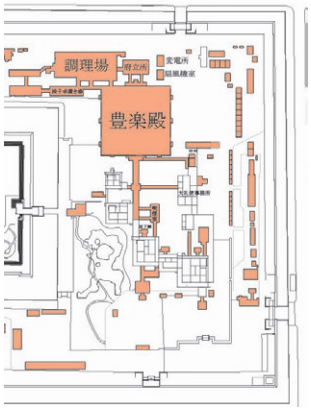


図 1. 二条離宮内豊楽場配置図

3.　建築構成

3.1　内観

豊楽殿は近代和風建築であり、正方形の平面が特徴的である。そしてレンガやタイルといった西洋建築を彷彿とさせるものは用いず、木造かつ日本の様式を積極的に取り入れている。建物構成として御座を建物の北側に配置し、南側には二の丸御殿へと繋がる大渡廊が続く構成となっている。中央には五節の舞や雅楽を奏でる舞楽場があり、その周囲を囲むように机と椅子を用いて食事を行う饗宴場が配置されている。それぞれの外周には廊下が通っており、いずれも人の往来が可能な幅を有している。

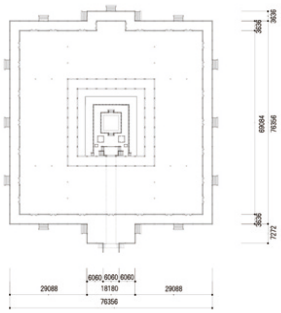


図 2. 豊楽殿（平面図）


図 3. 舞楽場_南西視点


図 4. 饗宴所（北）_南西視点

3.2　外観

建物の外観は以下の資料から舞楽場を母屋として、饗宴場が周りを囲むという別棟のようなつくりであることが分かる。舞楽場は切妻屋根、饗宴場は外流れ屋根としており、豊楽場中央に集中する屋根の谷部分には十分な雨仕舞処理が行われていると考えられる。また、屋根や室内の様子からトップライトが設けられ、巨大な建物の室内中央に採光が確保できるよう計画されている。

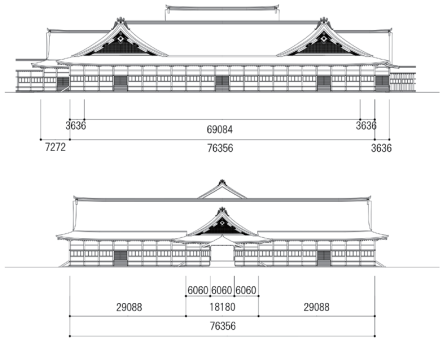


図 5. 豊楽殿（立面図）

3.3　平面構成

建物は 1 間＝6 尺とし、床面積は 1,736 坪である。これは豊楽殿の一辺がおよそ電車四両分ほどの長さであり如何に巨大であるかが伺える。また大嘗祭とは異なり、当時の資材調達等の資料に明確な指示が確認できなかったことから、豊楽殿の建材には神聖性は求められていなかった可能性が高い。そして室内の特徴として二つ以下のように挙げられる。

一つ目は視線の通る大空間である。「ロ」の字型の饗宴場と舞楽場の間である廊下は、壁で仕切られておらず、舞台を中心に周囲から見渡せるように計画されている。座席は一人当たり二尺五寸とし、一日目は 944 席、二日目は 2624 席として設置されている。建物北側に配置されている御座は高麗縁の畳を二帖敷いたものであり、その御座の東側に同様の皇后御座を設けている。

二つ目は床高の高低差である。饗宴場と舞楽場の床高は異なり、饗宴場から舞台のある床へと三段に分けて下がっている。舞台のある床と段差間には、南側に階段が設けられており、舞台のある床がその他の床と扱いが異なると考えられる。挙行時は段の床に椅子が並べられ、そこで座って観賞することが可能であった。また雅楽を演奏する楽官は、舞楽場内部南の楽官幄の地下に待機し、そこから通じる豊楽場南の廂の傍より地上へと出入りが可能となっている。

3.4　断面構成

断面構成の特徴は二つあげられる。

一つ目は、巨大な空間を設けるための建築技術である。舞楽場は 84 尺四方であり、その中央には舞台があるため柱を設けることはできない。故に木造で大空間を実現できる西洋技術のトラス構造の屋根が用いられている。

トラス構造は西洋文化の流入以降、明治初年よりトラス構造を用いた橋が出来るなどして活躍していた。橋と同様に大スパンを木造で製作する上で、構造的に有効なトラス構造は、豊楽殿でも用いられたのだと考えられる。

二つ目は建物の工法である。壁の軸組に筋交いが見られ、主要な柱と横架材の接合部が金物で緊結されていることが分かる。これは明治 24 年の濃尾地震の翌年に発足した「震災予防調査会」が、日本の木造建築における耐震性能の向上に努めた結果であると考えられる。「震災予防調査会」では造家学会（建築学会）や西洋建築を学んだ建築家の調査・試験が行われている。故に豊楽殿では耐震性能を上げるため、小屋組みの木造トラスに続き、ボルトや鉄の金物を用いた接合部の補強、柱と柱の間に筋交いを入れるなどの構法が使われている。

三つ目は二階の存在である。写真情報より、舞楽場の四方を囲む廊下の延長線上にあると考えられる。平面図には二階の存在を現した図面はなく、写真での確認となるが、この二階には人が上がる想定はされておらず、装飾として高欄が設置されているのみである。故に舞楽場での二階では使用は想定されておらず、転用先である京都市公会堂で使う際には補強や二階床の増設が必要になるレベルであったと結論付ける。

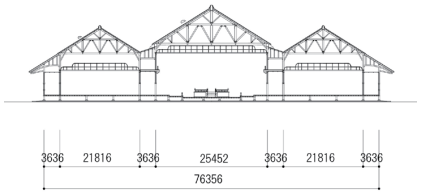


図 6. 豊楽殿（断面図）

4．　結論

大正大礼の際に用いられた豊楽殿は、以降の大礼では見られない程の規模であり、主な会場である京都御所とは離れた二条離宮に設営されたという特徴がある。これは、初めての大衆に向けた大規模大礼かつ、国外の大使を迎える儀式であったことが要因だと考えられる。収容人数に見合った建物の規模と、建設工程による事情だけではない。天皇が京都内を移動することで鹵簿の様子を大衆に見せるというパフォーマンスを兼ねたデモンストレーションであり、大正大礼における「大饗」が単なる節会や儀式だけではなかったことが伺える。

そして会場である豊楽殿も政治的意図を多分に含んでおり、その様式や豪華絢爛な意匠の理由もそこにあると考えられる。儀式後には、建物の一部を下賜することも決まっていたため、天皇の権威を目に見える形で国民にアピールする目的もあり、細部まで華やかであったのではないだろうか。大正大礼における大饗建築は、意匠や設えといった日本の王朝文化の再興と、西洋文化を融合した建物であり、国内外に日本の近代化と民意を一致させる天皇制のデモンストレーションの場であったと結論付ける。

【参考資料】

・『日本の歴史　第 14 巻　日清・日露戦争と帝国日本（明治時代Ⅱ）』
監修：鈴木淳/まんが：田中顕/シナリオ：江橋のよしのり/発行者：野村淳史
編集協力：山川出版社/発行所：株式会社小学館/初版 2022 年 12 月 6 日
・『大正大礼に用いられた饗宴所・舞楽場の平面形式』
日本建築学会大会学術講演梗概集（中国）p. 207-208, 2008 年 9 月
・『京都市公会堂について　―大規模「近代和風建築」の一例―　』
日本建築学会大会学術講演梗概集（東海）p. 1449-1450, 1994 年 4 月
・『御大礼要覧』国立国会図書館
・『平安宮豊楽殿跡発掘調査　成果発表資料』H2712 月
・『大礼記録 140_写真帖 2』宮内庁書陵部所蔵
・『宮内庁書陵部所蔵_大正大礼 76』宮内庁書陵部所蔵
・『二条離宮二の丸大正天皇御大礼関係建物配置図 KI129-002-003-4』
東京都立図書館所蔵

居場所を紡ぐ~off time connect~

学籍番号　K20365
名　　前　渡邊桃子
指導教員　河村大助

Create a place to live~off time connect~

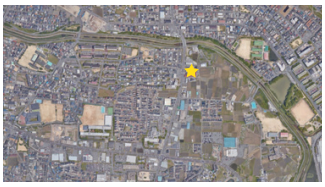
Student Number　K20365
Name　Watanabe Momoko
Supervisor　Kawamura Daisuke

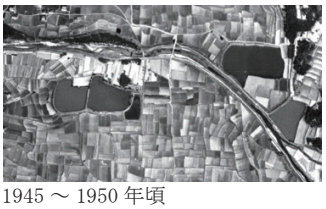
1. 敷地概要

1-1. 背景と目的

小中高校と学校が建ち並ぶ敷地周辺ではあるものの、子どもが自由に安全に過ごせる場所が日常的にあるかと考えると広い敷地はあるもののそれらのほとんどがフェンスで囲まれた使用禁止の敷地である。

昔からの公園のルールでは球技が禁止されている公園が多く、その多くは危険が伴うからという理由付きだろう。しかし､子どもたちがボール遊びやのびのびと体を動かせる場所は学校のみで良いのだろうか。各々が自主的にコミュニケーションを取れる場所はあるのか。これらをじっくり考えた際、これからの子どもに対する自由の場が極端に少ないと感じた。これからの未来を担う子どもたちが子供同士で考え、且つ安全に日常を過ごせる場所を今回の計画の目的とする。


敷地周辺図


1945 ～ 1950 年頃


1961 ～ 1969 年頃


1974 ～ 1978 年頃


1979 ～ 1983 年頃


2014 年頃～現在

1-2. 現状

敷地は大阪府枚方市の北側に位置し、2018 年に起きた大阪北部地震をきっかけに閉園された幼稚園である。現在は幼稚園として利用されていた園舎のみ残り、その他は土木工事の事務所や中古車販売店などが設置されている。敷地周辺は主に住宅街や川があり、敷地から南側には飲食店や生活用品店などが多く建ち並ぶ。

2. コンセプト

居場所を紡ぐ ~off time connect~

閉園された幼稚園のリノベーション、そして地域の子供の居場所を提案する。
また、一年を通して子どもの動きを見ていると以下のことが分かる

2-1. 公園の使用頻度・公園としての規則（ボール禁止など）・安全性

遊具があることで走り回れないと考える子どもは住宅街の中までも公園としてしまう。
そのため住宅街の中でも車や自転車などの交通は絶えないため安全性が必要となる。
また、ほとんどの公園内では球技が禁止されているため現在の公園は子ども達の自由さを失っていると考える。

2-2. 気候による環境の変化

近年、夏になると気温の上昇により例年よりも夏に外で遊ぶ子どもが減少した。また、秋ごろになるにつれ日の入りが早くなるため外で体を動かせる時間が極端に減ってしまう。地球温暖化が原因となり、外で自由に体を動かせる場所が減少しつつある。そこで球技を行える広場と子どもにとって自由に、安全に過ごせる居場所を提案する。
計画する建物は元々幼稚園であった園舎をリノベーションし、運動場を自由かつ安全に配慮した広場へとする。

2-3. ゲーム機やスマートフォンによる依存

デジタル機器が普及している現在は外遊びだけでなく家から外に出ない子供も急増していると考える。
それらのメリットを取り子ども達が安心安全で且つ、居場所と思える場所を提案する。

所在地：大阪府枚方市招提北町３丁目１５１８
主な用途：託児所、学童保育、自習スペース、カフェ
敷地面積：4,009m^2
建築面積：918.22m^2
延床面積：906.34m^2
キーワード：リノベーション、広場

Location ： 3-1518,Shodaikitamachi,Hirakata,Osaka
Main Use ： Childcare center,after-school childcare,self-study space,cafe
Site Area ： 4,009m^2
Building Floor Area ：918.22m^2
Total Floor Area ：906.34m^2
Keywords ： renovation,plaza

3. 設計概要

3-1. 幼児 ・託児スペース /0-6 歳の一時預かり・地域連携を活かした活動
→地域連携とは：公民館や図書館などで月々開催されているイベントなども行う




左）幼児・託児スペース
0.1.2 歳児と 3.4.5 歳児のスペースを扉にて仕切っている。（写真は開いた状態。）
右）「芝」
ボール禁止のエリア

3-2. 小学生 ・学童保育スペース / 学習場所の提供・安全に過ごせる環境づくり
→球技を禁止しない広場（公園）を提案
→学習場所の提供および子ども同士のコミュニティスペースを設ける




左）学童保育スペース
自由を取り入れたスペース
右）「地」
ボール許可のエリア。建物二階部分には「天」というエリアもある。

3-3. 中学・高校生 ・自習スペース / 中高生への学習場所の提供
→学習場所の提供をすることで生まれるメリットは〈無料で使える〉こと
多くのファストフード店やカフェなどでは何かを買わなければ滞在できないこと、長期滞在できないこと、塾などの自主室は通っている人しか使えないなど沢山のデメリットを解消できる場所となる。




左）中高生自習スペース
座席数：24 席
右）ラウンジ
息抜きや休憩としてのエリア。館内に自販機もある為、飲食可能。

3-4. 保護者・大人 ・カフェやラウンジ / 地域とのつながりをもつ居場所、環境
→子どもを遠くから見守りつつ、一息抜けるカフェや地域の一部となるショップなどを設ける
→地区、地域の人とつながりを持つことで地域の安全性が保たれる




左）地域のカフェ「紡ぐ」
少し雰囲気の違った大人な空気を地域に取り入れる。
右）西側からの俯瞰図

4. 参考文献

・国土地理院 地理院地図
https://maps.gsi.go.jp/#17/34.848572/135.684135/&base=ort&ls=ort&disp=1&vs=c1g1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1&d=m

静謐な湖畔

学籍番号　K20366
名　　前　渡辺優斗
指導教員　白鳥洋子

Tranquil　Lakeside

Student Number　K20366
Name　　WATANABE YUUTO
Supervisor　　SHIRATORI YOUKO

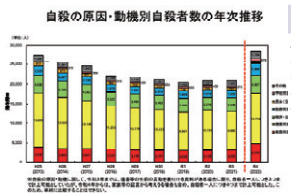
１．はじめに

現代の社会では身体的外傷による病気だけではなく、精神的な要因による病気が問題視されている。実際に日本では10歳から　34　歳の若い世代の死亡原因の　1　位は自殺である。先進国の中では日本のみである。自殺に至る原因として健康問題やうつ病など精神的問題が上げられる。うつ病の治療法として薬による治療が日本では一般的であるが、患者のその後を考えると薬に頼るのではなく自然治癒での療法がいいのではないだろうか。

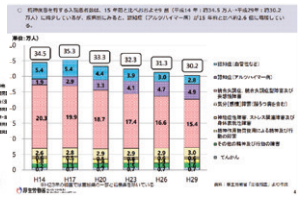
２，研究背景

２．１自殺者と入院患者の推移

自殺者は年々増加しているのに対して入院患者は減少傾向にある。このことから受診していないだけで実際はより多くの人が心の病により苦しんでいると考えられる。実際に現状では精神科の受診率は30%程度である。また若者の自殺者数も深刻な問題である。自殺者の主な原因として健康問題が２位、３位の家庭、経済問題の約３倍の割合である。また健康要因の１位はうつ病であり、精神的な問題でなくなる人を減らしたいと思い今回の病院を作ろうと計画した。



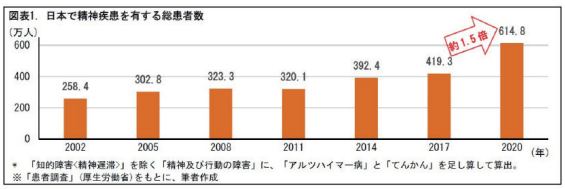
（表１：自殺の原因）



（表２：入院患者数推移）

２．２コロナによるうつ病の増加

2020年から発生した新型コロナウィルスの影響により精神疾患の総患者数が2020年に約614万人に増加した。３年前に比べて約1.5倍に急増している。その原因としてコロナ化に対する外出自粛等の感染拡大防止策が精神疾患の患者に影響を与えた事が考えられる。また上の表１から自殺者の数も急増しており、精神疾患と自殺者の数は相対的に増えていると



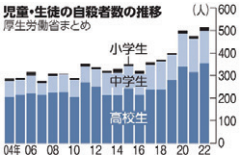
（表３：精神疾患患者数推移）

２．３うつ病の原因

うつ病を引き起こす原因は一つではない。最もきっかけとなりやすいのが環境要因である。大切な人の死や離別、大切なものを失う、人間関係のトラブル、職場や家庭での役割りの変化などがある。こうして見ただけでも様々な出来事が要因になりうる事がある。

性格傾向も発症要因の一つである。脳のエネルギーが欠乏した状態をうつ病と考えると、義務感が強く、仕事熱心、完璧主義、几帳面、常に他人への配慮を重視し関係を保とうとする性格の持ち主は、エネルギー放出も多い。努力の成果が伴っているうちはエネルギーの回復も見られるが、成果が出せない状況が生じたり、エネルギーの枯渇が起これば発症の危険が高まる。

２．４高校生自殺者増加の課題



2022年の10代の自殺者数は659人で前年よりも60人増加した。高校生が354人、中学生は143人だった。令和２年自殺者数が前年より671人減少したのに対して、10代が唯一前年より増加している。コロナによるが（表４:高校生以下自殺者数）外出自粛などで周囲とつながりの断たれたストレスは、女性や若年層ほど大きく特に女子高生の増加が目立った。他人との関りを持ち、誰かに相談することで悩みの糸口が見つかり、解決に導かれる。

３．研究目的

３，１うつ病治療

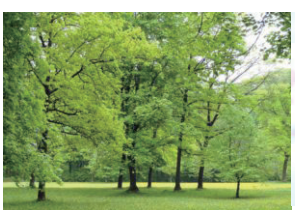
うつ病は脳の病気である。一度発症すると、時間がたつほど症状が重くなっていく傾向があり、回復が難しくなる傾向もあるため、出来るだけ早く治療することが早期回復の鍵である。うつ病治療に大事なことは３つある。環境、睡眠、食事である。うつ病は睡眠不足やストレスにより脳内のセロトニン、ノルアドレナリンが減ってしまう病気だと考えられている。これらは精神を安定させたりやる気を起こさせたりするもののため、減少すると無気力で憂鬱な状態に陥ってしまう。そのためうつ病治療には睡眠リズムを整える環境が重要である。

３．２環境と心理の関係

現代人の多くは、自然のリズムとかけ離れた生活をしているため、心身の障害が起こっている。これらを改善するため、自然の木々、川、湖、空など自然の美しい情景に触れることで、ストレスを減らし、脳機能を上昇させる。
近年、環境の研究が進み、病院に入院している患者が窓から豊かな緑の植物が見える場合とそうでない場合では回復スピードや薬の使用量に大きな違いがあった。これらのことをふまえて従来で一般的な抗うつ剤を用いて睡眠リズムを整える薬物治療を自然の力で薬の量を減らし、なくすことを目指す。

３．３自然がもたらす効果

最近の研究では、自然の中に出かけることで、創造性・幸福度・集中力が上がると言われています。イリノイ大学の研究ではコンクリートの殺風景な風景に住んでいる人と木々や芝生などの緑に囲まれて住んでいる人に注意力テストや人生の問題にどう対処しているのかを調査したところ後者のほうがあらゆる項目で成績が良かったことが明らかになった。このことから自然を見るだけでも精神的に良い影響を受けることが分かる。自然の中でも特に花は心理的な効果が絶大であると言われている。花にはストレスを和らげたり、疲れをいやしたりと様々な効果がある。これらは花が持つ香りによって発揮される。また木々のせせらぎを聞いたりと視覚だけでなく、嗅覚や聴覚にも刺激を与えることで交感神経の活動が抑えられ副交感神経の活動が活発になりリラックスした状態になりやすいということである。

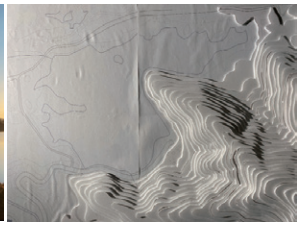




所在地：静岡県富士宮市佐折
主な用途：緩和ケアセンター
敷地面積：5950m^2
建築面積：5860m^2
延床面積：1572.82m^2
キーワード：うつ病・自然治癒・病院・メンタルケアセンター

Location ： saori,fuzinomiya,shizuoka
Main Use ： palliative care center
Site Area ： 5950m^2
Building Floor Area ： 5860m^2
Total Floor Area ： 1572.82m^2
Keywords ： Depression,Natural healing,Hospital,
Mental care center

４，対象地域

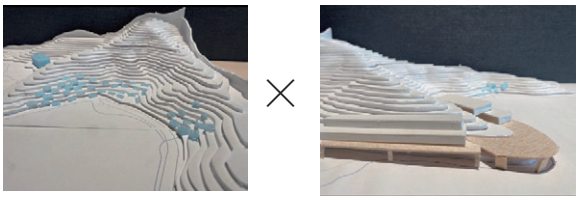



田貫湖写真　　模型１：2000

敷地：静岡県富士宮市猪頭町

田貫湖は広大な朝霧高原の一角に位置し、富士山全景を真東に仰ぎます。東西１キロ、南北0.5キロ、周囲3，3キロある。湖畔には桜や各種ツツジのほか、北側には広葉樹も広がり、春の桜から秋の紅葉まで、雄大な富士山をバックに美しい風景が広がっています。4月20日と8月20日前後の1週間、富士山頂から朝日が昇り、光り輝くダイヤモンド富士を見ることが出来る。

計画イメージ



分散型と一棟型を掛け合わせたハイブリット型をイメージ

５，計画概要

５，１居室種類

居室種類
（従業員）：受付、事務室、待合室、診察室、Ｘ線撮影室、
ＭＲＩ撮影室、更衣室、医師室、リネン室、
ナースステーション、手術室、準備室

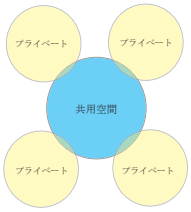
居室種類
（患者用）：病室、趣味室（料理室、
手芸室、絵画室等々）、
レストラン、リハビリ室

５，２設計主旨・ダイヤグラム

自然の中のキャンプ場のような病院をコンセプトにした。理由は自然の中なら癒しと安らぎを感じつつ、ストレスのなく自分自身と向き合いつつ、生きがいとなる事を見つけられると思ったからである。この建物は上から４段構成としている。右のダイヤグラム１は全体の配置計画を記している。上にエントランスとメインの病院施設を配置し、何か急病になった時も対応できるように重傷者用の病室は上から２段目に配置し、下の２段は軽症者用の病室を計画している。趣味室はそれぞれの段に分散させて配置しようと計画している。ダイヤグラム２は病室の居室スペースのイメージである。病室はキ主に４人部屋にしている。中央部分に共用スペースを配置し、４つ角にプライベートな空間を配置しようと計画している。またプライベートと共用空間には目隠しとなる物を配置しようと計画している。



ダイヤグラム１



ダイヤグラム２

５，２参考事例

（１）スノーピークヘッドクウォーターズ
所在地：新潟県三条市中野原456－1
浴・食・泊の自然を感じる複合型リゾートである。モノづくりの文化と豊かな自然が融合するこの地域を舞台に、様々な体験をすることのできる複合型リゾートである。日帰り、宿泊、キャンプ場と様々な利用方法がある。またモノづくり体験やその土地の食材を生かしたディナーやアクティビティなど自然と触れ合うことのできる施設である。
日常とは離れ、自然と触れ合うことで普段とは違った刺激を味わうことで精神疾患の方も少しは心が安らぎ生きていて楽しいと思える場所であると感じたためこの施設をピックアップした。




（２）桜町病院聖ヨハネスホスピス
所在地：東京都小金井市桜町１－２－20
病床数：20床
主な共用室：ラウンジ、チャペル、ファミリーキッチン、カンファレンス室、浴室、特浴室、研修室、ボランティア室、家族宿泊室、ホスピス研究所
職員数：医師３人、看護師19人、理学療法士４人、薬剤師３人等々　計41人
この建物は森の木々に抱かれているように感じられ、庭には池を設けその気集まってくる鳥たちにも配慮した循環ポンプを用いて自然の中で鳥たちのさえずりを艦居ることのできるような建物になっている。




６，おわりに

今回の提案により、目まぐるしく廻る社会とは一度距離を置き、自然の中に病院を作ることで一度自分を見つめなおし自分の生きがいを見つけられる空間になってほしい。またこの建築により、若い時期に命をたとうとしている人たちが訪れ人生には様々な選択肢があり、生きがいがひとつとは限らないことを伝えたい。

７，参考文献

令和４年　自殺状況
https://www.mhlw.go.jp/content/R4kakutei01.pdf
うつ病コロナ化
https://www.nli-research.co.jp/report/detail/id=75035?pno=2&site=nli
小中高生の自殺者数
https://www.asahi.com/articles/ASR3G0PCPR3FUTFL01R.html
自然の影響
https://harmonista.jp/five-senses/nature/

祭りを通じて

～祭りを継ぐ為の居場所を提案～

学籍番号　T22001
名　　前　上田望来有
指導教員　森重教授

Through The Festival

～ propose a place to continue the festival ～

Student Number T22001
Name Ueda Mikuto
Supervisor Professor Morisige　Professor

１．計画背景・目的

私の地元である大阪府東大阪市には枚岡神社という歴史が長い神社がある。そこでは毎年５月５日（こどもの日）に小太鼓祭り、10 月 14 日 15 日に枚岡秋郷祭という祭典が開催される。私も参加しており少子化により祭りに関わる若者が減少していることを実感している。この枚岡秋郷祭をもっと知ってもらいたい思いとこれからも祭りを続けていくために何か建築の力を借りてできないかと考えた。地元の方がこの町から離れたくないと思ってもらう、そして祭りを見に来た人がこの町に興味を持ってもらえるような場を提供できればと考えている。

２．枚岡神社について

所在地は大阪府東大阪市出雲井町７番 16 号。

御祭神：天児屋根命（あめのこやねのみこと）比売御神（ひめみかみ）

　　経津主命（ふつぬしのみこと）武甕槌命（たけみかづちのみこと）

創始は皇紀前３年（紀元前 657 年）　初代神武天皇が天皇に即位される３年前に創建。

枚岡神社の創祀は、初代天皇の神武天皇が即位される３年前と伝えられている。先の神武天皇が東征される際に勅命を出され、それを奉じて天種子命（あめのたねこのみこと）が国の平定を祈願するため、天児屋根命（あめのこやねのみこと）・比売御神（ひめみかみ）の二神を、生駒山中に祀られたのが、枚岡神社の始まりとされている。河内国一之宮として知られる。



図１　枚岡神社　二の鳥居

3．枚岡秋郷祭について

毎年 10 月 14 日 15 日に開催される。14 日は「宵宮」15 日は「本宮」である。この祭りを開催する目的は、「秋の実りと収穫に感謝すること。祭りを通し、担ぎ手である子供達や地域の絆を深め、子供の健全育成を願うと共に、太鼓台に親しむことにより未来につなぐ担ぎ手の養成を図る。」ことである。祭りの内容は、参加する各地区から布団太鼓台が複数台でて、自分たちの村をまわり、法被姿の担ぎ手「チョーサジャ」という掛け声をあげ枚岡神社を目指す。計 23 台の太鼓台が枚岡神社に奉納される。宮入、中垣、宮出があり計３回参道を往復する。迫力があり、そして屋台も出て見学に訪れた人は楽しむことができる。

3-1 太鼓台参加地区

・出雲井鳥居　大太鼓台１台　小太鼓台１台
・額田　　大太鼓台１台　中太鼓台１台　小太鼓台１台
・宝箱　　大太鼓台１台　小太鼓台１台
・豊浦　　大太鼓台１台　小太鼓台２台
・喜里川　　大太鼓台１台　小太鼓台１台
・五條　　大太鼓台１台　小太鼓台１台
・客坊　　大太鼓台１台　小太鼓台１台
・河内　　大太鼓台１台　小太鼓台１台
・四條　　大太鼓台１台　小太鼓台４台　計 23 台

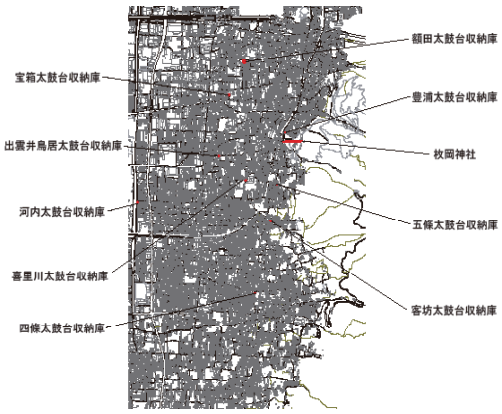


図２　太鼓台収納庫配置図

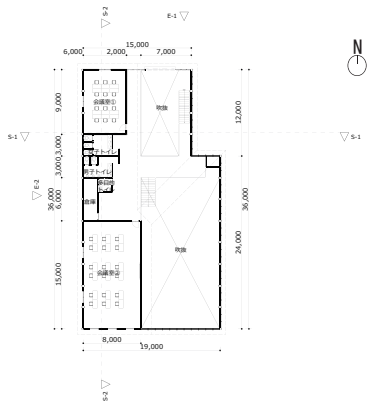
所在地：大阪府東大阪市
主な用途：　カフェ　子供遊び場　安らぎ場
　　資料館　歴史館
敷地面積：① 2132 ㎡　② 704.81 ㎡　③ 461.29 ㎡
建築面積：① 636 ㎡　② 120 ㎡　③ 156 ㎡
延床面積：① 959 ㎡　② 157 ㎡　③ 172 ㎡
キーワード：まちづくり　ランドスケープ

Location ： higashiosaka osaka
Main Use ： cafe kids playground a place to rest museum history museum
Site Area ：① 2132 ㎡　② 704.81 ㎡　③ 461.29 ㎡
Building Floor Area ：① 636 ㎡　② 120 ㎡　③ 156 ㎡
Total Floor Area ：① 959 ㎡　② 157 ㎡　③ 172 ㎡
Keywords ： town planning landscape

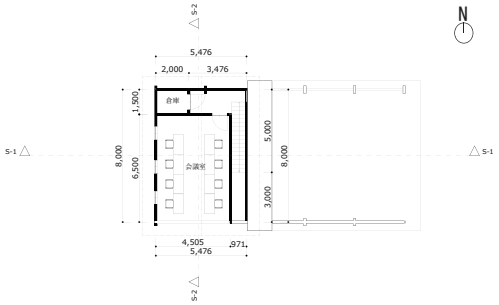
4. 計画について

少子高齢化が進んでおり祭りに関わる人が減ってきている。観光客の方には枚岡神社だけでなく一の鳥居から歩いてまちを楽しんでもらえるようにという狙いと地元の方には年に一度の枚岡秋郷祭だけでなく常日頃から祭りを感じられるようにという狙いから一の鳥居からの参道中に敷地を３つ選定した。①の敷地では太鼓台を展示するスペースを設け、会議やセミナーを開催することができる施設にした。②の敷地では保育所に近いことから室内遊び場にした。③の敷地では観光客の方、地元の方が利用できるカフェ、くつろぐ場所にした。

計画地①　平面図



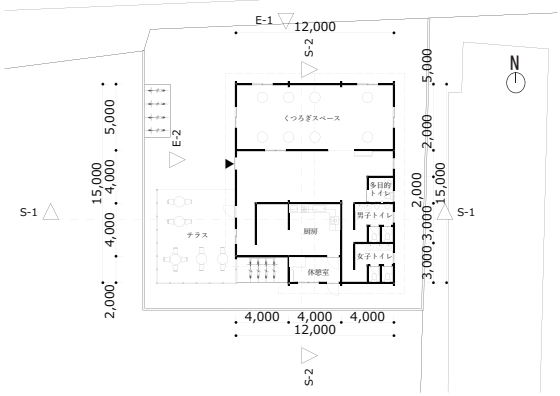
計画地②　平面図







計画地③　平面図











again ～京都愛宕山再生計画～

学籍番号　T22002
名　　前　太田　千波
指導教員　山内　貴博

again

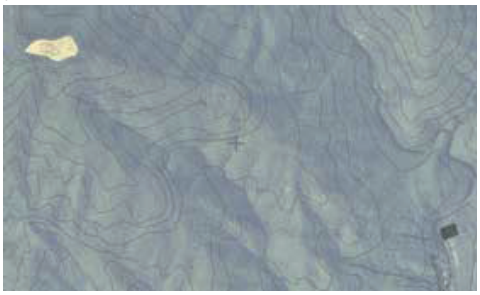
Student Number　T22002
Name　　OTA　Chinami
Supervisor　　YAMAUCHI

0. はじめに

私たちが生活する日本には、自然災害や戦争、少子高齢化の影響で住む場所から離れ、過疎化する。
そして、復興することもなく、人が訪れることがなくなり「廃墟」になる。
「廃墟」はその場だけ時間が止まり、知られないまま現代に潜んでいる。

1. 背景・目的

京都愛宕山ケーブル駅舎跡も廃墟の一つである。
廃墟には不法侵入での落書きやごみの放棄、急な崩壊での事故の恐れで近隣住民からの不安な声から撤去を考えられているがその反対に、〝廃墟〟でしか生みだせない神秘的なものや美しい風景がある。
だが、その場も時が経てば、老朽化し崩壊する。崩壊してしまえば、その場の想いもなにもかも消えてしまう。
消えてしまう前に、その場での想いでは形に残すべきだと考え、
〝廃墟〟の一つである京都愛宕山ケーブル駅舎跡の再生を目的に計画する。



2. 敷地

2.1 対象敷地・歴史

京都府京都市右京区嵯峨愛宕町の愛宕山にある、
愛宕山ケーブル駅舎跡を計画敷地とする。(図１)
愛宕山までには、亀岡市からと清滝町から登る登山道があり、
今回の計画は清滝町からの登山を目的に計画する。

愛宕山ケーブル駅舎は、昭和４年（１９２９年）に開業した。
当時は、営業距離と高低差は東洋一だと脚光を浴び、スキー場、
ホテル、飛行塔のある遊園地がオープンし、子どもから高齢者まで
大勢の人で賑わっていた。

愛宕山鉄道は、平坦線（現嵐電嵐山駅～清滝町）と鋼索線（清滝駅～愛宕駅）の二部構成で運行していた。
ケーブルカーで、2.1km 先の愛宕駅までを最大 84 人を乗せて 11 分で、登っていく。
登っていくケーブルカーからの景色は、京都市全体を眺めることができとても眺望がよかったそう。
愛宕駅までに６つトンネルがあり、ぬけたときの周りの緑が溢れる木々で四季が感じれる。

しかし、昭和１９年（１９４４年）太平洋戦争末期、日本の廃線が濃厚になり、
京都愛宕山ケーブル駅は「不要不急鉄道」とされ、レールも郡市物資のために撤去され、廃線となる。
その影響から自然とホテルや遊園地、スキー場も廃業していき、人が訪れることもなくなった。







2.2　対象地区・現状

現在の愛宕山ケーブル駅舎跡は、廃線した 1944 年から現在にかけて、79 年誰にも利用されることなく
標高 745m の愛宕山にひっそりと山の奥に潜んでいる。
現在も、山頂からの京都市内の景色や四季を楽しめる木々を目的に愛宕山登山者や、
７月になるとゲンジボタルで有名な清滝町、７月３１日夕方～８月１日早朝までに参拝すると千日間の功徳を得るとされる千日詣りで多く人が訪れている愛宕神社参拝者で愛宕山への利用者で賑わう。観光者が訪れるというより地元の方が多い印象がある。
しかし、コロナ禍での運動不足での体力の低下もあり山での遭難、事故が増加している。遭難時の訓練や登山安全マップ、入り口前に看板での呼びかけ等の対策をされるが、年々増え続けている。(図２)
また、京都愛宕山ケーブル駅舎跡や当時レール部分やトンネルなどの崩壊の恐れがあり立ち入り禁止される区域に無断侵入し、立ち寄る人もいる。６つのトンネルのうち、２つは既に崩壊し埋っているため、いつ崩壊してもおかしくない現状になっている。さらなる事故を生む可能性がある。(図３)





所在地：京都府京都市右京区嵯峨愛宕町
主な用途：山小屋　広場
敷地面積：27,811 ㎡
建築面積：16.9 ㎡
延床面積：16.9 ㎡
キーワード：山　廃墟　登山　自然

Location : Kyoto, Kyoto-shi, Ukyo-ku, Saga-atago-cho
Main Use : mountain hut　square
Site Area : 27,811 ㎡
Building Floor Area : 16.9 ㎡
Total Floor Area : 16.9 ㎡
Keywords : mountain ruins mountain climbing nature Revitalization Plan

3. 計画概要・設計

3.1　計画概要

愛宕山ケーブル駅舎跡を中心に、周辺の愛宕ホテル跡、旧愛宕駅まで線路道を活用し、
愛宕山の登山者や愛宕神社の参拝者の憩いの場となる山小屋やキャンプ場、広場の計画を提案する。
現在も当時の形を残しつつある宕山ケーブル駅舎跡を取り壊さず、老朽化していない壁や構造だけを残し、
再生計画に活用する。壁部分の内側に新たな壁で崩れないよう補強し、訪れる人の入口出入口の門とし、
ケーブル駅舎跡が〝象徴〟となるよう計画する。
愛宕ホテル跡もケーブル駅舎後ほど形は残っていないが基礎部分や床タイル、壁の構造を活用し、宿泊や茶屋、
ホールや一時的な休憩場を計画する。

3.2　設計

3.2-1 京都愛宕山ケーブル駅舎跡



建物の形は変えず当時の姿を「想い・知る」、象徴となることを意識する。内装の床も柱も当時の形を残し、７９年間自然と共存していたこと主張する。
採光・換気がとれるよう、開口部を多く設け、
過ごしやすい屋外計画する。

3.2-2 京都愛宕ホテル跡

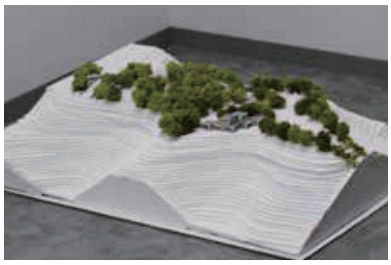


宿泊施設、食堂、茶屋、ホール、休憩場を計画する。
各建物は形が同じだが、区別できるよう外壁に木材を、
区別できるようにする。

3.2-3 旧清滝駅～旧愛宕駅までの登山道・トンネル

レールは軍事物資でないためケーブル駅舎での
登山道としてなるよう計画する。
トンネル内の壁には、愛宕山や清滝町に関するアートで
山を登る楽しさや愛宕山や清滝町を知り好きになって
もらえるよう意識した。
斜面も急なため手すりや座って休憩できるように、
ベンチを設ける。







5. 総括

本計画では愛宕山。愛宕神社の利用者や近隣住民を対象とした廃墟問題や登山者の遭難問題の解決を目的に考える。
『廃墟』は、愛宕山ケーブル駅舎跡だけではなく全国各地でも私たちの身近な場所にかつては人が訪れ賑わっていた場所が、戦争、経済、コロナ禍で廃墟になり、身をひそめている。こういった場所を解体のための高額な金銭的な問題などで放置され続けている。私は、廃墟を廃墟のままに残したくないと想い、今回廃墟に関わった計画を考える。

【参考文献】
https://chochin-daisuki.jp/recommend/kansai/post-14.html
http://atagojinjya.jp/
http://tomhet.doorblog.jp/archives/46592670.html
https://www.leafkyoto.net/makai/2017/05/%E6%84%9B%E5%AE%95%E5%B1%B1%E3%82%B1%E3%83%BC%E3%83%96%E3%83%AB%E9%A7%85/
https://www.yamakei-online.com/yama-ya/detail.php?id=2543
あたごさん　愛宕信仰の諸相とその広がり
あたごさん　～知れば織るほどおもしろい山～

1930年ストックホルム博覧会に至る北欧への人工光に関する歴史研究

学籍番号　T22003
名　前　大原鈴
指導教員　江本弘

１．はじめに

1897年に”芸術と産業の博覧会であるストックホルム博覧会が開催された。その頃、電気はまだ通っておらず恐らく照明に重きは向けられていなかったと仮定する。だが、1910年頃から1920年代後半には人工光が生活の必需品へと発展していく。この急速な人工光の発展ののち、1930年５月16日にストックホルム博覧会が行われた。この博覧会では照明装置ホールが設けられ、いくつかの企業が出展していた。また広告塔にもネオンが使用されており、人工光の発展がこの博覧会からも確認できる。北欧の照明についての先行研究は『*Ut ur mörkret*』の資料を参考にし、その時代の生活環境や当時のスウェーデンでの生活の様子などを読み解いていく。

２．研究の目的

現在では、日本にも北欧インテリアが流通し各国で北欧デザインが好まれている。そこで北欧の照明が機能的かつシンプルなデザインで優れている訳を解き明かすため、スウェーデンに絞って、電気が通る前の1900年頃から遡って家庭に人工光が浸透する1920年代までを対象とします。また、1930年にストックホルム博覧会が開催されたことから北欧照明が人々やデザインにどう影響を与えたか読み解いていく。

３．史料

・J.Garnert, *Ut ur mörkret* (*2013*)
北欧照明の歴史研究
1800年代から2000年代の写真資料多数。
・*God Belysning*, *Gott Arbete*（*1929*）
主婦をターゲットにした照明パンフレット。
・*Modern Swedish Design*（*2008*）
1912年から1931年までの北欧モダンデザインのマニフェスト３点の英訳を収録。
E、ケイ『家の中の美』(1897), G, ポールソン『日常により良いものを』(1919), G, アスプルンド他『アクセプティエラ』(1931, 全訳済)

４．本論

４．１．19世紀末から20世紀初頭の電灯の黎明

１－１．街中や企業に使用された灯油ランプ

1880年代後半から灯油ランプが主流になり、主に企業や街灯として使用されていた。1876年で使用されていた”アークライトランプ”は箱のようなものに取り付けられ、*Ut ur mörkret*中にある当時このランプが使用されていた様子を描いた絵を見ると、夜中にひかる灯台のようであった。つまりそれ程貴重な光源だったと考察する。企業の中では天井から吊り下げる形のペンダントランプが多く使用されていた。だが当時の灯油ランプでは光力が足りないことから、開口部も照明と同じように多く設置され、いた。1917年頃の学校では灯油ランプが設置されていたが、灯油が無く使われず放置されていました。なぜなら1917年の初めに州が灯油の在庫を押収しろうそくの取引も制限されていたためである。

１－２．家庭内で使用され始めた人工光

1919年に”Triplex”という壁付けの企業用照明がASEAから販売された。また翌年の1920年に”キングランプ”(図１）がスウェーデンで売り出された。このランプは家庭用電気ランプとして売り出されていたが、金属線ランプは目の網膜に傷を負ったように痛かったと言われ、電灯に対する苦情が新聞のコラムに記載された電球の使用が増えなかった理由はまぶしかったのが原因の一つである。人々は灯油ランプの柔らかい光に慣れていたことから、このような意見が殺到したのではないかと考えた。また家庭に使用される人工光が灯油ランプから電気に変化していったことから、直接目に入らないようなデザインの照明が増えていった。また1900年代からの照明デザインが美的観点からして独特すぎて家庭になじまないという問題が生じた。つまり住宅の様式も変化していった。これにより北欧照明がシンプルなデザインに変わるきっかけになった。

４．２.1930年のストックホルム博覧会における人工光

２－１．概要

1930年のストックホルム博覧会は５月16日に開催され、９月30日まで続いた。博覧会は２つの部門に分かれており、第一部門では、スウェーデンの産業がつくりだした安い実用的な日用品を展示し、第二部門では、どのようにそれらの典型的な工業生産品が家庭の中で使用されているかを見ることができるように構成されていた。当時、ストックホルム博覧会の人工光についてまとめられた『*Det Electriska Ljuset*』（図２）という書籍が出版された。このことからも人工光がストックホルムの発展に関わる必要不可欠なものとなった。展示ホール17では、数々のペンダントライトやテーブルランプが各企業に分けて展示されていた。（図３）その中でも特徴的な人工光として、エドワード・ハルドによってデザインされた”サトゥルヌス”は博覧会後に他の企業が同じようなデザインの照明器具を発売した。このように室内で使用されるものから企業で使用されているものまで幅広く展示されていた。この博覧会への出展資格を獲得した企業の一部として、NK(Nordic Company), ハーマンバーグマンスコンストジュテリ(Her-man Bergmans Konstgjuteri), コスタグラスブルック(Kosta glasbruk), オレフォスグラスブルック(Orrefors glasbruk) などが挙げられる。

２－２．アクセプティエラにおける人工光

Acceptera はスウェーデン機能主義のマニフェストと言われ、ストックホルム博覧会において重要な役割を担ったスヴェン・マルケリウス、ウノ・オーレン、グンナル・アスプルンド、エスキル・スンダール、ヴォルター・ガーン、グレゴール・ポールソンなどが監修したものである。この中でポールソンは、ストックホルム博覧会のきっかけはポールソンによれば 1925 年のパリで行われた近代装飾・工業国際博覧会（パリ万国博覧会）でのスウェーデンの日用品が成功を収めたからだと言われている。そしてそのころのスウェーデン製品は高級品として扱われていた。だがそこで人工光が取り上げられるわけではなく、ガラス製品や陶磁器が注目を集めた。また、アクセプティエラの中ではスウェーデン社会や住宅内のことが詳しく語られていたが、逆に人工光については殆ど触れられていなかった。その理由としてスウェーデンの家庭内に電気照明が使用され始めたばかりでまだ浸透していなかったこと、人工光のデザインがまだ発展途上だったということ、健康的で快適な住宅を求めることが最重要事項であり、人々に受け入れさせるべきだとアスプルンドたちは宣言していたためである。

５．まとめ

スウェーデンの住宅において自然光と電気照明の調和は必要である。だが今回の研究において、1930 年はまだ住宅計画、照明器具ともに発展途上の段階であった。だが、それぞれの発展は始まった段階で、人々は賛否両論の意見を発したがその意見はどちらかに傾くのではなく、両者の理解が必要である。また機能主義が取り入れられた瞬間でもあったたが、発展は緩やかに行われた。このことに焦りを覚えたスウェーデンの建築家たちは人々に必死に受け入れさせた。この時代のスウェーデンの発展は住宅が中心であったため優れた家具デザインや照明デザインが誕生するきっかけとなった。

６．参考文献

J.Garnert, Ut ur mörkret (2013)
God Belysning, Gott Arbete (1929)
Modern Swedish Design (2008)
北欧の照明：デザイン＆ライトスケープ　小泉隆　(2019)
カールラーション　画集　https://commons.m.wikimedia.org/wiki/Ett_hem
アルヴァ　アールト　光と照明　小泉隆　(2013)
北欧の照明：デザイン＆ライトスケープ　小泉隆　(2019)
1930 年ストックホルム博覧会　写真資料　https://stockholmskallan.stockholm.se/sok/?q=Stockholmsutst%C3%A4llningen+1930&advanced=1

図１：キングランプの広告紙



図２：ストックホルム博覧会で展示された人工光をまとめた書籍



図３：ホール１７
左から２つ目がサターンランプ



こどもの楽園

学籍番号　T22006
名　　前　辻本早弥花
指導教員　杉本直子

Children's Paradise

Student Number　T22006
Name　Tsujimoto Sayaka
Supervisor　Sugimoto Naoko

研究背景

近年、保育園や小学校では座って勉強することが苦手なこどもが増えている。勉強は机に向かってしないといけないという概念を払拭し、自ら学びたいと思えるこどもの勉強する場所が必要だと思われる。

文部科学省「現在の教育に関する主な課題」によると、我が国の子どもの学力については、全体として国際的に見て上位となっている。ただし、読解力など低下傾向にあり、世界トップレベルとは言えず、学ぶ意欲や学習習慣が必ずしも十分でない状況となっている。学力調査の結果等を活用した学力の現状把握・分析・評価・改善・検証という一連の流れの定着が課題である。また、読書活動では子どもたちの読解力が低下傾向の中、特に中学生・高校生で１ヶ月に１冊も本を読まない生徒が多いなど、子どもの活字離れが指摘されており、読書活動の推進が課題である。さらに、学習成果の評価国民では一人一人が、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現を図るため、学習成果を評価するための枠組み作りが急務である。

研究目的

子どもたちが好きなものを好きなだけ自由な場所で自由に学ぶことができる図書館を設計する。

また自ら学びたいと思える図書館空間づくりをする。

学びの一つとして農業などの第一次産業を学び魅力を知ってもらい後を継いでもらう。また、その食材を使いカフェのメニューにしたり商品化することで地域活性化を目指す。そして、外国人観光客を集める。

計画敷地

和歌山県紀中地域に位置するみなべ町にある敷地である。和歌山県日高郡みなべ町山内字大目津泊り 348 である（図１）。
用途地域は都市計画区域外となっている。
交通機関は JR 南部駅から車で約 10 分、みなべインターチェンジから車で約 10 分のところにある。

津波ハザードマップ、土砂災害ハザードマップにおいて避難場所に指定されていることから避難場所としても使用できるようにする。

(1) みなべ町について

和歌山県日高郡にある町。田辺市、日高郡印南町に隣接。近くに観光地の白浜町がある。

関西圏からは車や電車で 2 時間程度、首都圏からは白浜空港を利用して 2 時間程度。

梅の生産量は日本一であり、梅の代表品種として知られる南高梅発祥の地である。青梅の生産量とともに梅干しの生産量も日本一である。「みなべ・田辺の梅のシステム」が世界農業遺産に登録されている。南部町の木はウバメガシであり、ウバメガシを使った備長炭の生産では 2005 年に日高川町が誕生するまでは日本一であった。
みなべ町域の面積は 120.28 ㎢であり、そのうち町の約７割が森林、２割が農地で占められている。都市計画区域は町の約 6.4％で 772ha しかなく、町内にスーパーマーケットは３店舗のみとなっている。
南海トラフの影響を受ける地域でもあり、津波の対策のほか、台風に関しても対策が必要な地域である
2023 年度の人口は 11,352 人となっている。

(2) 就業人口

第３次産業の就業人口は増加傾向にあり、全体に占める割合も高く平成 27 年では、43.3% となっている。また、第１次産業及び第２次産業の就業人口は、ともに減少傾向（図３）。就業人口全体としては減少傾向にあり、平成 27 年では、7,250 人となっている（図 4）。全国的に見ると、第１次産業の割合が高く第３次産業の割合が低い。

計画提案

人それぞれの好きなものや分野を見つけてそれを極め、
日本や世界で活躍することができる人を育てる図書館にする。
みなべ町の魅力を知ってもらい町を活性化させる。
また、農業や林業、漁業を学びたい人を育て、後継ぎできるような人をつくる。
・外国語を学ぶ場

外国人観光客を呼び込みコミニケーションをとったり、

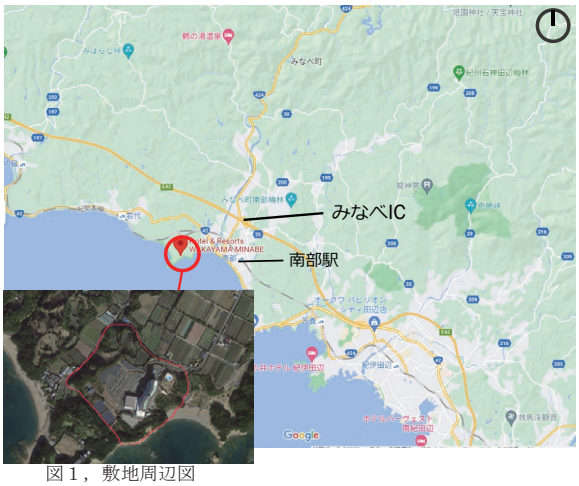


図１，敷地周辺図

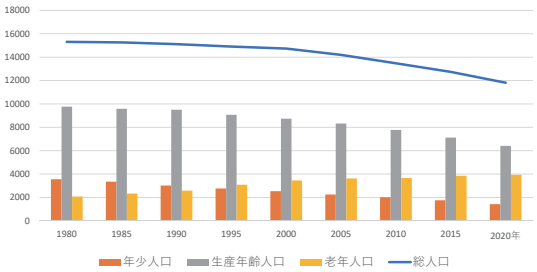


図２．みなべ町人口推移

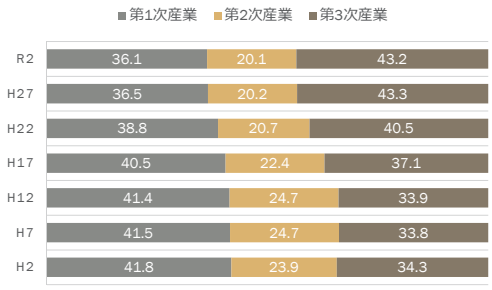


図３．みなべ町産業別人口割合の推移

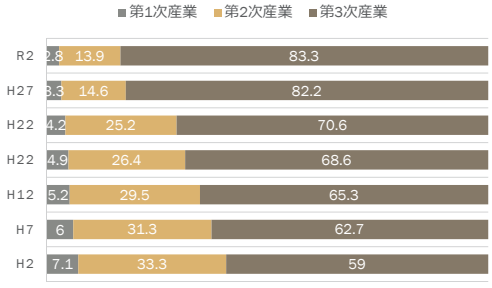


図４．全国産業別人口割合の推移

所在地：和歌山県日高郡みなべ町山内字大目津泊り 348
主な用途：こども図書館
敷地面積：64,636.90 ㎡
建築面積：13,000 ㎡
延床面積：40,900 ㎡
キーワード：新しい図書館、美術館、新しい教育、生涯学習、こども、地域活性化、避難場所、地域交流拠点、自分が好きなものを好きなだけ学ぶ場

Location ：348 Aza-Omezudomari, Oaza-Yamauchi, Minabe-cho, Hidaka-gun, Wakayama
Main Use ： children's library
Site Area ：64,636.90 ㎡
Building Floor Area ：13,000 ㎡
Total Floor Area ：40,900 ㎡
Keywords ： New libraries, museums,new education,lifelong learning,children,Regional revitalization,evacuation sites, regional exchange bases,A place to learn as much as you like about what you like

国際交流する。
・学ぶ意味を見つける場所
ディスカッションすることで見つける。
・学びを共有する場
・子どもたちが作った作品を飾る美術館
・子どもに特化させる
・こどもたちが食材を育て、その食材を使いメニューを開発し、そのメニューを１階のカフェで販売する。

ダイアグラム（図５）

フロアでエリアわけする。
1, 商業
→地元食材を使ったカフェ、地元食材を売るショップ
2, 子ども、大人が混ざる
3, 幼児
4, 22 歳までの子供（学生）

この計画を通して

勉強する場所として多様な空間を備えた図書館を提供することで、まず本に触れる機会を増やし、そして本を読むきっかけを作る。そこから本を読む楽しさを知ってもらうことで、子どもの読解力の低下や活字離れを解決していく。

先生や親の目から離れた環境で勉強することは、「机に向かって勉強する」や、「宿題からする」等を強いられることなく、自由な場所で、自由な方法で勉強できる。そんな環境で自分に合った勉強法を見つけ出すことで、どんな環境であっても自ら学びたいと思い続ける生涯学習の基礎を身につけることができる。

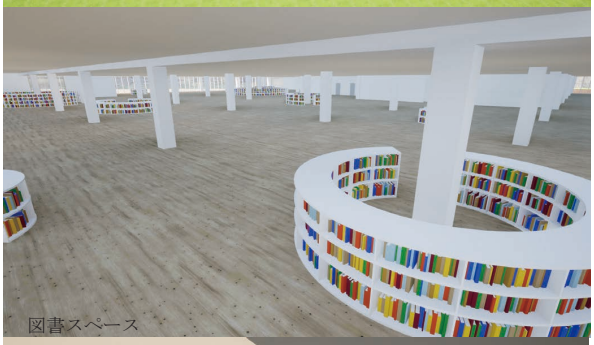
みなべや和歌山県全体で主要産業である農業や林業を勉強・体験できる場所も併設することで、効率良く子どもたちに紹介することができ、次世代の担い手を見つけ、育てることができる。

このように図書館を使った現代日本の学習課題の解決や第一次産業の担い手不足の解消は大いに可能であると考える。

参考文献

・ パイインターナショナル 新しいコミニケーションを生み出す空間とデザイン
・ 益子一彦 図書館空間のデザイン デジタル化社会の知の蓄積
・ 益子一彦 続・図書館空間のデザイン 実践 3 事例と ICT 導入法
・ 文部科学省 現在の教育に関する主な課題 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo7/shiryo/07081503/003.htm
・ https://sdgs-compass.jp/column/1516
・ みなべ町ホームページ http://www.town.minabe.lg.jp/
・ RESAS - 地域経済分析システム https://resas.go.jp/
・ 関西観光本部 関西圏における観光統計総合分析の 結果について
・ ベネッセ教育情報 小中学生の学びに関する実態調査 https://berd.benesse.jp/up_images/research/Survey-on-learning_ALL.pdf
・ 国勢調査 https://www.stat.go.jp/data/kokusei/2010/
・新建築 https://data.shinkenchiku.online/articles/AU_2012_10_124-0
・新建築 https://data.shinkenchiku.online/articles/SK_2012_06_072-0

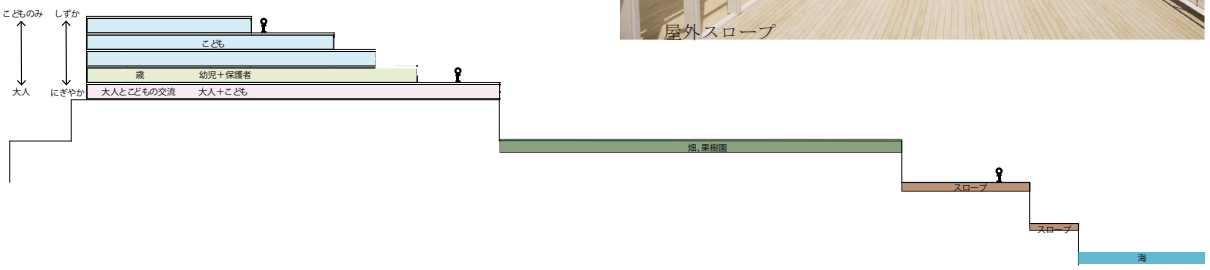

全体パース


図書スペース


階段本棚


屋外スロープ

図５　ダイアグラム



十二指腸アパートメント

学籍番号　T22008
名　　前　古堅利宗
指導教員　宮内智久

Junishicho apartment

Student Number　t22008
Name　　FURUKATA Toshimune
Supervisor　　MIYAUCHI Tomohisa

1. はじめに

十二指腸アパートメントは大阪市中央区十二軒町にある住宅を利用し、2023 年の 3 月から始めたプロジェクトであり、同世代が制作、運営しているブランドやクリエーター、ショップの展示、販売を行ってきた。主な目的は若手始めたてのブランド、クリエーターにオフラインでの展示販売の場所を設ける、若手クリエーターのコミュニティ形成である。

2. 敷地と建物について

大阪市中央区十二軒町にある建物を使っている。この建物は現在、改築を繰り返し約築 100 年になり、父親の経営している印刷会社の事務所として使われている。過去には印刷会社の寮として使われており、その名残が存在している。敷地の南側には、空堀商店街という商店街があり、その周辺は第 2 次大戦下で空襲の被害を受けなかったであろう民家の改築による飲食店やギャラリーなどが見られる地域である。



3. 計画の経緯

これまで、大きなリフォームをせず、今まで展示販売を行って来た中で、民家的な空間をそのまま使う事での魅力を感じた。その魅力というのは通常の展示販売空間では、座ったり、寝そべりながらでも展示販売空間が実現してる事だと感じた。その中で、今ある空間を生かしながら、座ったり、寝そべり、リラックスしながら作品を鑑賞する展示会を計画する。



4. 展示計画の概要

今ある空間を活かし、座ったり、寝そべりながら作品を鑑賞する空間を主に 4 つ計画し、1 月 13 日 14 日で展示を行った。また、同じ大学からは、江本ゼミの山浦さんと白鳥ゼミの久保田さんに作品を貸してもらい、展示した。

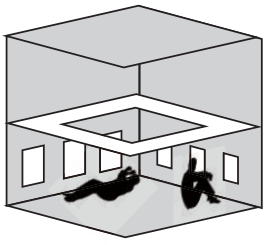


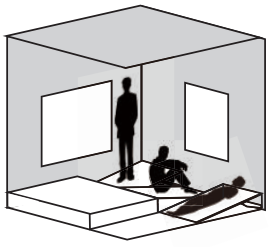
所在地：大阪市中央区十二軒町２−20
主な用途：ギャラリー
敷地面積：203.85 ㎡
建築面積：181.2 ㎡
延床面積：344.3 ㎡
キーワード：展示、ギャラリー、古民家

Location:2-20,jyuunikencyou,cyuuou-ku,osaka
Main Use:gallery
Site Area:203.85 ㎡
Building Floor Area:181.2 ㎡
Total Floor Area:344.3 ㎡
Keywords:Exhibition,gallery,Old Folk House

4-1. 天井が可変になっている

天井を上下移動出来る事により、天井が高い時には立って鑑賞、天井が低い時には座って鑑賞、もっと低くなると、寝そべりながら鑑賞鑑賞する姿勢、目線の変化により作品の見方感想に変わりがあるのかを実証、検証した。
本展示で分かった事が３つ有り、
一つ目は、アイラインで見る絵を見上げたり、見下ろしたりする事により、肖像画の目線を多角的に見れたから面白い。
二つ目は、寝ながら見るのはリラックスに繋がるが、集中する鑑賞姿勢ではないため、集中して見れなかった。
三つ目はまた天井が近い上にぶつかるという、別の緊張感を持たせてしまい鑑賞の妨げになるという意見があった。


4-1 のイメージ図

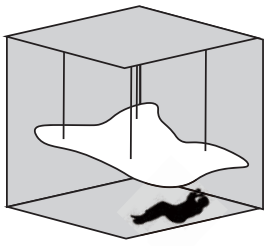

4-2 のイメージ図

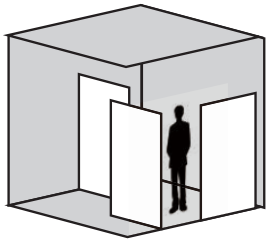
4-2. 畳に傾斜をつける

畳を外し、角度をつけ、固定する。畳という日常的な空間と傾斜をつける事により、立ち止まると床がフラットではなく普段との姿勢が変わる。また座る、寝るも同様異なる事によっての鑑賞や、空間の感じ方を検証した。畳を角度つけた事で寝やすくなったり、立つと少し不安定で、新たな畳の使い方を出来た。畳を真上で浮かす事により立つ、座る畳とレベル差をつけ、展示床として作用した、壁掛けではなく、絵を上から覗ける事によって、絵のディテールが見やすくなった。

4-3. 膜を作り下から見る

寝そべりながら、天井を見上げ鑑賞する。それにより、空間の見方、感じ方をが変わるか検証する。廊下の畳シートを剥がし、天井から吊るした。下から絵を見れるように畳に吊るしたり、捻ったり、座標をずらす事で、作品を置ける場所を作った。床の天井、壁化をコンセプトに設営した。


4-3 のイメージ図


4-4 のイメージ図

4-4. 障子の並行移動

障子を美術館の移動壁のような使い方をし、空間を区切る また障子というグリットにはめ込む事により、額縁のような視覚的効果を生む。障子というグリッドを感じながらも全体を俯瞰して見ると絵をとして成立するように配置した。
また障子の半紙が光を通す事を利用し、後ろから照明を当て照明の有無によって絵の見え方で全く異なるのが確認できた。物置にあった障子を利用し、障子で壁を作ったグリッドの枠を少し外し、障子の外から見たり、中に入って、みたりと多様な鑑賞を出来るよう意識した。障子には片側４層の紙が重ねられており、時代の層を感じた。

5. 今後の十二指腸アパートメント

約１年を通して、主に展示、ポップアップを行ってきたが、1. で挙げた展示、販売場所を設ける、クリエーターのコミュニティ形成は、微量ながら達成した。しかし続ける上での、出店者、クリエーターを見つけること、それぞれに適切な空間を提供する事、マネタイズ面など様々な課題も見つかったので、改善し、続けて行きたいと思っている。

6. 参考文献

芸術起業論　　著　村上隆
クリエイティブコミュニティデザイン　　著　紫牟田伸子
ファシリテーションとは何かコミュニケーション幻想を超えて
編著　井上義和　牧野智和

THE CURATION’S HANDBOOK　　著　エイドリアン・ジョージ
人間と空間　著　オットー・フリードリッヒ著

荒川修作＋マドリンギンズ　　養老天命反天地
leandro　erlich　　Lost Garden

豊かな街並みを
～自然と共存・リノベーション提案～

学籍番号・名前：T22009　古川桜羽
指導教員：白鳥洋子

rich cityscape
～coexist with nature・Revation proposal～

Student　number・name：furukawa otowa
Supervisor：siratori youko

keyword
空き家問題　　コミュニティ　　地域再生・内外との交流

1.　はじめに

多くの社会問題が発生している中、世界的に空き家問題が多く発生している。空き家問題では少子高齢化に伴い若者はますます都市部へ集中し、地方では過疎化がさらに進み空き家が増加している。近年コロナの影響でライフスタイルの変化が見られる為、地域にあったライフスタイルを組み込むことで空き家問題解消・内外との交流の糸口になるのではないだろうか。

2.　研究背景

2.1　背景

地域再生は促進されてはいるものの、「都市部から遠いい地域にはまだ地域再生は行き届いていない」「観光客向けに施設を設けているが人が集まらない」等の懸念点がある。筆者は兵庫・京都・福岡・鹿児島とアメリカ・カナダでの生活を送った経験から都心と地方での良さを両方知っている。
この経験から「都心ではアクセス面が良く通行手段も多く便利で生活がしやすい」「地方では自然が豊かで土地が広く子供たちがのびのびと元気に生活がおくりやすい」等、両方の良さをより多くの様々な人に知ってほしいと考える。また場所を変えることで生活にメリハリがつくことの良さを知ってほしい。

2.2 課題

(1) 空き家問題

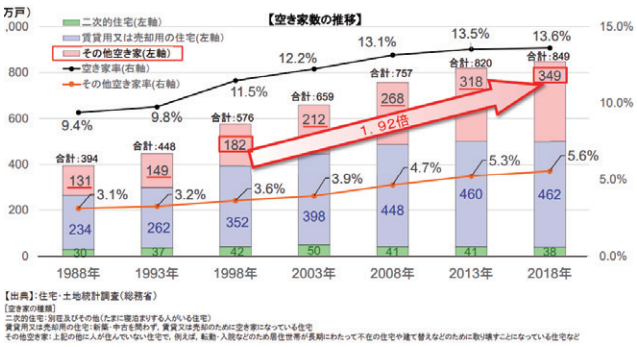
日本全体の問題でもある空き家問題では空き家を放置すると様々な問題が起きる事を知ってほしい。住んでいるぶっけい以上に劣化が早いため修繕する場合は大規模になってしまう事、地方公共団体から特定空き家に指定されてしまう等の問題が起きる。今回はそんな問題を三つ紹介する。

一つ目が、老朽化に伴う大規模な修繕が必要。人が住んでいない空き家は、人が住んでいる家に比べ風通しが悪い等の理由から老朽化の進行が早まります。老朽化した空き家を再度住めるように修繕しようとした場合、どうしても大規模なものになってしまい、普段ひとが住んでいる家屋を修繕する場合と比べると、余計な費用が掛かってしまいます。

二つ目は、危険性が高く近隣住民に損害賠償が生じる。放置された空き家は樹木が伸び放題になっていたり、雑草が生い茂ったりしやすくなります。このような状況はシロアリの発生源となったり、野良化した犬猫の住処になったりと、近輪住民に対して迷惑をかけてしまうことになりかねません。樹木が倒れたりするようなひどい損害が発生した場合では、賠償責任を問われることになる可能性もあります。

最後に、自然災害による倒壊の処分費用が必要になる。台風等で少し強い風が吹いたり、地震等で少し強めに揺れたりすると屋根や壁が落ちたり、ひどい場合には建物が倒壊してしまう恐れがあります。倒壊してしまったまま放置することは出来ませんので、処分費用が必要になります。

空き家の現状、空き家数の推移として、住宅・土地統制調査（総務省）によれば、空き家の総数は、この20年で約1.5倍（576万戸⇒849万戸）に増加。二次的利用、賃貸用または売却用の住宅を除いた長期にわたって不在の住宅等の「その他空き家」（349万戸）がこの20年で約1.9倍に増加。



(https://www.mlit.go.jp/policy/shingikai/content/001518774.pdf より作成)

(2) 内外との交流

内外との交流を行うにあたっての懸念点が二つある。一つ目が県内外からの誘客促進の計画です。地域の外から来て頂けるように計画を考える。地域の多彩な地域資源を発掘し、ツーリズム資源として磨き上げるとともに、ターゲットを明確化にしたプロモーションを展開し、県内外からの誘客を促進するのを目的とする。

重点指標	目標設定の起点	R2年度	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度
①県内観光入込客数	13,905万人（H29） うち外国人187万人（H30）	14,500万人 うち外国人215万人	14,800万人 うち外国人270万人	15,300万人 うち外国人300万人	15,600万人 うち外国人320万人	16,000万人 うち外国人360万人
②県内観光消費額	12,149億円（H29）	14,200億円	14,700億円	15,200億円	15,700億円	16,200億円
③宿泊者数（延べ人数）	1,339万人（H30） うち外国人126万人（H30）	1,450万人 うち外国人165万人	1,500万人 うち外国人190万人	1,550万人 うち外国人210万人	1,600万人 うち外国人225万人	1,650万人 うち外国人265万人
④来訪者満足度	69.1%（H30）	72%	73%	75%	77%	78%
⑤リピーター率（再訪意向率）	50.0%（H30）	52%	53%	55%	57%	58%
⑥一日当たり県内来訪者数	353千人（H30）	373千人	381千人	394千人	402千人	412千人

(https://web.pref.hyogo.lg.jp/kk07/documents/06sannkoushiryou3akusyonnpurann.pdf　より作成)

二つ目は、二地域居住・都市農村交流の促進です。都市と自然の強みを生かしながらライフスタイルを考える。
都市と多自然地域との近接という兵庫の強みを活かし、都市で暮らしながら農村での週末農業や自然に囲まれたゆとりのある生活等、多様なライフスタイルを支援することで、地域の担い手となる人材を確保しなけらばならない。

〔政策アウトカム指標〕

政策ｱｳﾄｶﾑ指標	目標設定の起点	R2年度	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度
①県外からの県内来訪者数（1日当たり）	141千人(H30)	150 千人	154 千人	158 千人	162 千人	166 千人
②ひょうごe-県民制度登録者数	31,076人(R2.3時点)	50,000 人	65,000 人	80,000 人	90,000 人	100,000 人
③地域再生大作戦取組地区の交流人口（累計）	43,000 人(R1)	86,000人	129,000人	172,000人	215,000人	258,000人
④地域おこし協力隊活動者数（退任後を含む）	178 人(R1)	190人	195人	200人	205人	210人
⑤空き家活用件数【県・市町統合指標】	33件(H30)	100 件	100 件	100 件	100 件	100 件

(https://web.pref.hyogo.lg.jp/kk07/documents/06sannkoushiryou3akusyonnpurann.pdf　より作成)

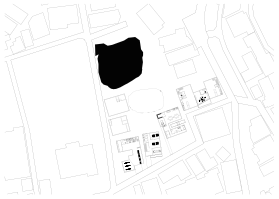
3.　研究目的

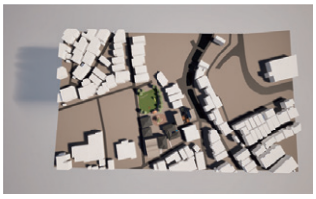
空き家問題を解消させるために二地域居住・都市農村交流のきっかけとなる建築を提案。二地域居住・都市農村交流をおこなうきっかけを与えることによって、コミュニティを増やし、外からの観光客が来やすいようにし、様々な形式の紹介、地域再生を目指し、新たなライフサイクルの提案をする。

4.　敷地

4.1　対象敷地

兵庫県兵庫区梅元町とする





4.2　敷地分析

対象となる敷地は寺院や活気のあるアートシーンとシェアハウスのある素敵なエリアであったり公園がある。さらに北側に山がある為、傾斜面の多い敷地となっている。
交通便では、駅は１ｋｍ程の距離に大倉山、花隈等の駅、バス停や駐車場も近くにある為アクセスも優れている。

5. 提案

道路に面して、図書館施設、飲食店施設、住宅兼事務所施設を提案する。

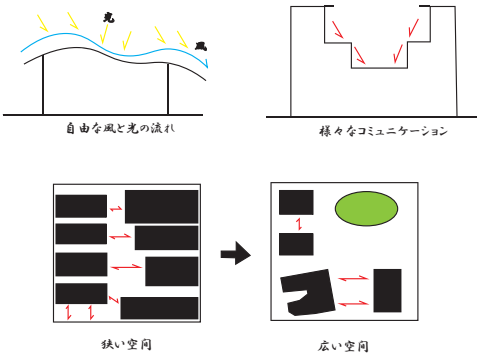
兵庫の多様な地域資源を活かした魅力的な商品の造成や効果的なプロモーションの展開等により、県内外からの誘客を促進し、地域内での消費に結びつけ、定住人口に加え、人口が減少し活力が失われつつある地域と、地域にゆかりのある人を繋げることにより、新たな地域の担い手となる関係人口を創出する。ポストコロナ社会に向けて、大都市から兵庫への流れを確かなものにするテレワークや二地域居住・都市農村交流等の新しい働き方、新しい暮らし方を推進するような設計をする。

6.　計画概要

6.1　プログラム

・図書館施設
・カフェを含むレストラン商業施設
・住宅兼事務所施設
・服屋・カフェ施設

6.2 ダイアグラム



6.3　設計趣旨

店舗兼住宅にすることで事業の経費削減であったり、自宅内に仕事場があることで、通勤時間がかからず、時間を有効に使えるメリットがあり、緊急時にすぐに自宅スペースに戻れる安心感がある。育児や介護で忙しい方でも開業の夢を叶えられるので幅広い建物の使用が出来る。図書館施設やカフェを含むレストラン商業施設を計画することで地域でゆっくりと過ごしながら様々な知識を蓄えることができる。また、公園や北の方角に山がある為、緑地や景観が良く子供がゆっくりとのんびりと生活がおくれるような常に広々とした賑やかである空間意識をする。

6.4　外観パース





7.　終わりに

今回の提案により、空き家問題が解消される一つの手段になればと考える。そして二地域居住・都市農村交流の良さを知ってほしいという考えから建築的方面によって増やしていきたい。そしてその影響によって地域再生や社会の問題解決に繋がることを考える。

8.　参考資料

・https://www.mlit.go.jp/policy/shingikai/content/001518774.pdf
・https://web.pref.hyogo.lg.jp/kk07/documents/06sannkoushiryou3akusyonnpurann.pdf
・https://www.city.kobe.lg.jp/documents/1786/hyougo.pdf

【編集後記】

本誌は学生が卒業制作、修士研究で作成した梗概の最終提出物を集約して掲載している。書式は建築学会の梗概集を参考にしており、形式は PDF データである。編集は Adobe In Design を使い、京都美術工芸大学附属図書館梗概集編集部会のメンバーで個々のデータをそのまま配置するかたちで行った。学生によってバラツキが生じているが、その点はご容赦いただきたい。内容に関しても文章や引用の不備など未熟な点を多々気づかれるであろうが、御批判、御鞭撻たまわりますようお願いする次第である。号を重ねる中で精度を高めたいと考えている。

京都美術工芸大学卒業制作梗概集　第 2 号

令和 6 年 3 月 31 日　発行

編集　　京都美術工芸大学附属図書館梗概集編集部会
部会長　髙田 光雄（副学長・大学院研究科長）
副部会長　山内 貴博（建築学部・付属図書館館長）
委員　　白鳥 洋子（建築学部 ）
委員　　古閑 謙太郎（芸術学部）
デザイン　岡達 也（芸術学部）

発行　京都美術工芸大学
　　京都府京都市東山区上堀詰町 272
　　075-525-1515

KYOBI
学校法人 二本松学院
京都美術工芸大学